
科学と魔術の白黒交差（モノトーンズ）

アスタル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

科学と魔術の白黒交差
モノトーンズ

【Nコード】

N4097J

【作者名】

アスタル

【あらすじ】

第10章 極彩色の仮面

夜来綴は姿を消した。この街の闇に潜む敵を討つために。

思いがけず知らされる綴の過去に衝撃を受けた嶺次は…！？

————オリジナル主人公たちによる、完全に二次創作です。各章毎に主人公を変え、原作キャラを迎えてお送りする、オムニバスな物語です。拙い文章ですが、誤字脱字等、指摘していただけるとありがたいです。

第3章の終了後、設定集を投稿しました。ネタバレを含みますが、初読の方はそちらからお読みになってもらっても構いません。

10月6日現在、総PV315000突破!! 総ユニーク47000突破!! 一重に皆さんのおかげです!

注) タイトルは白井黒子とは一切関係ありませんのであしからず。

序章（前書き）

初投稿です。

乱文等あつて読みにくいと思いますが、読んでいただけるとありがたいです。

序章

———ぐう———。

とある学生寮の一室、鳴り響いた空腹をアピールする音。この部屋305号室の主、雪崎嶺次^{ゆきたくさ れいじ}は空腹と真夏の暑さに耐え兼ね、少しでも冷たいフローリングに這いつくばっていた。

「なんだってこんな時に停電するんだ…」

適度に、女子の目を気にしていることが伺える程度にはいじっている髪形で、右の生え際からは白いエクステが2束ほど飛び出ている。もつとも、そんなことを全て吹き飛ばすくらい、冷凍食品を生命線にしている彼の目からは、生気が失われていた。そう、夕べから何も食べていないのだ。

「もう限界だ…」

彼が命の危機を感じた時、玄関の扉がスパァン！！と勢いよく開いた。

「おーっす！嶺次ー、早くしないと補習に遅れ…ってあれ？…何してんの？」

やかましく部屋に入ってきたのは隣室の灰笠未鶴^{はいがさ みつる}。グレーの髪色で活発なショートヘアにしている。制服からも伺える様に、一応、女子。ちなみに、なぜ彼女が男子である嶺次の隣人かは、嶺次本人にも分からない。それでも、救いの一手であることには違いないのだ。

「み、未鶴…助け…」

「ちょっ！ 嶺次？」

――十分後――

「アッハハハハハ！！」

「てめえ…俺が餓死寸前だったことがそんなに嬉しいか？」

「だってさー！ 冷蔵庫壊れたくらいで飯も食べれないってどういうことよ？」

未鶴から朝食を恵んでもらい、なんとか蘇生した嶺次は未鶴の爆笑に耐えていた。

「仕方ねえだろ？ カップラーメンとかの類は置いて無かったんだから」

「わかったわかった！ それじゃこれくらいにしといてやるから！」

そう言うとき未鶴は

「嶺次も補習、遅れんなよー？」

と言いついて出て行った。

「あ？補習って…」

一人残された嶺次の、沈黙。

「!!!!!!!!!! ヤベェっ！」

この時、補習開始十分前。嶺次は全力で駆け出した。ちなみに、只今夏休み二日目。

普通の学生なら、部活に恋愛、オタノシミ、と。青春を謳歌しているであろう。しかし、嶺次達には普通ではない単位があった。

それは——超能力。

小学生から大学生まで、何百万人もの学生を抱えているこの学園都市では、記憶術だとか銘打って、堂々と超能力なるものの開発が行われている。

主人公、雪崎嶺次も例外無く超能力の開発を受けている。

しかし——

「だああああああつ！」

全力疾走する彼には、それ以外の単位が足りていなかった。

超能力者は、得てして頭も良いはずなのだが…どこにも例外はある。

学校に嶺次が汗だくで到着したと同時に、無慈悲にも始業の鐘が鳴り響いた――。

ここは興条学園^{きょうじょうがくえん}。嶺次や未鶴が在席している高校である。

超能力開発におけるウェイトが大きく、レベル3やレベル4が数多く在席している。

一方、一年D組：

「やあ嶺ちゃん、初日から遅刻とはいいい度胸していらっしゃいますねえ？」

担任、青館菖蒲^{あおだて あやめ}の冷たい敬語と微笑みに冷や汗が吹き出る嶺次。美女に言葉攻めにされるといいう、どこかの青髪ピラスなら悶絶しそうなシチュエーションだが、嶺次の脳内には氷河期が訪れている。

「スイマセンでしたツツツ！！」

土下座しそうな勢いで頭を下げる。嶺次にも、青館は容赦なく言葉を突き刺す。ちなみに、彼女の敬語は怒りの度合いを表していて、以前嶺次は彼女の二重尊敬（文法上は天皇陛下にのみ使用可能）を浴びているのだが、それでも怖いものは怖い。

「まあ構いませんよ。補習を延長したいんですけど――」

「丁重にお断りさせていただきますツツツ！！」

全力で否定する嶺次を席へ促し、補習が再開された。

――三時間後――

「おわっ……た……」

「あやめちゃんもひでーな。お前、何回当てられた？」

「えーつと……」

担任の教師をちゃん付けするオールバックがニヤニヤと笑みを浮かべながら嶺次の後ろに座る。

「十…八？」

「おう？記録更新じゃん！」

「笑いごとじゃねーよ……」

オールバックを恨めしい目で睨む。

彼はこのクラスでも一番のバカ。名を翠隻すいぜき解理かいり。

「まあまあ、せっかくの夏休みだよ？カリカリしていると損するぜー？」

「お前…」

カリカリさせたのは誰だ。：そう言おうとして飲み込んだ。

「じゃあさ、どっか遊びに行こうぜ。どうせなら女子の皆様も！つてがふッッッ！！」

問答無用でクラスの女子から迎撃される解理。解理の『能力』はこんな時には一切役に立たないので、一方的な暴力を受け続けるハメに。

「アホらし：」

解理の悲鳴が響く中、嶺次は教室を抜け出して近くのコンビニへ向かっていた。と、そこに未鶴が現れ、（客観的に見れば）可愛らしく右手を差出す。さながら、

「何だ？お手か？」

嶺次が冗談を言いながら受け流そうとすると、

「ちょっと待とうか嶺次くん？」

未鶴は女子とは思えない力で嶺次の肩を掴んだ。そして――

「朝飯のお代、千円！」

「！！！？？？？」

「何驚いてんの？当然じゃない。」

「あ、あれは善意の提供じゃ…？」

未鶴は満面の笑みを浮かべ、

「そんなわけないじゃん！」

その言葉が終わるか終わらないかのうちに、嶺次は全力疾走。未鶴の視界から消えた。しかし――

未鶴は不敵な笑みを浮かべ、駆け出した。女子高生が普通にやって男子に追い付くわけがないのだが…

――そう。

ここは学園都市。皆が超能力開発を受けている。もちろん、この灰笠未鶴も例外ではない。

そして彼女の能力は…

フィジカルアップ
『肉体強化』。しかも、レベル4。

そう、一介の男子高校生に逃げ切れる相手では無いのだ。

――五分後、彼は見事に捕縛されて財布の中身が足りないため、銀行までパシラされる羽目に。

「まったくツイてねえ…」

彼の本当の目的は、まっとうな食事をとること……だったはずなのだが。

突如、カウンターから乾いた銃声、悲鳴の織り成す狂騒曲が聞こえた。そして降りだすシャッター。

向かった銀行で、嶺次は見事に強盗に遭遇した。

「俺、なんか悪いことでもしたか…？」

そう呟く彼を尻目に強盗は金を奪っていく。

（まあ、『アンチスキル警備員』の仕事だし、任せとくか…）

しかし、その考えは甘かった。

「チッ、しけてやがる。おい人質ィ！てめえらの金もよこせ！」

「……………は？」

人質のカバンごと奪っていく強盗。そして彼が嶺次の前に来た時…

「いい加減にしろよテメエら……！」

嶺次はキレた。

彼が強盗の拳銃に触れた瞬間……

バシユツツ、と。拳銃が熱した鉄を急冷した時にも似た音と煙を上げ、嶺次と強盗の一人を覆った。

「何だ!？」

そして、煙の中から顎に一撃を加えたような鈍い音が響く。いや、強盗達にも明確に見えた訳では無いのだが、寸断されたような男の悲鳴が、その結果を如実に現していた。

強盗の片割れ、人質らが茫然とする中、煙が晴れるとそこには……

手に鉄色くろがねいろに輝くトンファ―を携え、修羅と化した嶺次が立っていた。

「テメエ、覚悟しろよ？」

「能力者か……まあいい、コレでも食らっとけ!!」

ほんの少したじろぐも、すぐに強盗が拳銃を構えた瞬間……

ぐにやり、と。嶺次のトンファーが音もなく形を変え、彼を覆った。

「!?!」

そして『ソレ』は銃弾を受け止めた。

これが彼、雪崎嶺次の能力。『圧力成形』ヒートプレスである。

手に触れた金属を構成する原子、分子の配列を自在に操作し、自由に成形できる。

彼はこの能力のレベル3だった。

「チッ!!」

強盗は拳銃の使用を諦めたのか、後退りし始めた。

（お前も一発殴る!!）

言葉に出してはいないが、明らかに嶺次の気迫が文字を発していた。

しかし、次の瞬間――

「ハッ!!　じゃあな!!」

強盗が拳銃を構え、再び撃つ。そして盾を降ろした嶺次の前に強盗は居らず、シャッターにガラスが突き刺さり、三角の穴を作っていた。

「空間移動能力者かよ！」
テレポーター

強盗は窓ガラスをシャッターに転移して切断。自らの逃走を図っていたのだ。

「あの野郎オ……！」

嶺次はそう呟くとシャッターに触れた。

瞬間、シャッターが煙を放ち、嶺次の身長と同じくらいの長さの鉄パイプに変化する。さながら、嶺次の怒りを表現するような煙を纏って。

「逃がさねえぞゴラァ！」

その咆哮に無関係な人質達までもビクツとなる。

嶺次は闘争本能をむき出しにして、片割れを追い始めた。

「ヤツは自分自身を転移できない。なら……追い付ける……！」

強盗がレベル3以下であることを悟った嶺次は、彼を追って路地裏を走る。

「ハッ……ハッ……」

強盗は息も絶え絶えに路地裏に座り込んでいた。

「何だあの高校生！アイツさえいなけりゃ……」

「だーれがいなけりゃだって？」

背筋が凍る。

そこには……『あの高校生』が笑っていた。

「な……なん……!!」

「眠ってるッッ!!」

その言葉を言い終わる前に、片割れは嶺次の鉄パイプ制裁を食らった。

「こっちは毎日肉体強化に追い回されてんだ！そう簡単に逃がすかよ！」

地面にのびている強盗に能力で手錠をかけ、その場を後にした嶺次。

――その様子を、近くのビルの屋上から眺めていたものがいた。一人の、クセの無い黒髪を風になびかせる少年だ。

「ふーん、彼がねえ……」

まるで嶺次を知っているような口振り。そこに携帯が振動する。着信した相手を見て逡巡した『彼』だが、嶺次がその場から立ち去ったことを確認すると通話を開始する。

「あ、先輩？逃走した片割れ、発見しましたー。――え？シャッター？ああ、それも見当ついてます。ハイ。んじゃ、連れて行きますー」

――同時刻、銀行では…

「全く、どうしたらこんなことになるのよ…」

大きく牙で噛み千切られたような耐火シャッターに啞然とする女子高生。その腕には風紀委員の腕章。ジャツジメント

（夜来君は見当ついてますって言ってたけど…）

彼女は風紀委員177支部の透視能力者、固法美偉。

「固法先輩ー、持ってきましたー」

そこに、ぐったりした強盗を引きずりながら先の電話の相手が現れた。

「あなた、犯人そんなにしちゃったの？」

固法が驚くと、

「違いますよー、一般人の誰かさんが協力してくださったんです。……ちよつとやりすぎですけど。」

「まあいいわ。じゃあ警備員に引き渡してもらえる？」

「わかりましたー」

気の抜けたような返事をする彼、やらい つづり夜来綴。

彼と嶺次の出会いから、この物語は始まる――

一方、その頃未鶴は――

「何やってんだあんにやろー！」

嶺次の受難もまだまだ続く。

序章（後書き）

かなり説明文になっちゃいました……

読んでくださった方々、ありがとうございます。ご感想をお待ちしております。

次回は、魔術サイドからもオリキャラがやってきます！（予定）

e p, 1 そして歯車は回り出す（前書き）

というわけで、懲りずに二話目投稿です。

今回はちょっと長いかも知れませんが、読んでいただけると幸いです。

12月6日 加筆修正しました。

e p, 1 そして歯車は回り出す

「ふぁーあ…」

「だらしないぞ。全く…」

眼鏡をした黒髪の青年が欠伸をした白髪の少年をたしなめる。

それに少年がジト目で噛み付く。

「むう…そりゃ眠くもなるっスよ！これで八時間ですよ？いつまで続けるつもりなんスカこんなベタな張り込み…」

「アイツが動くまで、だ…」

彼らはとあるマンションの一室を向いのビルの屋上から監視していた。今日の日が沈む前から続けていたその行動は、もうすぐ日付が変わろうとしている今も、止まる気配を見せない。

「うっわ…ベタすぎて引くセリフっスわー」

「……シッ！！」

何かを捉えたのか、青年の細い瞳がにわかに真剣な眼差しになる。

「おお、ホントに動いたっスね…」

「情報は確かだったな」

標的が動いた。彼らが『狩る』べき対象が。

「んじゃまあ、行きますか？」

「ああ」

黒いローブが深夜の学園都市にはためく。

「人払いのルーンは？」

「いつでも大丈夫っス」

「相手も“同類”だ。油断するなよ」

簡単な確認を済ませると彼らは男の姿を追って研究所の集まる地区へ歩いていく。

十分ほど歩いたところ、彼は自分が長い滑走路のような道路に一人きりであることに気付く。同時に、背後から迫る白髪の少年にも。

「――誰だ!？」

「知らなくていいよ。いや、知らない方がいい、っスかね？」

少年がパチン、と指を鳴らすと、虚空から現れた発光するアクリルのような壁が男を囲む。神聖であるはずの白い光に、男は得体のしれない怖気を感じる。超能力とも違う、異界の法則。それは、

「魔術…まさかお前は…!」

「そういうこと。じゃあね」

壁は徐々に狭まり、男を押しつぶしていく。壁に触れようとした男の手は見えない何かに弾かれ、もはや圧殺されるのを待つしか男にはできない。

――その時。

ピシッ…

「…?」

バキッ…

「……!!」

光の壁に走ったヒビが拡大していく。

(まずい。これは……匣の人形か!!)

少年が男の正体に気付くと同時に、男は強烈な爆風へと姿を変え、光の壁を突き破り、少年へと襲いかかる。

ドオオオオオオン!!、と。

命を奪うための爆風が過ぎ去ると、そこには大きく抉られた地面を背に眼鏡の青年が立ちふさがり、少年を護っていた。

「油断するなと言ったはずだが…?」

「すみません…先輩…」

少年が気を落すが、青年はクレーターのようになってしまった道路を覗き込み、威力の大きさに危機感をつのらせていた。

「このレベルの**罠**か…少し厄介なことになりそうだな…」
デコイ

ローブにかかった煤を払いながら青年はそう、呟いた。

――同時刻――

「全く…風紀委員って残業はさせないとかだと思ってたんですけど…」

「仕方ないですよ。昨日、白井さんが壊したビルの損害請求も手続き終わって無いのに、あんなに銀行強盗で損害出しちゃったんですから」

夜来綴やらいつづりが愚痴をこぼすなか、頭に大きな花飾りの少女、初春飾利ういはるかざりはパソコンを前に淡々と作業を進める。

只今、風紀委員177支部の二人は、書いても書いても終わらない報告書に頭を抱えていた。

「げっ もう12時かよ!？」

「全然終わらないですね。というかまだ半分も…」

「なあ初春、これは明日の分にしないかー？」

「そうですね。持ち越しは気が引けますけど…」

あまりの量に一日で片付けることを断念した二人は、帰路に着くこ

とに。

「そういえば夜来先輩。昼間の銀行強盗、結局誰が捕まえてくれたんですかね？」

「さあねー。何かしらの能力者みたいだけど？」

軽薄に振る舞う夜来は、何故か嶺次のことを口にしない。

「そうなんですよ。目撃証言では、その男の人はシャッターに触れただけで形を変えたりしてたみたいですし」

「ま、そのおかげで俺達が残業なわけなんだけど…」

——昼間の強盗の時嶺次が剥がしたシャッター。あれは耐火、耐衝撃、防音をハイスペックに備えた最も高価なタイプだったため、綴の残業の主な原因になっていた。

「——にしても夏休み早々残業は無いよなー」

「確かにこんな時間まで残ってたのは久しぶりですよ」

初春は真っ暗になった夜空を見上げながら綴に同意する。

本来ならばビルを壊した白井黒子本人が始末書を書くはずなのだが、彼女は昨日の戦闘で怪我を負っており、初春がその代理をしていたのだ。

「しかし、もう12時だのに皆はしゃぎすぎじゃないか？」

12時を回っている時刻にしては人通りもとても多く、これが夏休みの正当な過ごし方だともいわんばかりの学生でゲームセンターなどはあふれかえっていた。

「そうですね。喧嘩とか起きなきゃ良いですけど…」

「おお、さすが優等生ー」

綴は初春の答えに素直に感心してくしゃくしゃと頭をなでると、花びらが幾つか舞う。彼女の頭にある色とりどりの花飾りのせいだ。

「もう、茶化さないでください！」

初春が抗議するも、綴はへらへらとかわすばかり。

（こういうところが無きゃ、普通にカッコいいんですけど…）

一方の初春は相変わらずの綴が残念でならない。

綴は長身に黒髪、顔も端から見れば『カッコいい』のだが、このへらへらとした性格と本人の興味の無さから恋愛には縁の無い、まさしく残念な高校生だった。

そんな初春の気持ちを知ってか知らずか、

「寮の前まで送ろうか？」

などといった言葉をさらりといつてのけるあたりからは、某不幸少年同様のフラグ体質であることがうかがえる。

「い！？ いや、大丈夫ですよ！」

「そうか？ 最近スキルアウトとかも物騒だから――」

「大丈夫ですってば！」

初春の顔がだんだん赤くなっていることに綴は気付かない。

しかし、そんな他愛無い話をしている二人の幻想は一瞬で壊された。

柄の悪い男が転がり込んできたのだ。――しかも、ボコボコにされた状態で。

「なっ!？」

「ふえっ?？」

訳が分からず呆然とする二人。

そこに、路地から叫び声が聞こえる。

いや、これは叫びと言うより助けを求める悲鳴に聞こえた。

状況が飲み込めてきた綴は、初春に警備員への通報と男を任せて路地へ入っていく。

そして綴は路地裏で繰り広げられている光景に啞然とする。

――そこには、スキルアウトと思われる男達がまさしく死屍累々といった様子で折り重なって倒れていた。

そしてその中心では…

誰だろう、雪崎嶺次が鉄パイプを片手に暴れ回っていた。

「オラオラこんなもんかあ!？」

（うは…。どう見ても悪役だなー）

綴には嶺次から黒いオーラが発せられているようにすら感じられる。結局、慈悲を請う最後の一人がノックアウトされるまで、綴はその場に立ち尽くしていた。

「やっと片付いた…」

当の嶺次は、絡んできたスキルアウトを撃破して一息。そこに…

ガチャン！

「…ガチャン？」

「どうも。風紀委員です」

そこには、何食わぬ顔で嶺次に手錠をかける綴がいた。

「…は？」

嶺次、フリーズ。

——五分後——

「だーから、向こうが絡んできたんだってば！」

ここは取調べ室と化した警備員アンチスキルの車両の中。嶺次は暴行の現行犯扱いで連行され、綴と初春に必死で釈明していた。

「いや、君の正当防衛はわかったんだけどね。これはやりすぎじゃない？」

そういつて綴が示す先には、未だに気絶したままのスキルアウト達。

「い…いやあ…それについては反省してます…」

「でも彼らはもともとスキルアウトとして目撃されてたみたいですから、雪崎さんはすぐに解放されますよ」

「そ、そうなの？」

綴と初春のさながらアメと鞭のようなやりとりに嶺次は翻弄されていた。

「いや、それを差し引いてもやりすぎだって」

「それは否定できませんけど、逮捕に協力していただいたわけですし…」

嶺次が置き去りのまま、話が進む。

(はあ…今日はとことんツイてないな…)

嶺次は自分の行動を思い返してため息をついていた。

「おい……。俺はいつまでこんな体勢でいなきゃいけないんだ？」

嶺次が半ばあきらめ気味に呼び掛ける。

「んー、嶺次はそれで待機なー」

「そうそう、荷物持ち君が口応えしちやいけませんぜー」

嶺次は、只今未鶴と解理にこきつかわれていた。

昼、強盗を撃沈した後に未鶴のことをすっかり忘れていた嶺次は、その穴埋めとして未鶴のゲーセンハシゴツアーに強制参加させられていたのだ。

最初はただの格ゲー相手だったはずなのだが、解理に遭遇してしまったのが運のつき。

彼の天才的UFOキャッチャーの腕前によって、嶺次は大きいぬいぐるみの袋を五つも背負う羽目になってしまった。

「もういいだろ？」

そんな嶺次の嘆きは彼らには届く気配も無い。

（こりゃダメだ……）

抵抗を諦めた彼が重荷を一旦下ろしてゲーセンの外で休んでいると、明らかに柄の悪い男たちが嶺次に絡んできた。

「その制服、興条学園のヤツだよなあ？」

嶺次の所属する興条学園には高位能力者だけではなく、レベル2程度の能力者が多数在籍している。彼らはレベルに相応する奨学金を

貰っている上に、戦闘能力はそこまで高くない。不良さん達の目の付けどころは悪くないのだが…

「いやあ…これはその…」

「いいから俺たちと遊ぼうぜ、優等生さん！」

「おとなしくボコられろってことですか…」

度重なる不幸にうんざりする嶺次。その導火線に火がついて、

「やっぱりやり過ぎせないか…」

「あ？」

——引火した。

「いいぜ、狩れるもんなら狩ってみろよ。無能力者さん？」

「デメエ…上等だぁ！」

スキルアウトを挑発してそのまま乱闘に突入してしまい、未鶴と解理を放置してきた嶺次は二人の姿を思い浮かべて憂鬱になっていた。

——1時間後——

（やっと…解放された…）

結局、嶺次は一時間ほど拘束されており、解放されたところには未鶴と解理の姿はどこにも無かった。

(とつとと帰りたい…)

嶺次が自宅の方へ歩きだした時、背後から声が響いた。

「おーい！雪崎君！」

振り返るとそこには先刻の風紀委員がいた。

(確か…夜来とか言ってたっけ？)

「何の用ですか？取り調べならもう十分…」

「いや、個人的なコトでさ、風紀委員は関係ないよ。」

個人的なこと？と首を傾げる嶺次に、風紀委員はつらつらと言う。

「？」

「君、圧力成形のレベル3だったよね？」

「それが…何か？」

あまつさえ、笑いながら。

「君さ、——レベル5になりたくないかい？」

「！？」

レベル5。その言葉に不信感をあらわにする嶺次。——当然だ。

この街での超能力のレベルなど、簡単に操作できる筈もない。ましてやレベル3という地位に甘んじている嶺次からすれば、突然に切り出された単語は甘い餌というよりは自分の努力を無に還すりセツトボタンにしか聞こえない。

「アンタ何物だ？^{レベルアツパー}幻想御手の売人か？」

「いや、ただのレベル4さ。ちよつと特殊だけどね」

そんな不信感を隠さない嶺次の表情にかまわず、綴は飄々と話し続ける。

「悪いが、そういう話は他のヤツにしてくれ。俺はそういう勧誘に乗るほどアホじゃない」

綴をあしらう嶺次に、彼が発した言葉は意外なものだった。

「そうか…予想通りの反応で安心したよ。」

「?」

「まあ、今日はここまでかな…」

まるで次があるかのような言葉遣いに嶺次が反論しようとした瞬間

ビュオオオオオオ！、と。

「うっ!？」

「何だ…?」

(何かの能力か?)

今日は真夏日だというのに、二人に向かって凍えるような風が吹きつけてきたのだ。

そこに――

「ぐあああああ!!」

断末魔のような叫びがかすかに聞こえる。先の喧嘩で不良達が上げていた叫びとは全く種類の違う、本当の断末魔のような声が。

「ツツツ!!」

ただならぬものを感じ取った嶺次は綴の制止を振り切り、路地裏へと突き進んでいく。

「あっ…おい!?!」

(全く、彼にはこういう性質もあるのか…)

嶺次の行動に感嘆しながらも、綴も路地裏へ。

その時、彼らと一人の男がすれ違った。

この繁華街には不釣り合いな白いスーツを纏っていたその男の口元は笑みをこらえているような、違和感を覚えさせるもの。

それに違和感を覚えた綴が男を呼び止めようと振り返るが――

そこに、男の姿は無かった。

「え…?消えた…?」

綴が嘩然とする一方、嶺次は叫び声が聞こえた方へ走っていく。そして、風がひととき強く冷たい路地へ入ると、一人の男がたたずんでいた。

——周囲の、ありとあらゆるものを凍結させながら。

「おいアンタ！一体何して…」

呼び掛けた嶺次はぐると振り返った男の異様な雰囲気圧倒される。虚ろな目。梟のように関節を無視した首の動き。操り人形のよう不自然な立ち方。その全てに。

「どういことだよ…能力の暴走か…？」

嶺次が男に一步踏み出すと彼の虚ろな目が嶺次をとらえた。あまりに血の毛が失せた形相に嶺次の動きが一瞬止まる。その一瞬を狙い、男は氷の槍を嶺次の頭上に降らせた。

「なっ…！」

バキイン、と。

嶺次はかろうじて金属の盾を成形し、攻撃を防ぐ。

「危ねえなこの野郎…！」

しかし、牙を剥く嶺次に男は一切動じず、続けざまに氷柱を落とす。豪雨のように続く攻撃に押されて嶺次が一步下がると、ピタリと氷柱の雨が止んだ。

隙を見つけた嶺次は前に進もうとするが、その瞬間に氷柱が降り注ぎ、また下がると攻撃が止む。

さながらロボットのようなその行動に、嶺次は一つの可能性に行き着く。

(コイツ…意識が無いのか！？それにこの攻撃じゃ近付けない…)

嶺次が攻めあぐねている様子を陰から見ている――一夜来綴。

(精神操作系の能力者の仕業か？それにしてもあの様子は異常だろ…)

風紀委員としてさまざまな能力者を制圧してきた綴でも見当のつかない能力を目の当たりにして綴は思案していた。

精神を捕らえる能力者による犯罪であるならば、あの少年を拘束しても何の解決にもならない。それどころか、あの少年は被害者だ。

(物理的に制圧するのは難しそうだし、“アレ”使おうかな)

相手の状態と自分の手札を確認した綴はビルの非常階段に座ると、軽く組んだ両手を額に当て、祈るかのような体制をとり――

ダイアグラム
コネクト
「演算代行、接続」

そう呟いて全身の力を失った。

一方の嶺次は綴が倒れた瞬間、男に起こった変化に目を疑った。

「が……あっ……！！」

突如頭を抑えて男が苦しみだすと同時に、凍結が収束していく。

「お、おいアンタ！」

嶺次がそう叫ぶのと同時に男は崩れ落ちた。

「何がどうなってやがる…」

嶺次が状況を飲み込めずにいると、頭の中から“何か”が聞こえた。

（お…、雪さ……い次）

頭の中に、何かがいる。スピーカーを埋め込まれてそれと会話しているような違和感を覚えつつ、嶺次は問う。

「何だよ、コレ？」

（聞こえ…よな？）

「俺に、話しかけてる？」

（夜来つ…りだよ！）

おぼろげだが、その名を嶺次は聞き取った。さっき、得体の知れない言葉を掛けやがった…

「まさか…さっきの風紀委員…？」

（大正解ー！驚いたかい？）

「お前がコイツを…？」

端から見れば、頭をおさえて独り言を呟く嶺次はかなりヤバイ人に見えたかもしれない。

（そう。これが俺の能力、ダイアグラム演算代行だよ）
「演算代行だあ？」

演算代行という聞き慣れない能力。そして彼と嶺次の出会いはすでにそこにある非日常への扉だったことを、二人は知る由もなかった。

e p, 1 そして齒車は回り出す（後書き）

いかがだったでしょうか。

またご感想等お待ちしています。

e p, 2 白と黒はかくて交わる (前書き)

長くなっちゃいました…

まとめる才能が欲しいです…

e p, 2 白と黒はかくて交わる

学園都市にそびえる入り口も無ければ窓もない、さながら墓石のようなビルの中に、『人間』、アレイスターⅡクロウリーはいた。

老人なのか子供なのか、さらには性別すらわからない『人間』。そして彼の入っている培養液で満たされたビーカーの前に金髪にグラサン、アロハシャツの不良陰陽師、土御門元春は不機嫌な表情で現れた。

「珍しくご機嫌だな、アレイスター」

彼が不機嫌だから相対的にそう見えるのでは無く、事実今日、彼は機嫌が良かった。

「君は機嫌が悪いみたいだね？」

「ハッ！全て“見ている”はずのアンタが何を言うか」

土御門は今日、学園都市に不特定多数の魔術師が潜入した件を問い質しにきたのだ。

一通り土御門が質問を列挙したところで彼が口を開いた。

「その件に関しては私のプランとは一切関係が無いことだけは断言しておくよ」

「じゃあ、コイツらの目的もわからないって言うのか？」

「概ね見当はついている。しかし、今君にそれを教えるべきでは無いだろう」

「全く：相変わらずクラゲみたいな物言いだな」

「フフ：君は面白いことを言うね」

「アンタの上機嫌の訳を教えていただきたいね…」

土御門が皮肉を言うが、アレイスターは意に介さない。そしてその口から語られたのは、とある能力。

「君は演算代行ダイアグラムという能力を知っているかい？」

「演算代行…？」

「この能力は、私のプランを大いに短縮し得るものでね——」

一端を聞いた土御門の表情は豹変した。学園都市の存在意義を揺るがしかねない、その片鱗を前に。

「そんな馬鹿げた能力が…存在するのか…！」

アレイスターはその反応を楽しむかのように続ける。

「しかしこの能力は非常に不安定でね…今、ようやく覚醒の第一段階が始まろうとしているところさ」

「第一段階…？」

「被使用者との接触…だよ」

そういつてアレイスターは微笑んだ。相反する感情を、土御門に与えながら。

——翌日、興条学園。

あの凍結男との遭遇から一夜明け、嶺次は昨日のことを思い返していた。

「――演算代行だあ？」

（そう。俺の能力はちょっと特殊だね。他人の脳波に干渉して、演算を行うモノなんだよ。

今は言語能力を演算中だから、君と話ができてる）

頭の中の声と会話するのはとても奇妙な感覚だったが、嶺次は無理やり気にしないことにした。

「それとレベル5になるっていうのがどう結び付くんだよ？」

（だから、俺がレベル5相当の演算を代行すれば、君もレベル5相当の能力を使えるってことさ）

「それじゃお前もレベル5ってことにならないか？」

（俺の能力はあくまで演算の代行：つまり外付けのハードディスクなのさ。だから俺自身の能力はレベル4で問題ない。）

「もしそれが本当なら、なんで他の能力者：レベル4とかに話を持ちかけない？」

綴のことがまだ信用できない嶺次は、質問を並べていく。対して、それに淀みなく応じる綴は問答を予測していたかのよう。

（俺が演算を代行すると普通の能力者は頭がパンクして気絶しちゃうんだよね。）

崩れ落ちた男が目に入る。

「さっきのはそういうことか… ん？じゃあ俺はなんで大丈夫なんだ？」

（さあ？俺もよくわからん）

予測していたようで、頭の中の綴はとても適当だった。

「つていうか…いい加減頭から出てけー！」

嶺次が叫んだ瞬間に意識を取り戻した綴は、驚きを隠せない様子で暗がりから現れた。

「キミ、ホントに普通有能力者？俺を追い出すのは予想外すぎるよ…」

「俺はレベル3だ。……普通の、な」

沈黙する路地裏。先に口を開いたのは綴だった。

「まあいいや。無理やり移行しても面白くなさそうだしね…」

訝しむ嶺次に綴は携帯を投げかける。

「コレは…俺の？」

「警備員の車両に忘れてたよ？——じゃ、またな。雪崎嶺次」
「オ…オイ！」

嶺次が叫ぶころには、綴は暗がりになく消え失せていた。
そして………今。

「いきなりレベル5とか言われてもなー」

昨夜のことを整理できていない嶺次の頭は大混乱していた。

——瞬間、嶺次にお呼びがかかる。

「嶺ちゃん？ココ、和訳してみて」

「あっハイ！………何処ですか？」

大変気まずい静寂。

「ハ—イ、皆も集中しないと嶺ちゃんみたいに晒し者にしますよ—
」

ガバッ！！！！と。

たった一言を以て、教室の空気が昼下がりのけだるい授業から戦場のソレへと一瞬で転換された。

只今、雪崎嶺次は午後の補習の真っ最中だったのだ。

（一瞬でも他のことを考えた俺がバカだった……！！）

この補習の担当者、青館菖蒲あおだて あやめは、生徒から読心術者の異名で恐れられるほど、嘘や人の心を見抜くことに長けていた。（ちなみに、超能力の類は一切使っていない。）

（菖蒲先生も黙ってれば美人なのに……）

嶺次のようなことを考えようものなら、

「嶺ちゃん？補習、何割増しがいいかしら？」

「ツツツ！？」

地獄を見るのは明らかだった。
そんな彼女の授業を昼下がりに受けることは、間違いなく拷問といえた。

――4時間後――

菖蒲の補習という名の戦場から無事に帰還した嶺次は、夕暮れの街をスーパ―に向かっていた。
昼の熱気を残しているせいか、人影の少ない通りを急ぐ。

（菖蒲先生もこんな時間まで補習すること無いよな……）

彼だけが原因とは言わないが、菖蒲の機嫌は今日1日悪く、補習もいつもより二割増しだった。

（ヤッベ、閉店までに間に合うかな…）

彼は時間短縮のため、いつもは使わない裏道へと入っていく。しかし――

そこにいつもの風景は無く、非日常が存在していた。

傷だらけの白いスーツ姿の男。

それを追い詰める黒装束の二人。

明らかに“喧嘩”とかの類ではない。

今にも男の命を奪おうとしていることをそのあまりの殺気から一瞬で悟った。

嶺次に気付く気配の無い二人は、男に近づいていく。

白スーツの男は怪我を負っているのか、立つことができない。

（イヤ、何してんだよ俺！止めなきゃ…止めないと！）

路地裏の喧嘩には慣れているはずの嶺次の足が竦む。

「や…やめろ！」

そう叫ぶので精一杯だった。

一瞬、二人組の注意が予想外の侵入者である嶺次に向けられる。弱者であつたはずの男はそれを見逃さなかった。

ガッ！！と。

信じられない速度で後ろに回り込むと、嶺次の首を掴む。

「なっ…！」

嶺次は抵抗しようとするが、

（——動かない！？）

嶺次の体は意志に反して微動だにしなかった。

「ア리가とウ。オカゲデゲーむせツトは免れタよ」

嶺次の耳元。抑揚がおかしい声で男は話す。

「何言ってるんだ…？」

「魔術シ！それじゃあナ…」

男が後退し始めたとき、白髪の少年が指を鳴らした。

その瞬間、嶺次を掴んでいた男が弾かれたように飛び退く。

振り返ると、二人の間にはどこから現れたのか分からない光の壁がそびえていた。

超能力を目の当たりにし続けている嶺次にすら不自然に映る、異質な存在が。

「ゲームセットもクソもないっすよね？——土人形さん？」

捨て台詞と共に、少年が再度指を鳴らす。

「ククク…残ネンダったな！」

そう言い残した男が光の壁に飲み込まれた跡には、土の塊しか残っていないかった。

一部始終を呆然と見ていた嶺次は二人を呼び止めようとするが、

「——行くぞ、ランサー」

「了解っス」

パチン、と。

少年が鳴らした指から強烈な光が放たれ、——気付くと、そこは普段の路地裏だった。

「なんだったんだ…今の…」

魔術師。確かにあの男は二人をそう呼んだ。

掴まれた感覚が鮮明に残っている首に触れる。うつすらと赤みを帯びたそれは、幻想などでは無いことを如実に伝える。

（アレが…夢なわけ、無いよな…）

すでに闇に包まれ、街灯が照らす路上に嶺次は立ち尽くしていた。

——翌日——

朝8時、嶺次は携帯の着信音で目を覚ました。

「何だよ…今日は補習無いよな…？」

寝ぼけた目で確認したディスプレイには、————発信者、灰笠未鶴。

「……………」

パチン

沈黙の後携帯を閉じた嶺次は、隣室から殺気が全開でこちらに向けられていることに気付き、今の行いが地雷を踏んだことを悟る。

「嶺次ー？」

（この猫なで声は……！）

——マズイ！

ドアから響く声に第六感が叫ぶ。

嶺次がコンマ5秒で土下座の体勢を取るのと同時に、未鶴が部屋に乗り込んで来た。

学園都市のセキュリティも、そこらの自販機を拳一つで打ち砕く未鶴には意味もない。

「問1、本日7月23日は何の日でしょうか？」

嶺次の頭上からは甘い声。

しかし嶺次は、未鶴が猫なで声を発するのは怒りのボルテージが100を振り切っている時だけであることを知っている。

「灰笠未鶴様の誕生日でございます！」

土下座のまま微動だにせず答える。そこには生きるための道を探る嶺次の生存本能が発揮されていた。

「問2、一昨日君は何て言いましたか？」

「『明後日は1日お付き合いさせていただきます』と申し上げますたッ……！」

「問3、では何故君は電話を切ったんですか？」

「そ…それは…」

答に詰まる嶺次が顔を上げると…

——そこには閻魔がいた。

「ちよっ…待っ…ギャアアア!!」

本能での問答も空しく、肉体強化レベル4の本気を嶺次は身を以て知ることになったのだった。

——1時間後——

嶺次と未鶴は何故か公園でキャッチボールをしていた。

「お前さー、女子高生が誕生日に幼なじみとしたいことがキャッチボールってどうなの？」

彼女はその切りそろえられたグレーの髪、引き締まった肉体と言った評価の高い容姿と反比例するかのように女っぽい行動をほとんどとらない。その勿体なさを嘆く男子は数知れず。

「なんでー？楽しいじゃん、コレ」

未鶴はあっけらかんと答える。それこそ、野球少年のように。

（ハア…コイツにもう少し可愛げがあれば…）

未鶴の男っぽさを一番嘆いているのは一番傍にいる嶺次だったりするのだが、

「なんか言ったかー？」

「い、いえ？何も？」

こんな調子である。

未鶴もいつもは服装にあまり関心を払わない。しかし、今日は違った。

「そうだ！コレ終わったら服買いに行こう！」

「なんだよ、お前が服買いたいなんて珍しいな？」

「私も服買いたい時があるんだよ！ってその疑わしい目はなんだ！」

「うわっ！お前が全力で投げるとシャレになんないっての！」

彼方へすっぽ抜けたボールに向かって走る嶺次だった。

――2時間後、嶺次は大型のショッピングセンターにて、慣れない服選びに悩む未鶴に付き合っていた。

「お前…こういうのは女子の友達と一緒にの方がいいんじゃないのか？」

荷物持ちと化している嶺次が未鶴に呼びかけるも、

「しょうがないじゃん？その時に着ていく服も無いんだからさ…」

「…？ 待て、お前ってその服以外全部部活のジャージな訳？」

「そうだけど？」

（コイツ…本当に女子高生かよ！？）

驚愕する嶺次、ノリノリの未鶴の服選びは結局3時間ほど続いた。

——嶺次の両腕が悲鳴をを上げるまで。

「うーん…これだけあれば大丈夫だよな！」

二人は寮へ向かう細い道を歩いていた。

「…というか俺の腕が大丈夫じゃない！お前、限度ってもんが…
…どうした？」

振り返るとボーッとしている未鶴。

——らしくないぞ。

そう呼びかけるよりも早く、未鶴が呟く。

「歌が……呼んでる……よ？」

「歌？そんなの……オイ！？」

突然走りだす未鶴。

何度呼びかけても一切返事をせず、彼女は人気の無い方へと入っていく。

「ハア…ハア…お前な、一体何なん——」

バヂィ!!!!

立ち止まった未鶴の肩に触れた瞬間、嶺次の手が見えない何かに弾かれた。静電気を何倍にもしたようなそれに、得体の知れない恐怖を覚える。

(――ッ!?)

しかし、驚く間もなく、嶺次は未鶴の蹴りに吹き飛ばされた。冗談のそれではない。彼女の本気だ。そうでなければ、嶺次の骨が軋むような一撃を未鶴が繰り出すはずがない。

「――ガッ!?’

彼女は操り人形のように口を開く。

「これより、術式の最終段階に入ります。侵入者の排除を認識…了承されました。展開、開始します。」

その言葉と同時に、未鶴を取り巻くように青白い文字の円が現れる。

「これ…って、一昨日の!」

愕然とする嶺次の後ろから声が響く。

「あれ、術式の展開早くないっスか?」

「そうだな…手短に済ませるぞ」

「な……?」

そこには、白髪と眼鏡の二人がいた。魔術師。そう呼ばれた存在。彼らが嶺次の前に立ちふさがると、白髪の少年が光の壁を作り出す。

「ココから先は立ち入り禁止っスよ?」

「待てよ! お前ら、一体何を……」

「一般人にはシークレットっス」

ふざけたように少年は言い放つと、青白い円の周囲にスナップを放つ。

連動して創り出される光の壁。それに気を取られた嶺次の向こうで、もう一人が行動を起こす。

「先輩、準備OKっすよ!」

見えない槍を携えているかのような、眼鏡の青年の構え。

「…黒衣の槍」
ノワール・バルディッシュ

瞬間、彼の右腕から黒い“何か”が染みだし、鎧のように纏われた。嶺次にもそれが明らかに対象を“壊す”物であることを悟らせるような威圧感と共に。

「オイ! 何しよう…!」

嶺次の叫びを無視して、青年は未鶴に近づく。彼が青白い文字の円上に入った瞬間――

ガキン！！！！と。

突如未鶴が殴りかかる。それを右腕で防御する青年。

「やはり自動制御の術式か……！」

冷静に青年がそう呟くも、未鶴の猛攻は止まない。

青年を一步も進ませまいとしているかのように。

しかし、未鶴の体が限界を越えている動きをしているのは明らかで、その体からは軋むような音がしていた。

「やめろ未鶴！！！」

嶺次の必死の叫びも未鶴には届かない。

「クッ……ランサー！！！」

「わかってますって！」

指名に呼応し、指を鳴らす。

「白亜の壁！！」
ブランク・ミューラー

そう少年が叫んだ瞬間、未鶴を光の壁が取り囲んで自由を奪った。

「先輩！！！」

青年はその機を逃さず、円の中央に輝くもう一つの円に飛び込む。

「間に合えッッッ!!!」

フッ、と。

しかし、彼が到達するよりも早く青白い光は消え失せ、右腕は地面に突き刺さった。同時に、未鶴は糸が切れたように倒れ伏す。

「……………失敗、か」

右腕の鎧を収めた青年が呟く。

「ココでミスるって結構…?」

「ああ、…手立ては少ないな」

二人が深刻な面持ちでいるところに、嶺次が叫ぶ。

「アンタ達、未鶴に何しやがった!」

しかし、壁に阻まれて嶺次は近付けない。ガラスのように薄いのに、嶺次がぶつかっても何の振動すら伝えない。

それを見、白髪の方があきれたように口を開く。

「少年くん、詳しいコトは言えないけど、彼女の異常と俺達は無関係っスよ?」

「!?!」

「どっちゃかっていうと味方なんすけどね…」

(味方? ということだよ…)

「ま、世の中には知らない方がいいコトもあるんスよー」

そう言い残して二人は去ろうとする。

嶺次の感情を置き去りにして。

——ふざけんなッッ!!

何が知らない方がいいだ!

何が味方だ!

この壁さえ……!

感情のままM、嶺次は廃材を鉄パイプに変え、壁に殴りかかる。

——しかし、

「が……ッ!？」

嶺次が成形した鉄パイプは壁に傷一つ付けられずに碎け散る。それどころか、嶺次の全身を雷のような衝撃が襲う。

「無駄っすよ。普通の攻撃じゃあコイツは壊れない」

少年の忠告を無視して斬りかかるも、答えは同じ。

(——クソッ!)

歯が立たない。衝撃は一撃目より強くなる。

「グ……アッ……!」

三度斬りかかるも、傷は嶺次に蓄積される一方。

（――俺は…アイツを…救わな…きゃ…）

嶺次が意識を失い、その場に崩れ落ちるまで、光の壁は未鶴と嶺次を隔てていた。

「ねえ…」

――声がする…
俺を…呼んでる…
誰だ…？

「ねえ！」

未…鶴…？

「ねえねえ、キミはなんでそんなすみっこにいるの？」

公園の隅の少年に、少女が話しかける。

「だってぼくのちからはやくたたずだって…」
「なんでー？」

「なんでって…みんながそういうから…」

「じゃあみせてよ！」

「いやだよ…どうせおもしろくないよ…」

「えー。いいじゃん！」

「じゃあ…一回だけ…」

パシュッ！！

転がっていた空き缶がウサギのバッジになった。

缶の錆も、めちゃくちゃな色合いもそのままな、醜いものだ。しかし、

「うわぁー！すごい！」

目を輝かせる少女。

「すごい……？ぼくのちからが…？」

「うん！とおってもすごい！」

「だって…こんなことしかできないのに…」

「あたしなんか、かけっこがはやくなるだけなんだもん！！」

「え…？」

「いいなー！ねえ、もういっかいやって！」

純粹に、自分のチカラを見てくれた。そのことに少年の頬が弛む。

「……………うん！」

——ッ！！

嶺次が目を覚ましたのは、白いベッドの上。そしてその隣には風紀委員、夜来綴が立っていた。

「寝覚めに男の顔って…キツイな…」

嶺次が苦い顔で呟く。

「全く…命の恩人になんて言い草だい？」

「あ？命の…！！！！」

状況を思い出した嶺次は綴に詰め寄る。

「アイツは、未鶴はどうなった！？」

「少し落ち着きなよ…」

綴がたしなめる。

そしてその口から現状が語られる。残酷に、単純に。

「——彼女は、肉体的にはなんの異常も無いよ」

「肉体的には、ってどういうことだ？」

「彼女は眠り続けているのさ。ずっとね…」

嶺次は綴から、未鶴が目を覚まさないこと、同様の被害者が何人もいること、そして現状では治癒する見込みが無いことを聞かされた。

「なんで…!」

絶句する嶺次に綴は告げる。

「ココから先を一般人に話すのは禁止なんだけど…」

「!？」

「彼女達を救い出す方法があるとして、それにはレベル5クラスの武力が必要だとしたら…?」

ここまで来てようやく、嶺次は綴の言いたいことを理解した。

趣旨もなにも、一昨日のそれと全くかわってなどいないのだということ。

「全く…悪魔の囁きだな。俺にレベル5になれっていうことだろ?他に選択肢も無い状況でよくも…」

嶺次が綴を睨み付けるが、綴は真剣な表情で続ける。

趣旨が同じでも、その動機は全く違うのだということを理解させられるほどに。

「これは“願い”さ。切実な、ね…」

嶺次はそれに笑い返す。

「ハハッ…そう言われたら、やるしか無えじゃん?」

この風紀委員を信じるしか、どうせ道は無いのなら。

——最後まで信じきって、信じ抜いてやる。

「…いいぜ。お前が悪魔だろうが天使だろうが構わない。俺に力を…あいつを護る力をくれるって言うなら、なってやる。…レベル5に！」

そう言う嶺次の目に、迷いは無かった。

e p, 2 白と黒はかくて交わる（後書き）

いかがでしたか？

次回はガチでバトルパート突入です。

1月15日、加筆修正しました。

今回も感想お待ちしております！

e p, 3 力、顕現す（前書き）

前回の予告どおり、バトルです！

嶺次のレベル5としての本領、そして魔術師達の本気も披露です！

1月19日、加筆修正しました。

e p, 3 力、顕現す

午後11時――

嶺次と綴は第十九学区、廃棄された長点上機学園の研究施設にいた。

――5時間前、病室。

「で、その方法ってのは何なんだ？」

嶺次の問いに、綴は笑みを浮かべて答える。

「まあ、まずは見てほしいモノがある」

綴がそう言って取り出したのは数枚の紙。

「コレは彼女を含む10人の被害者の診断書なんだけど、一つおかしいコトがあるんだ」

「おかしいコト？」

「普通なら“ある”ものが“無い”のさ」

嶺次が彼らの診断書を見比べると、一つの共通点に気付く。それは、あからさまな“異常”として横たわっていた。

「A I M拡散力場が……無い!？」

「そう。A I M拡散力場は能力者が無自覚に発しているモノ。つまり今、彼らは能力者であることの証明を失っていることになるのさ」

驚愕する嶺次とは対照的に、綴は淡々と続ける。

「こんなの、あり得ないだろ…」

「そう。こんなことは普通あり得ない。でも、何か俺達の知らない力が働いていたら？」

「知らない力………？」

「例えば“魔法”とかね」

「それ……は」

この世界で、街で、存在する訳がないはずの単語だ。

しかし、嶺次には気を失う前の光景が嫌でもフラッシュバックする。物理的な法則を無視した光の壁。無から創造された黒の戦槍。未鶴が機械のように呟いた、“術式”という単語。

しかし、目の前の綴にはそんな予備知識は無いはずだ。

「まあ、信じられないのも無理も無い。でも、コレを見れば意見も変わらと思うよ？」

綴が見せたのは幾つかの赤い点が記してある一枚の地図。

「コレは被害者の発見現場を全て記した地図だ。俺の風紀委員としての権限を利用して集めた情報なんだ」

けど、これを発生した時間経過順になぞっていくと……」

そう言う綴はおもむろにマーカーで印を結びはじめた。

点が結ばれるに連れ、嶺次の表情は驚きに満ちていく。

あからさまな規則性を以て、それらは一つの図形を成したのだから。

「これは……」

「十芒星。西洋魔術で悪魔の降臨に使われる図形さ」

「悪魔って……そんなものいるわけないだろ？」

「何も悪魔を喚び出す訳じゃない。“邪”^{ヤシキ}な存在ってこと」

「邪……」

「さらに、この種の魔法陣は中央に何らかの効果が現れるケースが多いらしい」

「中央に？」

地図の中央を示す綴。――そこには、数年前に廃棄された長点上機学園の研究施設があった。

「いかがわしい研究の噂には事欠かないトコだな……」

「そう。今、ここはスキルアウト達の拠点になっちゃっているんだけど、彼らの行動にはおかしい点があるんだよね」

懐から数枚の写真を取り出した綴は説明を続ける。

レベルアップ

「まず、幻想御手を使っているのに能力を行使に行かない点だ」

「それは、おかしいだろ……」

レベル3どまりの嶺次には流行している幻想御手を使用する彼らの気持ち痛いほど解る。

もし、本当に能力が上がったらどうしたいのかも。

「普通、調子に乗って使うと思わないか？ 強化した能力をさ」

「ああ。しかも元がレベル0だろ？」

外堀を埋められ、嶺次の違和感は確かな物になっていく。

「さらに、彼らはこの敷地から動こうとしないのさ。さながら番犬

の様にね」

「番犬か……………」

「でも、この番犬はなかなか優秀なんだ。幻想御手を使ってレベル4くらいには到達しているっていうのが、俺の見立てかな」

能力者の証明の喪失。

レベル4の力を得てもそれを行使しないスキルアウト達。

廃棄された長点上機学園の研究施設。

そして……………十芒星。

彼の疑いが確信に変わるのに時間はかからなかった。

そして、現在。

彼らは研究施設の向かいにいた。

「さて、準備はいいかい？」

「当たり前だ。そっちが振り落とされんなよ？」

嶺次はおろか、綴も経験したことの無い“レベル5”への移行。

言葉の端々からはそれに対する恐怖が感じ取れた。

しかし、自分にも引けない理由はある。

この程度の恐怖が理由で人一人救えないなど、男として情け無さすぎる。

「いくぜ…」

廃ビルの壁にもたれる綴が祈る様に構える。

あるいは、本当に祈りを奉げているかのように。

ダイアグラム
コネクト
「演算代行、接続」

そうつぶやいた綴の体軀から力が抜け落ちた瞬間、嶺次の頭に膨大な“何か”が飛び込んできた。

（う…ああああおおおおああ！！）

痛みは無い。しかし、大空へと投げ出されたような開放感と底の見えない海へと潜っていく感覚を両立する得体の知れないそれは、恐怖をかき消す程の力の顕現として嶺次の中に宿る。

理屈も何も無い。解るのだから、それで良い。

そして、次に目を開いた瞬間、彼は自分の目を疑った。

廃ビルの床の中。窓の外の風車。自身の中の血液でさえ。

——世界の全ての『無機』が、自分の心強い武器に思えたのだから。

「これが…レベル5………？」

未知の光景に絶句する嶺次の中から、綴は応える。

（思っていたのとは違うかい？）

「なんか、お前の声がクリアに聞こえるな……」

（完全に接続したからさ。ほとんどの思考と五感は共有している。行けそうかい？）

自分の中と外。そのどちらもが味方をしてくれるのだ。

嶺次の恐怖はいつの間にか、消え失せていた。

「ああ。随分、良い気持ちだ!！」

——その晩も、彼らは忠実に番犬の役割を果たしていた。

「オイ。お前。何者だ? ……このレベル4相当の俺等のアジトに踏み込むとはなあ?」

エントランスで、手から火の玉を作り出す一人の少年に呼び止められる。敷地への侵入者は大抵、彼らの能力を恐れて早々に立ち去るのだろう。

しかし——

「いくぜ。綴」

“彼ら”は違った。

彼が床に手をかざすと、周囲の壁や天井から銀色の煙の様な物が染みだしてきた。そしてそれらは蒸気に近い音をあげながら、固体になっていく。

「て、敵襲か!」

その敵意を感じ取った周囲のスキルアウト達は臨戦態勢に入っている。

ここを守ることを言いつけられているのか、嶺次はものの数十秒で

圧倒的な人数に囲まれる。もはや帰る道すら無い。

しかし、そんな数十人を前にしても、嶺次には負ける可能性が感じられなかった。

「シカトしてんじゃ、ねえ!!」

堪えきれない一人が電撃を放つ。

しかし。

超速のはずのそれは彼の前に立ちはだかる鈍色の壁に途切れさせられ、四方八方へと四散する。

縦横2メートルはある、正六角形の灰色の壁によって。

無機質なはずの、しかし彼の心強い味方としての壁だ。

文字通りの、“鉄壁”。

完全に防御へと特化した構造ではあるが、攻撃性のようなものが伺えない。

そこに一瞬、しかし確実に安堵の息を吐いたスキルアウト達の目の前で、

体積はそのままに、鉄の壁は人の身長をも軽く超える大型の六角柱へと形を変えたのだ。

「なっ!?!」

そして――

ゴウッ!!!!と。

驚愕から間隙を置いて周囲の仲間が反応する前に、数人の男は鉄の

六角柱に吹き飛ばされて意識を失った。

「ツツツ!？」

「スゲエ……これがレベル5………」

(どうやら、非接触の金属の抽出や成形が可能みたいだね…)

綴は冷静に分析するも、嶺次は徐々に実感を伴うその力に歓喜していた。

調子に乗ったそれでは無い。確かな力の差を以て怖気つくスキルアウト達を挑発する嶺次。

「どうした？かかって来ないのか？番犬さん！」

「この………ツツ、調子に乗ってんじゃねえ！」

挑発に乗ったスキルアウト達は様々な方向からの攻撃を嶺次へと放つ。

しかし、炎の塊も風の刃も、時には分裂し、時には巨大な一枚となつて意志を持つかの様に自在に動く鉄

の壁に悉く阻まれ、白いエクステの筋が走る嶺次の髪をその余波がなびかせるのみだった。

「こんなもんか、レベル4。なら……こっちから行くぜ！」

念じながら嶺次が手をかざすと、六角形の壁たちが音もなく形を変えて無数の角柱に再構成される。

今度は、戦艦の砲身のような敵意をその端から端まで充満させて。

「ヒィィ!!!ば……化け物!!!」

降り注ぐ金属柱の雨に恐怖し、勝ち目を失って逃げ出すスキルアウト達。

しかし、その中から突然、液体の塊が飛びかかってきた。

「!？」

1メートル大の球体を始めとして、堰を切ったように、ドドドドドドドド!!!と。

相手を確認する間もなく降り注ぐ雨。そしてそれは、焼けつく音を立てて鉄の防壁を溶かしていく。

「やべ……………酸、かよ！」

攻撃用の角柱までを防壁に成形し直して防ごうとするも、破られるのは時間の問題だった。

（敵さんもバカじゃないみたいだ。でも、甘く見てもらっちゃ困るな!!!）

嶺次の中で笑うような綴は状況を判断して適切な金属を抽出、成形。鉄の防壁を覆っていく。

「コレは…………？」

（防壁をクロムとニッケルでコーティングしたよ。ステンレス、って言った方が分かりやすいかな？）

蒸着するかたちで白銀に色を変えた防壁は酸の雨に対してもかなりの耐久性を発揮していた。

「お前、思ったよりやるなあ……………」

（いいから早く片付けようぜ？）

「そうだな！」

嶺次は手をかざす。

流石にこれだけの時間攻撃を浴びていれば、相手の位置だって？める。

風を切り、鋭角な軌道で打ち出された白銀色の柱は、止めのような短い苦悶を遠くから響かせるのみだった。

嶺次がスキルアウト達と遭遇した頃。

研究施設の入り口に程近い中ホールでは、二組の魔術師が向き合っていた。

「先輩……ウォーカーに部下なんていましたっけ？」

「土人形に紛れこんでいた様だな」

片方は数時間前、嶺次と遭遇した魔術師。

そしてもう一方は、左右対称の服装をした双子だった。

右の肩に腕章を付けた者と、左の肩に腕章を付けた者。互いが改造した学ランのような服装をしている。

「お待ちしております。ウォーカー様の討伐のために派遣された魔術師」

「テオレルドⅡミラー、並びにランサーⅡJⅡグレイス」

彼らは句読点毎に二人で代わる代わる言葉を発する。
それも、教え込まれたように奇妙な敬語で。

「私どもはウォーカー様の僕、」

「リンク」

「レヒト」

『と申します』

「残念ですが」

「あなた方には」

『ここで命を落としていただきます』

その言葉を言い終えるよりも早く彼らは拳銃を構えた。そこに躊躇いは、一切見えない。

「!?!」

術式を発動する間もなく、銃弾から逃れて物陰に飛び込む二人。

「問答無用っすか!」

「奴らに構っている暇は無い。仕留めるぞ…」

体勢を立て直した彼らが魔術を発動する。

ノワール・バルディッシュ

「黒衣の槍……………」

フランク・ミューラー

「白亜の壁!」

しかし。

手順も、口上も、何も間違っていないはずなのに、

「発動——しない?」

「何かの封印術式っスかね……」

突然の状況に戸惑う彼らに容赦無く弾丸を放ち続けるリンクとレヒト。彼らは満足気な表情で語る。

「このホール一帯を」

「魔術の使用、並びに内側からの干渉が不可能な」

「結界で覆いました」

「あなた方の魔術は使用不能」

『ですが私どもには、“これ”がございます』

そう言って二人が羽織る学ランを広げると、内側のポケットには無数の銃火器が仕込まれていた。

無力な彼らを仕留めるには十分すぎる量が。

「これって絶体絶命ってヤツっスよね……」

「泣き言を言う暇があれば打開策を考えろ！」

「打開策って！」

次第に追い詰められていく二人。事実、内側からの干渉が不可能とあれば彼らに策と呼べるものは無かった。

「申し上げたはずです」

「悪あがきはお止めになって下さい」

「この空間からは」

『決して逃げられないのですから』

その間にも彼らは銃撃の手を緩めない。それどころか次第に武装が巨大になっていく。

「ちょっと!?! あんなやつ中に入らないっすよね?」

リンクとレヒトが取り出したのは、身の丈はあろうかというRPG。

「しつこい害虫は」

「焼き払うのが適切だと」

『私どもはそう教えていただきました』

躊躇無くRPGを構える二人。

「マズイ……飛ベツ!」

殺傷に特化した一撃。その爆音がホールを揺らす。

——仕留めた。そう彼らが確信した瞬間、立ちこめる土煙の中から声が響いた。

「お前達は、ウォーカーが何企んでいるのか……知ってるんすか?」

「まだ生存していらっしゃるとは……」

「しかも私どもに質問する余裕もおありのようで」

驚きを隠せない双子。

しかしすぐに平静を取り戻し、彼らは告げる。

「ウォーカー様の目的が学園都市と魔術結社の戦争であることなら」

「とっくに存じ上げております」

「ですがそれを問うた所で」

『あなた方の寿命が伸びる訳ではございませんよ?』

すぐさま拳銃を構えなおす二人。しかし土煙は晴れず、的が絞れない。

「じゃあ……アンタ等は戦争を望んでるんすか？」

再び響く声に今度は動じること無く、双子が応える。
冷静に、冷静に、感情を殺した声で。

「私どもは戦場で生まれ」

「戦場で育ち」

「戦争に生きてきました」

「戦争の無い世界は……」

『我々には耐えられないのです!!』

ガガガガガガッッ!! と。うつすら見える人影に集中砲火する二人。

しかし――

「もらった!!」

突如左右からそのマシンガンを狙って二人の魔術師が飛び出してきた。

「!!」

「!!」

「案が良いですが」

「我々が白兵戦に」

『対応できないとお思いですか?』

「ぐッ!!」

「ッ痛ェ!」

鈍い音と共に組み伏せられる二人。

その背には暗器さながらに取り出した拳銃が突き付けられる。

『これで、終わりです』

彼らが死を覚悟した瞬間。

爆発のように凄まじい勢いで、ホール入り口の扉が吹き飛んだ。

そこに居たのは、スキルアウト達を突破した雪崎嶺次。

一瞬の双子の動揺を逃さず、ランサーが指を鳴らす。

その指からはスタングレネードのようにまばゆい光が放たれ、二人は組み敷かれた状態から逃げ出す。

距離を取り、術式の作動を認識したランサーが満足気に語る。

「その結界、外部からの力には弱かったみたいっスね？」

ランサーの言葉だけに耳を傾け、双子は愕然と嶺次を見ている。

「あり得ません」

「正面突破でレベル4数十人を破り」

「結界を外部からとは言え破壊するなど……」

当の嶺次は状況が理解できなかった。

ホールの扉が開かなかったから力づくで吹き飛ばしただけなのだが、なぜかそこにはあの魔術師がいたのだから。

眼鏡を掛け直し、テオレルドが嶺次に呼びかける。

「少年」

「お前ら………!!」

半ば反射的に口応えしようとする嶺次に彼は続ける。

「——礼を言う。そこで待っている」

その異様な雰囲気圧倒され、押し黙る嶺次。

テオレルドとランサーの二人は、魔術師としての臨戦態勢に入っていた。

「久々に本気、出しちゃいますか」

「そうだな。いいだろう」

二人が構える。そしてその口から語られるのは——魔法名。

「汝の足枷に破れぬ誓いを（J u r a t i o 5 0 3）!! 光翼サンクチの
城壁ユアリ!!」

「その罪を赦す傲慢を我が大罪と為す（C a l p a 4 9 5）、夜行ナイ
の兵装トメア」

彼らが魔術を発動した瞬間、リンクとレヒトは先制攻撃を仕掛ける。
銃弾、榴弾、火薬の雨。襲い掛かる近代兵器の嵐。

しかし、現れたのは二人の予想を遥かに上回る物だった。

硝煙と火薬が立ちこめる中、無傷でそびえ立つ純白の城壁と黒い巨人だ。

中世の城壁のようにそびえ立つ、何もかも弾き返す輝きを放つ石壁と。

黒の折り紙を人の形に無理やり押し固めたような攻撃の意思の塊。

「そんな……」

「バカ、な」

その後ろ、床にすら銃痕が無い位置で平然としている二人の魔術師。相対しするも手持ちの兵器を撃ち尽くした双子は呆然と立ち尽くすしか無かった。

「さあて、覚悟はいいつスカ？」

「一気に仕留めるぞ……」

高音と共に黒い巨人の掌に球体が生成されていく。そして役割も、色彩までもが対を為すように白い城壁が輝きだす。

「――行くぞ」

「いつでもどうぞ！」

刹那。白と黒の奔流が凄まじい爆音と共に双子を飲み込んだ。

奔流と爆撃。その二つが押し潰し、射ち抜き、対象を蹂躪していく。あまりの爆風に腕をかざした嶺次が視線を戻した先には、虫食いにあったように削り取られた壁だけが残されていた。

「こんな……威力、が」

（魔法使いっていう仮説、まさか当たるとはね……）

未知の力――魔術に遭遇した彼らは、この事件の真相を知ることになるのだった。

e p, 4 魔術と科学（前書き）

遂に魔術と科学が交差しました！
事件の核心へ、二人は迫ります。

1月20日、加筆修正しました。

e p, 4 魔術と科学

圧倒的な白と黒の波濤。二人が見せた未知の力に、嶺次はしばし立ち尽くしていた。

（超能力にしては理不尽な力、か。光と闇って、物理現象のそれに属するって訳でも無さそうだし）

「これが、まさか……………」

虚空へ失せた術式に気を取られたのか、いつの間にか近付いた二人の内、眼鏡を掛けた黒髪の青年が言う。

「まずは礼を言おう。少年」

礼儀は備えているが、ひどく感情に欠けた声。普通なら気圧されるようなそれだが、今の嶺次達には普通に応じられる。

「お前達は一体、何者なんだよ……………」

ともすれば噛みつきとも取れる嶺次の言葉。しかし、それに笑いながら答えたのはもう一方、クセのある白髪の少年だった。

黒髪の青年とは色も役割も中身も違うらしく、人好きのする笑みを浮かべて。

「俺達の存在を日本の言葉にするなら、魔法使いじゃ緊張感に欠けるし——そう、『魔術師』って単語っスかね？」

（『魔術師』……………）

あえて自分たちが日陰の存在であることを主張するような表現。

綴の感じたその違和感は、次の一言で決定的なものになる。

「俺達の仕事はこの先、多分地下にいるとある魔術師の目的を阻止すること。そして……………そいつの暗殺っス」

「!？」

「ああ、君をどうこうするつもりは無いっスから」

物騒な単語に身構える嶺次だが、白髪の魔術師は手をひらひらさせてその緊張をなだめる。

「っていうか、君みたいな強い能力者にはむしろ協力して欲しいんすけどね……………」

「そういう態度は慎め。仮にも一般人だぞ」

「う……………ハイっス」

「しかし礼儀もある。少年達の質問に答えよう」

たしなめられ、口を閉ざす白髪の少年。

しかし嶺次は二人に食って掛かる。当然のように会話の中に紛れる“暗殺”などという言葉に、彼らの正体を寒気と共に想像しながら。

「それ、どういうことだよ。暗殺って、誰を？」

（この事件の確かな主謀者がいて、それを叩くということか……………？）

質問責めだな、と苦言を程するも、しっかり応じる黒髪の魔術師。見た目程に無愛想な人では無いらしい。

「魔法陣の中に誘いこまれた能力者がチカラを暴走させて昏倒する事件だ。お前も遭遇しただろう？」

「……………!!」

綴の予測は、見事に的中していた。

逐一説明する内容は先に病院で綴から聞いた内容と大差無く、青年の言葉が綴への驚愕として嶺次の中には募っていく。

魔術師としての理解できない視点や言葉もありはしたが。

そして、綴よりも先。核心を、彼らは掴んでいた。

「一連の事件の犯人。それが、ここに潜んでいるであろうウォーカーだ」

「ウォーカー……」

「奴は、レベル4の能力者10人分のAIMを十芒星に組み込み、この学園都市でとある魔術を発動させようとしている」

「とある魔術？」

嶺次の問いに、魔術師は口を開く。

「レベルキャンセラー
能力不可だ」

魔術に一切の知識が無い嶺次と綴にも、その効果を想像するのは難しく無かった。『能力不可』では、あまりにそのままだろう。

「この魔術は、異なった属性の超能力者10人のAIM拡散力場を術式に組み込み、それに相当する能力者の力を封じるといったものだ。こちらで調べた限り、電撃使い、温度を操作する者、他人の精神に影響させる者、肉体を強化させる者……と、昏倒している能力者の種類は様々だ。これが発動すれば、おそらく、超能力者の8割はチカラを使えなくなるだろう。それなら、外部組織が攻撃を仕掛ける機会としては上等だ」

「ま、待てよ。つまり？」

溜め息を吐いて、鋭い眼光と共に魔術師は言い放った。

「ウォーカーは学園都市を戦場にするつもりだ」

「!!」

——学園都市が？戦場に？

只の高校生でしかない嶺次には、信じがたい非日常の言葉。実体感を持ってないままの嶺次に、テオレルドは続ける。

「少年、君は此処になぜ来たんだ？」

「それは、勘と、情報と……………」

言い淀む嶺次にあきれながら告げたのは、その様子を伺っていた白髪の少年。

「君には選択肢があるっス。ここで引き返し無様に日常へ帰るか、それともそんな逃げ腰で戦場に乱入するか。ま、どうなろうと結果は見えてるっスよね」

「戦、場」

予期はしていた。していたはずの言葉に嶺次の思考が揺らぐ。揺らいだ嶺次の中身を見透かして、少年は言い放った。

「そっス。“覚悟”が無きゃ、この先の戦場には来ちゃいけない。君にはあるんスか？“覚悟”」

「俺は……………！」

しかし、その先を言うより早く、ホールの入り口と反対側の暗がりから足音が響いた。

「!?!」

既に何らかの気配を感じていたのか、魔術師達に動揺は無い。
——現れた、白のスーツに金髪という細身の男を前にしても。

(アイツが……………)

それは、綴が以前の路地裏で遭遇した男だった。
不気味なまでのその笑みは、簡単に忘れられるようなものではない。

「ウォーカー……………」

黒髪の魔術師は敵を睨み付けながら呟く。

「怖い顔をしないで欲しいな、侵入者さん？」

それとは対称的に、両手を広げておどけてみせるウォーカー。
仮面のような所作に、三人が警戒心を顕にした——瞬間。

「全ク。殺スノガ面倒じゃないか……………!!!」

抑揚の取れない言葉と共にウォーカーの体が風船さながらに膨張を始め、閃光を放つ。

急速に、爆発的に広がるそれは、今にも彼らの場所に届かんとしている。

「また人形っスか！」

「チッ。夜行の兵装！」

「綴ィ！！」

こちらもただの人間では無い。防壁や巨人を各々作り出し、爆発を難無く防ぐ。

しかし、爆煙が薄らいだその後から現れたのは――
全く同じ顔、同じスーツの、百人は有に越える数のウォーカーだった。

「ドッペルゲンガー！？」

（この数はあり得ないだろう。おそらく……）

偶然にも丁度のタイミングで綴の言葉を引き継ぎ、白髪の少年は敵から目を逸らさずに言う。

「少年、ボーツとすんなよ？そいつらはウォーカーの魔術で作られた人形っスからね」

その言葉と時を同じくして人形達が変容を始めた。

ゴキゴキという嫌な音と共に腕があり得ない方向に曲がったと思うと、そこから機関銃や斧が生えて来るのだ。さながら、未知の宇宙生物が宿主の人間を食い破って出てくるかのように。

「ほ、ほらね………？」

「だからあれは何なんだよ!!」

「ウォーカーの魔術は人形ヒトガタを土から作り出すものっす。科学的に言うなら、“有機物でできたロボット”っすかね」

動揺を隠せない三人を前に、それぞれ能面のような表情で武装を構える人形達。

「敵ヲ、侵入シャを、はい除しマス………」

ノイズのような言葉を洩らしながら無数の人形が蠢く。飛び掛かって来るまでに猶余など無い。

けれど、今なら帰れる。

後ろには日常への道がまだ残っている。
しかし、一度乱戦になったならば。

——俺の世界は、きつと戦場に染まる。

そこにためらいを覚えない人間が、いるわけがない。
誰だって、自分の命を危険に晒す真似はしたくない。

——でも、俺はここに来た。

その理由を自分に問いかける嶺次だが、答えは自分でも呆れるほどにあっさり見つかった。

——決まってるじゃねえか！

「俺は……アイツを護りたい！だから、俺を戦わせろ！！！」

白髪の少年が、その決意に満ちた目に気圧されたようにほんの少し言葉を失う。失って、そして笑った。

「今ここで少年と争っている時間は無い。来るなら拒まないが……
…邪魔はするなよ」

少年の言葉を代弁するように、しかし面倒そうに青年は眼鏡を掛ける。
なおす。

嶺次は彼らに並び立ち、そして笑い返した。

「俺は“少年”じゃ無えよ。雪崎嶺次だ」

頭一つ下の少年の言葉に一瞬驚いたような黒髪の青年だが、無表情に返す。

「テオレルドⅡミラー。右のはランサーⅡJⅡグレイスだ」

「よろしくっス」

白髪の少年——ランサーの笑みは敵に向けられている。

「じゃ、嶺次の覚悟が決まった所で、とっとと片付けますか？」
「行けるよな。……綴」

わざわざ聞くなよ、といった声色が頭に響く。

（行けなくても行くんだろ？）

「それも、そうだな……………」

苦笑いと共に辺りの廃材から防壁を成形する嶺次。

それと人形の軍勢が痺れを切らすのは同時だった。

しかし、同時ならば十分。

斧から刀、戦槍に至るまで、襲いかかる様々な刃物を防いだ六角の壁は瞬時に角柱と化し、数十の人形を吹き飛ばしたのだから。

「さあ、正面突破だ！！」

一方、突進していく嶺次を光翼サンクチュアリの城壁で援護するランサーは諦め半分といった顔をしていた。

「全く、先走るのも程々にするっスよ……………」

しかし、事実として彼の突破能力は優秀だ。

金属を操る能力らしく、対多数の攻撃を完全に受け切っては直後の隙に角柱を叩きこむ。防御も攻撃にも、弾切れの心配すら無い。

（けど、一般人に先を越されちゃ気に食わないっスね！）

短い呼吸と共にランサーの城壁から走る光が人形の軍勢を分断し、その隙間を縫って嶺次が駆ける。

だが、逆上すること無くノイズと共に砲撃を浴びせる人形達。完全に生気を失っているそれは、かえって不気味さを増すのみだ。

一方、爆音と震動轟く空間をすり抜けた嶺次には一層の迎撃態勢。

「うわっ……………！」

旧時代の戦争映画のような兵器を人形達が構え、それに嶺次の防御が追いつかないかと思うのと同じ時。

「ナイトメア夜行の兵装………！」

ガゴン！！と、

轟音を上げて数十の人形隊を黒い柱………否、巨大な腕が押し潰した。

「テオレルド！」

「お前が尖兵になってくれると、俺のような術師は助かるからな」

黒髪を風圧になびかせながら手をかざすテオレルドは、

（笑ってる…？）

一瞬そう見えたただだったかもしれないが、彼の口調は心なしか穏やかだった。

「突入の準備、いいっすか？」

ランサーの城壁は、迫る人形達と嶺次を隔て、奥の空間へと道を切り拓く。

その道を守るは、四方八方に鉄の壁を展開した嶺次。

「当たり前だ！！」

さながら、爆発。

巨木のような鉄柱を打ち込んだ土煙に交じって、人形達が宙を舞う。

――その間隙を縫って、嶺次は扉の奥へと飛び込んでいった。

e p, 4 魔術と科学（後書き）

というわけでどうだったでしょうか？

次回は一騎打ち（の予定）になるかと…

ご感想、お待ちしております！

e p, 5 本質

扉を一人突破した嶺次の後ろからは、砲撃の爆音とそれを叩き潰してかき消していく音が交互に響く。

「これまた不気味だな……………」

（先へ行かないのか？）

嶺次の前方には、その真逆。静寂と暗闇に包まれた車一台がギリギリ通れそうな通路が遥かに続いていた。

ためらう嶺次だが、後ろからの轟音——魔術師達の戦いの音が、彼を急かす。

「行くしかない、か！」

駆け出した嶺次の体はあっという間に闇に吸い込まれて消えた。その先に待つのは、敗北か、勝利か。

一方、先ほどのホール。

圧倒しているのは数で劣る魔術師たちの筈。なのに、そこには疲労の色が濃い。

「ハア……………ハ……………ッ、先輩！コイツらの数が減らないんすけど！？」

ザグン!! と。右腕の斬撃で人形を払い捨て、一呼吸置いてからテオレルドはランサーに応じる。

しかし彼も、息の荒さを隠し切れない。

「……………ッ! 人形達が…………自ら修復の術式を、行使しているからな…………」

人形を一体ずつ破壊するのは苦でも無いが、二人は疲弊させているのはその数と再生能力。

彼らの術式で破壊された人形達は、別の人形達の手によってまた寄せ集められ、土を利用した術式で人のカタチを成していく。つまり、キリが無かった。

「あゝ、しんどいっスね! もう!!」

周囲を光の波濤で一掃したランサーが気を緩めた瞬間、背後で鈍色の刃が翻った。

(ヤバ——!)

「何だ……………?」

嶺次が微かな光を頼りに辿り着いたのは、青白い光に包まれた大聖堂のような空間だった。あちこちに研究機器の残骸が転がっている

ことから、元が科学側だったことが類推できたが、

（何だい？この、パイプオルガンみたいな……………）

空間に異彩を放つのは向かいの壁に埋め込まれた巨大な機器だった。パイプオルガンのような“ソレ”には明らかに魔術側のものであることを示す、見たこともない文字がびっしり書き込まれていた。

「これが、能力不可の起動装置か？」

空間を横断し、無防備にも機器に触れようとした、瞬間。

「Optatio724（その願いはすでに手中に）」
「——！？」

突如耳に飛び込んだ聞き覚えの無い異国の言語と数字。嶺次が振り返った先には、

「やあ、侵入者くん。はじめまして。僕がウォーカーだよ」

先程の人形達と同じ顔、同じスーツ、同じ金髪の細男。

（コイツが、ウォーカー……………！！）

しかし——

（恐い……………！）

その男の纏う“何か”が嶺次達をたじろがせる。人形達のグロテスクなものとは全く違う何かが。嶺次にも綴にもそれが何なのかわか

らない。でも——ひたすらに“恐い”。
ウォーカーはそれを承知で、笑顔のままで嶺次に語りかける。

「僕が今、魔法名を名乗った事実。これが何を意味するか、わかるよね？」

鉄の棒を構えて迫り来る嶺次に構わず、ウォーカーはその手を床にかざして呪詛を紡ぐ。
そして、

ビシィー！！と。

嶺次の周囲から水を打ったような音を響かせ、部屋のほとんどが魔法陣に包まれた。……………それと同時に。

「！？」

嶺次の体は、奇妙な体勢で動きを止めた。

ビデオの一時停止を、自分の預かり知らぬ存在に押されたように。

（動……………かな……………！！）

鉄パイプを振りかぶったまま、微動だに“できない”嶺次。
彼の恐怖は体を縛る形で具現化し、敵が襲い来るのをただ待っている。

さらに、何の理屈か知らないが、成形した鉄の武器が崩れていく。

それでも表情一つ変えられない嶺次を満足そうに観察するウォーカ
ー。

「君を殺す。魔法名は、その覚悟の顕現だよ」

（ヤバイ！！逃げろ！動けよ体！動け動け動け動け……！！）

理性より本能に近い所が叫ぶ。それでも、嶺次は指一本どころか目
蓋も閉じられない。

「何だ、解せないのかい？今の君の状況が」

ゆっくり歩を進め、嶺次の眼前でその手を広げる。

もの言わぬ嶺次は人形のように、ウォーカーが独り言を言っている
ようにすら見えた。

「今の君の現状を説明するには………こうした方が手っ取り早い
かな？」

笑顔のまま嶺次の肩に右手を伸ばし、触れるように指で弾いた。
それくらい何でもない。恐怖の中で訳もなく嶺次が確信した瞬間――

ボロツ、と。

（……………）

走る激痛。体を持っていかれるかと思う痛みの中、かろうじて視界に入る左肩は……、挟れていた。

嶺次の左肩を指で弾いたところは挟れ、完全に失われていたのだ。土でできた人形を、子供の癩癩で崩したように。

「君の体は今、地面と同化している。だから喋れないし、動けないし、能力も使えないし、簡単に壊れる。こんな風にね」

笑みを崩さず、傷口を広げるウォーカー。

ぐじゅぐじゅと音を立てる左肩から先の感覚は、もはや消えかけていた。

（が………あ…ッッ！！！！）

「今、君は“僕から見た”地面と同化している。もしかしたら考え、痛みを感じることもできるかもしれない。でも、そんなことは関係ないのさ」

（腕が………もう……！！）

しかし、ふっ、と平坦な目に戻ったウォーカーはおもちゃに飽きた子供のような表情で言い放つ。

「まあいいや。君にはもう用は無いし」

彼は巨大な機器を仰ぎ、何かの言葉と音の中間のような呪文を唱えはじめた。それが何なのか、嶺次達は知る術を持たない。だが、あからさまに共震のような反応を示す機器を前に、綴は最悪の可能性を言葉にしてしまう。

（まさか、起動の段階に………？）

（そんなこと、させて………たまるか！！）

心の中の絶叫とは裏腹に、嶺次の体は動かない。微動だにしない。どんなに強く願おうとも、体は言うことを聞かなかった。目の前で、この街を、幼なじみを、今にも壊そうとしている張本人がいるのに。

（こんな……）

しかし、嶺次の絶望は広大な空間を揺るがす衝撃に遮られた。

（ツッ!?!）

通路から吹き出す爆煙と共に、歩む音が二つ。

そこには、あの数の人形達を二人で全滅せしめたらしい魔術師達があった。

しかし、ランサーの肩には血で滲んだ赤い一線。テオレルドのローブは裾が焦げていて、と互いにかなりの疲労が見て取れる。それでも、彼らはウォーカーを睨み付けている。

「ふうん。人形達、壊されちゃったんだ……」

青白い光に包まれる魔法陣の中、つまらなそうに頭を掻く。

「随分、余裕っスね？」

彼の部下もろとも、あの数の人形達を打ち破ったはずの魔術師二人

を前にウォーカーは興味無いね、と前置きして、おどけたように手を遊ばせる。

「だって、君達はこの結界を破れないからね。僕に触りたかったら、――グレゴリオの聖歌隊（グレゴリオ・クアイア）でも用意しなよ。能力者の命自体を糧……担保かな？ それにしたこの陣は、能力不可の核に相応しい防御力を誇るんだ。まあ、そこで見てなよ」

グレゴリオの聖歌隊。それが何なのかは嶺次達には分からないが、魔術の世界で一定の力量を持つものであるらしい。

自分の命をこの陣に使われているという恐れよりも、彼らがウォーカーを倒せるのだろうか、という疑問が浮かんで来る。
しかし――

「それは良いコトを聞いたっスね？」

「……………ああ」

彼らは、嘲笑うウォーカーに一切動じない。それどころかその言葉には自信が満ちあふれている。

それに表情を変え、怪訝を映して二人を見つめるウォーカーに、ラッサーは歌うように語り出した。

「アンタは、十二使徒の一人、トマスって知ってるっスよね？ ま

あ、曲りなりにも十字教の魔術師なら当然か」

「……………」

つまらない説明を聞かされ、苛立っているように見えるウォーカーに構わず続ける。

「そんな大昔の聖人、トマスの語源はギリシャ語で“双子”。つま

り誰かと兄弟だったってわけっス。——さて、ここで問題。その双子のトマスの力を偶像の理論で宿した人間がいたらどうなるでしょうか」

「……、」

「それが伝承通り、“双子みたいに分割”されたら？」

言いたいことを言い切ったランサーは満足気に言葉を切って、左手を鳴らした。

「予習は済んだっス。それでは本番、行きますか！」

言葉で応じないテオレルドだが、眼鏡を掛けなおす。その目は真っ直ぐ、透明な壁の向こうのウォーカーを捕らえていた。

「……！ まさか、君達は——」

何かを悟ったウォーカーの動揺に乗じるように、二人が構える。

テオレルドが右手を、ランサーが左手を虚空に突き出す。

互いの手には術式など一切纏われていない。なのに動揺を続けるウォーカーの表情は、嶺次達にも言葉として伝わるかのようだった。

——ソナハズハナイ、と。

そして、ウォーカーの疑念は止まらない。

「C i n i s o o 2（その左手と右手は白夜の如く）……！」

放たれたそれは、魔法名。魔術師がそれを名乗るという事実の意味を、ウォーカーは殺しの覚悟だと言った。

ならば、あの白と黒の魔術師二人で抱えた覚悟が、その名前には込められているということなのか。

そう思考する綴の一方で、嶺次の視線はあるものに奪われていた。

魔法名の宣言と共に中空に現れ、混ざりあい、その色を濃くしていく銀色……いや、灰色の粒子に。

嶺次たちには絶句することしかできないが、魔術師としての目で見たこの現象がどれ程に異様なのか。

それは、ウォーカーの表情に如実に現れていた。——嶺次への攻撃に何のためらいも見せなかった彼が、足を釘付けにされている様に。

そして、“それ”は時間を置かず人のカタチになった。弓と矢を持つ、古代ローマの射手のカタチだ。

「理解できたっすか？俺達の本質。デュアルスベル重複魔術を」

ランサーの言葉は軽いが、対してこの世に存在しないはずの物を見るように怯えるウォーカー。

「俺達は二人で一つの魔法名を持つ。二人で一つの聖人の力を行使する。……トマスステイグマの聖痕をな」

テオレルドが放った言葉の威圧感がウォーカーを絶句させる。そして、

「これが」

「俺達の」

「「本質だ！……！」」

彼らの言葉に呼応して灰色の射手が弓をつがえる。

ギリギリと引き絞られていく弦が、その張力の限界に達した瞬間。彼らは、そのクビキを解き放った。

「グレイ・アーチャー灰燼の射手!!」

そこから先の決着は、圧倒的。

ギャアン!!! と。放たれた矢は音速を越えんとする速度で結界を突き破り、巨大なパイプオルガンのような機器を一瞬で、文字通りに灰燼に帰したのだから。

灰になる前に燃え上がることすら無い。あまりに呆気無く、あまりに弱々しく、ウォーカーの計画の核はその形を失った。

「そんな……」

絶望に染まるウォーカーは、おぼつかない足取りで彼ら、魔術師から逃げようとする。

あまりにささやかな抵抗だ。

しかし、それを遮ったのは魔術師達では無い。

「何を……してるんだい? 超能力者……」

立ちはだかったのは、魔法陣の呪縛から解き放たれた雪崎嶺次。左の肩は血の赤と共に大きくエグれ、そこから先はだらりと下がっ

ている。

それでも、彼らはウォーカーの前に立った。

人間を無意味にたじろがせる気配を、未だ放つウォーカーの眼前に。白髪の魔術師が感心したように目を細めるが、嶺次達の意識はそこ
にない。

（任務とか、義務とかじゃない）

嶺次には、風紀委員やあの魔術師のようにこの行為を正当化できる理由が無い。

（――そう。これは俺の感情のままの拳だ）

でも、幼なじみを……いや、“好きな女”を傷付けられて、誰が黙ってられるか。

「邪魔なんだよ！！　そこをどけええエエ！！」

ウォーカーは鋭利な廃材でこちらに殴りかかるが、ろくに格闘もしたことの無い拳など、「彼女」には遠く及ばない。

紙一重でかわすと、嶺次は右手を堅く握り締める。

武器も無い嶺次には、それ自体が武器だ。

（これくらいしかできないけど……それでも！！）

「喰らえよ！！」

だから、嶺次はもう迷わない。

全力を以て、その右を打ち抜く。

ゴギンツッ！！　と。想像以上に軽かったウォーカーの体は顔面に突き刺さった拳の圧を受け止め切ることができず、壁へと叩きつ

けられた。

それで、ウォーカーという男の、魔術師としての生命は終りを告げた。

e p, 5 本質（後書き）

というわけで、ウォーカー編は一段落です。

考察等が今回は踏み込んだので、間違いなどあれば、ご指摘いただけるとうり難いです。

次回は真相解明編になるかと…

2月1日、加筆修正しました。

e p, 6 真実を知らずに

——ウォーカー。そんな通称でしか呼ばれない彼にも“名前”があった。

何年前のことなのかもわからない。

それでも、確かに彼にも親は居て、彼も惜しめない愛情の元、“普通”の少年時代を送った。

しかし、15歳の時、彼の才能は突然開花した。

教会に所属し、その『人形』作りの腕が認められていくと同時に、彼は届き得ない壁を知る。

20世紀最大の魔術師、アレイスター・クロウリー。

彼に抱く尊敬の念と、越えられないであろうという予感。そんな中でも彼はその腕を磨いた。

いつか、彼にも届くように。

越えられないまでも、届くように。

——そして、彼は姿を消した。彼は最高の魔術師から、最悪の裏切り者へと肩書きを変えた。

ウォーカーは、魔術の世界で有無を言わさぬ実力を得た。数えきれぬ栄誉を得た。

それでも彼について回ったのは、

“暫定の”No. 1でしかないという現実。

——僕は彼の代理じゃ無い！

——僕は彼に見放されたんじゃない！！

——僕は彼には及ばないんじゃない！！

——僕は……あの人の…

魔術の世界は、優しく無かった。

彼はその立場を捨てて、ありとあらゆる研究に没頭した。アレイスターの影を振り払うように。その姿を記憶から追い出すように。

各地を渡り歩き、禁忌とされる肉体の人形化を施し、その総てを投げうつ内に、彼は“名前”を失った。

彼を知るものは、彼をこう呼ぶようになった。

ウオーカー
渡り歩く者……。

滅びを知らない肉体。

いくらかでも生み出せる兵隊。

危険視した教会により、いつしか彼にも追っ手が迫るようになった。そんな中、極東、学園都市にアレイスターが潜んでいるという噂が彼の耳に入る。

これまでも偽名を語る魔術師は数知れずいた。

それでも、彼は真偽を確かめずにはいらなかった。

——しかし、突き付けられたのは科学の中枢に彼がいるという真

実。

尊敬していたはずなのに、彼に対しての憎しみだけが膨れ上がっていく。

——あの人はすべてを持っていたのに……！

——あの人を追いかけて来たのに……！！

——あの人が……！！！！

「何で………ですか………！！」

彼を支えていた“何か”が、壊れた。

その比類無き技術と執念が集約したのは、“アレイスター・クロウリーを殺す”という一点だった。

学園都市の基盤である超能力を封じ、彼を引きずりだし、自らの手で殺す。

持てるすべてを投じて練った計画は、順調に進んでいたはずだった。それでも、たった2つの予想外で計画は破綻する。

壁に叩きつけられ、薄れゆく意識の中でウォーカーは自らの魔法名、その本質を悟る。

『Optatio724（その願いはすでに手中に）』。

（———そうか…僕の…願いは…）

その願いが二度と叶わないものであることに辿り着く前に、彼の意識は深い闇へ沈んでいった。

一方、青白い空間に佇む嶺次の前では、信じられない現象が起こっていた。

殴り飛ばしたウォーカーの皮膚が旱魃の大地のようにひび割れ、崩れていくのだ。四肢の先端から始まったそれは、今や首の付け根を侵食しかけていた。

異様な光景に言葉も無い嶺次の隣でテオレルドが呟く。

「ウォーカーは肉体を人形化する魔術を施していた。あの巨大な機器がその制御装置だったようだ」

気に病むな、と暗に慰められているように穏やかな口調だった。

静かに崩れていくウォーカーを止める術は無く、3人は教会で死者を見送る葬送の如く立ち尽くしていた。

「結局、ウォーカーの動機って何だったんスかね……………」

研究所を後にし、廃ビル群の中を月明かりで歩くランサーはふとそんな言葉を漏らした。

「俺達の目的はウォーカーの抹消だけだ。それ以外は関知しない。確かに気になる所ではあるがな」

今回の仕事に於いて、ウォーカーの動機だけが宙ぶらりんで存在しなかったのは事実。

しかし彼らの上司からは、それ以上の深追いをせずに帰還するように伝達があった。

「俺達が考えても仕方ないっすか」

感じた違和感を飲み込み、二人は学園都市の喧騒に紛れていく。

同じ月明かりが照らす青白い病室に、雪崎嶺次の姿があった。

魔法陣との接続が解除されれば、能力者達は意識を回復する。魔術師からそう告げられた彼の足は自然に未鶴の病室へ向かっていた。

——結局、守れなかったな……

後悔する嶺次の目に映る穏やかな未鶴の表情は微かな救いを彼に与えているようにも見える。それと同時に浮かぶのは、強い決意。

——もう二度と、こんなことは……！

——同時刻——

その月明かりの届かない窓の無いとあるビル。その中枢で機器に繋がれ、培養液で満たされたビーカーにたゆたう“人間”、アレイスター・クロウリー。

彼の前に土御門元春が現れた。

「全く、質の悪い暇潰しだな」

潜入し、策を巡らせていた魔術師の敗北と同時にその行動が無意味だったことを知った土御門は苛立っていた。

「あの種の魔術を反転、無効にする術式を学園都市に仕込んであったとはな！」

「君は自らの行動が無意味だったことを謝罪してほしいのかい？」

「…………、チッ！」

いかに綿密であれ彼の計画は破綻していたのだ。最初から、最後まで。

「彼は真実を知らずに死んだだろうかね……………」

偽善とも皮肉ともつかない『人間』の言葉に、土御門の苛立ちは増すばかりだった。

「う、ん?……!!」

淡いオレンジの光の中、目を覚ました灰笠未鶴はここが見知らぬ部屋であることよりも、ベッドの左裾にうずくまる人影に驚いた。

顔は伺えないが、そのエクステには覚えがある。

高校デビューだとか言って付けてきたそれを、さんざん笑ってやった覚えが、だけど。

「嶺……次……」

しかし、疲れ切った様子で動かない彼のシャツの襟からは、左肩にかけて包帯が痛々しく巻いてある様子が伺えた。

昔からそうだった。コイツは私が助けを求めるより早く動き、私の為であることをおくびにも出さず、いろんなことで怪我をしてきた。私の事を男女と馬鹿にする奴に、正面から向かっていたり。闇討ちじみたことを考えていた上級生を、返り討ちにしたり。

——今回も、きっと。

「ありがとな………」

病室を照らした朝焼けが未鶴の横顔に深い影を刻み、その微笑みをも音もなく包んでいった。

――数時間後――

明け方に意識を回復した未鶴は一通りの検査を終え、健康体ではあるが一応ということで嶺次に付き添われながら学生寮への帰路に着いていた。

「お前が入院なんて、似合わないと思ったら即退院かよ……………」

半ば呆れながらも嶺次は呟く。しかし、どこか嬉しそうに。

「私だって入院なんて御免だしね。皆勤賞に傷が付くんだよ？」

「補習の皆勤賞、もらって嬉しいですかー？」

他愛無い会話のある日常。

（少なくとも今は、か）

異界の法則を知ってしまった上で、この平穏が少しでも長く続くことを願う嶺次に対して、彼が病室に徹夜同然でいたことを看護師から聞かされた未鶴は妙に高いテンションのまま朝の学生寮へ。そこに――

「あれれ、お二人様、堂々朝帰りですかあ……………？」

「!!!!」

コンクリ打ちっばなしの寮の廊下に響く声。

そこに居たのは嶺次の反対側の隣人でクラスメイト、茶竹^{さたけりゅうい}琉惟だった。

褐色の寝癖を撫で付けながら不吉な笑みを浮かべる琉惟。未鶴が病院へ搬送されたのは前日の夕方。つまり事情を知らない一般人から見れば……“そういう”関係に見えても不思議は無いのだ。

というか琉惟の場合、そういう方面からしか見ていないようだった。

「心配しなくても、言い触らしたりなんて——」

琉惟が邪心たっぷりの笑みを浮かべた瞬間、嶺次の隣から琉惟にかけての10メートルを黒い影が走った。

「がぐっ!?!」

微かに呻いた琉惟はその場に倒れ伏す。何をどう動かしたかも解らないレベルで肉体強化の本気を被露した灰笠未鶴。その般若の如き微笑みの前に、コイツにはもう少し入院してもらうべきだったかもしれない、と若干の後悔を禁じえない嶺次だった。

e p, 6 真実を知らずに（後書き）

とりあえず1章は完結です。

次回からは新展開が訪れます！

2月3日 加筆修正しました。

e p, 1 戦闘力はEクラス（前書き）

新章突入です！

またオリキャラが登場します！

ep, 1 戦闘力はEクラス

なんだ…この声…

「お前…ら…れた…のだ…」

「この学…市でなら、お前……きるはずだ」

「わた…とは覚…」

一体何だってんだ…

——！！！！

自らのベッドで身体中に嫌な汗をかきながら嶺次は目を飛び起きた。

「今のは…？」

ひどく思い出たくない記憶を抉られているような嫌悪感が体に走る。

——聞き覚えのある声だった。

誰の声なのかは思い出せない。

でも、俺はこの声の主を知っている…？

深い思考に入ろうとした瞬間、目覚まし時計が騒音と共に嶺次を急かす。

「うわッ!!」

危うくベッドから落ちそうになるのをなんとか止めたところで、その頭は現実にとあることを思い出させる。

「あ……」

今日も補習だった。

———2時間後———

興条学園、1年D組の教室では3分の1程の生徒を集め、青みがかったショートボブに淡い水色のスーツといったザ・女教師な残念美人こと青館 あおだてあやめ 菖蒲が夏休みの補習を行っていた。

「解理ちゃん、その視線をノートに戻してもらえると嬉しいねー」

黒板に板書していて生徒の方を見ていないはずなのに、解理の目が泳いでいるのをズバリ言い当てる辺りは彼女が超能力者で無いことを本気で疑いたくなる。

ちなみに、解理の視線の先には見えそうで見えない水泳部のプールがあったりするのだが、感慨深げに

「金穂先輩かなほ…戦闘力はEクラスと見たね…」

満足した表情で悟りでも開きそうな解理がいた。

「お前…心眼あるの!?!」

嶺次のツツコミに間髪を入れず、

「それくらいにして頂かないと補習が雪だるま式に増えますよー?」

敬語モードに入った菖蒲がクラスを凍らせた。

「……ということなので、ここのレポートを何人かで組んでやってもいいけど明日迄に提出するようにねー」

終了間際、菖蒲の置き土産でクラス中に悲鳴が響き渡る。

生徒の反論を聞くよりも速く教室から菖蒲は消え、各々が翌日までという無理難題にあえいでいた。

「…、で？嶺次は彼以外にこの超一級トラップを突破する方法を知っているのか？」

「いや、ソレにしたって…」

「私は構わないけど？」

数十分後、学校からの帰路にあるとある学生寮前。

実にイヤそうな嶺次、半ばヤケになった解理、あっけらかんとしている未鶴の3人は、この学生寮の一室に住まう危機的状况を打開する伏兵の力を頼り、ここにいた。

その名は田^た韜^{ぎや} 橙^{とう}李^り。彼らのクラスが誇る問答無用の優等生だ。

恐る恐る部屋の前に立ち、嶺次が扉をノックするも反応が無い。

「あ、あれ…、連絡したんだけどなー？」

首をかしげる解理に対して未鶴はずかずかと入っていく。部屋は少し上等な感じで、玄関から左右と前方に扉があった。前方の扉を開けると、

「橙李君ー？」

結論を言えば、彼は部屋に居た。

——その太陽のような髪に表情を隠し、隅っこでうずくまって何かに怯えるように。

「翠隻…オマエ……！」

問答無用の優等生、田鞘橙李。その弱点は…

「灰笠を連れてくるなんて聞いてないぞ……！」

「……スマン」

——女性恐怖症であることだった。

嶺次がイヤそうな表情をしていたのは未鶴がついてくると言い張るからであって、橙李自身の男子間の信頼は高いのだ。解理も同様の理由でやけくそ気味だった。

「…、なるほどな。それで俺を頼って来たのか…」

一通りの説明及びお願いをした後、橙李は協力に同意してくれた。

——未鶴から最大限の距離を取りながら。

そのうち女子に興味が無いなんて噂が立たないだろうかと心配するくらい、彼の女性恐怖症は重度だった。とりあえず、予期しない女

性の接近を察知できる程には。

なんでも実家では4姉妹の激しい愛情表現（本人曰く虐待）を受けてきたらしく、買い物ですら店員が女性だと四苦八苦するのだ。

それでも橙李の才能に期待して3人は足を運んでいる。

「天然能力者の存在可能性並びに存在を仮定した場合の稀少性に関するレポート…か」

テキストの対象箇所を眺めて3人は唸っていた。噂の域を出ないはずの天然能力者、“原石”に関するレポートを書かせようとするあたりにはそこはかとないどころでは無い悪意を感じながら、テキストやネットにおける記述の少なさに絶望する。

「天然能力者とは何なのか、から始めるべきだろうね…」

座敷わらしの如く部屋の隅にうずくまりながらも的確な指示を飛ばす橙李に舌を巻くも、

「やっぱり橙李君を頼って正解だね！」

未鶴が顔を向けただけで蛇に睨まれた蛙のようになってしまったのがかえって滑稽に見える2人は笑いを堪えるのに必死だった。

「学園都市の能力者を人工のダイヤモンドとするならば、彼らは天然物の原石といった関係にある…、っと。書き出しとしては上等だよな？」

「OK。それからどう膨らませるかだよなあ」

「こうも記述が少ないんじゃないかね…」

原石の存在を認識しているのは学園都市でも暗部の関係者に限られており、その情報に統制が敷かれるのは当然と言えた。

「大体、可能性ってどれくらいあり得るのかがすでにわからないしな…」

「もうゼロでいいんじゃないの？存在可能性を認知できませーんって……ガフッ!？」

嶺次の嘆きに解理が開き直った瞬間、未鶴と嶺次が肉体強化レベル4の手刀と成形した鉄のハリセンで後頭部をどつく。

ため息でそれを見届ける橙李は、

「青館先生がそんな程度で納得するわけ無いだろ？まして補習のレポートじゃ…」

他人事なのに真剣だった。

この性格が良くも悪くも信頼の元になっていたりするのだが…

一方、死の淵から生還した解理は

「痛っ……でもこんな少ない参考文献でまともなの書き上げろって言う方が無理じゃないか…」

「まともなヤツ、か…」

橙李が考え込むほど解理の主張が正しいのもまた事実。正直、嶺次と未鶴はお手上げだった。

「大体さー、開発を受けない能力者なんて大昔に居たらそれこそ空力使いは風神さま、電撃使いは雷神さまみたいに神様扱いなんじゃないか？」

「んー、確かに苦労はしなさそうだね…」

「そんな神話みたいなこと…」

嶺次の何気ない一言に橙李が押し黙る。あまりにアホらしいことを言ってしまったかと嶺次が焦りかけた瞬間、

「いや…それはアリかもしれない…」

「」「へ？」「」

結局、スイッチが入った橙李が書き上げたレポートは目の付けどころが違っていると菖蒲に絶賛され、彼らの評価は一時的にかなり上昇することになる。

「レポートの題名が“神話及び伝承に於ける超能力の関与可能性”なのにな…」

「スイッチ入った橙李君は怖かった…」

「何を書いたんだよ…アイツ…」

3人は限界を突破してA A+の評価を得た橙李の文才に、レポートを読むのはばかられる程の壁を感じるのだった。

「…で、この殺気は何なんですか？」

風紀委員、第177支部に出向いた夜来 綴は余りに殺伐とした空気を纏っている後輩、白井黒子と初春飾利に絶句していた。一つ上の先輩、固法美偉に尋ねると

「昨日、幻想御手事件で大規模な戦闘があったじゃない？その際に色々無茶したみたいなのよね…」

「ああ…そういう…」

幻想御手事件。能力者のレベルを強制的に引き上げられる音声ソフトを用いて多数の昏倒者を出したこの事件は、昨日の高速道路での戦闘で首謀者も拘束され、解決となっていた。

一方、半ば書類に埋もれている2人は目に隈でもできるんじゃないかと綴が心配になる程、必死で始末書を書き上げていた。

白井に至っては、

「お姉様とのデートが…うふ、うふふ………」

などとどす黒い呪いを吐いている始末。

「これで事件なんか起きたら大変だな…」

綴は2人を横目に見ながら麦茶の入ったグラスを片手に呟いた。

———同時刻———

学園都市の喧騒から外れたスキルアウト達の溜り場、通称ストレンジ。

この地域にも彼らなりの“秩序”が存在し、彼らはそれを遵守して過ごしていた。

その中のある廃ビル。

ここはいつもならば数十人のスキルアウト達のたむろする場になっていた。

———いつもならば。

今、その空間に存在するのは“秩序”では無く一方的な“暴力”だった。

数十人のスキルアウト達が打ち棄てられたゴミのように横たわっており、その呼吸は弱々しい。

その中心にはごく普通の夏服に黒いタイ、黒髪に赤いカチューシャをした細身の少年が一人佇んでいた。

「やっぱりダメだ。コイツらじゃ…」

人を殴ったことも無いような白い拳を握りしめ、誰に言うとも無く呟くと少年はその場を後にした。

整理された街並みへ出ると、巨大なスクリーンからは最新のニュース速報が流れていた。

『一昨日、反超能力宗教の大派閥、赤石会の教祖である赤石郷蔵が家宅搜索の結果、銃刀法違反の現行犯で逮捕され…』

少年はふと足を止める。

『この赤石会は反超能力宗教の旗頭として知られており、下部組織

の瓦解が期待されています。それでは次の……』

周囲の人間はそんなニュースには目も留めない。そんなことは彼の日常には何の影響も及ぼさないからだ。

施設の映像を背景に原稿を読んでいるキャスターの機械的な口調がそれを際立たせる。

ただ一人、赤いカチューシャの少年だけが苦々しい顔でスクリーンを眺めていた。

「……………クソ野郎。この…」

e p, 2 負ける気がしない (前書き)

今回は原作からとある人物が登場します！

e p, 2 負ける気がしない

肩まで伸ばした茶髪、整った顔立ちに白いブラウスとサマーセーター、灰色のプリーツスカートを着たとある少女はイライラしていた。

夏休みだから少し足を伸ばしてまだ見ぬゲコ太グッズを探索に出かけようかと思ったら慕い方が度を超えている茶髪でツインテールの後輩に空間移動で絡み付かれ、

後輩が風紀委員に召集されたのでさあ気を取り直してと思えばいく先々にあのツンツン頭のアイツがいてまともな買い物はできない上に、

夏休みで変な方にテンションが働いてしまった不良達に1時間に3回絡まれ、

その度に電撃で追い払ったら余波を受けた警備ロボットに何回も警報を鳴らされ、

挙句の果てには同じような集団に4回目絡まれ、あまりにうんざりしたのでちよつと驚かせてやろうか、などと思った彼女は今、小さな児童公園のような場所にいた。

「この辺りなら人目も無いしな？」

「お前人目を気にするようなことする度胸あんのかよ？」

「うっせえ！やるんだよ！」

「ギャハハ!!」

あからさまに下心全開な声で10人程の不良達は笑う。

普通的女子中学生なら震え上がっている状況。

にもかかわらず彼女は平然としていた。なぜなら…

「そろそろタノシイことしようぜ…!」

バチィ!!

少年の一人が肩に手を伸ばした瞬間、彼女の髪から紫電が舞う。

「!!!」

彼らが驚くよりも早く、電撃の蛇は半数の少年の意識を奪った。

なぜなら彼女は…

学園都市に7人しか存在しないレベル5の第三位、超電磁砲の御坂美琴だからだ。

「本ッ当に面倒ねッ……!」

イライラが頂点に達している彼女は誰もいない道路側へ電撃の槍を放つ。

その威力を見た少年達は腰を抜かす予定だった。

「これで……ッ！」

しかし――

夕闇に包まれかけた公園の垣根から突如人影が現れる。

「危な――」

彼女の言葉より早く電撃は人影を直撃し、怪我人が一人増える……はずだった。

ババババツ!!

予想に反し、奇妙な音と共にその人影は電撃を四散させる。

“ 右手を突き出して”。

（アイツと…同じ力…？）

周囲の腰を抜かした不良など、目に入らない。

その人影はこちらに向かって来ると、

「あ、危ねえなこの電撃野郎！」

——美琴に絶叫した。

——数分前——

雪崎嶺次は、いつも入れている白いエクステが普段の店で品切れになり、少し遠出になるが別の店へ行こうと決意していた。

いつもならば面倒なこの道も、菖蒲に絶賛された後では足取りも軽い。

学生寮の隙間を埋めるようにポツンとある小さな公園に差し掛かると、垣根の中から少年達の笑い声が聞こえる。

最近の不良達は平和的だなー、などとのほほんとした思考で垣根の切れたところから嶺次が覗いた瞬間、

ビッシャアアアン!!!!

その思考を打ち砕くように、槍のような電撃が左側から嶺次に向かって放たれた。

「ヤ……バ……!!!!」

嶺次は反射的にガードレールを掴み、その能力でクモの巣のように拡げて放り投げ、電撃を拡散させる。

——右手で。

極細にしたガードレールは電撃を受け止めながら塵になってしまった。

つまり、残ったのは電撃の威力に恐怖しながら右手を突き出した嶺次のみ。

その光景は——

とあるツンツン頭の少年に瓜二つだった。

腰を抜かす不良達の沈黙に対し、嶺次はその口を開く。

「あ、危ねえなこの電撃野郎!!」

何故か驚きに満ちた表情をしている彼らに畳み掛ける。

「オマエらケンカにしたってもうちょっと周囲の安全考えてもらえ……?」

——様子がおかしい。

電撃を放ったはずの不良達がよく見れば震え上がっている。

そしてその中心には……

常盤台中学の制服を着た茶髪の少女が申し訳無さそうにしていた。

「……ごめんなさい!!」

全力で謝る美琴が理解できない嶺次だった。

かくかくしかじか。

美琴から説明と謝罪を受けた嶺次は周囲の少年達がなんだかかわいそうになった。

まるで貧乏クジを引いてしまったような哀愁が彼らに漂っているのも、きつと気のせいじゃ無いんだろうな……、などと若干の同情と共に公園を後にしようとする嶺次に、後ろから声が響く。

「ち……ちょっと待って!」

「……?」

嶺次としてはこれ以上アブナイ電撃姫に付き合っていたく無いのだが、美琴は唐突に、

「アンタ…アイツと同じ能力、持ってるのよね？」

「アイツ…？」

頭に？マークが浮かんでいるであろう嶺次を無視して美琴はまくしたてる。

「アンタと同じ能力のヤツにどうしても勝てないの！だから…特訓の相手になって！」

「はい……？」

しばしの沈黙。破ったのは嶺次だった。

「なんでそういう話になるの！？アレですか君は小さいことが気になって気になって仕方が無い小姑的な性格なのか！？」

「そ、そういうわけじゃ無いわよ！！」

「じゃあその理不尽な開戦通告は何なんだよ！」

「なにも戦えなんて言って無いでしょ！？」

「いいやその目は明らかに開戦を要求する獣の目だね！なんか喰い殺されそうだもん！」

「なッ……！私はそこまで野蛮じゃ無い！！」

いつのまにか口喧嘩に突入した二人は、何故か全力で決闘をするこ
とになってしまった。

——なんで俺は（私は）勝負する羽目になってるんだよ（なっ
てのよ）……

——でも…この女子中学生（普通の高校生）に負けるのはイヤだ
！！

奇妙な所だけが一致している2人は、公園から場所を移すことに。

殺気立った2人が繁華街の人ごみに入ろうとすると、人ごみの方が
2人を避けていく。そんなモーゼの海割りさながらの光景を遠巻き
に眺める黒髪の少年が一人。

彼は右腕の風紀委員の腕章を外し、2人の後方300メートル程に
張りついて密かに尾行を始める。

（彼女とデートじゃ……無いよなあ……）

そんなことは露知らず、2人はとある河川敷に到着、鉄橋の近くで
向かい合って臨戦態勢に入る。

「お前がどれ程の能力者か知らんが…とりあえず敬語は使わせてや
る！！」

「私もあそこまでコケにされたんじゃないわよ？」

——2人が構えた瞬間、

嶺次の携帯電話が鳴った。

「んだよこのタイミングで！」

呆れかけの美琴に背を向け、電話に出る嶺次。
響いた声は…

『やあ、雪崎君？』

「なあ…ッ……！？」

——紛れもない、この適当感溢れる声は…！

「夜来綴だな…！」

『大正解！というわけで、援軍に來たぜー』

「援軍？」

わけのわからない嶺次に対し、綴は近くの鉄橋から眺めていることを話し、冷静に続ける。

「お前がケンカ売ったの、誰だかわかってるのか？」

「誰って…、常盤台の世間知らずな箱入りお嬢様だろ？」

箱入りお嬢様という表現には激しい違和感を感じながら答える嶺次に、綴はため息を吐く。

『あのさ…彼女は常盤台のエース、学園都市に七人しかいないレベル5の第三位、超電磁砲の御坂美琴だぞ！』

「うそオ!!?」

大声を出した嶺次は美琴に不審がられるも、即座に平静を装って通話が続ける。

「あ…アレが!?!」

『アレが。』

「なんかの間違いって可能性は…」

『書庫^{バンク}の情報だから正確無比!』

「マジかよ……」

激しく絶望する嶺次と対照的に、美琴からは早くもバチバチといった嫌な放電音が聞こえる。

「いつまで待たせんのよ…」

「も、もう少し待ってくれ!」

彼女のイライラに慌てふためく嶺次は、綴との電話に集中を戻す。

『大丈夫じゃ無さそうだけど？』

「余裕なお前を殴りたい…、ってか冷やかに来たのかよ？」

『だから、援軍に來たって言ったじゃん？』

「援軍…？」

彼が思考して結論へ至るのに時間はかからなかった。

「演算代行…か」

『大正解ー！レベル5にレベル3が正面からぶつかって勝てる訳が無いだろ？』

「それはわかるが、なんでお前が協力してくるんだよ…」

『俺もつまらない夏休みはイヤなんだよねー』

電話越しにへらへらとしている綴の心情は読めない。それどころか裏があるのかすらわからない。探るのは得策では無いと直感した嶺次は、

「大体俺の電話番号をどうして…」

『君に携帯渡す時にちよろっとな』

先日、風紀委員としての綴に拘束された時の光景が蘇る。

「個人情報の盗用って言わないか、ソレ…」

『職権乱用とも言うな。まあそんな細かいコトより、お相手は怒ってるぞ?』

「え…?」

恐る恐る振り返ると、そこにはさつきより悪化して半ば雷神と化した美琴が腕を組んで仁王立ちしていた。

体が硬直した嶺次は俊巡する間もなく、ガチガチ歯を鳴らしながらなんとか綴に応える。

「い、いいぜ。お、俺も死ぬのはイヤだからな……」

『じゃ、行きますか!』

携帯を閉じた綴は橋の欄干にもたれかかり、祈るように、

ダイアグラム
コネクト
「演算代行…接続!」

一方、嶺次の生体電流から察知できる感情がアホらしいくらい恐怖に満ちているのを感じ取っていた美琴は、早くも萎えかけていた。

（今の電話…私の正体に関するものみたいだし、こりゃ不戦勝かな…）

この学園都市においてレベル5とは圧倒的な力の象徴だ。知らず知らずにちよっかいを出すならともかく、不良が自らの地位を向上させる為に挑もうとする相手では無い。その辺りを理解している美琴は、

「ちよっとアンタ！勝負しないなら——」

しかし、降伏を勧める言葉が最後まで発せられることは無かった。

嶺次が電話を切ると同時に。

彼の纏う空気が変わった——

そんな曖昧なものでは無く、美琴は生体電流の変化を敏感に感じ取る。

（何よコレ…、まるで2つの思考があるみたいじゃない……！）

美琴の察知した情報は間違っていないのだが、彼女に現状をすべて理解するのは不可能だった。

理解できたのは、嶺次から恐怖が消え失せたということだけ。

「どうしたのよ？急に本気になっちゃって…」

美琴の問いに答える嶺次は冷静に、

「いや、本気と言うより…負ける気がしない、かな」

「言ってくれるじゃない…！」

その言葉は彼女には宣戦布告として十分だった。

e p, 2 負ける気がしない (後書き)

次回は2人の (何故か) 決闘です！

e p, 3 受けとめてやる(前書き)

嶺次と美琴の決闘です！

ep, 3 受けとめてやる

嶺次の宣戦布告が美琴のボルテージを上げきってしまった。

彼女の“絶対負かす”という感情が具現化したように周囲には蒼白い光が舞う。

「常盤台の超電磁砲…か」

嶺次の言葉と四肢に力が籠もるのをほとんど許さない勢いで、美琴は先制を仕掛けた。

「余裕こいてんじゃ…ないわよ!!」

瞬間、雷撃の槍が音を遅らせる速さで嶺次を射抜く。文字通り、必殺の一撃。

「!!」

しかし、驚きに満ちた表情を浮かべたのは美琴の方だった。彼女が全力で放った電撃は嶺次がかざした右手の手前で弾け、彼に届くことは無かった。

「このレベルの電撃もダメか…」

一方、本当は半ばおっかなびつくりの嶺次の頭の中では、

（予備のモーションが分かりやすいな。地面の金属含有量も多いし、

防御には苦勞しないか…)

「テメエ…傍目八目って言葉のまんまだな」

といったやりとりが繰り返されていることなど彼女は知る由もない。

冷静な綴は地中の金属を電気抵抗の少ない順に抽出、網状にし、対電撃用の防壁として右手から放出した。

(さっきのレベルの電撃なら何度か防げるはずだけど――)

しかし、その言葉は美琴の周囲に漂う黒い煙のような物質に中断される。

「なに1人でブツブツ言ってるの？余裕の現れですかあ？」

「なんだよ…それ…」

嶺次の指摘に美琴は微笑みを浮かべる。その右手には黒い物質によって剣が形作られていた。

(あれは…、砂鉄のチェーンソーか…)

嶺次は彼女が振りかざした黒い剣が生い茂る雑草を何の抵抗も無く両断したのを見て驚愕しながら、

「アイツは電撃使いじゃなかったのかよ？」

(電磁石の応用だろうな。触れたら血が出るくらいじゃ済まないぞ?)

わずかな睨み合いの後、両者が動く。

「じゃあ…、制御を奪わせてもらうか！」

防壁を解除、右足を踏み込んで飛びかかる嶺次に対し、

「逃がさないわよ…！」

美琴は砂鉄の剣を横に一薙ぎする。鞭の様にしなつたと思われたソレは、空中を這う蛇の如く嶺次の四方を囲んだ。

「！！」

「躲せるもんなら…躲してみなさい！！」

美琴の言葉には自信が滲む。必殺の雷撃に対し、今度は不可避の一撃。

しかし、彼女の自信は嶺次の口元に打ち碎かれる。

———笑った？

美琴が違和感を感じた瞬間。

ピシィ、という水が凍りついたような妙な音が辺りに響く。

それは、嶺次の四肢に迫っていた砂鉄が動きを止めた音だった。そのことを美琴が理解して反応する間もなく、

バキヤアアアン！！

砂鉄の剣が無惨な音と共に碎け散る。彼女の右手に収まっていた柄までも一瞬で。

「な……ッ……？」

あまりの驚きに後退りする美琴の懷に、嶺次は隙を縫って飛び込む。

「もらった！！」

しかし、左の裏拳が美琴を捉えるよりも早く彼女は態勢を立て直して、

「このオ……！！」

前方の広範囲に額から蒼白い電流を走らせ、嶺次を飛び退かせた。

10メートル程の距離を挟んで膠着状態に入る2人。

しかし、美琴の心にはかすかな疑念が宿る。

（今…砂鉄に戻される前に変な感じが…）

瞬間、全力で突っ込んで来る嶺次に対して反応が遅れる。その疑念が初動を遅らせたのだ。

（しまった…！）

俊巡する間もなく彼女が反射的に放った雷撃の槍は――

“ 嶺次に届かない所で ” 四散した。

至近距離から放ったからこそ見えたその現象は、嶺次の間合いから飛び退きながらも彼女の中で確かなものへと変わる。

（コイツ…もしかして…？）

美琴は嶺次と再び距離を取ったことを確認すると、

「ちょっとストップ！！」

「……………？」

両手を前に突き出し、ジェスチャーで停戦の要求をした。目的はただ一つ。

「今更聞くけど…、アンタの能力って何？」

「はあ？」

質問の意図が掴めないでいる嶺次を美琴は急かす。

「い、いいから答えて!」

「...?」

こっちが怒られているみたいなのはなんでだろう、と訝しみながらも嶺次は恐る恐る口を開く。

「ヒートプレス圧力成形…、だけど?」

「……………」

その一言に美琴は顔を若干引きつらせて黙り込んでしまった。まるでイタズラが露見しかけて親に問い詰められている悪ガキの様に。

「今の質問は何なの?」

「えっとお……………」

嶺次の詰問に美琴は苦笑いと目を逸らすばかりで、尋常でない冷や汗を浮かべている。

「俺の能力に何か文句でも?」

「いやあ……………」

(言えない…、能力勘違いしてましたなんて言えない…!!)

彼女の中では素直に謝るべきだという感情と、それを認めたくないプライドがせめぎあって彼女の頭を混乱させていた。

1人悶えている美琴に触れてはいけない、という直感を抱いた嶺次はふう、とため息をついて、

「ギブアップの相談ならオーケーだけど？」

ビキリ、という音が聞こえた気がした。

嶺次からしてみれば、相手の戦いたく無いという気持ちを汲んだ我ながら思いやりのある言葉だなあと1人で感心したのだが、

（嶺次、今のはマズかったんじゃないか…？）

「ん？」

綴に促されてよく見ると、美琴は頭を抱えて妙な表情のまま固まっている。

「アンタねえ……………」

バチバチと蒼白い電撃を全身から放って。

「私が降参したがってる様に……見、え、る、か、し、ら……？」

あまりの形相に後退りしながらもなんとか、

「み、見えませ——」

言い終わるよりも、轟く音よりも速く、雷が落ちた。決して比喻などでは無く、本物の。

「だあああああ!!!!」

雷撃の余波をまともに食らった嶺次は鉄橋の支柱辺りまで、軽く30メートル程吹き飛ばされていた。

「ッ………!!」

（大丈夫かよ!?!）

「問題…ねー…よッ…」

命の危機を察知した綴が鉄橋の金属を手中に収め始めるが、

「言ってくれるじゃない…」

もはや雷神にしか見えない美琴は、スカートのポケットから月明かりに照らされて安っぽい輝きを放つコインを取り出した。

「超電磁砲^{レールガン}…、私の通り名だけど、こういうモンか知ってる?」

右手でコインを弄びながらゆっくり近づいて来る美琴に嶺次はフラ

フラと立ち上がりながら、

「原理は知らんが…、お前の必殺技だったのは解る気がするなあ…」

「じゃあ、試しに一発食らってみる？」

コインを親指に載せた右腕を真っ直ぐ嶺次へ突き出す。

（嶺次！あれを本気で食らったら…）

綴の警告に嶺次は深く息を吐いて前を見据え、

「受けとめるくらい…、できるだろ？」

真っ向勝負。嶺次は彼女の切り札を全力で防ぎ、それで引き分けとするつもりでいた。

美琴はそんな嶺次の目に僅かにたじろぐも、

「そんなに警戒しなくても大丈夫よ。ギリギリ外してあげるから…
…！」

パチッ、というかすかな音と共に美琴はコインをもう一度構える。
しかし、その音を掻き消すように鉄橋が軋んだ。

にわかに美琴の目が鉄橋へ移る。鉄橋のアーチが僅かに歪んだと思
った瞬間。

ぐにやり、と鉄橋の金属部分が熱された飴の様に音も無く融け出し、嶺次の周囲に一辺1メートル程の正六角形の鉄板となって展開された。

「それがアンタの本気ってわけね…」

10枚を軽く超える六角形の鉄板を空中に纏った嶺次は、

「…、来いよ。お前の超電磁砲、受けきってやる!」

「後悔しても知らないわよ?」

美琴の電流が激しさを増し、右手に力が籠もる。

嶺次が両手を前にかざしたのと同じ時、鉄の防壁が嶺次の前方に縦一列で展開される。

14枚の鉄板は1メートルあるかないかの間隔で重なり、嶺次と美琴の間にそびえ立つ。

しかし、防壁が展開された瞬間、美琴の指先からオレンジの閃光が噴いた。

淡い残像を残し、音速の3倍で打ち出されたコインは鉄板をいとも簡単に突き破って――

“最後の1枚を真っ赤に熱して”停止した。

美琴は、自身がどれ程の力で超電磁砲を放ったかを理解している。
だからこそ、驚愕を押さえられなかった。

「何………で………？」

今の威力で放てば、鉄骨を20本以上突き破ることも容易いはず――
だった。

しかし、鉄板は13枚しか貫かれていない。金属に何か細工をしたのか、それとも自分の力を弱めたのか。理解が追い付かない美琴は
嶺次に問いかける。

「アンタ…、何したの？」

「どうだったよ？俺の能力は」

不敵に笑う嶺次はまだ余力を残しているように見えた。

（最大限の耐熱、耐圧加工をした鉄の防壁がここまで…）

中では綴が冷や汗を浮かべていたのだが。

「これで引き分けてことにしないか？」

ハツタリを突き通したい嶺次が両手をひらひらさせて呼びかける。

美琴は何か言いたそうにしていたが、ぐっと飲み込んで、

「い、いいわよ。これ以上やっても時間のムダみたいだしね」

（ハア…、なんとかなだめられたな…）

「常磐台のお嬢様ってめんどくさい…」

2人（美琴から見れば嶺次1人）のぼやきに、

「何か言った？」

「い、いいえ！」

（油断も隙も無い…）

美琴から一刻も早く逃れたい嶺次は、

「ま、これくらいな——」

フツ、と。

月明かりが何かに遮られた。上を見た嶺次に解ったのは、

「何………!!!」

頭上5メートルに迫る無人の路線バスだった。

（マズい！！）

バスの外壁の金属を操って軌道をなんとか逸らすも、落下の衝撃に飛ばされる。

美琴の仕業では無い。彼女はこういう不意討ちはしないように感じられたし、現状に言葉を失って立ち尽くしている。混乱する頭を整理しようとするが、

「くっそ…、何だってこんな…」

「躲すとはね。あの至近距離で」

突如、鉄橋の上から声が響く。

そこには黒髪に赤いカチューシャ、細身の少年が嶺次の能力で失われた欄干のあった所に座り、こちらを見下ろしていた。

「お前がやったのか？」

睨み付ける嶺次を嘲笑うように少年は、

「強そうだな。お前ら」

月明かりの逆光で表情が読めないにも関わらず、その言葉だけで彼

の
“殺意”が2人を貫いた。

e p, 3 受けとめてやる（後書き）

次回、新キャラの情報が徐々に明らかになります！

e p, 4 私を頼りなさい!

(何なのよ…この感じ……………!)

美琴は一度も遭遇したことのない“本物”のあまりの冷酷さに、退くことも進むことも出来ずにいた。今までに美琴へ敵意を向けてきた連中や、A I M バーストの化物などとは比べものにならない“殺意”。

まして、以前本物の魔術師であるウォーカーに相對して“殺意”を向けられた嶺次でさえも、体を支配する悪寒から逃れられないでいた。

足が地面に縫い付けられている2人を見下ろしていた少年は、口元に笑みを浮かべると鉄橋から飛び降りて――

消えた。

「!?!」

突如、空中で少年の姿が音もなく消え失せる。

「空間移動した!?’
テレポート

美琴が我に帰って辺りを見回すも、少年の姿はどこにも無い。

（嶺次！！上だ！！）

超電磁砲によって打ち砕かれた防壁の細かな金属粒子。広域に撒き散らされたそれらの揺らぎを感じ取った綴が上方へ注意を向けさせる。

弾かれるように上を見上げた嶺次の目に映ったのは、

「逃がさないよ。今度は」

空中、嶺次の頭上数メートルに左踵を振り上げて迫る少年。

「ちィッ！！」

まだ生きている防壁を操り、攻撃を防ぐ鈍い金属音が響くと同時に右手を穴の開いた防壁の再構築に集中させ、人の片腕程の角柱を成形。

「正当防衛……、だろ？」

うつすら笑いながら、右手を振りかざした。

角柱は、態勢を崩し目を大きく見開く少年の脇腹へ打ち付けられ

ドガッ！！！！

「が……ッ……！？」

ゴキゴキ、と骨が軋む嫌な音が耳からでは無く体内から響いた。

何が起ったのかを思考することさえ許されず、嶺次の体がダルマ落としての駒の様に真横へ軽々と吹き飛ばされる。

「え………？」

美琴の呆然とする声が遠くに感じられる。

激痛に歪む視界が捉えたのは、脇腹に打ち付けられた鉄の角柱。

（何………だと……？）

2人のコントロールが間違っていた可能性に綴が行き着くも、即座に打ち消す。綴の能力は演算の質を高めるものであって、複雑化させるのでは無いからだ。

河川敷の草むらがクッションとなり辛うじて立ち上がる嶺次は、何事も無かったように降り立つ少年に苦悶の表情を浮かべながら、

「お前……何を………した……！」

「教える必要なんて無いよ。何も解らなくなる君には」

淡々と、残酷に。

少年は放つ言葉をも武器の如く振りかざす。

「少しは揺らぐのかな？ 君を殺せば」

その右手が嶺次へ向けられかけた瞬間、

バチィ、と鋭い音が響く。

火傷をした様に手を引っ込めた少年が視線を向けた先には、

「私の目の前でそういうこと……堂々としてんじゃないわよ！！！」

怒りに紫電を溢れさせる美琴が居た。学園都市の最高位、レベル5であることなど関係無く、彼女はそういう人間だった。

しかし――

「止め……ろ……！」

かすれる声が美琴を押し止める。嶺次の脳裏によぎる“最悪”が彼の体を無理矢理動かした。

きつと、美琴では能力が未知数のこの少年に勝てない。それどころか間違いなく殺される。殺意と敵意では殺意のワンサイドゲームになることは明らかだ。

嶺次は軋む体から絞りだす様に、

「テメエ…の、相手は…俺だ、ろ……？」

少年は、口角が釣り上がった笑みを浮かべると嶺次に手をかざし、

「気にするなよ？彼女も死ぬけど」

少年の両手が蜃気楼の如く歪む。

テレグラム
アーキテクト
「遠隔存在・成形……！！」

（ヤバイ………！！）

言葉と同時に陽炎のようなディスク状の歪みを纏う両手は嶺次へ迫る。一層濃さを増した殺意に、嶺次は半ば反射的に防壁を展開し、壁を作り上げる。

しかし、防壁に両手の歪みが触れた瞬間――

バツン……！！

空間を無理矢理引き裂く妙な音と共に、鉄の防壁が丸く削り取られる。意味を為さない防壁を前に、少年は

「防げないよ。そんな壁じゃ」

携える“歪み”を刃の様に細く、長く。
迫るソレは命を刈り取る死神の鎌の様で――

刹那、雷撃が少年を襲った。

「……！」

閃光に目を覆いながら、薙払う様に電撃を削る。

しかし、視界を取り戻した先に嶺次はおらず、20メートル程先に
首根っこを掴まれて美琴に引きずられた嶺次がいた。

「アンタねえ………」

一呼吸置いて、

「バツツカじゃないの!？」

「ッ!？」

ものすごい剣幕で怒鳴りつける美琴に硬直している嶺次。美琴からは怒りというより、何もできなかった淋しさが感じられた。

「全く……、1人じゃ勝てないとか思ってたなら、少しは私を…、
御坂美琴を頼りなさい!」

常磐台の超電磁砲としてでは無く、1人の人間として。

先の覚悟がただの独りよがりだったことを悟った嶺次は美琴を見上げて苦笑いを浮かべながら、

「御坂美琴…、か。悪かったな」

ゆっくり迫り来る少年を真っ直ぐ見据えて美琴は応じる。

「謝罪はいいわよ。今はアイツをどうにかしないと…！」

少年は不敵に笑う。

「一緒に所に送れるかは解らないよ？一緒に殺しても」

「なんとかしてアイツを撒かないとな…」

少年の能力が空間移動の系統であることは類推できたが、未だ不明のまま。身構える嶺次に綴は唐突に、

（嶺次、超電磁砲に頼んで欲しい事があるんだけど…）

「……………？そんなこと頼んでどうすんだよ…」

（ちょっと思いついたんだけどさ…）

綴は策を打ち明ける。

「……、なるほどな。それなら……」

「アンタ、さっきから1人で何ブツブツ言ってるの？」

綴と会話する嶺次は独り言をひたすら呟いている様に見える、隣の美琴からすればちょっと危ない高校生だった。

「ああいや、後で説明するわ。それより、頼みがあるんだが…」

「頼み…?」

「ああ。御坂、水を空中に発生させてくれるか?」

キョトンとした表情を浮かべる美琴。確かに美琴程の電撃使いならば、大気中の水分子を操って水塊を発生させることもできる。

「え?...、いいけど、それで何するの?」

膝について立ち上がりながら嶺次は、

「俺の能力を使ってな……」

「なるほどね。それなら……」

「済んだかい? 遺言は」

濃い蜃気楼と殺気を纏って、2人の前に少年は立ちはだかる。その手が振るわれた瞬間、

ズドン、と。

音さえ遅らせる雷撃が少年の周囲4方向に穿たれた。

しかし、少年の纏う歪みは美琴の雷撃を削るかのように掻き消す。

「面倒だな…せっかく殺しかけてたのに」

間髪を入れず、嶺次が操る鉄の六角柱が砲弾の如きスピードで周囲の地面に突き刺さり、巻き上げた土煙は辺りを覆い隠す。

「……思ってるのか？こんな物が時間稼ぎになると」

しかし、何食わぬ顔で土煙から抜け出た少年が目にしたのは――

「……………？」

空中に浮かぶ、整えられたダイヤモンドの様な形状の無数の水塊。1つの大きさは大人1人程だが、それらが月明かりを反射して奇妙な光を放っている。

水塊達の壁の向こう側には2人が佇んでいた。そして嶺次の手には、彼の頭と同じ程度の大きさがある、鈍く輝く正八面体が浮かんでいた。

「なあ少年、ルビジウムとセシウムって知ってるか？」

「……………」

嶺次の質問に構わず、少年は水塊達の中へ歩を進める。

「聞き覚え無いよな…、普通の土壌にも微量に含まれている金属なものだけ…」

嶺次の口元に浮かんだ笑みが何を意味するか。それを悟った少年は身構えるが、嶺次が手を振り上げた瞬間。

「水と爆発的に反応するんだよなー」

銀色の塊は四散し、水塊に突っ込んだ。

「これは……………!!!」

少年が思考する間もなく、閃光が走った。

1つの水塊が爆発すると、衝撃を受けた隣の水塊が爆発する。連鎖が連鎖を呼んで純白の光は広がり、少年の周囲30メートルを太陽の如く照らす。目も眩むような閃光に、思わず苦悶する少年。

「く……………あ……………ッッ！」

視界を奪われた少年は、歪みを纏い全てを“削る”その手をあらぬ方向へ振り回す。

「く……………そ……………おあ!!!!」

何分が経過したか解らない。

実際の時間よりも遙かに長く感じた閃光が収まり、やっと視界を取り戻した少年が見たのは、誰もいない河川敷と、自らを取り巻くようにめくられた地面。水塊の配置、起爆のタイミング、威力。すべてにおいて、“手加減”をされていた。

その事実を理解した少年があげた怒りの咆哮は、嶺次と美琴にはもう届かなかった。

e p, 4 私を頼りなさい! (後書き)

いかがでしたか？

ご感想、お待ちしておりますー

行間 もう一つの案件（前書き）

今回は行間です！

行間 もう一つの案件

——同時刻——

ロンドン、とある教会の地下。

クセの無い黒髪に縁の薄い眼鏡を掛けた青年と、所々にハネがある白髪の少年の2人は黒いローブをたなびかせ、地下へと続く階段を下っていた。

狭い螺旋階段はランプの灯りに照らされて妖しい光を放ち、2人の足音が石壁に反響している。

白髪の少年は面倒そうに両手を伸ばしながら、

「先輩ー、ここにエレベーター導入する予定ってありませんでしたっけ？」

「文句を言うな。というか、この防護術式の塊のような一室に近代技術を導入できるわけが無いだろ……」

そんな…、とため息混じりに呟く少年。眼鏡を掛けなおし、青年は「もう到着だ。この程度ならほとんど問題無いだろうに……」

階段を下り終えた2人の目の前には古めかしい木製の大扉がそびえていた。ゴテゴテした装飾は無いものの、歴史を感じさせる扉。青年の声が扉へ向かって放たれる。

「テオレルド・ミラー並びにランサー・J・グレイス、只今帰還した」

ゴウン、という重厚な音を鳴らして扉がひとりでに開く。

開け放たれた扉の先には、ゴシック建築を象徴する様な装飾を施された柱が立ち並ぶ回廊。体育館程もあるその空間を数人が忙しなく行き交う。

幾つかある小さな扉の1つをノックもせず開く2人。その扉にはこう記されていた。

エグゼキューター
“執行人・実務管理官室”、と。

エグゼキューター
執行人。ネセサリーウスイギリス清教、必要悪の教会でも一部の人間しか知らないこの組織は特定の人物の社会的、あるいは生命的な“抹殺”を主な任務とする部署であり、その本部がここ、とある教会の地下に存在している。

扉の中には小さめの会議室程の空間。地下なのに何故か大きな天窓や出窓があり、明らかに蛍光灯では無い光が揺らぎながら差し込んでいた。

部屋には3つのソファがテーブルを囲むように配置されており、その奥には無駄に高価そうな木製のワークデスク、もとい書類の山がうずたかく積みまれていた。そして、

「うー…」

書類の山に隠れて見えないが、微かな呻き声が聞こえる。
白髪の少年はハア、とため息を吐いて、

「ハイゼ管理官…、またですか……」

「あー、テオとランか？」

管理官と呼ばれた30歳程の男性は2メートルに届きそうな長身に、棒つきのキャンディを煙草の様に口元にくわえて書類の陰から現れた。

ハイゼ・ヴィレクティム。

執行人の核である実務部隊を管理する立場にある彼は上司と呼ぶには余りに不恰好で、身につけている黒いスーツにはパリッとした雰囲気は一切無く、ほつれが目立つ。

その深緑に近い髪は天然のパーマなのかボサボサになっていて、眠たそうな目が髪の間から覗いている。

「管理官なんですからもう少し、仕事しっかりしてくださいよ…」

「俺はこんなことやりたくて昇進したんじゃないってのに…」

ランサーの忠告にバツが悪そうに頭を掻くハイゼ。

舐め終わった飴の棒をゴミ箱へ放り投げ、次の飴を取出しかけた瞬間――

「失礼します。管理官、報告書のチェックは進んでいるのですか？」

扉を開け放ち、1人の女性が現れた。

「げっ…ロザリィ…！」

後ろで束ねられた長めの黒髪に細いシルエットの灰色のスーツとパ
ンツ、足元にはヒール。教会よりオフィス街の方がふさわしいので
はないかと思う程の雰囲気を纏った彼女はハイゼを睨み付け、

「管理官……？」

何をしているんだこの馬鹿上司、というオーラを発しながらハイゼ
に歩み寄る。

彼女はロザリィ・マリノ。
執行人の副管理官である。

ロザリィは2人に会釈をしてその冷淡な目を手元のクリップボード
に向けると、

「ハイゼ管理官、この書類は何時までに完成させるべきだかご存じ
ですよね……？」

「え、えと……、明日まで？」

ビキリ、と。

ロザリィの額に青筋が浮かんできたかと思うと、部屋の温度が急降下す
る。

「管理官……」

一般的な人間が今の彼女を見た場合、抱く感想は一つに集約されるだろう。

“雪女”に。

うつむく彼女の周囲には既に雪の欠片が舞い始めている状況にも関わらず、テオレルドとランサーは冷静に物陰に退避していた。

「また始まったっスよ……」

「だが、管理官にはこれくらいでいいだろう……」

「そのテオ！ラン！何言ってるんだこの薄情者……！」

ハイゼが半泣きで助けを求めるも、いい年してなんて顔してんだという呆れ顔で出て来ない2人。

「管理官は自らの立場を……」

もうほとんど吹雪に近い室内で、ロザリイは冷たく告げる。

「わきまえてください……」

「ロ、ロザ……！！！」

ハイゼが弁解する間も与えられず、ビュゴォ！！！！という風切り音と共に吹雪が部屋を真っ白に覆った。

――数分後――

「…………で、ウォーカーはあっさり崩壊したわけね…」

ロザリィ作の氷の椅子に縛り付けられながら書類と格闘するハイゼは、テオレルドとランサーの学園都市での報告に耳を傾けていた。

「はい。彼の残骸の中に核となる術式の痕跡を確認した為、ウォーカーの抹消は確かな事実です」

「ま、ごくろうさまだな」

普通に部下の報告を淡々と聞いているハイゼ。しかし…

「…………？、何かあったんスカ？管理官、何か辛そうっス」

何も表には出していない筈なのに、自分の心を見透かしたような言葉の口にしたランサー。ピタリ、と書類に判を押す手が止まる。

「ハア……、お前に嘘はつけねえな…」

“嘘”。……その一言には不吉な響きが多大に含まれていた。

ハイゼの代わりに、視線を交わしたロザリィがその口を開く。

「ウォーカーの案件と同時期に、日本でもう1つの案件が発生しまして…」

「もう1つの…、っスか？」

ええ、と彼女は頷いて、

「日本のとある魔術結社が“原石”を保有していたことが明らかになったんです」

「……………!!!」

——現代の魔術師にとって、“原石”は常識を超越した存在を創る最有力候補の1つだった。保有しただけで十字教を敵に回す程に驚きを隠せない2人に、表情が真剣な物になったハイゼが続ける。

「まあ、その案件にはミレイナに行ってもらったんだけどね…」

「けど…？」

口をつぐむハイゼに代わってロザリィが、

「結社の施設に向かったミレイナとの定時連絡が……、先程から途絶えています」

「…………ツ…」

定時連絡の途絶が何を意味するか。少なくとも人殺しの集団である彼らには解っていた。

しかし、執行人の立ち位置は普通にイメージされるマフィアの手下

の様な暗殺者の集団とは微妙に異なる。

彼らの目的に存在する理念は、テロから戦争まで、あらゆる騒乱を
“最小限の被害で” 食い止めること。

その手段として人殺しがあるだけの話だった。

「ミレイナなら大丈夫だろうが、現地の警察が介入しちゃったのが
事を面倒にしてるんだよね…」

ハイゼの声に溢れていたのは部下への信頼と少しの希望。そして――

人殺しが何を心配しているんだという自嘲だった。

「なら、自分達が向かうべきだったのでは？」

「いや、お前達じゃダメだったんだ」

テオレルドがハイゼに詰め寄るも、揺るがぬ口調で彼は答える。

「その原石ってのが問題でな。結社の協力者だったんだよ…」

「問題？…、俺達の灰燼グレイ・アーチャーの射手でもっスか？」

ふう、と目を上げてハイゼは、

「灰燼の射手“だから”だ」

聖人級の魔術である灰燼の射手の能力。全てを灰に帰し、突き崩す
力はハイゼも正しく認識している。だからこそ、2人にはその意味
が解らなかった。

「だから” ってどういう…?」

「協力者である原石の能力はな……、全てを“跳ね返す”力なんだよ」

彼自身も信じたくない、といった表情で。しかし、ランサーはほとんど反射的に食ってかかる。

「それはおかしいっすよ!! だって…、そんな能力って…」

「そう。そんな能力は1人しかない。学園都市第1位の^{アクセラレータ}の一方通行だけだ」

でも、と前置きしてハイゼは、

「彼が、先行したローマ正教の騎士団の攻撃を全て跳ね返して壊滅させたのは、紛れもない事実だ…」

「そ、その少年は今…?」

ハイゼは書類の山から1枚の履歴書のようなものを探り出すとテオレルドに渡した。

「その報告書の通り、行方不明だよ…」

「^{あかし}赤石…… ^{かぜはや}風早…」

ローマ正教の印の下に記されていたのは監視カメラを睨み付ける赤いカチューシャの少年の写真。

その目には2人ですら得体の知れない光が宿っていた。

行間 もう一つの案件（後書き）

次回から本編に戻ります！

e p, 5 簡単じゃないか (前書き)

e p, 5 簡単じゃないか

彼は苛立っていた。

髪をまとめる赤いカチューシャが真夏の日差しを映すように鈍く輝き、雑踏の中でも異彩を放つ少年は。

（揺らいだのに……アイツらなら！）

昨晚逃がした電撃使いと金属使いの2人組。

彼らに比べれば、少年の周囲の雑踏の人々は雑魚と呼ぶのもおこがましい程だと彼は力の差を感じていた。

彼は思考する。

（間違いなく引きずりだすには……あのレベルを）

そして、あっさりと自問自答は終わる。

「簡単じゃないか……」

最も単純に、そして最も暴力的に。

(コワセバ……イインダ!)

少年の口元が歪む。

それと同時。

学生が集中する繁華街、近くの交差点を走る大量の車達があり得ない軌道を描いた。

バスはアスファルトに垂直に突き刺さり、自動車の雨が人々へ降り注ぐ。

響く悲鳴と爆音は、開戦のファンファーレだった。

「出てくるよな……あいつも!」

怒号が行き交い、血の匂いにする交差点に少年は陽炎の如く揺らめいていた。

——1時間後——

とある高校所属の警備員^{アンチスキル}、黄泉川愛穂^{よみかわ あいほ}は詰め所に鳴り続く警報に手を焼いていた。

「ああ、そうだ！第8学区の件は才郷達が向かっているはずじゃない！って何？今度は第11学区？警戒レベルはどうなってるじゃない！」

先程から断続的に、空間移動系統の能力者によると思われる建築物の損壊事件、及びに拘束しようとした風紀委員への傷害、それも命に関わりそうな重傷を負わせる事件があちこちの学区で断続的に発生しており、幻想御手事件^{レベルアップ！}の戦闘で負傷した彼女は実戦ではなく、詰め所同士の連絡に駆り出されていた。

（現場に行けないのは歯痒いじゃん……！）

嘆くことすら許さず、警報用の無線が鳴った。

『黄泉川さん、宮瀬^{みやせ}です！そちらで犯人と思われる少年のID照合が行えますか？』

「ああ、認証システムの使用許可は取得済みじゃんよ！！」

転送されてきた監視カメラの画像に写る赤いカチューシャの少年。

若干ぼやけている画像をシステムに入力し、検索を学園都市の学生に掛けた。画像検索なら骨格、目や鼻の位置などから一発で本人の認証が行える。しかし――

（どう……いう……？）

検索結果、適合者0。

端末の画面に表示される文章が信じられない黄泉川に現実^{リアル}は追い打ちをかける。

画像が転送された被害現状は虫食いの様に車やビルの壁が削り取られ、それが明らかに超能力によるものであることを裏付けていた。

書庫のデータに無い。すなわち、学園都市のものでない超能力者の存在。

（そんなものが……）

呆然とする黄泉川を、さらなる被害報告が急かした。

——同時刻——

連続して起こる傷害、損壊事件の巡回に召集された風紀委員^{ジャッジメント}、夜来綴と固法^{やらいつづり} 美偉^{このりみい}の前には、信じられない光景が広がっていた。

「これは何なのよ……!」

夏休み、第8学区の商業施設が集中する繁華街にも関わらず不気味に静まり返った街並み。普段ならそこにたむろし、賑わせている学生達がいらない。

いや、——正確に言えば“人は”いた。

「揺らぐかな…、学園都市もこれだけやれば」

血を流し、倒れ伏す風紀委員の学生達や警備員の装備をした大人。それを取り巻くビル群は刃物で丸く抉られたように所々が消え失せていた。

そしてその中央には——

「彼が……？」

「容疑者の画像と一致しますね…」

まるで弱者の上に君臨する暴君のように、赤いカチューシャの少年は真夏の陽炎を纏って佇んでいた。

2人は警備員への連絡を終え、彼女の透視能力でビル陰から少年の様子を伺っていた。

「能力が空間移動の系統である以上、手をこまねいているわけにはいかないわね……」

「俺が行きますか……！」

夜来綴の能力。自らが演算代行ダイアグラムと呼ぶそれは、検査では転話能力テレパシーに分類されている。

本来ならば自らと相手の思考を繋ぐ能力である転話能力とは違い、“対話すること無く”開発を受けた人間を昏倒させる力として風紀委員では理解をされていた。

——つまり、超能力者に対する一方的な切り札として。ジョーカー

「わかったわ。…気を付けてね」

真剣な眼差しの固法に綴は一瞬だけ目を丸くすると、

「先輩に言って貰えると嬉しいっすねー」

「…………ハア」

どうして彼はいつもこうなんだろう、とため息混じりの彼女に笑いかける綴は、

「俺の体、頼みますよ…」

深い息を吐いた瞬間。

綴の雰囲気が変わった。

ダイアグラム
コネクト
「演算代行・
接続…………！」

腰を下ろして壁に背を預ける綴の意識が消え、糸の切れた人形のよう
に崩れ落ちる。

それが能力発動のサインであることを知っている固法は少年を再び
伺うが、その違和感に気付く。

「おかしい…………いつもならすぐに…」

その場で昏倒するどころか、こめかみの辺りに手を当てているだけ

の少年。幾度か綴の能力を目の当たりにしている彼女には、現状が理解できなかった。

しかし、彼女の思考が追い付くより早く異変は起きた。

ぐるり。

少年の視線が突如真後ろのビル陰にいるはずの固法の姿を捉え――

「……………ッ!？」

彼女がその殺意にたじろぐのと同時に、綴が意識を取り戻して叫ぶ。

「!?!?……、コネク接続できない!!」

“接続できない”。それが何を意味するかを正確に理解している綴は動揺を隠せず、流れる嫌な汗を拭おうとしなかった。

綴の力は能力者に対する一方的なものである。ポーカーにおけるジョーカーのように。しかし、その例外が2つ存在していることを昨晩の御坂美琴との戦闘後に彼は嶺次に明かした。

1つは、相手が精神干渉に対する防壁を掛けられる能力者である場合。だが、綴は本能的にもう一つの例外であることを確信した。

それは、対象が“綴を上回る演算能力”を有している場合。つまり

「アイツ……まさかレベル5なのか!？」

「何ですっ——」

しかし、彼女の驚嘆の言葉は壁を越えて響く声に掻き消される。

「うるさいのお前だよな?……さっきから」

バツン、という布を力づくで引き裂くような音が壁を削り取り、少年が2人の前に姿を現した。

ゾグン、と。背筋に走る悪寒は、一瞬で2人の動きを奪うのに十分で、少年が口元に浮かべた歪んだ笑みが2人にはスローモーションのようにくつきり焼き付いた。

(ま、ず……!!)

硬直する2人を前に、ただヒュン、と少年は陽炎に揺らめく右手を振り上げた。

それだけだった。

刹那、見えない牙で噛み切られたように2人がいた空間が消え失せ

る。

固法を無理やり引っ張ってなんとか回避させた綴だが、続け様に横薙ぎにされた陽炎が彼を掠めた。

袖口が欠けた制服に苦笑いしながら綴は、

「なんでこっちの場所が解った？」

少年の表情に揺らぎは無い。

「響くんだよ……！！お前の声が！」

（交渉の余地無し、かよ……）

綴の小さな舌打ちは少年に届かない。隣の固法に片目を閉じて目配せをすると、

「一旦退きますよ……！」

固法と共に路地裏へ駆け出す。物陰に巧みに入り込み、陽炎を躲した2人はビルとビルの間へと消えた。

——自分達の居場所をつかませず、遮蔽物に紛れて奇襲を伺うのは空間移動の能力者に最善の策と言えた。

しかし、赤いカチューシャの少年は路地裏に入り込んで姿の見えなはずの2人の方を睨むと、冷たく、小さく、呟いた。

「遠隔存在………結合」
テレグラム ユナイト

それと同時。

路地裏の大きなダストボックスの陰で背中合わせに前後へ目線に向け、奇襲を構える2人の頭上に陽炎のような揺らぎが音も無く円形に広がり――

ガズン！！と、鈍い音が綴の右隣、固法の方から響いた。

振り返る綴の目に映るのは崩れ落ちていく彼女と、その背後に無言で立ちはだかる少年。

「……………！」

言葉を発する必要など無い。

仲間を傷つけられたこと、それを理解できれば十分だった。

半ば反射的に殴りかかる綴は相手が空間移動の能力者であることなど関係なく、その拳を静かに、しかし怒りに任せて振りかざす。

それでも、少年は意に介さず呟く。

本当に冷たく、平坦に。

「紛い物ごときが……、俺に……」

その言葉が言い終わるより早く綴の拳が突き刺さる。ただし、

「が………ッ？」

ただし、少年ではなく綴の側頭部に。真っ直ぐ放ったはずの拳はなぜか綴の右隣に現れ、そのこめかみを正確に打ち抜いた。拳の軌道すら捉えられないほど明滅する視界と左の腕を擦り剥く感覚が思考を削ぐ。

（昨晚と同じか……！でも……）

「おかしいか？ 攻撃のベクトルが消えていないのがそんなに」

「な……！？」

子供におもちゃの説明書を読み上げるように、丁寧な少年は続ける。

「消えるよな？ 普通の空間移動テレポートなら物体の持つベクトルなんて」

そう。綴が引っ掛かっていたのはその一点だった。

普通、空間移動の能力に慣性の法則は適応しない。座標から座標へ、点と点へ飛ぶ攻撃ではそんなものは発生しない。しかし、少年は違う。昨晚の六角柱も今の拳も、物体のベクトルを保持したまま転移させたのだ。

「教えてほしいね……その能力……！」

片膝をつき、苦々しく笑いかける綴に少年はためらわない。

「どうせ勝てないから。黙ってろよ……！」

彼は空を切って右手を裏拳気味に薙ぐが、後頭部、鳩尾と急所を寸分の狂いなく走る鋭い痛みが綴の思考を断ち切った。

「あ………ぐっ!？」

(これって……まさか……?)

僅かに響く少年の言葉を残して、意識は闇へ沈む。

「どこだ……! レベル5……!」

e p, 5 簡単じゃないか（後書き）

次回、嶺次&綴 V S 風早になります！！

e p, 6 100点満点だ! (前書き)

遂に風早と激突します!

e p, 6 100点満点だ!

「ツイてない……」

雪崎嶺次は炎天下の公園でうずくまり、呻いていた。

昨晚、少年から逃げ仰せた後も御坂美琴にしつこく詰め寄られ、自宅に戻ったのは深夜になってしまい、そのまま疲れに倒れ伏した嶺次を待ち受けていたのは、

補習開始、9時30分に対し、
起床時間、11時という現実だった。

補習担当、あおだてあやめ青館菖蒲に拷問されに行くべきか、現実逃避して先延ばしするべきかという究極の二択を前に、嶺次が採った選択肢は現実逃避だった。

「はぁ……」

あまりに深いため息を纏う嶺次には、公園の鳩すら寄り付かない。

千円札を飲み込んだ自販機を恨めしげに仰ぎ、能力でバラしてやろうか、などといった思考に走りかけた瞬間、携帯がシンプルな着信音を鳴らした。

(……………?)

表示されていた番号は夜来綴のもの。怪訝な目で画面を眺めた嶺次は一瞬迷ったが、携帯を耳に当てる。

「今度は何なんだよ……?」

——反応が無い。

「おい、夜来?」

集中して耳を傾けると、微かに声がする。

『……逃げ……ろ……』

「あ?……何?」

『逃げ……ろ……!』

「!?!」

綴が負傷した状態で辛うじて発したその声に普段の雰囲気は一切無く、嶺次にも彼に何らかの事態が生じていることを察知させるのに十分だった。

「……何があったんだ」

『昨日の、少年、がお前を狙っ、ている……!』

息の切り方がおかしい喋り方をする綴。

「アイツが……?」

『ああ、ヤツは単純に、レベル5、………を探している…!』

徐々に口調が苦しげになっていく綴の表情が苦悶に歪んでいることが、電話越しでも明らかに想像できる。それと同時に、嶺次は自身に沸き上がる感情を自覚し始めていた。

「じゃあお前はあの少年に……?」

『俺のこと、は、い…いから…ッ…』

綴の声が更に弱々しくなっていく。

「今…どこにいる」

『いいから、逃げ……ッ! お前、は今レ…ベル3、なんだ…ろ?』

綴は風紀委員として、体から絞りだすように懇願する。その言葉を聞いてなお、いや、聞いたからこそ嶺次は叫ぶ。

「いいわけ無いだろ…!!」

『な……っ?』

嶺次は立ち上がる。その目に迷いは無い。

「悪いが…俺はお前がやられて黙っていられる程、大人じゃないん

だ。たとえ……役立たずでもな！」

『!?!』

予想外の言葉に絶句する綴に嶺次はまくしたてる。

「今どこにいる？病院か？」

『……………』

沈黙する綴。

（ここに来させる訳には……………！）

電話を切ろうとした瞬間、綴の携帯越しに正午を告げる聞き覚えのあるチャイムが響いた。

「第8学区の…時計台だな！」

『しまっ……………！』

それを最後に、綴からの電話は途絶えた。

「バカ野郎……………！」

口の中で小さく呟いて嶺次は駆け出す。

繁華街の中に埋もれるようにある角柱型の時計台の下に傷だらけで寄りかかる綴の耳には、嶺次の言葉がいつまでも残っていた。

「大人、か……」

彼は自嘲するような笑みをひっそりと浮かべた。

この一帯を封鎖でもない限り、嶺次はここに来てしまう。それは綴にとって望まない展開の1つだった。虫食いのように外壁が削られている警備員の車両の中、通報端末に向かって軋む体を引きずりながら歩きます。

だが、

「まだ動けるんだ……、お前」

「……………ッ!!」

背筋が凍る。ジリジリと照らす太陽を無視して、冷や汗が吹き出す。

綴の背後、虚無の空間から少年は現れた。

彼はただただ、静かに笑う。喜びを抑えきれないかのように、口元に手をあてて。

振り返った綴は――

――同時刻――

嶺次は第8学区の時計台に向かって真夏の学園都市を走り抜けていた。しかし、

（人影が少なすぎる…？）

抱いた疑問は角を曲がった先の光景に掻き消される。

「……………！！！」

戦場。その現実を知らない嶺次にも、目の前の光景を表す言葉がそれ以外に見つからなかった。

警備員の車両は丸く削り取られ、意識のある人間は1人もいない。超能力の痕跡を残す風紀委員も無力に倒れ伏し、腕章が足元に転がっていた。

あまりに凄惨な光景に戦慄するが、時計台はもう見えている。嶺次は味わう無力感に歯噛みしながらも時計台にたどり着いて、

——嶺次の理性より奥深く、本能が訴えた。“逃げろ”と。それほどに少年は得体の知れない何かを纏っていた。

時計台の下には、ピクリとも動かず、生きているかすら疑わしい綴とそれをつまらない目で見下ろす少年がいた。しかし、嶺次に気付いた少年は口角の釣り上がった笑みを向けて叫ぶ。

「……………、来た！」

その目が妖しく輝いていく。

「来た来た来た！！！！俺に殺されにさあ！！！」

周囲の惨状にも、足元の綴にも興味は無い、と叫ぶ少年に嶺次の頭が本能すら無視して瞬間的に沸騰する。

「————ッ！！！」

言葉はいらない。飛びかかるように全力で駆け出すと公園の金属製の車止めを右手で掴み、一瞬で鏢のない日本刀の形状に変化させる。

そこにためらいは無い。振り下ろせば華奢な少年など真っ二つにになってしまうであろう刃を携え、間合いを詰めて、

（迂闊に攻撃をするな！！）

「！！！！」

突如、嶺次の頭に声が響く。その鬼気迫る口調に彼の動きが止まる。

「止めるんじゃないよ！ここまで来て！！」

いきり立つ少年の拳に突き飛ばされながらも、その声に嶺次は覚えがあった。もとより、頭に直接響く声の持ち主など1人しか知らない。

「まさか……綴！？大丈夫なのか？」

その声はため息混じりに告げる。

（ああ、俺だよ。ちょっと無茶したけどな）

「無茶……？」

少年に注意を払いながら嶺次は問いかける。

（俺の演算代行は思考を繋ぐというより、幽体離脱に近いんだ。今、ダイアグラム体の方は仮死状態になってる。倒れてる風紀委員に接続して、思考を保ってたわけ。そのまま、嶺次の頭に接続したんだよ…）

綴は簡単に言うが、一步間違えば体と思考が切り離されていたかもしれない危険な手段であることに違いは無い。

「無茶苦茶だな。お前」

（退去勧告が出てる中を逆走して、無防備にアイツに斬りかかった嶺次に言われたくないな…）

本気で飛びかかったことを若干後悔する嶺次に綴は続ける。

（ま、ここまで来ちまったなら仕方ないか。アイツ、止めるんだろ？）

「なんか、来て欲しくなかったみたいだな…」

（話の腰を折るな。アイツの能力が解ったんだから）

「アイツの……？」

頭の中に響く声は確かな口調で、

（ああ。不可解な空間移動の理由も、これなら説明がつく。ヤツは…）

「——！！！」

しかし、告げられた能力に嶺次が愕然とする間も与えず、少年の纏う歪みが襲いかかる。

「うるさいよ…ゴチャゴチャと！」

少年が手を振りかざした瞬間のバツン、という妙な音にその確信を得た嶺次は少年から距離を取りつつ、言葉を紡ぐ。

「…………、接続」

「——あん？」

少年の動きがピタリと止まる。

「お前の能力は…空間と空間を繋ぐ、ワームホールを作り出す物だろ？ それもただ繋ぐものと、物質を削り取るものの2種類を」

だから、と言いかけて嶺次は凍りついた。

——笑っていた。

少年は歓喜を隠そうともせず、天を仰ぐように叫ぶ。

「大正解だ！！お前え！！」

「——ッ？」

驚くどころか予想外の反応にたじろぐ嶺次を無視して少年は歌うように続ける。

「やっぱりお前みたいなヤツをおびき出して正解だなあ！空間同士
の接続、結合とワームホールユニタイトを動かす形成アーキテクトが俺の能力…、遠隔存在テレグラム
だ。お前は100点満点だよ！！……、だから、」

口元の笑みをさらに釣り上げて、

「殺す！！お前は！！」

「な——」

言葉より速く、少年が歪みの中へ飛び込む。

（こういう場合は決まって…！）

ガキィ！！と嶺次が背後に担ぐように構えた鉄刀の背が鈍い音を立てる。

「へえ……！！」

背後からの急襲を防がれた少年はほんの少し意外な表情を見せると

再び虚空へ消え失せ、時計台の上に現れた。

（まずいな…、アイツを本気にしてしまったか…）

「まずいな、じゃねえよ…！」

手持ちの鉄刀を変形させながら、嶺次は焦っていた。能力を突き止められたことで少しでも動揺すればその隙を突く。慢心していれば対処法もあった。しかし、少年は動揺も慢心も一切せずに襲い来る。

「いいぜ…！」

敵意の塊のような言葉を吐き出す少年を前に、策と呼べるものは無かった。

（次が来る…！）

嶺次には手元の薙刀がひどく頼りなく見えた。そんな様子に構わず、少年は叫ぶ。

「来ないのかよ…、反撃は…！」

その言葉に応じるようなタイミングで、少年が座す時計台の周囲のビル陰から無数の駆動鎧が現れた。
パワードスーツ

(な……………!?)

1機や2機ではない。数十はあろうかという白い鎧が隊列を成し、高速で時計台を包囲する。

動作の遅い作業用などとは真逆、細身で両足が極端に太いシルエットの駆動鎧が信じられないスピードで。そしてその手には、口径が5センチ程の灰色の――

『あかしかぜはや赤石風早……、我々と来て貰おうか』

スピーカーから響く平坦な声。数十の銃口が取り囲む中で、少年は悠然と、欠伸を1つしたただけだった。

e p, 7 つまりお前は

異様な光景だった。

普段ならカップルの待ち合わせにしか使い道のないような時計台の周囲を囲んでいるのは、残骸と成り果て、辛うじてその輪郭を留めている白く細い、高速移動用駆動鎧。^{パワードスーツ}

鉄刀を鋼の楯にして流れ弾から身を守っていた嶺次は、時計台に佇む少年が何をしたのかを頭では理解できても、その恐怖を隠せなかった。

理屈は単純。駆動鎧を挑発した少年に向かって放たれた榴弾砲は空間接続によって1つ残らず持ち主に牙を剥き、駆動鎧もろとも周囲を焼き払ったのだ。いくら駆動鎧とはいえ、装甲の薄いこの機種はゼロ距離から榴弾を受けて無惨に砕け、中からは赤黒い何かが流れだしていた。

その行為自体ではなく、顔色1つ変えず中に人がいる駆動鎧を焼き払ったことに2人は寒気を覚えた。

「邪魔するんじゃないよ…、つまらない…」

「く……………」

防壁を薙刀に成形し直し、再び少年に刃を向けるが、その切っ先は本人も気付かない程微かに震えていた。

「何でだ…赤石風早！」

「あ？」

自らの名を呼ばれたことで表情に怪訝の色が混じるが、

「ああ、呼んでいたな。駆動鎧の連中」

と1人納得して嶺次を見下ろす口元には、再び薄い笑みが。

「お前は何で…、何でこんな簡単に殺意を振り撒ける…？」

ギリギリと奥歯を噛み締め、風早に問いかける。

「代償だ…、俺の安息を奪った」

意外にも質問に応じた風早に面食らいながら嶺次は、

「代償だと？」

「そうだ。エセ宗教やってな、俺の親父は。ポリシーだったんだよ…、学園都市の超能力はイカれてるってのが」

だが、と前置きをして、風早は一段と口角を釣り上げ、思い出し笑いでもするように叫ぶ。

「そこに生まれてしまった！最強の原石たるこの俺が！」

「原石…！！」

眼前の少年の正体に驚愕する嶺次に風早はまくしたてる。

「想像つくか？他の連中に俺が何て呼ばれてたか」

質問の意味を嶺次が理解できない内に、風早は告げる。

「須佐能乎様、だぜ？」

日本神話において、その粗暴な行いで世界を蹂躪した存在を自らの代名詞とする行為。それが意味するのは結局、風早への畏怖と崇拝だった。

周囲から神格化される原石。先日のレポートの内容が浮かんでくるが、目の前の華奢な少年はそれと全く同じ扱いを受けていたのだ。

複雑な感情と妙な違和感が嶺次の中に沸き上がるが、それを押し流すように風早は感情に任せて言葉を吐き出す。

「だが…、テメェら学園都市に壊された。俺の安息は！だからさあ、割に合わねえんだよ……！殺さないと。レベル5くらいは……！」

「……ッ！」

殺意の焦点が、虫眼鏡で集められた光のように自分へ収束するのを肌で感じた嶺次は、半ば反射的に防御行動に出た。

周囲の駆動鎧の残骸から硬度の高い金属を抜き出し、一辺10センチ

ち程の小さな正六角形の金属板を無数に展開する。

——そんな行為は何の意味も持たない事をつくに頭では理解していても。

それでも風早との間に壁を作らずにはいられなかったのだ。

それと同時に綴は、パズルのピースがカチリ、とはまるような感覚を覚えた。

ニュースの情報、

風紀委員と警備員の少年に関するやりとり、
そして——赤石という名前の宗教。

（思い出した！“赤石会”……、先日、学園都市の指示で動いた外部の警察に壊滅させられた宗教団体だ！）

綴の宣告に嶺次は絶句する。

「じゃあ、学園都市を襲撃した理由は………」

（父親の仇打ちって訳だ…）

しかし嶺次には、時計台から飛び降りて自らと対峙している少年の内包する、得体の知れないものの正体が復讐だけだとは思えなかった。

（俺は……、何に引っ掛かっている……？）

心の中で首を傾げる嶺次を前に、風早は種の見えている手品を見るように言う。

「その能力…、代わり映えはしないな？」

そして、呟く。

「終わらせるぞ、早く。……遠隔存在、テレグラム形成……！」
アーキテクト

その言葉が、全てを容赦無く削り取るワームホールの起動の証であることを嶺次が認識した時には既に遅かった。

バツン！！と。

あっけない音と共に、大抵の物理的な攻撃を遮断する鋼の防壁は虚空へ消え失せた。

「解ってるだろ？無意味なことぐらい。物理防御が」

風早は本当に嬉しそうに言葉を紡ぐ。しかし、綴の中には1つの疑問が渦巻いていた。

（わざわざ言葉に出して能力を切り替えるのは何故だ……？）

「クソっ……！！！」

嶺次の防壁を成形して放つ鉄柱が尽く風早の両手に携える陽炎の中へ吸い込まれていく。その光景に、疑問は可能性へと変わる。

（まさか……、一度に片方の種類しか使えない……？）

両手で全ての攻撃を捌く風早。

それはつまり、両手以外で受けることができないからではないのか？

——策はある。

（嶺次、試したいことがある！）

「何だ……っ!？」

ゆらゆらと不規則な軌道を描く陽炎を避けながら、嶺次は辛うじて応じる。その可能性に言及した綴は続けて、

（アイツの死角から攻撃をかけるぞ!）

「死角って……!」

躲すのが精一杯の嶺次にはそんな余裕など無い。しかし、反論しかけた彼の目に入ったのは——

「下からなら!」

風早によって榴弾を至近距離で受け、深く抉られた舗装。そのアスファルトの下に鈍く光る様々な配管だった。

（行くぞ………！）

言わんとしたことを察知した綴の集中と共に、嶺次は大振りな薙刀で最大限風早の注意を引き付ける。

わざわざ懷に突っ込んできた嶺次に風早の口元が歪む。

「レベル5！もう終わりか？」

右手の陽炎が鎌の如き鋭さで嶺次に迫る。それと同時。

どろり、と。風早の背後のアスファルトに銀色の水溜まりが音もなく染みだし、意志を持つかのように固体に成り、六角柱を驚くべき速さで風早の背中に突き立てた。

ガズン！！と響く音。しかし、

「ど………あ………っ!？」

嶺次の下腹部に走る衝撃。眉をひそめたのは風早の方だった。もう少しで嶺次を袈裟切りにできたのに、彼は空中で体をくの字に折って後ろへ吹き飛ばされたのだ。

そして、何が起こったのかを把握した風早は無惨に転げ回る嶺次に言い放つ。

「大減点だな…、この程度とは…」

「な……………に？」

口元から赤い筋が伝う。それを拭いながら嶺次は風早を睨み返すが、

「至らなかったのか？無意識に能力を発動していることに。俺が原石である時点で」

（まさか……………！）

嶺次と綴の中に絶望が広がっていく。

「備えているそうじゃないか。無意識に有害なものを反射する能力を。学園都市最強の能力者、一方通行は」
アクセラレータ

「デメエも……………！」

「そうだ。攻撃は持ち主に返還される。俺に向けられたものは無意識にな」

反則ではないか。嶺次は本能的にそう思った。

最強の矛、最強の楯。机上の空論ではなく、実際にそれを有する人間が目の前にいる。本当にどんな防御も意味を持たず、本当にどんな攻撃も通さない。しかも矛と楯をくぐり抜けても、攻撃は自らに帰ってくるのだ。

嶺次の抵抗心が折れそうになる。

綴の策も意味を為さない。

——勝てない。

高くかざされた風早の右手を前に、睨むことしかできない嶺次は、

「————!!」

気付いてしまった。自らが何に引っ掛かっているのか。

ギリギリの所で陽炎から飛び退き、嶺次は風早を見据える。

生気を取り戻した嶺次の目に少しだけ意外な表情をして、

「抵抗するのか？まだ」

しかし、嶺次の眼は揺るがない。

揺るがない眼で、風早に言葉を突き立てる。

「お前……、本当は殺したくなかないんだろ？」

（……嶺次、何言って……？）

綴が言葉の意味を理解するより速く、

「思えば最初から変だったんだ。昨夜だって、殺そうと思えば一瞬で俺と御坂なんて殺せたはずなのに、わざわざ自らの姿を晒した」

「————、だから？」

興味無さそうに応じる風早に、嶺次は告げる。彼自身も気付いていない、内包するものの正体を。

「つまりお前は、殺したいから、復讐したいから此処に来たんじゃ無い。別の理由があるんだ。…………、例えば、誰かに認めて貰いたい、とか」

「————、」

その言葉は、風早を揺さ振った。彼の動きも、表情も凍りつく。彼が纏う陽炎が急に不安定になり、消滅していく。まるで、自らの知らない自分を突き付けられているかのように。

「—————黙れ」

顔に手を当て、消え入るような声で風早は言う。その肩を震わせて、自らの中から這い出してくる何かに怯えるように。嶺次は何かを言い掛けて、

[illegible]

世界を揺るがしかねない程に風早は咆哮する。しかし、獣さえ凌駕する響きの中に、綴は幼い子供が泣いているかのような感覚を覚え
た。だが、

(ツ!)

顔を上げたその眼に映っていたのは、殺意の結晶の鈍い輝き。

「紛い物ごときが……俺の心を……覗くんじゃねえ……！」

1つ1つ、選ぶように放たれる言葉に戦慄する綴と裏腹に、嶺次の眼は曇天の空を映し、一筋の光を宿していた。

e p, 7 つまりお前は（後書き）

次回、風早との決着になります！

e p, 8 ただの“ ついで ”だ (前書き)

風早戦、決着します!!

e p, 8 ただの“ついで”だ

学園都市外周、都市の住宅街との狭間で外部とのやり取りを完全に遮断する分厚い外壁。その上部、警備用ロボットの通路には、今日も異変は無かった。

——通信では。

そこには、警備ロボットのカメラの目の前を悠然と横切る1つの人影があった。それが意味するのは、侵入者。しかし、目の前の人影に警備ロボットの高感度センサーは一切反応しない。

その女性は学園都市の警備など意に介さず、潜入というより普通に通りすぎているような印象すら与えた。

何より、その容姿が潜入に向いているとは思えない、派手な装飾を随所に取り入れた黒いドレスローブなのだ。プラチナブロンドの髪はセミロングでゆったりとウェーブがかかっており、その顔立ちも、陶器のように白い肌も西洋の人形のように。よく見れば身体中のイミテーションは十字架や百合の紋章を模しているものであることがその道の人間なら理解できたかもしれないが、この街にそんな人間はゼロに等しかった。

その道の人間。——つまり、魔術サイド。

「これが科学サイドの本拠地の警備体勢だということは、悪い冗談であって欲しいですね……」

誰に言うともなく丁寧な口調で呟いた彼女は外壁の端にたどり着き、そこからブーツの爪先を少しだけ出すと、懷から短冊のような5枚の紙を取り出し、

「—————、」

何かを口の中で紡いだ。その瞬間、

バシユン！！

風船を一瞬で膨らませたような音と共に、紙が30センチ程の西洋の人形に成り代わった。豪華なドレス、細やかな髪。それこそ今にも動きだしそうな人形が、

宙に浮いていた。

操り人形というより、自らの意思を持つ小人のような繊細な挙動で浮く人形に話しかけようとして、

「ああ、通信の機能は損傷中でしたね……………」

1人納得した彼女は再び人形に指示を出した。

「よろしくお願いしますね。……………皆さん」

仲間に呼び掛けるようなその言葉の真意を、表情から読み取ること
はできない。しかし、人形達は彼女の意図を正確に捉えたかのように、
あり得ない速さで空を飛んで学園都市のビル群の狭間に消えた。

「赤石さんの保護……………ですか」

そう呟く彼女の蒼い目は学園都市に散った人形達と、迫る黒い雲に
向いていた。

戦闘の中にあって、嶺次の言葉は押し留めることの出来ない“何か”
を風早の中から引きずり出した。

—————ねえ、お父さん。

「あ、アああアあああ！！！！」

沸き上がる何かを打ち消すために、風早は叫ぶ。その感情を具現化したかのように、空にはいつの間にかどす黒い雲が立ちこめている。

「遠隔存在、テレグラム ユナイト結合！！」

削り取るワームホールではなく、接続するものへ変換。

「お前はただ——」

耳障りな言葉を吐く目の前の少年に応じること無く、歪んだ顔のまま右手の裏拳を一薙ぎする。

「が！！！！！！！！！！」

肺に直に響く場所へ拳を打ち込んだ。ろくに声も出せずに咳き込む少年を睨みながら、左足をサッカーボールを後ろへパスするように軽く払う。

「っ…………！！！！」

脊髄に最も近い場所へ踵が落ちるように空間を繋ぎ、それを何回も繰り返す。

「あ…………！！！！！！！！！！」

人体の急所を的確に狙い、自らの拳動は最小限で、衝撃が最大にな

る瞬間にワームホールを生み出す。数十人にリンチされるのと同
等かそれ以上の苦しみを受け、のたうち回る少年。

それでも、名も知らぬ少年の言葉が導火線となり、風早の記憶を抉
っていく。

——お父さん。

もはやヒトの言葉ではないものを叫んでも、いくら少年を傷つけて
も、ドミノ倒しのように記憶が甦る。

——お父さん、僕は、

「僕はああああ！！！！」

錯乱し、拳を幾度振るったかすら忘れ、少年は痛め付けられて動か
なくなっていく。風早の能力が演算に依存しない原石の力によるも
のでなければ、暴走を起こしていたであろう程に。それでも、

「それが……お前の…本、質……だな…」

確かに。ほとんど動かないその唇から、確かに聞こえた言葉。

鼓動が止まるかと思った。

それほどに、その言葉は確信に満ち、少年は傷だらけの顔でこちらを見据えていた。

「—————ッ!!」

「……偽るなよ。自分を」

その一言で十分だった。

組みあがったジグソーパズルをバラバラに壊すように、心の表層が崩れていく。

どうしようもなく自らが崩壊していくのを風早が感じると同時に、目の前の少年は掌で地面を掴み、口元から血を滴らせ、立ち上がる。

「は、ア……!」

呼吸などまともにできない。肺に負った損傷は生易しいものではないのだから。立ち上がることなどできない。関節から骨、靱帯に至るまで、徹底的に傷つけたのだから。そんなことは傷つけた自分よりも、目の前の少年が理解しているはずだった。だが、それがどう

した、と言わんばかりの眼光を放ち、少年は立ち上がる。

「何……でだよ！！何で立ち上がる！！！」

眼を血走らせ、口から泡を飛ばす風早に、嶺次はただ一言。

「ただのついで……、だよ」

「あ……？」

だらりと両腕を落とし、血を吐きながら。それでも少年は肋骨が軋む体に息を吸い込み、全力で叫んだ。

「そこに転がされてる相棒の敵討ちついでに、テメエも救ってやるって言ってんだ！！！」

「――――、」

一瞬、風早は少年が何を言っているのか理解できなかった。

救う、と。

確かにこの少年はそう言った。

だが、何から？

それを考えるより速く、風早の体が動いた。

自分を動かしたものが得体の知れないものに対する恐怖なのか、それすら解らなかった。

それでも、一つだけ、錯乱する頭でも解ったことがあった。

——負ける。

その言葉が頭をよぎった瞬間、

ガギッ！！

と、人間からとは思えない音を響かせて少年はうつ伏せに倒れた。

何のことはない。地面を踏みつけた足が空間を繋いで少年の脊髄に直撃したのだ。

そして、倒れ伏した少年は今度こそ動きを止めた。

「は、はは…」

微動だにしない少年を前に、思わず乾いた笑みが零れる。だが、やり遂げた筈の風早の中に渦巻くのは負の感情。

（あれ……………？）

目的も、動機も、霞みが掛かったように不鮮明になっていた。

自分は、居場所を奪った学園都市への復讐を誓い、少年を殺す為に

これだけの騒ぎを引き起こしたのではなかったのか？

そしていま、その目的を達成したのではないのか？

そんなことすら考えられない。

ただ1つ、少年の言葉が風早を苛む。

——救ってやる。

その意味を考えようとすればする程、風早の内から何かが沸き上がる。顔を歪めて拒絶したはずの感情が、

ぱたり、と。

「…え？」

掌に零れた一粒の液体。

それについて思考するよりも早く、曇天から冷たい雨が降り注いだ。それに風早が濡れることは無い。無意識な防御は雨粒にも適応されていた。

「何だよ……これ……」

（つまり、これは——）

「涙……？」

その理由を考えようとして、

バチン、と。

「は、……ぐ、がああああああああああああ……！！！！！！」

風早の頭の中に鈍い音がした。

それ以上考えることを許さないかの如く、脳を激痛が襲う。

頭蓋の内側を金槌で碎かれるような激痛が、風早の五感を支配する。

「が……ぎ……つがああああああああ……！！！！」

何だこれは、という単語すら出て来ない。ただ痛みの捌け口を探して絶叫するしかできなかった。

そしてその絶叫は、倒れ伏す2人にも届いていた。

その叫びは暴君の雄叫びと言うより、雨の中泣き叫ぶ小さな子供の声に聞こえた。

だからなのかは、本人にも解らない。それでも、彼らはこう思った。
助けたい、と。

「立つぞ。……行けるよな、綴」

（ああ。問題は……無い）

嘘であることは2人とも解りきっている。嶺次の体に余裕など無い。綴との接続もとぎれとぎれで、体を打つ雨の感覚は痛みに掻き消されている。それでも、

がりり、と地面を爪が引っ搔く。震える掌を水溜まりに突き立て、錆び付いたように動かない関節を無理矢理駆動させ、見上げた風早は――

絶叫を止めた。あまりの絶叫に脳の回路が焼き切れたかのようにだらり、と両手の力を抜き、こちらを睨み付けて。そして、小さく、本当に小さく。

「生きてたのかよ……。まだ……」

そう呟いた風早は両手を広げると、

「丁寧に刺してやるよ。とどめは」

ゆっくりと攻撃体勢に入る風早の姿を前に、綴は抱いていた疑念が確信に変わったことを感じた。

（やつ…り、雨粒も転移……られている——…）

「今度こそ行けるんだろうな……？」

（正…言って賭けだ…他に方…は無いん……な…）

「上等だ…！」

不敵な笑みを浮かべる嶺次に、風早は苛立ちを隠せない。それと同じに、苛立ちが頭の中の痛みを押さえ込むのを感じて、

「そうか、そうだな。ゴチャゴチャ考えなくて良いんだよな…」

——コロセバイインダ。

誰かが囁いた、気がした。

目の前の少年を殺せば楽になる、と。

睨み合う2人の距離は10メートルも無い。そして一方は無傷、一方は死にかけ。風早の口元に裂けたような笑みが浮かんだ瞬間、ドオン、とどこかで遠雷が落ちる。

それが2人のスイッチを入れた。

「遠隔存在、アーキテクト形成!!」

「行くぞ。綴!!!!」

振り上げた風早の拳には、雨を纏って輪郭のはっきりとしたワームホール。あらゆる物質を削り取る最強の矛を、嶺次の頭に叩きつけようとして、

ガキン!

と、金属の鎧を擦りあわせるような音と共に、風早の体が硬直した。

「……………あ?」

何が起ったのか理解する暇など無い。

「が……………あっ!!!!」

ギリギリと風早の体が激痛を上げて軋む。意味も解らず見下ろした

風早の体は、

金属の鎧に覆われていた。

体中にまとりついたそれらは完全に風早の動きを奪い、締め上げている。

「まさか……！」

苦々しく睨んだ先の嶺次は、立て膝をつき、固く握り締めた右手を突き出していた。

「そうだ。テメエのスキマを使わせてもらったぜ？」

「俺の転移領域の中を………！」

転移領域。風早のワームホールには、自らの皮膚との間に僅かな空間が存在した。それが自衛の為なのか、理由は解らない。ただ、本人が自覚した時にはそれを打ち消せないこともわかっていたが、そんな必要は無かった。何故なら、

「間隔は6・5ミリだぞ……！」

そんな空間では出来ることなど無い。…筈だった。

「残念だったな。俺の能力なら、テメエの動きを縛れる硬度を持つ金属を気体にして一帯を覆い、そのスキマで固体化させられるんだよ……………！」

「く…そ…があああああ！！！！！」

鎧が締め上げる力は、能力を除けば華奢な少年でしかない風早に抗えるレベルではなく、彼は抵抗の叫びを上げた後、小さく呻いて意識を喪失するしか無かった。

そして、銅像の如く立ち尽くす風早の前に、2人は本当に深く、ため息をついた。

「あ……………ぶなかった…」

（雨が降…なかったら…ずかつ……もな）

「それにしても、よくあんな雨で気付いたよな。…お前」

雨粒を転移させていたことに気づき、無意識のワームホールのスキマを掻い潜った功労者である綴に向けられた感嘆からの返事は、壊れかけの電話のように頼りない。

（六角柱を転移……………られた時から違和…はあったんだ。それより、嶺……………救うつ…一体？）

「ああ、コイツが起きないことには——」

風早に放った言葉。その真意を嶺次が告げるよりも早く、視界を灰色の何かが覆った。

「何———がつ!？」

それと同時に。背後から莫大な力で組み伏せられた。そして、背中に伝わる冷たい円筒形の金属の感覚が、得体の知れない寒気を激痛の中でも嶺次の全身に走らせる。

そして———

「協力を感謝する。雪崎嶺次」

「この………声………」

背後から響いたのは、無機質なスピーカーの音質。

「アイツらの仲間かよ……!」

(タイミング…良すぎ……ろ……)

“声”は感情の宿らない平淡な声で告げる。

「赤石風早はこちらで保護させてもらう。」

「な……………!?!」

保護という言葉とは程遠い先の“攻撃”を知っている嶺次には、その言葉に1欠片の真実味すら感じられなかった。それどころか、背中 of 銃口に殺意すら感じるのだ。

「待……………てよ……!」

もうほとんど動かない体を必死に使って抵抗しようとした、素振りを見せるか見せないかの瞬間だった。

ゴオン!!

嶺次の顔面の真横に駆動鎧の拳が打ち込まれ、砕けたアスファルトの欠片が嶺次の鼻先を叩いた。

「……………!!!!」

嶺次の絶句する間に、スピーカーから響く声。

「我々は、平和的な収拾を望む……」

抵抗する理由は、その一言で十分だった。

「ふざ……………けてん……じゃ無え!」

(嶺……………)

背後の銃口に意識を集中。金属を奪い取って無力化しようとして、

ぷつり、と。

綴との接続が途切れた。

「!!?」

連中が何かをしたのか。綴に限界が来たのか。そんなことは解らない。それよりも、頭を支配した絶望は巨大で、どうしようも無かった。

今、嶺次はレベル3なのだ。直に触れなければ、金属を操作出来ない。そして体は駆動鎧に押さえつけられ、寸分の抵抗も許されない。

——目の前で危険物のように扱われ、駆動鎧に埋めようとしている風早の前に。

何も出来ない？

(く……………そ…)

悲鳴をあげる体に力を込めようとして、

ズン、と。

背骨が嫌な音と共に軋んだ。その音を耳が捉えるより早く、

「づあああああああ！！！！」

激痛が全身に炸裂した。背後でスピーカーから何か喋っていることも認識出来ない。

とつくに限界を越えていた嶺次の意識は、そこで水に沈むように消えていった。

(……………?)……………)

しかし、その目が最後に捉えたのは、はためく黒いスカートの裾のような“何か”だった。

e p, 8 ただの“ ついで ”だ (後書き)

次回、新キャラ、そして真相解明編です。

e p, 9 希望的な観測（前書き）

P V 4 5 0 0 0 突破！！！！

ユニーク 7 0 0 0 突破！！！！

こんなにたくさんの方に読んで頂けて嬉しいです！

これからもよろしく願います！

e p, 9 希望的な観測

——こんなはずは無い。

駆動鎧の中で、風早を確保しようと動いた男は余裕すら持てず、じわりと湿った手を握り締めて立ち尽くしていた。

彼は、自らを普通だとは思っていなかった。暗部に身を投じた時点でその将来が閉ざされたこと、これまでに“処分”してきた人間の数も知らないこと。これだけの暗部の人間を顎で使える立場に居ること。

それだけで、自らの特異性は証明できるだろう。

そう思っていた。

——この光景を目にするまでは。

「何だ……」

口から思わず言葉が漏れる。

「何なんだお前は！」

それは、一瞬だった。

“協力者”を抑え込み、対象に近づいた男の目の前に黒い何かが降り立った。それが敵だと認識した時には、既に駆動鎧のシステムが外側からの攻撃で停止させられ、装備を解除することもできず、最新鋭の鎧はただの足枷と化していた。

そして今、彼の前には彼の部下を全て打ち倒して、1人の女が佇んでいた。一応、この機種には攻撃に対する自衛の電磁迎撃機能があるのだが、それすら発動させず。

驚異的な速さで、それでいてワルツを踊るように優雅な動きの西洋人形を周囲に携え、一切変化しない表情で。まるで魔法使いの姿だと浮かんだ感想を自ら打ち消す。

女は彼の叫びに少しだけ視線を向けたが、すぐに向き直り、人形の指先から細い光の糸のようなものを紡ぐと、それを保護対象を丁寧に包装するように絡め、宙に浮かせて悠然と立ち去っていく。

抵抗しようにも、駆動鎧の中で生きているのは通信機能のみ。

「この……………！」

歯噛みする男の耳に、

「ザザ……………えますか…？」

「……………！！！」

ノイズに混じって、微かに通信があった。蜘蛛の糸にすぐるかのよ

うに必死に応答しようとして、男の言葉は失われた。

「……ご苦労様でした」

「!?!」

聞こえたのは、“丁寧すぎる”あの男の声。押さえきれない戦慄が走り、冷や汗が吹き出す。

何故なら、この声を知っている理由が、失態を犯した別班を“処理”する命令を下す通信を以前受けたからだ。その1回で彼は悟った。この声は2度と聞いてはならない、と。

「————ッ！」

「おや、そんなに気を張らなくても大丈夫ですよ？」

柔らかい口調で、それでいて底の知れない“声”は続ける。

「そちらに要請していた原石の保護でしたが、取り消しになりました」

「り、了解しました。しかし………」

部隊長である男が現状を説明しようとして、

「いえ、取り消しになったのは指令ではありません」

「は………?」

情報を理解できずに間拔けな声を出したのと同時に、遠くでトラツクの荷台が閉じるような音がしたのだが、男には届かない。

「取り消しになったのは、」

その先は、聞こえなかった。いや、聞けなかった。

男の意識はそこで外部からの訳が解らない衝撃に途切れさせられたからだ。

「ザ……ザザザ……ザ！！……ああ、実働班の方が早かったですか……」
壊れたインカムからは遊ぶような音声が一言だけすると、それっきりだった。

（アイツは……一体？）

風早を連れて立ち去る魔法使いのような女の後姿だけが、響く金属

音にうつすらと視界を取り戻した嶺次の脳裏に焼きつく。その音源を理解する余裕がないことは、彼にとって幸運だったとしか言いようが無い。

(でも……、暖かい光の糸だ……)

嶺次には何故か、その女が使えなくなった駒としての風早を回収しているようには見えなかった。

むしろ、感じるのは聖女のような慈しみ。その意味を考えようとして、彼の意識はまた沈んでいった。

――数時間後――

「全く……、こちらにも事情というものがありけるのだけれど……？」

日本との時差は9時間、ロンドンの聖ジョージ大聖堂は早朝の靄に包まれ、神秘的な雰囲気醸していた。ステンドグラスから射し込む朝の光が色とりどりの影を造り出す中に、イギリス清教の実質トップ、ローラ・スチュアートは1人、椅子に座って髪を整えていた。絹のように流れる2・5メートルはあろうかという金色の髪に櫛を通し、手繰り寄せ、床へ戻し、また櫛を通しては手繰り寄せる。

一連の動作をこなしながら、ローラは説教壇に置いてあるA4サイズ程の液晶パネルから響く音声に耳だけを傾けていた。最高レベルの解像度を誇る学園都市製モニターなのだが、そんなことは全く意

に介さない。

そんな技術の無駄遣いもいいところなパネルからは、平淡な声がする。

「ふむ…、事情か。そちらには早朝、神に祈りを捧げるという慣習があるのでなかったのか？」

通信の相手は、科学サイドの長。男にも女にも、子供にも老人にも、聖人にも囚人にも見える“人間”、アレイスター・クロウリーだった。

「わ、私にはその必要は無きにつきなのよ。それより、本題に入らせてしまわぬか？」

古文の文法を参考にしたとしても日本語をナメているとしか思えない口調で、ローラは逸れかけた話題を元に戻す。

「本題…、魔術サイド（そちら）に、科学サイド（こちら）の最高級の原石が拉致された事、だったか？」

ほんの少し、沈黙。

「ま、まあ……、大筋は合いたりけるが、…所々に悪意を感じたるのは気のせいなのか？」

最大級の皮肉が含まれていることを自覚しながら堪えるローラは、こめかみが震えているように見えた。

「この後の彼…、赤石風早の処遇に関しては――」

「解りている！然るべき処置を取りし後、そちらに返還せしつもりなるのよ！！」

アレイスターの言葉を遮り、ローラが放った言葉が大聖堂の空間に反響する。

「まあ、そんなに熱くなる事でもあるまい？」

ローラはふう、とため息を吐くと櫛を取り替え、落ち着きを取り戻した口調で続ける。

「全く、それは本来ならばこちらの言葉なるのではなくて？学園都市にこちらの最高機密たる禁書目録を預けたるのだから、この程度は許容して頂きしなのよ？」

「まあ、その件に関しての話は置いておこう。彼――、赤石はどのような状態にあるんだ？」

画面の向こう、赤い液体の入った巨大な円筒形のビーカーに漂う彼は本来の内容に話を戻した。ローラは手元のファイルを掲げ、

「そうね。少年を保護せし部下によりたれば、記憶、及び人格の領域に重大な損傷を受けているわ。全く……偶然とは言え、偽者の魔術集団にあんなことができてしまった事に驚いているのは私なるのよ？」

「偶然……ね。赤石会なる宗教集団に原石、しかも最高級の原石である人間が生まれ、その少年の周囲の環境によって、記憶操作の類を偶然施されたと言うのか？」

まるでSFの小説をそのまま引用して、マッドサイエンティストが本気で設計したトンデモな精密機器を見ているように、アレイスタ―は言う。

「あえて言い直せば中途半端たるものなれどね。そのせいで余計な手間がかかりしのは事実。術式が正確ならば発動していることすら気づかれぬのがあの魔術の本懐なれど、あれは周囲に痕跡をばら撒き続けしまがよい物であるのよ」

「だからそちらで術式の解除を行った後、開放する、と？」

ローラの言葉を引き取って彼は言う。

「ええ、そう思ってくれて構わぬのよ。そちらにとっても、いたずらに魔術組織との関与を疑われしことは望まぬであろう？」

「……………構わぬよ。半ば霊装と化していた駆動鎧の一個小隊を潰したが、こちらにも得るものはあった」

「ほう。それは良きことなるわね？」

2人の間にやり取りされているのは通常の間には耐えられない、得体の知れない緊迫感だったりするのだが、それすら楽しむかのように、双方の勢力の長は画面越しの対談を続けていた。

——同時刻——

第7学区のとある病院、医師による処置を終え、病室への搬送を待つ雪崎嶺次と夜来綴は、包帯にぐるぐる巻きにされた四肢を手術台を簡素にしたようなものに横たえていた。決して医者が投げやりなわけでは無い。きっとこれしか処置方法が無いのだ、と半ば自らに言い聞かせて。

「ほうほう………。それで、嶺次はあんなにカッコイイ台詞を吐いておきながら、^{パワードスーツ}駆動鎧の連中にあっけなく伸され、気づいた時には風早は謎の女に連れ去られ、駆動鎧はいつの間にか消えうせていたと言うわけかい……？」

「う………」

綴の追及に冷や汗を垂らして言葉に詰まった嶺次は一呼吸置くと、おもいっきり悪人の顔で綴に反撃を開始した。

「お前だって、最初からあんなにボコボコにされてた挙句、肝心なところで能力がプツン、て切れちゃったじゃ無えか？その理由が不明ってのが余計に情けないよなー」

「か、返す言葉も無い………」

あからさまに目を逸らして、天井を現実逃避するかのように眺める綴。

これ以上互いを空元気で“口撃”しても自爆するしか無い、と悟った2人はしばしの妙な沈黙の中に居た。

沈黙をひとしきり経た後、綴の口から純粹な疑問の言葉が真剣な口調で紡がれる。

「嶺次…、お前はあいつの、風早の中に何を見たんだ…:…?」

風早に嶺次が放った一言が彼の根底までを揺るがしたように感じていた綴は、

「俺にはあいつの中をうかがい知ることはできなかったが、お前もあの殺意を浴びた挙句、…殺されかけたんじゃない無かったのか?」
お前は一体、と言いかけて、嶺次がその先を引き継いだ。

「あいつは…、多分何かに操られていた。と…:…、思う」

「操られて…:…!?!?」

どこか悲しげな顔で。まるで、風早を救えなかった自らが悪いかのよう。嶺次はその続きを、絶句する綴に言う。

「あいつの殺意は、実際の行為と合致していないんだよ。あれだけの被害者を出しながら、あいつは削り取るワームホールを人に当てなかったんじゃないのか?それなら1発で殺せるはずなのに、だ」

「……！」

綴にも思い当たる節はあった。実際に対峙した瞬間にためらい無く振るわれた陽炎のようなそれは、円形のディスク状だったからだ。――いくらでも形を変えられたはずなのに。もしあの時に風早が本気だったなら、両手を少しも動かすことなく、綴はどこかの空間にこま切れになって飛ばされていたのではないのか？その事実に綴に刻まれた傷が反射的に異を唱えるが、

「じゃあ、あの殺意は何だったんだよ！あれは……」

本物だった。そう確信を持って言えなくなる程、風早への疑念が綴のなかに湧き上がってきていた。

「誰に操られていたのかは解らない。あの女では無いと思うけど。あいつの殺意は動物の警告色みたいなものだったんじゃないか？――多分、風早自身ができた数少ない抵抗としての」

過剰に目立ち、危険性をアピールすることで敵を遠ざける。極彩色のスズメバチやドクガエルのように。そうして、彼は被害者を減らそうとしたのではないか。嶺次には、それがずいぶんとしっくりきた。

「あいつの本当の姿はきつと、俺を殺したと勘違いした時に涙を流せる、そんな優しい奴だったんじゃないか？」

そうであってほしい、という感情が嶺次の顔には顕れていた。綴は苦笑いしながら言う。

「随分、希望的な観測だな？」

しかし自身も、嶺次と同じ思いであることを確信しながら。

風早の無事を考えている自分を自覚しながら。

蛍光灯が照らす処置室に、2人の苦笑いが響いていた。

——同時刻——

ロンドン、とある教会の地下。エグゼキューター執行人、実務部隊管理官室。

歓喜、安堵といった空気にこの部屋は包まれていた。

「そうか……、じゃあその通信用霊装に関しては技術部に伝えておくから、気をつけて帰って来いよ？」

映像通信の霊装の前に腰掛けているのは、管理官であるハイゼ・ヴィレクティム。その相手は、

「了解しました。それではロンドンで」

派手な装飾の随所に取り入れられたドレスローブ。手元には西洋人

形。学園都市での任務を終え、通信霊装を即興で創り上げて通信しているのは、執行人のメンバー、ミレイナ・アマリーだった。

赤石会という宗教団体の施設で連絡が途絶え、実務部隊がその身を案じていると、追加任務を終了したとのことで、ミレイナは管理官に連絡を入れたのだった。

通信が入った瞬間、あからさまに嬉しそうな顔をしていたハイゼを眺めるロザリイの表情にも若干の緩みがあったのをランサーは見逃さず、そのことを冷やかそうとしてロザリイに凍らされかけていた。聞けば、赤石会の施設内、祭壇のような場に未知の術式が構成されており、その残滓がミレイナの通信用霊装を一切使用不能にしてみったとのことだった。

騒がしい管理官室を眺めて、テオレルドは小さく、本当に微かに、口元を緩めた。

「よし、ミレイナも無事だったことだし、俺は寝るぞ！」

通信を終えたハイゼが高らかに宣言する。しかし……

「管理官、まだこの書類の山が終わっていないのですが？」

「俺、徹夜明けなんですけど……？」

「そんなことは関係ありません。というか、期限は今日の正午なんですよ？」

「げ……………!？」

凍りつくハイゼを尻目に、テオレルドとランサーは朝の管理官室を後にした。

e p, 9 希望的な観測（後書き）

次回で2章、風早編は完結です。

e p, 10 優しい静寂（前書き）

風早編、完結です。

今回はシリアス皆無ですが、感想を頂けるとありがたいです。

e p, 10 優しい静寂

雨雲が過ぎ去り、夕焼けも沈みかけた頃のとある病室。2つ並んだベッドの上には、雪崎嶺次と夜来綴がいた。

全治1週間。それが2人に下された診断だった。

サボった挙げ句入院というマズイ状況に、補習の行く末をうつかり案じてしまい早くも青くなったりする嶺次。その隣には、優等生然としている夜来の何だか満悦な表情があった。

「何でそんなに嬉しそうなんだよ…」

睨み付ける嶺次に、綴は笑いながら答える。

「いやあ、ここ最近^{ジャッジメント}は風紀委員の休みが無くてさー。こんなにだらでできるのは2週間ぶりくらいかな…?」

何だか夜勤に疲れたサラリーマンのようなことをさらりと言っている綴。

(でも、そういう考えて風紀委員失格に値しないか?)

疑いの目で綴を見る嶺次に、

「嶺次からそこはかとなない疑いの目を感じるのは何故かな…?」

「うぐ……………!?!?」

向けられたのは無防備な女性なら一発で仕留められてしまいそうな微笑みなのだが、

（な……なんだコイツの営業スマイル！）

……冷たかった。綴の能面のような笑みに凍りついている嶺次を解き放ったのは、入り口の引き戸を開く音だった。

「夜来先輩！！」

今にも泣きそうな顔で入って来たのは、頭に色とりどりの花飾りを乗せているセーラー服の中学生の少女。

「初春、そんなに大声を出さなくても……」

続いて、花飾りの少女をたしなめながら部屋に入ってきた少女は、お嬢様学校である常磐台中学の制服に、茶髪のツインテール。その背後には、短めの黒髪に眼鏡、結構スタイルの良い女子高校生がいた。

「夜来君、お見舞いに来たわよー？」

そんな3人の腕には風紀委員の腕章があった。

（風紀委員の同僚……か？）

隣に目を向けると、あんな話をした直後で後ろめたいのか、苦笑い

するしか無い夜来がいた。

ざまあみろ、と小さく嶺次が呟いた瞬間、

「ねえ、やっぱり私なんかがお邪魔しても…」

引き戸の端から、見覚えのある茶髪、聞き覚えのある声が――――

「「な……………」」

一瞬の静寂。そこには、嶺次の因縁、御坂美琴がいた。

「「何でお前が^{アンタ}ここにいるんだよ（のよ）！？」」

頭に疑問符の浮いている3人の少女の隣、事情を全て理解している夜来の隣れみに満ちた目は語っていた。諦めろ、と。

夕暮れの病室には2人の絶叫が響いた。

―――数分後―――

ぎゃあぎゃあとり取りがされている嶺次と御坂の間に入るのは不可能だと悟った眼鏡の先輩、―――固法美偉は夜来のベッドの脇に立っていた。

「でも、固法先輩が大したこと無くて良かったですよ」

日中、赤石から攻撃を受けた固法はあの場で応急措置を施され、大事には至ることなく復帰していた。

「それでも、風紀委員が一発で気絶させられてたらダメよね…」

「そんなこと無いですよ！俺もこのザマだし…」

励ます夜来にありがと、と薄く微笑む固法。

「それにしても…」

頬に手を当てて何かを言いかけた固法の言葉を引き継いで、

「先輩が入院だなんて本当に驚いたんですからね？」

夜来のベッド脇のパイプ椅子に座り、手術着から垣間見える痛々しい包帯にどぎまぎしながら、頭に花飾りを乗せた少女、―――初春飾利は言う。その反対側で腕を組みながら立つ常磐台の少女、―――白井黒子は対照的に、

「全く……、いくら能力の一点突破で風紀委員に入ったからといって、普段の訓練を怠るからこうなるんですのよ？」

「いやあ、今回は例外中の例外でさー」

人差し指でこめかみを掻きながら目を逸らす夜来に、白井は続ける。

「いいえ。たとえ今回がいかなる状況であったとしても、先輩が風

紀委員の訓練参加率ワーストである事実は変わりませんの！」

うぐ、とたじろぐ夜来に止めを刺さんとするように白井は宣言する。

「次回の訓練には必ず、必ずや参加していただきますわよ？」

「いやそれは白井の私怨が8割くらい入ってないか!？」

「白井さん…、いくら組手をやっても夜来君と引き分けにしかならないからって…」

「白井さん、怪我人の夜来先輩にそこまで言わなくても…」

2人の擁護も空しく、夜来は次回の訓練参加を義務付けられてしまう。しかし、そんな様子の夜来の隣では嶺次が美琴との口論でバチと響く電撃に命の危機に晒されていた。夜来が会話の方向を変えべく、そちらに注意を向けさせる。

「なあ、彼女って常磐台の超電磁砲……だよな？」
レールガン

それに応じたのは白井だったが、

「そうですね。177支部の方にお姉様がいらしたので、夜来先輩を紹介致しようかと思ったのですけど…」

啞然としてその先が出てこない白井に代わり、初春が問いかける。

「先輩、お隣の方は一体…?」

「ああ、知り合いの雪崎嶺次ってやつなんだけど…」

どういう関係か、と問われてすぐに言い切る自信が無く言い淀む夜来に、美琴のショートしている電流に嶺次は若干痺れながら叫ぶ。

「オイ！楽しく談笑してフラグを立ててるそのイケメン！俺を感電死の危機から早く助けてくれ！！！」

「か、感電死とは何よ！」

火に油を注いだ嶺次に苦笑いを振り撒き、白井に救出を依頼し、ため息をつく固法に謝罪し、騒がしさを増す病室におろおろする初春をなだめながら、夜来は思う。

（結構…、平気だったはずなんだけど…な……）

——翌日——

赤石風早は瞼をくすぐる光に目を覚ました。

上半身を起こして辺りを見回すと、そこはどこかの病室だった。ごく普通の白いカーテン、蛍光灯、リノリウムの床。誰もいない朝の病室で赤石は記憶を辿る。

「僕は………」

学園都市に突入して、様々な人を傷付け、物を壊し、——あの少年に敗れた。

包帯に包まれた体はまだ軋むが、動かせる。しかし、

「僕は……何てことを……!!」

顔を歪める赤石の心を後悔の念が責め立てる。

自分がしたことの全ては明確に記憶に残っている。それでも、自分が何故あんなことをしたのか、その心が理解できない。感じるのは、恐ろしい獣が中に潜んでいるかのような圧迫感。

呻くように頭を抱え、自らが牢の中にいないのがおかしい、という考えに至った瞬間、病室の扉が静かに開かれた。

「あら、お目覚めですか」

女性は、優しい口調で風早に語りかける。ただし、入ってきたのは看護師ではなく、修道服に身を包んだシスターだった。

「あ、あの…、一体此処は…?」

微笑みを浮かべながら、シスターは赤石に告げる。

「ここは、イギリス清教の日本教会ですよ。あなたは傷を負ってなされたので、少しだけ、介抱させていただきましたが…」

——辛かった。

何も知らず、あんなことをした自分を介抱し、警察に突きだすこともせず、微笑みかけてくれた。その行為の全てが、赤石の自責の念を膨らませる。

そんな赤石の様子を察したのか、シスターは優しく、

「あなたが学園都市で何をなさってきたのかを、私達は知っていますよ？」

「……………え？」

思わぬ言葉に呆然とする赤石に、シスターは変わらぬ口調で、

「あなたが負っていた傷というのは、体だけではありません。その心に、あなたはどのようなも無い傷を負っていたのです。ですから、私達はあなたの心を、微力ながら介抱させていただきました」

「心に……………？」

訪れる静寂。それは、優しかった。

それまでの人生に威圧と沈黙しか無かった赤石風早という少年が初めて味わう、優しい静寂だった。

e p, 10 優しい静寂（後書き）

次回からは新章突入！

魔術師2人も参戦します！

e p, 1 2度目は無いぞ(前書き)

新章突入！

今回は魔術サイドもガンガン来ます！

ep, 1 2度目は無いぞ

石造りの城壁が特徴的な市街地の中、夜陰に包まれたとある教会。

そこに、円柱の立ち並ぶ回廊を駆け抜ける1つの影があった。

黒い修道服を纏った人影は、何かから逃げるように暗闇の中に靴音を響かせている。

本来ならばそこを照らす蠟燭やランプの明かりは一切無く、月明かりさえも厚い雲に遮られて届かない。

むせ返るような夏の湿気が支配する空間に聞こえるのは、荒い息遣いのみ。

暗闇の中、人影は迷わずに廊下を曲がり、階段を降り、突き進んでいく。

——使い慣れた部屋の明かりを点けるかのように。

だが、暗闇の中に存在したのはもう一つの影だった。

修道服とは違い、コートを羽織ったような人影の息は少しも乱れておらず、子供とかくれんぼをしているような余裕が、石壁に反響する言葉に現れる。

「追いかけてこは楽しいかあい……………」

的確に標的を追いかけていることを自覚しているのか、口元が徐々に歪んでいく。

「くっ………」

追われるもう一つの影が苦悶の息とともに吐き出した言葉には、悔しさが溢れる。

「私は……あの人に……！」

何の変哲もないような石の壁に偽装された扉をくぐりぬけ、もう一枚、外に繋がる扉を開こうとして、

「ゲームオーバー……」

その声は、真上から響いた。

——1週間後——

「夏休みの補習もクライマックスだ………！！！」

クラス1のバカなオールバック、翠^{すい}隻^{ぜき}解^{かい}理^りの絶叫で、興条学園の補習組^{システムスキャン}の身体検査は幕を開けた。

炎天下の校庭に数十人が集まり、それぞれの分野に応じた検査を受ける。スポーツテストの要領だ。

「しかし……、熱いな……」

校庭の端、木陰のベンチに腰掛けて辺りを眺めているのは適当にワックスでいじった髪に白いエクステの入った高校生、雪崎嶺次。

彼の検査は屋内で行われるため、順番待ちがてらに校庭の仲間の様子を見ていた。

1週間の入院のせいで危うく補習を延長されそうになったりしたが、必死の抵抗の甲斐あってか、彼はこうして8月半ば、最後のカリキユラムに臨んでいた。

校庭のあちこちからは歓喜や絶望の叫びが聞こえるが、嶺次の視線は陸上競技に使うようなゴム製の100メートル走レーンに控える1人の女子に向いていた。

グレーの活発なショートカットの髪、体操服がここまで似合う女子も珍しい、との感想を大半の男子に抱かせる嶺次の幼馴染、灰笠^{はいがさ}未^み鶴^{つる}である。

1万分の1秒まで正確に計れるとの触れ込みで導入された機械式の計測器が、無機質なコール音を鳴らす。重量センサーを利用した物らしいのだが、嶺次には実感が沸かない。

（高校の検査でこんなもの使わなくても…）

「セット……」

張り詰める一瞬の緊張。

パン！！！！

「うお………」

言葉も出ない。

スタート音と同時に。肉体強化系の生徒達は、オリンピックがどうしたといわんばかりのスピードで、100メートルを駆け抜けたのだ。咄然とする嶺次の耳に、結果と思われるアナウンスがこれまた機械的な声で流れる。

「灰笠未鶴、100メートル、7.1312秒……、続いて——」

（記録更新つと……。こりゃ昼飯は俺のおごりかな…）

口の中でそう呻くと、嶺次は自らの検査が行われる科学室へ向かった。

――数時間後――

「「何い――！！？」」

検査の結果を嶺次、翠隻、灰笠の3人で見せ合った瞬間、響いた絶叫。

嶺次以外の2人の目線の先には、彼の検査結果を記した紙があった。そこに記されていたのは、

『金属把握完了速度、18kg/sec、2種以上の合金成型：成功。総合評価……、レベル4』

「今回は俺がおごられるみたいだな……？」

先程頭を抱えた時とは真逆、おもいきり悪人の顔で嶺次は微笑んだ。

――翌日――

灰笠、翠隻を引き連れた嶺次は第3学区の大通りを歩いていた。

身体検査で最も大きい伸び率を挙げた1人に色々な物をおごる。それが、3人の間で交わされた契約だった。

前は灰笠が1人勝ちだったのだが、今回の検査でレベル4に昇格した嶺次は3人の中でもダントツの成績により、こうして第3学区の繁華街で2人の財布の中身を削り取っていた。

「全く……、何で俺を差し置いて嶺次がレベル4になっちまうんだよ……」

ごっそり持っていかれた財布を見ながら愚痴る翠隻。

「先生曰く、演算よりもパーソナルリアリティの広域化がレベルの上昇に影響したらしいけど……」

説明する嶺次には優越感と達成感が満ちていた。パーソナルリアリティの拡張に関しては、ひそかに黒髪でイケメンな心当たりがあるのだが。

「パーソナルリアリティ……ねえ」

灰笠は天を仰いでため息を吐こうとして、

「お、あれじゃない？」

指差した先、ビルの1階には、安い代金でメニューが大量に出てくる学生の味方のファミレス。

「昼飯はここだな……」

自動ドアをくぐり、店員を翠隻が呼ぼうとして、

———2人の修羅がいた。

「店員さん！おかわりなんだよ！」

白い布地に、中世の成金趣味のティーカップのような刺繍があしらわれた修道服を着た中学生前後のシスターが敵意をむき出しにして、店員が恐る恐る運んでくる料理を片っ端からあり得ないスピードで食べ、いや、吸い込んでいく。

その敵意の先には、

「……御堂、次だ」

黒いジャージの上着を腰に巻き、黒と言うより濃紺に近いスポーツ刈りのような髪型、寡黙な印象を与える冷静な、しかし敵意に満ちた顔立ち。その口元には、銀髪のシスターと同等のスピードで料理が吸い込まれていく。

「「真崎……………」」

3人が思わず呟いた彼は、興条学園のクラスメイト、真崎左紺まきひだりだった。

その脇では、

「イ、インデックスさん？これは俺の退院祝いなんだから、もうよろしいのでは…？」

顔が真っ青になった普通の学生服にツンツン頭の高校生と、

「左紺！！頼むから止めて！！周囲の視線が痛い！」

半袖の白いジャケットにジーンズと、淡い水色の外はねパーマの髪が印象的なクラスメイト、浅葱御堂あさなごどうが同じく顔を真っ青にして真崎を制止していた。

しかし、

「どうま！！これは戦いなんだよ？逃げるのを“てきぜんと”うぼう”って言うんだよ！」

「なあ！？どこでそんな言葉覚えやがりましたかこのテレビっ子が！そして親父達への土産代がー！！！」

「御堂……、ここで負けるのは気に食わん」

「いいよ負けても！誰も止めないからさあ！ってさりげなく追加注文すんな！それは俺の財布だ！！」

連れの食欲の前にあっけなく敗れさった2人は冷や汗が流れる顔を見合せ、自らが彼らを連れてきたことを悔いながら苦笑いを浮かべるしかなかった。

———2時間後———

あまりの形相で2人がフードファイトを続けた結果、先に白旗を上げたのはレフェリーだった。

戦場の空気を作り出す2人に突撃を果たした可哀想な女子店員は、涙目で在庫の危機を告げた。

突然の停戦に、しばし睨みあっていた2人は無言で歩み寄り握手を交わすと、

「「またな（なんだよ）…」」

「「2度目は無えよ！！！！」」

間髪を入れず、付き添い2人のツツコミがステレオで炸裂した。

終止その光景に唾然としていた嶺次は浅葱に耳打ちする。

「な、何があったんだよ……」

「あ、嶺次…」

一通り叫んだ浅葱は我に帰ると、真崎が偶然にもあの銀髪シスターと同じ料理を同じタイミングで注文した事を発端に2人の間で火花が散り、フードファイトが勃発したことを虚ろな目で話した。

薄ら笑いを浮かべる浅葱の目に生気が戻っていくと、

「ちょっとアイツに一発かましてくるわ……………」

ふらふらと、無表情な真崎の首を掴んで引きずっていく。

一方では、白い修道服に銀髪のシスターが、彼氏というより保護者のような高校生に口惜しそうな表情で引きずられていった。

「とうま、今晚は何にするの…………？」

あれだけを平らげて、何事も無かったかのように夕飯の心配をするシスター。

「……………」

食欲を一切消失した3人は、無言の内に解散するしか無かった。

——同時刻——

ジャッジメント
風紀委員177支部、夜来綴は妙な通報の現場に駆り出されていた。

「全く……………」

炎天下の通りを走りながら呟き、通報の内容を思い返す。

中身としては、変な2人組に女性が追いかけている、という普通の内容だったが、夜来は電話の主に引っ掛かっていた。

（何か胸焼けがするような……）

あの遊ぶような声からは、女性を助けて欲しいという雰囲気^{アンチスキル}がまるで感じられなかった。装備や人員の充実した警備員ではなく、風紀委員の詰め所に電話を掛けてきた事も気にかかる。

感じる違和感を飲み込みながら、初春の監視カメラによるサポートを経由して、夜来は1つの路地を探り当てた。日中にも関わらず薄暗い路地裏の中で、

（――――！！）

確かに、1人を追って音もなく走る2つの影が視界の端を横切った。

（――――音もなく？）

足元の確認も不完全な路地裏を、物音一つ立てずに。

電話の違和感は気にするな、と自らに言い聞かせて夜来は追われる影をかばうように、2人の前に立ちほだかる。

「――！！」

虚を突かれた2人に、夜来は告げる。

「どうも。風紀委員だ。それくらいに……!!!!」

夜来は、フードの下の顔に絶句した。

e p, 1 2度目は無いぞ（後書き）

今回もシリアス少なめでしたが、次回からはバトルも入ります！

感想、お待ちしております！

e p, 2 申し訳ない（前書き）

今回はシリアス全開です！

新キャラの魔術師も出て来ます！

ep, 2 申し訳ない

追われていた女性は背後の袋小路に、怯えるようにうづくまる。修道服に隠されて表情を読むことは出来ないが、夜来は前方の2人に払う神経で手一杯だった。

「お前達は……！」

フードの下から覗いたのは、クセの無い黒髪。大人びた眼鏡の奥の眼光は冷たく、鋭い。

彼らは————、魔術師。

もう1人の少年は、所々が無造作にハネている白髪を弄りながら、

「邪魔しないで欲しいンスけど。風紀委員とか言いましたっけ……？」

その飄々と、しかし敵意で満ちた言葉に、相手の正体に愕然としていた夜来は我に帰る。

（そーいや俺、コイツ達とは面識無いんだったな……）

夜来は圧倒的に不利な状況に苦笑いしながら、

「そうは言ってもねえ……、丸腰のか弱い女性を2人で追うのはちょっと卑怯じゃないか？」

ダイアグラム
恐らくこの2人に演算代行は通じない。理屈ではなく、本能的に解
ってしまうのだ。夜来の精一杯の虚勢は、背後の女性から注意を逸
らすための物だったが、そんな言葉の意図を読み取ったかのように、
白髪の少年は言う。

「無理に庇う必要なんて無いっスよ？」

———軽く握った左手を突き出して。

夜来がその意味を理解して身構えるよりも早く、少年はその指をパ
チン、と弾いた。

刹那。

「————ッ!?!」

音も無く走る閃光。視界を奪われ、苦悶する夜来が感じたのは、

(誰か……いる……?)

この場にあるはずの無い、もう一つの気配だった。

金属のぶつかり合う音が間近で響く。

誰かの怒号が背筋を凍らせる。

——数秒後。

視界を取り戻した夜来は目の前の光景を信じられずにいた。

ほんの数秒だった、はず。

その間に、周囲の路地裏は大きく様変わりしていた。抉られたコンクリートの外壁、砕け散った非常階段。

そして、

「何だよ……、これ……」

壁に、地面に、無数に刻まれた十字架だった。偶然の産物と呼ぶにはあまりに完璧な比率の。

「グラウ・ガーランド？」

魔術師、ランサー・J・グレイスは別の路地裏を走り抜けながら空

き缶を蹴り飛ばし、悪態を吐いていた。

「誰なんスカ……そいつって？」

閃光に身動きの取れない風紀委員とやらを無視し、対象者を“確保”する。それが2人の中で描かれたシナリオだったが、

「ローマ正教、対魔術師のエキスパートだ。全く……、厄介な乱入者が居たものだな」

黒髪に縁の薄い眼鏡のもう1人、テオレルド・ミラーが呻きながらランサーに応じる。

彼らの策は、失敗に終わっていた。

あの閃光に乗じて、自分達さえも退けて対象者を連れ去った魔術師。

しばらく沈黙していたテオレルドは、

「……、早めに終わらせるぞ。彼女が“デヴァイサー管理人”である可能性も捨てきれん」

「わかってますよ……！それにしても、何でローマ正教が……」

2人は、眩きが雑踏に消え失せる学園都市を駆け抜けていく。

——同時刻——

追う2人の数百メートル前。

監視カメラを掻い潜るように、その人物は学園都市を裏から裏へ走っていた。

神父用の修道服、浅い帽子からは十字教の関係者であることを感じさせるが、その風貌は褐色の肌に極めて短く刈られた銀髪、顔の無数の切り傷が無言の威圧感を与えるという、その高い身長と相まって雑踏に紛れ込むことができそうにないものだった。

————脇に誰かを抱えて、彼は走る。

抱えられた小柄な女性は意識を取り戻すと、斜め上、普通なら躊躇いを覚えるであろう彼の顔に向かって即座に叫ぶ。

「な、何をしているのです、グラウ!!!! 離しなさい!!!」

グラウ、と呼ばれた青年は少しだけ意外な目で、しかし表情は一切変えずに、

「貴女様の為にございます。しばしの辛抱を」

驚くほど穏やかな声で、そう言った。

だが、抱えられた女性は少しも動じること無く、

「離さないと言うなら……」

「――！！」

グラウの表情が凍る。

彼女は口の中で、非常に複雑な言葉と音の中間のような呪を紡いでいた。

それは、対人用の束縛術式。

「リエラ……様……!？」

それから先を言うことはできず、青年は崩れ落ちた。

抱えられたままもつれるように転び、僅かな沈黙の後リエラと呼ばれた女性は立ち上がると、

「……ありがとう、グラウ………」

小さく、微かな声で呟くと辺りを見回して彼女は走り出す。

懐の感触を確かめ、決意を映した眼で。

しかし、

「悪いけど、ここで終わりっスよ？」

背後の路地裏から響く、声。

「――――、」

その意味を即座に理解し、振り返ろうとした瞬間にはもう遅かった。
パチン、と。

指が弾かれたような音と同時に。彼女の周囲を虚空から出現した、純白に輝くガラスのような4枚の壁が取り囲んだ。

「!!!!」

陰から、黒装束の2人が現れる。

絶句する彼女にその一方、ランサーは、

「シスター・リエラ。アンタには拘束命令が出てる。……理由は解るっスよね？」

リエラは抵抗を含む目でランサーを睨み返すが、

「まあ殺したりとかはしないっスけど。……ソレ、渡してくんないっスか？」

口調に変化は無いはずなのに、リエラはその気迫にたじろぐ。

“本物”のみが纏うその殺気に。

眼前の敵に何かを言いかけて、

「弱いものイジメかよ？……………、魔術師！！！」

その叫びと同時。

リエラとランサーの間を遮るように、路地裏を断絶する程に巨大な鉄の板が轟音と共に真上から突き刺さった。

「ッ！！！」

リエラは白亜の壁の中で呆然としている。彼女によるものではない、という考えに至るのに時間はかからなかった。

「金属の操作、これは……………！」

受け身を取り衝撃をいなすランサーが目にしたのは、虫食いにあったように削れた工事用の足場と、カラカラとパイプを引きずりながら、鉄の壁に悠然と歩いて来る1人の少年。

それは、ウォーカーの一件で面識のある唯一の学園都市の人間、雪崎嶺次だった。

「……………、何の真似だ。雪崎嶺次」

「全く…、綴からの電話はロクな事を運んでこないな……」

テオレルドの問いには応じずに呻きながら、嶺次は地面に突き刺さった高さ2メートル程の鉄のカーテンに背を向けると2人に向き直り、

「…よくわかんねえけど、アンタら、本物の魔法使いがこんな人を追いついて恥ずかしく無いのか？」

携えた鉄のパイプを剣道の竹刀のように構える嶺次。その表情に躊躇いは無い。

しかし、ランサーはそんな嶺次と視線を合わせること無く、前回とはうって変わった態度で平淡に指を鳴らす。

「……………、白亜の壁」
ブランク・ミュラー

光を固体にしたような目映い輝きを放つ壁が、嶺次を取り囲む。

「……大人しくしてるっス。君は関わるべきじゃ無い」

「それだけマズいことになってるってわけか……？」

以前、歯が立たなかった白亜の壁が立ち上がる。光の絶壁を前に、檻の中の嶺次は

———笑っていた。

「……………?」

眉をひそめるランサーに、嶺次は残念そうに言い放つ。

「科学室からくすねたコイツ、もう使うハメになるとはな……………!!」

本当に、残念そうに。

呟いた嶺次はジーンズのポケットから長財布程の大きさをした銀色のプレートを手で取り出し、宙へ放った。

「ふっ!!」

そしてそれを、空を裂くように鉄パイプで殴り付ける。

——瞬間。

ザグン!という奇妙な音を響かせ、銀色のプレートが液体を切ったように鉄パイプにまとわりつき、融合したのだ。

「……………!!」

嶺次は銀色の日本刀へ変化した鉄パイプを眺めながら、状況を飲み込めないランサーに言う。

「なあ、タングステンって金属、知ってるか……………」

その言葉に彼が反応することは無かった。

いや、できなかった。

パキン！！！！

と、ガラスを砕いたような高音と共に、嶺次の刀が白亜の壁を切り裂いたからだ。

「！！！！」

絶句するランサー。後方のテオレルドも目を見開くが、嶺次の目線は真っ直ぐ、ランサーを捉えていた。

「戦車の高射砲弾頭に使われるレベルの硬度を持つ金属だ。単体では使い勝手も悪いけど、鉄刀の刃に言えば……………！！」

その言葉を言い終えるより早く。

「！！！！」

嶺次の眼前に飛び込んで来たのはテオレルドだった。

ガキン！！！！と硬質な音を響かせて、黒い、影を立体にしたような鎧を纏った右腕と銀色の刀が交差する。

「悪いが、今回は君に関わって欲しくは無い……」

火花の散る鏢迫り合いを演じながら、テオレルドは冷静に告げる。

「いやいや、関わるかどうかは俺の……」

苦笑いを浮かべる嶺次がその先を言うことは出来なかった。

「!？」

刀を構えたまま、直立不動で動かなくなる嶺次。

対するテオレルドも、その場に凍り付いてしまっていた。

——まるで、見えない力で束縛されたかのように。

「…………先輩!？」

ランサーが問い掛けた瞬間、

「申し訳ない。そのまま居てくれ」

振り返った先、嶺次が突き刺した鉄のカーテンの上、褐色の肌に銀髪、黒い神父の服装をした男が佇んでいた。

——両の腕に80センチメートル程の両刃剣サーベルを携えて。

装飾が施され、左右に長い柄には様々な文様が刻まれている。ランサーにも理解できない程の複雑なもの。

しかし、それを振りかざした青年を視認することは出来なかった。

「ッ!？」

体の自由を瞬時に何かが奪っていったかのように、ランサーは倒れ伏したからだ。彼の視界には、迫る地面しか映らなかった。

e p, 2 申し訳ない（後書き）

次回、背景が徐々に明らかになっていきます。

e p, 3 信じるメリットなら（前書き）

今回もシリアスパートです！

徐々に事件の概要が明らかになっていきます！

e p, 3 信じるメリットなら

「してやられたな……………」

学園都市の路地裏。

10分程で謎の束縛から解き放たれた嶺次、テオレルド、ランサーの3人は鉄のカーテンに背を預け、非常階段に腰を下ろし、険悪な状況を打開しようと試みていた。

「結局、アンタ達は何の為にあんな女性を追ってたんだよ……………」

嶺次の問いに顔を見合わせる魔術師。目線だけでやりとりがされた後にひとときわ長いため息を吐き、テオレルドが告げる。

「……仕方ない。ここで話すことを拒めば……、君は再び邪魔をするだろう？」

「う……………」

テオレルドの言葉に思わず目を逸らす、首を突っ込むのが大好きな高校生。

「はあ……、管理官に何言われても知らないっスよ？」

と前置きをして、目配せを受けたランサーは語りだした。

「俺達はリエラ・ウイステリアって、さっきのシスターを追って来

たんすけど、まず俺達の目的を……」

と、ランサーはそこで言いかけた言葉を止め、背後のダストボックスに向けて呼び掛ける。

「出て来たらどうっすか？……風紀委員さん？」

「——！！！」

——そこには、夜来綴がいた。ただし、その腕に風紀委員の腕章は無く、彼が自らの意志でここに来たことを暗に示していた。

「けっこう気配とかは断ってたつもりなんだけど……？」

両手を降参するようにひらひらと仰がせ、夜来はこちらにゆっくりと歩いて来るが、

「待て。……アンタ、何者っすか？」

ランサーが夜来に示した警戒感が対魔術師のそれと同等だったことを、テオレルドは感じた。確かに、目の前で不思議な力、一見すれば超能力と見分けがつかない力行使された学園都市の人間が純粹に使命や興味だけでここまでついてくるとは考えにくい。

「返答次第では……！！」

左手に力を込め始めるランサー。その敵意を感じ取り、拳を構える夜来。一触即発の空気に、

「ちょっとストップ!!!」

ランサーの前に、雪崎嶺次が両手をかざして立ちふさがった。

「コイツは、夜来は…俺の相棒だ!!!」

嶺次は一通り、夜来の現状について解説した。

夜来の能力で、自らが超能力者に成り得たこと。

ウォーカーの一件の時には夜来も接続中で、魔術師2人のことを嶺次経由で知っていること。

嶺次は堰を切ったように喋る。

同時に、不完全な自分を認識しながら。

「————なるほど。対象者の能力を強化する能力っスか…」

「とにかく、敵意が無いことを証明できたんだから、さっきの続きを頼むぜ?」

「はぁ……………、ここで彼の参加を拒否しても、結局伝えるつもりな

んスよね？」

振り返った先に、構わない、といった趣旨のジェスチャーをテオレルドから受けたランサー。

俺達諜報部の職員としては失格っスね、と小さく呟くと、彼は嶺次と夜来を近くに寄せ、唇に人差し指を当てながらトーンの下がった声で言う。

「知恵の枝^{ウイズダム}”。それが今回、俺達が追ってきた霊装っス」

「「知恵の……………枝？」」

「声が大きいっス！！！」

慌てて嶺次と夜来の口をつぐませ、ランサーは続ける。

「知恵の枝はごく最近、ロンドン郊外の教会から“発掘”された霊装なんスけど、色々マズいんスよ。……………その性能が」

「マズって…………？」

首を傾げる2人に、ランサーは問い掛ける。

「具体的なことを言っても解らないと思うんで、抽象化した話をしますよ？」

「……………、」

その魔術師としての表情に気圧される2人に、ランサーは口を動か

して

「50+50はいくつつスか？」

と、小学生クラスの質問をした。

「なあ……………!？」

「100だよな…………？」

呆れる嶺次と、ため息を吐きながら応じる夜来。

しかし、

「……………ハズレっス。」

「?」

予想外の反応に眉をひそめる2人。期待通り、といった口調でランサーは告げる。

「“それ”が、知恵の枝の性能ウイズダムなんス。威力が50の術式どうしを足しても、100にしかない。どんなに相性が良くてもっス。……………けど、知恵の枝の前にその常識は通用しない。知恵の枝は相性を無視して、術式を“掛け算”にしちまう霊装なんス」

「!?!?!」

「それは……つまり……？」

絶句する夜来とは逆に、理解が追い付いていない嶺次に、ランサーが告げる。

「つまり、50の術式が2つあれば、2500の威力を持つ術式を放てるって訳っス。……ちなみに、俺達の術式が知恵の枝を行使したら、この学園都市くらいは灰に還るっスよ？」

「な………、」

突き付けられた莫大すぎる単位に実感の沸かない嶺次。以前、2人の創りだす灰色をした射手の魔術を目にしていた嶺次には、なまじ恐怖だけが焼き付いた。

「しかも、知恵の枝のマズい所はもう一つあるんス。……それが、デヴァイサー“管理人”の存在っス」

そんな嶺次にも、ランサーは淡々と続ける。かろうじて現実感を抱いている夜来が応じるが、

「管理人………？」

「言った通り、知恵の枝には術式を倍々にして蓄えていく能力があるっス。けど、あまりに莫大すぎる魔力に術者の方が耐えられなくて、暴発しちまうんスよね……」

「それじゃ、意味なんて無いんじゃない……？」

許容量を越える魔力に、人間は耐えられない。魔術界の戦略兵器、

聖人ですら、扱う術式によっては魔力の暴発、最悪自爆のようなことになりかねない。だからこそ、魔術師達は術式の制御と同様に魔力の循環にも細心の注意を払うのだ。

疑問を投げ掛けた夜来を指で示して、ランサーは答える。

「そこで、デヴァイサー管理人の出番なんスよ。管理人とは文献によれば一種の血族で、知恵の枝に関する魔力の一切をコントロールする能力があるらしいんス」

「じゃあ、その管理人は誰なんだ？」

いわば、巨大すぎるモンスターマシンの手綱を握る存在。事の触りだけを聞いた夜来にも、その存在がこちらにもいなければならなかったことが想像できた。

しかし、ランサーの口から告げられた事実は、想定を上回っていく。

「リエラ・ウイステリア。彼女には、管理人の疑いがかかってるんスよ……」

「!!!!!!」

強大すぎる力を持つ霊装。

そしてそれを自在に“管理”する存在。

それだけ解れば、超能力の街の住人である嶺次にも、強大すぎる力が向かう先は容易に考えられた。

「学園都市を……破壊する気か……!!!!」

——数十分後——

テオレルドとランサーから別れ、2人は学園都市の夕暮れを歩いていた。

「嶺次、どう思う……?」

「どうって……ローマ正教の神父のことか?」

「いや、それもあるんだけど……」

別れ際、先程の戦闘時に3人を拘束した謎の神父についての情報を聞き出した嶺次。彼についての情報は異様に少なく、グラウ・ガーランドという名前とローマ正教に所属しているという肩書きしか彼らも知らなかった。

イギリス清教——、つまり、何の関わりも無いシスターであるはずのリエラを援護した理由も、今のところは破壊活動で共謀している、との説が最有力だったが、詳細は謎のままだった。

「いや、そうじゃなくてな」

「……?」

顎に手を当てて考える夜来には、魔術師達の態度が不可思議に思えて仕方なかった。

わざわざ自らの危機を明らかにし、学園都市の人間に協力を依頼する程に彼らは切迫しているのか。

それにしては、簡単に喋りすぎに思えたのだ。

そもそも裏切り者は彼らで、自分たちを利用しようとしているのではないか?

「どっちでも良いよ。そんなの」

「な………!?!」

考えをぶつけられた嶺次は、実にあっけらかんとした口調で夜来に続ける。

「別にアイツらが悪人で、学園都市を壊そうっていう考えの持ち主だったなら、俺達がぶっ飛ばせばいいだろ?……俺はアイツらの事をほとんど知らないけど、本気だっているのは解るんだよ。………」

どっちの本気なのかはわかんないけどな」

「でも……」

疑いを消しきれない夜来を制止して、嶺次は言う。

「とにかく、アイツらの言葉を疑うメリットなんて無いけど……
……、信じるメリットなら、少しはあるんじゃないか？」

そう言って、嶺次は薄く紺色のかかった天を仰いだ。

——自分自身にも言い聞かせるように。

e p, 3 信じるメリットなら（後書き）

説明文が多かったですね……

次回はバトルにも突入の予定です！

e p, 4 重荷を背負わせたのは（前書き）

今回は魔術師達の話です！

e p, 4 重荷を背負わせたのは

学園都市に、夜の帳が降りる。繁華街とは対称的な山間部。その一角に、研究所跡地のような灰色の箱が立ち並ぶ区画があった。電気は寸断され、人の気配どころか真夏の虫の気配すらしない。

そんな夜陰に紛れ、男は嗤う。

物事というのは、これ程に上手く行くものなのだ、と。

ボタンを1つか2つしか閉めていない緩い前開きのシャツの上に黒いコートを羽織り、右目は垂れ下がった金色の髪に隠されている。その表情は暗く、冷たく、口元に笑みが浮かんでいるだけで周囲の空気が凍りつく。

そんな異彩を放ち、男は嗤う。

「ああ……、聖霊十式が十一式になっちまうなあ……？」

灰色の箱にあぐらをかき、虚ろな目で男は呟く。碧いその目に宿るのは、

———狂気。

そう表現するのが最も妥当な、訳のわからない何かだった。のうとうと生きてきた箱入りのお嬢様など、視線で殺すことすらできそうな程にそれは鋭い。

「ロブス様。知恵の枝、^{ウイスタム}捕捉に成功致しました」

不意に、暗闇から太い声がした。

目を凝らせば、そこに大人のシルエットが存在していた。小柄で体格の太い男は長方形というより正方形に近い全身を漆黒のスーツに包み、サングラスを掛け、無理やり教科書の敬語を使っているように言う。

「まもなく、彼らが包囲を完了します。……、ご準備を」

ああ、と間延びした返事と共に男は立ち上がる。遥かに見える学園都市の灯りを焦点の定まらぬ目でぼんやりと捉えながら、

「ああ……。壊すかあ……」

その言葉に、自身も威圧的な姿であるはずの男の背筋が凍る。彼は顔色1つ変えずに言い放つ。学園都市など壊す対象でしか無い、とでも言うように。

「ヴィオレえ、ジジイから連絡はあ……?」

ヴィオレと呼ばれた男はビクリ、と体を震わせて我に帰ると、

「い、いえ。枢機卿からの命令の更新はありません」

——枢機卿。ローマ正教における最高幹部の役職名は、本来ならば最高級の敬意を以て扱われるべき単語なのだが、彼らにその気配は無い。それどころか吐き捨てるように舌打ちをした男は、

「まあ…………、いいかあ？」

ゆっくりと立ち上がる。

“命令”の完遂の為に。

その左手には、5センチ程の盾の形状をしたシルバーアクセサリーが、繋がれた細いチェーンで絡められていた。

西洋の盾をそのままミニチュアにしたようなアクセサリー。彼はそれを額の前に掲げ、先程とは真逆に確かな口調で言葉を紡ぐ。

「御使いは潮^{うしお}、その役は舵。古の巨人、フリウムよ。我が敵^{かたき}を打ち滅ぼすが為、その力を顕現せよ…………」

男が盾に誓いを刻むように瞳を閉じた瞬間。ベゴン！！　と空き缶を熱して膨らませるように金属質な音と共に、アクセサリーに過ぎなかったはずの盾が2メートル弱にまで巨大化し、彼の前にガン、と突き刺さった。

盾の縁にはアクセサリーの時には気付けなかった隠し刃が仕込まれ、幾度も血を吸ったかのような鈍い銀の輝きを有していた。

盾に手を掛け、男は眼下の学園都市を狂気に満ちた眼で映して、

「行くかあ…………」

呟いた瞬間には既に、人の気配も、痕跡すらも消え失せていた。

——同時刻——

褐色の肌に漆黒の法衣を纏った神父、グラウ・ガーランドは街の喧騒から距離を置き、とある人気の無い公園の街灯に背を預けていた。灯りに引き寄せられては無残に焦げ落ちていく羽虫を眺める高身長のグラウには、顔面に刻まれた無数の傷がある。

——しかしその顔は、恐怖より心配が先に立つ程に蒼白く、弱々しかった。

パチパチと小さな火花と共に散っていく羽虫に目を向け、グラウは思う。

（私も……同じようなものなのですね……）

ローマ正教の魔術師、グラウ・ガーランドが学園都市（火の中）にわざわざ飛び込む理由は、たった一つ。

「っ……………う…」

視線の先にあるのは、街灯の隣のベンチに横たわる黒衣の修道女。微かに、しかし苦しそうに呻く彼女――、リエラ・ウイステリアにグラウは目を細める。

（私は……）

フードの端から少しだけ覗く淡い赤毛。小柄ではあるが、大人びた顔立ち。

彼女のため、彼は一つの誓いを立てた。果てしない“代償”と共に。あまりに大きな“枷”を嵌められても、平然と学園都市に乗り込む程。

記憶の中にある、彼女に掛けられた言葉が硝煙と血の匂いと共に蘇る。

『貴方は、大切な何かを守る為に立ち上がったのではないのですか？』

彼の今を形造るその言葉。

「私は………」

思わず口に出していた言葉に、反応したリエラが目蓋を開いた。

「グラ……ウ？」

痛むのだろうか、額を抑えながらゆっくり上半身を起こし、警戒す

るように辺りを見回す。

外傷も無く、その様子に安堵した表情を浮かべたグラウだが、リエラの表情は彼の異様な衰弱と、手首に掛けられた小さな金の十字架のようなアクセサリーを目にして一変した。

「あなた……………まさか!!」

心当たりがあるというより、原因を一瞬で悟った、そういう表情で身長差も構わずにグラウへ詰め寄って行く。

「あの術式を使ったのですね…!」

思いがけぬ言葉に目を見開くも、沈黙を貫くグラウ。彼より頭二つ身長が低い彼女の表情が、有無を言わさぬ気迫に満ちていた。

「何とか言いなさい……………!!」

リエラの詰問にも、グラウは応じようとししない。肩を掴んで揺さ振るリエラは、言葉とは真逆に何故か泣きそうな目をしていた。

まるで、グラウの衰弱は自分のせいだとしても言うように。

それでも、リエラの言葉にも、グラウの表情は揺るがない。

彼が応じないまま徐々に揺さ振る力は弱くなり、最後には縋りつくように法衣を掴んで、額をグラウの胸に当ててかすれる声でリエラは呟いた。

「私は……………、自分の為に皆も、あなたさえも敵に回して……………あ

なたに守ってもらう資格なんて……………!」

胸元で苦悶して言葉を吐き出すリエラに、グラウは言葉をかけられない。声を出せば届くのに、息遣いさえも聞こえるのに、ひどく遠い所に彼女がいるような気がして。

（違う……、違います。貴女にその重荷を背負わせたのは……、私なのですから……………!）

目の前で自戒の念に苛まれる彼女は、グラウの心を責め立てる。

それでも。

誓ったのだ。彼女の為に戦うと。眠り続ける友と。

——覚悟なら、とうの昔に出来ている。

縋りつくように震えるリエラを引き離して、グラウは告げる。

「参りましょう……、彼を、黄道おうどを救いに。それがあれば、彼を救えるはずです……………!」

「!?!」

驚きに硬直するリエラの目は、悲痛と、感謝と、罪の意識の涙で潤んでいった。

しかし、だからこそ。

グラウは、背後の影に気付けなかった。

「裏切り者が愛の逢瀬かあ……？」

遠くから浴びせられた冷たい言葉。

だが、振り返った瞬間には目前に“それ”は居た。

縁に隠し刃を閃かせ、右手一本で軽々と巨大な盾を振り上げた男が。

空を切る音がするよりも早く、僅かに目を細めてグラウは反応した。

月明かりに鈍く輝く刃に向かって、無防備な筈の両手の掌底を突き上げる。

呼応するように、手首のアクセサリーが小さな金属音を立てた。

それと同時。

バシユン！！！！とグラウのアクセサリーから十字に走る閃光。

男はわずかに眉をひそめたが、構わずに盾を振り下ろす。絶大な重量を持つ盾はギロチンのようにグラウの手首を狙って、斬り落とす。

————はずだった。

ガキーン！！！！と。

響いたのは肉と骨を裂く音では無く、刃と刃がぶつかり合う音。

受け止めたグラウの両手には、十字架を逆さにした形状の双剣が握られていた。

宝石や紋章で様々に飾り付けられた西洋刀は80センチ程の刀身。鍔は横に10センチも伸びており、とても戦闘に用いるものとは思えなかった。

しかしそれは、確かにギロチンと化していた盾の刃を交差した一点で受け止め、チリチリと火花を散らしていた。

それでも男は、不敵に笑った。

まるで、防がれたことを喜ぶかのように。

e p, 4 重荷を背負わせたのは（後書き）

いかがでしたか？

何げに主要四人が出なかったのは初めてだったりします…

感想、お待ちしております！

e p, 5 叫びを越えて (前書き)

今回は新勢力 V S グラウです！

e p, 5 叫びを越えて

あまりに一方的な展開だった。

ガキーン！！ とひどく重い金属音が、灯りもまばらな公園に響く。男が真横に振るう盾の刃は、その重量と衝撃でグラウをガードの双剣ごと数メートル下がらせる。

今にも折れそうな程細身の双剣で巨大な盾と斬り結ぶグラウは、物理的な法則を無視しているようにも見えた。

それほど、圧倒的な破壊力。

縦の斬撃を受け止めたグラウの足元が圧力に負けて碎け、いなした盾がアスファルトを紙のように裂く。

「っ……！！」

一見すると善戦しているように見えるグラウだが、まともに反撃を繰り出せない。男が遊ぶように隙を見せても、体が追い付かないのだ。

肩で息をしようにも、どこか空回りしているように細い息遣い。

精細を欠いた、今にも壊れそうな挙動。

それでいて、リエラが案じる声もかけられない程、彼の背中では気迫

に満ちていた。

辛うじて攻撃を凌ぎながら、彼は一步も退かずに男とリエラの間に立ちはだかる。

ただ、護るために。

そんな、呼吸を整えて構えを取ることさえままならないグラウの様子に、男の口元をさらなる笑みが裂く。

「ボロボロだなあ…。第一、お前はもう魔術を使えないんじゃないのかあ…………？」

「答える……、必要……は、ありません…………!!」

断片的な単語だけでなんとか応じるグラウだが、その表情は時間と共に目に見えて悪化していく。

——“攻撃のダメージでは無い”、何かによって。

男はその光景を楽しむかのように、声高に叫ぶ。

「裏切り者が裏切り者の血で庇われるってのは、どういう気分だあい…………？」

叫びの行き先は、グラウか、リエラか。

それを判断する間も与えずに、ガガザガギッ!!!! と刃が襲う。

手刀のように軽々と、巨大な盾を振り回して。

一方的な暴力の嵐の中で、グラウは男の目を見据えて、一つ一つ、選ぶように言葉を放つ。

「こちらにも……、退けない理由、が……、ございます！……！」

「……、へええ？」

思わぬ“反撃”に、わずかに目を細めて笑う男。

本当に、面白そうに。

——ただし、虫の手足をもいで楽しむ子供のように、純粹で残酷な笑顔で、男は言い放つ。

「ゆみしろおうど弓代黄道一人が、そんなに大事かあ………？」

「……！！！」

男の口から発せられたその名前に2人の背筋が凍る。変化に乏しかったグラウの目が見開かれ、愕然とした表情で男を見返す。

告げられたのは、男が知るはずの無い、彼らの根幹にある名前。そんな2人の動揺を加速させるように、男は言葉が続ける。

「酔狂な話だよなあ……。あんな死人同然の罪人の為に、お前達は人生投げ出したんだからさあ……。？」

「な……。何故その名を……。！」

「ハハッ！！ 部下の“弱点”を知りたいと思うのは、上司として当然だろお……。？」

斬撃の嵐を繰り出しながら、男はその言葉でもグラウを追い詰めていく。

「あんな異教の罪の塊に、生かしてやる価値なんて無いよなあ……。？」

まるで、異教であること自体が罪であるかの如く、男は遊びながら続ける。

だが、男は気付くべきだったのだ。その名前を口にする事が、グラウに何を及ぼすのか。

ガァン！！！！と。

不意に、予想外の力で男の盾が打ち上げられた。盾を装備した右手を無防備に振り上げさせられ、男の表情に微かな驚きが宿る。

懷に飛び込んでくるグラウの目には、

———怒り。

普段の彼を知る人間ならば目を疑う程、その瞳は怒りに支配されていた。

グラウは、叫ぶ。

「貴方が………!!!」

叫びを越えて咆哮する。七つの大罪の一つ、怒りに自らがまみれていることを自覚しながら。それでも。

「貴方が彼を……、侮辱するなあああああ!!!」

男の懷、双剣の切っ先を十の字に構えて術式を構築しようとして、

ごぼり、と。

グラウの唇から、赤黒い液体が溢れだした。少くない量のそれは、漆黒の法衣に赤い染みを作りながら、地面までばたばたと零れ落ちていく。

「く……あ………っ」

ガツッ　と地面に剣を突き立て、倒れこむ体を辛うじて支えたグラウは迫る吐き気を抑えながら、男の歓喜する声を聞いた。

「何だ、簡単な理屈だったなあ。逃れられぬ束縛の術式を、自らに害を与える術式で上書きしたわけかあ……！」

目の前で首を差し出すように倒れこむグラウに、手足をもがれた虫を観察することにはもう飽きた、という表情で男は言う。

「それだけ解ればいいや。じゃあなあ……。罪人の神父」

「か………はっ………!!」

頭上に迫るギロチンと化した刃。

さっきと違うのは、切断する対象がグラウの首であること。

そしてグラウには、あがく力さえ残っていないこと。

重力に従って振り下ろされた銀の刃は、グラウの首を

“斬り飛ばさない”。

「……………ああ？」

空振りした。この至近距離で。

それについて思考するより早く、男を衝撃が襲った。

ゴガッ!!! と。

見えない壁に押し退けられるかのように、数十メートルも吹き飛ばされる。

盾を杭のように突き刺し、ガリガリとアスファルトを削りながら受け身を取って睨み返した先には――

「やらせません。……………いえ、やらせない!!」

黒衣の修道女、リエラ・ウイステリアが、男を見据えてグラウを庇いながら立っていた。

その手には、30センチ程の白い杖状の物体。何の変哲も無い棒にしか見えないその霊装の名は――、知恵の枝。ウイズダム

チョークのように粉っぽい白さのそれは、男からでも明らかに見える淡い光を放っていた。

赤く熱した鉄に余熱が残っているかのような、淡く、儚い光。

右手で水平に構えられたそれが光っている理由を、男は一瞬で察知した。

「魔力の残滓による発光……………、それが知恵の枝かあ……………!」ウイズダム

男の狂気に満ちた笑みが、喜びに深く深く刻まれた。

——と、その様子を公園の植え込みから伺っている人影。

夜陰に溶け込みそうな黒髪と、その右腕には風紀委員の腕章。

夜来綴は、そんな状況を飲み込めずにいた。彼には珍しく、連絡や通報といった行為を忘れる程に。

“学園都市の破壊”。

その言葉に、夜来は疑いを深めていく。

“彼なりの方法”で魔術師達を感知、追跡して見つけた所までは良かったのだが、敵と思っていたグラウ・ガーランドの様子がおかしい。

誰かを救いに学園都市^{こしなとしろ}まで来たようなやり取り。

そう、たしか、弓代黄道。

その名前を侮辱された褐色の神父は新手かと思われる男に斬りかかり、そして、攻撃を受けた訳でも無いのに血を吐いて崩れ落ちた。

更に、崩れ落ちたグラウを庇うように、リエラ・ウイステリアがその男を吹き飛ばしたのだ。

——わざわざ知恵の枝らしき霊装を用いて。

彼女が管理人である確証を得たことよりも、夜来は目の前の事態に困惑していた。

（俺達の推論は……、根底が違ったのか？）

目の前で傷ついた仲間を庇う彼女の姿は、破壊工作といった単語とは対極の位置にいるように思えた。

明らかに人殺しの風貌を持つ男とは違う修道女——であるはずの彼女は、対峙することに臆さない。

その目には、叶わぬ願いを目の前にした悲壮な覚悟というより、純粹な決意が満ちていた。

しかし、その対峙は一閃に破られる。

パチン、と。

指を弾いた音がした、と夜来が思った瞬間には遅かった。

虚空から現れる光の壁が対峙する2人の周囲を瞬時に取り囲んだのだ。

さながら、光の牢獄。

そして、街灯の灯りの届かない暗闇から近づいて来る1つの足音。

悠然と姿を現した白髪に黒いローブの少年は右手でクセのある髪を弄りながら、言う。

「ここから先は侵入禁止っスよ……、ローマ正教の追っ手さん？
これは“こっち”の問題っス」

だらり、とした眼で睨み付ける男とランサーの間に、再び緊迫が張り詰めた。

e p, 6 良い知らせじゃ無い(前書き)

P V 7 0 0 0 0 突破!!

ユニーク 1 3 0 0 0 突破!!

こんなに読んで頂いてありがとうございます!!

e p, 6 良い知らせじゃ無い

魔術師と魔術師の間に、交わす言葉は無かった。

「面倒くせえ………」

一方的にそう呟くと、男は

——消えた。

夜来がそう思ったのは一瞬。

次の瞬間には遙か上、跳躍よりも飛翔という単語がふさわしい高さまで男は飛び上がっていた。

危ない、と夜来が叫ぶよりも速くその刃は振り下ろされる。

月明かりに残像すら残して。

ドォン！！！！

と。アスファルトが捲れあがり、広範囲に撒き散らされる粉塵と生氣を感じられない轟音に絶句する夜来は見た。

瓦礫と化したアスファルトの中、円形に切り取られた平面に佇む少

年と、その頭上を守りながら空中で光を放つ壁。一言で表すなら、中世の城壁だった。ドット絵のように端が歪な石垣は規則的な線を刻み、傷一つ付けずに少年を護っていた。

「全く……、光翼の城壁をダシに使わせるとはいい神経してるっスね……」

頭をガシガシと掻きながら苦々しく言葉を吐くランサー。

「……………!!」

夜来が我に帰って周囲を見渡すと、そこにはあの男も、誰もいなかった。

地面に血痕を残し、あの神父さえも消え失せていた。

（あんな一瞬で……）

その手際に舌を巻く夜来は、若干のためらいを覚えつつもランサーの下へ駆け寄る。

「なあ、魔術師！」

「ん……。さっきから見事に気配消してた風紀委員くんじゃないっスか？」

（うわ、バレてた……）

どうもコイツは苦手だ、という感情を飲み込んで、光の城壁を指を弾いて掻き消したランサーに夜来は問い掛ける。

「なあ、さっきの怪力男、ってか今の一撃は一体何だったんだ？」

「あれはグラウに対するローマ正教の追っ手っスよ。今のはアイツの持つ巨人の術式を僅かに解放しただけっス。……、大分偽装してましたけど」

「ローマ正教……？」

「簡単に言えば、魔術的なイギリス軍とイタリア軍だと思ってもらえれば構わないっス。俺達と奴らは、それくらい目的も手段も違いますから」

どこか刺のある言い方だった。感情が掴みにくいと夜来が感じていたこの少年が見せた微かな“刺”に違和感を覚えつつも、夜来は続ける。

リエラの目的に対して感じた疑念。

グラウとリエラの関係。

そして、弓代黄道ゆみしろおうだという名前。

夜来が一通り並べ立てた質問、ランサーはそれに解る限りで応じると、顎に手を当てて考え始める。

「なるほど、目的と経過が一致しないってのは変っスね……」

と、ぶつぶつ呟きながら。

「さっき言ってた弓代黄道って名前には、他にヒント無いんスか？」

「……ああ、そいつを救う理由があるみたいだったけど。結構、深刻に」

「救う、ってまた曖昧っスね。ただ、それが真実なら可能性は幾つか……」

「……………」

断片的な筈の状況。ただし、2人の思考するスピードは早かった。

「一番高い可能性を証明するのに、役に立ちそうなのは綴っスか……」

「そうだな。お前の魔術師の立場も利用させてもらうけどな？」

意外に素直なランサーに面食らいながら、夜来は携帯に手を伸ばす。
繋ぐ先は知りうる風紀委員最強のハッカー、ゴールキーパー守護神。

だが、頼りにされた恋するオトメがちょっとグレーな所までハックしてしまうことを、夜来は未だ知らない。

――数十分後――

まだ夜遊びには早い時間の繁華街を雪崎嶺次は走りぬけていた。

他の3人は修道女と神父を探す何らかの手段を持っている様子だったが、彼にはそんな都合の良い能力は無かった。

なので、学園都市の路地裏をしらみつぶしに探し回るしか無かったのだ。

遭遇したスキルアウト達を3組ほどボコボコにしつつも、我ながら広範囲を探したと思っていた嶺次だが、一向に彼らの気配も掴めな
いでいた。

「誰かに付いてった方が良かったか……？」

頭を抱える嶺次の纏う空気は果てしなく重い。

学園都市崩壊の危機という慣れたくもない言葉に慣れてしまった嫌気も、若干含まれているのだが。

（学園都市って外部に敵作りすぎだろ……）

どんより、という文字が見えるような雰囲気
の嶺次に近寄る人間は繁華街にはいなかった。

と。

彼の携帯が振動で着信を告げた。

——夜来からだった。

けっこう沈んでいた嶺次はワンテンポ遅れて気付き、通話ボタンを押す。

「何だ? ……良い知らせなのか?」

電話の向こうの夜来はらしく無く息を切らし、焦りの滲む口調で言葉が続ける。

『あまり良い話じゃない。……リエラとグラウの本当の目的が判明した。学園都市の破壊じゃ無かったんだ!!』

「!?!? それ、どういことだよ……」

『あの修道女と神父には、学園都市に友人がいた。弓代黄道って名前なんだが、彼は今、とある隔離病棟に嚴重な警備下で幽閉されている。恐らく、知恵の枝を用いて彼を救い出す事が本来の目的だったんだ』

「?!!? それの何処が悪い知らせなんだ?」

学園都市の破壊ではなく、一人の人間の救出。それが目的だったならば、どちらかといえば朗報の筈だ。

被害が拡大する可能性が格段に減るのだから。

しかし、夜来の知った現実是最悪だった。

『問題はこの先だ。あの魔術師からの話だと、ローマ正教の一部隊が侵入している事が判明した。…………部隊名、クルセイダー神撲騎士。拠点の制圧と皆殺しを得意とする最悪の相手、だそうだ』

「な……!?!」

中世、聖地奪還の名の下に大量虐殺と略奪を繰り返した狂信的軍団。科学の街の住人である雪崎嶺次にもそれくらいの世界史の知識はあった。

だが、そんな軍団が形を変えて現代に残っているというのはにわかには信じられなかった。

『ランサーの話だと、そいつらはローマ正教の汚れ仕事を引き受ける中でも最悪の連中だそうだ。…………そんな連中が、知恵の枝を狙ウィズダムっているとしたら?』

考えるまでもない。

ランサーの掴んでいる知恵の枝に関する情報が正確ならば、学園都市はおろか科学サイドから土地も人間も、全てを略奪するはずだ。

その破壊的な能力で。

「じゃあ、どうするんだよ? そのアイツらの目的地……、隔離病棟ってのは場所を割り出せたのか?」

『ちょっとセキュリティ的にグレーだったけどな。第10学区にある病院に偽装されている様だ。テオレルドは先行したみたいだけど。

嶺次にも地図を転送するぞ?』

「あ、ああ」

一旦通話を終わらせ、受信した画像を開く。そこには――

「これって……?」

前方、第10学区と第7学区の境に横たわる幹線道路の向こう。

窓が少なく、監獄のような雰囲気を漂わせるとある大学付属病院は嶺次の眼前にそびえていた。

「ココかよ……!!」

e p, 6 良い知らせじゃ無い（後書き）

次回、グラウとリエラの過去に触れたいと思います。

ep, 7 戦いが始まる

少年は、理由無く生きてきた。

物心が付くより先に彼の手にあったのは、母の愛とか父の威厳とか、そんなものでは無かった。

鉄臭い血の匂いと火薬の匂いは鼻に染み付いて拭い去れないというのに。

そこにあっただのは、命が消え失せていく世界だった。

本当に理由も無く。

ただ、生きているから。

だから、みんな殺された。

——少年はそれでも生き延びた。

理由を問われれば、偶然としか答えようも無い。

無理やり明るく振る舞っていた赤髪の仲間が死んだ理由は、伝染病だった。

誰より臆病だった大柄な仲間が死んだ理由は、大人からの暴力だった。

理由なんて無い。

——“あの日”も。

十代半ばになっていた少年はいつものように煤けた指で銃を握り、いつものように虚ろな目で狙いを定めた。

それで終わるはずだった。

でも、あの日は違った。

あの日、攻めてきたのは黒装束の十数人だけ。

その不可思議な力に、仲間みんな殺された。

剣でも銃でも無い何かに、抗うことは出来なかった。

息を殺して狙撃した仲間も、手榴弾を抱えて突っ込んだ仲間も、結果は同じだった。

振り上げられた手に、少年は死を覚悟した。

そこに、理由は無かった。

だけど、彼女が現れた。

同年か少し下のはずの少女は、杖を一薙ぎただけで軍勢を蹴散らし、少年の人生に理由をくれた。

魔法使いみたいに。

——この人のために生きよう。

それが、リエラ・ウイステリアという少女との出会い。

それからの数年間、少年は血を吐くような日々を送った。

そして、少年は少女の背中を追いかけられる力に手にした。

少年が二十歳を越える頃には、魔術的な傭兵としてリエラの傍に居られる程。

傍に居ることですらに力の差を感じつつも、渡り歩いた様々な戦場で二人は脅威となった。一方的な暴力を止めさせるために。

——多くを語る術を知らない彼は、彼女に対して抱く感情を表す手段を持てぬまま。

そして。

彼らは、とある戦場で一人の男と出会った。

一大勢力となっていた学園都市の機動部隊に護衛されていた同世代の青年の名は、弓代黄道と言った。

彼はコンテナから自らを助けた2人を不思議そうに眺めていたが、やがて淡い微笑みで返した。

今にも倒れそうな落ち窪んだ顔なのに、人を惹き付ける笑みだった。

——少なくとも、リエラにとっては。

彼は、自らを能力模範プロトタイプと名乗った。学園都市が苦心と莫大な予算を掛けて造り出した、超能力者の原形。物差しとなる存在。

それが、彼が襲われた理由。

彼が預けられていた北米の研究所に、魔術結社が侵攻したのだった。

2人と行動を共にする数日の間に、彼は再び狙われた。幾度かの防戦と逃走で、3人が友情とも似た関係となるのに時間は掛からなかった。

別れの日、弓代はグラウと一つの約束をした。

彼らは、危機感を増しつつあった科学サイドと魔術サイドの軋みを消し去ろうとした。

そして弓代は願った。

彼女を護って欲しい、と。側にいて、いつまでも。

“友”。そう形容できる関係を初めて手に入れたグラウは誓った。

——この世界を、2人がいるこの世界を守ろう。

また一つ、彼は生きる理由をもらった。

3人は所属する組織を分ける。

リエラはイギリス清教。

グラウはローマ正教。

黄道は学園都市。

ただ、互いの世界の為に。

しかし、グラウは約束を果たせなかった。

配属されたのは、ローマ正教内でも残虐さが際立つ部隊。

あえて教義から外れている術式を扱うことでローマ正教である証拠を残さないほど、徹底した“処理”部隊。

学園都市との融和を訴える彼が上層部にとって邪魔だったのかも知れない。

抵抗しようとした瞬間には、足枷となる術式は起動していた。

命令にそぐわない魔力を感知すれば、意識を奪い、体を傀儡のように動かす術式。

彼は再び、生きる理由を奪われた。

グラウは抵抗も、命を断つことも許されずに、ただ術式を行使する人形と化す。

その手は、戦場へ赴くたびどす黒い血に染まった。

自嘲と悔恨の日々の中で、グラウはとある研究所を襲撃させられた。
科学サイド、超能力開発の協力機関。

理由はそれで十分だった。

拠点制圧に適した破壊的な術式を何発も放たされれば終わるはず、
だった。

——“彼”を目にするまでは。

戦闘が行われた公園から数キロ離れた風車群の根元、フェンスが視
界を遮って死角になっている芝生の上に、グラウ・ガーランドは体
を横たえていた。

法衣には血の跡が残るが、表情はいくらか穏やかになっている。

そう思うリエラの膝の上で、グラウは意識を取り戻した。

「—————、」

視界を取り戻すより先に回復していく触覚、聴覚の中で感じたのは
体の違和感。

意識を奪う術式を無理矢理上書きした影響が薄れていたのだ。

反逆を防ぐための術式に上書きしたのは、“ユダの裏切り”を模した術式。

その裏切りで神の子を磔にしてしまったユダは、自戒に駆られて首を吊った。

つまり、この術式が再現したのは裏切りによる磔。

意識を奪うよりも重く、それでいて自らの目的を阻害させない自戒という名の罰は、剣で空に刻んだ十字架に相手を無条件に束縛する代償として、グラウの体をくまなく侵食しているはずだった。

少なくとも、並大抵の回復魔術で治癒するレベルでは無いのだ。

（まさか……？）

グラウの頭がとある可能性に至ると同時に、間近で声がした。

「グラウ……」

彼を救い、彼に理由をくれたその声が。

「リエラ様………？」

目蓋を開き、上半身を起こすも、体の芯に鉄骨が通されたように重い。それでも先程よりは治癒していたのだが。

「よかった……。自戒にも治癒は有効だったようで安心しました」

胸に抱く嫌な可能性に、グラウの口調が強まる。

「で、ですが……。まさか!!」

「構いません。彼を取り戻す為に、あなたまで失う訳にはいきませんから……」

優しくも、すべてを飲み込んでグラウを押し黙らせるに十分な気迫だった。

「し、しかし……」

「私を見くびってもらっては困ります。この程度では知恵の枝の魔力は尽きませんよ」

リエラは、そう言って微笑んだ。

——それを向けるべき相手は自分では無い。

そう自覚するグラウは沸き上がる“何か”を押さえ付けて、言う。

「では……。参りましょう」

何とか立ち上がる彼の表情に迷いは無い。

眠り続ける友は、すぐ近くにいるのだから。

——同時刻——

隔離病棟に偽装された施設の裏手、人払いを施された駐車場に彼はいた。

ロブス・マーカー。

神撲騎士クルセイダーの長である彼の周囲には、黒いスーツ姿の男が3人。

これが、神撲騎士の全人員だった。

反逆したグラウを含めても僅かに5人。彼らはそれだけで、数々の拠点、施設を攻略してきたのだ。中には魔術師数百人が潜む古城さえもあったというのに。

——何故なら、その数的不利を打ち消すだけの術式を彼らは有していたからだ。

地面に描かれた、北欧系の魔法陣。

中央に佇むロブスが血を与えれば、“術式”は起動する。

「一気にいくかあ……!!」

――戦いが、始まる。

e p, 7 戦いが始まる (後書き)

いよいよ次回以降、第三章のクライマックスへ突入です！

e p, 8 覚悟も、信念も（前書き）

第三章、クライマックス突入です！！

e p, 8 覚悟も、信念も

「……………で？　これは一体何の冗談だよ？」

「冗談に見えるのなら、君の目は節穴だな……………」

病院前、人払いとか言う魔術を施したはずのロータリーは嶺次とテオレルドを中心に半径50メートル程の人の円に囲まれていた。

ただし、取り囲んでいるのは制服の警備員や白衣の研究員など、学園都市の大人ばかり100人前後。
アンチスキル

完全な円を描くその布陣は、一見すれば暴走能力者を確保するためのものにも見えた。

——彼らの目が異様な敵意に満ちていることを除けば。

「くそっ！　これは何なんだってんだ！」

あまりに密度の濃い視線と敵意に冷や汗が止まらない嶺次。

「何らかの魔術であることは間違いない、が……………」

背中合わせで警戒するテオレルドでも、術式の子細は読み取れない。

（集団心理に働きかける術式にしては痕跡が読めない……？　かといってゴーレムの術式にしては精密すぎる……）

その間にもじりじりと包囲を狭め、近づく大人達。

嶺次には、大人の軍勢と対峙する手元の銀のトンファーの一对がひどく頼りなく思えた。

日中にアルミや銅、その他を調合して入手したジュラルミンのプレートを表面にコーティングした40センチ程の鉄のトンファーは街灯でも鮮やかな光を照り返す。

単純な性能で言えば、鉄刀を受け止めて砕くことくらいはできるはずなのだ。

が、グラウが剣を備えていることに対する策として行った処置であるこれは、一対一で真価を発揮するもの。対多数、ましてやこの人数は予想外だった。

夜来とランサーの増援は未だに来ない。

と、

にじり寄る大人達の口元から、確かに嶺次はざわめきの中にその囁きを聞いた。

「ニンゲン………ヲ……クロス………」

“人の持つ敵意では無い”。そう直感した嶺次が身構えた瞬間。

「クロス!!!」

絶叫した白衣の男が無防備に飛び掛かってくる。

「!!!」

考えるより、早かった。

ゴシヤア!!!

条件反射的に突き出した右のトンファーは正確に男の顔面に突き刺さる。

見事なカウンターを受けた男は数メートル吹き飛ばされて動かなくなる。

——はずだった。

「!?!」

ぐるり、と。

首だけを動かしてこちらをにらみなおす男。

顔には確かにトンファーの跡が内出血と共に残り、普通なら気を失っている激痛が走ったはず。

なのに、平然と男は立った。

まるで痛みを感じていないかのように。

「ウソだろ……!?!」

「モタモタするな! 次が来る!!」

テオレルドがそう叫んだのと同時。

「アアアッ!!!!」

人語ですら無い何かを口走って、一団が襲い来る。

「っ!?!」

嶺次が怯む。相手が血の通った人間であることを知ってしまったからか、拳動が凍る。

噛み殺される。

そんなビジョンが一瞬だけ浮かんだ。

だが、

「―――、夜行の兵装ナイトメア」

テオレルドのその言葉すら、後から聞こえた。

聴覚を追い越して見えたのは、眼前を横切って10人を軽く吹き飛ばした、黒い巨人。

「!!」

黒い折り紙の塊で無理矢理人の形を成したように歪で、5メートルはある巨大な姿。だが、不思議と恐怖は無かった。

「敵の目の前で無防備に呆けるな!」

「ッ!!」

テオレルドの叫びに我に帰った嶺次は、迫る幾人かを殴り飛ばす。

「この術式は何らかの肉体操作と心理操作を併用している。北欧系の物だがな……」

「北欧系の…?　っこの!!」

二の句が継げない嶺次に、テオレルドは告げる。

「つまり、彼らを物理的に倒すのは時間の無駄、という訳だ」

——その右手に黒い鎧を纏うことなく、素手で軍勢を薙払いながら。

(へえ……)

失礼ながら、テオレルドに冷酷な雰囲気を感じていた嶺次はその行為に感嘆した。

敵をも守るという行為に。

目を向ければ、黒い巨人が攻撃しているのも相手の目の前の地面や、ギリギリの空間で、腕を振るった余波だけで軽々と人を吹き飛ばしていた。

（やるじゃん……。 やっぱり、こいつらが悪役には見えないよなあ……。）

だが、そんな思考をする余裕はすぐに消え失せた。

「……………!!」

視界に入ってきたのは、続々と押し寄せる軍勢。

新手。

気付けば、ロータリーは数百もの狂気に満ちていた。

「テオレルド!! こいつら——」

嶺次が叫ぶも、それを打ち消すように軍勢は咆哮する。

「オオオアアッ!!」

叫び終わるより早く、人間の塊が襲い来る。嶺次一人では対応不可能な質量となって。

（捌けない……………!!）

避けようとするれば、敵の中に引きずり込まれることになる。

選択肢が潰された。

見えたのは、寧猛な大人達の目。

聞いたのは、

カシュン、と。

剣と剣を擦るような、金属音だった。

(……………?)

気のせいか、と思った瞬間。

「カ……………ア……………」

軍勢が空中で奇妙な形に固まった。まるで、ビデオの一時停止を押したように。

「!?’」

抵抗どころか声も上げずにそのまま落下し、動かなくなる大人達に絶句する嶺次。

(……今のは)

気付けば、周囲で続々と大人達が倒れ伏していく。

金属音がした方向に視線を向けようとして、

ザグン!!

「…ッ！　　がああああ!？」

背後から突然衝撃を受けて突き飛ばされる嶺次の背中に、一瞬遅れて肉を裂かれた激痛が走る。

焼け付くように収束する痛みが思考を鈍らせる中で、嶺次はバタバタと血の飛び散る音を聞いた。

それが自らの血であると理解するより早く、響いた声。

「あら、失敗……。やっぱり一撃とはいかないか？」

辛うじてふらつく足で踏み止まり、振り返った嶺次の視界には、異質なことに狂気の軍勢に飲み込まれずにいる一人の男。黒いスーツと黄色いラインの入った長い黒髪が威圧的だが、嶺次の目を奪ったのは

——クロー。

出来損ないのアクション映画でしか見たことが無い、20センチ程の2本の鉤爪が白い歯を見せて笑う男のスーツの右袖から出ていたのだ。

ばたばた、と赤い液体を滴らせて。

激痛で顔を歪ませて睨みつける嶺次に、男は言う。

「うーん。そんな顔で見ないでくれるかな。君はこの場で唯一、部外者だ。だから斬っただけだろう？」

「……………」

明るい、世間話でもしているような声に嶺次の表情は変わらない。現状：つまり、この魔術の理屈を知っている人間なのは明らかだが、聞いた所で答えるとも思えなかったからだ。

「あれ？ 学生のくせに殺意への怯えが少ないね。ああそうか、君も“こっち”の人間なのかな？ ごめんごめん、それじゃ謝らなくちゃね」

と、一人合点した男は、

「……一撃で殺せなくて、ごめんなさい」

「!!!!!!」

その声が聞こえたのは、真後ろからだった。

———同時刻———

褐色に銀髪の神父、グラウ・ガーランドは漆黒の修道服を纏ったりエラ・ウイステリアを護衛しながら、自らの先程の行動を自嘲をもって考えていた。

視界の端に捕らえた少年の危機に、体が勝手に動いてしまったのだ。

自らの体組織をボロボロにしていることに気付きながらも。

（……………私には、やはりローマ正教の敵となるだけの覚悟も、信念も無いのでしょうか）

その心は揺らぐ。2人の“大切な人”の間で。

そんな揺らぎを振り払うように、グラウはリエラに術式を説明する。

「ええ、彼らは北欧神話のラグナロクを再現する術式を行使してい

るのです」

「ラグナロク……？」

リエラは狂気の軍勢を素手で打ちながら合間を縫って駆けるグラウと並走しながら、息を少しも乱さずに彼の答えに耳を傾ける。

「はい、ラグナロクという単語が意味する物は幾つかございます。破滅の火、世界の終末など。ですが、神撲騎士が抽出したのは“神々の戦争”という意味です」

神々の戦争。

北欧神話において、主神オーディン率いる神の軍隊が魔神達と繰り広げ、世界の終末を招いたとされる戦い。

敵将、魔物達を率いた巨人の名はフリウムと言う。

彼、ロブス・マーカーは自らと盾をフリウムに置き換え、フリウムに忠実とされ、人間に敵意を抱く“霜の巨人”としての役を与えた人間を周囲に展開した魔力で操っていた。もっとも、人間ならば例外無く操ることを可能にするこの術式も、脳の回路が違う学園都市の学生や専用の結界を纏うグラウ達には及ばずにいたのだが。

「では……、その術者を倒せば人々を解放できるのですね？」

「はい。ですが、この術式にはもう一段階の展開が可能とのことですので――――」

そう言い終える前に、グラウとリエラは全力で後方へ飛び退く。得体の知れない攻撃を理屈でなく察知したからだ。

だが、

ゴバァ！！！！と。

彼らの予想を遥かに上回る質量、広範囲の一撃が上空から叩き込まれた。

「ッ！！！」

「これ……は……」

砕け散る地面と巻き上がる粉塵の風圧をその身に受け、吹き飛ばされる2人。

土煙の中から、響く声。

「あれえ………？　今のは食らっただろお？」

どろり、とした敵意で周囲を圧しながら、男は、ロブス・マーカーは言う。

周囲にいた狂気の大人達が動かないことに、一切の注意を払うことなく。

「あなたは………！！！」

グラウは、驚嘆するリエラの前に無言で立ち塞がる。

——その両手に、我が身を滅ぼす十字架の剣を携えて。

e p, 8 覚悟も、信念も（後書き）

いかがでしたか？

今回登場のロボスの術式ですが、北欧神話の解釈には突っ込まないでもらえるとありがたいです（汗）

次回、戦いが激化していきます！

e p, 9 任務は失敗だな

引き延ばして、引き延ばして、引き裂いたような卑しい笑みを浮かべるロブス。

十字架の剣を成形しただけで水平に掲げるグラウの腕は小刻みに震え、口元からは不規則な息が溢れているその様子に。

「全く……、酔狂にも程があるなあ？」

「……………」

「お前が救いたい男ってのがどんなヤツだろうが関係ないけどさあ。知恵の枝、返してくんない……？」

強奪ではなく、奪還。あくまでローマ正教、とある枢機卿の方針はそれだった。

新たに発掘された霊装、知恵の枝に関する伝承を片っ端からさらい、それがヴァチカンと関係無いと言いきれない物である限り手中に収めろ、と。

別にどちらが正義だとか、合法的だとか、そんなことは意味を持たない。

奪うだけだ。十字教の庇護に納めるといふ名目の元に。

元来都合の良い手駒としての存在価値を保ってきた神撲騎士は、そ

クルセイダー

の命令を疑いを持たずに実行する。

従順に、迅速に。

「私は……、彼を救わねばならないのです!!」

「うぜえなあ……………」

ただ、迅速に。

「じゃあ、弓代ゆみしろ黄道おうどうの為なら何でもするのかあ？」

そう言って嗤うロブスは、盾に覆われていない左手をギターの弦を弾くように軽く動かす。

何かの意味を込めた、暗号のように。

攻撃の意志を感じないその行為にグラウが眉をひそめた瞬間、

「死ぬのはだあれだ」

ロブスの言葉が引き金となった。

ガッ、と。

周囲をガラガラとした眼光で取り囲んでいた大人達が一斉に自らの首を絞めたのだ。

その人間離れした、限界を越える握力で。

「!?!」

「そんな!?!」

辺りを見渡して絶句するグラウとリエラを前に、ロブスの笑みはさらに引き裂かれる。

彼はグラウとリエラのこれまでの功績を調べ上げたうえで、最も効果のある行動を採った。命を救う為に力を振るってきた彼らの心を碎き、思考を奪い、行動を制限させる。

それが、大量の自殺。

リエラがスーツの男に駆け寄って首を絞めるその手を振りほどこうとしても、びくともしない。

救うにはグラウの束縛術式で自由を奪うしか、現状には無い。

「さあ、コイツらが死ぬ理由は何でしょう。偶然?必然?それとも……、無意味かなあ?」

「————ツ!?!?!」

沸騰しかけたグラウを踏み止まらせたのは、

「……………う……………」

呼吸を失い、顔面を青くする大人達の呻き。——何の罪も、無い

はずの。

（私の……………）

グラウは十字架を構える。

リエラはその動きを止められない。戦場で死を幾つも見てきた彼女には、それしか方法が無いと解ってしまっているから。

（私の魔法名は……………）

剣の切っ先を十字架に見立て、空を切る。

その一連を無防備に行うグラウを、ロブスは襲わない。ただ、目の前で血を吐き苦悶する彼を笑いながら見ているだけだ。

「A r b o r 6 1 7（失われる命の為に）！！！！」

空に刻んだ十字架は無数。それが対象に接触した瞬間に術式は起動し、自戒がグラウを蝕むはずだ。

固く、固く握り締めた剣の名は、ガラティーン。

ケルトの伝承に残る、最後まで民の為に戦った騎士、ガウエインの剣である。

「ふっ!!」

グラウは、十字架を解き放つ。

その名に恥じぬ魔術師になると、そう誓ったのだから。

——失血が多すぎる。

雪崎嶺次は、対峙する鉤爪の男に殆んど遊ばれているようだった。

何らかの操作をしているのだろうか、半径20メートル程の円形に2人を取り囲んで動かない軍勢の中、目で追うのがやっとのスピードで駆け回る刃を防ぐどころかカウンターを決められ、身体中に赤い一線が走っている。白いシャツは赤黒く染まり、もう許容量を越えてしまったのか、激痛は増大しない。

（ついていくのが……、やっど……どころじゃ……）

もっとも、襲う鉤爪からトンファーを变形させた盾で身を護らなければ、腕や足が切り落とされていたかも知れなかったのだが。

荒い息と震える体が、既に嶺次の限界を告げていた。

「うーん？ 地味にしぶといな、君。足止めが命令の僕としては任務達成って感じなんだけど……」

「足、止め……？」

「そだよ。ロブスさんもイイ趣味してるよね。目の前でこの軍勢を自殺させてグラウ達の心をいじくりまわすとか、さ」

「！？」

愕然とする嶺次を前にさらりと言い放つ男は、鉤爪の背を指でなぞりながら続ける。

「この調子じゃあ、“真説”は発動しないかなあ。結構久々に楽しめそうだったんだけど……」

「――、」

嶺次が何か言い掛けて、その音は遮られた。

「そうか。それでは任務は失敗だな」

その声に何らかの反応を2人が示すより早く、

ゴバァ！！！！と。

漆黒の柱と見まごう巨人の拳が地中から驚くべき速度でアスファルトを打ち砕き、男を直撃したのだ。

「ッ……が！？」

すでに立っているのがやっとだった嶺次はその衝撃に耐えられず、血の跡を残して転げ回る。

「全く……、相性という概念は現然として存在するようだな。この男、君には分の悪い相手だったか？」

嶺次に不思議な安堵と、周囲に異様な存在感を与えて巨人が砕いた地面から何事もなく現れたのは、黒衣に眼鏡の魔術師。

「テオ……レルド……」

中指で眼鏡を掛け直し、嶺次を見返すその背には、四肢をだらりと下げたスーツの男が担がれていた。先程の言葉から察するに相性の良い相手だったのか、と。

そんな思考をする嶺次を、男の声は留める。

「あれれ。ジャツロのヤツ、あっさりやられ過ぎないかな？」

攻撃と同時に飛び下がって辛うじて巨人の拳からのダメージを逃がした男は、額の血を拭いながら言う。

だが、それ以上の猶予をテオレルドは与えない。

「さて……………、お前にはその“真説”とやらの正体を教えてもらおうか？」

尋問のために、巨人の掌が上空に掲げられる。

形成されていく凶々しい光弾は、右手の鉤爪を構える男を何のためらいも無く貫くだろう。

「あちゃー。ロブスさん、すみません。こりゃ無理ですわ」

軽薄だが諦めが交じった声色の男を、“悪夢”の名を冠する魔術が襲った。

人間には、確かに限界が存在する。

本気を出せば大体のことは出来るとか、気持ちの勝負が肝心だとかは、戯れ言でしか無かった。

——少なくとも、現在のグラウにとっては。

「……………、——」

地面に広がる血溜まりの中、仰向けに倒れた褐色の神父は微動だにしない。

銃弾を打ち込まれたガラスのように体の至るところにひびが走り、そこから流れ出る血で法衣は既に原色を止めておらず、彼が口元を微かに動かしていることを見落とせばその生存を疑う程。

「意外だったなあ……。ここまで出来るとは」

グラウを見下ろすロボスの口調には、ほんの僅かに驚嘆が交じっているようにも感じられた。

「グラウ！！ 返事をしなさい！ グラウ！！」

リエラは、彼の危機を前に叫ぶことしかできない。心証の問題ではなく、物理的に不可能なのだ。

背後から突然、透明になる魔術を施した男にねじふせられた彼女はただ、グラウの名を呼ぶことしか出来ないでいた。

周囲には十字架の束縛を受けて人形のように固まった軍勢が——
およそ、100人。

蝕む自戒がグラウの体を物理的に駆動不可能にするまで、彼は抗い続けた。

——己の魔法名を、秘められた意味を、果たすために。

だが、それを嘲笑うロブスには魔法名すら存在しない。

胸に刻むだけの理由など無いのだ。

（うぜえ。うぜえ。……、何なんだコイツらは……）

彼にはグラウの行為が、自滅を選んだことが、一切理解出来なかった。

面倒くせえ、と口の中で呟くとロブスはリエラから奪わせた、白い何の変哲も無い短い杖を弄びながら言う。

「これが知恵の枝……。案外普通の感覚だなあ？ 莫大な魔力は感じるが――」

「!？」

軽口を叩くロブスにリエラは怪訝な表情を隠せない。知恵の枝は、デヴァイサー管理人が取り扱わない限り際限無く魔力を吸収していく。一歩間違えば、手にしただけで命の根幹たる最低限の魔力すら奪われかねないのだ。

そんな様子を一瞥したロブスは、これからの楽しみを押さえきれないといった感情を乗せて告げる。

「ああ、俺も管理人だけど？」

「!!」

管理人の血統には明らかでない部分が多い。だが、こんなにあっさ

りローマ正教の処理部隊に血筋が繋がっているとはリエラには思わなかった。

実はこの事実がローマ正教の枢機卿が知恵の枝を“庇護”させるための根拠の1つだったのだが、それを彼女が知る由も無い。

「まあ、邪魔者は消えた。 ついでに知恵の枝も得た。ウイズダム さあ、科学サイドの終末を見ようかあ……!!」

「待———」

リエラが言葉を発するより早く、ロブスの掲げる知恵の枝から放たれた光が辺りを覆い、彼女の五感を奪っていった。

e p, 9 任務は失敗だな（後書き）

果たして、嶺次達に為す術はあるのか？

という今回でした。

何だかオリジナルが膨らみすぎた気がするので、今章のあとに設定集を投稿しようと思います。いかがでしょうか？

ご意見などありましたら、感想でお待ちしております。

e p, 10 これは現実だぜ？

——おかしい。

ロブスは、溜め込んだ魔力を発動した瞬間に絶対的な違和感を感じた。

別に術式の発動といった動作は必要無い。

ただ、その魔力は溢れ出ただけで辺りに絶大な破壊をもたらすはずだ。

——ショートした電流が、電子機器の回路を否応なく焼き切るように。

だが。

「何だ………これは！？」

知恵の枝から発せられるものが、その魔力が、異質すぎるのだ。

通常、攻撃の術式には少なからず敵意が交じる。そういう意思の元に生命力から魔力を練り上げて攻撃を放つのだから、ある意味当然とも言える。その敵意を察知し、窮地を脱したことも幾度かあるロブスにはその確証があった。

そしてロブスは、今に至るまで攻撃以外の術式を行使したことが無

かった。

だからこそ、現状に感じた違和感を言葉にする術を持てずにいた。もしも、彼がとある分野の術式に特化した魔術師であつたならばその違和感の正体を悟ったかも知れない。

——“慈愛”と呼ばれる、その違和感に。

「これは何なんだ!!!!」

もう、魔力の放出は止められない。

「あの……光は……?」

血塗れの体にテオレルドの応急処置を施された嶺次は、軍勢の先にそれを見た。

病院に届く程の高さはある光の柱が、軍勢の向こう側、死角となっ

ている箇所から天から突き刺さった矢のように立ち上っているのを。
打ちのめしたスーツの男2人を束縛したテオレルドも同様に光を見
たが、嶺次の愕然に対して彼の反応は絶望だった。

「まさか……………!!」

「お、おい。あれは……………」

「……………ッ!!」

説明する間も惜しい、という表情を珍しく滲ませて彼は光の柱へ駆
け出す。

息も絶え絶えの嶺次を伴って、何故か棒立ちのままの軍勢を縫って
走るテオレルドは、あの種の光が知恵の枝が魔力を放出した時に放
たれること、そしてそれは魔力に比例して増大することを話した。

「あの光量はまずい。戦略兵器に相当する魔力が放たれる可能性が
ある……………!!」

「それじゃ……………?」

「とにかく急げ!! 時間が無い!!」

「くっ……………そ!!」

失血でふらふらになる体に辛うじてバランスを保ち、軍勢を走り抜
ける。それだけの動作が異様に遠く感じた。

直線距離にして、100メートルも無いはずだったのだが。

そして2人は軍勢を走り抜けて、

バシィ！！！！

と。

カメラのシャッターを何万倍にもしたような閃光が2人もろとも周囲を襲った。

「くっ………！！！」

足を止められた2人。テオレルドが防御の為に巨人を発動する間も無かった。

だが、最初にその異様さに気づいたのは嶺次。

「……………？」

——何とも無い。それどころか、

「傷……………が」

綺麗に、塞がっていた。

傷自体の痛みはおろか、失血に感じた頭痛まで一切が消え失せている。

一瞬遅れ、テオレルドが自らと嶺次に起こった違和感を感じ取る。

「回復………魔術だ？」

しかも、並大抵の物では無い。専門の者が至近距離から長時間かけて術式を行使して、ようやく切り傷を一つ止められる。

回復魔術とはそれほどに丁寧で、繊細な物なのだ。

それこそ禁書目録レベルの知識と、聖人級の魔力でも無い限り。

周囲に放った光程度でマナの完全な治癒まで行ったその術式の驚異を、テオレルドは一瞬にして理解した。

「まさか………、知恵の枝の………？」
ウイズダム

「どういうことだ？」

理解を越えた事態に驚嘆する2人に、

「お前え……………!!!!!!」

平淡にして、絶望的な声が響く。

ロブスは知恵の枝をガラクタのように弄びながら、殺意を垂れ流して告げる。

「これも……………、知恵の枝の特性ウイズダムかあ!!」

組み敷かれたままのリエウを、ドロリとした言葉で圧しながらロブスは続ける。

「術式を例外無く2乗にしていく。それが“回復魔術”でも、か……。厄介な真似をお!!!!!!」

知恵の枝は、術式の相性を無視して魔力を累乗していくもの。

——それが、結局の理由だった。

ロブスは確かに、知恵の枝に込められた魔力を管理人の力を以て全て解放した。

だが、その中身は。

全て、リエウが弓代黄道の為に織り込んだ回復魔術だったとしたら。

知恵の枝の内部で何乗にも何乗にも増幅された様々な種の回復魔術はその制御をされる間も無く辺りを照らし、恩恵をもたらした。

すぐ傍に倒れるグラウの自戒も、離れていた嶺次の切り傷も、全てを癒して。

そして今、知恵の枝の中には、

「魔力を感じない……。再度織り込む訳かあ？」

“その全て”を、確かにロブスは解放したのだから、

「うぜえ。面倒くせえ……。また時間が掛かるなあ？」

——知恵の枝は、空っぽだった。

全ての魔力を放出した知恵の枝は、単なる杖としての効果すら失っていたのだ。

だが、それはロブスにとって問題では無かった。

魔力の放出など、時間を掛ければ取り戻せること。

ロブスの頭に苛立ちをかき消すほど深く刻まれたのは、自らが回復魔術を行使したという嫌悪感。

何故これ程深い嫌悪感に駆られるのか解らない。

それでも、その嫌悪感の捌け口はすぐに見つかった。

「とりあえず…………、正当防衛って言い訳で良いかあ？」

ぞくり、と。

リエラの背筋を殺意が舐める。

自分を組み敷く男に向けられた言葉の意味を理解する間でも無く、

「…………、は」

それだけで了解の意を示した男は、懷から逆手に持つような短刀を取り出す。

——彼女の頸動脈を掻き切る為に。

リエラが思わず見上げたロボスの目は恐ろしく平淡で、放つ殺意との整合性がそこだけ、取れていなかったことがいやに焼き付いた。

ガァン！！

——ただし、鮮血は彼女を染めない。それどころか、短い苦悶の

声と共に彼女の上にあつた男が突き飛ばされた。

振り下ろされない短刀に顔を上げたりエラが見たのは、ロブスに飛び掛かるローブの男が纏う、黒い腕。先端は突撃槍ランスというより槍斧バルディッシュの形状をしており、それがロブスの盾と一瞬打ち合い、鋭い音と火花を散らした。

不意に彼女を抑え付ける重量が消えた理由も、振り返った先にあつた。

おそらく、学園都市の学生。

彼女より一回り年の低いであろう少年が、両の手に構えるトンファ―で顔をしかめるスーツの男と対峙している。

理由は解らないが、彼女は彼らが敵意を向ける先に自らがいないことを理解した。

啞然とするリエラの視界の端で、もぞり、と。

グラウがその四肢を微細ながら動かしたのだ。

「グラウ………!!」

安堵の息を吐き、駆け寄ろうとして、

「ウゼエ……………」

そう呟いた、だけなのに。

それだけで周囲の空気がロブスに支配された。

激情、怨念、殺意。

それらをごちゃ混ぜにした無理矢理に平淡な声で、ロブスは続ける。

——赤や青、様々な絵の具を混ぜていけば結局灰色になってしま
うように。

「ああ、ああ、うぜえ。……………“真説”やるかあ？ ヴィオレ」

その言葉に、過剰な反応を示したのは嶺次やリエラでは無い。

「それ……………は……………」

ヴィオレと呼ばれた小太りの男だった。

ロブスの言葉に、まるで禁忌に触れようとしているかのようにため
らう素振りを見せたヴィオレだが、

「まあ良いか。全部殺せば……………！」

彼が次の言葉を発するより早く、“それ”は始まった。

ザクリと盾をアスファルトに突き刺し、ロブスは高速で呪を紡ぐ。

「させる……………か!!」

テオレルドが斬り掛かるのと同時、

ビシィ!!!!

テオレルドを跳ね退けるように、盾を中心とした半径100メートル程の地面が砕けた。

それは一定の規則性を持ちながら円形に大地を裂く。

——つまり、魔法陣。

一帯に展開して軍勢を支配していた莫大な総量の天使の力を一円に封じる。それと同時に、数百の大人達は糸の切れた操り人形のように崩れ落ちる。

「ヴィオレえ、ジャツロお、ルポラあ……」

口にしたのは神撲騎士クルセイダーの男達の名。

テオレルドに施された束縛の魔術を碎き、携える銀の武器を經由して数百の軍勢を操れる量の魔力が僅かに3人とロブスに封入される。

意識を奪われていた2人は、知恵の枝が放った回復魔術の余波が取り戻させた様で、どこからともなくロブスの背後に構えていた。

行使した理屈は、単純。

操作する天使の力の総量は同じ。
テレスマ

だが、桁違いの圧縮率が異なる術式を発動させる。

北欧神話を模した“役”を彼らに与え、それは彼らの姿形さえも変貌させていく。

四肢を白く、蛇のように変容させて異形と為っていくヴィオレはその短刀を牙に見立てた、世界樹を食らう大蛇——ヨルムンガンド。獣のように低く唸り、鉤爪を研いでいくルポラはその鉤爪を見立てた、神々の喉を食い破る狼——フェンリル。

溶岩のように深紅の紋様を体に走らせるジャツロはその棍棒を巨腕に見立てた、炎を司る巨人——ムスペル。

外見の変化が見られないロブスだが、その内面は純粹に力を行使する巨人、フリユムのものになっていく。

「おい、魔術ってのは本当に何でもアリなのか？」

「これが……、真説……!!!!」

姿形を変貌させ、人外の者と化す神撲騎士に絶句する嶺次はテオレ

ルドにも狂気に映る術式を前に、

「人間が化け物に変身とか、どこのファンタジーだよ!!」

そう叫ぶが、ロブスは平淡に言う。

「これは現実だぜえ………？ 少年」

地面に突き刺さり魔法陣の核を成していた盾を、今度は武器として用いる。

目の前のイレギュラーを、欠片も残さず磨り潰すために。

e p, 10 これは現実だぜ？（後書き）

次回、ついに神撲騎士との決戦もクライマックスです！

e p, 1 1 お前でなければ（前書き）

いよいよ夜来とランサーも参戦！！

クライマックスに突入です！

e p, 11 お前でなければ

外見が変化し、人間であることに疑いを持たねばならぬ神撲騎士の3人は本当に化け物と成り果てたかのように、嶺次やテオレルドを挑発する。

「久しぶりだなあ、この感覚。ロブスさん、切り刻んで良いんですよー？」

狼が唸る声で言うのはルポラと呼ばれた、鉤爪の男。

「まあダメって言っても切り刻みますけど…」

ルポラはそう言いながら、爪を地面に引っ掛けて身を低くかがめる。

——獲物を狩る、狼のように。

「来るぞ……」

嶺次に注意を促すテオレルドの言葉はひどく緊迫感に満ちていて、自らにも言い聞かせているようだった。

だが、フェンリルの役を得たルポラはそんな警戒を無意味なものにする。

ガキッ！！！！

「…………え？」

嶺次が呆然と声を出した瞬間には、隣のテオレルドが消え失せていた。

ほんの少し遅れて、背後から爆発音が響く。

「！！」

慌てて振り返った嶺次が粉塵の中に見たのは、ルポラの突撃に100メートルは突き飛ばされて病院の外壁に押しつけられ、右腕に展開した魔術で罅迫り合いを演じるテオレルドだった。

「何だ……………よ、これ……………」

速すぎる。ただ純粋なルポラの直進スピードが、嶺次の動体視力を上回っていた。

だが、嶺次があまりの事態に愕然とする間も与えずに白い大蛇が襲い掛かる。

フォン、という風切り音が嶺次の反射神経を動かした。

「よそ見など……………、余裕は無いぞ？」

そう告げる、ヨルムンガンドの役を得たヴィオレの顔面は蛇のよう

に裂け、皮膚も爬虫類の鱗の如くザラザラしたものに变化している。

「この……っ！」

ヴィオレの四肢を変化させた大蛇がのた打ち、絡み付こうとする中で防戦一方の嶺次。

その背後には、足掻くことを許さないもう一つの魔物。

「む……………んっ！！！！！」

その声を聞き取らなければ、嶺次は“溶けて”いた。

ぐじゅり、と。

炎の巨人であるムスペルの力を行使する、ジャツロと呼ばれた男が叩きつける拳より僅かに早く、手元のトンファーを鞭状に伸ばして街灯に絡み付けて回避した嶺次が一瞬前まで居た場所は、飴のように融解して真っ赤な蒸気を上げていた。

「っ……………！！！」

あまりに人間離れた数々の攻撃に背筋が凍る。

攻撃の威力にも、その背後にある魔術師達の感情にも、到底学生ではかなわない気がして。

その恐怖に嶺次が一瞬、ためらったのを、魔術師は見逃さない。

ガバア！！と。

地中からヴィオレの足が変化した大蛇が襲い、絡み付き、嶺次の下
半身の自由を奪った。

「マズ…………ツ！！！」

そして、ジャツロの拳が止めを刺す。

（味方ごと…………だと！？）

冷徹に、淡々と。ジャツロの拳はヴィオレの足もろとも、嶺次を溶
かすために振り下ろされる

刹那。

「白亜の壁……………」
ブランク・ミューラー

パチン、と指を弾くと共に放たれたまばゆい光が、嶺次を溶岩の拳
から護った。

状況を飲み込めていない嶺次の頭の中に響く、声。

（……………ダイアグラム 演算代行、コネクト 接続！！）

それは、超能力者（レベル5）への扉を開く。

（良かった。ギリギリセーフって所か？……………それにしても、この魔術は目にとすると本当に異形だな…………）

頭に直接、音源があるような声は、心強い味方のもの。

「夜来！！」

相棒たる夜来綴に嶺次が安堵する声に応じるように、暗がりから白髪の少年、ランサーが現れる。だが、どこか違和感のあるシルエットで。前回と同様にローブに覆われた全身で、何かが違った。

——が、その正体は掴めない。

「俺にも礼くらい言って欲しいっスね？」

ジャツロとヴィオレがランサーに気を取られている内に、夜来は謝罪と決意を告げる。

（ゴメン。遅れた。……………、挨拶代わりに埋め合わせ、するよ？）

「え？」

その意味を理解しきる間も無く、夜来は嶺次の演算を代行。ロータリーに駐車していた50台はある様々な車の表層を融解させて奪い取り、一つが大人の身長程はある杭の雨と化して魔術師達へ降り注がせた。

「!!!!」

空に漂う鉄杭に魔術師が驚愕する時間も無く、

ドドドドドドドッ!!!!

轟き、辺りを蜂の巣のように打ち抜く無数の鉄杭にたじろいだのか、
ヴィオレの束縛は瞬時に解け、足は地中に消えた。

「う……………わっ!!」

一步下がっていたランサーにも余波と土煙が直撃し、けほけほと咳
き込みながら言う。

「ヒドイっス!! 俺が嶺次の命救ったみたいなものに!!」

「悪い悪い。それより——」

苦笑いで、術式を解除したランサーの苦情に応じる嶺次が土煙に背
を向けようとして、

（まだだ!!）

「!？」

鋭い夜来の声に、半ば反射的に空中に防壁を成形したのと同じ時。

ゴバァ!! と。

土煙を突き破るヴィオレの大蛇が嶺次を防壁ごと跳ね飛ばした。

「ッ！！！！」

転げまわりながらろうじて意識を保つも、フレームだけになった車に激突して嶺次は停止する。

（こんな……力が…）

「痛っつ！！！」

鉄杭が幾つか体に刺さって血を流すままのヴィオレは、休息を許さずに追撃を加える。

「まだ……終われない！！！」

その目は本物の魔物のように血走り、咆哮は嶺次の中に宿るだけの夜来までも震わせた。

「何だよ、何なんだよこの気迫は！！！」

（だったら……、こっちでどうだ？）

固体では無く、半液体で構成された半球状の防壁は自在に形状を変えて衝撃を殺し、軌道を逸らすためのもの。

しかし、ヨルムンガンドの本来の役は“喰らう”こと。それを知る由も無い夜来と嶺次には、目の前の光景が信じられなかった。

一瞬の、内に。

ヴィオレの両腕が変貌した双頭の蛇は、虫食いのように金属の防壁を食い破ったのだ。

（嘘……………だろ！？）

北欧神話を一通り理解しているランサーにも、その光景は異常に映った。

「嶺次！！」

大蛇の前に防壁を失った少年にランサーが駆け寄ろうとして、

「ぬうん！！！！」

死角からぶつけられるジャツロの拳がそれを阻む。

振り回しただけの右腕が陽炎の尾を引き、擦ったアスファルトを黒く焦げさせた。

ジャツロから距離を取りながら、その術式を見破ったランサーは言う。

「北欧神話のムスペルの役、か……。悪いけど、アンタみたいな脇役に構ってる暇は無いんすよ！！！！」

しびれを切らしたランサーは左手を連続して弾き、術式を起動。

「むう……っ!!」

白亜の壁を正八面体の形状に展開し、ジャツロを檻に封じる。焦りを見せるジャツロが内側で拳を振るっても、何重にも重ねられた光の壁は鈍い打撃音を響かせるのみだった。

「さて。お望みの死に方は何スか？………つつても、圧殺と自殺しか無いんスけど——」

ふと、ランサーの隣を影が横切った。

眼前を横切り、すぐ傍で廃車同然となった軽自動車に激突する人影にランサーは見覚えがあつて、そして絶句した。それは、

「先輩!？」

「く……そっ……!」

足を震わせて立ち上がるテオレルドは浅いものの肩から袈裟切りにされ、普段の無表情で冷静なものとは真逆の苦悶に歪んでいた。ランサーですら滅多に見ない程に。

「どうしたんスか!!」

ジャツロから視線を外し、駆け寄って、そして理解した。

術式が固定できていないのだ。右腕に纏う黒衣の槍はホログラムが揺らぐように不安定で、とても武装として使用できそうに無かった。

(こんな…ことって……)

「ランサー………か」

声だけに応じる形で、テオレルドは視線を前方から逸らさずに荒い息で言う。

「盾……は、入手したな？ よし……、“お前でなければ”、ロブスを倒せない。早く……、行け……。失敗は——」

言い終える間も無く、テオレルドが爆音と共に視界から消えた。

いや、高速で突っ込んで来た“何か”に突き飛ばされたのだ。

(あれは………フェンリルの……!!！)

視界で微かに捕らえた敵の霊装に危機感を覚え、光翼の城壁をテオレルドを援護するために起動しかけて、

「来るな！俺の天使テレズマの力ではダメだと言っている……!!！！ お前の

——」

ランサーの足を留まらせた言葉はそれ以上続かず、響く金属音に掻き消された。

(天使の力では……ダメ？)

数瞬だけ思考するランサーの中で、情報が錯綜する。

ラグナロクの術式の意味。

神撲騎士の戦い方。

天使の力の不安定化。

そして、ランサーが扱う“力”。

——その答えは、左腕に宿っていた。

(そう………か!!!)

と、

「ぬああああ!!!!」

「!」

叫びと共に光の檻を巨人の力で無理やりこじ開け、ジャツロがランサーに迫る。

しかし、

「光翼の城壁^{サンクチュアリ}！！！」

間を置かず、容赦無く発動された城壁は光の奔流を以てジャツロを飲み込んだ。

その拳はおろか、余波の熱気さえランサーに届かせること無く。

文字通り“消え失せた”ジャツロに、ランサーは平然と言う。

「……………さて。急いで片付けますか？」

術式の核、ロブス・マーカーを見据えて。

e p, 1 1 お前でなければ（後書き）

次回、ランサーの新技が炸裂します！

e p, 12 正反対の力

リエラ・ウイステリアは数々の戦場を生き抜いて来た修道女だった。人の命が失われる場所で、教えと慈悲による出来る限りの救いをもたらす。

——そのためには、彼女自身が生き抜き、かつ暴力を打ち止めさせる術式が必要だった。

つまり、防御の魔術。

聖クリストフォロス、聖アエギディウスを始めとしたあらゆる守護聖人の術式を扱える彼女は、知恵の枝ウイスタムに術式を吸収されていなければ非常に厄介な魔術師となっていた。

自身の防御はもちろん、攻撃の鏡面的な反射、一切の無効化、戦意の喪失に至るまで種々の術式を行使できたのだから。

だが。

目の前で繰り広げられる現象に、リエラはこう思った。

（彼は……、本当に人間なのですか？）

ロブスが行使するのは、他の3人の様に異質な能力や形態変化では無い。

ただ純粹に、力。

防御の術式を壊し、戦意を奪う術式を飲み込み、反射の術式を打ち砕く。

策を奪われて、命の危機の迫る彼女に追い討ちをかけたのは、術式の不安定化だった。

天使の力の力場テレスマが歪んでいる、と彼女は思う。

——そんなことはあり得ないのに。

天使の力の力場が歪むということは、すなわち世界の理を歪めることなのだ。そんな大それたことが出来たのは、有史以降ですら片手で数えられる程しかない。

まして現代に、そんな術式が存在するなど。

「貴方は一体……、何者なのですか？」

ロブスの盾とその余波をグラウから注意を逸らしながら、何とか回避する彼女の口から思わず漏れる言葉。

「ああ？ 余裕だなあ？……修道女サンよお！！」

しかし、ロブスがそれに応じることは無く、構わずに刃を振り回す。子供が遊ぶようで、それでいて隙の無い流れるような攻撃。

一撃の威力は擦った自動車をあっさり巻き上げる程。

一撃の余波はアスファルトに蜘蛛の巣の如き亀裂を走らせる。

一人の修道女の命は、今にも散ろうとしていた。

「黙って……………、死ねよ!!」

ロブスが足元に盾を叩きつけた、と思った瞬間。

「!!!!」

防御の術式を展開するも不安定なそれを簡単に突き破って、石の礫が無数に、散弾のようにリエラを襲った。

「あ……、あああっ!!」

体を見えない力に突き動かされた彼女はこらえきれずに転げ回って、そして、

「終わり……、だ!!」

振りかざされる刃を、目の前に見た。

が。

ガキイン！！！！

彼女が次の瞬間、金属音と共に目にしたのは、黒いローブと白髪の少年が、

「ああん？」

“左腕で”、ロブスの盾を受けとめた光景だった。

——リエラを護るように。

「……、間に合ったっスね？」

受けとめたことに怪訝な表情のロブスに少年は軽く溜め息を吐きながら言う。

「ロブス・マーカ―。彼女は罪人だけど、イギリス清教こていの人間っス。裁くのは俺達の義務。そして、知恵の枝は俺達の霊装っスよ」

あくまで業務的な声。それはまるで、

「それが……、どうかしたかあ？」

相手を殺す理由が欲しいかのような、問い掛けだった。

その瞬間、くす、と少年が微笑んだのをリエラは見逃さなかった。

「交渉決裂ってコトで……、オーケーっスね!!!!」

少年はそう叫びながら左腕を振るい、ロブスを遠ざけて告げる。

「ロブス。アンタの術式の本質がようやく解ったっス。ラグナロクの本質は集団操作でも、人間の魔物化でも無かったんス。それは……、天使の力の攪乱テレスマっスね？」

「へええ……」

感嘆の息を吐くロブスに、少年は続ける。

「確かに、アンタ達の術式を見た時から妙だとは思ってました。いくらなんでも、人間操作と魔物化でできることには限界がある。……けど、これなら納得っス。多数の軍勢を操る時は彼ら、少数精鋭の魔物達はそれ自身を、天使の力の集積、拡散装置にしてたんスね？」

その言葉に、リエラの中にある幾つかの断片が繋がった。

ロボスの盾は、北欧神話の役だけでなく、天使の力を扱うアンテナの役割も果たしていたのだ。

異形に変化していった部下達も、あれが天使の力の集積と拡散を兼ねたものとすれば理解ができる。その余剰分を体内で流用し、魔物達の力を行使していたのだ。

通常と異なる力場に変化した天使の力では、大抵の術式は不十分な魔力しか練れず、不安定な紛い物と化す。

そんな状況の敵を殲滅する事など、容易いだろう。

武器と防具を一方だけ取り上げた決闘など、フェアであるわけが無い。

——と、彼女に一つの疑問が浮かんだ。

目の前でロボスの剛力を防いだ少年も、天使の力は扱えないはずだ。

では、“彼が扱っている力”は一体何なのか？

先にそう問い掛けたのはロボスだった。

「テメエのそれは……何の術式だあ？」

そして、少年は軽い表情を崩さずに言う。

「俺のは、…………アンタ達とは正反対の力っス」

「……！」

そう言い終えるのと同時に、少年は左腕を覆っていた黒いローブを取り払った。

そこには、

盾と言うよりは、手甲。左腕全体に白い板状の装甲が展開され、まるで左腕全体が機械の鎧にすげ替えられたようだった。そこに異彩を放つのは刻まれた紅の十字架と、肘の辺りに突き出た角柱。だが、その霊装の名は、

「ギアラハッドの盾。学園都市内部の協力者に調達してもらった特徴を抽出したレプリカなんスけど、性能はお墨付きっスよ？」

「貴様…………、それで悪魔の——！？」

ロボスの驚嘆に少年は僅かに嗤うだけで、答えない。代わりに囁くのは、リエラの常識を超越した術式の鍵。

「——光よ(T F T)」

「……！」

身構えるロブスに構わず、左腕を水平に掲げて少年は呪を紡ぐ。

「其は世界に君臨する女王にして、全てを慈しむ者なり（P T
T V V S K O T A）」

イギリス清教であるリエラにも聞き覚えの無い呪に、少年から距離を取るロブス。

「影も、夜も、無明の闇も、全てを抱いて世界を染めよ（S S
A M M C O O T K）！！」

その叫びと同時。

少年の左腕から閃光が放たれ、爆発した。

思わず目を覆ったりエラが視界を取り戻して見たのは、

まばゆい光に包まれ、一つの塊と化した左腕だった。

先程の装甲も目を引くものだったが、そんな話では無い。

天使の翼と呼ぶにはあまりに不自然で、毒々しささえ感じさせる莫大な光の束が肘の角柱に沿って収束し、指を覆われた左腕の先から流れ出ているのだ。

世界に流れる力をそこだけ狭め、圧縮したように。

少年は左手を満足気に掲げながら言う。

「普段なら城壁状に展開する光翼サンクチュアリの城壁を左腕のギアラハッドの盾にかき集め、圧縮し、纏わせる。RPG的に言えば、“憑依装甲”って感じっスかね？」

「貴様……、一体その力は……」

少年は当然のようにその術式の理論を述べるが、それは彼女の理解を遥かに越えていた。

白い、悪魔の力。

魔術的な常識を軽々と打ち破る術式を扱う少年はロブスに左腕を突き付けて、それを放つ。

——瞬間、左腕の撃鉄トリガーが炸裂した。

ドウツッ！！！！！

背後の光の束が後ろから盾に吸い込まれ、純白の噴射となってロブスを直撃したのを彼女は目で追えなかった。

気付いた瞬間には、ロボスの体は百メートル程先のワゴン車に激突して炎上していた。その術式に2つの意味で驚嘆するリエラ。

（凄……！！）

いくら扱う力が違うとはいえ、少年の魔術は異端すぎる。

瞬間的に聖人でも扱えない莫大な魔力をかき集め、それを銃弾として放射する。

あの左腕は、拳銃で言う標準装置でしか無いのだろう。本来の銃弾はおそらく、背後に流れていた光の束。

——それでも、少年にかかる負担は相当なはずだ。

そう少年を案じる声をかけようとして、

「くそがあ……！！！」

「！！」

狂うようなロボスの声が、背筋を凍らせた。

自らの盾を無惨に破壊され体中に火傷を負った彼の目は、まるで何かに脅迫されているような気配さえ漂わせていた。

「オマエら……、随分ふざけてくれるじゃねえかあ？」

盾の残骸をかなぐり捨て、こちらに飛び掛かるロブス。

——だがそれは、既に勝敗の決したものだった。

ごぼり、と。

ロブスの体内で何かが泡立ったような音が周囲に響く。

それが対峙する2人の耳に入ると、同時。

「が………あああああっつ!？」

おぞましいロブスの絶叫が放たれた。

(天使の力の……、暴走……)

内側から破裂しそうになる体を押さえつけながら、彼はこちらに歩いて来る。

だが、それすら叶わない。

場を支配し、力場を乱す為に必要な集積、貯蔵装置であった盾を破壊されたロブスの体に、尋常でない量の力が流れ込んだのだ。

とても一介の魔術師が押さえきれぬ量では無い。

ロブスの体内で暴風を起こす魔力は彼を容赦無く食らい、壊していく。

「哀れな末路っスね……」

そう言いながら、少年はロブスに歩み寄る。

「貴……様……！」

崩れ落ちるロブスは、もはや言葉もろくに話せない。間もなく彼の体は魔力に耐え切れず、ただの脱け殻と成り果てるだろう。

そんな状況を理解した上で、少年は言い放つ。

「安心すると良いっス。跡形も無く、消してあげますから」

構える左腕は一撃必殺。

だが、ロブスは笑いながら最後に言った。

「そう……かぁ。オマエえ……、堅盾騎士団（10th Shi-elder）の……、生き残り、かぁ……」

眉を上げてランサーが微笑んだ。

ただし、哀しい笑みを。

それがロブスの目に入るより早く、ランサーの左腕は風切り音さえ立てずに彼の体を貫いて、天使の力と悪魔の力の暴れ狂う彼の体は跡形も無く霧散した。

（堅盾……騎士団？）

僅かに聞き取ったその単語の意味を理解することは、彼女には出来なかった。

e p, 1 2 正反対の力（後書き）

次回、三章のバトルが決着します！

e p. 13 **すごくどうでも良い(前書き)**

V S 神撲騎士、決着です！

e.p. 13 すごくどうでも良い

予想だにしなかったロブスの敗北は、クルセイダー神撲騎士の壊滅を意味していた。

「ッ!？」

レベル5の嶺次と渡り合うヴィオレの皮膚が突如、沸騰したように泡立った。

彼が理解したのは、術式の核であるロブスの盾が効果を失ったこと。

(ロブス様が……………!?)

それと同時に、テオレルドをスピードで圧倒していたルポラにも異変が生じる。

「ロブスさんが……………ねえ」

ポロポロと崩れだす表皮を眺めながら、ルポラは軽薄な口調を止めない。

「どうやら……、お前達の負け、だな」

片膝をつきながら不敵に言うテオレルドにも、ルポラの態度は変わ

らない。

「いやいや、負けとかすごくどうでも良いんだよね。俺達は“帰れない” んだからさ？」

それは、覚悟の裏返し。

捕囚とされれば、ローマ正教の中枢である枢機卿に逆賊として処理されるのだから。

——都合の良い末端部隊とは、そういうこと。

だからこそ、ルポラはその攻撃を緩めない。

変化した表皮を自らの挙動で崩しながらも地面を蹴り、テオレルドに鉤爪で切りかかり、火花を散らす。

だが、そこには既にルポラの優位は存在しない。

術式の核を失い、天使の力の集積、拡散による攪乱を行えない魔物化では。

振り下ろす鉤爪が、ガァン！！ と響く音と共に欠ける。

魔力に形成された表皮はすでに原形を留めずに一撃の度に崩れだして、

ギァン!! と。

天使の力を本来の領域に取り戻したテオレルドの一振りで、勝敗は決した。

砕け、切り裂かれたのはルポラの方。

「あーあ……、捕獲? 処分? 一体どっちだい?」

袈裟切りにされて赤い線を吹き出し、地面に仰向けに倒れたまま、彼はふざけた口調を止めない。

「……………決まっている」

そう言って、テオレルドの黒い右腕は振り下ろされた。

「アンタ達の負けだ。……、認めろよ」

「ぐ……………っ」

嶺次の前で足掻くヴィオレにも、勝機は失われた。

動きの鈍った四肢を連続して放たれた角柱で釘打ちされ、地面に縫い付けられている状況に苦悶するヴィオレ。

「どういう理屈かは知らんが、アンタの術式、もう使えないんだろ?」

空中に纏う巨大な六角形の鉄板に反響させながら、嶺次は語り掛ける。

ひびが入り、身体が崩壊していくヴィオレに。

（さっきの光の一線。……あれはランサーの魔術だ。ロブスをきつと倒したんだろ）

「じゃあアイツ達に相談、だな……」

ヴィオレとの戦いで身体中に痣が刻まれ、辛うじて立っていた嶺次はため息と共にへたりこんだ。

「さて……、リエラ・ウイステリア。アンタの処遇はイギリスに帰還してからの問題っすけど、彼、どうするんスか？」

ロブスの懷から転げ出た知恵の枝を特殊な布で包装しながら、ランサーは問い掛ける。

「私………は………」

意識を取り戻して、彼女を守るように立ちあがるグラウ・ガーラ
ンドに。

そして、返答は別の形で返された。

グラウが示した答えは、

「知恵の枝を……、渡して貰いたい」

そう、重い口調で言って十字架の剣を再び形成し、ランサーに突き
付けたのだ。

だが、

「わかってるっスよ。グラウもリエラも、弓代ゆみしろ黄道おうどうの為に罪を犯し
たんスよね？」

「「!？」」

ランサーはこの行為を予想していたかのように、あっさりと答えた。
そして、

「先輩、別に問題解決させても大丈夫っスよね？」

暗がりからいつの間にか現れたテオレルドも、その理由を悟っていた。

「……………、構わない」

「よし、それじゃその物騒なモンしまつて下さいよ」

「……………、？」

状況を飲み込めないグラウとリエラに、ランサーは半ばあきれ顔で言った。

「だから、俺達の存在目的は戦を最小限に抑えることなんス。アンタ達の願いを叶える程度で戦が納まるんなら、安いもんスよ」

一瞬の、間。その間に、グラウとリエラは顔を見合わせる。

「……………、それ、は」

絞りだすような声の端々には、グラウの安堵が明らかに交じっていた。

緊張の糸が切れたのか、頼りなく揺れるリエラ。

「やれやれっスね……」

そんなことを思いながら、ランサーは眼前にそびえる病棟を見据えた。

――30分後――

「ふうん。そんな理由があったのか……」

人払いの魔術を施され、人気を異常なまでに無くしている病院の廊下に、嶺次、夜来を始めとした6人は靴音を響かせて歩いていった。

軍勢として操られた大人達には記憶が欠落していたらしく、意識を取り戻すと不思議な表情で散っていった。

「あなたにも、それだけの覚悟があったって訳か……」

「いえ、貴方たちに無用な傷を負わせてしまったことは謝罪のしようも……」

リエラの謝罪と嶺次、夜来の気まずい空気が漂う中、6人は歩を進める。

弓代黄道の病室へ、争いを断つ為に。

「彼、一体どれくらいの病状なんスか？」

リエラが重ねがけたのは、解放のための攻撃魔術では無く、回復の魔術だった。それを理解しているランサーはグラウへ問いかける。

ランサーにとっては確認作業のつもりだったのだろうが、その問いにグラウはあからさまに言い淀んだ。

「黄道………は………」

まるで思い出したく無い光景を見せられたように、寡黙なグラウが冷や汗を浮かべる。

「―――?」

そうしている内に6人は分厚い防護壁を嶺次の能力で無に返し、警報装置をテオレルドの隠匿魔術で無効にして深部へと進んでいく。

「ここか………」

牢獄のような金属の隔壁には、こう記されていた。

『重要検体…レベルB 断絶処置』

セキュリティの情報レベルが異常に高いことに驚きつつ、その隔壁を消し去る嶺次。

そこには、

「黄道!!」

リエラが呼びかけても一切の返事をしない黄道が巨大な水槽の中、半ば固体のゲル状の培養液に漂っていた。

——無惨にちぎれた四肢を異質なケーブルで繋ぎ、頭蓋に無数の電波受信用の針を突き刺して。

「な……………」

絶句する、空気が凍る。

学園都市の住人である嶺次と夜来ですら、その光景はおぞましい実験のようにしか見えなかった。

“生きている”という意味で言えば、間違いは無いのだろう。だが、弓代黄道には生きている気配すら感じない。逆に言えば、ここまでして生かしておく“価値”が、この青年にはあるということなのか。

「……………こんな……………」

それでも、こんな姿でも、リエラとグラウにはかけがえの無い人だった。

だから、こんな無茶までして助けに来たのだろうか。知恵の枝なら治せると、確信も無く、わらにもすがる思いで。

「……………では、行きます」

テオレルドの監視下で、リエラは知恵の枝に回復魔術を重ね合わせていく。

（こんなレベルで累乗されるとは………！！！！）

テオレルドさえ驚嘆させる回復の光は、病室を照らし、弓代黄道に降り注ぐ。

——物理的な損傷を回復させる術式としては教皇級のものが幾つも折り重なり、その病室を満たした。

e p. 13 **すごくどうでも良い（後書き）**

次回かその次で、第三章の結末になります！

e p. 14 誰にも負けないくらい (前書き)

今回で、第三章は完結です！

e p. 14 誰にも負けないくらい

——結局、弓代黄道は目を覚ますことは無かったらしい。

らしい、というのは、雪崎嶺次に回復魔術の結果の記憶がおぼろげだからだ。

リエラが光を放った姿を最後に、彼の記憶は壊れたビデオテープのようにあやふやになっている。

目を覚ませば、どこかで見たことのある病室の真っ白な天井が朝焼けを映しながら嶺次を見下ろしていた。

「俺って、今回役立たずだったなあ……」

今回、神撲騎士クルセイダーとの闘いで嶺次のしたことと言えば勘違いで仲間割れをして、（あの魔術師が仲間と思っていてるのは解らないが）挙げ句の果てに神撲騎士の一員にボコボコのズタズタにされただけだったではないか。

（はあ。軽く自己嫌悪だー……）

自らの無力感にベッドの上でボーッとしながら、嶺次は体に視線を下ろす。

重々しく包帯が巻かれてはいるが大したことは無いようで、上半身を起こすのにもピリツとした痛みが走る程度だった。

一通り部屋を見回していると、やけに貫禄のある看護師長さんが入って来て布団に無理やり叩き込まれてしまった。

再び持ちこたえられなくなり、病室の天井と向き合った嶺次の胸に去来するのは、あの魔術師達の闘い。

彼らがそういう職業であることは理解していても、その技術、立ち居振る舞い、その全てに学生でしかない自分と夜来の2人との間の明らかな差を感じて更なる自己嫌悪に陥る嶺次。

（これじゃ、護れない……………）

ずっと昔から誓っていた。

護りたい、では無い。

“護る”。

そう、とある少女に誓っていたからこそ、嶺次の目にはグラウ・ガールランドの持つ覚悟が、リエラ・ウィステリアの抱く思いが、生易しいものでないことも理解できた。できてしまった。

（——中途半端、だよな……………）

自分の武器も、戦い方も、覚悟すらそうだったのではないかと思いきやそうになる。

「もっと……………強く……………！！！！」

そう口に出して、思いを確かめる。

と。

「今以上に強大な軍事的能力は、ちょっと困るっスねー」

「!？」

気付けば、病室の入り口に白髪でクセっ毛の魔術師と黒髪で眼鏡の魔術師が立っていた。

「お前、達……………」

「今回はこっちから巻き込んだようなモンなので、一応お見舞い？
に来たんスよ」

「……、大したことは無さそうだな」

飄々と語るランサーとは対照的に、最低限の感想だけを述べるテオ
レルド。

何でこんな真逆の2人がコンビを組んでいるのか聞きたい嶺次だっ
たが、それより先に口を衝いて出たのは、

「弓代黄道、どうなったんだ？」

「結局、アイツの意識は戻らなかったっス。けどまあ、体を修復し
た段階で、いつかは意識を取り戻せると思うんスけどね」

「そう………か」

では、未だ彼らの戦いは終わっていないのだろうか。

友を取り戻すための、戦いは。

「アイツら……、どうなったんだ？」

たとえばどんな理由があろうと、罪は罪。わずかに体が強ばっているのを自覚しながら聞いたランサーの答えは、

「ああ、俺たちの傘下になったっすけど？」

「————は？」

「だから、グラウとリエラは俺たち^{エクゼキューター}執行人の一員になったんすよ。
………ちよろっとブラックな取引の後にね」

「……………そうですか」

さらりと、ランサーは結構危なそうなことまで口にする。

要約すると、リエラとグラウの魔術師としての能力は相当の価値があるらしく、その力をイギリス清教のために使うことで学園都市とのパイプを有するイギリス清教側は弓代黄道の病状、管理、治癒に関する情報を子細まで公開する———という契約を結んだそうなの

だ。

体の良い人質ではないか、と嶺次は思ったが、口に出すわけにもいかず。

「じゃあ、リエラが霊装を盗みだしたって話は……？」

「あれは、ロブス達から逃れるための苦肉の策ってことだったらしいっす」

「え……。じゃあ、アイツらって……」

「無罪放免で左遷という感じっすか？」

見たくない大人の世界を見てしまった、と嶺次は思う。

「でも、神撲騎士が少数精鋭の部隊で助かったっすね。後始末も手間がかからない」

同世代に見える少年の言葉には、とても重く、濃い何かが満ちていて。

「ま、こんなところっすかね、現状は」

ランサーは答え淀む嶺次にそう言いながら手元の紙袋を脇の椅子に置くと、

「そろそろ時間だ。……行くぞ」

「わかったっす。じゃあ“またな”。雪崎嶺次君」

「……、おう」

そう言ってローブを翻すと、去っていく2人。

最後の言葉に含まれた意図を理解するより早く入れ違いで入って来るのは、

「やあ。結構ヒヤッとしたんだけど……、大丈夫そうだね」

風紀委員、夜来綴。

「綴……」

「どうしたんだ？何か落ち込んで——」

夜来の言葉を遮って、嶺次の思いが堰を切る。

「俺は、……もっと強くなりたい!!」

「…、」

「レベル5相当じゃ駄目なんだ。レベル6、いや、誰にも負けない力を——!!」

誰かのためでは無い。そうしなければ、きっと自分を許せないから。だから、嶺次の言葉は止まらない。

「嶺次……………」

顔を歪ませて吐露する相棒の前に、夜来は言う。

「じゃあ、強くなってやろうぜ。……………、誰にも負けないくらいに、な」

それは、夜来自身の内面にも響く。

（そうだ。誰にも負けない力だ。俺には、やっぱり諦めきれないや。
——姉さん）

そう、強く思うしか、今の2人には出来なかった。

——数時間後——

同じく、病室。怒りに拳を震わせる灰笠未鶴^{はいがさみつる}に詰め寄られ、嶺次は半ば命の危機にあった。

「嶺次——」

「ぐ……………」

「大覇星祭の特訓はどうするのかなぁー？」

「それは……………」

今回、嶺次の入院は5日と軽微なもの。但し、時期が悪かった。

今は、8月の下旬。普通の学生にとっては、宿題との逃れられぬ戦いが始まる時期だったりするのだが、嶺次や未鶴きようじようがの在籍する興条学園は少し、いや、かなり纏う気配が違った。

スローガンは、『打倒・五指』である。

大覇星祭はただのバカでかい体育祭では無い。学校ごとの超能力のステータスを学園都市の内外に示す絶好の機会なのだ。

ここ数年興条学園は五指のすぐ後の地位に甘んじており、教師、先輩達から受ける熱意のせいで1年生のはずの未鶴達にも並々ならぬ闘争心が芽生えていた。

そんな学園では、レベル3以上の生徒はかなりの戦力である。そこに暑苦しいプライドが重なりあい、興条学園の校舎は連日の叫びに満ちている、という現状があった。

そんなわけで嶺次にも召集令状が送られたのだが、

本人はベッドに釘付けだった。

「本当に悪かったってば！！今後不用意にケンカは致しません！！」
冷や汗が止まらない。

レベル4の肉体強化^{フィジカルアップ}の拳で殴られでもしたら、間違いなく入院が2週間は延びる。

そうこうする内に、未鶴の拳は狙いを定められて……

「いやいや、後で何でもするからー！！！」

苦し紛れに叫んだ言葉に、未鶴は笑みを返した。

「本当だね？」

「あ、ああ………」

「本当に何でもするね？」

嶺次がその笑みに嫌な気配を感じ取った、瞬間。

「入ってきて良いよー？」

未鶴が病室の外へ呼び掛けた。

廊下の椅子に座っていたのだろう。すぐさま返事をする、とある同級生が入ってきた。

「お、出番ですかー？」

「げ………」

そこには、寝癖が目立つ茶髪さたけりゆういの高校生、茶竹琉惟すいぜきかいりが不吉な笑みを浮かべながら、翠隻解理と共に立っていた。

「いやぁ嶺次、運が悪かったなぁー？」

解理が笑みを堪え切れずに言うが、その真意を理解している嶺次の顔は一瞬で真っ青になる。

別にお見舞いに来てくれたのであれば嬉しいことのはずだ。だが、琉惟の場合は意味が違った。

——それは、彼の能力。

細胞分裂セルダイバイダーのレベル3である彼は、生物の触れた箇所なら何でも、細胞分裂を促進できるのだ。

治癒能力の亜種の分類にあたる。

だが、他の治癒能力と決定的に違うのは、そのリスクにある。

生物の細胞は分裂できる回数限界が決まっている。分裂のペースが早い髪や爪の根は回数が多く、体内の臓器や骨は回数が比較的少な

い。

だが、琉惟の細胞分裂はそれを無視して細胞を分裂させる。

——つまり、老化させているのだ。

琉惟の能力を受けた分だけ、受けた人間の寿命は縮まってしまう、というリスク。

それを理解していながら、

未鶴は暴れる嶺次の体を押さえ付けた。

解理は笑みをもはや隠そうともしない。

そして、琉惟の能力は発動した。

「イヤだーーーー！！！」

絶叫が響き渡ったのは、言うまでも無い。

e p. 14 誰にも負けないくらい（後書き）

次回は予告どおり、設定集を投稿する予定です。

オリジナル設定集（前書き）

という訳で、膨れ上がったオリジナル設定集です。

初読の方にはネタバレを含みますが、こちらを先に読むのもアリか
と思います。

オリジナル設定集

科学サイド

主人公 ゆきざきれいじ
雪崎嶺次

黒い髪に白いエクステを2，3本入れた風貌。興条学園、1年D組の学生。本人曰く普通の学生だが、何故か通常なら気を失う夜来のダイアグラム コネクト 演算代行と接続できる。

性格はごくごく一般的。灰笠未鶴に対しての恋愛感情は一応、自覚している模様。

能力名 ヒートプレス
圧力成形…レベル3

触れた金属を自在に変形、操作できる。嶺次自身はトンファーや日本刀、盾など近接武器の形状にする事を好む。3章の冒頭でレベル4に昇格し、2種以上の金属混合が可能になった。

演算代行でレベル5の力を得ると直接接触なくても金属を遠隔で操作、混合でき、数メートルの鉄の六角柱、無数の鉄板等を基本的に攻撃と防御に用いる。金属原子一つ一つに均一に圧力をかけて操るため、速度は御坂美琴の超電磁砲 レールガン には及ばないものの、かなりの速度。演算能力が上昇すれば、電子回路を用いた複雑な金属加工もできるようになると思われる。

なお、嶺次は演算代行の接続後に奇妙な夢を見るようになった。

やらいつぱり
夜来綴

細身の体格で黒い、クセの無い髪。笑顔で大抵の女子を射止めることができるイケメン。風紀委員の役職にあるが、勤務態度はあまり真面目では無い。所属する学校は不明だが、嶺次と同級生。

性格は常のにらりくらり。恋愛や友情に疎いと本人は思っているが、それでも反射的に固法を襲った赤石に反撃する等の行動が伺える。

能力名 ダイアグラム 演算代行…レベル4

一応、テレパス転話系の分類に入る能力だが、実態はコネクト接続した能力者の脳に莫大な演算式を送り込み、一瞬でパンクさせて意識を奪ってしまう反則的な能力。今のところ雪崎嶺次だけがなぜか接続に耐え、レベル5相当の能力を引き出せる。

嶺次との共闘に対して、何か思う所がある様子。

はいがさみつる
灰笠未鶴

活発なグレーのショートカット、体操服が異常に似合う女子。1年D組で嶺次の幼馴染。女子高生なのに服装に対してガサツな面があり、1章の時点ではろくに私服を持っていなかった。

性格はさばさばした気質。恋愛感情に疎いが、嶺次のことは若干、気になっている様子。

フィジカルアップ
能力名 肉体強化…レベル4

読んで字のごとく、肉体の運動性能を向上させる能力。彼女の場合は走る筋力が特に強化されているようで、3章冒頭の身体検査では100メートルを7秒弱で駆け抜けた。システムスキャン

すいぜきかいり
翠隻解理

嶺次と同級生、補習の常習犯でバカ。オールバックにした髪がトレードマークのお調子者。3章の台詞から、能力のレベルは3以下であると思われる。ちなみに、クレインゲームが上手い。

たざやとうり
田鞘橙李

嶺次、未鶴、解理と同級生。髪はオレンジ色だがかなりの優等生で、2章のレポートの時には嶺次達が頼った。ただし、極端な女性恐怖症。

さたけりゆうい
茶竹琉惟

1章の末話に登場。学生寮で、嶺次の反対側の隣人。寝癖が常に1つは染めた茶髪からはねている。噂、ゴシップ好きの高校生。

能力名 セルディバイダー 細胞分裂…レベル3 生物に触れた箇所の細胞分裂を促進し、傷の治癒を行える。代わりに、能力を受けた人間は寿命がその分だけ短くなる。3章の末話では、嶺次を大覇星祭の特訓に駆り出すために能力を使用した。

まやのあやていん
真崎左紺

嶺次のクラスメイト。3章冒頭で某大食いシスターと互角に対決を

演じた。黒のジャージの上着を腰に巻いて、スポーツ刈りに近い濃紺の髪をしている。

あやみん
浅葱御堂

真崎と同時に登場。鮮やかな水色の外はねパーマが特徴の苦勞人。

あおだてあやめ
青館菖蒲

興条学園、1年D組の担任の女性教師。黒髪のショートボブで、スーツを好む。授業は厳しく、生徒からはその異常なまでの読心のスキルを恐れられている。

魔術サイド

テオレルドⅡミラー

イギリス清教、必要悪の教会内部、エグゼキューター執行人所属の魔術師。黒い、ストレートの髪で縁なしの眼鏡をかけている、20代半ばの青年。服装は大体が黒のローブ。寡黙な性格で、冗談や談笑といった行為とはとてもかけ離れている。それでも、若干ながら喜怒哀楽の表現はある様子。

魔術…黒い、攻撃的な術式を用いる。魔法名はCalpa495（その罪を許す傲慢を我が大罪となす）

右腕を刃物のように鋭い影で覆う黒衣の槍や、ノワール・バルディッシュ黒い折り紙のような

天使テレズマの力で形成された巨人を召喚し、操る夜行ナイトメアの兵装を用いて戦闘において単独でも圧倒的な制圧力を誇る。

ランサーⅡJⅡグレイス

テオレルドと同様にイギリス清教、エグゼキューター執行人所属の魔術師。クセのある白髪で十代後半と見られる少年。服装はテオレルド同様に黒いローブ。性格は軽薄で、語尾に立場、権威に関わらず、くっすが付く。

魔術…白い、防御的な術式を用いる。魔法名はJuratio50
3（汝の足枷に破れぬ誓いを）

左腕を弾いて発動する白亜フランク・ミューラーの壁、空に浮かぶ中世の城壁状の魔術、サンクチュアリ光翼の城壁等天使の力では無く悪魔の力で構成された術式を用いる。

一段階上の術式として、左腕に装備したギャラハッドの盾に光翼の城壁を高圧縮で纏わせる術式も存在する。口上は「光よ。（T F T）其は世界に君臨する女王にして、全てを慈しむ者なり。（P T T V V S K O T A）影も、夜も、無明の闇も、全てを抱いて世界を染めよ（S S A M M C O O T K）」

なお、テオレルド、ランサーの二人はその魔力を重ね合わせることデュアルスベルで重複魔術として聖人の能力を発現し、異常な魔術を行使できる。その際、二人に共通している魔法名はCiniso02（その左手と右手は白夜の如く）。

魔法名の宣言を鍵として、灰色の魔力の塊で成り立つ灰燼グレイ・アーチャーの射手等の戦術兵器級術式を扱えるようになる。

ハイゼⅡヴィレクティム

必要悪の教会内部、エグゼキューター執行人の実務部隊、管理官のポスト。テオレルド、ランサー達の上司にあたる。濃い緑色のボサボサの髪に、くたびれたスーツ。棒つきのキャンディを好んでいる。仕事は適当で、やる気皆無だが、ロザリイに氷漬けにされても平然としている実力者。その底は未だ見えず。

ロゼリイⅡマリノ

執行人の一員の魔術師。ハイゼの無能ぶりにあきれながら、それでも仕事を完璧にこなすキャリアウーマン。スーツに後ろで束ねた黒髪の容姿。氷を扱う魔術を得意とする。

ミレイナⅡアマリー

執行人の一員の魔術師。黒い、様々な装飾の施されたドレスローブを纏う、セミロングのプラチナブロンドの女性。丁寧な口調で喋る。様々な西洋人形を操る術式を扱う。

2章では、赤石風早を学園都市から保護して連れ去った。

第1章 登場人物

ウォーカー（本名不明） 魔法名…Optatio724（その願いは既に手中に）

容姿は金の細く美しい髪に、整った顔立ち、白いスーツといった紳士の風貌。アレイスター・クロウリーに師事し、忠誠を誓っていた魔術師。科学サイドへの裏切りを知った後、彼への復讐を企てることとなる。

魔術…人形ヒトガタを扱う魔術において、天才的な腕前。自爆する匣デコイ、体の一部を武器へ変換させる兵隊など、多様な人形を土からいくらかでも創り出した。

リンク／レヒト

ウォーカーに仕える、双子の魔術師。左右対称の服装をしており、二人で交互に丁寧な言葉を放つ。

魔術を封じる結界と多種多様な銃火器の組み合わせで、魔術に依存する魔術師達を数多く殺してきた。

第2章 登場人物

あかしがぜはや
赤石風早

華奢な体に通常の学生服で、黒い髪に赤いカチューシャをしている。話す言葉の順番が倒置されていて不規則。学園都市に強行突入した原石の少年。強い能力者を付け狙い、学園都市を攻撃した。

能力名 遠隔存在…レベル5相当
テレグラム

空間移動の亜種テレポーターのような能力で、空間と空間を繋ぎ合わせる事ができる。その際、空間を純粋に接続する結合ユニイトとワームホールに触れた物体を削り取って転送する形成アーキテクトの二種類を使い分ける。

第3章 登場人物

リエラⅡ ウィステリア

イギリス清教所属の修道女。黒い修道服に、淡い赤毛がフードから覗いている20代半ばの女性。各地の戦場を渡り歩き、様々な救済活動をしていた。

その過程で出会った弓代黄道との関係が、3章の事件の発端となる。

魔術…聖クリストフォロス、聖アエギディウスなど、一通りの守護聖人の防御術式を扱える。性能は多岐に渡り、その腕は一級品。

知恵の枝ウィズダムの管理人デヴァイサーとしての血筋を受け継いでおり、術式を累乗させていく知恵の枝を用いて弓代黄道を救うために学園都市に潜入する。

グラウⅡ ガーランド

元、ローマ正教、神撲騎士クルセイダーの魔術師。魔法名…Arbor617
(失われる命の為に)

リエラに付き従い、忠実だが融通の効かない青年。風貌は褐色の肌に短く刈られた銀髪、顔には無数の切り傷がある。黒い法衣に神父

用の浅い帽子を被っている。紛争地帯で少年兵として戦っていた経験がある。

魔術…ガラティーンという両手剣を、十字架のアクセサリー状にして携帯しており、それを用いて様々な術式を扱う。但し、3章ではとある事情からその能力は大幅に制限されていた。

ロブスⅡマーカー

ローマ正教、神撲騎士の長。金髪が片目を隠し、胸を開けた黒いシヤツに黒いコートを羽織っている威圧感のある容姿。

3章で、知恵の枝を強奪するために学園都市に侵入した。

魔術…携える巨大な盾で北欧神話の術式を扱う。

自らが巨人の能力を行使する他に、部下を北欧神話の魔物へと変容させることができる。

ヴィオレ

神撲騎士の一員。黒いスーツを着た、小太りの男。短刀を用いる。

ルポラ

神撲騎士の一員。黒髪に黄色のラインが入った髪をしている。鉤爪と俊敏な攻撃で、嶺次を苦しめた。

ジャツロ

神撲騎士の一員。棍棒を扱う、大柄な男。

独自用語

興条学園きょうじょうがくえん

嶺次、未鶴、解理など、登場する学園都市の人間の大半が通う高校。超能力開発においてそれなりの地位を築いており、レベル3やレベル4の生徒が多数在籍している。といっても大半の学生はレベル2以下で、学園の方針としては能力の開発と言うより、能力の使い方に重点を置いて指導している。

3章の末話にて、大覇星祭の成績で『打倒・五指』を掲げている貪欲な校風が明らかになった。

エグゼキューター
執行人

テオレルド、ランサー、ハイゼなど、登場する魔術師の大半が所属している組織。イギリス清教、必要悪の教会ネセサリウスの一部署。存在目的は『いかなる争いをも最小限に食い留めること』。となつてはいるが、本部がロンドン市内でも僻地にあることや、扱う魔術が異端な人物ばかりが在籍していることなどから、実際は他の理由があると推測される。

オリジナル設定集（後書き）

いかがでしたか？

次回からは第4章が始まります！

主人公は執行人の白と黒の魔術師、舞台は中国です（！？）

大幅な仕様変更も企画中ですので、お楽しみに！

e p, 1 そっちじゃねえ (前書き)

新章突入!!

今回の主人公は魔術師達です!

e p, 1 そっちじゃねえ

ところで、能力者同士の体育祭というものはロクなことにならないらしい。

白いエクステを髪に数本入れた風貌の主人公、雪崎嶺次^{ゆきさざきれいじ}は炎天下のグラウンドで心からそう思った。

9月、第一土曜日、14…00。

大覇星祭を2週間後に控えているというのに、興条学園のボルテージはすでに異常だった。

「もっと声出せやあー！ー！ー！！！！」

「「「「おおおおおうう！！！！」」」」

「テメエら、勝ちたくねえのかあー！ー！ー！！！！」

グラウンドに響き渡る怒号、絶叫、阿鼻叫喚。

現在、興条学園、400メートルトラックのあるグラウンドでは騎馬戦の特訓が行われている。

騎馬戦、といっても近代の平和主義にのっとった相手のハチマキを取れば勝ち、という生易しいものではない。

目立つ格好をした相手方の大将の騎馬を突き崩せば勝ちというルールが設定されている。

だが、ここは学園都市。

超能力と超能力がぶつかり合う騎馬戦は、半分の規模で行った予行演習ですらSF映画顔負けの惨状と化していた。

突っ込んだ騎馬に乗った能力者が手のひらから火球を放ったかと思えば、相手方の騎馬4人（おそらく同系統の流水系能力者）が組んで豪雨を浴びせて掻き消し、豪雨に紛れて突撃した光学操作系能力者を擁する騎馬は何かで形づくられた見えない壁に激突して自滅した。

これが、開始30秒で起こった事態。

その後も地面が突如沼地になったり、何故か同士討ちする騎馬が出たり（おそらく心理操作系の仕業だろう）と、これでもかと超能力が炸裂する。

——そんな光景を雪崎嶺次はグラウンドの端にある簡易テントから呆然と眺めていた。

現在行われているのは第2陣。第1陣で既に泥まみれになった嶺次達1年生は、2、3年生のあまりの殺気を目にして言葉を失ってい

た。

「何か……………すげえな……………」

嶺次の脇で珍しく深刻なため息をもらしたのは、嶺次のクラスメイ
ト、翠隻解理。

「男女混合だったのに容赦無いよな……………」

前方で繰り広げられる戦いから目を逸らさずに嶺次が応じるが、

「何言ってるんだ。そこじゃねえよ？」

「……………？」

怪訝な表情で解理に視線を向けると、

「金穂先輩の過激な乳揺れに決まってるんだろうが……！！」
かなほ

「……………、」

拳に力を込めて熱弁する、バカな同級生。

（いや、確かに凄いことになってるのは認めるが……………）

学園でも屈指の美女、金穂先輩は豊かな胸をウソみたいに揺らしな
がら騎馬戦に交じっており、対峙する男子の動揺を誘っているのは

確かだ。

だが、それを大々的に宣言できる辺り、解理の理性を疑いたくなる。

「お前な……………」

「だって制服ですでにスゴイことになってた先輩が体操服でぐんずほぐれつだぜ!? 生きてて良かったって気はしないのか?」

一瞬の逡巡の後、

「まあ…………、少しはベゴバア!?」

ボソツと言った、言い掛けた嶺次は後頭部に衝撃を受けて崩れ落ちた。

ビクンビクンと痙攣している嶺次に青ざめた解理がギチギチと音を立てて振り返ると、

「バカ話してる暇が……………」

そこには、嶺次の幼なじみ、はいがさみつる灰笠未鶴がグレーの髪を怒りに逆立たせて仁王立ちしていた。

「あるかぁー!ー!ー!ー!」

「イヤごめん夫婦ゲンカに巻き込むのはカンベー!ー!」

それを言い終わるより早く、解理の頭頂部に未鶴の手刀が炸裂した。
ちなみに彼女、灰笠未鶴は肉体強化フィジカルアップのレベル4である。素手のケン
カで彼女に勝てる男子は、このクラスには……いない。

「全く……」

息を吐きながら怒気を放つ未鶴に、慌てて視線を逸らす男子達と称
賛の拍手を送る女子。

——学園都市は、今日も平和だった。

——数十分後——

「痛あ……ヒドイ目にあった……」

「元はと言えばお前のせいだろうが!!」

何とか意識を取り戻した嶺次達は額をさすりながら、互いに愚痴を
ぶつけ合っていた。

グラウンドを見渡せばすでに騎馬戦の練習は終わった様で、個人競技に精を出す運動系部員や戦略の練り直しを図る文科系部員が思い思いに活動していた。

この状況で帰宅者がほとんどいないことに、嶺次は少なからず感嘆していたりするのだが。

「ふざけあっていないで、お前達も参加しろよ。こういうのが実際の勝敗を分けたりするんだから……」

と、そこに優等生な田鞆^{たさやとうり}橙李が嶺次と解理が居座るテントの元に現れた。

橙李の肩にはタオルが掛かっており、額に滲んだ汗が努力の様を表している。こういうことにも手を抜けない生真面目さが、橙李らしい。

「お前、個人競技に参加するのか？」

「いや、フォーメーションの確認を終えて休憩中。………ついでに、お前達を連れ戻しに来たんだ」

橙李はベンチに腰を下ろさず、2人を見下ろしたままで答える。すぐに連れ戻すつもりで来たのだろう。語尾の方に力がこもっていた気がする。

「そう、か。お前の能力なら汎用性高いもんなー」

腰を上げながら応じる嶺次。

おそらく体育館かどこかで障害物競走の打ち合わせが待っているのかと思うと、あまり乗り気ではられないが。

「じゃあ……………、行きますか」

解理も腰を上げ、意地悪な程に太陽の降り注ぐグラウンドへ歩きだす。

ふと。

橙李の手にする全画面タッチパネルの携帯端末に目が行った。何らかのテレビを映しているようだった。

「それ……、何だ？」

何気なく問い掛けた嶺次に、画面から視線を外して橙李は言う。

「イギリスの第三王女、ヴィリアンさんのパレードの中継だよ。香港返還20周年の記念行事の一環だって。……………大変だよなー。世界中をイギリスのマスコットみたいに右往左往させられて、さ」

「「へー……………」」

社会情勢的に重要な意味でもあるんだろうか。女性恐怖症の橙李が

女性がメインで扱われる番組を見ていることにちよつと意外な感情を抱きながら、嶺次と解理も画面を覗き込む。

「こりゃー、無いわ……」

解理の感想ももつともだ。確かに、炎天下の香港で肌のほとんど出していないドレスを着せられてオープンカーでパレードとは、ある種の拷問のような印象さえ嶺次に抱かせた。

おとぎの国のお姫様も政治が絡むと急に悲しい存在になってしまうなあ、と思いながら画面から目を逸らそうとして、

(……………?)

何か、違和感があった。

橙李の怪訝な表情に構わず、もう一度画面を覗き込む。

沿道で大勢の人が埋め尽くす香港中心部のオフィス街を、笑顔の第三王女を乗せてゆつくりと走るオープンカー。

別に普通のパレードの……………はず、だ。

お姫様の乗るオープンカーは周囲を黒塗りのリムジンに囲まれている、そこにも普通のSPが

「!!!!!!」

(ウソ……………)

気付いた。その理由に。橙李と解理の追及を躲しながら、嶺次は予想外の人物に動揺を隠せない。

(何で…………アイツらが?)

そこには、第三王女に一番近いリムジンの運転席には――

あの、黒髪メガネとクセっ毛白髪の魔術師2人が。

(何で……………!?)

イギリスという国の中枢に関わる組織なのは理解していたが、こうして見せ付けられると思いの外衝撃は大きかった。

本当に奥深くに彼らはいるのだ、と。

そう思い知らされた、気がした。

——事態は、2日前に溯る。

e p, 1 そっちじゃねえ (後書き)

次回、新キャラも登場します！

今回も感想、お待ちしています！

e p, 2 だったら良かったんだけど(前書き)

今回から、第4章は本筋に入ります！

e p, 2 だったら良かったんだけど

「……………はい？」

9月、第一木曜日。ロンドン、とある教会の地下、エグゼキューター執行人、実務管理官室。

目の前の上司、ハイゼⅡヴィレクティムから告げられた言葉にランサーⅡJⅡグレイスは間抜けな声を出した。

隣のテオレルドⅡミラーも呆然とした表情を隠せない。

それもそうだ。何故なら、

「だから、第三王女を香港で護衛しろって任務なんだよ」

——イギリスという国は、3つの指揮系統から成り立っている。
王室派、騎士派、清教派。

それぞれには影響を与える派閥、与えられる派閥があり、形成された三角形は権力を見事に分散、かつ円滑に行使させている。

そんな三角形の中で、清教派と騎士派は猛烈に仲が悪い。

仲が悪い、という表現では収まりきらない程に。

元々王室派の手足となって武力を保持していた騎士派は、対魔術師という名目でひたすらに武力を蓄え続ける清教派が気に食わないのだ。

そんな騎士派の主な仕事は王室派に意思決定の大半を委ねている。

王を守る為の、“騎士”なのだから。

だからこそ、テオレルドとランサーにはその意味が理解できなかった。

清教派でも最も“嫌われ役”を引き受ける必要悪の教会の更に深部、この執行人という部署に王室派の護衛任務が与えられる、など。

理解が追いつかない2人に、ハイゼは脈々と喋る。

「今度……、つっても明日だけど、ヴィリアン第三王女が返還20周年の香港に英国の代表として出向くことになってる。あ、これが彼女のスケジュールな」

そう言って埋もれた書類の山から1つのバインダーを2人に差し出す。

ラッシュ時の時刻表のようにびっしりと書き込まれた予定、予定、予定。

絶句するランサーにハイゼは、先の質問に答えた。

「――暗殺予告、だよ」

「「!？」」

「ヴィリアン第三王女宛てにこんな文書が届いたんだと、さ」

またしても書類の山から数枚の紙を取り出すハイゼ。

そこには、古代の漢字の書き方である篆書てんしよたい体を流暢に用いて、数行の文章が記されていた。

「…………、何を書いてあるんです？」

さすがにテオレルド達でも、絶滅した言語を扱える程に博識ではない。

――と、横から不意に声が割り込んだ。

『…………英国王室よ』

「！」

そこには、濃紺のスーツを纏ったキャリアウーマンの女性、ロザリイ・マリノがいつのまにか佇んでいた。

「ロザリイさん、読めるんスか？」

「ええ、というかこの文章には見覚えが……」

そう言いながら、ランサーには象形文字にしか見えない漢字を音にしていくなぞリイ。

『英国王室よ。我々は滅んだりはしない。我々は貴国の許されざる侵略、破壊行為に反抗の火を灯す。これ以上の行為を重ねるならば、我々は正義の鉄槌を貴国に叩きつけるであろう。——“清き国の礎”』

ひどく古風で、予告文としては抽象的な内容。さらに脈絡の通らない文章。極めつけは、

「この、“清き国の礎”って……？」

ランサーですら聞いたことの無い、組織らしきその名。

その疑問に応じたのは、ハイゼだった。

「アヘン戦争の時の魔術結社だとよ。コイツは1840年、中国国内の魔術結社が集結して蜂起した時の宣言文だ。最も、蜂起前に殲滅させられたらしいがな」

イギリスが中国を植民地化する足掛かりとしての実質的な“戦争”。そんな昔の、古典的な文章だとは思わなかったランサーからは溜め息が出た。

「それじゃ、旧時代の亡霊を語ったイタズラじゃ無いんすか？こんなめんどくさい書き方するなんて……」

ランサーが手元の予告文を笑い飛ばそうとして、

「だったら、良かったんだけどな………」

「……………え？」

ひどく深刻な口調の滲むハイゼ。

こんな様子になることは滅多に、無い。その口調のままでハイゼは続ける。曲者ぞろいの魔術師集団を、まとめ上げる人間として。

「ロザリイ、この文章に見覚えがあるって言ったよな？」

体を動かさず、視線だけをロザリイに向ける。

「え、ええ。どこで見たのかまでは……………」

「やっぱお前、凄いな。……………こいつの文章そのものは、“公開されて^{アーセナル}いない”。大英博物館に収蔵されているんだよ」

「……………」

急に出てきた単語に首をかしげるテオレルド。

大英博物館に收藏される品々には2つの可能性がある。1つは学術的、魔術的に“貴重”であること。

——もう1つは、魔術的に“危険すぎる”こと。

エジプトの遺跡から収集された呪いの品々、中世の殺人鬼の凶器、等々……………。

人目にさらせばそれだけで命を奪いかねない品々も、大英博物館で封印されることとなっている。

そこにテオレルドの思考が至った瞬間、ハイゼはその口を開いた。

「そうだ。この書状には、文字の1つ1つに呪いが込められている。……………魔導書の原典と同様、現物に触れただけで、一発でオダブツだ」

「……………」

静かな緊張が、走る。

静まった空間でハイゼは言葉を続ける。

「この文章は1840年当時に数人の検閲官の命を奪った。それ以降は厳重に保管が続いているんだが、3日前、複製品じゃない、コイツの“本物”が送り付けられたんだよ。堂々とバッキンガム宮殿にな」

「!!」

おそらく、この場合の“本物”とは、同じ手法を用いて作り出された品、ということなのだろう。大英博物館から盗みだして送り付けるなど、よほどの馬鹿でもなければ行わない。

「幸い、検閲した騎士派の連中は霊装のおかげで一命はとりとめたが、魔導書の“汚染”と同様の症状で、今も意識が戻らない。………ひどいもんだろ？」

ハイゼはさらに、懷から1枚の写真を取り出す。

それは、黒い丸い影が無数にフロントガラスに写っている写真。タクシーか何かの車載カメラの映像を切り取ったものだろうか。

香港のスラムなのか、背景の建物は古く、レンガ作りばかりだ。遠くの高層ビル群との差異が際立って見える。

「これは？」

ロザリイの問いにハイゼは息を吐くと、

「“先遣隊”の、成れの果てだ」

「!!!!」

通例、王室派のVIPが訪れる地は騎士派の先遣隊が現地調査を行う。もちろん魔術的な意味で。

彼らは特に、その地に張り巡らされた地脈を調査する。騎士派の防御網を突き破るレベルの魔術ならば、その準備だけでかなりの時間と痕跡を残すからだ。

彼らはその隠密性、俊敏性において英国内でもトップクラスの装備を有し、異常があればそれを破壊するだけの攻撃力も保持している。

——だが。

この写真に写っているのは何だ？

目を凝らせば、それが押し潰された塊のように均一な円をしていないことが、何かの液体が流れ出てその縁が赤黒いことが、見て取れた。

“その端には、人の爪のような白い欠片が混ざっていないか？”

——つまり、これは。

「一方的に碎け散った肉体だ。……応援要請をするまでもなく、一瞬でな」

ハイゼの説明はその後も続く。

騎士派が並々ならぬ危機を訴えても、中国との友好を維持したい政治家連中は聞く耳を持たないこと。

地脈の流れ、天使テレズマの力の力場も異なる中国では騎士派の霊装も万全とは程遠い状況になること。

申し合わせたようにローマ正教の動きが活発化し、聖人である神裂火織が出向くことは出来ないこと。

そして……、ルーン魔術の天才、必要悪の教会のステイルマグナス、及び現地のエージェント、そしてテオレルド、ランサーの4人で敵対組織の殲滅に加勢すること。

これが、2日前の会話だった。

——そして、現在。

現地のエージェントの合流を待ちながら、テオレルドとランサーにステイルⅡマグヌスを加えた3人はパレードの警護を終えて第三王女の滞在するホテルに戻っていた。

実は、嶺次や橙李が中継で見っていたあのオープンカーにはランサーブランド・ミューラーの白亜の壁が透明に加工されて幾重にも張り巡らされており、一見無防備に見えて堅牢な防御性能を誇っていた。迎撃用として騎士派の狙撃霊装、ロビンフッドノワール・バルディッシュを黒衣の槍でコーティングしたテオレルドが備え、さらに保険としてステイルの魔術で蜃気楼を生み出し、ヴィリアン第三王女の位置を数メートル誤認させていたのだ。

互いに噂だけは耳にしていたが、顔を合わせるのは初めてのステイルとテオレルド達。

だが、初陣は大成功と言えただろう。

彼ら自身、あそこまでうまく術式が噛み合うとは思わなかった程だ。

——そして、その部屋に現れた、男。

彼は、名を名乗る。

「どうも。必要悪の教会、中国派遣員のカイ・イエンプア凱櫻花と申します」

物語は、ここから始まる。

e p, 3 その為の俺です（前書き）

新キャラを絡めて、4章が本格始動します！

e p, 3 その為の俺です

カイ・イエンファ
凱櫻花。

そう自らを名乗ったエージェントは、魔術師特有と言えはそれまでののだが奇妙な服装をしていた。

背はランサーと同程度。薄紅色の髪は長めに伸びている。

纏う服は中国流の着物とでも言うのだろうか。白い羽織は襟や袖が広く開いて、黒い袴の裾もぶかぶかに広がっている。その首には赤いストールが巻かれ、首筋を隠していた。

そして、不釣り合いなギターケースを携帯しているのだ。

それでいて、表情は柔和なもの。

そんな凱は部屋の直径2メートル程のテーブルを作戦会議用の机にするべく、資料を広げながら言う。

「共同任務とは光栄ですね。個人的にはあなた達に結構憧れてたりするので……」

「憧れる?……一体君はどういう趣味をしているんだい?」

長い赤髪、2メートルに近い長身、煙草と香水の匂い。とても14歳には見えない魔術師、ステイルⅡマグヌスは煙草をくゆらせなが

ら頭1つ小さい身長の凱に問う。

「いえいえ、単純に技量的な問題ですよ」

そうしている間にも凱はてきぱきと準備を進め、テーブルには無数にファイルが並べられていく。

「さて。時間的に猶予はありませんし、本題に入りましょうか！」

会議の内容の血なまぐささとは裏腹の、明るい声で凱は言った。

——事態は、想像以上に悪化していた。

会議で提示された資料には、先遣隊に続いて一般の警察にも被害者が出ていること。仮に敵を1つの魔術結社とした場合、規模が大きすぎる。そして、それぞれの状況から判断して絞り込まれた敵のアジトらしき候補地が示された。

「………という訳で、あまり芳しいとは言えない状況です。時間的にも、戦力的にも」

凱は手元の資料を机に置きながら言う。

「さすがに………これは………」

資料に書き込まれた赤い印、すなわち候補地の多さにランサーすら絶句する。

香港とは1つの都市では無い。中国、広東省の太平洋沿い、東京23区の2倍程の面積に広がる大小様々な島々を含めた経済特区の総称なのだ。

そして、そのアジトの候補は市街地の高層ビルの一室、スラムの廃倉庫、山岳地帯の集落に至るまで多岐に渡っていた。

「現在、騎士派の行動可能な人員は全て出払っています。第三王女の元には騎士団長が控えているので安全な問題はありませんが……」

「あの予告文が引っ掛かるって訳っスか」

「そうです。魔術的に“アレ”を軽々と作れる人間なんてそうそういませんよ。ローマ正教の隠秘記録官でもあるまいし」

バッキンガム宮殿に送り付けられた予告文の魔術的性能から考えれば、敵方が魔導書の製造を行える可能性も視野に入れなければならぬ。

——たとえば、どんな小規模なアジトを攻略する時でも、だ。

それはつまり、最大級の虚偽として機能する。

例えば、魔術的な要害を殲滅するにも、ボロアパートの一室を探索するのに、同様の重武装と人員を強いられるのだから。

テオレルドは吐き捨てるように、

「騎士派の分散は20人6組が限度、候補地は100を軽く越える、か……………」

それが意味するのは、打破不可能な現状。

「第三王女の滞在予定中に全てを探索するのは物理的に不可能ですね」

「じゃあ、魔導書を扱えるかもしれない連中が向こうから出向いて来るのを待って訳かい？ そんな——」

ステイルの言葉を遮り、凱は背負うギターケースを指して言った。

「その為の、俺なんですよ？」

「……………」

「どうということだ？」

眉をひそめるステイルとテオレルド達を、凱はホテルの地下駐車場へ案内する。

東洋系の陰陽術、四神相応の考え方を西洋の魔術、五大元素論と混

ぜ合わせたと自称する凱の魔術はテオレルドやランサーも、同僚に陰陽術師——土御門が居るステイルでさえ見たことの無い術式だった。

ギターケースから取り出したのは、西洋の突撃槍のように4枚の白い金属板らしき何かで構成された1.5メートル程の巨大な剣。

鋭角に研ぎ澄まされて細い四角垂の形状を成す三角の板にはそれぞれ中央に細い溝が走っていて、目を凝らせばそれが完全に白くは無く、薄く、本当に薄く、赤、青、黄、緑の色付けがされていることが見て取れた。

凱はホテルの地下駐車場で方角を確かめながらそれをコンクリートの床に突き刺す。

すると、

ピシィ!!

という音と共にコンクリートの地面に密度にばらつきがある蜘蛛の巣のような模様が走り、それを読み取った凱の表情に薄い笑みが浮かんだ。

「行き先、わかりましたよ。………決定的にね」

——1時間後——

テオレルド、ランサー、ステイルは凱に導かれて香港のとある地区を歩いていた。

「……………微細でも異常な地脈の流れを感知した場所が此処、か」

テオレルドの呟きに応じるように、足元のレンガを避けるステイル。乗り越えようにもレンガは風化が進みすぎて崩れてしまう。

「確かに……人目には付きにくい地区、だね」

ここは、香港でも最も退廃が進んだ地区。100年以上前のレンガ造りの倉庫が壊れそうな壁を、剥がれ落ちた内装を、風雨に晒している。

埃っぽい廃墟群に人影はほとんど無く、資本主義から零れ落ちた人々が身を寄せあっている程度だった。

しかし、残骸が転がる歩きにくい道を進む4人にはここを探り当てた凱の魔術の方が気になっていた。

「それにしても、さっきの術式は何だったんすか？異端にも程があるっすよ……………」

「僕もそっちを先に聞きたいね。その剣、一体どういう構造になっ

てるんだ？」

2人に興味をもたれた凱は背負うギターケースを指で軽く叩きながら、少し自慢気に言う。

「こいつの性能は結構限定的に特殊でして。単純に四神相応と五大元素論の足し算でも無く、掛け算を出すのに苦労したんですよ？」

「四神相応との掛け合わせか……」

テオレルドには、頭にある四神相応の知識と凱の術式との差異が違和感となって現れていた。

四神相応とは、中国及び仏教系の国々で見られる魔術の形態。

東西南北の四方に玄武、青龍、朱雀、白虎の神々を配し、それぞれが操る水、木、火、金の属性の魔力を行使するという五大元素論と似た分野の考え方だが、決定的におかしいのは凱の剣に刻まれた色だ。

——黄色。

それは、四神相応には存在しない色。

西洋の五大元素論ならば、風の象徴たりえるのだが。

風という属性の存在しない四神相応には無意味なはずのその色に覚えた違和感を口にしようとして、

「――！！！」

弾かれたように辺りを見回す、4人。

そして、誰ともなく呟く。

「……………来たか」

彼らの目に映ったのは、影から影へ飛び回る無数の人影。

その耳が捉えたのは、武器を鳴らし、剣を引き抜く音。

刹那、

ドォン！！！！

と、テオレルド達の足元が火柱を上げて弾け飛んだ。

「ッ！？」

「問答無用っスか……………、全く!!!!」

宙を舞いながら苦々しく言うランサーは、左手を連続して鳴らす。

フランク・ミューラー
「白亜の壁!!」

光の結晶のように虚空から現れた無数の壁を足場として、彼らは何事も無かったように地面へ降り立った。

「……………、ビンゴ!!」

爆発に紛れた粉塵が取り払われた先には、数十人の魔術師達。

「貴様達を消せとの……………、ご命令だ!!!!」

相手方の1人がそう叫んだ瞬間には、彼らの準備は整っていた。

立ち並ぶ、白き城壁と黒き巨人。

そして、突き付けられる炎剣と白い大剣。

張り詰めた空気に、殺気が満ちた。

e p, 3 その為の俺です（後書き）

いかがでしたか？感想、お待ちしております！

次回は凱が本領発揮します！

e p, 4 ちよつと待ちましょうか(前書き)

新キャラの凱、ついに本領発揮です！

e p, 4 ちょっと待ちましょうか

香港、廢墟街。

埃にまみれた街に溶け込むように、魔術師はイギリス清教の4人を取り囲んでいた。

その手にあるのは、青龍刀、六尺棒、チャクラムといった古典的な武装ばかり。

だが、テオレルドが気になっているのはそこでは無い。

彼らの、武装と振る舞いの差異だ。

確かにその手にある武器や服装の魔術的效果はなかなかのレベルにある。

だからこそ、違和感として浮かび上がるのだ。

——チンピラが慣れない刃物を振り回すだけのような、その感覚が。

（本当に、素人の集団の様だな……………）

与えられただけの霊装。

口にした、“上”の存在。

彼らを倒したところで、次から次へと霊装だけを与えられた魔術師が道を塞ぐのだろう。

面倒ないたちごっこになりそうだ、と思うテオレルドと同じ意見をランサーも有していたようで、

「先輩ー、コイツらに構う必要って……あります？」

頭を掻きながら面倒臭そうに言う相棒に視線を返す。

「早いうちに突破すべき、だな……」

その呟きを聞き取ったのは、ステイルと凱だけでは無かった。

「ふざけ……やがって!!」

リーダーと思われる男が青龍刀を叩きつけたのと同様の叫びに、周囲の数十人が即発された。

「」「ぶっ殺せ!!」「」「」

数十の刃と光の塊が逃げ場なく迫る。

しかし、それらは一瞬で意味を失った。

刃は黒い巨大な拳に叩き潰され、光の塊は白い城壁に無効化され、術者達は炎剣の爆発に吹き飛ばされる。

——圧倒的だった。

凱が軽く口笛を吹いた時には既に半数が薙ぎ倒され、残り半数も戦意喪失に近い状態に。

制圧した軍勢を前に悠々と煙草に火を付けながら、ステイルは目を細めて言う。

「逃げすぎる大の大人を焼くのは気が引ける……………けどね」

手元に、幾つものルーンのカードを残して。

「じゃ、止めてってヤツを…………」

ランサーが左手に力を込めた、

瞬間。

ビシ……………ピシ……………。

まるで、地下で何かが砕けたような音が辺りに走った。

怪訝な表情をする3人に対して、凱の表情が凍りつく。

「マズい!!!!」

血相を変えた凱の絶叫が響くのと同時。

ドウッ!!!!!!と。

先程の火柱を無数に束ねた、高層ビル程の大きさの閃光が4人を包んだ。

巨大な光の柱が打たれ、業火と烈風が撒き散らされる廃墟街はそれだけで崩れて塵と化していく。

それを遠距離で満足気に見つめる、更に数を増した魔術師達がいた。

「授かった地脈爆撃……威力は確かなようだな」

浮浪者の連中を操って囷として誘い出したイギリスの魔術師を、地脈の流れを意図的に暴走させる術式で一網打尽にすること。

それが、彼らの目的だった。

「あんな単純な連中だったとはなあ……？」

あまりの威力と成果に、笑みを抑えきれない中華服の男が不気味に沈黙する軍勢の中に1人。

彼を囲む軍勢も、同様に操り人形に近い。

イギリス清教の術式では、中国の地脈を利用した術式を防ぎきれない。

そう“聞かされていた”男は次なる目的に向かい、歩を進める。

「お飾りの第三王女……アイツを鍵にする！！」

声高に叫んだ目的。

だが、それに反応する声があった。

『ちょっと……待ちましょうか』

「!？」

『アンタがとりあえずの頭ですか?……まあいい。典型的な質問をするけど、“聞こえています”ね?』

頭に直接響く若い男の声。

鈍い人間でも、気付いたはずだ。

——これは、たった今遠くで火柱に飲み込まれた着物男のもので無かったか?

(アレに巻き込まれて生きているはずが無え!それに、居場所だつてどうやって……!?)

吹き出す冷や汗を拭おうともせず、足が縫い付けられたように歩を進められない男。

そんな様子に構わず、声は問い掛ける。

『俺達への攻撃が何を意味するか、解っていますね?』

男は、振り返れない。

味方には霊装だけとはいえ相当の戦力があるはずだ。

背後には火柱が焼き尽くした灰と虚無だけがあるはずだ。

——は、ず、なのに。

（この悪寒は何なんだよ！！）

その答えは、物理的にやってきた。

フツ、と。

男の頭上を影が横切った。

それが何なのかを確かめようと顔を上げた瞬間、

ゴトリ。

周囲の男達が糸の切れた人形のように崩れ落ちた。

「！！！！」

彼を取り囲んでいた男達が、一斉に。

そして、視線の先に1人の青年がいた。

白い羽織と黒の袴に身を包んだ、薄紅色の髪の毛、剣士が。

「貴様あ！！」

男が半狂乱で突き付けた薙刀にも剣士は動じず、懐から1枚のカードを無言で取り出した。

それは、奇妙な色彩のトランプ。

白地の中央に黄色で紋章が刻まれたスペードのエースで、裏面には
ありがちなシンメトリーの模様が印刷されているものだ。

だが、霊装に関する知識しか与えられていない男にはそのカードが
持つ魔術的な意味を理解しきれない。

それが、1枚に凝縮された“風”の魔力の塊であることに。

カタカタと震える男を前に剣士は、凱は、堂々と言霊を紡ぐ。

「色彩は黄。属性は風。象徴は短剣！！！」

紡ぎながら大剣を逆手に持ち替え、トランプを薄く黄色が塗られた
面に刻まれた溝に通した。カードリーダーに情報を読み込ませるよ
うに。

行為に眉をひそめる男の前で、トランプが“蒸発した”。

ドライアイスが昇華するよりも何倍も早く、長方形のカードが空に
失せたのだ。

次の瞬間に凱が振りかざした大剣は、

轟音と共に、竜巻を纏っていた。

風切り音は耳をつんざく程に鋭く、舞い上がる気流が埃によって形を見せる。それは、見えない巨人に握り潰されるような威圧感の塊となって男の五感を支配した。

これが本当に風の魔術なのか、と男は疑うことしか出来ない。

だが、その疑いの感情すら、振り下ろされる大剣に砕け散らされた。

——10分後——

「ちょっと……やりすぎましたかね？」

まるで“横向きの竜巻”が襲ったように全てを剥ぎ取られた廃墟街に、凱はバツが悪そうに大剣を肩に担いで佇んでいた。

「構わないさ。どうせ尋問したところで大した情報は得られなかっただろうからね」

凱の呟きに応じたのは、コートの際に幾つかの焦げ跡が残るステイ

ルⅡマグヌス。

地脈を暴走させるらしいあの爆発からよく生き残れたものだ、と思うテオレルド自身も、ローブの端が焼き切れたりしている。

——爆撃の瞬間にテオレルドが見たのは、凱が懷から取り出した3枚のトランプを大剣に読み込ませ（厳密には違うのだろうが、テオレルドにはそれ以外の表現ができなかった）、大剣を中心に三角錐の形状をした防壁を展開した所までである。

完全に不意を突かれた一撃だった。凱が即座に展開した防壁の一步外は空気を入れすぎて破裂した風船のように地下から抉られ、貫かれている。

地元の魔術師である凱がいなければ、最悪の場合即死していたであろうことを想像し、思わず舌打ちする。

（地脈爆撃、か。こんな術式があるとはな……………）

だが、これ程の威力を前にテオレルドの脳裏に浮かぶのは、ロンドンで提示された先遣隊の残骸との違いだった。

（死体が…、違いすぎる……………？）

先遣隊の“残骸”は何らかの力で肉体を砕く術式を受けたようで、テオレルド達が受けた地脈爆撃の高熱、高圧による死因とは違いうぎるのだ。

（更に厄介な術式を有しているのか、それとも……………）

下部組織に後片付けを任せて廃墟街を立ち去るテオレルドの思考には、そのことが刺のように残り続けた。

e p, 4 ちょっと待ちましょうか（後書き）

次回は行間になります。

魔術師達の過去にも、少し触れたいと思います。

今回も感想、お待ちしております！

行間 戦場へと舞い戻る

(そんな……馬鹿な……!?)

第三王女の滞在するホテルの廊下で思わず呻いたのは、ナイトリーダー騎士団長。

英国における三大派閥の1つ、『騎士派』の頂点に存在する彼は己の目を疑った。

不自然に派遣された『清教徒』の協力者。眼鏡の青年、赤髪の少年の混ざった中に1人、彼が知る人間がいたのだ。

——10年前、失踪したはずの“元”騎士団員。

その名は、ランサーⅡJⅡグレイス。

——10年前——

当時、騎士団はそれぞれに特化した十三の分野があった。

敵状を誰よりも早く視察する『先槍騎士団（1st Lancer）』、何者にも優る攻撃力を有する『両斧騎士団（7th Macer）』がその一端。

そして、その中には“要人警護”に特化した騎士団も存在した。

それが、『堅盾騎士団（10th Shielder）』。

騎士団にあって騎士団にあらず。

そう呼称される程に特異な防御魔術を有し、王族の為ならその身をも盾にする。

太陽に放り込まれても一定時間は存在すると言われた『移動鉄壁』や、英国の粋を集めたウィンザー城の結界などは彼らの施術した魔術が大半を占める程だ。

その覚悟や実直さは騎士派随一のものだったが、彼らにも問題があった。

それは、独立性。

内通者や裏切りによる術式の解析を何より恐れた彼らは、極端なまでに社交性を失った。騎士団長ですらその対応に苦慮する場面が多々あった程に。

そんな環境だからこそ、ランサーⅡJⅡグレイスの名は知れ渡った。

『堅盾騎士団(10th Shielder)』の中であって彼の性格は変わることなく、騎士団長との会議にも当時わずか12歳という年齢にも関わらずに出席する程の実力すら有していたのだ。

こうして、彼は“天才”の称号を騎士団内で欲しいままにした。

——あの、ドーヴァー海峡の戦いまでは。

騎士団長自身にも、彼らに対する負い目はある。

政治的な圧力によって動きを封じられた騎士派の本隊に引き換え、『堅盾騎士団(10th Shielder)』は第三王女の使用人に偽装することまでして、ろくな霊装も持てぬままにスペイン星教へ差し出された彼女の元に参じたのだ。

後に騎士の地位と名誉を奪われようとも、彼らは躊躇わなかった。

その場で一国の軍隊に等しい勢力に踏み潰されようとも、彼らは迷わなかった。

ただ、哀れな姫君のためだけだった。

——そして、彼らは壊滅した。

ウィリアムⅡオルウェルがドーヴァー海峡から砲弾のように上陸した瞬間には、そこは血の海だった。

だが。

原型すら止めない死体の広がる中に、1つだけ、無傷で横たわる馬車があった。スペイン星教による一国を潰すも厭わない攻撃の前で、彼らの攻撃を、執念のように防ぎ続ける1つの馬車が。

——理屈は、単純だった。

象の前の蟻の如きあまりの戦力差を前に、彼ら『堅盾騎士団（10th Shielder）』が採った選択肢は反撃ではなかった。

ただただ、“防御”。

『移動鉄壁』の防護術式を強化し、強化し、強化する。

その身が滅びようと、その術式だけは消えぬように。

その身が滅ぶことすら、術式に組み込んで。

その執念の塊が、発する救難信号と裏腹に無傷の『移動鉄壁』を支えていた。

だからこそ、ウィリアムⅡオルウェルは勝利することができた。

第三王女の馬車を守りながらでは彼に勝機は無かつただろう。

その覚悟は、無駄な言葉を吐かない主義のとある傭兵に感嘆の言葉を発せさせる程だった。

結局、ランサーⅡJⅡグレイスの死体は見つからなかった。

騎士派の中で行われた小さな葬送に、名を連ねただけ。

だが、騎士団長は見紛うはずも無い。

「待つ……………」

数十メートル先の廊下の向こうへ去っていく白髪の後ろ姿に呼び掛けようとして、

くるり、と。

騎士団長を真っ直ぐ見据えて振り返った少年に見える男は、

深く、一礼をした。

騎士の流儀を完璧にわきまえた非の打ちどころの無い、一礼を。

「!?!」

そのあまりの完璧さに呆気にとられる騎士団長の前で、白髪の男は廊下の角を曲がり、消え失せていった。

「……………で?これで良かったのか?」

「いいんすよ。俺の生存をわかってもらえれば。……………騎士団長には結構な義理もありますし、ね」

普段の軽薄なそれとはどこか違う笑みを浮かべるランサーは、その

ままでテオレルドへ問いかける。

「先輩こそ良かったんスカ？ ヴィリアン様とは……………」

「いや、俺はヴィリアンとはあまり面識が無い。姉妹とは言え、“彼女”とあまり仲が良くなかったからな……………」

反射する眼鏡の奥にその感情を隠して、彼は、彼らは、戦場へと舞い戻る。

——同時刻——

「くそっ！！くそっ！！」

手当たり次第に看板やゴミ箱を蹴り飛ばし、壊しながら香港の路地裏を歩く1人の男がいた。

（今日だけでどれだけの拠点が潰されたと思ってやがる！！）

彼は、魔術師、藍^{ラン}。

第三王女暗殺のために様々な手を尽くして魔術結社をかき集め、そ

これらのパイプ役を担う。

——すべて、“とある男”の命だった。

予告文の送付から術式の構築に至るまで慎重に練り上げた計画に狂いは無く、今日の夕方には“目的”を達成していた………はず、だった。

ところが、現実はどうだ。

フェイクの拠点どこか本命の施設まで幾つも騎士派に撃破され、とても目的を達成できる状況ではなくなってしまった。

英国側の内通者である“男”との連絡も今朝からつかない上に、潰された拠点には藍^{ラン}自身的身元を特定できるような証拠を置いた所すらある。

（もう………おしまいだ!!）

自暴自棄になった彼がせめてもの抵抗に自爆テロを考えた、瞬間。

『久しぶりだな。首尾はどうだ?』

頭に直接響く、魔術的な通信。

それは、あの“男”の声だ。

「ふ……、ふざけてんじゃ無え!!!! アンタ、俺達を捨てたのかよ!?」

思考すれば足りる通信にも、藍は叫ばずにいられなかった。

「くそっ。考えてみりゃ、アンタと手を組んだ時点で気付くべきだったんだ! アンタの本性に!!!!」

路地裏で1人喚く藍に、応じる声は無い。

「全部嘘だったんだな? アンタが見せた『絶対王政』も、俺達への信頼も、英国への恨みも!!!!」

肺の空気を全て吐き出してぜえぜえと荒い息の彼を、奇妙な静寂が包む。

——と。

「残念だが、お前に嘘をついたのは信頼における点だけだ……」

「!!!!!!」

「そんなに驚いた顔をするなよ。俺と話をしたかったんじゃないのか?」

背後の路地から現れた人影。それは、“男”だった。

相変わらず表情の読めない、平坦な顔で。

「アンタ……、何が望みなんだよ!!」

口から泡を飛ばして叫ぶ藍には動じず、相手は言う。

「ああ、イギリス清教の連中にわかりやすい“手土産”が欲しかっただけだ。雑魚の魔術師でも、数十人なら大規模な“土産”になるだろう。」

「な……!!?」

“男”は、啞然として言葉も出ない藍に対して平然と言い放つ。

「そんな訳で、お前用済み。チクられても面倒だから……、ここで死ね」

「!!!!」

指で首を切るジェスチャーをふざけたようにするが、その目だけは、全く、笑っていないかった。

「くそつたれええええええ!!!!」

藍は、懷から刃渡り5センチ程の柄の無いナイフを無数に取り出す。魔術師としての己の力を過信するわけでは無いが、彼には自信があった。

（こいつは……、魔術師ではなく、ペテン師だ）

彼が手を組む以前に力の象徴として出した圧倒的な魔術にも、何らかのトリックがあったのだろう。

（おそらく、こいつ自身の戦闘力は高く無え。偽装の魔術しか能が無いクソ野郎に、一端の魔術結社をまとめてきた俺は負ける訳が――）

ぶちり、と。

「……………え？」

間拔けな声を出した瞬間には、藍の体は“右半身を失って”いた。奴が何をしたのか、理解できない。それより、自分の体がどうなっているのかすら、わからない。

「何だ、こんなもんか。……もしかしてお前、俺の『絶対王政』が何かのトリックじゃないかと思ってた？」

バランスを失った体が地面に落ちると“思うことすら”、彼自身にはもう、できない。

「さっき言っただろう？ お前達についた嘘は、“信頼だけだった”ってな」

右手の懷から何かを取り出し、1人続ける“男”。

それに向かって小さく呪を紡ぐと、藍の左半身までもが消滅した。

路地裏には、藍が存在した痕跡すらなくなった。

ただ1人残った、笑う“男”が呟く。

「開戦は派手に行こうぜ、第三王女。そして……重複魔術デュアルスベルの聖人さん」

行間 戦場へと舞い戻る（後書き）

次回からは本編に戻ります。

今回も感想、お待ちしております！

e p, 5 簡単な戦場（前書き）

本筋に戻ります。

e p, 5 簡単な戦場

無意味に高価な調度品に囲まれたスイートルームで煙草をくゆらせながら『必要悪の協会^{ネセサリウス}』の魔術師、ステイルⅡマグヌスは思う。

今回の任務は異例づくめだ、と。

本来なら騎士派が清教派に協力を依頼すること自体が異例なのだが、それを打ち消す程に異常な事態が立て続けに起こっているのだ。

パレードにおける、第三王女の直接警護への参加。

ホテルの同階層に騎士派と清教派が拠点を置くこと。

そして何より、存在自体が疑わしかった『執行人^{エグゼキューター}』の魔術師が2人も介入しているという事実。

（あの最大教主が隠し玉をこんな簡単に人目にさらすとは……………
?）
^{アークビショップ}

ローラⅡスチュアート^{アークビショップ}の性格を知っている彼からすれば、何か裏があるのではと勘ぐってしまう。

もともと、テオレルドⅡミラー、ランサーⅡJⅡグレイス兩名の実力は彼も認める所ではあるが、彼らの得体の知れない白と黒の術式にはどうも信頼が置けない。

加えて、

「気難しい顔してどうしました？ それ、健康的に良くないですよ？」
この男だ。

中国らしくない着物を纏う薄紅色の髪青年、凱櫻花（カイ||イエ
ンファ）は明らかに年下の自分に敬語で話しかけて来る。

自身の外見が年相応に見えないのは何となく自覚しているが、20
歳前後であろう凱に敬語を使われ続けると、どうにも違和感を感じ
る。

それでも、こんな風に碎けた喋り方をする魔術師を知り合いに持つ
ステイルとしては、やはり彼にも“裏”があるように思えてくるの
だった。

ただ、それよりもステイルには気になることがある。

「その通信……、君はどんな耳をしているんだ？」

「どんな、と端的に聞かれてましても……」

凱はステイルの位置と対極にあるソファ―に腰掛けていたのだが、

凱の周囲には、有に数十枚を越える奇妙な色彩のランプが、ありがちなSF映画のディスプレイのように空中に浮遊しながら音声を発しているのだ。

そしてそれから聞かされる音声を全て一度に聞き取る凱の手元の羊皮紙には、恐るべきスピードでインクの文字が刻まれていく。

先程どこから帰ってきたと思ったらずっとこれだ。

ステイルには耳障りなノイズにしか聞こえない数十人分の音声を理解し、要約し、それを変換して羊皮紙にまとめている。

日中に見せた戦闘力の高さや相まって、それは凱櫻花という魔術師の優秀さを象徴しているように見えた。

（索敵、戦闘、解析。どれもが一級の実力だ。こんな人材を中国に放っておくとは……………、っと）

どうもいけないね、とステイルは思う。

『あんな上^{バカ}司』の下についていると、何にでも懷疑の感情が沸いてきてしまう。

学園都市にいる『とある少年』の影響か、と。そんなことを考えるようになったステイルは、

「あの……………、煙草……………」

「ッ!？」

フィルターまで吸いそうになっていた煙草を、慌てて揉み消した。

——同時刻——

「全く……疑り深いのもほどほどにしておけよ？」

「やだなあ。先輩は俺の“クセ”、知ってるじゃないっすか」

それもそうか、とため息をつきながら、テオレルドはランサーの手元にある情報端末に視線を向ける。

そこに映し出されるのは、スクロールされていく無数の書類フォルダ。

それだけで1つの文庫本を書き上げられそうな量の書類には、1人の男の情報が記されていた。

「凱櫻花（カイイイエンファ）。なかなかドラマチックな半生ですね……」

つまり、ランサーもスタイルと同様。

凱櫻花という男に疑問を抱いていたのだが、彼の場合は『違和感』ではなくってしまうのだ。

曖昧な『違和感』では無く、明確な『疑い』へと。

しかし、彼の『疑い』は理屈では説明できないもの。

それを理解してくれるテオレルドやハイゼ達に出会うまで、ランサーが好奇と畏怖の目で見られ続けたのは言うまでもない。

本当に俺達は異端だらけだな、と思うテオレルドにランサーは背伸びをしながら悔しそうに言う。

「んん……。これじゃ、凱の“空白”を説明できないっス……」

「キリの良い所で終わらせろ。……、『ご指名』だ」

テオレルドが携帯電話を掲げてが示したのは、微かに振動するガラスのストラップ。

「んじゃ、そろそろ動きますか……」

それが意味するのは、騎士派からの指名だった。

——首謀者の名前が判明した。

騎士派からの連絡がやけに綿密であることに違和感を抱くステイルの目線を感じながら、テオレルドはその内容を読み上げる。

「名前は藍小玲（ラン＝ショウレイ）。表の世界でもテロリストの容疑で指名手配されている系統の人間だ」

テオレルドの言葉に凱が眉をひそめる。

「?……、表でも活動してるってことは、魔術師としては大々的に動けないんじゃないですか?」

「それをごまかすだけの人脈と技量を持っているということだろう。もっとも、幾つかの拠点の残骸から推測できたことはあの『地脈爆撃』を発動するための霊装を無数に保有していたことぐらいだがな……」

厄介な相手だ、とテオレルドは舌打ちする。

蛇の道は蛇、という言葉に象徴されるように、専門家には専門家なりの戦略がある。普通ならばその境を越えて犯人を追うべきなのだろうが、魔術師と警察にその関係は通用しない。

『表』と『裏』を自在に行き来する人間ほどやりにくい相手はいな

いのだ。

特に、真っ黒に染まった『必要悪の教会』ネセサリウスの魔術師には。

「それでも、大分条件は良いんじゃないかな？」

沈黙する空気を払うように、ステイルは言う。

「守るべき『第三王女』ゴールは決まっていて、『敵』オフエンスの正体も判明済み。
実に僕好みの戦場だ」

「まあ、それもそうっスね。実に……、わかりやすい戦場っス」

その時、ランサーの感情がほんの僅かに揺らいだことに気付いたのはテオレルドのみだった。

（わかりやすい、か。よく言ったものだな……）

そんな簡単な戦闘になるはずも無い、と。

誰もがわかっているはずなのに、それを口にはしなかった。

e p, 5 簡単な戦場（後書き）

いかがでしたか？

今回も感想、お待ちしております！

e p, 6 少し出来すぎだ(前書き)

遅くなりましたが、やっと更新できました……

これがスランプってヤツなのですね……

今回は本筋が進展を見せます！

e p, 6 少し出来すぎだ

香港は複雑な地理と社会状況の街だ。無数の民族と無数の人種が入り交じり、どこにもない雰囲気 of 街を作り出している。

無論それは『表』の話だ。

だが、『裏』の複雑さも群を抜いている。

そう、テオレルドⅡミラーは思った。

「や……やめてく——」

命乞いを許さずに走る黒い閃光。崩落する建物。響き渡る悲鳴と爆音。

とある魔術結社を“殲滅”しながら、テオレルドは廃墟となった倉庫で深いため息を吐いた。

（これで16箇所か。全て空振りとはな……）

その数もさることながら、彼はその術式の多様性に頭を悩ませていた。

この魔術結社は北欧系の剛力の魔術。

1つ前の魔術結社は仏教と四神相応の融合。

2つ前の魔術結社はローマ正教の亜流。

いずれもどこかで見たような術式の劣化版が大半だが、稀に本当に面倒な相手が混ざっているから質が悪い。

（対応する術式を組み替えるタイプでない俺達だから良かったようなものの……）

もつとも、その全てを、相性など一切無視して、テオレルドとランサーは文字通り“叩き潰して”きたのだが。

警戒を保ったまま辺りの索敵術式を発動し、ノワール・バルディッシュ黒衣の槍を解除する、瞬間。

「っ……………！」

ズキンと、貧血のような症状が彼を見舞った。

（テレズマ天使の力の乱用がたたったか……………）

体調を崩すとまではいかないが、内側で確実に感じる疲労に顔を歪める。

“疲労そのものに”では無い。

疲労させられている、という現状にだ。

うつむきながら眼鏡を掛けなおすと、やけに眼鏡のホコリが目についた。

一晩中戦い続けた彼の疲労を象徴するように、レンズの端にこびりついている。

そこに、

「先輩――、疲れたっスー」

気の抜けた声のランサーが現れた。

「そちらも終わったか？」

「はい。全て空振りでしたけど………」

テオレルドとは違って全く疲労を隠そうとしないランサーは今にも路上で倒れこみそうだ。

それを見咎めるように人差し指でこめかみを搔くと、テオレルドは通信用の銀の針の形状をした霊装を取り出す。

騎士派との直接的なやりとりを可能にするそれは、イギリス清教には希少なもの。

だが、それを当然のように用いて彼は連絡を済ませる。

“収獲無し”と。

通信の向こう側から感じるため息や苛立ちをまともに受け取る前に、テオレルドは通信を切った。

「凱とステイルから連絡はあるか？彼らの進歩次第では……………」

「いや、無いっス。…………ていうか、俺もあっちが良かったんすけど！」

「無茶を言うな。尋問と調書は必要悪の教会でも彼等の方が何倍も上手だ。^{うわて}俺達の術式では出来ない、繊細で残虐で重要な役目なんだからな」

「ええ……。でも、冷房のかかった室内で簡易牢獄を成形して尋問とか、ずっとラクじゃないっスか？」

「下らないことを言っていないで、次へ行くぞ。そろそろ『表』の警察が来る」

ここは、日中の廃墟街とは違って最近埋め立てられた比較的新しい倉庫群だ。

戦闘の余波を術式で消しきれなかったのか、遠くから微かに警報装置のサイレンが聞こえている。

「了解。退散っスね」

——と、

ぷつり。

「「!?!」」

テオレルドとランサーに聞こえていた一切の音が、消えた。

船の汽笛も、飛行機のエンジン音の余波も、警報装置のサイレンも、全て。

「…………先輩」

わかっている、と言い掛けて、

ゴウツツ!!!!

凄まじい火柱が轟いた。『地脈爆撃』のはずなのだが、ただし、色が違う。

吹き出したのは、荒々しい赤熱でなく、冷たく、恐怖さえ感じさせる青白い炎。

それでも、炎の中から聞こえるランサーの声に動揺は無い。

「術式のレベルが相応なのは認めますけどね……………」

「敵性の数は10。…………、騎士派への報告はやり直しか？」

黒い巨人が炎を潰した先には、未知の術式を携える魔術師。

この体もまだまだ動かされそうだとテオレルドは思う。

——同時刻——

イギリス清教の権限で貸し切ったとある拘置所。

普段なら合法的な取り調べが行われるはずのそこは、ネセサリウス必要悪の教会による『尋問』の場と化している。

その一角、簡易なソファが並ぶ休憩室に、凱とステイルは腰を下ろしていた。

「やはり彼等は組織と呼ぶには繋がりが弱すぎるね。ああもあつさり吐かれては、拷問の仕方が無い」

「いやいや、肉体的精神的にあれだけ痛め付けておいてそれは……」

捕らえられた魔術師の男に対してステイルが行った『尋問』の内容に軽く震え上がる凱。あくまで記録官として参加した凱には、尋問の心得は無いようだ。

ちなみに、ステイルが行った拷問は彼の得意とする火攻めだったりする。

その光景を思い出すのを拒むように、話題を変える凱。

「それより、“これ”は早いうちにテオレルドさん達に報告した方が状況的に良いのでは？」

「そうだろうね。精神的に『解体』する術式を使える人間もここにはいないし、もう一度同じ証言をすればとりあえずは確信の域だろう」

「それにしても、厄介なことになったじゃないましたね。……『絶対王政』って、何かの隠語でしょうか？」

尋問の最中、男が漏らしたわずかに一語。

それが纏う不気味な響きは、2人をどうしてもその単語に固執させる程だった。

「彼にその辺りも聞いてみれば良きさ。タイムリミットは明日、第三王女が香港を発つまでなんだから。つまり、それまでに何らかの行動を起こすつもりで彼等は動いているんだろうからね」

「そう……ですね。でも、あの男、すっかり気を失っちゃってますけど……」

凱の質問に、ステイルは煙草の煙を吐き出してあっさり答える。

「そんなものは簡単だよ。僕の魔術なら皮膚を軽く火傷させる温度の煙を彼の気管に流し込めるからね。これなら大抵の人間は飛び起きるさ」

「……………」

啞然とする凱に含み笑いを浮かべると、ステイルはコートを翻して尋問の部屋へ戻っていった。

——同日、夜——

香港。とある人気の無い橋の欄干に寄りかかり、1人の男が木札のようなものに怒鳴り付けていた。

「おい。『絶対王政』に関わるクラスの構成員までもが捕らえられたぞ。これが何を意味するのか解っているのか？」

『解っているとも。それでも計画に支障は無いさ。俺の名前の価値はそんな程度で揺らぐのか？』

「い、いや、そんなことは無い。藍小玲（ラン||シヨウレイ）、ア
ンタの実力は承知している。だからこそ俺達は……」

『社交辞令はいらん。『絶対王政』が発動すれば、それで計画は結
実する。それにしても皮肉だな。皇帝ナポレオンが実現出来なかつ
た術式を、俺達が英国への反逆の火蓋にしちまうんだから』

「ああ。明日、世界が俺達にひれ伏すんだよな。……変に疑って済
まない。これで終わりにする」

『それでいい。働きには、期待しているぞ』

その一言で途絶した通信の向こうにいたのは、当然藍小玲では無い。

「精神偽装を使うまでも無い、か。本当に簡単な連中だ」

藍小玲を文字通りに“消した”男だ。

「小手調べとして二重魔術、デュアルスベル、イノケンティウス魔女狩りの王。……少し出来すぎだ
な」

そう呟く男の視線の先に広がるのは、世界最大級の人工島。

その名は、香港国際空港。

e p, 6 少し出来すぎだ（後書き）

次回、バトルパート突入です！

e p, 7 だから、本気で

香港国際空港。

香港、ランタオ島の沖合いに浮かぶ、世界最大級にして掛かった費用も世界最高級という人工島だ。

ガラス張り近代的なデザインのターミナル、完全なコンピュータ制御の管制システムなどは中国の威信にかけて建造されたもので、学園都市との技術提携もあってかその水準を現在も世界トップクラスに保っている。

そんな空港の出発ロビー。

例のごとく厳戒態勢が敷かれる中、第三王女を含む一行は空港に設けられたスペースで会見をする事になっていた。

第三王女の近辺にはフォーマルなスーツに身を包んだ騎士団長を始めとする黒スーツの騎士派の猛者達が控え、万全の警備を誇っている。

そこから少し離れた、土産物や小さな飲食店が並ぶ半二階の通路。

そこに、必要悪の教会の魔術師は柱に寄りかかるように佇んでいた。

マスコミの執拗なカメラや一般人の無遠慮なフラッシュの死角を縫うように配置された2人1組の魔術師達が抱く懸念は、

首謀者が行方不明、という一点に尽きる。

騎士派との大規模な炙り出しも、昨夜のアジトへの直接の奇襲も、その足取りを掴むことすら出来ないでいたのだ。影踏みをするような現状への苛立ちは、明確な焦りとなって魔術師達の神経を逆撫でしていた。

本当に第三王女の暗殺を実行するつもりなら、騎士派の霊装が十分な力を発揮できず、かつ彼等の術式が最大の力を発揮できる中国の領土内でコトを起こすはずなのだから。

——しかし、ここに来てテオレルドⅡミラーが感じるのは違和感ばかり。

この空港は埋め立てられて建造されたもの。

つまり、『造られた』土地なのだ。

人工の地面に、借り物の土。そんな環境では、地脈の力が弱まってしまう。彼等が幾度も用いてきた『地脈爆撃』の術式も、ここではまともな力を発揮しないだろう。

（となると、やはりステイルや凱の報告にあった……）

『絶対王政』。その単語がいやがおうにも存在感をアピールしてくる。見えない手が招くかのように、だ。

敵のミスリードである可能性も捨て切れないが、彼の思考から疑いは

「…………先輩？」

気付くと、白髪の後輩、ランサーが目の前に来ていた。

眼鏡越しに自分の瞳を覗きながら、眉をよせて怪訝な表情をするランサー。

「やっぱり表情からじゃ先輩の『色』は見えないっスね。…………気になるんですか？ 藍小玲が」

ランサーもテオレルドと同じことを考えていたようで、その質問は核心を突くものだった。

「確かにそうだが、今それを考えても仕方あるまい。注意を第三王女の方へ戻したらどうだ？」

「う…………。はいっス」

バツの悪そうな表情で、目線を第三王女とそれを取り巻く護衛達へ戻すランサー。

ランサーの言う通りだ。

やはり自分は、この違和感を消しきれない。

どうしても、ついてまわるのだ。

まるで、重要な何かを見落としているような――――

ゴォウッ！！！！

ガラス張りの建物をビリビリと震わせ、不吉なまでの爆音が響き渡った。

音源はテオレルドとランサーが弾かれたように視線を向けた先、ガラス越しに見える旅客機の発着ターミナルからだ。

そこから、真っ黒な煙が立ち上っている。

『地脈爆撃』による奇襲を想定していたテオレルドは予想が外れたことで冷や汗を拭うも、

爆発したとある輸送機の残骸が晒す黒煙の隙間から見覚えのあるエンブレムを発見して、

テオレルドは絶句した。

「あれは……！！！」

端から見れば、一般的な民間の輸送機にしか見えないだろう。しかし、彼等にとってその意味合いは大きく異なる。

あれは、騎士派の機体だ。

世界各国に騎士派の霊装を運搬する役割を果たす、魔術的な装備なのだ。

それが、破壊された。

意味するものを考える時間も惜しい。

「先輩！！」

「ああ……」

このまま現場に突入しては人目に付きすぎる。ガラス張りのロビーから丸見えだ。

「滑走路付近に待機している凱とステイルと合流しろ！そのまま第三王女の護衛に回る！！」

ランサーにそう叫んだテオレルドは原因となった敵の排除に向かうとして、

ぐにゃり。

指示を飛ばすテオレルドの視界が、歪んだ。

——違う。歪んでいるのは自分の視界では無い。

（ターミナルごと、何かに押し潰されている……！？）

「——、……！」

先を走るランサーに、叫び声は届いただろうか。

直後。ターミナルは崩壊した。

「…………死体の確認も出来ない惨状とは、物理的にやりすぎたか？」
無惨な鉄骨を曝し、崩壊した空港に満ちる負の感情。

怒号、悲鳴、絶望。それらの中にあって、その静かな声は何故か響き渡る。

現状に怯える恐怖も、立ち向かう敵意も、その声からは感じられない。

塵にまみれる中からうつすらと浮かぶシルエットだけで、それだけで周囲を威圧していく。

たとえ、待ち構えるのが騎士派の軍勢であつたとしても。

“前座に興味は無い”とでも言うように。

輪郭しか捕らえていない敵に向け、彼は左の袖をかざした。

ゴウッ！！！！

それだけで、屈強な騎士達が竜巻の中の木片のように吹き飛ばされていく。

煙のカーテンを突き破るように、騎士派の狙撃霊装、ロビンフッドが幾つも牙を剥いた。

バラリ。

だが、纏う深紅のストールに擦ることも無く、全ての弾丸は崩れて消えた。

騎士派の男達に見えたのは、敵が何かを振り撒いたということくらい。

バオツ！！！！

異常な速度で押し寄せる炎の津波は、通り過ぎた後に焼け焦げた残骸しか残さない。

そして、土煙が薙ぎ払われた先に――

凱櫻花（カイエイエンファ）は居た。

白い突撃槍のような大剣を担ぎながら、空中に浮かぶ無数のトラン

プを携えて。たとえ騎士団長を筆頭とした軍勢を前にしても、それでもその表情は変わらない。

人を安心させる微笑つくりわらいの面影は、もうどこにも無い。

「う……………っ」

一体何が起こったのか。辛うじて意識を取り戻したランサーがそれを認識する必要は無かった。何故ならそれは、

目の前の光景で充分だったからだ。

「高速移動、ソーロルの術式、幾つかのパターン魔術……。騎士団長の実力というのはこの程度なのか。まあ、全英大陸の力も得られない普通の人間では、限界もあるというものだ」

広がる残骸と血の中、焼け焦げたスーツで襟元を掴まれて左手一本で吊り上げられる騎士団長は、もはや微動だにしない。

カラン、と。手から滑り落ちて主を失ったロングソードがアスファルトに落ちる音が無情に響いた。

「う……あああああつつ！！！！」

思考も忘れて絶叫する唯1人の魔術師は、全面に白い壁を纏って『敵』と激突する。

ゴギイツッ！！！！

インパクトの瞬間、その感情が爆発したかのように魔力の余波が見えない圧力となって空気を震わせた。

「意外だな。俺が裏切ったことにはあまり驚いていないように見受けられるが？」

凱の言葉に、感情は無い。真っ黒に塗り潰された油絵のように、そ

ここからは何も読み取れない。

「黙れ。俺の『クセ』とか特徴も調べ上げておいたくせに、何言ってるんスカ」

「そこまで『解る』のか。情報以上に気持ち悪いな。…………『覗き魔』のランサー？」

ランサーの中に怒り以外の感情がほんの少し、混じる。

「その二つ名、久々に聞いたっスよ。……………本当に虫酸が走るっスね！！」

叫びと共に距離を取り、本命の術式を発動するランサーは周囲の状況を確認して、決意を固めたように、唸る獣のように言い放つ。

その目に映る人々の残骸、倒れ伏す騎士団長、そして、噛みちぎられたような破片が残るテオレルドのローブを見て。

「俺、結構久しぶりにムカついてるんスわ。……………だから、本気で殺すぞ」

e p, 7 だから、本気で（後書き）

第4章も、いよいよ佳境に入ってきました。

次回、ランサーVS凱です！！

e p, 8 **これでは興醒めだ(前書き)**

今回は凱とランサーのバトルです！

e p, 8 これでは興醒めだ

ランサーの激昂も、凱の無表情を崩しはしない。

巨大な盾の魔術、サンクチュアリ光翼の城壁を展開して凱とぶつかり合う間にも、ランサーのふざけたような口調を消し去った言葉は続く。

「凱、アンタはさっき俺のことを『覗き魔』って言ったけど、まあそれについては認めよう。……俺は人の『中身』が解る」

凱の爆発を受け流し、光の圧を放ちながら自らの傷を抉るように喋り続けるランサーに、凱は何も応じない。

「だからこそ、アンタが不気味だった。大抵、人の顔に出る筈の『色』が無いんだ。『真っ白』なんだよ。アンタの顔も、動作も、すべてが。『無色透明』な奴は何度か会ったことがあるが、『真っ白』な奴は初めてだ。……漂白剤でも使ったみたいにな!!」

激情のままに叫び、そして光翼の城壁から純白の津波を放ったランサーは息を荒げながら、煙の中の凱に告げる。

「そして今のアンタは、『真っ黒』だ。……俺の知り得る限り、2番目にな」

(でも……お喋りしながら倒せる相手じゃ無い、か……)

ランサーの思考対象は、煙の向こうから現れる。

「だから？……まさかこの程度なのか？」

——“無傷”で。

纏う深紅のストールにすら、光翼の城壁による攻撃の痕跡は無い。

（面倒、ってレベルじゃ無いな……）

確かに、ランサーの術式は攻撃に特化したものではない。テオレルドの黒き魔術との役割分担があつてこそ、その真価を発揮するものだ。

それでも、ランサーの魔術は並大抵ならぬ攻撃力を有している。例えば、機動隊員が暴徒を盾で鎮圧するように。

——そのはず、なのだが。

「絶句する暇など、あると思うのか？」

そんなことなど一切無視して、凱は攻撃を始めた。

ただし、先程とは圧倒的に違う。

それは、手数。

「数は3。意味は調和。色彩は赤と緑……！」

凱の言葉に呼応するように、懷から飛び出した2枚のランプがランサーをめがけて突っ込む。

そう、思ったのは一瞬。

ゴバァ!!と。

次の一瞬にはカードの形は消え失せ、深紅に燃え盛る火柱が『光翼の城壁』に穿たれていた。

それも、普通の炎の魔術では無い。

(重い……っ!?)

辛うじて弾き返したランサーが見たのは、火柱の中に仕込まれた岩石の柱。

それら2つの質量が重なり合い、見た目以上の威力を発揮していたのだ。

だが、ランサーはそれ以上の思考を中断される。

理屈は簡単。

(何だ……この……数は……!……!)

視界に入ったのは、今の火柱と同様の物が20以上降り注ぐ光景。

（追加で展開をしないと防御しきれないか……！）

左指を弾いて『フランク・ミュラー白亜の壁』を発動して、

そこで、凱の囁きが聞こえた。

「5、7。象徴は杖と聖杯。意味は……隠遁と絶命」

「！！！！」

そのあまりに不気味な響きに、思わず『光翼の城壁』を凱との直線上に突き動かした、瞬間。

ドガアアアツッ！！！！

横から隕石が降ってきたかとさえ思った。

人工島を揺るがす程の爆発を伴い、真横の“何もないはずの”空間から莫大な衝撃が襲ったのだ。

「く……そ……」

余波の爆風をもろに受けてアスファルトを転げ回るランサー。

そこに、さらなる追い討ちがかかる。

「色彩は黄と赤。短剣、杖。数は13」

「っ！！！」

仰向けに倒れたままで『光翼の城壁』を自らの真上に展開しなおそうとしたが、間に合わない。

『白亜の壁』で何とか足場を造り、空中へ離脱した直後、

ジュウッ！！と。

炎で歪められて陽炎のようになった空気の塊が、ランサーがほんの一瞬前までいた場所を真っ赤に溶解して陥没させた。

あまりのパターン、そして数に、ランサーの防御はおろか回避すら追いつかない。

が、こんな状況でも凱が扱う術式の予測はできる。

（おそらくは、タロットを転換したトランプと言霊による様々なバリエーションの創造魔術。発する言葉、カードの枚数、それらの組み合わせがこれほどの手数を可能にしているのか……っ！？）

ただし、理解はできても体が付いていかない。

（くそっ！！確かにこれじゃ騎士団長のソーロルムの術式も意味が無い訳だ！）

まるで詰め将棋のように一手一手ランサーの選択肢が削られていく中で、凱は微動だにせずに言葉を放つ。

すなわち、“王手”を。

「色彩は黄、赤、緑。1、8、12。意味は創造、拘束、喪失!!」
声が響き渡るや否や、キュゴォッ!! という妙な音と共に、凱を
中心に空気の渦が巻き始める。

そして獲物を逃さず、風を最大限活かすための複雑な迷路の形状に、
アスファルトまでもが変形していくのだ。ランサーの足場を奪い、
かつ、凱の手元まで引き寄せるような風の通り道として。

(逃げられなっ……………)

この瞬間の凱を真上から見れば、蟻地獄の主のように見えただろう。
そして、引き寄せられたランサーが見たのは、

——アスファルトの罠など吹き飛ばしながら現れた、摂氏三千度
の、炎の巨人。

その名は、

イノケンティウス
「魔女狩りの王!!」

その叫びに呼応し、バラバラと迷路の破片を散らしながら凱の頭上

に赤熱する十字架を叩きつけた。

「……………！」

凱がほんの少し浮かべた驚嘆の感情は、次の瞬間には水蒸気爆発によって覆い隠される。

「これは…ステイルⅡマグヌスの……………」

爆発の煙から抜け出したランサーの眩きに、炎の巨神を操る『声』が応じた。

「何だい？まるで死人を見るようなその表情は」

ルーンのカードを携え、悠然と姿を現す炎の魔術師。

「凱櫻花に不意打ちで攻撃されたことには驚いたが、地下のライフラインのトンネルまで落下したせいで逃げ延びてね。復帰も遅れたが、下準備は完成したよ？」

ステイルにも凱の不審は伝わっていたらしく、彼が裏切ったことに對しての驚きはあまり見られない。

「いや、正直助かったっス。騎士団長を打ち倒すような魔術師なんかに相對したことは無かったっスから」

感情の昂ぶりがステイルの介入によって抑えられたランサーが服の埃を払いながら言っている間にも、魔女狩りの王の放つ爆発が熱気という余波となってこちらまで伝わって来る。

「大した威力っスね。アイツを足止めできるとは」

「使用枚数は15000枚と最大級。空港の瓦礫のほとんどにカードを配置した、限界に近い威力なんだけどね……………」

「そうか。これが本気の『魔女狩りの王』なのか」

バンッ！という音と共に、煙を突き破って姿を見せる凱。

纏う着物や大剣には幾つかの焦げ跡があるものの、本人が火傷を負っている様子は無い。

「あれだけの威力で仕留められない、か……………」

ステイルが吐き捨てるように言うと、煙を吹き飛ばして炎の巨人が現れる。

逃した凱を、殺すために。

背後から迫る魔女狩りの王の業火に、凱は動じない。

それどころか、笑みすら浮かべてこう告げるのだ。

「第一目標、クリアだ」

「「!？」」

ランサーとステイルが凱の仕草に気付いた瞬間には、凱の周囲にメビウスの輪のようにトランプが舞っていた。

『青いハート』と『黄色いスペード』の2色のカードが。

「っー!!」

思わず『白亜の壁』を発動した向こうで、凱は振り返ることもせず
に言葉を紡ぐ。

「色彩は青と黄。属性は水と風。数は全。意味は永久!!!!」

刹那、凱は白光に包まれた。

純白の、何か形容しがたいものが、凱の周囲に展開されていたトランプの1枚1枚から放射状に吹き出したのだ。

ただ、その正体はすぐに理解できた。

それは、

「冷氣……!!?」

「対『魔女狩りの王』の術式という訳か………」

吹き荒れる吹雪から顔を庇いながら言うステイルには、焦りが垣間見える。

未知とはいええ、かなりの実力者による術式なのだから無理もない。

白煙の向こうから連続して聞こえる爆発音に、ステイルの顔に浮かぶ不遜の『色』が僅かに滲む。

そして、

獣の断末魔のような叫びが、轟いた。

「――!!」

それ自体が何なのかはランサーには解らない。

ただ、ステイルの困惑する表情がその全てを物語っていた。

「『魔女狩りの王』……やはり知名度の程はあるな。短剣と聖杯の属性を使いきってしまった」

凱の言葉が、動揺の色など微塵も見せずに告げられる。

そして、ランサーとステイルが白煙の晴れた先に見たのは、

——氷の十字架に磔にされた『魔女狩りの王』と、それを背に歩く凱の姿だった。

ごうごうと放つ熱気は静まりかえり、手足を戒める為の氷の杭が『魔女狩りの王』の全身へと突き刺さってその再生能力を奪っているように見えた。

ランサーの絶句は言うまでも無いが、それ以上にステイルが表情を歪めている。

「馬鹿な……、僕の『魔女狩りの王』は五大元素の基本的な魔術程度で抑え込めるような術式じゃ無い。それを……!!」

「やれやれ。舐めてもらっては困る。俺の術式群を只の氷の術式と一緒にされては……」

思わず煙草を吐き捨てて叫ぶステイルに、凱は淡々と言葉を続ける。

——ステイルⅡマグヌスという魔術師の全てを、否定するかのよう
うに。

「近代魔術の象徴色、シンボリックウエポン象徴武器の記号化、タロット的な数秘術、陰陽術の言霊。これらはバラバラでは大した威力にはならないが、突

き詰めて重ね合わせてやれば、永久に凍り続ける術式の構築は難しく無い。……もっとも、これは“俺の本懐では無い”のだから」

「本懐……っスカ……」

「……、」

この男には、これ以上の底があると言うのか。

騎士団長を倒し、魔女狩りの王を束縛し、それだけで十分な脅威となっているにも関わらず。

二の句がつけないランサーとステイルに10メートルにまで接近する凱の感情は揺るがない。

「折角『情報』は与えさせたはずだが、これでは興ざめだ。……いいだろう。『配置』も完了した様だから最後に見せてやる。……許された者にのみ扱える、『絶対王政』の力を!!」

「「!!」」

『絶対王政』。

テオレルドがいつまでも引っ掛かっていたことが、最悪のタイミングで繋がってしまった。

「これは……、『絶対王政』のための下準備だったと言っても言うのか……」

その下準備に、互いの『切り札』は砕かれたことになる。

「最悪っスね。勝ち負けの問題じゃ無いっスよ、もう………」

「解っているようだな。……そうだ。これは俺の対外的な“デモン
ストレーション”に過ぎない」

そう言って、凱は大剣を天に、垂直に突き上げる。

——瞬間、『絶対王政』が始まった。

e p, 8 **これでは興醒めだ（後書き）**

次回、凱の『絶対王政』が遂に発動します！

第四章もクライマックスに突入です！

今回も感想を頂けるとありがたいです。

e p, 9 人の為に生きよ（前書き）

今回は絶対王政が発動します！！

凱の本領も発揮です！

e p, 9 人の為に生きよ

凱櫻花（カイイイエンファ）は、ロンドン郊外に定住する小さな華僑系の家に生まれた。

父親と、母親と、小さな妹。

裕福な訳では無いが、会社員の父とごく普通の十字教徒の家庭で育った少年の生活はそれなりに幸せだった。

日曜には教会の神父様の下へミサに向かい、春には復活祭を、冬にはクリスマスを楽しむ。

そんな何の変哲も無い家庭は、

一瞬で、消え失せた。

以前から周囲に泥棒が入っているという噂は耳にしていたが、それは最悪の『現実』となって突き付けられる。

12年前、とある厳冬の日の夕方、帰宅した家に暖房が入っていないことを不思議に思いながらもリビングを覗きこんだ凱が見たのは、

白いカーペットを染める血の海に、妹を庇うように沈む、ズタズタにされた両親の姿だった。

——それからのことは、よく覚えていない。

制服の大人達が優しくしてくれたこと。

教会の神父様に抱きしめられたこと。

それくらいだ。

凱の親代わりとなった教会の神父様は地元でも有名な人徳者で、彼に憎しみに囚われない“普通”の生活を送らせようと努力したが、彼は1つの道に“堕ちて”いった。

魔術。

縋り、怨み、憎しみ、そして『敵』に辿り着くには十分すぎる才能が彼には宿っていた。

教会の隠し書庫を読み耽ることから始まり、復讐の為にだけ生き、人の理から外れようとする凱に近寄る一般の人間は次第に少なくなっていく。それでも、神父様だけは彼の説得を続けた。

諭し、抱きしめ、時に叱り付けて。

「人の為に生きよ」と。

凱の心は揺らいだ。

手にした力の使い道が急に解らなくなっていたのだ。

しかし、

運命という存在は、凱に選択の余地を与えなかった。

若干16歳で『必要悪の教会』^{ネセサリウス}のエージェントとなり魔術による“救い”を幾度も目の当たりにする凱は、神父様の言葉がようやく理解できそうだった。

そんな中、彼はとある結社予備軍の殲滅を命じられる。

華僑系の富裕層に紛い物の魔術を見せ、当時勢力を伸ばしつつあった学園都市の超能力開発を上回る成果を挙げてみせる、という誘い文句と心理的な誘導魔術で莫大な私腹を肥やしていた組織だ。

——金の流れを掴んだ後、組織を壊滅させよ。

それが指令内容だった。

何処か、失った家族と被害者を重ね合わせていたのだろう。

逸る気持ちと共に1人先行した凱がアジトと思われる倉庫で見たのは、コンテナを埋め尽くす程の膨大な資料。ただし、それは、

凱櫻花。

この男に、つまり自分自身に関する情報、その全てだった。

生い立ち、身体的情報、家族構成といったことから凱自身も知らない先祖や血筋のことまで。

その全てが、克明に。

そして凱は知った。

被害者から奪われた金が、『とある霊装』の開発に充てられていたこと。

とある霊装の開発には、一定の人間の『血』が必要であったこと。

『計画』は幼少の凱が教会で洗礼を受けた前後から始まっていたこと。

そして、『首謀者』の名を。

——計画の名は、『絶対王政』と言った。

莫大な魔力を放ち、そして、

凱は天に剣を突き上げる。

——家族の血に染まった、純白の剣を。

瞬間、4つの刃で構成された突撃槍の形状の大剣に亀裂が走った。

四大属性に沿ってパキパキと分解されていく剣の一端は、

ドバンッ！！

と。

ミサイルが発射されたような爆発音を伴い、滑走路の四方へ散った。東西南北に対応する刃はそのままアスファルトに深々と突き刺さり、1キロ四方を区切る楔となる。

——この瞬間、凱を『王』とする『絶対王政』が発動した。

先ず、空気が変わる。視覚や聴覚や物理的に観測できるものではなく、もっと根本的な部分から組み換えられていく感覚を魔術師でなくとも感じる程に。

例えるなら、ジグソーパズルのピースを一旦バラバラにしても一度組み直したような違和感をステイルやランサーに抱かせて。

気付けば凱が掲げた大剣は4つに分解され、その中からフェンシングに使う程細身の、血のように紅いサーベルが現れていた。

「1キロ四方に術式を展開するだけでこの手間、か。フランス一国を覆うというのはさすがに誇張表現だろうな……」

軽く手首のスナップで扱いを確かめながらこちらに背を向けて言う凱の言葉には、やはり感情が映らない。

だが、その光景を前に立ち尽くしている程彼ら魔術師は愚かでは無い。

「隙を見せるとは……」

「余裕っスね!!」

スタイルの右手には炎剣を、ランサーの前面には白亜の壁を構え、悠然と語る凱に向けて己の得物を叩きつける。

(もらった……!!)

完璧なタイミング。凱の体勢から見ても、瞬間の後には潰されて焼き切られている

——はず、なのに。

突進の勢いでぶつけた光の壁も、溶かし切るはずの炎剣も、その余波さえも、

届かない。

背を狙う炎剣は凱の着物に押し負けたかのように受け流されて掻き消え、白亜の壁は凱が上を軽く払ったサーベルに触れるか否かという瞬間に両断され、碎け散る。

「な……っ!?!」

いとも簡単にあしらわれたことに驚嘆を浮かべる2人に対して、凱はこちらへ振り向きながら軽く回し蹴りをした。

ダンスでも踊るかのように、気軽に。

たったそれだけで、爆音が轟いた。

「が……あああっ!？」

「ッ!!!」

別に凱が特殊な動作をした訳ではない。

ただの回し蹴りだ。

なのに、あまりに莫大な風圧と衝撃でランサーとステイルの意識は吹き飛ばされながら一瞬奪われた。

辛うじて意識を取り留めて立ち上がる2人の体はすでにボロボロだが、ステイルは痛みが支配する頭で必死に凱の術式について思考する。

（肉体強化の術式か……？それにしては範囲が広すぎる……）

凱の一撃を直に食らったステイルからすれば妥当な考えだが、そんな余裕は直後にかき消された。

何故なら、

「消耗している時間は無いぞ？」

ボッ！！と。

声と共に凱の振るうサーベルに沿うように、幾つもの真空波が襲ったからだ。

「くっ……」

サーベルの軌道から想定した攻撃ルートに対して、ランサーがステイルの前を庇うように白亜の壁を発生させる。

完全に防げるかの確信はランサー自身にも無かったであろうが、それはランサーへの衝撃を柔らげるくらいはできる“はずだった”。

バギン！！

凱の放った真空波が歪めた空気が白亜の壁に触れた瞬間、無防備なガラスに銃弾が突っ込んだように壁が粉碎された。

——凱の攻撃に、何の抵抗もできずに。

「！！！！」

ランサーが表情に驚嘆を浮かべるより早く、彼の胸を鈍い歪みが切り裂いた。

「ッ……があっ!!」

バチャビチャ、と吹き出した少くない量の血が滴る音と共にアスファルトを染める。

膝について崩れ落ちるランサーを庇うように炎剣を構えるステイルの中には、疑問が沸き上がっていた。

この魔術師は一体何なんだ、と。

四神相応と五大元素の術式を扱っていた時は、まだ彼の魔術はステイルの理解が及ぶ範疇にあった。

ところが、あの『絶対王政』と自称する術式が発動してからの能力は桁が違う。

折れそうに細身のサーベルを使つての攻撃もそうだが、ステイルが一番理解できないのは“炎剣を受け流した”ことだ。

学園都市にいる『とある少年』が見せた『無効化』とは全く違う。まるで、炎剣の方が凱を避けたような感覚を覚えたのだが……

「いくら考えても無駄だ。“イギリス清教の”神父。これはフランスの秘中の秘なんだからな」

ステイルの思考を見透かしたかのように、唐突に凱の声が飛ぶ。

「フランス……だど？」

確かに、対立関係にあるフランスの術式を凱が用いるならばステイ

ルにとって全く未知の術式でも合点がいく。

凱の裏切りも、フランス側のスパイであったということなら辻褄が合う。

——だが。

「早合点するなよ？俺自身はフランスに何の恩義も無い。あるとすれば、この術式が馬鹿な司祭の『遺産』として俺の手元に渡ったこと程度だな……」

またもやステイルの思考を先読みしたように、凱は打ち消しの言葉が続けた。

（どうなっている……？）

訳が分からない。

悠然と歩いてくる凱の前に、無意味であることを証明されてしまっている炎剣はあまりに頼りない。

せめて左手にもう一本の炎剣を生み出そうとして、

気付いた。

「……………」

ただし、気付いたのは術式の内容ではない。単純に視界に入ったのだ。

左手のコートの袖に、見覚えの無い、紅いクラブの紋章が4つ刻まれていることに。

「これは……………」

凱はそんなスタイルの動作に気付いたのか、歩み寄りを止めて話した。

その絶対的優位が揺らがないことを、自らの行動で証明するかのよう。

「ようやく認識したか。それがお前の『階位』^{カースト}だ」

「『階位』……………」

「疑問を抱く必要は無い。そのままの意味だからな」

炎剣を携えて押し黙るスタイルを前に、凱はやけに饒舌に話す。

「俺がわざわざこんな四神相応の術式を使っていた理由に疑問を抱かないのか？その答えが、『階位』を指定する作業だ。『王』を頂点とする1から13までの階位を刻印し、あらゆる物体、現象、その一切を支配下に置く……………そういう『支配』の術式なんだよ」

「……………!!」

『支配』。口で言う程簡単なものでないことは魔術師であれば誰でも解る。『原罪』を除去した特異な体質であればあるいは、という論理上の存在でしか無いはずの術式だ。

それが、今、目の前にあるのだから。

頭が否定しようにも、先に見せられた“炎剣を受け流された”という気持ちの悪い感覚が未だ掌に残っている。

「滑稽なものだ。かの『帝王』ナポレオンはこの術式をフランス全土に展開して文字通りの『絶対王政』を敷くつもりだったようだが、完成より早くナポレオンは失脚し、術式は失われた……。このいくつきの代物が現代に甦り、こうして再び英国に牙を剥くのだから」

凱は言いたいことを告げると、サーベルを弄んでいた手を止める。

そして、突き付けた。

おぞましい程に深紅の、必殺のそれを。

e p, 10 都合が良いから（前書き）

凱とのバトルもいよいよクライマックスです！

ep, 10 都合が良いから

凱は今、この空間の『王』として君臨している。

サーベルの一振りや回し蹴りといった挙動の一切は押し負けた空気によって莫大な衝撃や真空波を造り出し、『階位』が下の存在には凱の衣服に傷1つつけることすら叶わない。

まさに、『絶対王政』。

対峙するステイルの中に浮かぶ対策は、幾度も幾度も空回りと共に打ち消されていく。

炎剣をどう扱うか。

魔女狩りの王を再構成するか。

それとも別の――

「思考はもう良いか?……いい加減に止めを刺させてくれ」

全て、成功するように思えない。

彼の中にある経験が警告を絶え間なく発するが、突き付けられた刃の前にはもはや回避も叶いそうに無い。

(諦める……のか……?)

彼が魔術師となってまで叶えたい願いは、『とある少年』がその右手1つで叶えてしまった。

きつと自分がいなくても、あの子は幸せに生きていける。

（僕は……）

でも、だから、それでも――

（こんなところで……死ねるか!!）

ステイルの視線に宿る“殺意”に、凱がほんの少したじろいだのをステイルは見逃さなかった。

「灰は灰に（A s h t o A s h）……塵は塵に（D u s t o D u s t）……吸血殺しの紅十字（S q u e a r i u m B l o o d y L o o d）!!!」

たとえ術式による安全を保証されていても凱は一步下がってしまう。例えば、目の前にネットが張ってあったとしても、剛速球のボールが来た時には体を逸らしてしまうように。

ゴォウ!!と空気を飲み込む音を轟かせて生み出されたそれを、凱の喉を掻き斬る軌道で突き出す。

それは凱の喉をバターのように溶かし、貫く。

——普通、なら。

爆煙が晴れるまでもなく、手応えがその結末を如実に教えてくれた。

「く……そっ！」

この環境下では凱の首にたなびくストールにすら、煤1つ、着かないことを。

「ステイルⅡマグヌス、君への軽視に謝罪しよう。……その決意を甘く見ていたようだ」

何事も無かったような顔で、逆説的に、ステイルを必ず殺すと宣言する凱。

今の抗いは彼を本気にさせてしまったただけだとも言うのか。

そう思いながら数メートル飛び退くステイルを前に凱は追撃せず、1つの言葉を放つ。

それは、

「R e g i s 3 7 2（王たる理由は我が行いに）。……記憶に刻んだか？自分を殺す人間の覚悟を」

それは、魔術師としての決意の結晶。

お前を全力で葬る、と。

そう宣言したのだ。

「それなら僕も、名乗らないとね。……Fortis931（我が名が最強である理由をここに証明する）だ。刻んだかい？ 凱櫻花」
面食らった表情を一瞬浮かべたステイルだったが、すぐに魔術師の顔に戻って告げた。

互いの覚悟のぶつかり合い、それが魔術師の戦いだとも言うように。

「ああ。……覚悟ごと貰うぞ、その命」

キシッ……、と。金属質な音と共に逆手で杖の如く構えたサーベルに沿う形で、光の刃がまずは日本刀程に、次には凱の身長程に、徐々に拡大されていく。

「…………ツ!？」

あれが何なのかは分からないが、アスファルトを抵抗なく貫いていることから一撃の威力は想像に難くない。

「可視光線への支配を少し実効化しただけだ。……それでも、必殺に相応しい威力だな」

凱はそう言いながら居合い斬りの構えに移行。凱の背に翼のように沸き上がる光の刃は、もはや空港のターミナルも両断できるほどの大きさに拡大されていた。

対するステイルの得物は炎剣が二振り。

——それでも、諦めは望まないならば。

凱に向けて全力で突き立てた炎剣が光の刃に食い破られた瞬間、ステイルの五感は失われた。

莫大な白光の中で凱が感じたのは、まず、違和感。

『階位』が下の存在、ステイルⅡマグヌスを両断することに物理的な抵抗などかからないはず。だが、逆手で斬り上げた右手には明らかな障害物が感じられる。

ガリガリと、明確な障害物が。

次に、言葉。

「お前が稼いだあの一瞬は値千金だな。……ステイルⅡマグヌス」

赤髪の魔術師との間、目前から聞こえるこれは、瓦礫の中に消えたあの魔術師の声では無いのか？

そこに至った瞬間、

ゴガッ！！！！

凱が何らかの思考をするより早く衝撃が襲った。

黒い、津波のようなそれは――

「『^{ナイトメア}夜行の兵装』……！！」

凱の眼前、ステイルを庇う位置に。

羽が舞い散るように凱の光が霧散した先に。

そこには、何もかもを飲み込む程に深い黒をした漆黒の巨人を従える魔術師、テオレルドⅡミラーがいた。

ひびの入った眼鏡を掛けなおすその目には、絶対的な殺意と決意を映して。

「相棒が世話になったな……。存分に、礼をさせてもらおう！！」

どす黒い感情が滲んだ言葉が放たれるか否か、凱に向けて黒い巨腕が振るわれた。

それに、凱は、

動じない。

指揮者のかざすタクトのように、深紅のサーベルを軽く突き出しただけ。

それだけで、絶大な破壊をもたらすはずの一撃はガラスよりも脆く、砕け散る。

一連の動作に凱が抱いた感想は2つ。

何故このタイミングで乱入したのかという疑問と、

「愚か、だな……………」

「何？」

「愚か、だと言ったんだ。『絶対王政』の階位設定を自動にしていた俺の唯一のミス、それを逆手に取って俺を背中から刺せば良かったものを。魔法名を名乗った者同士の決闘に乱入した結果が、自らの姿を曝してわざわざ階位を設定されただけとは、冗談にしても質が悪い……………」

凱の言葉には、落胆と怒りがほんのわずかに、薄い薄い水彩画のよう
に現れていた。

——絶対王政は『階位』を遵守させる魔術だ。

つまり、逆に言えば、『階位』を設定されていない存在ならば自由に行動できるということになるのだ。

それこそが『絶対王政』の唯一にして最大の抜け穴。

フランス全土という莫大な領域を設定し尽くすためには数十年の歳月を要し、凱が再現した今回の術式も、自然現象に対してはトランプの魔術の中に織り交ぜたマーケティング用のカードを無数に、プログラミングした一定の法則下で配置したからこそ、この短時間で発動を可能にしたのだ。

そしてその唯一の穴は、塞がった。

「テオレルドⅡミラー。俺がお前を認識した瞬間には既に『階位』の設定は終了している。……………見えるだろう？その肩に刻まれた、スペードの4が」

“4”。それは、絶対王政の中にある生物に於いて最も下の階級。奴隷にも劣る、最弱の称号だった。

すなわち意味するところは、

「お前の死亡は確定事項だ。わざわざ戦闘に介入するだけ、無駄だったな」

淡々と告げられる圧倒的な事実。

——だが、それにも関わらずテオレルドの表情に浮かんた“不敵”を、凱は見逃してしまった。

「これで……………終わりだ」

眩きと共に神速のサーベルによって滅多切りにされる空気が、そのままの形状でテオレルドを切り裂かんと迫る。

必殺にして必中の一撃。

だが、凱の予想は見事に裏切られる。

何故なら、

パキン！！と。

かん高い音を響かせ、斬撃が碎かれたからだ。

「！！！！」

驚愕する凱の二の句を待たずに、テオレルドが言い放つ。

「何の策も持たず……俺がお前に姿を曝すと思ったのか？」

その右手に、どこか見覚えのあるロングソードを携えて。

「それは……」

長さにして80センチメートル。鈍い銀色に輝く刀身の――

ナイトリーダー
「騎士団長のロングソード……！？」

「そうだ。騎士団長には申し訳ないが、こいつの性能は“都合が良
い”からな」

語るテオレルドに得体の知れないものを感じ取った凱が見たのは、
ジリッ……と。

銀のロングソードの軌跡にまわりつく、放電したスパークのような黒い残滓。

「まさか……」

騎士団長のロングソードの『特性』を理解している凱からすれば予測可能な事態ではあったが、それでも現実には信じがたい。

「莫大な天使の力テレズマの圧縮封入に対応したこの剣ならば、できる。俺自身が用いる、切り札をな……!!!!」

ロングソードを水平に構え、詠唱するその呪は、テオレルド達に関して徹底的な情報収集を行ったはずの凱の記憶にすら無いもの。

「闇よ（I S）……」

それと同時に、テオレルドを中心に墨で描かれた竜巻の如き奔流が天をめがけて突き上がった。

——凱の接近を、拒むために。

「其は世界を支配する暴君にして、全ての畏怖の顕現なり（T D
T J T K O O K T P）」

言葉は止まらない。止める術を、凱は持たない。

「星も、月も、太陽も。全てを喰らいて世界を奪え（T A T
E I E T P A Q A T K I I）！！」

そして、引き裂くような爆音と共に、“それ”は現れた。

e p, 10 都合が良いから（後書き）

次回、テオレルドの真打ちVS絶対王政のバトルが決着します。

今回にも感想を頂けると、幸いです。

e p, 1 1 俺の、エゴで（前書き）

第4章、いよいよクライマックスです！

テオレルドの新技も炸裂します！

e p, 11 俺の、エゴで

深く、夜のような黒髪。

物静かな印象を与える眼鏡。

寡黙な性格。

エグゼキューター
執行人実務部隊の中核を担う彼――、テオレルドⅡミラーの素性を完全に知っている人間は相棒たるランサーⅡJⅡグレイス、直属の上司であるハイゼⅡヴィレクティムの僅かに2人だけだ。

クセ者ぞろいの執行人の中でも、謎に包まれた魔術師。

テオレルド自身そのことに言及しないが故に、周囲も深くは追及しない。

だが、彼は“語ってはいけない”のだ。

彼が、とある理由から滅ぼされた公爵家の生き残りであることは、決して。

ランサーのように生死不明といった生ぬるい存在ではない。本当に、居てはいけないのだから。

彼の血筋が途絶えさせられた元凶は幾つかある。

政治的な策略、騎士派との軋み、数えれば後付けで無数に沸いて出るだろう。

だが、『これ』が最大の元凶であることは言うまでも無い。

どこまでも説明不能で異質な、黒い魔術が。

——それらを一切考えても、テオレルドは躊躇わずに呪を紡ぐ。

その詠を、彼に科せられた呪いを、顕現させる為に。

明滅する意識の中にあって、仰向けに倒れるステイル・マグヌスの思考は完全に凍りついていた。

巨大な光の刃に無謀に斬り込んだところで意識は中断されたのだが、体の損傷は甚大という程では無い。

何者かに助けられたという結論に至るのに時間はかからなかった。

では何故、彼の思考は停止しているのか。

理由は簡単。

目の前、空に広がるあまりに現実離れた光景に心を奪われたからだ。

——そこに、“夜”があった。

少し離れたアスファルトで失血し、倒れ伏すランサーⅡJⅡグレイスには彼等の視覚を覆わんとするそれが何なのか、一瞬で察しがついた。

（先輩………！！）

それが術者たるテオレルドにもたらす危機も、どれだけのリスクを孕んでいるのかも、全てが。

「先輩………！！」

彼のか細い呻きは、届かない。

テオレルドの呪が顕現させるのは、ランサーのように圧縮型の術式では無い。

彼の背から生え上がる、『黒い翼』だった。

まるで、空間というキャンバスを墨で染めるように広がる無機質な翼。

天使をモチーフとした召喚系の術式を使用する際、翼やそれに類するものが現れることは珍しくない。

ただし、異常なのは、

空港の滑走路の向こう、水平線を掠める程のそのサイズだった。

噴射と呼ぶにはゆったりとしたスピードで広がったそれは、瞬間の後には睨み合う凱とテオレルドを完全にドーム状の翼で覆い、夜空の下へと誘っている。

水平線の向こうには微かに太陽の光が見えるが、彼等の居る場所は日蝕に遭遇したような闇に包まれたままだ。

圧倒される凱の口を衝いて出る言葉は、魔術的な視点からすれば至極当然のもの。

「まさか……アストロインハンド天体制御！？そんなものを――」

「いや、こいつはそこまで派手な能力じゃあ無い。……………ただの、『翼』だ」

ただの翼。

そのことを証明するかのように、テオレルドが扱うのは銀のロングソード一本だった。

得体の知れないものに対する、半ば条件反射に近い恐怖を感じながら凱はサーベルを構える。

それは、フェンシングの突きの構え。

対してテオレルドは、

「行くぞ……」

溜めもせず、構えもせずに、一閃。

彼に剣術の心得は無い。槍術には目を見張るものがあるが、付け焼き刃の一撃を躲せない程に自分の体捌きは遅く無い。

そう、凱櫻花が思った瞬間には遅かった。

ツツツツドン！！！！！！

轟音、爆音、炸裂音。

どう表現すべきなのかすら解らない大音響と共に襲った漆黒の『何か』が、凱の体を軽々と吹き飛ばしたからだ。

——いかなる攻撃はおろか、その余波すら受け付けないはずの、『王』を。

「ぎ………あ……っ！！」

驚愕の表情など置き去りにして凱の口から洩れる苦悶は、もはや言葉ではなく。

ターミナルの至近から滑走路を斜めに横切る形で数十メートル。ノーバウンドで飛ばされ、着地の衝撃で地面を派手に抉り、ようやくボロボロの体を留める凱。

千切れそうになる四肢を術式によって補完していなければ、おそらくは路上の染みになっていたであろう一撃だった。

（一体……何が——）

だが、その一瞬の猶予すら、テオレルドは許さない。

ゴッガンンツッ!! と。

先のものが衝撃だとするならば、今度は巨大な杭だった。

凱を中心とした直径十メートルの空間を押し潰すように、黒の圧力が叩きつけられたのだ。

「……!!!!!!」

(何だ、何なんだこの術式は!! 王座^{メタトロン}に侍る者の召喚? 天使の力の具現化? ……違う!! こんな術式は——)

抗えない重圧の中で必死に対抗手段を考えるも、そこにテオレルドの静かな、それでいて激情の満ちる声突き刺さる。

「俺の術式を理解しようなどと思うなよ。何せ、俺自身も理解しきれていない代物だ。お前の扱う『絶対王政』すら“喰らう”かは、一種の賭けだったがな……」

「馬……鹿な! そんな条件で魔術が発動する訳が——」

「では、この現実を否定するのか?」

圧倒的すぎる『理不尽』という存在の主は、感情を押し殺した声で告げる。

——『王位』の陥落を。

ただ、

「……、」

「？」

その程度の『理不尽』で止められる程、

「ふざ……ける………！」

「……！」

凱櫻花（カイ||イエنفア）の覚悟は、軽くない。

「ふざけるなあああアア……！！」

絶叫する凱の身体から放たれる魔力が球状に彼を覆い、行動するだけの余裕を取り戻す。

それは、王位にしがみつく無様な権力者の抵抗などでは決して、無い。

自らの信念の為の、反撃。

彼は未だ、何一つ成し遂げていないのだから。

「俺の全てを……全てを犠牲にしたこの術式で……証明するんだよ……。フランスとかイギリスとかどうでもいい……俺の……！存在を

「!!!!」

構えも取らない隙だらけの絶叫は、言い終える前に“黒き力”に引きちぎられても文句は言えないものだった。

だが、対してテオレルドが抱いた感情は、

(そうか……こいつも……)

自分と、ひどく似通っている——と。

そう、気付けたのだ。

ならば、だからこそ。

「そうか。ならば俺は自身の全力を以て、お前を否定しよう。……
ネセサリウス
…必要悪の教会の魔術師としての任務など関係無い。俺の、エゴで」

結局、彼等は似た者同士だった。

全ての努力は、自分では無い誰かの為。

ただ1つ違うのは『誰か』を守るのか、『誰か』の敵を討つのか。

ただ、それだけ。

そして、漆黒の『夜』が音も、光も、凱櫻花の輪郭をも消し去った。
テオレルドの、無慈悲なまでの一閃と共に。

e p, 1 1 俺の、エゴで（後書き）

なんだか中途半端で切ってしまいました……

ですが、速攻で真相解明編を投稿するので、お楽しみに！

e p, 1 2 单刀直入に言おう（前書き）

第4章、ついに終章です！

今回は予想外な原作キャラが登場します！

e p, 12 单刀直入に言おう

自らの運命の全ては、仕組まれたものだった。

そう、突然に知らされた凱櫻花の動揺は想像に難くない。

“自らの”意志で教会の隠し書庫をこじ開け、“自らの”意志で『必要悪の教会』に志願し、“自らの”意志でこのアジトへ辿り着いた……はず、なのに。

そこには、教会の神父様が居た。

黒の法衣を纏い、いつもと変わらぬ笑顔を浮かべて。

——そう、“いつもと変わらぬ”笑みを。

それが神父に張り付いた仮面だと気付けたのは、彼の感情が爆発した瞬間を見せ突けられたからだ。

神父は言った。

司教としての政争に敗れた自分だけの為の、『神の右席』が欲しいと。

偶然にしては出来すぎている凱の魔術師としての歩みも、凱櫻花の『血筋』を見いだした自分が全て仕組んだと。

『絶対王政』ならば、貴様の望むままの世界を創れると。

凱の反抗は意味を為さない。自分が得意とするのは洗脳の類の魔術なのだから、と。

しかし、神父は見誤っていた。

凱が激情に任せて得た力は、もはや聖人に匹敵する位置にあったことを。

——瞬間が経過するより早く、勝負は決した。

無惨な“物体”と化した黒の法衣の残骸がこびりつく神父の前に、凱櫻花は1つの決意を掲げる。

自らが王になる。

王位が絶対的ならば、こんな醜い争いなど、起こるはずが無い。

そのためにはまず、『力』を奪わなければ。

デモンストレーションでも構わない。

少数精鋭のイギリス清教ならば、その手始めには十分だ。

魂に焼き付けた名を、魔法名を、実現するために。

Regis372（王たる理由は我が行いに）。

黒の奔流は、容赦無く凱を蝕む。

願いを叶えるための剣が、力を失った手から滑り落ちていった。

手だけでは無い。

全身を喰われ、このまま命も失うのだ。と思う彼の内面は驚く程穏やかで、自身にもうまく自覚出来なかった。

薄れゆく意識の中、凱櫻花が見たのは――

テオレルドの一薙ぎは凱から“生命以外の全て”を喰っていった。

彼が手加減を加えたのでは無い。

彼の術式はまともな体系化すら出来ず、純度を高めたはずの単独詠唱による発動でも、何故か殺害能力だけが著しく劣化するのだ。

何故か、人を殺せないのだ。

気力、魔力、その全てを喰われ、膝を折って崩れ落ちる、存在の残り滓のような凱。

テオレルドがゆっくり目を閉じ、そして再び開くと、そこには『夜』はいなかった。淡く朱色に染まる夕暮れが、大陸から伸びてきているだけ。

彼が術式を解除したのは、手加減では無い。

止めを刺すためだ。

ロングソードによる純粋な斬撃ならば、無抵抗に沈む凱の命を断つことなど容易い。

彼が討とうとしたもの。

自分が守りたいもの。

互いに譲れないが故に、テオレルドはその刃を振り下ろした。

ガキッ。

響いたのは、肉と骨を裂く斬撃音では無い。

見えたのは、凱櫻花から吹き出す血の海では無い。

——そこに、『執行人』管理官、ハイゼⅡヴィレクティムがいた。
切れ味の鋭いロングソードを、右手一本で、血も流さずに受け止めながら。

「ハイゼ…管理………官？」

「いやあ、間に合って良かったー。ロザリィから報告書聞いて、飛んできたんだぜ？」

ふざけたような口調も、くたびれたスーツも、普段と変わらない。
ただ、深緑でボサボサの髪の毛の隙間から見える目だけが、鋭い眼光を放っていた。

あまりに予想外な侵入者に、いくばくか思考が停止してしまうテオレルドだったが、ふと、我に帰って問い掛ける。

「管理官が…何故……？」

無抵抗な凱を庇うような立ち位置のままロングソードを押し戻すと、ハイゼは事態を語りだす。

「こいつ……、カイエンファ凱櫻花の処遇に関してだ。こいつは華僑系の魔術結社、ローマ正教、スペイン星教と手を広げすぎてな。そのせいで、有する術式が危険すぎるんだよ」

「……………？」

首を傾げるテオレルドだったが、ハイゼは懷から携帯のデータ端末機を取り出すとそれをテオレルドの眼前に突き出す。

そこには、

「そんな……馬鹿な……！！！」

調査結果を要約した数行の文章だけで、テオレルドは絶句させられた。

その反応を確かめながら端末を戻すハイゼの口から告げられたのは、

コキユートスレブリカアースシエイカー
「永久凍土、極大地震、こんなのはまだ良い方だ。……知りたいか？ 名前だけが記された、『月面接続』、『重力剥奪』なんてバケモノの詳細を」

1つ1つが国どころか大陸すら消しかねない、超戦略級魔術の数々だった。

何せ、伝説の中での存在でしかなかった魔法陣の数々だ。

それを目の前に突き付けても、実感とまらないのは至極当然と言える反応。

テオレルドには、それを告げるハイゼの声すら震えているような気がした。

「ま……そんな訳で、コイツを殺すと術式を提供した相手方の組織が注文突き付けて来そうなんだよな。……だから、凱櫻花、お前はロンドン塔に収容だ。対外的な国際問題回避の為に生かしてやる」

つまり、国際法に則った捕虜の扱いをする、と。

闘いの終結は、その一言で帰結した。

夜陰に沈む中ライトアップされる崩落したターミナルの残骸、未だ
燻る飛行機の破片、フラッシュバックする忘れた記憶。

様々なものが内面でせめぎあいながら、テオレルドの表情に変化は
無い。

無理やり押さえつけているのかすらとくに忘れる程に、眼鏡の奥
の瞳に染み付いた表情だ。

ターミナルの端、難を逃れたカフェテリアに佇む彼は、事の顛末に
思考を向けさせる。

——人払いでも庇いきれないこの事件は、テロリストの犯行に依
るという結論に至った。

今、騎士派との突き合わせで決定したそうだ。

治癒を終えたランサーの中にも未だ燻るものがある様で、口数は少
ない。

「僕達は上手く駒を演じていた訳、か……」

皮肉を言い放つステイルもどこか惚けていて、煙草を吸いすぎてい
ることに気付かない。

「ハイゼ管理官、少し……出てきます」

舐め終えた飴の棒を指で器用に弄ぶハイゼにそれだけ告げると、テ

オレルドはターミナルの屋上、巨大なエアコンの室外機が入り組む、人目につかないエリアに向かった。

テオレルドは、コンクリートの地面にしゃがみこんでいた。

カリカリと地面を削り、銀の針で魔法陣を描く。

用途は通信。ただし、恐ろしく緻密なそれは、幾重にも重なって傍受や盗聴の可能性を剥いでいく。

複雑怪奇な文字を周囲に書き、最後に中央に文様を描く。

——ユニオンジャック。

英国の象徴たる十字架だ。

完成した魔法陣の中に用いた銀の針を放ると、それは方位磁針のよう空中で回転を始める。

間もなく一定の軸を固定した針がゆっくりと落下し、地面に触れた。

ぼうつ、と穏やかな光を放つ魔法陣を前に、テオレルドは躊躇う。

（国家機密に匹敵する緊急回線…か。これを捨てられないのは……
…俺の弱さなのだろうな）

それでも、足を踏み入れる。

盗聴、傍受はおろか、周囲からの認識すらされない魔法陣の中に。

入った瞬間、声が聞こえた。

どこから聞こえるのかわからない声。

ただ、誰のものなのかは解る。

散々、聞きなれた声だ。

『やれやれ……相変わらず、この通信用霊装だけは棄てられなかったよーだな。…………テオ』

「お互い様だ。王室もこの回線を生かしておいたじゃないか？……

第二王女、キャーリサ」

『ふん、減らず口も相変わらずのよーだな。5年程度が経ったところで、お前みたいな堅物が変わる訳が無いか……』

「堅物は余計だ。お前の口調も、いい加減にどうにかならないのか？」

そこには敬意も、配慮も、何の壁も無い。

自分の言葉がくだけていくのが解る。

『……うるさい。これは生まれつきだって、“お前が一番分かって

る”だろう？」

英国第二王女、キャーリサ。

——10年前までの、元、許婚。

『……まあ、無駄口はこの程度だろう？ 本題に入れよ。お前がこの回線を使うのは、相当迷っている時だけなんだし』

言いたいことは、全て見透かされるような関係。

一瞬。だが確かに感じた心地よさを振り払い、テオレルドは言う。

「なら、単刀直入に言おう。——お前だろ？ 俺達をヴィリアンの護衛に加えたのは」

『……………、』

解答しない彼女へ、考えをぶつける。

「必要悪の教会が王室派の警護なんて任務に駆り出されること自体が妙なのに、更に深部、エグゼキューター『執行人』をご指名するなんて異常事態だ。大方の目的は想像できるが……………」

確証が無い。

そう言い淀んだ瞬間、キャーリサは見計らうように返してきた。

『目的が何だって？ 全く……………お前のその口下手は、英国紳士とし

て壊滅的だと思うの』

「!!」

キャーリサは返す言葉をなくしていたのでは無い。

最も効果的な“反撃”の瞬間を見定めていたのだ。

外交で各国と渡り合う内に自然と身につけたのだろう。

軍事の、第二王女。

その二つ名に恥じぬ話術に、言葉を失うのはこちらだった。

沈黙するテオレルドを満足した声で追撃する。

『忘れたの？子供の頃から、口喧嘩でテオが私に勝てたことなんて一度も無かったでしょーが』

「……、」

言い返したいのに、言葉が出ない。

テオレルドは知っているのに。

これは、自分達の力量を見極める為の派遣だと。

彼女が王家の血を継ぐ者に対しての調査を行っていることを。

騎士派と第二王女の間、確固たるパイプが築かれつつあることを。

あえて『結社予備軍』を使い、何らかの発掘をさせていることを。

それは、おそらく――――

『テオ』

「!?!」

突然、彼女の口調が変わった。

やはり、自らを理解しきっているように。

『いくらお前でも……私の邪魔はさせない。……それだけは、覚えておけ』

それは、宣戦布告だった。

“敵”にかける言葉だった。

だけど、

「……………」

『……切るぞ。そろそろ侍従の連中に気付かれかねないし』

そんな心配を“敵”に対してする必要もないのに。

おとなしく騎士派に告げ口すれば、自分の命をどこまでも追い、殺す駒が手元にあるのに。

なのに、そこまで解っていないながら、

「……………」

別れの言葉すら言えず、魔法陣は光を失った。

カラン、と。

支えを無くした針が転がる音が、重機の作業音がこだまするはずの屋上でやけにはっきり、聞こえた。

「……………キャーリサ……………っ!!」

魔術師達がたむろするカフェテリアの空気が、重い。

「……………」

戻ってきたテオレルドが見たのは、何故か凍りついたように動かない上司、ハイゼ。

その手には携帯が握られ、着信を告げるメロディが流れているのに、彼はそれを止めようとしない。

画面を見たまま、文字通りに“凍りついて”いる。

「管理官……………まさか……………」

ギギギ、と首をランサーに向けるハイゼの顔は、今にも泣きそうだ。

「仕事すっぱかして、全力疾走してきたんスカ……………!?!?」

こくり、とうなずくハイゼに思わず頭を抱えるランサー。これではどちらが上司だか分からない。

「また……………、やっちゃったんですね」

あまり状況を理解できていないステイルⅡマグヌスは不思議そうな表情を浮かべるが、テオレルドには何のことだかが解ってしまった。

——全力疾走。

この単語はハイゼⅡヴィレクティムが執行人の管理官たるだけの能力を有する証明なのだが、彼はそれを後先考えずに使う癖がある。

地面に接地してさえいれば音速を越える疾走を一昼夜続けられる、
化け物のような魔術を。

“今回の”ルートは、恐らくユーラシア大陸横断ツアーといったところか。所要時間は、彼ならば2、3時間。

ただし、当然、彼にも仕事が無い訳では無い。

シリアスだったハイゼの表情をここまで瓦解させる人間など、もはや1人しかいない。

携帯電話の画面には、着信しているナンバーと共に、1人の女性の名前。

執行人、副管理官、ロザリィ・マリノ。

彼女の激情のままに吹雪を通り越して氷河期に突入しているであろう執務室を思い浮かべながらランサーがハイゼの左肩に無言で置いた手は、妙に優しげだった。

e p, 1 2 単刀直入に言おう（後書き）

いかがでしたか？

感想、評価をいただけると嬉しいです。

さて次章ですが、学園都市編に戻ります！

久々の嶺次達の活躍を、お楽しみに！

e p, 1 良いんだよ、別に（前書き）

今回から5章に突入します！

舞台は学園都市、主人公のターンがやって来ました。

ついでに小説情報も更新しました！

それでは、後書きで。

e p, 1 良いんだよ、別に

もはや呼び声では無い。

脳裏に直接、声が響く。

自分の内側から自分を呼ぶという奇妙な声は、針のイカれたレコードのように断片的で、雑音だらけだ。

そんな声が、響く。

『……嶺………次』

俺を呼ぶな。

『………という成………』

——うるさい。

『嶺………素体は………』

うるさい………！

『………レイス………などに………』

うるさい！

『成功体のお前ならば……』

「うるさああああああい！！！」

「————ツッ！！」

月明かりにそのシルエットが浮かぶ、とある学生寮の一室。

笑えない夢オチに頭をかきむしりながら、1人の少年、雪崎嶺次^{ゆきやまざれいじ}は目を覚ました。

冷房のタイマーなどとうに切れ、額に滲む汗が気持ち悪く顎へ伝う。

(またか………)

また、この夢を見た。

記憶があっけなく揺らぎ、脳の中を物理的にいじくるような嫌悪感を全身に走らせるこの夢は、7月の終わり、夜来綴^{やらいづづり}との共闘後に見始めたものだ。

極めてたまにしか見ないものの、ぼやけていた声が徐々に実態感を持ちつつある様は、得体の知れない感情を彼に振り撒いて止まらない。

だが、嶺次はその声を知っていた。知ってはいたが、どうしても思

い出せないのだ。

その事実が彼に奇妙な苛立ちを与え、結局は眠りにつくしかないのであった。

朝。爽やかな日差しが嶺次が通う興条学園きょうじょうがくえんへと繋がる坂道を柔らかに照らしている。春には桜の咲き誇る、1つの名所だ。

未だ教師すら出勤しているのか解らないこの時間には、学園の生徒は来ない。

そんな光景にそぐわない、1人の少年が坂道を歩いている。

本来なら居るはずの無い、あり得ない少年が。

この少年の名は――――

………寝坊した。きつと夜半に見たあの夢のせいだ。そうに決まっている。

と、自己完結の言い訳を1人悲しく頭でこねくりまわしながら、雪崎嶺次は学園都市を全力で駆け抜けていた。

寮の隣室に住む幼なじみ、灰笠未鶴はいがさみつるに叩き起こされたところまでは良かったのだが、肉体強化レベル4である彼女はジョギングのつもりで時速30キロを出し、嶺次を置き去りにして登校してしまった。

普段なら眼下に学園都市を望む余裕もあるが、白いエクステを入れて気に掛ける髪形すら構ってられない。

あと数分で始業の鐘が鳴るというのに、登り坂は容赦無く彼の体力を奪っていく。

——と、不意に彼の背中から涼しい声が掛かった。

「おーっす、嶺次。こんな時間だなんて珍しいな？」

汗だくで振り返った先に、水色の髪に外はねパーマの優男がいた。

名を、あやびみどう浅葱御堂。

普段は寡黙な大食らい、まやぎやうじん真崎左紺と一緒にいるのだが、今日の登校は1人のようだ。

「あー、寝坊……して、な……」

「そりゃ災難。灰笠に付き合わされたか？」

坂道を全力疾走する嶺次に追いつき、並走しているにも関わらず、御堂の声色はことさらに涼しい。

その理由は彼の足元にあった。

「お前のソレ……貸して……くれ、よ……」

「ダメだって。これは俺専用なんだし」

御堂の乗る、スケボーに。

登り坂を足で蹴ることなしに苦もなく上がっていく、妙にゴテゴテしたモーター付きのスケボーだ。

エレクトロモーター電撃使いである御堂のエネルギー供給を受けて駆動するバッテリーシステムを搭載したそれは、第5学区の大学に通う兄に造ってもらったものらしい。

4月に初めて見た時には何なんだこの少年探偵、とか思ったものだ

が、5ヶ月も経てばさすがに慣れた。

そんな未来未来な優男は、腕時計を見て間に合う確信を得たのか嶺次に問いかける。

「なあ嶺次、今日転校生が来るらしいんだけど……何か知ってる？」

「転校……生？初耳……だ、ぞ？りゅうい琉惟からの、情報か？」

「ありゃ、嶺次も知らないか……まあ確かに琉惟からの情報なんだけどね。時期も妙だし」

「大覇星祭の……直前……、だしな……」

何故か情報通なクラスメイトの話で盛り上がる、普通の日常。

幾度も死にかける程の戦闘を経験している嶺次には、とても貴重なものに思える。

かくして、嶺次と御堂は鳴り響くチャイムの中を教室に滑り込んだ。

結果論で言えば、情報通でゴシップ好きのクラスメイト、茶竹^{さたけりゅうい}琉惟の情報は合っていた。

ただし、

「妙な時期ですが、転校生がこのクラスに来ました」

担任、青館^{あおだてあやめ}菖蒲の声は耳に入らない。

そこにいたのは、

小柄で華奢な、折れそうに細い体。

物憂げで優しそうな瞳。

女のように艶やかな黒髪をまとめる、“赤いカチューシャ”。

促され、自己紹介する彼の名は、

「えっと……………。よろしくお願いします。赤石^{あかしかぜはや}風早^{ふうはや}って言います」

「はあああああ!!??」

「っ……………うつせえな嶺次!」

隣に座る悪友、翠隻すいぜきかいり解理が文句を垂れるが、真っ白な思考に陥った嶺次は構ってなどいられない。

雪崎嶺次は、この少年と7月の末、文字通りの死闘を繰り広げたのだから。

その後、彼は誰だか分からない人間に連れ去られたはず、だったのだが……

混乱の極致に放り込まれ、呆然とする嶺次の脳ミソは向けられた風早の淡い笑みにあっさりフリーズする。

薄れゆく意識で耳に残ったのは、トリップしてしまった女子の方々（主にシヨタ属性持ち、母性本能マックス）の歓喜の叫びだった。

その日、興条学園1年D組の恋愛戦線は大いに変動することとなる。

朝のホームルーム終了直後、とある女子が風早に話し掛けたのが、その発端。

「赤石さん、ですよ。私、蘇芳帳すおうとばりと申します。分からないことが

あつたら、何でも聞いて下さいね？」

（男子内での）通称、帳姫。

常盤台中学から進学してきた物好きなお嬢様で、深いブラウンのセミロングが何故か常にふわふわしている。その上、趣味は人の世話を焼く事。

この強烈なお姫様属性の前に撃沈された男子は多く、この時点で嫉妬に駆られる連中が大量に出ることは予想できたのだが……

放課後。

クラスの女子の方々はすっかり風早にご執心で、他の男子など目に入っていない。

そんな教室から逃げるように帰宅する、解理、御堂、他十数名の男子達。

どんよりとしたAIMを放ちまくっている彼らの口元からは、

「くそう…これが母性本能を直撃するシヨタ属性の破壊力か……」

「せっかく試した新しい髪形には目もくれないし……」

「存在だけであの人気は反則だろ……」

と、卑屈な言葉がちらちらと流れ出ている。その中には、

「帳姫にフラグを……フラグを立てやがって……」

と、密か（男子にはバレバレ）に帳に思いを寄せている御堂の言葉がことさらに重く呟かれる。奇妙な連帯感を纏う悲しい男達を見送ると、

「やれやれだな……。転校生1人でこの騒ぎとは……」

女性恐怖症の優等生、田鞘橙李^{たざやとうり}が声を掛けてきた。

彼はその性格ゆえに恋愛沙汰に縁が無く、帳姫にも何の心も揺らぐにいられる数少ない男子の1人でもある。

「全くだ。あんなに動揺と嫉妬しなくても良いよな。世話焼きは姫^{アレ}のいつものクセなんだし……」

相づちを打って振り返ったのだが、橙李はこめかみに指を当て、溜息を吐きながら言う。

「何を他人事みたいに。嶺次だって、灰笠があの中に入ってたら今頃解理達と一緒にネガティブモード突入だろう？」

「な……ばあ……っ！！？？」

あまりに予想外、そして凶星な一言に嶺次の顔面が茹ったようになってしまった。もしかしたらエクステまで赤くなっているかもしれない。

確かに、幼なじみの未鶴が風早を取り囲む輪の中にいないことに少

なからず安堵したのは事実。事実、なのだが……

「ま、あんまし余裕こくなよ？ 灰笠、結構人気なんだし」

「っ！？」

橙李は、恋愛沙汰に縁が無い。それゆえに客観的にクラスの内情を把握しているのだ。加えてこの性格とわざわざ髪で隠した容姿。絶対もったいないなあブツブツ……と自問自答の現実逃避ルートに迷い込んだ嶺次に、声が掛かった。

「あの……雪崎君？」

そこには、

「お前……」

「一緒に、帰らない？」

女子の輪を抜け出した赤石風早が、ためらいがちな手を差し伸べていた。

——20分後——

嶺次と風早は、大覇星祭の準備期間に突入して妙にそわそわした雰囲気が出た。学園都市を歩いていた。

「雪崎君、僕は……君に……」

「いいよ、別に」

風早が言わんとしていることくらい、嶺次でも分かる。雪崎嶺次はそんなに空気の読めない男では無いのだ。

だから、風早の言葉を遮ってこう言った。

「良いんだよ、別に。今日1日の行動を見ていれば風早の性格は分かる。“あの時”の風早がおかしかったことくらい、簡単にな」

夜来綴には“希望的な観測”と言われたが、信じて良かった、と嶺次は素直に思う。

「それでも……僕は……」

パシン！ と。

言葉に詰まる風早の背中をはたいて、明るく言い放つ。

「いいっての。俺が構わないって言ってるんだから、これでこの話は終わり。……でも、あの風紀委員には謝っておけよ。それで全部チャラだ。いいな？」

有無を言わさぬように。これ以上、風早の罪を増やさぬように。

「あの…………俺の存在意義は？」

と、シリアスな空気に詰まりそうだった橙李がおずおずと手を挙げてきた。

「あ…………悪い」

橙李が後ろに付いてきているのを、忘れていた。

——同時刻——

「う……………ん……………」

学園都市を見下ろすビルの屋上に背伸びをする男が居た。それまで、何かを待っていたかのように。

纏うのは、奇妙な白ずくめの装束。マントを短くしたような物を2つ両肩から垂らし、腕を下ろすと肘の辺りまで隠される格好になる。

その先の両手は白い袖で覆われ、形が辛うじて判別できる程度だ。

白ずくめに異彩を放つのは、耳を覆う大型のヘッドフォン。普通の

大人の拳程の大きさを持つそれには、×印の中央に重なるように円を描いた模様が刻まれていた。

とある、魔術結社の印が。

「さすがに最先端装備のケーサツは相手にしたく無いよなあ……うん」

警備員アンチスキルのことを“ケーサツ”と呼ぶこの部外者の視線の先には、3人で連れ立って歩く少年達の姿がある。もっとも、男にはその中の1人しか映っていないのだが。

「うんうん。人殺しでも結構風景に溶け込むもんだねえ。……赤石、風早君？」

黒髪の隙間から覗く瞳の冷たさに気付く人間はいない。

標的を誘い込む位置を改めて確認すると、彼は20階建てビルの屋上であるにも関わらず、宙を舞った。

e p, 1 良いんだよ、別に（後書き）

いかがでしたか？

作者は転校生というイベントを経験したことが無いので、変なところ
ろは脳内補完してもらえると幸いです。

感想などいただけると有り難いので、よろしくお願いします！

e p, 2 迎えに来たよ (前書き)

今回からは5章も進展していきます！

e p, 2 迎えに来たよ

『大覇星祭』は、学園都市の全域を利用して開催される超大規模運動会だ。

あちこちに設置された『大覇星祭 第〇運営支部』というプレハブや矢印のある看板は、嶺次達が歩く数キロの内にすでに4つめだ。それほどに多くの人員と予算を注ぎ込んでいることをまだ何も知らない風早に説明する橙李の表情は何だか嬉しそうに見える。

(しまった……橙李と転校生は組み合わせとして最悪だった……)

女子には見せないため帳姫に隠れがちだが、実は橙李も相当な世話好きなのだ。このモードに突入した彼は中々収まらないので、どうしたものかと手をこまねいている嶺次に、とある人影が声を掛けた。

「雪崎……嶺次さん？」

そこには、頭に花飾りを乗せ、右腕に風紀委員の腕章をつけたセーラー服の女子中学生がいた。

夜来綴と一緒にいたのを見たことがある。確か、名前は……

「初春……飾利だったっけ？」

「はい！」

何故自分のフルネームを呼んだのかという疑問よりも、嶺次には目

についたことがあった。

未知の登場人物（女子）に、橙李の言葉が凍りついたことだ。

「ふーん……じゃあ綴はその白井って娘が入院してからは真面目に仕事してるんだな……」

「はい。普段は夜来先輩に食って掛かる白井さんでも、あの姿を見れば固法先輩みたいに見直しますよ！」

と、若干頬を赤らめて綴を絶賛する初春。

どうやらあのイケメンはたまに本気モードで仕事をしただけで、フラグを構築できるらしい。

ふざけるなああの野郎、と逸らした目線で綴に呪いを送信する嶺次だったが、

「あの……………?」

風早の細い声が嶺次の意識を呼び戻した。

とはいえ、初春より頭1つ高いくらいの身長しかない風早の挙手はそれにしても締まらない。

「橙李君……どうしたの？」

そんな風早が指で示した先には、曲がり角の陰でガタガタと怯える
橙李がいた。

「あー……あれは……」

風早や初春に女性恐怖症を説明するのも、それはそれで大変じゃないかと思つた嶺次だったが、ふと初春の腕章が目に入った。

通常、ジャッジメント風紀委員の腕章は任務中にのみ装着するものだ。それを付けているということは……

「なあ初春、今何か起きてるの？」

「え、ええ」

嶺次の問いに少し驚いた初春だが、表情が変わった。普通の学生には無い、風紀委員のそれだ。

それほど緊急じゃないんですけど、と前置きすると、初春は説明を始めた。

「実は、数時間前、学園都市に2人の侵入者があつたんですよ……」

初春の説明は簡潔だったが要領を得ていて、嶺次も舌を巻く程だった。

「つまり、その学園都市に侵入したテロリストさんが行方を眩ませて、その逃走ルートが極端に警備員や風紀委員を避けている、と？」

「はい。侵入ルートも警備の隙を突くようなものでしたし、恐らく9月1日のテロリストと違って大事になるのを恐れているようなんです。なので、下校する風紀委員には腕章の装着が指示されていて……」

そこで初春は言葉を切った。彼女が得意とするのは情報戦とのことなので、情報の少ない現状ではそのスキルを活かせないのが歯痒いのだろう。

「では、^{コードレッド}特別警戒宣言も発令中なので、早めのご帰宅をお願いします！」

「……おう……」

風紀委員ならではの凛とした表情に押され、その場を後にする。だが、その程度で遊びを中断するような生真面目な高校生が殆んどいないのも、また事実。

初春に若干の罪悪感を感じながらも橙李を呼び戻し、繁華街へと向かう嶺次達。

「あの……いいの？……これって……」

この街に馴染んでいない風早が不安げな表情を浮かべるも、その視線の先には放課後を謳歌する学生が大量にいた。

大丈夫なもののだろうか、と風早も思いなおし、繁華街へと繰り

出していく3人。

だが、その選択を嶺次はすぐに後悔することになる。

——20分後——

かくして繁華街に到着した嶺次達だったが、夕方の薄闇の中に輝くネオンが目の前に広がる光景を前に、風早が呆然と立ち尽くしていた。

まるで、こういった場所に初めて来た子供のような表情で。

「風早、ゲーセンとか来たこと無いのか？」

「……うん、僕は通えなかったから。普通の学校に」

曇る彼の目に、しまった、と嶺次は思う。

風早はつい先日まで、赤石会という宗教組織に監禁に近いかたちで崇められ、育てられてきた。

そんな組織が、何より大事な信仰対象に普通の少年としての生活を送らせるはずが無いではないか。

「……ごめん、変なこと聞いて」

「ううん、大丈夫だよ。これから慣れるから」

「そっか…じゃあ、まずはどこに行く？」

風早に笑いかける嶺次だったが、脇にいる橙李が無言で彼の肩を叩いた。

普段のように軽くなく、危険を訴える動作として。

「何だよ、橙……………李……………」

その理由は、周囲を見渡せば解る。

「人が……………いない……………」

部活もテストも無く、大覇星祭の準備期間中の繁華街に、人がいない？

無人の光の街に電子音だけが響くあまりに不気味な光景だが、嶺次の記憶にはこの現象の答えが眠っていた。

「これは……………人払い……………！！」

「人払い……………」

橙李の疑問より早く嶺次の頭に浮かんだ“危機”が、漠然と硬直す

る2人を引きずるように逃げるといふ行動を選ばせる。

そしてそれは、彼等の命を救った。

ごぼり、と。

一瞬前まで3人がいた場所のアスファルトが、“沸騰した”のだ。

液体のように泡立ったそれは、今にも全方位に弾けそうに膨張している。

「な……!?!」

嶺次は絶句する。橙李や風早の前で身構えると、学生服のズボンに忍ばせていた長財布程の2枚の金属プレートを引き出し、それを持つた手を胸の前で拍手するように合わせた。

刹那、

それは爆発した。

真っ赤に熱された液体のアスファルトは飛び散った先の物体を音を立てて溶かし、あちこちで回線の焼き切れたネオンがショートする音が響く。

———ただし、雪崎嶺次の周囲を除いて。

3人を繭のように包む白銀の盾によって、高熱の雫は防がれている。表面には熱で赤く変色した跡が残るが、それだけだ。周囲のように貫通はしていない。

それを見て首を傾げる男が、1人。

「うーん？ やっぱり学園都市だなあ……面倒な能力者を仲間にしちやってさ……」

白の装束に煤けた煙を纏い、悠々と彼は歩いてくる。

「何だ……テメエ……！」

防壁を解除し、歯を剥き出して怒りを放つ嶺次の前方、10メートルの距離で彼は手を広げて堂々と宣言した。嶺次では無く、

「迎えに来たよ、赤石風早君。僕達の……希望の子」

あまりに唐突に、告げられた名前。

びくり、と。

嶺次の背後にいるその少年は、名前を呼ばれたことにひどく動揺して見えた。

まるで、見えない何かに心を貫かれたように。

嶺次はこの表情を知っている。7月の終わりに闘った時、一瞬だけ。苦悶の叫びの中で垣間見たそれは、恐怖と自責に歪む、とても悲しいものだ。

だから、嶺次にはそれで十分だった。

「おい、そこの白ずくめ……」

目の前の男にとって嶺次は風景の中の存在なのだろう。注意を払おうともしない男に、あえてこう言い放った。ヘッドフォンで相手の耳に入るまいが、そんなことは関係無い。

「お前が誰なのかとか、どういう存在なのか、それはどうでもいいけどな、俺の“友達”を奪うってんなら、容赦しないぞ……!!」

「え……?」

雷に怯える子供のようにうずくまる風早の表情に、戸惑いが混じる。自分を狙った攻撃で危険にさらしたはずの少年が、自分を守ろうとしていることに。

「あ……あ……」

初めて感じるこれが、嬉しいという感情なんだ。

そう、風早が思った瞬間。

「うんうんうん……やっぱり、君の性格は変わっていないんだね。自分では決して手を汚さない。けれど周囲の人間を懐柔する才能は特別だ。……『人殺しの赤石君』？君はやっぱり——」

「黙れ！！！」

「……？」

男のなぶるような声を遮り、一步踏み出して嶺次は叫んだ。

「言ったよな。お前が何なのかは、どうでもいいって！！」

そこで初めて、白装束の男は嶺次を直視した。敵意や侮蔑といった負の感情を顕わに、嶺次へと体を向ける。

「全く……これだから人間というものは悲しいなあ、うん」

眉をひそめる嶺次に構わず、男の言葉は続く。

「同じ人間でありながら、ここまで愚かなるものが生まれるんだから……」

その視線が僅かに、恍惚するように上を仰ぎ、そして、

「だから学園都市は嫌いなんだよなあ！！」

叫びと同時、周囲の地面が一斉に沸騰し、融解した。

炎熱地獄の中で、スクリーンのごとく赤く染まる白を纏う男は言う。

「僕自ら、貴様のような低俗な種族を叩き潰すとは……」

微塵の慈悲もなく、そう、言い放った。

e p, 2 迎えに来たよ（後書き）

いかがでしたか？

次回はとある人物が大活躍します。

今回も感想をいただけるとありがたいです！

e p, 3 優等生には優等生の（前書き）

サブタイで出オチしてますが（汗）、今回は橙李が大活躍です！

e p, 3 優等生には優等生の

融解したアスファルトの余波で皮膚が火照る感覚を受けながら、嶺次は正面の男から視線を逸らせない。

「何だよ……あの男……!？」

後ろで絶句する橙李にはせいぜいスキルアウトの喧嘩にしか映らないだろう光景。

——だが、だからこそ、橙李でよかった。

「橙李……!」

「………っ、分かったよ!」

言葉はそれだけに、嶺次の後ろで風早を庇いながら路地裏へと向かう橙李。

嶺次が“こういう状況”で喧嘩を買わずにいられない性格であることを知っている彼だからこそ、言いたいことも伝わったのだ。

これから全力を出すから下がっている、と。

だが、嶺次は失念していた。

これは普通の喧嘩とは違うのだ。相手の目的は、風早にあるのだから。

——どろり。

“それ”を認識した瞬間には、嶺次は既に後手に回っていた。

「な……っ!？」

足元が液体の蟻地獄のように沈み込み、3人を逃がすまいとその足を飲み込んでいる。

(こいつ……物体の液状化もできるのか?)

目の前の男は手をかざす。無言のままに両の手を交差させ、その焦点が自分に向いた、と嶺次が思った瞬間。

「——っ!!!」

自分の肉体が、おかしい。

見えない何かが内側から破裂しそうになる。この痛みとも全く違う違和感を無理やり押さえつけ、防壁だった金属プレートを再形成。

細い縄の形状にしたそれを蟻地獄の外にある街灯に巻き付け、連なつて手をにぎる橙李や風早もろとも引きずりあげる。

転げ回るようにそこから抜け出した瞬間には、凜猛な感覚は収まったが、油断して緊張を緩めると口からごぼりと血が溢れた。

（さっきの……アスファルトを融解させた『何か』を……俺に、ぶつけたのか……？）

必死に男の能力を考えようにも、男は容赦など一切せず手をこちらに向ける。

（とにかく……あれに当たるとマズイ……！！）

攻撃と連動しているであろう相手の掌の標準を外させるため、薄いながらも路上を遮る大きさの壁に街頭を形成する。

「嶺次……」

吐血を心配する橙李の言葉を制し、嶺次は男の様子を壁越しに窺った。

だが、そんな小細工を全て無視して『何か』は襲い来る。

「逃げるなよ……僕の手で殺されれば、君も幾らか高等の存在になれるぞ？」

あまりに傲慢な言葉に反論する間も、無かった。

ドバンツッ！！

壁の膨張を察知していなければ嶺次達は大火傷を負っていたであろう

う位置に、高熱で融解した金属が降り注ぐ。

「嶺次…あいつの能力、何か変じゃないか？」

「それ、は……」

この切迫した状況で能力の違和感に気付けるほどの橙李の協力はな
んとしても欲しいが、魔術を一切知らない橙李にこの場で説明する
だけの余裕も、橙李を巻き込む覚悟も無い。

「俺に言われても——」

だが、そんな打算的な思考は中断される。障害物を求めて駆け込も
うとした路地裏の入り口がマグマのように変化し、行く手を阻んだ
からだ。

嶺次達が足踏みするこの時を、相手が見逃すはずがない。

「ちい……っ!!」

懐にある最後のプレートを男に向かって突き出し、標準を固定させ
ないための3人を覆う壁を極めて薄く造る。だが、そんなものは時
間稼ぎにすらならないことを、どちらも分かっている。

違うのは、相手には一方的に攻撃する手段があり、こちらには手札
がもう無いこと。

そして、壁の向こうでかざした手が嶺次達を捉えた。

だが、

(……………?)

防壁が融解するために赤熱する、ほんの少しの瞬間。

彼の『圧力成形』^{ヒートプレス}によって薄く薄く作られた壁が、“それ”を響かせた。空気を震わせる、重低音のような“それ”を。

(これは……………!!)

その正体を、田^た鞆^{くらや}橙^{とうり}李は知っている。そして、これが“トリック”の核だとの確信も、彼の能力に起因する知識が導いた。

壁が溶け落ち、男の前に無防備になろうとも、橙李の表情には笑みがあった。

「橙……………李？」

「嶺次、俺はスキルアウトの喧嘩は専門外だ。お前に任せるしかない。……………けどな、優等生には優等生の戦い方があるんだ!!」

前に立ちはだかる男すら、呆れた表情をしている。

「うん？ 命の危機を前におかしくなったのか？」

「それは……………どうかな!？」

自信に満ちた言葉と同時に、橙李の能力が発動した。

右の手を指揮者のように振り上げると、嶺次もようやく橙李の真意を理解したのか守るべき風早の前に動く。

下らなそうに水平に上げた男の手を前に、橙李は目を閉じた。

彼の能力にとって、視覚は邪魔だからだ。

そして、

橙李の身体は、“融解しない”。

「……!?!」

絶対的優位にいたはずの男の表情が動揺を映してにわかにもれる。

男は再び手を橙李へ向けるも、橙李の身体は赤熱すらしない。

そこに、橙李の声が響き渡った。

「俺の能力を教えてあげるよ。——音声操作。マニユアルスピーカー君の小細工を封じるには、ぴったりの能力だろう?」

「馬鹿な……!?!」

絶句する男の能力は、『音の魔術』にあった。長い袖に仕込んだ指

向性スピーカーを用いて人間の可聴域外の音で呪文を詠唱し、それによる振動さえも付加して対象を液体化、加熱する術式を発動するものだ。

だが、橙李の能力はその一枚上を行くものだった。

『マニユアルスピーカー』
『音声操作』。自分の身体を音叉のように用いることで、周囲の音の波長を操作できる能力。橙李はそのレベル4であった。橙李は相手の発する音が電子レンジのマイクロ波のように対象を崩壊、加熱させていると類推し、この一帯でその音域を走る音を全て、打ち消したのだ。

無論、彼には魔術の知識など微塵も無いというのに。

「この……下衆が……!!」

我を忘れた男が感情を剥き出した瞬間には、勝負はついていた。

——その懐。そこには、銀のトンファーを目一杯振りかぶる雪崎嶺次がいたからだ。

「サンキュー、橙李。お前が優等生で良かった!」

「貴……様……!」

ゴギンツ!!!!と。

力強く笑いながら、嶺次のトンファーは男の顎をためらわずに打ち抜いた。

――数分後――

完全に気を失ったらしい男を前に、橙李から種明かしを聞いた嶺次。

「なるほど、音か……」

「こんな呪文まがいの古典的トリック、使ってるとは思わなかったけど」

『音』の専門家である橙李に言わせればそういうことなのだろうが、魔術師であることすら明らかにされずに打ちのめされたこの男が、ほんの少しかわいそうになる。

「そういえば……」

と、不意に橙李が風早に問い掛ける。

「この男、風早を知っているみたいだったけど……?」

「…!」

橙李の質問に空で手を彷徨わせながら、風早は答えた。

「うん。確か、音代千歳ねじろちとせって名前だったと、思う……」

「思う……?」

怪訝な表情をする嶺次に何故か申し訳なさそうに、

「いつも、ある人の後ろにいたから。僕が会った時には」

「ある人、ねえ……」

橙李が溜め息混じりに言う理由は簡単だ。

「ってことは、こいつは個人じゃなく、組織の中の1人なのか……」

風早の言うことが真実なら、この男——音代はただの尖兵ということになる。相手方の目的が風早にある以上、まだまだ襲撃を重ねる可能性があるのだから。

「まあ、こいつを警備員に引き渡すしか無いだろ。俺達じゃ尋問なんてできないしな……」

この男の素性をどこかの私設研究所の“使い”と考えた橙李は、そう言いながら携帯を取り出す。だが、嶺次にはこの魔術師をそう簡単に学園都市に引き渡してよいものかが分からない。

とりあえず通報を待ってもらうように橙李に言おうとして、

「しくじったのね、千歳。もはや名誉を回復する機会など、永遠に与えてもらえないと思わないことね……」

「「!?!」」

いつのまにか、そこにもう一人の“女”がいた。

攻撃の意志を示さずとも、その服装は既にこの男の仲間だと主張しているようなものだ。

嶺次達より年上、20歳前後に見える女は、音代と同じような白い装束に映える銀の長髪を揺らして静かな繁華街をこちらに歩いて来る。

整っているはずの顔立ちには嶺次達への敵意よりも仲間であるはずの音代への侮蔑が端的に顕れ、それが言い知れぬ恐怖を与えていた。

「何者だ……アンタ」

嶺次は風早を庇いながら、女の日を見据えた。橙李も危険を察知したのか、嶺次と並ぶように立ちほだかる。

女は興味を映さぬ目を嶺次に向けると、

「別に言い訳はしないわ。貴方のような“物”に我が師の理想は理解できないでしょうね」

また、こいつも尖兵なのか。

そう思い、名も知らぬ黒幕の存在を確信しながら嶺次は足元に力を込める。

踏み込みと同時に、勝負を着けるために。

だが、

「聴きなさい、野蛮な“物”共。我が師の術式、その真髄を!!」

そう叫んだ後、女は“歌いだした”。

「!?!」

十字架における典型的な賛美歌。だが、その美しい声が嶺次達の耳に入るより早く、異変は起きた。

ぶちっ、と。

まず、頭以外の嶺次の四肢が力任せに引っ張られたように千切れ、砕けた。

(――!!!!)

次にその身体が見えない刃で切り刻まれ、磨り潰され、血の色と共にただの肉塊と成り果てていく。

そのあまりに残酷でグロテスクな光景を、“痛覚を一切感じずに”
嶺次は見せ付けられ続けた。

「これは……幻覚……」

あまりに超然的な現象を前に、嶺次の脳は思ったより冷静に働いた。

これが幻覚であることを見極めることも、容易い。

だが、解つていても身体が動かない。

冷静であればこそ余計に感じてしまう恐怖と嫌悪が嶺次の身体を釘で固定しているかのように、指の一本すら動かせないのだ。

女が賛美歌を歌い終えても、この幻覚は止まない。

時間の感覚も失いかけていく中で、女の声だけが響いた。

「これは貴方達の恐怖が生み出した幻影。私の歌は人間の中に眠るその引き金を引いたに過ぎないのよ？」

「……！」

「へえ、抵抗の意志がまだあるのね。まあ、せいぜいあがくと良いわ。風早様は貰っていくのだから」

!!

視界は原型を止めない身体から逸らせず、指の一本も動かせない。ただ、思考には風早を守れなかった自責だけが積み重なっていく。

「……の……!」

そして、どこか遠くで風早の声が聞こえた気がした。

e p, 3 優等生には優等生の（後書き）

いかがでしたか？

次回は夜来登場です！

お楽しみに！

e p, 4 待たせて済まなかった（前書き）

更新が大分遅れてしまい、申し訳ありません。

今回は綴の内面に迫ります！

ep, 4 待たせて済まなかった

気が付くと、嶺次は四角く切り取られた夜空を見上げていた。

「俺……は？」

「気が付いたか」

「橙……李」

辺りを見回すと、そこは路地裏の一角だった。あの通りから移動させられたのだろうか。そばにある非常階段に腰掛けている橙李だが、表情はひどく疲労しているように見える。

「あの幻覚、結構キツくてな……。嶺次の前にまず自分を打ち消すのに時間が掛かった……」

申し訳なさそうに言う橙李だったが、額の汗や青ざめた顔はそれにどれだけの心労を払ったかを端的に現していて、嶺次はただ感謝を告げることしか出来なかった。

「ありがとう。……お前に助けられてばかりだな、俺……」

「気にするな。それより……」

「ああ。風早が……」

拉致された。しかも、嶺次の推測ならば魔術サイドの人間に、だ。

——となれば、もう橙李は巻き込めない。

目の前で真剣に悩んでくれる橙李には、これ以上“こちら”に関わって欲しく無いのだ。

だから、嶺次はこう言うしか無かった。

「橙李、済まないけど…」

「分かってる」

「え……………」

「嶺次があいつらに心当たりがあるのは分かってる。それは嶺次と風早だけが共有する、表には出せない接点だということも……」

本当はこんな風に突き放すのは嫌なくせに、橙李は鮮やかな髪に表情を隠して言う。

「俺にできるのはここまでだ。だから……………」

握る手は、震えていた。

出会って数時間の人間の為に、ここまでできる人間なのだ、橙李は。

「必ず、赤石を取り返して来いよ……………」

お人好しな優等生はそう言って目線を上げると、

「大覇星祭、皆で参加するんだからな？」

「ああ……!!」

遠くに聞こえる警備員アンチスキルのサイレンを背に、嶺次は風紀委員のとある詰所に向かって駆け出した。

普段はいい加減な『彼』も最近は真面目に働いている様だし、きっとそこにいるだろう。

魔術を知り、嶺次に力を与えてくれる存在——やらいつづり夜来綴が。

——15分後——

とある雑居ビルの一室にある、風紀委員第177支部にて。

最近、学園都市の警備網は緩すぎる。と、黒髪のイケメン、夜来綴はパソコンのキーを叩きながら思う。

9月1日の戦闘も未だ修復を終わっていないというのに、また侵入者騒ぎだ。

もっとも、今回侵入した白ずくめの男女は巧みに監視カメラを躲して潜伏を続けるのみで、目立った戦闘などは行われていない。

だが、綴にはそれが余計に気に掛かるのだ。

獲物に狙いを定める狙撃手のような、不気味な沈黙が。

——と、警備員の通報回線と共有しているアラームが鳴り響いた。風紀委員と警備員の協力体制を敷く場合に鳴るものだ。

隣の固法と顔を見合わせる綴の嫌な予感ほ、その後続く言葉で現実となる。

『19時45分、第7学区に於いて中規模戦闘との通報あり。付近の監視カメラが、侵入者の一名と思われる男の姿を捉えました』

間を置かずテレビ型端末の画面に表示されたのは、白い装束に身を包んだ男。

そして、その男と対峙する白いエクステの少年、ゆきさきれいじ雪崎嶺次の姿だった。

「な……っ!？」

思わず立ち上がる綴を不思議そうに見上げる固法だが、綴の思考は完全に方向を変えていた。

もっとも、固法が不思議に思ったのは綴がまるで“慌てている”かのような表情をしたことにあったのだが。

この夏以降、綴は何かが変わった。表情とも態度とも解らないが、何かが。

それは良いことなんだろうな、と思う固法の隣で、綴の思考は加速する。

（侵入者と嶺次が戦闘？だとすれば相手はただのテロリストでは無く……）

魔術師か、と結論づけようとして、

「綴い！！！」

「！！」

見た目よりも嚴重なセキュリティが施されたドアの向こう。扉に拳を叩きつける音と共に、画面の中にいるはずの少年の声がしたのだ。

それも、ひどく緊張に溢れた声色で。

本来なら部外者の入室は厳禁なのだが、扉そんなことを開くに迷うまでも無かった。

そこには――――

——同時刻——

高くそびえる学園都市の外壁から少し離れた、さびれた駐車場。

手入れは放置され、ひびの入ったアスファルトからは雑草が顔を覗かせる。郊外に有りがちなものだ。

そこに、あまりに不釣り合いな高級車が停まっていた。

アイドリングの音すらさせず、近寄りがたい静寂に包まれる車中に、携帯の着信を告げる振動が静かに放たれた。

後部座席でそれを手に取った人影は、暗闇に光を穿つディスプレイを一目見ると通話のボタンを押す。

「私だ。首尾はどうだい？ 白銀^{しろがね}」

白銀。そう呼ばれた相手は、息を整えるような沈黙の後に言う。嶺次達を幻覚に陥れた、美しい女の声で。

『近衛様^{しのえ}、風早様の確保に成功致しました。つきましては——』

その後に続くであろう言葉を遮り、男は明らかに喜びを乗せた声を放つ。

「そうか！ いやあ、よくやってくれた、白銀」

『——っ、それでは、手筈通りに』

電話の向こうで恭しく、感情を込める女の言葉に適当に返事をする
と、近衛と呼ばれた男は通話を終える。

そして、

「これでようやく……『開演』を迎えられる」

暗闇に浮かぶ目には、歓喜に似た感情が宿っていた。

「そんな……ことが……」

綴の驚愕が、漏れる言葉で如実に伝わる。

第177支部にある簡易な応接スペース。そこで嶺次は綴に状況を
説明した。7月の末に闘った少年が転校生として現れ、それを謎の
連中——おそらく魔術師が連れ去ったことを。

それを裏付ける情報は綴の側にも多々あったので、綴がその事実を
把握するのに苦労は無かった。

「状況は……マズイみたいだな」

「ああ。相手の組織の規模も、風早をどうしたいのかも分からない。せめて風紀委員の情報収拾能力が欲しい。それと……………」

「俺の力が欲しい、か？」

頷き、綴を見据える嶺次は真剣な目をしていた。きっと、本当に風早を助けたいのだろう。たとえ傷つけられた相手だったとしても、そんなことは関係無く。

だが、嶺次の心情を理解しながら、綴はいつものように軽薄な承諾を続けられない。

「ま、まあ、そんなに急くなよ。特別警戒宣言が発動されている以上、学園都市からの逃亡は難しいからな……………」

「綴……………」

そうさせたのは、葛藤。

自分の目的の為に“利用”しているはずの目の前の同級生の言葉に、綴の心が影響を受けている。

以前は平気でレベル5と闘わせたはずなのに、今は嶺次に危険を冒して欲しく無い。

嶺次が侵入者と戦闘をしたと確認した時、思わず立ち上がってしまった。

そんな自分が、怖い。

一方的にして大きすぎる嶺次からの信頼に怯えているのだ。

まるで、絶対に自分には触れられない領域に嶺次がいるような気がする。

だが、ぶっきらぼうな嶺次の信頼は綴の心に易々と足を踏み入れた。

「綴、確かに俺は1人じゃ弱い。きっと風早を救えない。だからこそ俺は、お前の力を借りたいんだ……」

「俺は…」

「一方的だってことも分かってる。でも、俺には綴が…必要なんだ！」

「……っ!!」

夜来綴の心に、もう他の選択肢は……無い。あるはずが無かった。

「2人で1人の……か」

「？」

苦笑いを浮かべた綴に嶺次は首を傾げるが、

「いや、何でもない……行こうか。待たせて済まなかった」

「綴……」

何処か吹っ切れた様子の夜来に、嶺次の表情も緩む。

だが、そこに警備員のアラームが再び鳴り響いた。内容は……

『学園都市外壁に脱出者有り。対能力者戦の用意を』

「マジかよ……っ!!」

特別警戒宣言下にも関わらず、彼らは突破を図ったというのか。

「場所は第11学区……最悪だ」

端末に接続したキーを操作した綴が吐き捨てるように言う。

そこに表示されたのは、この場所から遠く離れた学園都市の外周部。少なくとも見積もっても直線距離で15キロはあるだろうか。

つまり、追いつく手段を無くしたのだ。

「どうする……?」

だが、綴の目まぐるしい思考は嶺次の思わぬ一言によって中断される。

「いや、足ならあるさ……」

「!？」

嶺次の頭に浮かんでいたのは、とあるクラスメイトの乗るスケボーだった。

e p, 4 待たせて済まなかった（後書き）

いかがでしたか？

心情の描写に四苦八苦して、時間もかかってしまいました。

感想をいただけると幸いです。

次回は、とある原作キャラによる行間です！

行間 その男の名は（前書き）

今回は行間です。

アニメ二期だけを見てこちらに来た方にはネタバレがMAXなので、
ご注意ください。

行間 その男の名は

嶺次達が学園都市からの脱出者に気付いた頃。

日本のどこか、マンションの一室。ここは、とある魔術師達の拠点となっていた場所である。

“いた”と過去形なのは、彼らが拠点をロンドンへ移すことが決定されたからだ。

——彼らの名は、『天草式十字凄教』と言った。

9月上旬、『法の書』の一件で世界最大の十字教派閥、ローマ正教アークビショップと敵対関係に入ってしまった彼らをイギリス清教の最大教主は受け入れるという決断をしたのだ。

若干のタイムラグを経て彼らの住居がロンドンに設けられたため、その引っ越しの一環として拠点の1つを引き払う作業を行っている、という訳だ。

そんな慌ただしい状況を取りまとめる、1人の男がいる。

「建宮さん、この姿見どうしますー？」

「そいつは他の鏡とかと離してトラックに積んどいて欲しいのよな。……割るなよ？」

うあーい…、と頼り無さげな返事をして大きな鏡を運ぶ10代後半

の茶髪少年を見送ると、建宮と呼ばれた男はまだまだ多くのモノで溢れる部屋を見回す。

………たてみやさいじ建宮齋字。天草式の代理教皇としての職務をこなす、クワガタのようにツヤのある髪をした20代半ばの男である。

（まあ、この部屋は思ったより長く使っちゃったからな……引き払うには丁度いい機会ってとこなのよな………）

古来より周囲に溶け込んで活動してきた天草式は、拠点を次々と移りながらその教えを守ってきた。とはいえ、現代社会では寝泊まりする住居はどうしても必要なもので、こうした部屋が全国に幾つか存在するのだ。

ここはそうした部屋の1つで、天草式の時間基準ではそろそろ移ろうかと思っていた場所だ。

だが、それだけ長く過ごした場所ということは、それに比例して集まるモノの数も増えることになる。事実、建宮達はこの部屋の片付けになかなか手を焼いているのだから。

一般的には普通の大家族の部屋にしか見えないかもしれないが、中には魔術的な意味を過分に含むものもあったりするので、その管理も建宮の重要な仕事なのだ。

実はさっきの姿見もかなり貴重なものなのだが、それを言うとなの新入りの少年……霧島きりしまはかえって動揺しそうなので建宮はあえて黙っておいたりする。

「それにしても………」

終わらない。

もう辺りは暗闇に包まれているというのに、部屋の荷物は半分も片付け終えていない。確かにモノが多いのも理由としてはあるが、

「う、うわおあ!？」

がしゃーん、という物音と共に部屋の入り口で霧島が派手に転んだ。せっかく縛った本の類がバラバラになり、それを持ち上げようとしていた大柄な男、牛深の顔が引きつる。

このどこか抜けている少年のせい、というのも少なからずあるだろう。

建宮はこめかみの辺りをつつきながら、この惨状を眺めている小柄な少年、香焼に近くのマンションにいる女性陣の様子を見に行かせる。

手伝ってもらわねば本当に終わらない。

図鑑のような本に突っ伏している霧島を引きずり起こすと、その手には1つの写真が握られていた。

それは、

「……………っ!？」

建宮がもう二度と見ることは無いだろうと思っていた、とある男の写真。赤ちゃんを抱く男は穏やかに微笑んでいるが、その目には底

の知れない淀みがあった。

「それ」に、自分達は気付けなかった。

そのことを、建宮はずっと後悔することになる。

「……どうしたんです？ 建宮さん」

隣で不思議そうな表情を浮かべる霧島もこのことは知らなければいけないな、と建宮は思う。

その男の名は――

赤石風早が意識を取り戻した瞬間に視界を覆っていたのは、のっぺりとした白い仮面だった。

「！！！」

思わず顔を仰け反らせるとそれは視界から去り、ソファ―に座らされている風早が周囲を確認するだけの余裕もできた。

改めて見回すと、そこは中途半端な『祭壇』だった。10メートル程の直方体の部屋の中に奇妙な色彩のカーテンが不規則に掛けられ、

風早の居る場所は数十センチ床が高くなっている。

「いっ………は………」

風早は此処を知っている。いや、この場所が風早にとって世界の全てだったのだ。7月の末、雪崎嶺次に倒されるまでは、ここは――

「お目覚めかい、風早君。久しぶりのこの『舞台』はお気に召したかな……？」

「近衛………さん」

「おや、敬称を付けてもらえるとね。てっきり、僕は君に嫌われているのだと思っていたよ………」

このえりきゆう
近衛利休。細い目に笑みを浮かべて飄々と振る舞うこの黒いスーツの男が、風早は嫌いだった。

自分が物心付いた頃にはこの男は父が設立した宗教団体、赤石会あかしかいの特別顧問となっていて、息子である自分の能力を文字通り食い物にしている父が唯一、この男は信頼しているようだった。

だが、どうしてだろうか。

その時既に、風早はこの男を嫌っていた。それは幼い子供の本能だったのかもしれないし、ただの勘なのかもしれない。

それでも、あの笑みの奥に張り付いた光にぬるりとした嫌悪を感じ

たことは明確に覚えている。

その男が今、目の前にいる。おそらく、自分を学園都市から誘拐させて。

本能の部分で警戒を強める風早だが、そんな抵抗を指で弾くように近衛は言う。

「そんなに気にしないでくれたまえよ。別に赤石会を再興しようって訳じゃない」

「なん……？」

「僕はそんな陳腐な演目に構ってられるほど暇じゃないんだ。君が居れば問題は無いよ。まあ、天草式の聖人には劣るが、それでも10年を賭けて入手した『役者』なんだからね……」

何だそれは、と風早は思う。

（役者？ 僕が？ 10年を賭けて？ 演目？）

目まぐるしい情報に混乱する風早の表情を読んだのか、近衛は風早の耳元に音も無く近付き、囁く。

風早の心で、弄ぶように。

「そうだよ。君は重要な役者だ。僕の、為のね」

「……………っ！！！」

ぬるり、と。

人間の本能に訴えるような悪寒を背筋に感じ、思わずソファから飛び上がって近衛と距離を取る風早。

その目には、優しげな細男の印象など無い。生き残るための本能に満ちた、鋭い双眸があった。

そして彼の手には、レベル5に相当する『原石』の能力がある。

『遠隔存在^{テレグラム}』。ワームホールを自在に創造し、物理的な制約の一切を無視する、反則に近い超能力。だが、

（僕の…能力は……）

使い物になるのか、分からない。

風早がこの能力を使ったのは、あの雪崎嶺次との闘いを最後に行っている。

理由は簡単だ。

彼は、自身に眠る破壊衝動に勝てる自信が無かったのだ。

この能力を使えば、また無関係な誰かを傷付けてしまうのではないか。そう思うだけで、演算を必要としないはずの風早の頭に鋭い痛みが走る。

そのことを見透かしたように、近衛の挙動には一切の焦りも見られない。

(でも……………!!!!)

——その隙を、風早は突いた。

近衛は自らに向かう攻撃が来るはずは無いと予測していたはずだ。

そんな近衛に背を向けると、彼は両の手に発生させたワームホールをコンクリートの壁へ叩きつける。そうすれば、この外へと脱出できるはず。

だった。

予定外の風早の行動にどよめく部下とは対称的に、近衛は微動だにしない。ただ一言。

「反逆の意志は自らを焼く(P T S T A)」

意味の解らないアルファベットの羅列が耳に入るより早く、風早の意識はぶつつりと途切れた。

パソコンのコンセントを引き抜いて、電源を強制終了したかのように。

「やれやれ……」

能面をデフォルメしたような仮面を付けた部下に風早を回収させながら、近衛は呟く。

「この『スルク・ディミッティスシメオンの預言』があの日あれば、神裂火織を素体にできたというのに……」

その言葉に宿るのは、純粹な口惜しさ。

手から滑り落ちた獲物を惜しむよりも純粹で、それゆえに残酷な、子供のような感情。

「始めるには少し早いが、問題は無いようだね」

近衛はそんな感情をかき消すと、手をぱん、と叩く。

どこからともなく現れた仮面の部下達は2つの物を抱えていた。

1つは、磔に用いるための木の十字架。

もう1つは、ラテン語が書きなぐられた汚いパピルス。

それらを見る近衛の頭には聖人への未練はとっくに消え失せ、もは

や1つの欲求によって支配されていた。

「さあ……『神の子』の再来を……始めよう」

「あの……建宮さん？」

「あ？、ああ、済まない」

霧島に説明することはおろか、自分の中でこの男に整理が着いていないことに建宮は気付いた。気付かされた。

——たった1枚の、写真に。

（あいつは今頃、何をしているのだろうか……）

神裂火織かんざきかおりという聖人の『実験台』を欲する。この理由だけで天草式に近付き、女教皇様プリエスデスが去って間もなく、自分達をぐちゃぐちゃに壊して消えていった、とある男。

研究者としての己の欲望にのみ従う、純粹で残酷な魔術師。

もし、何処かで再び彼が“奪って”いるのなら。

自分達はおろか、あの女教皇様ですら彼を許しはしないだろう。

———その『幸運』を実証するためだけに彼女のスケジュールを漏洩させ、刺客を差し向けるような行為を平気とする男なのだから。

その男は。

その男の名は、このえりきゆう近衛利休。

行間 その男の名は（後書き）

という訳で、行間でした。

何か行間の割には本筋に絡みまくってる気が致しますが、お気になさらず。

次回、もったいつけてはいますが、原作から『彼女』が登場します
！！

感想をいただけると、ありがたいです。

e p, 5 彼には届きません

雪崎嶺次は夜の学園都市を駆け抜けていた。

いや、駆け抜けるという表現は正しくないかもしれない。

ゴウツッ!!! と。風を切る音が耳をつんざくが、ダイアグラム演算代行を用いて嶺次の脳に居候している綴はそれらを無視して脳内に直接の声を響かせる。

（こんなことが本当にできるとはね……っ！）

「悪い、あんまり話しかけないでくれるか…？ 制御がまだ、上手くいかない……！！」

（ああ、済まない……）

何故なら、

嶺次は宙に浮く細長い六角形の金属ボードに乗っていた。スノーボードのように足を固定し、前傾するボードの後ろに手を掛け、夜風を切って。

いかに空間移動能力者やトンデモ兵器溢れる学園都市と言えど頭上

を目にも止まらぬ速度で飛び回る飛行体は珍しいらしく、道行く人々は目を奪われてしまっている。

だが、嶺次にはそれを優越に浸って眺める余裕は無かった。

綴との『接続』^{コネクト}時ならば金属を遠隔で操作できる。それを応用すればこんなこともできるはず、といった嶺次の仮定は確かに合っていた。

——ただし、その演算は嶺次の三次元位置座標に依存するため、嶺次自身の負担が増すことは予想外だったが。

テレキネシスト
念動力者が安易にこうした行動に走らない理由を、嶺次はそこはかとなく知った。

それでも、自動車や信号を位置座標の基準にすることを感覚で掴んでからは速度も上がり、並走するモノレールを追い抜く程の速度を出せるようになっていく。

そうすること15分。もうすぐ脱出のポイントに到着する頃。

慣れるに伴って会話するだけの余裕を取り戻した嶺次は、綴に問いかける。

「なあ、とりあえず脱出するのは良いとして、風早の乗っていたワゴンはどうやって追跡するんだ？」

(え……………)

何だよ考えてなかったのか、というあきれの感情が伝わるが、そこは綴。

(嶺次の携帯から外の警察にハックを掛ける。Nシステム：だったか？それを利用すれば一発じゃないかな)

「そんなこと可能なのか……ってというかマズインじゃ？」

(学園都市からの無断外出に比べればリスクは低いさ。それに俺のハック技術なんて“師匠”には遠く及ばないよ)

「……………うはあ」

とある花飾りでセーラー服の“師匠”とはかけ離れたイメージを浮かべる嶺次を、綴は急き立てる。

(そろそろ来るぞ。学園都市の警備部隊だ。俺達的能力はバラさなように……………)

「ああ、分かってるって!!」

眼前には、煙を上げる外壁を囲むように数台のパトランプ付き車両がいた。ただし、警備員アンチスキルのような雰囲気では無い。おそらく専門のものだろう、と嶺次は想像したが、そこには一歩間違えば暗部への入り口が待っている。

もしも彼らが暗部の人間ならば、『スパーキングナル迎電部隊』という単語が脳裏をよぎったかもしれない。

だが、そんなものに2人の意識は、無い。

——同時刻——

学園都市の外壁を遥かに捉えられる距離の送電用鉄塔の、頂点。

人間にはとても来られないようなこの場所に、1人の女性が佇んでいた。

その手には1枚の紙が押し潰してちぎれる程に強く握りしめられている。暗号でも何でもない、ただのファックスだ。

だが、それを受け取った彼女の中で何かが弾けた。

怒り。

仲間を大事に思うが故に仲間から離れて努力を重ね、今の彼女はあ
る。だが、そんな月日を全て嘲笑うかのように、あの男は再び現れ
た。

あろうことか、また“奪う”ために。

それからのことは記憶にあまり無い。ただ得物を手に、とある場所を目指した。

戦う為に。これ以上、救われぬ者を生み出さぬ為に。自分の魔法名と矛盾していることなど百も承知。

それでも、彼女は飛んだ。

後ろで束ねた黒い髪を夜の風になびかせ、身の丈を越える大太刀をその手に。

彼女の名は――――

神裂、火織。

学園都市の警備部隊は、ものの5分と持たずに壊滅した。しかも、嶺次達は全力を出すことなく。

学園都市からの能力者の脱出は重罪で、最悪射殺も容認される。

嶺次達の金属を操作する能力をさらしてしまつては、身元を突き止められてしまうかもしれない。

そこで彼らが取った策は、カモフラージュだった。

何のことは無い。バイザーをハーフミラーに加工したフルフェイスヘルメットで警備部隊の前に降り立った嶺次は、地中に埋まるありとあらゆる配管を周囲のコンクリートや土ごと操作したのだ。

相手からすれば、念動力者が構成した土の蛇が襲い来るように見えたことだろう。

中心で核となる金属は制圧後に霧散させたため、証拠も残らない。

そんな風に学園都市を苦もなく脱出した嶺次達だったが、綴の心には1つの違和感が残った。

それは、装備の不足。

警備員一個小隊にすら及ばない人数と装備。これが、実際に脱出者が発生した場合の対処とは思えなかった。

まるで、意図的に自分達を脱出させたような……………

「綴？」

（あ、ああ）

もつとも、この相棒はそんなことをちつとも気にしていないようだ。嶺次の携帯には綴の指示に従って幾つかウィンドウが踊り（大半は不正なアクセス）、その端にある地図には目的の車両の痕跡を示す赤い点が打たれ、とある場所で途切れていた。

それを追うように低空を駆ける嶺次のボードは、確実にそれとの距離を詰めていく。

（この調子なら、もう時間はかからないかな……）

風早を発見できれば後は簡単だ。自分達的能力で敵を制圧して、それで終わる。

だが、そんなことを考える余裕は奪われた。

——嶺次の記憶を抉るような、賛美歌と共に。

「（！！！）」

綴は嶺次から聞かされていた。

風早を連れ去った女の歌う賛美歌は幻覚を見せる魔術の鍵であり、それを聴くことは避けたい、と。

しかし、そんなことを思考する時点で彼らは既に彼女の術中だった。

慌てて道路に着地して周囲を見渡そうとした瞬間には、嶺次の肉体は地面に礫にされたように押し倒される。その状態を頭が認識する間も与えず、虚空から現れた極太の釘が降り注いだ。目に、額に、喉に、心臓に、寸分の狂い無くそれは打ち付けられる。

無論、痛みなど欠片も感じないというのに。

五感を共有している綴も例外ではなく、同様の感覚を浴びせられることになってしまう。こうなれば、既に嶺次達に勝ちの目は無かった。

こんなに、簡単に。

「こ………のっ」

嶺次のあがこうとする気迫は痛い程に伝わるが、綴を介した人間2人分でも受容不可能なほどの精神攻撃に一介の高校生が耐えられるはずも無い。

辛うじて手足を動かせる程度だ。

もぞもぞとうごめくしかできない嶺次達が内面の戦いに気を取られている間に、声がした。

「全く……わざわざ追いついて来たというの？我が師の教えを理解もできない存在だというのに……」

女の、客観的に聞けば美しい声だ。術師のものであろうそれは、すぐ側で聞こえる。

「貴様……！！！！」

「まあ、一度浴びせられたこの幻覚に抵抗できる程度の精神は持っているようなね。でも……、ここで死になさい」

スラ、と鞘から抜刀する音だけが耳に届く。命を刈るための音に背筋が凍る。それでも、体は動いてくれない。俺が加わってレベル5になっているくせに。

「貴方の首でも持ち帰れば、風早様の覚悟は決まるのでしょうかね？」

淡々と言い放つ女の声に、綴は――

「貴女の刃は、彼には届きませんよ」

違う女の、声。

その一瞬に、嶺次と綴は2つの音を聞いた。

1つは、金属が碎かれる音。もう1つは、硬質なものによる打撃の音。

並立しえない筈の二重奏に思考が途絶えていると、不意に幻覚が途

切れた。

視界を取り戻して立ち上がる彼らの前に居たのは、長身の女性。

身の丈を越える日本刀を携え、一見しなやかな体躯に嶺次はおろか間接的な受容である綴すらおののく程の気迫を纏う、凜と美しい女性が。

「アンタは……………」

「貴方がどのような人間かは解りかねますが…………彼女、及びそれを擁する赤石会に敵対する勢力、それも超能力者の方でしょうか」

足元で伸びている白装束の女を見遣りながら、目の前の女性は言う。

（こっちの事情を…………知っている？）

「かんざき神裂火織と、申します」

e p, 5 彼には届きません（後書き）

という訳で、ねーちゃん参戦です！

パワーバランスが崩壊しそうなので扱いに戦々恐々していますが、満足してもらえるようなバトル描写目指して頑張ります！

感想、ポイントなどもらえるとありがたいです。

e p, 6 悪意を剥き出して

神裂火織。そう名乗った魔術師は、あのテオレルドやランサーと同じイギリス清教の所属で、赤石会という魔術結社を壊滅させるためにここへ来たという。

一方の嶺次達は、ここに来てようやく相手組織の規模や本拠地を知った。こちらの状況、特に綴の演算代行を説明するには手間取ったが、双方の情報を交換できた。

「風早の父親の……組織……」

「ええ。彼等がその赤石氏を連れ去って何を目論んでいるかは知りませんが、到底まともなものでは無いでしょう」

彼女が赤石会について語る言葉の端々には敵意のような何かがチリチリと漂っていて、それは無表情な彼女の動作の中でかえって浮いて見えた。

そう思う嶺次に対し、綴は綴で神裂への問いを嶺次に求めた。

「ああ。敵さんが何を企んでいるかは興味無い。潰すだけだし……でも、俺にはっていうか、俺の中の相棒はアンタに疑問があるみたいだ」

「？ 何でしょう」

嶺次は、綴の言葉を伝える。

「何で、神裂……だっけ。アンタは俺達と手を組もうなんて思ったんだ？ 足手まといに見えたような、俺を……」

嶺次からすればあまり聞きたくない質問ではあったが、神裂はそんなことですか、と軽く応じてくれた。

「理由は……解りません。ですが、私は貴方によく似た超能力者を知っているのですよ。“彼”は一方的で不躰な性格ですが……それゆえ、貴方も信用に足る、と。そう直感できるのです」

「そっか………」

初対面の人間にそんなことを素直に言える時点で神裂も十分信頼に足る人間だ、と嶺次達は思う。

「それじゃ、神裂は任務を、俺は風早の救出を」

「ええ」

ボードに手を掛ける嶺次と、刀を手に向き直る神裂の目的地は1つだ。

だが、そういえば、と嶺次が思い出したように神裂に問いかける。

「神裂ってさ、何でそんなにエロい格好してんの？」

「っ！！？？」

「いや、だっておかしいじゃん？ヘソ出しTシャツにフトモモジー
ンズとか、絶対に浮くだろ？」

（嶺次、このシリアスで良い感じな雰囲気ブチ壊してどうするんだ
…………）

頭の中では綴が文句を垂れるが、茹ったように赤面した神裂はその
ままフリーズしている。

「いえこの非対称は術式の構築に必要なもので王室の許可も頂いて
はいますしでもジーンズ店の方にはさんざん酷評されていますし一
般的に見ればやっぱりこれは…………？」

などつぶつぶ聞こえるが、嶺次はそんな神裂に笑いかけた。

「なんだ、やっぱり女の子なんだな」

「（え…………？）」

中と外で呆ける声が重なるが、嶺次は構わずに言葉が続ける。

「なんか同年代にしては冷たい人だな、とか思ってたけど、笑える
んじゃない」

「そ…………それは…」

ピリピリした雰囲気を纏っていた自分を和らげる為の言葉だったのか。そう悟った神裂の表情が徐々に緩んでいく。

「さ、行こうか」

「……ええ」

今度こそ、駆け出す2人の目的は1つだ。

（――嶺次、お前って思ったよりフラグ野郎だな）

「ッ!？」

綴には一番言われたくない、と思った瞬間、嶺次の乗るボードが大きく揺れた。

「――起きたまえ（P R N）。折角の大舞台に、助演が寝ていては話にならないだろう？」

バチン、と。

無理に脳細胞を起動させられ、風早は意識を取り戻した。自分の意思による覚醒ではないため、ひどくぼやけた視界が網膜に映る。

徐々に輪郭を持っていく感覚と周囲の状況は、それと同時に驚愕を風早に与えた。

「これ………は」

「やあ、気分はどうだい？もうすぐだよ。もうすぐ、『神の子』が再来する………！！」

恍惚にも似た表情で、近衛は言い放つ。

祭壇の上で十字架に磔にされた、風早の前で。

「ああ、君の現状に関する無礼には詫びよう。でも、それはこの“舞台”には必要なものでね。この……“脚本”を成立させるためには、どうしても」

そう言いながら、近衛は一束のパピルスを取り出した。

「脚本………？」

汚らしいはずのそれが持つ奇妙な魅力に、自分が磔にされていることも忘れて風早は問う。

———もしも風早に魔術に関する知識があれば、それは魔道書の“汚染”の一種であることに気付いたかもしれない。

「ローマ正教が血眼で探し続けているこれ……『マタイの福音書』には、僕自身にも想像できなかった術式が眠っていてね……、おっと」

これ以上は“演目”をつまらなくするだけだな、と近衛はそこで言葉を切った。

近衛がパピルスをしまい込んだのと同時、カーテンの向こうから声が飛んだ。

「近衛様、報告が」

先を促す近衛に告げられたのは、しんがりとして護衛を果たしていた白銀という女性が撃破され、侵入者がこちらに向かっているということだった。

おそらくは、風早を奪還する為に。

そうか、と前に置いて近衛は迎撃の配置や対策の指示を飛ばす。そこには、部下を失ったことに対しての悲しみの類は一切見えない。

また2人になった祭壇で、風早は近衛に問う。黙っていれば喜びが表情に出してしまう気すらして。

「貴方は……何も感じないんですか？ 部下を失ったのに……」

ためらうような間隔は、無かった。

「大丈夫だよ。計画に支障はあり得ない」

本当に何も感じていないかのように答える近衛にしばし絶句する風早。それを見て、近衛はあきれを含むため息を吐いて言い放った。

「何を下らないことに心動かされているんだ。たかが“エキストラ”が1人2人退場したくらいで、“舞台”には影響なんて出ないだろう？」

「な……!?!」

風早は今更になって思い知らされる。嶺次達が迎えに来てくれたことに対しての喜びが、一斉に怖気へと変わる。

これが、近衛利休という男の本質なのだ。

興味あるものに対してのみ純粹で誠実だが、それ以外のことや、それによって引き起こされることには何の配慮も持たない。

そんな男が、嶺次達と接触したら。

(駄目だ。きつと雪崎君は……)

現状、雪崎嶺次は近衛にとって最大の障害だ。

ならば近衛は容赦をしないだろう。相手を、ためらうことなく殺すだろう。

（それだけは――！！）

だが、次の瞬間には風早の消極的な願いは崩れ去る。

ズズンン……と。

この施設の奥の奥にまで届く程の、衝撃。

風早は直感で知る。

ああ、来てしまったのか、と。

この部屋に外、自然界の喧騒が届くことはまず無い。そういう雰囲気を作るための部屋なのだから。

つまり、地震にも似たこの震動は………

雪崎嶺次（レベル5）と神裂火織^{せいじん}の進軍が、始まった。

到着した元、赤石会の施設はまるで監獄のような風貌で夜の帳に佇んでいて、思わず立ち入るのをためらう程だった。

だが、それは一般の目から見た場合。

2人の目には、敵として沸いてくる白い装束の魔術師の姿しか見えていない。どうやらこの組織は服装で戦闘要員とそうでない者を分けているようで、白い装束の男女ばかりが現れるのは一種奇妙にも映る。

されど当然、2人に容赦は無い。

周囲に幾つかある2、3階建ての建物から鉄、アルミ、銅などを能力で奪取した嶺次達は、100人あまりの軍勢を前に叫ぶ。

「(行くぞォ!!!)」

嶺次が展開したのは、いつものように絶対を誇る鉄の盾ではない。嶺次を中心とした半径10メートル程の空間に、アルミ缶サイズの金属円柱が無数に固体化したのだ。

奇妙な外見に相手は一瞬戸惑ったようだが、すぐに攻撃を始める。

だが、それは魔術によって放たれる炎や風や光の隙間を器用に縫って、敵の懷に潜り込んだ。

攻撃を行うためにできた、わずかな振りかぶりの時間に。

「さあ、幻覚のお返しだ!!」

それを鍵とするかのように、円柱が突如形状を変え、分裂し、人間を拘束する為に最も有効な場所へと食らい付いていく。

さながら、嶺次達が受けた釘を刺される幻覚のように。

ただ、その目的は命を奪うことでは無い。Uの字に変形した金属は相手の首に、手首に、膝に食らい付くと、勢いのままに押し倒した。

「この……程度……っ!」

当然、それだけで魔術師は無力化できない。だが、嶺次が調合したその金属は特殊なものだ。

ガキッ……と。

その先端は、地面に刺さるのではなく、融合していた。半ばから地面に溶け込んでいるにも関わらず、彼等はそれを振り切れない。

驚愕する魔術師達の前を、嶺次は悠々と突破する。

（ま、俺達的能力は対多数にうってつけだからね……）

綴がそう呟いた瞬間、神裂が戦っているであろう辺りで爆発にも似た土煙が上がった。それに混じって吹き飛ばされる敵が、辛うじて捉えられる影のようなものが通った直後に叩き落とされていく。

「すごいな………」

（魔術師ってよりは……剣士、だね……）

目の当たりにする『聖人』の能力に絶句するが、赤石会の建物からは次々と白装束の敵が出てくる。だが、非戦闘要員であろう黒マントもちろほら見えることから、相手も切羽詰まっているのだろう。中には傷を負ったままの音代とか言う奴の姿も見える。

（あんまり見とれてる余裕は無い、か……！）

幸い、この施設は建物のほとんどが鉄筋コンクリートだ。

——武器には、困らないだろう。

「もっ、申し上げます!!こちらの勢力は70パーセントが撃破され、間もなくこちらに——」

「分かってるよ」

「っひ——!!!!」

そう言った、だけで。それだけで近衛に状況を伝えようとした男が萎縮し、言葉を失ってへたりこむ。

目に見えて溢れる怒りは、磔にされたままの風早には余計に感じられ、

「僕が……出るか……」

いつもなら飄々と言うであろう言葉を苦々しく吐き捨てる近衛に、得体の知れないものを覗き込んだ気にされてしまう。

『魔道書』を携え、悪意を剥き出した魔術師が、2人に迫る。

e p, 6 悪意を剥き出して（後書き）

第5章もバトルパート突入しました！

果たして近衛の目的とは？

次回、お楽しみに！

感想、批評などももらえると嬉しいです。

e p, 7 そんな程度の脚本には（前書き）

遂に嶺次&綴、神裂VS近衛に突入です！

e p, 7 そんな程度の脚本には

そこは、直方体の空間だった。入口の狭さに見合わぬ大きさの空間がコンクリートをむき出しで広がり、誰もいない。

壁の面の1つには手抜きをしたステンドグラスのような光源があるが、幾多の魔術師を退け、扉を幾つも突き破った先にある光景がこれでは、あまりに拍子抜けだ。

「何だ……？この空間……」

使い道も全く分からないこの場所に、警戒しながらも足を踏み入れていく嶺次達と神裂。魔術師である彼女ですら何なのかに確信が持てないらしく、

「儀式場にしては魔力が感じられない……ですがこれは…『茶室』の構造に似ている……？」

などと呟いている。

（とにかく、ここをぶっ飛ばせばこの施設の大半は破壊したことになるんだろう？だったら……）

と、綴は周囲に纏う鋼の盾を角柱に成形していく。沈黙する壁に角柱が激突しようとした、瞬間。

「汝の鋼は刃を失う（C S A L）」

何かが、聞こえた。そう思いながらも六角柱を壁に叩きつけるが、嶺次達は結末に目を疑った。

何1つ、壊れていないのだ。

砲弾のごとき速度でコンクリートへ突っ込んだはずの六角柱は傷1つ付けることはおろか、激突による轟音すら響かせることも適わなかったのだ。

まるで、金属の原子そのものの攻撃性を奪われたかのような違和感を感じる嶺次達に、声が聞こえた。

「全く……僕の脚本に飛び入りの役者は必要無いんだが、まあ良い。神裂君、君が来てくれたなら全てを許そう。『デウス・エクス・マキナ機械仕掛けの神』の思し召しなのかな？」

「貴方は……!!!!」

これまで静かだった神裂が激昂する理由を、嶺次達はいつのまにか部屋の対極にいた男を一目見て全て悟った。

——こいつはやばい、と。

キツネのような細い目には、能面のごとき笑みが張り付いている。人間、同種の生物であることを疑いたくなる程の、気持ちの悪い笑みだ。

「やあ、初めましての人もあるね。僕が近衛利休このえりきゅうだよ」

震えそうになる嫌悪感と名前に対する違和感を感じながら、嶺次はどうにか言葉を返す。皮肉にもそれが自らの畏怖を示してしまっているというのに。

「は、何だよ。こんなヒョロい男がボスキャラか？ なあ……、神裂
！！」

言葉と共に目配せをすると、嶺次は手近な金属を幾つかの矢じりの形に変形。それを近衛へと撃ち放った。四肢を貫き、動きを封じるために。

だが、またしても。

それは近衛の皮膚に触れるか否かの距離で勢いを失い、上から叩き落とされたように地面へと落下したのだ。

「！！」

それに驚いたのは嶺次だけでは無い。嶺次の一撃による隙を突こうと背後に回りこんでいた神裂も同様の表情を浮かべるが、居合い斬りのような構えを取ると神速の斬撃——七閃を近衛に向けて放った。嶺次が金属を把握して操作する能力者でなければ認識すらでき

なかったであろう、驚異の一撃。

これを人に向けて放つこと自体が神裂にとって稀なのだが、少なくとも近衛の敗北は決定事項であった。……なのに。

だらり、と。

近衛に迫る鋼糸の嵐は、まるでちぎれかけたクモの巣のようにたわむとその場に落下し、攻撃性の一切を失ってしまった。

思わず飛び退く神裂に、近衛はあまつさえ笑いながら言う。

「ははっ、僕は運が良い。神裂君への対策として金属を封じるノタリコンを組んでおいたのに、超能力者が付いて来たなんて聞いた時はびっくりしたけど……、君も金属を操る能力者だったとはね」

「お前………何をした……」

あまりに不可解な攻撃力を喪失させる魔術。前後を挟み込む形で近衛を囲んでいるにも関わらず、2人は次の手を打てない。その硬直を、近衛は笑みと共に吐き捨てる。

「力を我が手に。敵を討つ力を（C M D E E）」

そう近衛が呟いた瞬間、ゴウッ！！という爆音と共に嶺次の視界が宙転した。

「は……？」

一瞬遅れて、自分の体が何かに吹き飛ばされたことを知覚した嶺次の脳に莫大な痛みが収束する。

「が——ッ!？」

肺の空気をも衝撃で叩きだされたのか、ろくな悲鳴すら上げられない。コンクリートの床を転がって辛うじて止まることが理解できた時には、いつ接近したのかすら分からない近衛の表情があった。

人を怯えさせる、笑みのままで。

「僕が許したのは神裂君の飛び入りだけだ。君は風早君の晴れ舞台には相応しくない客だからね。……死んでくれ」

その手が、濃度の違う液体を混ぜたかのように揺らいでいる、と。

あまりに明確に迫る“死”のビジョンに、嶺次の思考はそんなことしか捉えられない。

——だが、今の嶺次は1人では無い。

ガキィッ……と。

その目には、近衛と嶺次の間に割って入り、膨大な光の圧を鞘で弾く神裂の姿が映っていた。

「呆けている場合ですか、雪崎嶺次!!」

その目には、綴がいつの間にか再構築した鋼の盾が映っていた。

（こんな簡単にやられるとか、思っていないだろう……?）

——そうだ。俺がここに来た理由を思い出せ。こんな奴に……

「悪い。こんなの、俺のキャラじゃ無いよな……っ!!」

思わず口元に笑みを浮かべていることにも気付かず、嶺次はボロボロになった身体で、鉄の武器を構えることも忘れて近衛の懷に飛び込む。

近衛はそれをバックステップでかわすと掌から再び光の津波を放ち、嶺次達と距離を取った。

「悲しいなあ、神裂君。君がそんな奴らを庇うようになってしまったなんて……」

大仰な仕草で神裂を挑発する近衛だが、嶺次の中には今の動作に対して違和感が浮かび上がっていた。

神裂の鋼糸も、嶺次の鉄矢をも不動で迎えた近衛が、嶺次のただの拳を……

「今……何でかわした?」

思わず口に出していたその言葉に、近衛から視線を外さぬままで神

裂は応じる。

何か、1つの確信に至ったような表情で。

「彼の術式はおそらく私が知るものとは違うでしょう。……ですが、貴方が感じた違和感を証明する方法なら、あります！」

神裂がそう言って脇に構える大太刀の柄に触れた瞬間、ギイン、という振動音と共に周囲の壁全体に鋼糸による魔法陣が張り巡らされた。

全方位から放たれる魔術の狙いは、“近衛ではない”。

この、部屋だ。

それを一瞥した近衛は、

「壁と魔術に永遠の隔絶を（I A K A M T）」

それと同時に、輝きを失った魔法陣を確認すると神裂に向き直る。

「僕の術式、覚えていたみたいだね」

笑みの質が変わる。その名は苛立ちだ、と嶺次は思う。

「ええ、今の行動で確信しました」

「神裂、これは……」

状況を飲み込めない嶺次に、神裂は目線と共に一言。

「近衛『利休』。それが、この男が使う術式の本質ですよ」

（……利休？まさかとは思うけどさ、千利休……？）

「千利休……？」

確信も持てずに言う綴と、それを口から洩らした嶺次に反応したのは、近衛だった。

「そうだ。僕は千利休が大成させた術式の正統な後継者だ」

「なんだ……それ……」

唇を噛む神裂に対し、嶺次と綴は今一つ危機感を掴めない。それもそうだ。嶺次達にとってその名はただの歴史上の人物でしかないのだから。

だが、神裂はそんな嶺次に警戒を促す。

「魔術師^{われわれ}にとって、その名は脅威なのですよ。仏教系における人心操作術式の祖、千利休の名は。『茶室』という閉ざされた空間内で五感全てに作用し、人間の心を意のままに操る魔術。それを大成し、それゆえに豊臣秀吉に処刑された程の魔術師……彼の『利休』という名は、その術式を完全に操る者のみに許された名なのです。『千』

という屋号で、茶道が伝承されていたように」

「そんな……ことって……」

つまり、嶺次達の攻撃は近衛の有する圧倒的な防御の術式に阻まれていたのでは無く、自分の無意識という意味で勝手に攻撃を止めていただけだというのか。

神裂の言葉に驚愕する嶺次を前に、近衛の言葉は軽い。

「神裂君、その無能君にわざわざ御説明ありがとう。でも、僕の今の術式はそんな程度の脚本に縛られていないんだ。そんな程度には、ね」

「……………そう。利休の術式にノタリコンなどは必要ありません。今の彼の術式は……………何かとの融合式です」

「じ…じゃあ、どうやってこの男を攻撃すればいいんだよ——ッ
！！」

目の前にいるはずの魔術師がひどく遠い。笑みを浮かべる男を前に、
策は————

e p, 7 そんな程度の脚本には（後書き）

今回の敵は、あんまり肉体的な攻撃をしません。

典型的なマッドサイエンティストです。

それゆえの不気味さ等、出せていれば幸いです。

それでは、感想など、お待ちしております！

e p, 8 文字通りに打ち砕いて（前書き）

近衛とのバトルもクライマックスです！

e p, 8 文字通りに打ち砕いて

睨み合う魔術師と超能力者。

2対1にも関わらず、その表情は対極だ。

1人の悠然に対し、2人は苦悶。

近衛利休の操る人心操作術式。特殊に加工したそれを彼は自分自身にも適用させ、純粹であるが故に膨大な魔力攻撃を放つ。人間としての限界を、無理やり踏み留まる威力の攻撃を。

対して神裂火織の有する術式は、メインとする鋼糸や七天七刀による斬撃はおろか、それを応用した魔法陣の形成まで無効にされてしまっている。

雪崎嶺次の攻撃も神裂の鋼糸を封じると同時に悉く無力化され、一方的な攻撃に耐えるのが精一杯だ。

「——そろそろ、手も尽きたかな」

「……………っ！」

傷1つ無い黒のスーツを翻し、近衛は迫る。

「いや、僕としても時間を稼ぐことは悪いことじゃないしね。大団円のためには、丁度良い“前座”だったんじゃないかな？」

「前座……だと？」

身体中を打撲のような鈍痛に蝕まれながら辛うじて立ち上がる嶺次に、それは聞き捨てならない。だが、そんな反応を近衛はあっさり放り捨てる。

「なんだい、君、もしかしてこの戦いがクライマックスだと思ってた？」

「……のっ!!」

（嶺次!!!!）

あまりに軽薄に神経を逆なでする近衛へと飛び掛かる嶺次を、神裂が肩に手を置いて引き止める。

この身体で考えなしに突っ込めば、結果は明らかなのだから。

近衛はその様子を一見して溜め息を吐くと、隙をさらして宣言する。

自分の成し遂げる成果を、無知な子供に自慢するように。

「違う。違う違うよ違うんだ。僕が君達を殺してなんになる。……
：僕の目的は、この有史以降誰も成し遂げた人間のいない偉業、『
神の子』の再来だよ!」

それに動揺するのは、今度は神裂だった。十字教の『聖人』である以前に十字教徒である神裂からすれば信じがたい程の、冒涇を前に。

「貴方は——ッ!!」

だが、神裂の激昂は近衛の視界に入らない。陶醉し、舞台上で踊るように足を運ぶ近衛には、もはや。

「かつて、様々な組織が『神の子』の再来を狙って幾人もの人柱を生み出し、悉く失敗していった……」

けれど、と近衛は言葉を切ると、懐から何かを取出し、決定的な一言を放つ。

「彼らに足りなかったのは、才能でも、時間でも、まして努力でもない。この『マタイの福音書』……つまり、『神の子』の設計図さ」

「マタイの……福音書？」

嶺次の呆然とする声が響く程、神裂は絶句していた。言葉を選ぶことにすら迷いを見せ、ようやく、

「貴方は……『シメオンの預言』ヌンク・デイミッティスを再現するつもりですか？ いや、それをこの部屋にも適用させているなら、私達を自殺させない理由も筋が通る……まさか……、本気で……！！！！」

「さすがは神裂君。確かに『シメオンの預言』の効果を抽出すれば、人間の『未来』に干渉する術式の発動も可能になる……。もっとも、僕の千利休の術式を併用しなければ人間が用いた程度では効果を為さないだろう。十字教の聖典に則っているせいで敵を自殺させることも適わないし、思ったより使い勝手は悪いんだよ？」

驚愕と圧倒に彩られる、2人の魔術師の対話。

嶺次と綴にはほとんどが理解できない内容だったが、それでも理解できたことは、一方的な絶望を突き付ける。

(つまり、目の前の男は……)

「俺達の心と、未来を操れるっていうのか……？」

「おや、その無能君でもその程度のことは分かるんだ。でも、その程度じゃまだまだ僕の“舞台”に参加するには相応しくないんだよねえ………」

こちらに向き直る近衛の両手は殺意と共に鈍い光を放つ。

「!!!!」

それに反応したのは神裂の方だった。

「同じ手を、二度も……ッ!!」

ただし、近衛が放ったのは攻撃の光ではない。ノタリコンを紡ぎ、放たれるのは、

「汝の体は私の手足に合一する (K Y B I H)」

「!?!」

嶺次を庇うように鞘を構えた神裂だが、様子がおかしい。

物理的な攻撃を受けるのでもなく、光が消えた後も神裂は身動き1つしない。

「神裂……?」

「……なさい」

「?」

「避けなさい、雪崎嶺次……!!」

神裂のその言葉が無ければ、嶺次の体は細切れにされていた。

ゾン!!と。

綴の演算によってかき集められた鋼の壁を切り裂き、神裂の七閃が嶺次を襲ったのだ。

壁によって威力を軽減していても、嶺次の身体中にかまいたたちのような切り傷が刻まれ、後を追って血が嶺次の服を真っ赤に染める。

(これは……まさか……)

近衛が並べ立てた言葉を綴が脳内で反芻する。——人心操作。未来への干渉。五感への影響。

「神裂……!!」

こちらを見ることもなく、その場で凍り付いたままの神裂に、嶺次は悪い予感の的中を悟る。

「テメエ、神裂に何をした……」

膝をついて構えることしかできない嶺次が近衛を睨むが、近衛の笑みに揺らぎは無い。

「いやはや、苦勞したんだよ？ 聖人という肉体組成を操作するには、さっきの魔力攻撃みたいに簡単じゃないからね。君みたいな足手まといがいればこそ、時間のかかるノタリコンの適用が可能になった訳なんだよ」

「じゃあ……俺の……せいで……!!」

「そうだね。そういう意味じゃ、僕は君に初めて感謝を向けようじゃないか」

そう言う近衛の隣に、神裂がいつの間にか刀を携えていた。

——まるで、無表情に付き従うロボットのように。

「ありがとう、無能な無能な超能力者君。おかげさまで神裂君を僕の“舞台”に招待することができたよ。……それじゃ、さようなら」

刹那、嶺次を襲ったのは、打撃でこれだけの音が出るものなのか、とすら思う轟音。

綴には神裂の鋼糸を奪うことしかできなかった。だが、それが嶺次の命を救ったことは言うまでもない。

「が……あ……ッ!」

骨を砕くことなど容易い威力の衝撃が認識を上回る速度で嶺次の身体中に叩き込まれ、勢いのままに嶺次はコンクリートの壁に礫にされる。

「やめろ……神裂……」

そう言おうとして、嶺次は止めた。

ぽとり、と。

速すぎる神裂の拳速に乗って、冷たい雫が嶺次の頬を濡らしたからだ。

あまりの激痛に意識すら、綴との接続すら遠退くなかで認識したのは――

「さて、と。終わったかな……？」

近衛がぱん、と手を叩く。それに呼応して、マシンガンのような神裂火織の拳が止む。

（これ以上やらせたら、この部屋が壊れてしまうからね……）

先程、金属の攻撃性を奪うノタリコンを配置しているうえに鋼糸は少年の能力で封じられ、神裂は肉弾戦しかできない。だが、それで十分。

聖人の直接の拳による嵐を受け続けたのだ。あの能力者は少なくとも生きてはいないだろう。

だが、近衛はそれでも粉塵立ち込める神裂の下へと向かった。

彼の、全てを自らで確かめねば気の済まない性格がそうさせたのだろう。

コンクリートを人の形に粉碎し、窪んだ壁の中にもたれかかる名も知らぬ1人の少年。その首に手を伸ばそうとして――

手を、掴まれた。

神裂のものではない。粉塵の向こうから突き出されたこの手は……

「よお、ようやくこれで、テメエを……」

「……っ」

少年がそれを言い切るより早く、近衛は掴まれた手に意識を集中。その首を魔力の光で吹き飛ばそうとした。

振り払う程の危機感は覚えていなかったし、それだけで終わるのが目に見えていたからだ。

だが、それは失敗だった。

パシャン、と。

水しぶきが上がるような音が“自分の手から”聞こえた。続いて感じる、切り傷のような鋭い痛み。

土煙のカーテンに隠れていたことで、近衛は“それ”を認識するのが一瞬遅れた。

赤と白。2色の花卉に覆い尽くされ、変わり果てた自分の右手を。

「!!!!!!」

否、花卉などと美しいものでは無かった。グロテスクな色彩の赤と白の六角の結晶柱が、花のように近衛の右手を埋め尽くしていたのだ。

思わず手を払い除けるも、突き放す為に触れた左手の表面までも結晶化し、さらなる激痛が近衛を蝕む。

「この……これは……!!?」

絶句する近衛は結晶を払おうとして、気付く。

「これは……僕の体組織を変化させた……!!?」

このおぞましい程の結晶が、自分の体内から発生していることに。

目の前で死にかけている少年の能力が、金属……無機物を操作、つまり、人体の鉄やカルシウム等も操作できるものであったことに。

そして、少年は対象を失って宙で彷徨っていた拳を握る。

そこにいる何かを、握り潰すように。

——瞬間、近衛利休の右手が砕け散った。

「がああああああああっ!!!!!!???」

右の手を万力で噛み潰されたかと思う程の、さっきまでとは比べものにならない激痛。バラバラと結晶が落ちる後には腐ったトマトよりサイケデリックな切り口を右の手首にさらし、際限の無い血が溢れ出る。

意識にチカチカとした揺らぎが交じる中で、近衛は確かに見た。

「テメエの……ふざけた野望なんざ……文字通り、に……打ち砕いてやるよ………」

死んでいなければおかしいはずの少年が、近衛に痛いと錯覚させる程の怒気を放っているのを。

e p, 8 文字通りに打ち砕いて（後書き）

次回、いよいよ決着します。

今回も感想などいただけると幸いです。

e p, 9 答は最初から(前書き)

近衛とのバトル、ついに決着します！

e p, 9 答は最初から

夜来綴の思考は驚愕に染まっていた。

無理も無い。

接続、つまり一方的な関係であるはずの雪崎嶺次に、演算能力の大半を奪われてしまったのだから。

綴に残されたのは、五感を共有し、通常の自我を保つ程度の演算領域のみ。嶺次への干渉はおろか、演算代行を解除することさえ許されない。

（さすがに……“あの時”、もっと危険性を認識しておくべきだったかな……）

彼をそうまで追い込んでいるのは、膨大な感情の嵐。怒りとも、自責とも分らない感情の津波が、綴の行動に足枷を、手枷を嵌めたのだ。

こんな状態で、いや、こんな状態だからこそ、嶺次は“もう一段上”を顕現させた。

（さて、それじゃ俺も、自分の仕事をしますか……）

だが、綴の思考はそれを客観的に見られる程に加速していた。

この状況が怖く無い訳が無い。一步間違えば、自我が暗闇の中へと

滑り落ちて行ってしまいそうな恐怖を感じる。

それでも。

俺は雪崎嶺次の相棒なのだから。

嶺次でめなうじへの干渉に気を取られるな。

敵するべきことの解析に集中しろ。

これが、初めてでは無いのだから。

嶺次達を襲った魔術師。綴にまで及んだ幻覚。白銀とかいう女が口にした『真髓』。五感全てに影響する『茶室』。そして……『シメオンの預言』。

彼の頭脳は1つの仮説に至る。

だが、それを実証するには……

（少なくとも、嶺次の思考をまともな領域まで落とし込まないと……）

右手を、失った。

しかも、得体の知れない死にかけの能力者によって。

近衛の脳裏を占めるのは、激痛と1つの単語。

——コロシテヤル。

脳の堤防が言葉で決壊した瞬間、それは近衛の口から紡がれる。

別れを告げるのではなく、“倒せ”と言うのではなく、

「殺せ」

たった一言のそれを、神裂は忠実に実行する。完全に支配下に置かれていた彼女に、反抗の意志など宿るはずもない。

『聖人』の全力を以て叩きつけられる拳は、

ずぶり、と。

少年の体に届かない。

その直前、宙に浮くサッカーボール大の銀色の塊が、神裂の拳の威力を完全に殺したからだ。

まるで——液体金属のような、それが。

未知の事態に言葉を失う近衛の耳に、突如として声が響いた。

「全く……そんな簡単にこの少年をやらせると思っているのかい？ 近衛利休」

「何だ……？ この……声は？」

近衛の疑問は、声の主が“誰か”では無い。それもそうだ。この部屋には人が隠れるような障害物は無いし、何より、人間がこんな機械じみた声を出せる訳が無い。

その答えは、すぐに目の前に現れた。

少年のすぐ側。宙に浮く半径10センチも無い小さなスピーカーが、それ自体を振動させて声を、人間の言葉を放っていたのだ。

奇妙なそれに絶句する近衛。だが、その時点で近衛の思考は異常だった。

興味を持たないものに対して極端に冷酷なはずの彼ならば、問答無用で“それ”を破壊していたはずなのだから。

生まれた一瞬の空白。

そこに、綴の策が潜り込む。

瞬間、現れたのは、巨大な銀のスピーカー群。

少年がもたれかかるコンクリートの壁に咲く花のように、近衛の背丈より半径の大きいそれが現れた。

その形状が意味するものを理解できない程、近衛は愚かではない。

——普通の、精神ならば。

右手を食い潰された痛みが脳をよぎり、思うようにいかない少年の殺害に焦り、近衛の思考を不必要に埋める。

近衛がそれに気づき、神裂に破壊を指示するより早く、綴の策が実行された。

キン、と。

グラスを軽くぶつけたような澄んだ音が、すり鉢状の形を通じて拡大され、この部屋全体に行き渡る。

それは、とある波長の音を打ち消すもの。

白銀が『真髓』と呼び、近衛が『シメオンの預言』と呼んだ、それを。

「これは……僕の術式を……！！！！」

感情の高ぶりをかろうじて抑え、問いかける近衛。

対する“それ”は、表情を持っているかのように揺れながら、近衛の術式を暴いていく。

「受信した音波と逆位相の波長をぶつけ、音を相殺する……イヤホンのノイズキャンセリングを徹底化したレベルの能力さ。一体何年前の技術なんだか」

淡々と言葉を続ける“それ”に近衛が反論しないのは、しなないだけなのか、それとも。

「考えてみれば、答は最初から提示されていたんだ。……『音』だよ。嶺次達を学園都市で襲った魔術師も、俺達に幻覚を見せた女も、術式の核は音だった。その程度なら、この結社の方針ってことで片付けてしまったかもしれないけど、極めつけは、君が口にした『シメオンの預言』だった。魔術に詳しくない俺からすれば、それ……『神の子』に捧げられた、『歌』だよな」

そうだ。

近衛がローマ正教に潜ってまで入手した『マタイの福音書』には、『神の子』の生誕直後にとある預言者によって捧げられた歌が記されていた。

それは、『神の子』の未来を完全に予見し、『神の子』を『神の子』たらしめたいいわば設計図。近衛はそれの応用で人間の未来に干渉する術式を千利休の術式と併用することで組み上げたのだ。

だが、目の前のこれは。

人間の可聴域外の音波で構成されたはずの呪を、いとも簡単に無効化せしめてしまった。

魔術に詳しくなど無いと自称する、これは。

自らの計画を歪められたことへの怒りなど通り越し、近衛は呆然と問いかける。

その手から光が放たれることは、もう、無い。

「お前は一体……何者なんだ……？」

「ただの能力者さ。誰も守れやしない、出来損ないだ。………けれど、こんな俺でも、許せないものくらいはあるんだよ………!!」

区切るように言う金属のスピーカーから怒りを感じるというのも奇妙な感覚だな、と思う近衛。

だが、近衛はそれを塗りつぶして余りある程の殺意を背後から浴びていた。

「はは、っ……僕の研究も、こんなところで終わりとはね……」

「安心しなさい。命までは取りません」

その言葉を聞くか否かの瞬間、近衛の意識は断ち切られた。

薄く、だが確かに、光を感じた。

ぼんやりと覚醒していく嶺次の脳に、遠くから声が響く。……いや、違う。とても近くにいるはずの声が、くぐもったような壁に遮られているのだ。

この声の主は――

「綴……？俺は……！！！」

瞬間、嶺次の記憶が体に走る激痛と共に収束した。

近衛という魔術師と戦い、神裂を奪われ、壁に叩きつけられて、そこから先は、“記憶が無い”。

そんな嶺次に、今度はしつかりとした問いかけが響く。

「大丈夫か……？ 嶺次……」

「それより、近衛は……」

視界もろくに取り戻せぬままに、思わず口にした言葉。だが、それに応じる柔らかい声があった。

「無力化しましたから、心配ありません。それより、貴方は自分の心配をしたらどうなのですか？」

「神裂……そっか……」

目を開くと、壁にもたれる嶺次の隣で、心配そうな表情で座り込む神裂の姿があった。遠くには鋼糸の結界に囚われている近衛の姿も見える。どうやら、神裂のおかげで勝利できたようだ。

ほっと胸を撫で下ろす神裂だが、一方で嶺次の表情は暗かった。

「ごめん、神裂。俺みたいな足手まといのせいで、つまらないこと、させちまったな……」

そうさせるのは、嶺次の頬に未だ残る、冷たい雫の感覚。それがひどく嶺次を苛むが、神裂も表情のトーンを落とすと嶺次に頭を下げ

た。

「いえ、謝らなければいけないのは私の方です。守るべき貴方に、こんな傷を……」

神裂が申し訳なさそうに嶺次の傷に触れようとするが、嶺次もまた謝罪を重ねる。

「いや、これは俺のせいだよ。神裂には手伝ってもらっているだけなんだから」

「しかし――」

「あー、悪いけど、それくらいにしてもらっても良いかな？」

「「!」?」

突如、機械じみた綴の声が“耳から”聞こえた。

終わらないやり取りを予感した綴は、ユラユラと揺れる“それ”から言葉を続ける。

「全く、ここが戦場だってことを忘れていないか？」

「え……と、綴、だよな……?」

嶺次は恐る恐る、“それ”に問いかける。

「そうだよ。金属を微細に操作して、声という音の振動を作り出す……。結構面倒な演算してるんだけど、気付かなかったのか？」

と言っても、宙に浮く銀のスピーカーからでは説得力に欠けるとい
うものではないだろうか、と嶺次は思った。

「なあ、この先に本当に風早がいるのか？」

地下への階段を下りながら、嶺次は神裂に問いかける。

「ええ。近衛の目的が赤石風早氏という“原石”を用いて神の子を
再来させる実験であった以上、この施設のどこかにゴルゴダの処刑
場を模した『祭壇』があるはずです。地上の施設はあらかじめ破壊し
てしまいましたし、他に地下への入り口も見当たりません。可能性
としては、ここが最も高いですよ」

確固たる口調で応じる神裂。それに、嶺次の肩辺りに浮いているス
ピーカーが続く。綴の操作によるものであることを頭では理解でき
ても、何だか奇妙な感覚は拭えない。

「なるほど、さすがは本職の魔術師だね。……でも、その格好は締まらないなあ……」

「?……何がです?」

分かっていない神裂はキョトンと首を傾げるが、嶺次には顔を真っ赤にして背けるしかできない。

何故なら、

嶺次は今、神裂におんぶされている状態なのだ。

階段をほとんど飛びながら下りるという芸当を、全身を『聖人』の力でボコボコにされた嶺次にできるはずも無い。何しろ立つことも難しいほどのだから。

その代わり、と言うと変だが、風早の下にたどり着くまでの間、嶺次は神裂におんぶされることを渋々了解した。

……とはいえ、同年代の女性（しかも上着はTシャツ1枚）とゼロ距離というのは嶺次の経験上ほとんど無いし、必然的に前へ下げている手も、階段を下る振動のせいで揺れ動く色々なもの（選択肢は1つだが）に当たったりかすったりして非常に心臓に悪いのだ。

（やべえ……未鶴にバレたらもっとボコボコにされる……）

などと赤面と蒼白の入り交じる顔をしている嶺次の肩に浮くスピーカーからは、押し殺したような笑みすら聞こえている。

それでも、神裂の脚力を以てすれば時間はかからず、一行は重めかしい扉の前に到着した。

金属で構成されていたそれを嶺次が苦もなく霧散させると、警戒を保って部屋に踏み入る。そこにいたのは、

十字架に磔にされたままの、風早の姿だった。

「か……風早ッ!!」

十字架による磔刑というものは、見た目以上に残酷な刑罰だ。両手を吊られた状態では人間は呼吸が困難になり、最悪で48時間以上苦しんで死んでいくこともある。

だが、目の前の風早は長時間そうされていた訳では無いらしく、嶺次の叫びに呻き声で応じた。

それに安堵する嶺次を降ろした神裂が、手枷や足枷から風早を解放する。

丁寧に降ろされた風早だが、一目嶺次を見ると、へたりこんだ体勢のまま動こうとしない。

「風早……?」

どこかに見えない傷でもあるのか、と心配し、引きずるような所作で風早の前に立つ嶺次。

近づく、風早は小さな声で呟いていた。誰に向けてでもなく、自分を串刺しにして、ほとんど音にせず。

「僕は……無関係な人を……また……」

側に寄る嶺次から、怯えた表情で離れようとする風早。彼はきつと知ってしまったのだ。自分を巡って嶺次や橙李といった友達が傷つき、元々は家族同然であったはずの赤石会の、多くの人間が運命を狂わされてしまったことを。

「だめだよ……僕の原石としての能力を制御する方法は、聖人とても良く似ているって、近衛さんから聞かされたんだ……だから、僕は僕である以上、狙われ続ける。この、血のせいで……」

だからさ、とほとんど泣きそうな声で、心を閉ざしてしまった1人の少年は辛うじて嶺次に言う。

「だめだよ……僕なんかに関わったら。雪崎君、君も……」

だが、それを聞く嶺次は、うつむいたままで表情を見せない。

「嶺次………？」

隣に浮くスピーカーから綴が問いかけるが、ボロボロで血塗れの嶺次はへたりこむ風早の前に立つと、その襟を掴んで引きずり立たせる。風早が呆然と認識する間も置かず、

「風早あ………!!」

嶺次の、傷だらけの拳が鋭い音と共に風早の頬を打ち抜いた。

「……ッ!？」

彼の能力による自動防御が発動していなかったことを嶺次は知らない。それでも、彼は己に残る僅かな力を風早に叩きつけた。

「お前が……」

肺が軋み、まともに叫べないはずの体で、嶺次は叫ぶ。

「お前が、そんなつまらないことを言うんじゃない!!」

それは、風早が魔術的に、科学的にどんな存在であるかなど関係無く、1人の友達として風早の心に突き刺さり、こじ開けていく。

「俺が助けたお前は、そんな男だったのかって……悲しくなるだろうが」

「雪崎、君……」

（我ながら、クサイ台詞……だな……）

そう思う嶺次の視界に映る風早の表情がぐしゃぐしゃに崩れ、ぼやけていく。

（……………ぼやけて?）

ぐらりと。

(あ……やべ………)

天井を仰いで反転する意識が最後に捉えたのは、思わず駆け寄って来る神裂の姿。そして、何かを叫ぶ綴の言葉だった。

e p, 9 答は最初から（後書き）

いかがでしたか？

今回は駆け足な感じだったと今さら反省です。

次回は、嶺次達の後日談（？）です。

e p, 10 魔術なんてものが（前書き）

今回はコメディ成分多めでお送りします！

e p, 10 魔術なんてものが

学園都市、とある病院、とある病室。

雪崎嶺次が目を覚ましたときに視界を覆っていたのは、いつもとは違う天井が朝日を照り返して放つオレンジだった。

(いつもとは……ね……)

そんなことを判断できてしまう自分が何だか悲しいがどうやら無事に帰ってくることはできたようだ。

ならば、誰がここまで自分を運んでくれたのか。それについては、思い当たる人間は1人しかない。

「神裂にお礼……できなかったな……」

そんなことを平和に考えながら、痛みで動かぬ体でまどろんでいた嶺次だったが、それは一瞬で弾け飛んだ。

何故なら、

ずしり、と。

(……………?)

不意に、両の二の腕と太股に重みを感じた。

寝呆ける頭で開いた眼の先にいたのは、

「みっ未鶴!？」

ショートにされた明るいグレーの髪に興条学園の夏服、いつもなら
笑みを絶やさぬ幼なじみ――はいがさみつる灰笠未鶴なのだが、様子がいつもと
違う。

そこに笑みは無く、真剣、を通り越して暗澹、という表情を浮かべて
いるのだ。しかも、

「あのー、近いんですけど…」

嶺次の四肢を封じるために薄い布団の上から馬乗りになっている彼
女の顔は、嶺次の鼻先数センチの距離にあった。

それだけでも嶺次の心臓は奇妙なリズムの鼓動を奏でてしまい、変
な紅潮が顔に広がるのが自分でも分かる。

その上、いつものように殴ってきたりしない。

何というか、有り体に言えば、

(……………女らしい?)

「嶺次」

「うあい!？」

そんな訳の分からない方向に思考がシフトしかけていた嶺次に、不意打ちで未鶴は問いかけた。

ただし、声色がいつもと違う。違いすぎる。

「嶺次、本当にただの喧嘩なの？」

「え……………っ」

「だっておかしいじゃん。嶺次が、あの嶺次が、こんなに傷、しかも、刀傷みたいのまであって、血まみれで意識も無くて、ボロボロで……………」

彼女自身、言いたいことが何なのか、分かっていない。言いたいことも言えない程にぐしゃぐしゃの言葉で、彼女の言葉は続く。

それでも、イイタイコトは伝わった。

心配させるなよこのバカ野郎、だ。

でも、嶺次はそれに答えられない。

「未鶴……………」

本当に心配してくれたのだろう。よく見れば、目の下には隈のようなものまで見える。

だが、だからこそ。

（コイツには、魔術なんてものが混じる世界を見せる訳にはいかない——！！！！）

そんな決意をした嶺次だったが聞き捨てならない爆弾が投下されてしまった。

「おまけに、大人の女性と朝帰りするし」

「え……………?」

大人の女性……………というのは神裂のことだろうか。いやそれは良いとして、

「朝帰りってのは……………」

「言っただまんまの意味だけど」

「あの……………未鶴?」

この瞬間になってようやく、嶺次は彼女の顔に浮かんでいた表情の正体を知った。

それは心配でも憐憫でも、ましてや愛慕などではなく……………

「さあ、教えてもらおうよ？ グラマラスでクールでポニーテールでぶつちやけエロいあのお姉さんは、一、体、だ、れ？」

「……………アンチスキル警備員の、お姉さんです」

ばかり。

嶺次が耳にしたのは、彼の枕元に備え付けられた命綱ナースコールのボタンが未鶴の握力によって粉碎された音だった。

「ほおう……人には言えない程に深あい間柄という訳だね……」

そして、鬼の形相で迫る未鶴を前にボロボロの体で四肢を押さええられた嶺次が抗う術は、無い。

「いや待っておかしいじゃん未鶴はそんなヤンデレ属性持ちじゃ無かったはずっていうか俺の傷のこと忘れてませんかねえ未鶴様ー！！！！」

あれから、さんざん嶺次を殴り、さんざん嶺次の耳元で叫び、彼女はようやく病室を後にした。

しばらくの間本当に死にかけている嶺次の病室に訪れたのは、妙に顔がカエルに似ている医者だった。——ちなみに神裂が知っている学園都市の医者は彼しかいないので、とある少年が常連になっているこの病院に嶺次は運び込まれたのだ。

「やれやれ……あの少年といい君といい、最近の高校生は女性の制御があまり上手では無いみたいだね?」

「あの……俺……」

死の淵でぶるぶると震える嶺次を前に、カエル顔の医者はナースコールの代わりに“院内用”とシールの貼られた携帯を出しながら言う。

「心配はいらないね? 君をあと4日で完治させて大覇星祭に参加させるように、髪はオレンジだけどやたら礼儀正しいクラスメイト君から頼まれているからね?」

「……………、はい?」

かくして、雪崎嶺次は大覇星祭に校長のスピーチ連打からフル参加することになってしまった。

途中、何故か濡れ透け状態になっている黒髪ロングの運営委員さんや無駄に色っぽい作業服のお姉さんに悪友の解理共々視線を奪われたりしたのだが、神裂の一件から妙にギクシャクしている未鶴からの鉄拳制裁は飛んで来ず、かえってピンクでまだるっこしい空気を作り出していることに対してクラスの男子からボコられる羽目になっていた。

——ちなみに、神裂は嶺次に対して何か置き手紙のようなものを残していったらしいのだが、未鶴の襲来後にはキレイに消えていたことをあの医者から聞いていたりする。

彼女らしくない遠回りなやり方に違和感を覚えつつ、嶺次はその意識を目の前の競技に無理やり向けた。

理由は簡単。下手をすれば、本当に死んでしまうからだ。

今の種目は、棒倒しだ。

野性的ではあるがそれゆえに能力の見せ場もある、大衆受けする競技。

そして彼ら興条学園の相手は、どこかのスポーツエリート校であるらしい。向こうとは戦意に差があるものの、レベルの利がこちらには絶対的だ。苦戦する理由は無いだろう、というのが、情報を収集した噂好きなクラスメイト、茶竹琉惟^{さたけりゅうい}の意見だった。

……のだが。

相手の様子がおかしい。恥も外聞も無い、といった覇気を纏い、カミカゼ的特攻を仕掛けてくるのだ。

「まったくこのどいつだよ！！アイツらをあそこまで引火させちまったのは！！」

どうやら前の試合でとある格下高校に敗北したことで、彼らはヤケになっているようだった。

「いやいや無理っしょこれ突破すんの……」

「……………」

競技の主な流れから少し外れた場所。嶺次の能力をもっと作られた高さ1メートル程の鉄の壁の裏。『外』から無事に帰ってきた風早と共に、解理と嶺次は身を潜めていた。

解理の服は傷だらけだし、風早の表情はやたらと暗い。嶺次も例外無く我慢の限界に来ている。だが、一步外に出れば能力の狙撃でメッタメタにされるこの状況では、動くに動けない。

能力による利がこちらにあるとも、こちらの学校は喧嘩慣れしている人間などほとんどいないのだから。

ましてや喧嘩慣れしている嶺次を怯えさせる程の気迫に、こちらの棒は1つ、また1つと倒されていく。

「特攻でも仕掛けて派手に散るかあ……?」

壁に咲く跳弾の火花を背に、解理がそんなマイナス思考に至った時。すく、と。

風早が突如として立ち上がった。

「ちょ、おい!?!」

この壁の高さはせいぜい1メートル前後。いかに小柄な風早と言えど、そんなことをすれば格好の的になってしまう。

案の定、嶺次が庇う間もなく氷の塊が風早へ降り注いで、

“消えた”。

「なっ!?!」

「え?」

驚愕する解理の一方で、嶺次には戦慄が走る。

(これは……………空間接続による、自動防御……………?)

そう、7月の末に闘った時、嶺次達を苦しめた……

「くは、ははは。限界だ、もう……」

絶句する嶺次と解理を見下ろしながら、風早は引き裂いたような笑みを浮かべる。

「あ、あの……、風早君?」

「うん、大丈夫だよ。殺しは……………しないから……」

解理の問いに物騒な言葉で答えると、風早は空中に作り出したワームホールの中へと消えた。

説明を求める解理を隣に、嶺次は敵陣から聞こえてくる悲鳴に耳を傾け、溜め息をつくしか無かった。

「あれ、風早の本性だったんだな……」

結果として、嶺次達興条学園は棒倒しに勝った。

——ただ、その裏で心に二度もトラウマを負った生徒達がいることを、忘れてはいけない。

e p, 10 魔術なんてものが（後書き）

次回からは新章に突入します！

魔術サイド、テオレルドやランサーの出番です！

e p, 1 逃げるという選択肢は（前書き）

新章突入します。

今回は魔術サイドの話、主人公はランサーです！

小説情報も、ついでに更新しました。

ep, 1 逃げるといふ選択肢は

二つの足音が、響く。

一方は赤髪に長身の神父、ステイルⅡマグヌス。

「何だい、神裂。日本から帰って来たと思えばこんな書棚に呼び出して…」

もう一方は、極東の聖人、神裂火織。

「すいません、ステイル。ですが、この事実をあまり広めたくはないのです…」

そしてここは、聖ジョージ大聖堂の地下の一角に広がる書庫。表の歴史を国が管理するように、『裏』の歴史を管理し、次代へつないでいく為の施設…なのだが、今現在は埃にまみれた本の巣窟と化しており、今はとあるシスターさんが管理を任されている次第だった。

人の気配を鋭敏に映すこの空間を神裂が選んだのは、それだけこの会話を内緒にしたいのだろう、と思うステイルに、神裂は語り出す。

「あなたは、『時越え』の術式を知っていますか？」

「『時越え』…ねえ。机上の空論という意味でなら、吸血鬼よりも疑わしい存在であることは、心得ているよ」

十分です、と前に置くと、いきなり神裂は核心を突いた。

「その術式が、もしも机上の空論でないとしたら……?」

「!？」

「確かに、一般に伝わる『時越え』の術式は机上の空論です。人間には決して扱えない魔力量が必要とする、絶対的で決定的な不可能ですが、それは人間に限った場合だとしたら……?」

「ちょっと待ってくれ、意図が読めない。だから、人間にはそんな術式は使えないはずで――」

瞬間、ステイルも自分の言葉に答えが眠っていることに気付いた。それを見透かしたかのように、神裂は言う。

「そうです。永遠の寿命を持ち、それに応じるだけの魔力を有し、かつ扱える理性を持った存在……」

ヴァンパイア
吸血鬼。

古来よりその存在を疑われ続けたそれは、確かに存在する。しかも、その正体は実質、ただの人。生命力を魔力に変換する途中で莫大な魔力に耐えるだけの才が無ければ自滅するだけの無様な存在だ。

だから、我らがその存在を管理する必要があるのだ。

——それが、魔術師、ランサーⅡJⅡグレイスとテオレルドⅡミラーによって壊滅させられたとある魔術結社の言い分だった。

「うっだー……、いくらなんでもここ最近、この系統の結社多すぎないっすか？」

白い髪や肌と黒いローブがコントラストを創る、少年のような魔術師、ランサーがロンドンの街に愚痴をこぼす。

「この2週間で20、か。前々から吸血鬼狩りを掲げる組織は存在したが……」

ランサーのコントラストとは対称的に、靴音を響かせる爪先から霧に濡れる髪に至るまで黒の一色に染まる魔術師、テオレルドにも疲労の色が見える。

「先輩も疲れてますねー……」

その理由は簡単。敵の出現だ。

9月も半ばを過ぎてからのこの2週間、吸血鬼狩りを掲げる組織がイギリス国内で急増し、無関係な一般人まで襲う程になっていたのだ。

さながら、魔女狩りのように。

彼等の所属するイギリス清教、ネセサリウス必要悪の教会の一部署、エクゼキューター執行人はこの事態を收拾するため、実行部隊として優秀な制圧能力を持つラン

サーとテオレルドをこれでもかとき使っていた。

しかし、以前から存在してはいた吸血鬼系の結社がこんなに急激に活発化することは珍しく、その理由を過去の事例から探るために彼は聖ジョージ大聖堂の書庫へ向かっている。

これが、30分前の会話だった。

そして今。

ランサーⅡJⅡグレイスは膨大な魔術的歴史資料と格闘していた。

たった、1人で。

「ローラに許可もらったのは良いンスけど、これを一人で見回すのはちょっと苦しいっすね……」

本来ならばカンタベリーの老人達の権限が無ければ入れないような薄暗くも広大な書庫に、ランサーは易々と足を踏み入れる。

「ま、これを言い出したのは俺なんだし、先輩には管理官への報告をやってもらうとしますか」

そんなばやきと共に、吸血鬼に関する中世の本をさらっていくランサー。

思ったより本棚の管理が行き届いているなあ、と意外に思う彼の背後に、足音がした。

(……………?)

隠すつもりも、戦闘のつもりも感じられない、コツコツとした確かな足音。

背後から迫るそれを振りかえることも無く、かつ左手に力を込めて、

「誰っスか？ここには簡単に――」

「貴方様は……こんなところで何をなさっていらっしやるのでございましょうか？」

「は……？」

やけに丁寧な言葉に振りかえると、全身を真っ黒い修道服とフードに包んだ、20歳には届かないであろう年の女性がいた。最近、ローマ正教から移ってきたシスターだ。確か、名前は……

「オルソラ・アクィナス……」

「ローラの奴……“裏の正史”とはいえ、こんなところについてこの間までローマ正教の人間だったシスターを入れるなんて……」

「あらあら。私の出身はキオツジアでございますよ？」

「あーもうわかったっスよ！！この書棚の管理をローラに任されているのは分かったっスから、俺の仕事をさせてくれないっスか!？」

謎の遭遇から15分、このシスターさんと関わる人間としてご多分に漏れず、ランサーも巻き戻りしては先へ飛ぶ彼女との会話に苦勞していた。

「それで……ございますか……」

結構強めに叫ぶと、しゅんとして肩をすぼめるオルソラ。もっとも、このシスターさんが表裏の無い人蓄無害すぎる性格をしていることを“見抜ける”特性を有しているランサーからすれば、この仕事を命じた最大教主への疑問も幾らか薄らいではいるのだが……

「私の“すりーさいず”をお知りになりたいのでしたら……」

「その言葉の意味、本当に分かってるんスカ!？」

結局、最後まで慣れないツツコミに叫びっぱなしのランサーだった。

遠くから鼻歌交じりにぼんぼんと綿ぼこりをはたく音が聞こえる中、ランサーの視線は古めかしい本をなぞっていた。

「^{ルーマニア}本場には及ばないまでも、魔女狩りにまぎれた吸血鬼狩りには幾らか情報はあると思ってたんすけどね……」

だが、記してあることは魔術的な歴史から見れば常識の範囲内ばかりで、こんなところにまで足を運んだ意味が無くなってしまっていた。

カーミラのような悲恋も、ヴラド卿のような暴虐も存在しない。決して表には出ないのが、吸血鬼にまつわる噂の常。この夏、とある少年が遭遇した吸血殺しデイトフブラッドの一件などは、本当に異常事態なのだ。

「結局、無駄足ってことなんスかね」

オルソラに挨拶し、書庫を後にするランサー。ひんやりとした地下の通路に出たところで、

みしり、と。

「？」

石作りの壁の向こうから、何かが軋む音がした。だが、人の気配はしない。この向こうにあるものといえば、

「聖遺物の保管場所……！？」

『聖遺物』。聖人などの遺体に象徴されるような、それだけで魔力を有する特別な存在だ。特にこの聖堂の名前の由来となっている聖ジョージの遺体は、こういった結界の中で保管をせねば何を引き起こすかわかったものではなかった。

現に、英国の中で発生したその種の霊品は、この結界に保管することになっている。

それが、何らかの理由で揺らいでいるとすれば――？

ランサーが危機を感じ取る間にも、軋むような音は拡大を続ける。
テレマ天使の力にそこまでの知識のないランサーにも、これが良い状況でないことは分かる。

「くそっ！！なんだってこの時に！！」

保管庫の構造上最も弱い場所――つまりは扉の前に立ちふさがると、左手に力を込める。

（俺の術式で防げるかわかんないっすけど――）

この場には、普段は誰も立ち入らない。だが今は。

オルソラがいる。

たとえ知り合いであろうとなかろうと、ここから無条件に逃げると
いう選択肢は、無い。

直後、それを言葉にして脳内に覚悟する間もなく、扉から漏れるま
ばゆい光と共に空間が割れた。

彼の有する防御の術式を発動することもできない。視界を奪われ、
人が突っこんできたような思わぬ衝撃を体に受けて倒されるランサ
ー。

「……………」

だが、それだけだった。

ランサーの想定した破壊的な事象は発生せず、それどころか壁や彼の体には何の変化もないままに光は消えたのだ。

……いや、変化はあった。

人が突っ込んだ“ような”では無かったのだ。

よく見れば、ランサーより一回り小さい少女が、彼に抱きつくようにしてそこに居た。歳は17、8くらいだろうか。腰まで届く程の深紅の髪はルビーのように輝き、普通なら派手になるはずの純白の肌とのコントラストがドレスを纏っているかの様に美しい。

ただし、

「は？」

全裸で。

「は………？」

別にランサーⅡJⅡグレイスは女の裸程度で赤面して絶叫するような少年ではない。だが、状況がおかしい。おかしすぎる。

「いや、ちょっと待て。誰っスか？……アンタ」

それに少女は答えない。気絶しているようである。

だが、それはそれでマズいことにランサーは気付いた。

“ここにはオルソラがいるのだ”。

そこに考えが至り、ではどうするのかを考えようとして、

「まあ、こんな所でお楽しみとは、貴方様は本当に度胸のおありになる方なのでございますね」

「!!!!」

既に、遅かった。

背後にいつの間にか潜んでいたオルソラには、ランサー（とそれを押し倒す全裸の少女）の姿はどう見えるのだろうか。

「なあ、オルソラ……さん？」

にこにことした笑みを崩さない、いや、笑みが張り付いたままのオルソラが、怖い。

元、英国の騎士にして、現、必要悪の教会の魔術師であるランサー
ⅡJⅡグレイスは、素直にそう思った。

e p, 1 逃げるという選択肢は（後書き）

いかがでしたか？

時越え、吸血鬼、というのが突飛すぎますかね。

ですが、今回はアニエーゼ部隊のメンバーも活躍するのでご期待下さいー！！

それでは、感想など、お待ちしております！

e p, 2 ホントはどっちも（前書き）

今回、アニエーゼ部隊のシスター達が登場します！

e p, 2 ホントはどっちも

色々な問答を経てどうにかオルソラの協力を得ることに成功したランサーは、突然現れた謎の少女をこの近くにある必要悪の教会ネセサリウスの女子寮に運び込むことになった。

オルソラが角の様子を見ては、ローブで姿を覆った全裸の少女を抱えたランサーがロンドンの裏路地を駆ける。

傍目から見れば、完全に人さらいだ。

(何でこんなことしてるんスカ俺はぁーっ!?)

心の中で絶叫するも、前に行くオルソラにも協力してもらっている手前、口にも出せない。

そんなことをしている間に、幾らか遠回りをしたものの、彼等は女子寮までの距離を縮めていた。

「ここまで来れば、もう間もなくでございますよ」

「あ、恩に着るっス」

「いえいえ、到着しましたら、貴方様からお聞きしたいこともたくさんございますしね」

「……………」

後ろを振りかえるその笑みは、事情を知らなければとてもとても輝

いている。

やっぱり、ランサーを信頼はしていないようだ。

必要悪の教会の猛者達（聖人含む）が住まうあの女子寮から自分は生きて帰れるのだろうか、と半分泣きそうになった、

その時。

ズウン、と。

何かが爆発する、低い音が彼等の体を振るわせた。

「「!?!」」

思わず顔を見合わせ、少女を抱えていることも忘れて表の通りへ飛び出る。音の方向を察知したオルソラの表情が一瞬で暗くなったことを“見抜いた”ランサーには、この音の理由が想像できた。

つまり、女子寮に何かがあったのだ。

表へ出れば、案の定、寮の前に停めてあった車が炎上し、その周囲に何人もの黒い服装の人間がピリピリとした空気で並んでいる。

よく見れば、その形は200人を越える女性が一人の男を取り囲んでいるように見えた。

そして、ランサーには中央の男に。オルソラには周囲の女性に。

見覚えがあつた。

「グラウⅡガーランド!？」

「アニエーゼさん!？」

時間は、少しさかのぼる。

リエラⅡウイステリア。

一見すると少女のようにも見える、小柄な、それでいて女らしいというどこか矛盾した体躯。イギリス清教式の修道服から僅かに覗く、淡い色の赤髪。

イギリス清教に所属するシスターである彼女は、8月の半ば、とある事件での責任を取る形で必要悪の教会に転部させられた。

もったも、することは変わらないのだ。

戦場に流れる血を少しでも減らし、その為に身を削る。それが、彼女の魔術師としての存在意義でもあった。

それから変わったことが、もう一つ。

住む場所をこのランベスの女子寮に移すというのが、彼女の身に起きた最大の変化であった……のだが。

現在、彼女は頭を抱えていた。

原因は、

「ですからグラウ、ここには女性しか入寮することはできないのです。あなたの気持は嬉しいですが、これ以上しつこいようなら怒りますよ?」

「しかし、ローマ正教を追われた私にとって、黄土との約束でもある貴女様をお守りすることが最優先の使命であります。その為には、ここからお離れする訳には……」

「ですから!! それにも分別というものがあるでしょう!？」

全く……と溜め息をつく彼女の前には、一人の男がひざまずいていた。

グラウII ガーランド。

短く刈り込まれた銀色の髪に、ローマ正教の神父に良く見られる浅い帽子、褐色の肌には無数の切り傷があり、それだけで人を威圧する風貌を放っている。

彼もまた、彼女と同じ事件に関係したことでローマ正教を追われ、イギリス清教へと改宗を行った一人だった。

そんな男が、自分よりもずっと小さい女性にひざまずいているのだ。

グラウにこんなことをさせている私は何なのでしょうか、という彼女の心情など一切無視して、グラウは頑なにリエラの言葉を聞こうとしない。

前々から融通の効かない男だとは思っていたが、これほどとは思わなかった。

以前は彼女の隣の部屋とか、向かいのコンパートメントとかで満足してくれていたのだが、女子寮から離れた場所にグラウの住居を設けることを彼は納得してくれそうにない。

——そもそも、この女子寮は敵への“エサ”なのだから、巻き込まれる可能性のある周囲には居住スペース等を用意しないのが普通なのだが。

どうしたものかと彼女が思案していると、思わぬ理由でそれは中断された。

がらん、と。

何か金属質なものが床に落ちる音。

突然、彼らの周囲に満ちる殺気。

その理由は。

「こんな所まで私達^{うらざりもの}の追撃ですか？戦場の銀狼！！」

蓮の杖、車輪、十字架、硬貨袋、松明、その他諸々……各々の手に武器を構えた、アニエーゼⅡサルクティス以下200名のシスター軍団によるものだった。

実は彼女達は、アニエーゼが先にこの女子寮に入ってから少し遅れて入寮する予定だったアニエーゼ部隊の本隊なのだが、そんなことをグラウは知らない。

それどころか、彼、グラウⅡガールランドの中にはアニエーゼⅡサルクティスに関する情報はこう刻まれていた。また、彼女の中にあるグラウの情報も同じように。

『罪人の追撃用部隊』として。

「成程、背信者である私を捕えに来ましたか。ビショップⅡセイルロードの率いる部隊でないのが幸い、という状況でしょうが、この人数差は……」

「グラウ、それに皆さんも、何か——ッッ！！」

鋭い目になったグラウに静止を呼び掛ける間も無く、彼は一陣の風に乗って飛んだ。

それに引き寄せられるように、100人単位で黒い影が動く。

彼がこんなことをした理由は簡単。

グラウを中心とするシスター達の包囲網から、彼女を逸らすためだ。リエラという修道女がどれほどの力量を持っていようと、グラウはリエラを守ろうとしたのだ。

「グラウ……貴方は本当に……ッッ!!」

その先を言葉にする間も無く、彼女はグラウを追った。

そして、時間は今。

じわり、と杖を握る手を湿らせ、アニーゼⅡサンクティスは俊巡していた。

壊滅したはずの『クルセイダー神撲部隊』の先槍、グラウⅡガールランドがここにいる、という状況に。無論、『戦場の銀狼』と呼ばれるとは言え、一人の魔術師に負けるような彼女達では無い。

本題は、その後ろ。

もしも、『神撲騎士』壊滅自体が情報の操作による嘘で、この近くにロブス＝マーカー率いる本隊が備えているとすれば。

「最悪です……私達に勝ち目は、無い……!!」

対多数を本領とする術式をいくつも有する彼等を前に、200人の戦闘軍団であろうとその勝算は薄い。いや、皆無だろう。ましてやこちらはローマ正教を裏切った側だ。オルソラの時のような前置きは要らず、こちらを殺すのに向こうがためらうとは思えない。

圧倒的多数で囲んでいるにも関わらず、グラウの背後にある影に手が震える。9月より前の彼女であれば降伏していたかもしれない恐怖。

だが、彼女はとある少年達に思い知らされた。

どうしようもない絶望の淵から、救い出してくれた、とある少年に。

この世界には。

（この世界には、私達も救いを求めてもいいんです——!!）

彼女の手には力。目には光。周囲の部下にもそれは伝播し、彼女達は敵を見据える。そして、ロンドンの三日月に刃が閃めいて、

「「止めなさいっ！！！！」」

彼女達の刃がグラウと交差する瞬間、そこには光の壁と共に数人が立ちはだかっていた。

防御の術式を発動させている小柄な修道女、何かを抱えている白髪の魔術師、そして、

「オルソラⅡアクィナス……」

200人を越す軍勢に再び刃を突きつけられているにも関わらず、彼女の表情は動じなかった。

「「本当に、申し訳ありませんでした！！」」

結局、アニエーゼ達はオルソラから、グラウはリエラから事実と共に一通りお叱りを受け、互いに頭を深々と下げていた。

どちらも責任感の強い性格をしているせいか、謝罪の態勢のまま動

こうとしない。

そんな光景を女子寮の食堂の端から眺めながら、ランサーは軽く溜め息をついた。

「ホントはどっちも、良い人だったってことなんスよね……」

周囲の席に座る黒い衣裳のシスター軍団も、来て早々にこんな騒ぎを起こしてしまったのが気まずいのか、どこか居心地が悪そうにしている。

ただ、そんな中でも一際小さい、顔にそばかすの残るシスターはこの空間に漂よう夕食の匂いに誘われたようにあちこちをうろうろしているのだが。

(……あ、背の高いプラチナブロンドのシスターに捕まったっス)

とにかく、あまり大きい騒ぎになる前にこの少女を置いて立ち去ろう、と思うランサーだったが、

「ん？　なんか騒がしいわね……」

「!!!!」

ランサーの背後、廊下につながるドアが突然開き、褐色の肌に擦り切れた黒いゴシックのドレスを着た女性が現れたのだ。

一旦はあまりの修道女の数に面食らった様子だったが、すぐに頭の中の情報を整理したようで、ずかずかとこちらに歩いてくる。そし

て……………

気付いた。

「んん……？何でこんな所に男がいるんだ？しかも……裸の女抱えて」

「「「「！！！！！」」」」

別に声量は大きくなかったのだが、突然現れた彼女の一挙手一投足をこの食堂に集まっている200人のシスターは凝視しており、従ってこの言葉も完全に聞こえてしまった。

例えるなら、授業中の教室に遅刻した生徒が入ってきて、寒い寒いギャグを言ったようなものなのだ。

彼女達が数秒かけてその事実を確認し、理解する頃にはわざわざ気配を消す術式を軽く掛けていた意味などすっかり消え失せ、即座に『女の敵』というレッテルを200以上（オルソラ、リエラ、ゴスロリ女含む）貼り付けられてしまい、冗談でなく命の危機を感じるランサーはこう思った。

（ヤバイ。俺、本当に生きて帰れないかもしれないっス……………）

e p, 2 ホントはどっちも（後書き）

いかがでしたか？

今回まではコメディ成分多めでしたが、次回からはシリアス、そしてバトルへと突入します！！！！

e p, 3 関わるべきじゃない(前書き)

今回からはシリアス面にも突入します。

e p, 3 関わるべきじゃない

ここは、ロンドン郊外のとある教会の地下。

必要悪の教会の一部署である執行人の^{エグゼキューター}実務部隊が居を構えるこの場には、今、2人の男がいた。

一方は、ランサーⅡJⅡグレイスと別れた後にここへ来た、テオレルドⅡミラー。

もう一方は、彼等執行人の直接の上司にあたる、30代半ばの男性――ハイゼⅡヴィレクティム。

深い緑の髪をボサボサにしている彼が煙草のようにくわえているのは、実はアメの棒だったりする。

だが、そんな彼等の表情は優れない。

理由は、

「で？ 結局、この膨大な魔力の正体は何なんだよ……………」

「解りませんよ。解れば苦労はしません……………!!」

彼等が種々の探索術式を発動して探っているのは、ロンドン近郊、バースのとある教会で膨れ上がった魔力の正体を突き止める為だった。

がしがしと頭をかくハイゼだが、彼の『土』に対する探索術式でも

その正体は推し測れない。

「こんな魔力量、魔道書の2つ3つを同時に完全開放しないと出せる訳が無いだろ……」

「ですが管理官、この場所にはそんなものではありません。こんな……住民の集会にしか使わないような教会には――」

あまりに不自然な、魔力量の急激な増大。それが偶然なのか、敵性を持つのかすら判断できない内に、状況は動いた。

「管理官……！」

「ああ、“これ”は……ロンドンに向かってやがる……！！」

その時、彼等の探索術式の対象になっていた教会。

そこは、ローマ正教のとある部隊が一時的な拠点としていた教会。彼等は、ローマ正教を裏切った魔術師を秘密裏に『処理』する為の部隊だった。

8月のグラウIIガーランドの一件では、彼等をローマ正教の正式な一員として認めなかったが為に行動に移せず、9月のオルソラIIアクイナスの件でも彼女の『法の書』解読自体が間違っていたことから、行動の許可は降りなかった。

だが、今回のアニエーゼ部隊の件は違う。

正式な魔術師の部隊が、意思を持って、ローマ正教の敵となったのだ。

そこに躊躇する理由はなく、彼等の敵への攻撃はあと20分もすれば始まるはずだった。

だった、のに。

今、そこには金の髪に純白の法衣をまとい、一人の壮年の男だけがたたずんでいた。

名を、ブランカIIセイルロード。

この部隊の長である司教だが、彼は宗教的な徳を一切積まず、その魔術的な功績だけで司教の地位を手に入れた、いわば金で神位を買った中世の貴族のような偽者の神職者なのだ。

だが、それゆえに実力には確かなものがあり、彼の“狩り”の対象となって生き延びた人間はこれまでにいなかった。

そんな魔術師が、

全ての部下を殺害し、教会の床に歪な骸を残して広がる赤い絨毯の上に、佇んでいたのだ。

人間の形を留めていない部下の遺体は、何かに噛みちぎられたような足の断片や、何かが内から出てきたような裂け方をしたグロテスクなものばかりで、かろうじて幾つか形の残っている首の表情は恐怖と絶望にひどく歪んでいる。

ただ、それを見下ろしたブランカの目には一切の感情が無く、すぐ下で広がる惨劇と呼ぶにも惨い状況との温度差が一種奇妙にも映る。三日月の小さい小さい光源が窓から照らす彼の手には全ての指に様々な色の指輪がはめてあり、それを眺める目にだけは、少しの愉悦が見えた。

「ふむ………久々のローマ正教式の魔術師の体だが、まあ、可もなく不可もなく、か………」

事もなくそう言い放つと、彼は教会の大扉を開ける。血の匂いが充満する死の空間から草の匂いの空間へと出ていく彼は、棺桶の中から蘇る吸血鬼のようにも見える。

「さあ、カイン。300年振りの再会といこうか」

遠くに光るロンドンの街並みに目を細めながら、そう、呟いた。

「いや、だから、俺は魔力暴走の危険性を感じ取って、せめてもの防御策を取ろうと思った……………ん……………スけど……………」

一方、相棒や上司が謎の魔力を追っている頃。

「「……………」」

「ほら、前にもあったじゃないっスか！去年の今頃、魔力の暴走が！あの時は損壊も……………あつ……………て……………」

「「……………」」

「もう、勘弁してほしいっス……………」

ランサーⅡJⅡグレイスは、女子寮の重い重い空気の中で今にも圧し潰されそうになっていた。

幸いにも聖人である神裂火織は任務でいないようだが、それでも2

00以上の魔術師に囲まれて何かをしようと思う程、彼は無鉄砲では無い。(グラウはさつきリエラに追い出されたようだが、未だにその辺をウロついているのだろうか……?)

その上、さつきから繰り返しているのは事実だというのに、目の前のシスター軍団の皆様は全然信用してくれない。特に、アニエーゼ部隊のルチアとか言うシスターの目が恐い……。

確かに、ランサーも目の当たりにしなければ信じられないことだろう。聖遺物の保管庫から、裸の少女が現れたなど。

だが、事実は事実なのだからしょうがない。こうなれば少女が目覚めてからの証言に期待するしか無いか、と長期戦の覚悟を決めつつあったランサーの視界で、

「……………?」

「!」

アニエーゼ部隊から余っていた修道服を着せられていた少女が苦しそうに身をよじると、意識を取り戻したのだ。

もはやこの窮地から救ってくれるのは彼女の言葉だけだ、と藁にもすがるように彼女が横たえられているソファに近付いて、ランサーは、いかにも優雅な振る舞いでその体を起こす少女から、

「む…………、君は……私をハメたのか!？」

謎の少女の言葉は、どちらかというと死刑宣告でした。

カイン。——カインⅡVⅡスカーレット。そう名乗った赤い髪の美しい少女は、どこか学者を連想させるような単語を言葉の端々にじませながらのふざけた口調という、聞いているこちらが混乱するような不思議な言葉を使うのだった。

「そうか……私は聖教会の地下倉庫から現出したんだな？」

「最初からそう言っているじゃないっすか……だから、君が一体何者なのかを……」

「そんな、私にあの行為の子細までを口述しろというのか!？」

「頬を赤らめて勘違いを招くような言葉を使うんじゃないっす!！」

「しかし、ランサーとの関係はあの単語を抜きに語れる程薄っぺらくは……」

「薄いつスよ！顔を合わせてまだ2時間くらいっス！！名前程度しか知らないっス！！！」

「ひどい……私との関係をそんな風に……」

「何も間違ったこと言って無いっスよね、俺？」

先程から状況は一段階悪化。

無言とはいえ、ランサーを囲む彼女達の手には各々の武器が握られている。用途は勿論、カインと名乗った目の前の少女に対してランサーが公平な質問をするか否かを見届ける為だ。

うっかり記憶を刷り込むような発言をすれば、その瞬間にランサーの体は木っ端微塵だろう。

その事を背後からの気配で十分に感じているランサーの質問は、こめかみに筋を浮かべながらもかろうじて丁寧が続く。

「カインのその……裸だった理由とかって、聞いても大丈夫なんスか？」

「ああ。別に私としてはこの服も何だか胸がキツイので、脱衣したいところなのだが……」

そう言って、修道服をいきなり脱ぎ始めるカイン。（後ろの方で服

を貸した眼鏡のシスターが崩れ落ちた気がしたが、気にしないことにする。）

「そういう事じゃ無いし、ちょっと待つつス!!」

首をかしげるカインをなだめ、再びソファに座らせて、

（何なんスカ本当に、頑なに本題から逸らして——）

ふと、気付く。

（本題に……触れたがらない？）

この場合の、本題とは——

「カイン」

それまでのおどけた雰囲気捨て去り、半ば威圧するようにランサーは告げる。

「カイン。お前、一体“何”なんスカ？」

「……………」

少しだけ、常人では捕えられない程、カインの表情に揺らぎが生まれた、それを動作にも出すことをためらうのか、急に口を閉じるカイン。

だが、ランサーが読んだその『色』は、

（『嘘』……っスカ）

その一色に、染まりきっていた。

ただ、その色は人間を陥れようとする、どろどろとした『嘘』ではない。むしろ『嘘』をつき続けることへの『悲しみ』も交じる、複雑な色だった。

とりあえず、この人間は魔術とは無縁の世界に居るべきだ。

「こりゃ、早いところ『表』の教会に保護を依頼するしかないっスカね……」

そう思い、取り囲むこのシスター達をどうやって説得しようか、な
どと考えていたランサーに、口をつぐんだままのカインに、

——状況は、許しを与えてはくれなかった。

突然、断末魔にも似た男の絶叫が響き渡ったからだ。

「グラウ……！？」

誰よりもその声を側で聞いてきたリエラⅡウイステリアの抱く危機感が実体化するよりも早く、

ゴバツッ！！と。女子寮の石塀を突き破り、彼女達が集う食堂に面した中庭に何かが突っこんだ。

それは、黒の法衣を纏う、銀髪の、

「グラウⅡガーランド！！」

そう叫んだ瞬間には、リエラは駆け出していた。彼が何故吹き飛ばされたのかを考えるよりも、早く。

彼女らしくない、と言えばそこまでだろうが、彼女は8月の一件で見せつけられてしまった。

グラウの命が消える、という可能性を。

その事が彼女の行為を短絡的にしていたのだろうか。

ともかく、彼女は気付かなかった。

土煙の向こうに潜んでいた、獰猛な気配に。

「む？この名はグラウというのか。そうか。この体の内は覚えておこう」

言葉と共に振りかざされた何かを彼女が認識した瞬間には、
パチン、と。

指を弾く音と共に、彼女を光の壁が包んだ。

何かの力がそれに阻まれ、怪訝な息を吐く人影を前に、

「アンタ、ここが何なのか知ってるんスか？」

ガラスのように砕けた光の雨の中から、リエラの前に立ちはだかるようにランサーは宣言する。

「まあ、知っていようが知っていまいが、アンタの――」

だが、その宣言は最後まで告げられなかった。何故なら、

「退いて下さい、ランサーⅡJⅡグレイス！！！」

「!？」

謎の影に相對するランサーの隣に、アニエーゼⅡサンクティスが杖を構えて並び立ったからだ。

だが、その表情を“見て”ランサーは思わず目を疑った。彼女の表情に満ちていたのは、

これから自殺するかのような、悲哀だったのだから。

カタカタと恐怖の震えを隠せない手を突き出しながら、アニエーゼは言う。

「ランサー、貴方はコイツに関わったら駄目です」

土煙の晴れた先、白の法衣にはあまりに不釣り合いな指輪と、不気味な笑いと共に立つ、壮年の男の前に。

「コイツは、ブランカセイルロード。私達のような裏切り者を……
“処理”する為の魔術師です」

e p, 3 関わるべきじゃない (後書き)

次回、ブランカと女子寮サイドのバトルです！

今回も感想など、お待ちしております。

e p, 4 騎士としての誇りは（前書き）

今回からはバトルパートに突入です。

謎の男、そしてカインの正体とは？

e p, 4 騎士としての誇りは

彼らの前に立つ男――ブランカⅡセイルロードは、魔術師数百人を敵に回しているとは思えない所作で首をごきり、と鳴らすと、本当に面倒臭そうに言う。

「あー、済まないね。私は君たちと敵対するつもりは無いよ。その…グレイ君だったかな？その神父への攻撃は正当防衛だ。いきなり攻撃されれば、誰だって反撃するだろう？」

「お前……」

言動もそうだが、ランサーは目の前の男にどうしようもない違和感を覚えていた。

（感情が、いや、温度が………無い？）

隣のアニエーゼも同様の感覚を持っていたようで、その震えは恐怖というより不気味さによるものへと変化していた。

「何なんですか、ビショップⅡセイルロード。貴方はそんな風におしゃべりな人間では無かったはずでしょう……？」

こちらに歩いてくるブランカを制するように蓮の杖を地面へと突き立てるアニエーゼ。
ロータスワンド

それは、これ以上近付くなら攻撃する、という意思表示。

だが、彼女の言葉へのブランカの反応は彼らの疑問をより深めるも

のだった。

「セイルロード？ ああ、コレのことか。君はコレの知り合いなのか？」

「!？」

自分の体を指で示して“コレ”と言う、目の前の男に。

その猛烈な違和感にランサーとアニーゼの行動の選択肢が浮かばないまま、ブランカは自分に刃物と敵意を向けるシスターの軍団に向けて演説でもするように声を届かせる。

「何、私は1人の少女を捜しているんだよ。カインⅡVⅡスカーレットという、赤い髪で細身の少女だ。あの場所からここに至るまで彼女の魔力が続いていたものでね。という訳で、彼女を“差し出せ”」

「!?!」

豹変したブランカの口調に思わず身構える戦闘者の集団。だが、一触即発の空気を制したのは予想外の声だった。

「――貴方は、」

その声の主は、人の垣根をくぐってブランカの前方へ出ようとするが、ランサーの後ろに控えるリエラに止められる。そのシスターは、

「貴方は、彼女とどういった関係なのでしょう？」

オルソラⅡアクィナス。

「……………」

その真っ直ぐな目は、ブランカに対してランサーやアニエーゼが感じた疑問を通り越し、怪訝な表情の彼の中に向かっていった。

「失礼ですが、私には彼女……カインさんが、貴方のお迎えを待っていたようには見えないのでございます」

その言葉に、そうか、とランサーは一人ごちる。

ランサーには、食堂の中から出てこないカインの表情は伺えない。だが、彼女の性格を短い時間なりに把握していた彼からすれば、オルソラの言葉と今の状況が導く答えは一つ。

つまり、カインの『嘘』の理由は。

こんな連中に追われていたことへの、それにランサー達を巻き込んでしまうことへの、恐怖だったのだ。

目の前の敵に『色』が見えないことが不気味ではあるが、そんなことは言っていられない。

何も答えないこの男に言うべきは、敵対の宣言だ。

「悪いっスね。俺はアンタを見た感じで信用できないんスよ。だから———」

「だから？」

だが、彼がゆるりと取った動作にランサーは先手を取られていた。

「だから……何だい？」

そして、豹変、という言葉の本当の意味を、ランサーは思い知るようになる。

「私が寄越せと言え！黙って差し出すのが！この世界のルールだろうがあ……！」

あまりに激しく、突然に燃え上がったその『色』をランサーが認識する間も無く、アニエーゼの蓮の杖で迎撃する間も無く、『それは襲い掛かって来た。

バギンツツツ！！と。

ランサーが展開していた白亜の壁をいとも容易く突き破った黒く鋭い何かが彼の腹部を貫き、串刺しにし、放り投げたのだ。

「が……っ、な……！？」

ビチャバチャ、という血の響きや猛烈な痛みが体に走るよりも先に、

驚きが彼の脳裏を支配する。

(今のは……!!!!)

歪む視界が促えた、その『獣』に。

『構築』が不安定なのかシルエットはぼやけてしまっているが、その特徴的な頭は見間違うはずもない。

黒い、一本の剣のような角が額にそそり立つ、馬のような顔、象のような体躯、『獣』という概念を凝縮したような気配。その名は、

「^{ユニコーン}一角獣……!!」

這いつくばって呻くランサーを見下ろしながら、ブランカは狂気に染まったまま攻撃を続ける。

「一角の獣程度で驚かないでくれないか。そら、次だ!!!!」

次の標的に定めたのは、アニエーゼ・サンクティス。彼女が一角獣に呆然としている瞬間すら許さずに、ブランカの手の軌道に沿った空間を裂いて現れたような獣が襲う。

「アニエーゼっつ!!」

ライオンの輪郭を不定形の化け物にしたようなその名は、マンティコア。ランサーの叫びに彼女が反応し、『蓮の杖』を振りかざしていない。それならばその華奢な体は牙によって食い散らかされていたに違いない。

彼女がそれを逃れたのは、小刻みに地面へ叩きつけた『蓮の杖』の衝撃を、生物ならば普遍的な弱点、両の目に接続したからだ。

マンティコアが怯んだ瞬間に距離を取ったアニエーゼの周囲に、彼女の部下が陣形を取って立ちほだかる。

そうしてようやく、彼女は思考する余裕を取り戻したのか、言葉に詰まりながら敵の術式を口にした。

「まさか、『博物誌』を……？」

「……………」

それにブランカは反応せず、一方的な攻撃を今度はオルソラの前に立つリエラに向けようとして、

「止めろっっ！！」

響いたその声に、ブランカの動作が止まった。

満足そうな、それでいて卑しい表情を浮かべ、手をかざす攻撃の態勢を崩さないまま次の方を待つ。

——もう一つ、言うことがあるだろう？とでも言わんばかりに。

そしてそれに、声の主は応じた。応じるしか無かった。

「もう、止めてくれ。“ミストラル”、お前なんだろう？……………もう、お前の言うことを聞くから。だから……………」

赤い髪の少女、カインⅡVⅡスカーレットは、シスター達の間を縫って戦場へと繰りだし、俯いた表情のままで言う。視界に入るランサーやグラウの負った痛みを、そのまま自分で受けているように痛々しい声で。

「ミストラル……？」

ブランカⅡセイルロードであるはずの目の前の男は、その名を呼ばれたことか、カインの降伏の言葉にかは分らないが、とにかく喜びを持って反応した。

「そうだよ。私だ。実に300年振りだねえ、カイン。君の性格も、君の美貌も、私の知るあの時のままだ……！」

ブランカが人間であることを疑わせるような、途方もない数字と共に。

「何を……言ってるんスか？」

駆け寄って来たシスターの手を払い退けて立ちあがるランサーの言葉が耳に届いたのは確かなようだが、ブランカは指輪を弄る程の余裕を見せながら言う。

「何だ。君たちは彼女の価値も知らないで保護していたのかい？これはこれは、申し訳無いことをしたね……」

カインの降伏に満足したのか、『獣』は指輪に吸い込まれるように消え失せ、先の豹変が嘘のようにブランカは丁寧な物言いが変わっ

ていた。

ただし、そこから先の言葉は信じられないものであったが。

「ふむ。では結論から言おう。彼女は、300年の時間移動に成功した、吸血鬼とのハーフだ」

「っ!？」

魔術師ばかりのこの空間で、ありえないはずの生物の単語を無知な子供に説明でもするように、いとも簡単に放り投げたのだ。

吸血鬼。時間を越えた。ハーフ。

どれもこれも、イギリス清教の魔術師としての常識を揺るがしかねない単語ばかり。

明文化できないほどランサーの中に渦を巻く疑問の嵐に、ブランカは応じる気配を見せない。

「説明はもう良いかな？ 私は彼女との『約束』があるんだよ。300年もあのクソ親父に待たされてしまったのだから、私としてももう、限界だ」

「300年とか、さっきから何を言ってるんスカ……………?」

状況が未だ飲み込めないランサーやアニエーゼ部隊を前にしたまま、ブランカはくだらなそうに告げた。

「だから、彼女の父親は吸血鬼なんだよ。しかも、ぬけぬけと自分の存在を大聖堂の聖遺物の保管庫に隠していやがる。その体に残る、不死であるための魔力を全て時間跳躍の術式に使い、自分の体を朽ち果てさせながらね……」

「そう……か」

ここまで来て、ランサーの思考はようやく文章に起こせるレベルに安定した。カインが聖遺物の保管庫から現れた理由。素性を話したがない理由。ブランカがここに來た理由。

つまり、彼女は自分たちを騙して、自分たちを利用しようとしていて……つまり、それだけだったのだ。

それを悟ったのか、アニエーゼ部隊の戦闘の意志も徐々に退いていく。ブランカに向かって歩くカインを追おうとする人は、もはやいない。

「じゃあ、もう良いかな。私には彼女との『約束』があるだけなんだよ。君たちへは済まないと思うが、正当防衛は誰でもする、本能だろう？」

ブランカは指輪の光る手を広げながら、ランサーを迎え入れるように言う。血にまみれたランサーの体は電源を奪われた機械のように

動かないし、連れ去られようとしているカインをそうまでして救う理由なんて自分には何も無い。

———もしも、ランサーⅡJⅡグレイスが人の心を読めない人間であつたならば、だ。

「いやあ、ちょっと待ってくんないっすかね……」

「!？」

自然に、口は動いていた。

「……、何を言っている？」

数百の人間がいるこの空間でありながら、ランサーの小さな言葉はやけに響いた。

「俺は、カインを渡したくない」

彼の頭をよぎるのは、詰め寄った瞬間に彼女が見せた、『嘘』と『悲しみ』。

ランサーは、こんな表情を浮かべた、否、浮かべさせてしまった女性を他に一人、知っている。

女性のそんな表情を二度と見たくない、というのはランサーのエゴだろう。どうしようもなく女性に抱く、男の哀れな幻想だ。

だからこそ、哀れな男であるランサーはその『裏』を読む。

彼女は助けを求めなかった。彼女は素性を明かさなかった。それはつまり、巻き込む人間を増やしたく無かったからではないのか？

その思いが、カインの表情と共に不定形のイメージから確固たるものへと変わっていく。

次の瞬間には、カインを助けるというランサーの意思は口から溢れ出ていた。

「だから、カインにそんな顔させんじゃねえよ。このクズが」

「……………！」

ブランカの笑みが、凍りついた。氷の笑みを浮かべながら、ブランカは問うのだ。

「何を、言うんだ。君がそんなことをしても、何の得にもならないだろう？」

それが豹変へのカウントダウンであることを身を以て知っているランサーは、血の流れる体躯で、それでも薄ら笑いと共に言う。

信じられない表情を浮かべるカインと、その向こうでのけぞるバカ野郎に。

「知らないんスカ？女性の前じゃ、死んでもカッコ付けるのが、この国の騎士なんスよ……！！」

「へえ……」

ひどく冷たい声で言うブランカだが、ランサーはそのことにもう意識を向けていない。何故なら、

「全く………“俺達”の騎士としての誇りは、そんな一言で片付けられる程に安くは無いんだがな」

言葉と共に、カインとブランカを遮る軌道で叩きこまれた黒い奔流がブランカを飲み込んだからだ。

「！！………、！！」

轟音を上げる漆黒の術式を、巨人を従える術者の名を、ランサーは知っている。

「先輩、遅いっスよ……」

「来ただけでも有り難く思え。まあ、そうでなくとも俺には闘う理由ができてしまったようだな」

眼鏡を中指で掛け直しながら冷たく、それでいて感情をたぎらせる
黒髪の魔術師。

テオレルドⅡミラーが、そこには居た。

e p, 4 騎士としての誇りは（後書き）

いかがでしたか？

カインの設定には少し飛躍がありますが、その辺は目をつむってもらえると幸いです。

次回は、テオレルドVSブランカです！

感想、ポイントなど、お待ちしております。

e p, 5 俺の名を呼べ(前書き)

テオレルドも参戦!!

事態は混乱を迎えています。

e p, 5 俺の名を呼べ

周囲の気配を押し潰し、君臨するテオレルドⅡミラー。

ブランカⅡセイルロードを捕えた黒い巨人を従者のように後に控えさせる彼は、深い傷口から芝生に血だまりを作ってしまったているランサーの下に歩み寄る。

「ここまで死にかけておいて、よくあんな台詞が吐けるものだ。俺がああタイミングで攻撃を仕掛けなければ、お前は本当に死んでいたぞ？」

「いやあ、俺は先輩を信じてたんすよ。だからこそあんな無茶もできるってもんです」

あんな人任せの無茶があるか、と溜め息交じりのテオレルドはとりあえずランサーの治療をシスター達に頼もうとして、

「黙っていればベラベラと……。殺される前の最後の冗談にしても質が悪いだろうが」

「「!?!」」

ぐちゃり、と。

何かを千切るような惨い音と共に、黒い巨人の手元から抑えきれない炎が吹き出す。

否。炎の形状をした、それは両翼で10メートルにもなる巨大な鳥。

古代より不死の象徴として種々の文明でアガメられている存在。

フェニックス
不死鳥。

「何だ……これは!!」

炎の渦を纏いながら轟くそのいななきに、テオレルドの表情にすら驚愕と焦りが見える。

「本当に、『博物誌』を実用の領域に持ち上げたとしてもいいのか……?」

だが、その驚愕は更なる驚きに上書きされる。ナイトメア夜行の兵装の腕を不死鳥の炎で焼き払い、砕いて現れたブランカの姿に。

「貴様等。死ぬ覚悟程度はできているんだろうな?」

血に塗れ、焼け焦げたその右腕は、

――肩口でちぎり落とされ、左の手に掴まれていたのだ。

「……っ!!」

おそらく、拘束を受けていた部位を切断することで夜行の兵装から逃れたのだろう。それでもあまりにグロテスクな光景に、アニエーゼ部隊の中からはひっ、と息を飲む音すら聞こえる。

ただ、その異形とは裏腹に、ランサーが“見る”ブランカの表情には相変わらず色が無い。

まるで、痛覚を失っているかのように。

数でも態勢でも圧倒しているはずのこちらが怯える瞬間を狙って、ブランカはもはや意味をなさないはずの右手を武器のごとく振りあげて、

ぼろり、と。

彼の『首』の一部が、欠け落ちた。

乾燥しきった砂の城を崩すように穴が開き、首の付け根がCの字に欠けたのだ。

「!？」

ブランカにもこれは予想外だったようで、ぐらりと揺れる頭部を手で抑えながら忌々しげに言う。

「チッ……もう限界なのか。確かに肉体保存の術式を蔑ろにしてはいたが……攻撃を受けすぎたか」

「お前、それは……」

常識の外の存在である魔術師達すら絶句させて、ブランカは背後の不死鳥に止まり木のように腕を差し出しながら、

「どうやら私は逃げ帰らねばならなくなった。今夜は諦めよう……。そうだな、3日後、新月の夜に再び会おう。カイン」

言葉のままに意味を取れば、ブランカは退却するというのだ。だが、それにカインは食い下がる。

当然だろう。

このままブランカの再来を許すことが、どれほどの悲劇を生むのか。ほんの僅かに対峙しただけのランサーにもそれが分かる程、この男は“異常”なのだ。

「ミストラル、私は……」

だが、ブランカの反応は激烈だった。

「黙れよ」

「っ!？」

「ここまで私のプライドを傷付けておいて、まだ君の存在だけで許してもらえらると思っていたのかい？」

甘い。甘いね、甘すぎるよ。と歌うように重ね、彼は宣言する。

「君以外の全てをブチ壊した上で、君を奪う。それくらい、私のプライドに比べれば安いだろう？」

「……!!」

「プライド……っスか」

ランサーたちの“誇り”と似たような意味を持つ単語を使っているくせに、その意味は対極だ。

自負と、傲慢。

テオレルドですら反射的にこの男への嫌悪を表情に浮かべるほど、どろどろとしたプライド。

その嫌悪を、テオレルド達が行動に移さない訳が無い。

「ここから逃がすと、本当に思っているのか？」

不死鳥の炎を切り裂き、黒の巨人……『夜行の兵装』を再構成する
テオレルド。

その他にも、アニエーゼ部隊のメンバーの臨戦態勢は復活してブランカを完全に包囲している。一介の魔術師がここから逃げおおせるなど、ランサーですら考えが及ばない。

——ただしそれは、ランサーの自制があつてこそ。

自尊の塊のようなこの男が、その程度のことを考える訳がないのだ。かろうじてランサーが白亜の壁を展開した瞬間、無言のブランカの手の指輪から生じた煙が固体になるようにそれは現れた。

巨大で強大な、黒の龍が。

「!!!!!!」

既に“構築”されていた10メートル級の不死鳥すら飲み込みそうな大口を開ける絵に描いたような龍の口からは、双頭の生々しい炎が蛇の舌のようにちらつく。

あまりに現実離れた生命の危機に、ロンドンの夜景とのミスマッ

チがランサーやアニエーゼ部隊の少女達の思考を埋める。

「は……こんな…化物を……」

そして、残った領域にはぶつ切りの単語がよぎる。

悪龍。悪魔の代理人。異教徒の比喩。そして……、『力』の象徴。

「ま、ず……ッッ！！！」

その真下で呆然と立ち尽くすカインに危機を叫ぶより早く、ランサーの、テオレルドの、リエラの、オルソラの、アニエーゼの、五感が消えた。

ごぼっ、と。

喉から血の塊を吐きだしながら、ランサーはそれでも立っていた。

——あの瞬間。

ブランカの構築した龍の放つ吐息を前に、ランサーは防御の為の術式を発動した。

ただしそれは、自分の身を守るためではない。

あの龍の真下、最も危険な場所で立ち尽くしていたカインを守るためだ。

自分を守るだけならば無傷でこなせたかもしれない攻撃だったというのに、ランサーの体はボロボロだった。

サンクチュアリ
ブランク・ミューラー
光翼の城壁も、白亜の壁も、自分の体さえも、文字通り盾にすることで彼女を守りきったのだから。

「どうして……だ？」

腰が抜けたようにへたりこむカインの後ろには、普段と変わらない芝生が続いている。

「何で……私なんかのために……」

しかし。その数メートル前。ランサーの体からほんの数センチから先は、爆撃を受けた後のように深く抉れ、女子寮の建物も半壊している。

がらりと煉瓦の落ちる音がやけに響いた。

それに口火を切られたように、カインはほとんど叫びに近い音量で言葉を吐く。

「何でだ！私は、ランサーや皆を、こんなことに巻き込んでしまったんだぞ！？自分だけでこの時代に飛ばされて生きていく自信が無かったから、都合良くその場にいたランサーを利用しただけだ！」

振り返らなくても分かる彼女の涙は、今にも崩れ落ちそうなランサーに追い打ちをかける。

言葉の意味では無い。“また”守れなかったではないか、という自責の念によってだ。

「あの男、ミストラルは私をどんなになっても追い掛けて来ることだって知っていた！ああそうだ、分かっていたんだ！こんな、こんな結末になってしまうことくらい、最初に目覚めたのがランサー達みたいなお人好しの側だった時には！！」

「……っ」

血を失い、意識を保つことすら難しい頭で、ランサーは思う。

彼女は助けを求めたかったのだ。

理屈は知らないが、彼女は親も友もないこの世界にたった一人で放り出されたのだから。

でも、求められなかった。

そんなことをすれば、あの男が標的を自分以外の、大切な人に向けてしまうから。

だけど、求めたがった。甘えたがった。人の善意というものに。

吸血鬼とのハーフだが何だろうが、彼女は年端もいかない少女なのだ。

そして、甘えてしまった。

だから、こんなことになった？

———そのどこが、悪い！！

「ふざけんじゃ……ねえ……」

「っ！？」

あまりに気色の違うランサーの怒りに、カインはびくり、と身を竦ませる。

「カイン。お前が吸血鬼だろうが、どんな足枷を持っていようが、助けを求めることが……悪いことなのか？」

身を竦ませたまま、カインはランサーの言葉を聞いていた。反論など許さない、彼の覚悟を前に。

「一人で生きるのが怖いと思うことが！誰かと一緒にいたいと思うことが！悪いことなのか！？」

だが、ランサーの言葉は自分にも突き刺さっては彼の心を抉っている。

彼は、護れなかった人間だ。

助けを求めるとある王女を、その思いを、彼は護れなかった。

だから、二度と、こんな気持ちは。

震える足で、ランサーはカインに向きなおる。

火傷を負い、腹に風穴を開けられ、それでも。

「お前が助けを求めることで、誰かが傷付くって言うなら……俺が守ってみせる」

喜びも、悲しみも、怒りも、驚きも。感情で決壊しそうな瞳でこちらを見るカインに、こう告げた。

「守って欲しいなら、お前は俺を呼べ。その瞬間から、俺はお前の騎士になる。なってみせる」

名を呼ぶこと。それは、古今東西を問わない最低限の主従の誓い。形式も礼儀も、こんな状況では望めない。

でも、カインがそう望むなら。

その思いに応えることくらいは、今のランサーにはできる。

「……ってよ」

最初は、か細い声だった。

「……………守ってよ」

だんだんと、それは言葉になる。言葉になって、溢れ出す。

「私を守って、助けてよ……ランサー……!!」

その言葉と同時、ランサーは倒れるように跪いた。

本来なら主に顔を向けない服従の意思を示す姿勢なのだが、ランサーの顔はへたりこんだカインの目の前にあった。

白髪の騎士は何も言わない。ただ静かに、しかし確かに。

頭を垂れ、それに応じた。

——巻き込まれるのでも無い。奪う為でも無い。護るための戦いが、ここから始まる。

e p, 5 俺の名を呼べ（後書き）

次回は行間です。

ランサーの過去編、といったところでしょうか。

お楽しみに！

感想など、頂ければ幸いです。

行間 味方でいるから（前書き）

随分時間を開けてしまった割に、結構短くてすいません。

今回は行間！

ランサーの過去編です！

行間 味方でいるから

今から13年前、とある少年と少女が出会った。

白髪の少年は、何の因果か人の心が読めた。

偽善の言葉も、感情の仮面も、彼には意味を為さなかった。

物心付いた時には、自分を気味悪がっている親の顔を常に伺っていた。

最初に通った学校では、教師と生徒の間に横たわる嘘の濃度に吐きそうになった。

彼は、自分の能力を恨んだ。境遇に見合わぬ自分の力を。

——あの瞬間までは。

父親が死んだ。

原因は、仕事先の地下鉄駅で自爆テロに巻き込まれたという不幸なもの。

彼はそれを素直に悲しいと思ったし、涙も流した。

ただ、それ以上に、人間の死を前にした人間の感情が怖かった。

涙を零す母親の心は笑っていた。

感動のスピーチを話す政治家の目は、野望に満ちていた。

自分を慰める大人の言葉は、録音されて使い古されたテープだった。

けれど、彼女は現れた。

自分と大して変わらない年の華奢な少女。粉雪の結晶のようなコートを纏い、大勢の護衛、母親、姉と共に彼の父親達の葬儀に訪れた彼女は、大人達の感情に押し潰されそうになっている少年の前に立ち、柔らかな所作で手を取ると穏やかに言った。

『大丈夫よ。わたしも、あなたの味方でいるから』

それだけの言葉なのに、少年は彼女に命を懸けると決めた。

少年の方から見れば神の洗礼にも似た出会いだったが、彼女にはそんな風には捉えられていないだろう。

二言、三言。偶然の会話を交しただけのことだ。

ただ、一片の嘘も無いその言葉があまりにも純粹で、綺麗で、儚くて。

時間にして僅か数分。人の一生の内何千、何万、何億分の一。人はそれを笑うだろうが、彼が決意するに足る瞬間だった。

英国第3王女、ヴィリアン様。

後に人徳の第3王女と呼ばれる少女との出会いだった。

そして、少年は力を求めた。

自分が彼女を守るために。

その覚悟を宿してから、少年の世界は広がった。

彼は気付かなかった。いや、気付こうとしなかったのだ。

この世界の人の心という力は、捨てたものではないことを。

少年に騎士としての道を開いてくれた神父様の、何もかも受け入れる包容力。

騎士の力を身に付けさせてくれた師匠の、ひたむきな厳格さ。

ちらりと顔を見ただけでわかる、騎士団長ナイトリーダーの揺らぐこと無き忠誠心。

どこまでも口下手だけど、どこまでも純粹な堅盾騎士団のメンバーの心に。

あれから3年の月日を経て14歳になった彼は、ようやく触れた。

けれど、“その時”はやってきた。

少年は白という色彩を扱う術式を得意としていた。

その持つ天使の力を極限まで抽出、具現化して防御に用いる。

特別な霊装など無くても発動できる、彼の脱色しきった髪を最大限に生かした術式群。

彼の才能はこの分野で開花した。

騎士団の中でも相応の地位を得、英国最高峰の防御術式の結晶である移動鉄壁をメンテナンスするメンバーに史上最年少で選ばれる程。

だが、その才能ゆえに彼は気付いてしまった。

今から第3王女を乗せてフランスへ出発する馬車の術式に――――まるで、ハリボテの馬車のような違和感を。

ただの直感に過ぎない筈のその感覚をヌグいきれない彼は、堅盾騎士団の仲間と共に密かに馬車を追った。

彼の直感にも関わらず、堅盾騎士団のメンバーの殆どが付いてきてくれた。

その時感じた喜びを、少年は直ぐに後悔することになる。

攻撃は、突然だった。

フランス領、ドーヴァー海峡の向こう。

英国の騎士団も迂濶には行動できない場所を敵は選んだ。

第3王女の、墓場として。

国を滅そうとする程の力をもって振るわれる敵の術式には、隠すつもりも無くスペイン星教派の匂いが混っていた。

4大属性を極限まで強化した術式をメインに据えたどうしようもない正攻法。

だが、そんなことが認識できたところで何の助けにもならない。

騎士派本隊への救難信号を送ったが、応答が無い。

敵との戦力差は象に抗う蟻のようだというのに、こちらにはまともな霊装すら無い。

だが、彼らには退けない理由があった。

——横転した馬車の中、自分の命を狙われていることが分かっているのに、それでも彼らに逃げろと叫ぶ小さな声を背に、誰が退くことなどできようか。

答は簡単で、そして、

彼らは壊滅した。

その遺志を果たす者が現れる瞬間を待つこと無く。

壊滅という表現はおろか虐殺、という言葉ですら生温い惨さに、ドーヴァーの海面を割って現れたウィリアムⅡオルウェルは顔をしかめた。

それでも、死を賭して哀れな姫君を守り抜いたその遺志に感嘆の言葉を捧げると、彼は敵を見据えて、挑んでいった。

自分たちでは手も足も出なかった敵の攻撃を受け、躲し、時には同士討ちさせ、ウィリアムⅡオルウェルは彼女を救っていった。

それこそ、ありきたりな絵本の中の王子様のように。
彼らはその事実^に戦意を失ったらしく、戦場の“掃除”などもなく
にせず撤退した。

——もつとも、そのおかげで白髪の少年は生き残ったのだが。

自分の体一つで発動できる白い術式。

霊装も何も無いこの戦場において、最前線に立って闘った少年。

仲間達と張った最後の術式。

プ^{それら}ライドを全て打ち碎かれ、あまつさえ他の誰かに王女を救われ、
彼の生きる意志は今にも消えようとしていた。
のに。

「これはこれは……手ひどくやられたものね。英国の誇る騎士達
の中でも特に忠義に篤い連中だったというのに、本当に見捨てると
は」

その瞬間、彼女が現れた。

この時はまともな言葉を喋っていた、長すぎる髪の女。

脇に従えた緑髪のスーツ男、全身が黒いローブの男と共に。

イギリス清教、最大教主。ローラースチュアートが。

彼女の顔を見る機会がそれまで無かったのは少年にとって幸運と言
わざるを得ないだろう。

何故なら、

思わず殺してしまいそうな程、彼女は“真っ黒”だったのだ。

けれど、真っ黒な女の手で少年は助け出された。
生きることを、選ばされた。

騎士の位を捨て、魔術師へと堕ちていく道だとしても。

——少年が守る意思を取り戻し、悪魔グリモアの力をその身に宿し、黒一色の相棒と出会うまでには、まだ時間が必要だが。

行間 味方でいるから（後書き）

いかがでしたか？

ローラの馬鹿口調って土御門の策略だから、この頃は普通なんだよね……？と妄想しました。

次回からは本筋に戻ります。

今回も、感想を頂けると非常にありがたいです。

e p, 6 たった1人守れないで（前書き）

今回からは本筋です。

カインの謎、そして敵の輪郭が明らかになっていきます。

e p, 6 たった1人守れないで

ブランカが去ってから、1時間。

状況は最悪と言っているだろう。

ランサーの覚悟が決まった程度ではどうすることもできない損失を
ネセサリウス必要悪の教会の女子寮は受けていたのだから。

半ば野戦病院のような様相を程している女子寮を眺め、ランサーは溜め息をつく。

まず、アニエーゼ部隊の負傷。

アニエーゼ達を守るための盾となった他にも、純粹に龍の吐息に耐えられなかった修道女達は未だ意識が戻らない。

リエラウィステリアもその一人。

自分を守る程度造作も無い筈の彼女なのに、その傷は特に酷かった。背後のオルソラアクィナスを、既に傷を負っているグラウIIガーランドを守るために術式を展開した彼女は、自分の防御を疎かにせざるを得なかった。

「リエラ様……ッ!!」

彼女の手に縋るようにくずおれているグラウも、一応自立することが出来る程度だ。戦闘行為などとてもできないレベルの傷を、その修道服の下には隠している。

そして何より、自分の体だ。

本来なら絶対安静を無条件に言い渡されても良いような傷を負い、それでも今、ランサーとテオレルド、オルソラ達はカインII V II スカーレットの話を聞いていた。

全身に包帯を巻かれているランサーやテオレルドは簡易的なベッドに腰掛けているカインと対面している。

「つまり、カインは本当に吸血鬼とのハーフだっていうんスね……」

普通なら荒唐無稽過ぎて相手をする気にもならないような話だったが、あいにく彼らはブランカとの遭遇を果たしている。

彼の異常な振る舞いを見てカインの登場時の状況を知れば、その話を信じるしか無いだろう。

「ああ。私は、できそこないの吸血鬼なんだ」

「できそこない……？」

自分のことをいとも簡単に卑下する彼女は少し躊躇うように言葉を溜めると、その生い立ちを語ってくれた。

「吸血鬼と貴族の間に生まれた私の力は、何も無い。寿命は普通のままで、人の血を吸うことも不可能だ。でも、人間として生を受けるには……あまりにも私は特殊過ぎた」

「何言ってるんスカ。この場にいる人間なんて皆、魔術師って時点で特殊を通り越してるっスよ」

“人の血を吸わない”という文言に少なからず安堵する周囲の空気に構わず、ランサーはあくまで明るく振る舞う。

「大丈夫。ここなら、どれだけ普通じゃなくても、きっと受け入れてくれる筈っスから。俺達だって、大概普通じゃないんスよ？」

だが、カインの表情は優れない。

違う、と。

その単語が放たれたと思うと、カインは再びその身を抱くように、怯える声で言うのだ。

「違うんだ。私の力が特殊過ぎるのは、不死でもないのに、何の能力も無いのに……魔力だけは、吸血鬼のそれと認識されてしまうことなんだ!!」

「魔力……だけが？」

その身を抱く動作の理由を、ランサーは悟った。悟ってしまった。彼女には、敵が多すぎるのだ。

普通、吸血鬼とは伝承の中にしか存在せず、その間接的な存在事例が幾つか残っているだけだ。

吸血鬼に襲われた、と言いついて死んでいった旅人。

魔力暴走の後、灰だけを残して壊滅した村々。

そして、学園都市で先頃認識された吸血鬼殺し。ディープブラッド

どれもこれも、間接的な証拠ばかり。

時期も国もバラバラなこれらの事例は、一部の機関で寄り集まっただけで、一つの仮説を成す。

吸血鬼は存在する、という“仮説”を。

それゆえにその手の狂信的な連中は、吸血鬼を求める。

誰一人として辿り着くことは無かった、その存在を。

では、その連中に本物の吸血鬼の魔力を認識されたらどうなるのか？

そんなこと、考えたくもない。

カインは唯の人間なのに、吸血鬼と誤認されるような存在なのだ。伝承に残る圧倒的な力など、微塵も使えない。

実験動物よりも残酷な扱いを受け、凌辱され、切り刻まれ、血の一滴まで文字通りに吸い尽くされて終わりだろう。

ランサーとテオレルドがこの二週間で幾度と無く潰してきた、吸血鬼狩りを掲げる結社によって。

——否。ミストラルがカインの復活時期を予測していたのなら、あらかじめ“噂”という網を張ることも可能だ。

実際に行動を起こした結社の内一つでもヒットがあれば、あとはそこを潰してカインを奪うだけでいい。

真相は分からないが、もしもそうならば、今回は裏目に出てしまったという訳だ。

「……私の父上は、私なんかとは全然違って、本物の吸血鬼だった」

そんな辛い記憶が残っているにも関わらず、自分を卑下したままでカインは続ける。

「人間だった母上は、私達を産んだ時点で亡くなったそうだ。確か、聖母崇拜の理論を応用して、特殊すぎる魔力を持つ私達の妊娠に何とか耐えてくださっていたらしい」

母の愛を受けなくとも、私は幸せだったぞ？と、沈痛な面持ちのランサー達に前置きして。

「父上は広大な城で、私達を育ててくださった。何の力も持たない私達を見下すこともなく、普通に、いや、それ以上の愛情を持って」

「でも……300年前。つまり……魔女狩りの再盛期。お父上は、カインを守れないことを何処かで悟った」

こくり、と頷くカインの目には、再び涙が溢れそうになっていた。

「私がとある結社に捕えられたんだ。もう少しで、私は、あの男に……」

「お辛いのでしたら、無理にお話しになる必要は無いのでございますよ？」

彼女の肩に手を置き、柔和な笑みを浮かべるオルソラに大丈夫、と言うと、カインは一気に話しきる。

辛いであろう心の傷を、自分で掘り返して。

そうすることが、自分にもされて当然だという表情で。

「父上は私を救ったその足で、聖ジョージ大聖堂へ向かった。もう、その以前から覚悟をなさっていたのだろう……そして父上は、御自分の体を私達の時間跳躍に捧げた。永遠を持つはずの命を術式に組み込んで、あの聖遺物の保管庫の中で、ずっと苦しみながら……」

自然と零れる涙を、オルソラが優しく拭う。

だが、その動作とは対称的に力の込もった声で彼女は言う。

「でしたら、貴方は生きなければなりません。お父上の覚悟を無駄になさらない為にも、あのような、自分を捨てるような行為は慎むべきではございませんか？」

「……」

あの時、無防備にブランカの前に飛び出していった行為を戒め、それと同時に彼女を励ます。

そんなオルソラの言葉にしばし呆然としていたカインだったが、やがて涙の理由を変え、今度は力強く頷きながらランサー達に依頼す

る。

「ありがとうございます。そして、頼みます………!!」

魔術に迷う哀れな子羊を救う。

必要悪の教会を有するイギリス清教に最も相応しい行動理由を得て、彼らの決意はもはや揺らがらない。

ミストラルⅡサルファー。

カインを執拗に追うあの男の本当の名は、彼女曰くそう言うらしい。しかし、それに異を唱えたのはアニエーゼⅡサンクティス。

「それはおかしいですよ。あの司教服、グラウも見たでしょう?」

無言で同意するグラウも、表情には怪訝が映る。

だが、彼らが全く同じ格好の人間であるとも思えない。

それらの混乱を補足したのはカインの言葉だった。

「おそらく、それはミストラルの使う魔道書に理由があると思う。

彼の『博物誌』に」

思った通りの、しかし信じたくない単語にどよめきが広がる。

「やはり………」

「あんなの、本当に実用化できるんスカ? ウチの禁書目録の中にも

無い、邪法の中の邪法、『博物誌』を」

「詳細は、私にも分からない。ただ、あの中身をこの300年でどうにか把握して、その上扱っているとなると……」

「一つの国を相手取るようなもの、か」

テオレルドが深刻そうに言うのも無理は無い。

『博物誌』。

有史以前の古代、プリニウスという学者、いや、魔術師が大いに空想を交じえて記した化け物達の詳細な図鑑だ。

一般に存在する動植物の図鑑でもありながら同列に並べられた異形の獣達が多数含まれ、『表』ではそれは彼の創作と伝えられている。しかし、『裏』では重大な意味を持つ。

巨大な龍、燃え上がる不死鳥、マンティコアに一角獣、

ブランカが先程見せた獣の全ては、それに記されていたもの。

——そう。

博物誌の本当の姿とは、地上の法則を無視した幻獣達を召喚（正確には天使の力による構築だが）する術を記した魔道書だったのだ。ただ、博物誌には問題があった。

それは、獣達を制御する術が記載されていないこと。

これまでに何人もの魔導師が博物誌の内容を手にしようと挑んだ。確かに、一定以上の腕があれば獣達の召喚自体は不可能では無い。しかし、彼らは皆命を落とした。

その中でも最も有名なのは『獣王』の一件だろう。

未だ正式な名前すら与えられていない、西洋で言うところのキメラ。東洋で言うところの鵄。

2年程前、その召喚に成功した一人の魔導師がいた。

そして、彼は『獣王』の最初の犠牲者になった。
言葉も通じない獣に、餌として認識されたのだ。

結局、暴走する『獣王』を鎮圧することは聖人である神裂火織を以てしても不可能だった。

彼女を含む必要悪の教会の部隊にできたのは、一定時間を経て自然崩壊する『獣王』の攻撃を耐えることのみ。

もっとも、彼女がいなければ耐えることすらできなかったであろう、と伝えられているが。

「そんなふざけた魔道書を、何でアイツが！」

そこに関しては本当にカインにも見当が付かないらしく、申し訳無さそうに言う。

「私には、体を入れ替えているとしか思えないあの行動にヒントがあると思うのだが」

「体を入れ替えて……か」

あの言動もそうだが、ランサーの違和感はやはり、ブランカの表情に全くと言っていいほど『色』が無かったことに尽きる。

ただ、それを考えているだけの猶予は彼らに無い。

宣言された3日後の襲撃を許せば、向こうも万全の態勢を整えてしまう。

拠点制圧の基本として、奇襲。

幾度と無くランサー達に与えられた任務だ。

「『博物誌』の獣の内、何を使っているかまでは不明だが、これで目的は決まったな」

「とりあえず、あのミストラルだかブランカだかをブチのめせばいい

いんスよね？」

「はあ……大ざっぱにも程がある。しかし、それで良い」

普段の任務と変わらない口調で確認をしあう二人だったが、それを制する声があった。

「ま、待ってください。あなた達は本当にあの男と戦争をするつもりなんですか？」

そう言うアニーゼの顔には、部下を傷付けたブランカへの憎しみと同等に、恐れが見えた。

「あの男を敵に回すということは、ローマ正教の本隊と戦争をすることなんですよ？もし、カインの言う通りに中身が別人だったとしても、あの肉体を破壊したことを口実にローマ正教にチャンスを与えてしまいます。……それでも、やるんですか？」

ローマ正教の秘匿術式を、確かにブランカⅡセイルロードはその身に宿しているだろう。

彼のような司教クラスとなれば相応の機密を。

それを理解した上で彼を倒すことは、その肉体や装飾品に宿る術式が漏洩することと等しい。

ローマ正教のような連中が攻め込む理由としては、十分だ。

——そんなことを全て理解した上で、ランサーは応じた。

「構わないっスよ。俺みたいな騎士崩れが女性をたった一人守れないで、生きている甲斐は無いんス」

「っ……………」

（本当はもう司教クラスを捕えちゃってるから、問題なんて無いんすけどね……………）

この時点ではロンドン塔に捕えられているビアージョーブゾーニの事を知らないアニエーゼに苦笑しながら、ランサーは思う。敵であったイギリス清教のことを心配する辺り、彼女もやはり“良人”なのだ、と。

e p, 6 たった1人守れないで（後書き）

次回、バトルパートにも突入していきます！

e p, 7 **これが、私の本懐（前書き）**

今回からはバトル一色！

ミストラル率いる幻獣軍団との決戦です！

e p, 7 これが、私の本懐

ミストラルの拠点が判明した。

イギリス南部を中心に広範囲の索敵を行った同僚、ミレイナ・アマリーと自分たちの上司、ハイゼ・ヴィレクティムのおかげだ。

通常の追撃戦ならばありえないほどのスピードに感嘆するグラウを隣に、ランサーとテオレルドはロンドン郊外のとある廃教会にいた。

「ミレイナさんの人形術式って本当に応用の幅が広いっすよね。あれで本気の戦闘もできるってんですから、俺達みたいな攻撃一辺倒とは違うっすよ」

「あれはあれで、普通なら忌み嫌われるような術式なのだろう……俺達が言えた義理ではないがな」

この部署にいる、という時点で『特殊』を通り越して『異端』であるということを知っている彼らは、それ以上言及しない。

ただ見据えるべきは、眼前の不気味な教会だ。

「結局、アニエーゼ部隊の皆様は来られないのですね」

そう言うグラウの手首には、チャリンと音を立てるミニチュアの十字架がある。

8月、学園都市で彼と戦った時に見せた十字架の双剣。

それが彼の有する術式なのだろう。加えて、今の彼には戒めが無い。武装の面でも、感情の面でも。

「でも良いんスカ？ローマ正教と戦争になるかもしれないこの闘いに、元ローマ正教のグラウが参戦して」

唐突な問いに一瞬面食らったようなグラウだったが、構いません、と前に置くと、自分の無力を恥じるように言った。

「私の行動理由はリエラ様の為にあります。リエラ様はこんな争いを治められるだけの力と知性を備えておりますが、あいにく私には選択肢など一つしかございません。∴あの人の仇を、討たせて戴きます」

立場の面の戒めさえ解き放った狼は、静かな物言いにも関わらず、寧ろ猛な『色』を見せていた。

「ま、ここまで来たんだから聞いただけ野暮ってもんスね」

そう言っただけで、廃教会。

数年前、人口の減少したこの地域から人は去り、それによって観光や地場産業などの価値も無いこの村の教会は廃墟と成り果てた。

本来なら荘厳な雰囲気、教会は蔭の生い茂る壁や剥がれ落ちたレンガに象徴されるように生活の気配も無く、一般の人間の中でここに近付こうとする者はいない。

しかし、そこには人間の痕跡があった。

ごく最近発売の酒、タバコ、そして幾つかのバイク。

どうやら近くの不良が寝城にしているらしい。

（それにしても、静かすぎる……）

そう思うテオレルドの前には大扉が立ちはだかっている。

あとはこれを押しかけるだけ、というところで、

テオレルドの言葉が豹変した。

「何だ、この……莫大な天使テレズマの力は……！」

彼の驚きに一步遅れて、ビリビリとした振動が窓ガラスを揺らす。人間の五感では感知できない、天使の力の暴走時に起こる事象だ。この場では誰より天使の力に精通しているテオレルドがそれに含まれる敵意に思わず身構えた瞬間、

教会の大扉を突き破り、炎の槍が彼らを襲った。

「こ、の!!」

寸分の狂い無く彼らの心臓を狙う炎を各々で迎撃する魔術師。

ランサーは白く輝く壁で。テオレルドは黒衣ノワール・バルディッシュの槍で。グラウは金色の光と共に構築された十字架の剣で。

「全く……この程度、小手調べにもならないっすよ?」

バラバラと地面に落ちては燃え広がらずに消滅していく炎は、それが『博物誌』によって構築された紛いものであることを如実に表していた。

「龍のそれとは違う、矢のような炎……サラマンダーか。本当にどれだけの獣を支配下に置いている……」

そう分析するテオレルドに悠然と語る声があった。

「何を言っている。カインから聞いてはいるんだろう? 私は『博物誌』を完全に掌握した世界初の魔術師だ。扱える獣に制限など無い。記載された全ては、私の意のままだ」

現れた——ミストラル・サルファーであるはずの男は、確かにその存在を放っていた。

ただし、その外見は路地裏にたむろする不良にしか見えない。

わざと擦り切れたジーンズと派手な色彩のパーカー、ドレッドにした金の髪から瞳の色に至るまで中身と外見が一致していないという違和感をここまで強烈に与える存在がいるとはランサーには思えなかった。

「歓迎しよう、とは言えないな。この体との符号も完璧では無いし、君達のようなマナー違反の客人に応じるだけの正装でも、今は無い」
「ソレ……300年の時をどう生きてきたかは知らないっすけど、随分現代に合った格好じゃないっすか？」

「何だ、私の延命措置のタネは知らないのか。……そうか。さしものカインでもそこまでは考えが及ばなかったという訳か」

ランサーの皮肉をあっさりと無視してミストラルは一方的に喋る。
眼前で敵意をむきだす魔術師達など、文字通り目に入っていないかのように。

「いかに私といえど現代魔術に疎いというのも問題だな。しかし、わざわざ魔術師の体を使うのも面倒だ。さて、どうしたものか――」

そこから先は言葉にはならなかった。

何故なら、

ドパアン！！という斬撃にあらぬ音を放って彼の独り言は中断されたからだ。

痺れを切らしてミストラルに突撃した、グラウによって。

しかし、それに応じたミストラルの懐からも銀色の剣が繰り出され、鏖競り合いを演じる二人。

「随分と荒っぽい神父様だな。いいのか？ローマ正教の人間が私に

楯突いて」

「申し訳ありませんが、貴方の口上を聞いているだけの余裕はもはや私の心にはございません」

今の内に宣言しておきます、と置き、グラウは一度剣を払って距離を取ると剣の切っ先をミストラルに突き付けて言う。

「リエラ様に手を出した罪を。その身で贖って戴きます」

その言葉が言い終わるかどうかのタイミングで爆発するように飛びかかるグラウは、ミストラルを勢いのままの斬撃で押し込みながら教会の奥の闇へと消えていった。

当然のように、ランサーとテオレルドは置き去りである。

「アイツ、リエラが絡むと制限効なくなっちゃうんすね……」

「呆けている場合か。追うぞ。グラウの力量を俺たちは知らないが、それでもミストラルの方が底が深いことくらいは分かるだろう？」

「そっすね。俺もミストラルには一発入れないと気が済みませんし」

しかし、彼らの足は教会の入り口で釘付けにされた。

理由は単純だ。

椅子の破片が転がることから、本来なら住民のミサに使っていたことが類推できる空間には、

ただ一つ。黒い球体が浮いていた。

小さな気球ほどはある、教会にかろうじて収まっている球体。

「何だ………これは」

「どう見ても獣じゃ無いんすけど、これも博物誌に？」

首を振るテオレルド。

——あれから、ランサーとテオレルドは敵の魔道書、博物誌を徹底的に分析した。

先程の火矢を即座にサラマンダーによるものと認識できたのもそれがあってこそ。

しかし。

ガラスのように無機質な表面には脈動すら感じられない。

翼も無しに宙に浮いている原理も、皆目見当が付かない。

生物であることにすら、確信が持てない。

なのに、ランサーとテオレルドは判断より先に行動していた。

そこに含まれる悪意。

そこに存在するだけで生まれる違和感。

それらの全てが彼らに訴えていた。

コイツはマズい、と。

「サンクチュアリ光翼の城壁！」

「ナイトメア夜行の兵装！」

彼らの叫びに呼応し、忠実な術式である白と黒の二色がさながら津波のように“それ”へと向かう。

物理的な存在はおろか、魔術的な存在すら否応無しに消し去る奔流が。

しかし、その効果を見るまでも無く、ランサーとテオレルドは二

つの確信に至った。

一つは、今の攻撃がおそらく何の意味も持たないこと。彼らと術式との間に結ばれた感覚は、それを如実に教えてくれる。

——二つ目は、これが『獣王』である、ということ。

根拠も、基準も、何も無い。しかし、ミストラルが既存の概念の通用しない相手であることを想定した上で『博物誌』をなぞるのならば、これに行き着くのはある意味必然だった。

怒濤の聖人すら圧倒する、超然的存在。

術式の波濤がようやく収まった先に果たしてそれは、厳然と存在していた。

先程と一切変化を見せぬ、無機質な表面で。微動だにしない、その中空に。

その時。教会の奥。壁を突き破って中庭に傾れ込み、文字通りに火花を散らすグラウとミストラルの戦いにとある変化が生じた。

ぴくり、と。

耳をそばだてて顔を上げたミストラルは、眼前で対峙するグラウとの剣撃の打ち合いから距離を取り、溜め息を吐くように言い放つ。

「構わないのか？アレが起動を終えたぞ。今頃、後続の兵は絶望しているんじゃないか？アレの持つ性能に」

アレ、と呼ぶのはおそらくミストラルが敵の襲来を予想して設置し

ていた黒い球体のことだろう。

グラウはその存在に気付いてはいたが、今の彼にはミストラルを打倒することしか頭の中れない。

「あの黒い球体が何か、はあの方達にお任せします。――そうは言っても、あれも術者を止めれば解除される類の物なのでしょう？」

「…………ふん」

グラウが応じたその瞬間。

不意打ちを狙ったこのタイミングで足下の土が裂けた。

「この程度！」

即座に反応して空へと逃げるグラウ。

しかし、本命はその下に待ち構えていた。

大きく開いた地面から鼻に突き刺さる異臭と共に現れた、それは巨大な蛇。

波打ってうねる鱗を闇にたぎらせ、その大口がグラウを飲み込む奈落のように迫る。

「名を、アンフィスバエナ。毒息による殺傷がベターなんだが……
…こいつの吐息には即死性が無くてな。こうして飲み込む方が手っ取り早い」

構えていた剣をくるりと回すミストラルは、どこか勝利を確信しているようにも見える。

「獣王を後続に任せて来たのは失敗だったな。私と獣王ではおそらく奴の方が優先度は高いというのに。もっとも、3人で私を囲んだ所で勝ちの目は無いだろうがな」

そう吐き捨て、今にも大蛇……アンフィスバエナの牙の中へと消えようとしているグラウに背を向けるミストラル。

男の苦悶は見るに耐えないが、大蛇の牙がヒトの肉を裂き、骨を砕く音は彼の耳に心地良い。

そう思って目を閉じ、空を仰いだ彼の耳に入ってきたのは、ザグン、と。

何か、鋭利な物による切断の音だった。

ぶちぶちと引きちぎるはずの牙と顎では出しようも無い音。

怪訝な表情を幾らか浮かべて振り返ったミストラルの前で起こっていた光景に、彼は初めて驚きという感情を表した。

銀の狼。

そこに、蛇を喰らう銀色の狼がいるかのように錯覚させられたのだから。

「そんな……否、有り得ない!!」

彼の脳が状況を把握するより早く、狼は、――グラウIIガーランドは音も無く地面に降り立ってその矛先をミストラルに向けた。

「これが、私の本懐。戦場の銀狼と揶揄される理由です」

彼の剣が、剣そのものが狼の牙であるような錯覚を与える術式。そこに、空に浮く無数の銀の剣があった。

e p, 7 これが、私の本懐（後書き）

次回、グラウが真価を見せます。

累計P Vが200000を遂に突破しました！！！！

ひたすら感謝です。

これからもよろしく願います！

e p, 8 結局、負けそうになって（前書き）

バトル、バトル、バトルな一話です！

ep, 8 結局、負けそうになって

ミストラルが銀の狼と錯覚したのは、ぼんやりとその体を成して大蛇を切り裂き、肉塊にしていく無数の銀の十字架だった。

グラウの握るそれと同じ、長さにして80センチはある剣の一つ一つが狼のたてがみのようにいきり立ち、凜猛な気配も、唸り声も。狼と錯覚させるに十分なそれをグラウは放っていたのだから無理も無い。

「本懐……か。成程、君が私と渡り合おうとしたことが傲慢でないことは理解したが、渡り合うことと勝つことの間には歴然たる差があることを知っているだろう？」

再び剣を構え、視線と視線がぶつかりあう二人。

遠くからランサーやテオレルドの術式の余波が白と黒のスパークとして舞ってくる中、そこまでの広さもない中庭には殺気が満ちる。

「私が勝てるかどうかなど、問題ではありません。そんなことを理由に退く程、私の怒りは小さく無いのです」

身をかがめ、銀の武器庫を背負うように構えるグラウとたった一本の剣で相對するミストラル。

静寂は、一瞬。

ミストラルが嘲笑いながら剣を地面に突き刺した瞬間に状況は動いた。

ギュゴツ、と。猛烈な勢いで懷へと飛び込んだグラウは一振りのインパクトでミストラルを下がらせ背後に備えている十字架達に命じる。

命令文は、拘束と束縛。

グラウの脳で思い描いた通りの動作を果たす十字架達の狙いはミストラルの四肢を釘付けにしてしまうことだった。

「一気に……終わらせます!!」

一つ一つが意思を持つかのように、なおかつグラウの指示に完璧に沿った軌道で四方八方から十字架の閃光は迫る。

飛び退いた空中で身動きの取れないミストラル目がけて。

しかし、距離にして数メートルまで達した所で異変は起こった。

ミストラルの表情は焦りを露ほども見せず、剣を一振り。

それだけ。

それだけで、彼を取り囲んでいた十字架がバキバキと音を立てて削り取られたのだ。

当然、彼にはその破片程度しか届かない。

「この世で最も恐ろしいのは、想像していないという事実だ」

驚愕を隠せないグラウの前方10メートルに悠々と着地しながら、ミストラルはその服装に似合わせ口調で言う。

「先程見せられた時点では、確かに君は私の想像を越えていた。だが、そこまでだ。……確信を持って言おう。君は勝てない。君の術式を想像し、推理し、確信した結果の結論だ」

「何を――」

反論するグラウを遮って、ミストラルは講釈でもするように言い放った。

「では、私の想像を凌駕してみたまえ。数にして万分の一の不利を以て、何故勝利を確信できたのか」

「……っ」

傲慢にしてあからさまな挑発だが、グラウの反応は冷静そのもの。二振りの切っ先をミストラルの正中線上に重ね、そして命じた。今度は、命を奪うために。

「シッ！！」

短い息を吐くのと同時、グラウの十字架は再び牙となってミストラルの左右を塞ぐ。

背後に壁、前方にはグラウ本人。となればミストラルの採る道は一つ。上への回避“だった”。

ミストラルの指に何かが光ったような感覚を覚える間も、グラウには無かった。

レンガの壁を喰い破って現れた巨大な獣の口に、ミストラルの体を貫く筈の十字架が飲み込まれてしまったからだ。

「！？」

ほんの一瞬、グラウの動作が驚きで硬直する。……そしてそれは、命取りの一瞬だった。

カツッ、と。

ブーツの靴音を響かせ、グラウの懷へと飛ぶミストラル。

「くだらない。わざわざ忠告してやったというのに。私の術式すら想像せぬまま、君は死ぬことになる」

銀という同じ色彩のはずのミストラルの剣は、血を深く深く吸っている刃特有の黒ずみを見せてグラウの首に向かって断頭台の如く斬り込んでいく。

そして、

ザガガガッツ！！！！

と。“ミストラルの体は”ミシンのように、文字通りに、蜂の巣にされた。

足、腕、心臓、肩、手。会話機能を残した全身を、本当に文字通りに。

「……っ！！」

ミストラルとグラウを結ぶ線上、その地中から突き出された銀の十字架によって。

疑問の言葉を発することすら、肺を貫かれた彼には時間がかかってしまう。

「貴方は、確かに優秀な魔術師です」

「か……は」

剣山の上で呻くも、もはやその機能すら果たせない体のミストラルを前にグラウは語る。

「一方、私の術式は数の点で何者にも勝ります。莫大という単位を銀の十字架に与え、その持つ“破邪”という意味をも強大化させる……しかしそれは、ただの魔術に過ぎないありふれた力です」

言いながら、グラウはミストラルの元に歩み寄る。

そこには勝利を確信した驕りなど、欠片も見えない。

「これを破る程“邪”である術式もまたありふれています。ですか

ら、私の術式の本懐はこの十字架を制したと油断した瞬間の一撃にあるのです」

「最初から……これを狙っただど？」

術式を晒した最初の一言から、ミストラルはグラウの術中だったというのか。

『これが、私の本懐。戦場の狼と揶揄される理由です』

自信を見せるような挙動も、

『一気に、終わらせます！』

術式が破られた瞬間の驚きも。この一撃に懸けるための、罠だった。

「狼………」

計算高く、狡猾で、狙った獲物は逃がさない。

術式の輪郭をわざと大仰に見せた時点で、ミストラルはその本意から意識を逸らされていたのだ。

「想像を凌駕されていたのは……私だったという訳か」
キシッ、と。

自らの首を落とす為に力を溜め、十字架を振りかぶったグラウを背に、ミストラルは

「素晴らしい。君は予想以上だ。まさに、私の器に相応しい！！」

まともに喋れないはずの体で、叫んだ。そして、

「君を、私の入れ物にしよう」

そんな意味の通じない言葉と共に、ミストラルの指輪が蠢いたのだ。

「っ!？」

グラウが飛び退きながらも見たそれは、シンプルな金の指輪――
だったはずなのに、次の瞬間にはボコボコと気泡を送り込まれたか
のように膨張し、何かの体を成していく。

徐々にその色をも変え、黒へと変化していく。

グラウが足を地に着けた時には既に、輪郭だけでない、本物の獣が
そこにいた。グラウの中にある『博物誌』の知識は、その名を突
き付ける。

「黒い体毛……俯いた顔、愚鈍な振る舞い……まさか!！」

「そう、『カトブレパス』だ」

顔を上げることの無い、鈍重で知恵の無い牛の獣。

しかしその瞳は、見つめただけでありとあらゆる生物を石に変える。
つまり、必殺。

戦慄するグラウを前に、ミストラルは突き破られた自分の傷口を広
げながら地面に降り立ち、不気味な笑みと共に宣言した。

「器には、やはり“それ”のような上等品が相応しい……!!！」

獣の王。

ランサーとテオレルドはその名に込められた意味を自身の体で以て教えられていた。

「く……そ……」

「こんな、奴に……」

もつとも、敵は少しも獣には見えない。どれだけ妥協しても、生命の源たる卵と似ている、といった程度の共通点しか見い出せない。それでも、攻撃は激烈だった。

黒い球体から放たれるのは、ありとあらゆる生物の攻撃手段を抽象化したように極端なものばかり。

夜行の兵装すら叩き潰す象の足が具現化したかと思えば、球体に発生した罅からは光翼の城壁すら腐らせる毒の飛沫が襲う。

おまけに、本能か何なのか繰り出されるのはランサー達の術式に最も有効なものばかり。

「聖人でも勝てない、か。シャレになんないっスね」

彼らの奥の手、デュアルスベル二重魔術を発動しようにも敵は未知数。あれを使うと彼らの魔術は生命力の不足で一定時間使用不能に陥ってしまうため、使うに使えないのだ。

「こちらの手の内を読み切ったような攻撃……よく神裂火織は耐えられたものだ——っ!？」

テオレルドがまともに喋ることすら許そうとしない獣は、今度は罅を彼らの正面に発生させ、そこから炎を吐き出した。

龍の炎を、サラマンダーの速度で。

それはもはや過ぎた後には炭しか残さない蒼炎の壁として彼らに迫る。

「いい加減にしつこいっスよ、この黒ビー玉!」

ランサーの魔術によって創り出された白亜の壁が炎の壁に立ちはだかるも、まともな抵抗すらできず蹂躪され、彼らが回避するための一瞬を稼ぐ使い捨ての駒にしかない。

こんなことを繰り返していれば、無限に消費できるはずも無い彼らの生命力が先に尽きようとするのは自明の理だった。

「あっちも……自然消滅するはずの不安定な存在なんスけどね……」
「唯の魔術師でないことは、分かってはいたが……」

ミストラルも、獣王も、桁が違う。

しかし、ランサーの脳裏によぎるのはその“未知性”。

必要悪の教会程の対魔術組織ならば、聖人が苦戦するような相手に関して情報がもっと残されていて良さそうなものだった。

（けど、確かにこれじゃあ記述のしようが無い!）

相手に応じてその姿を変え、野生の本能で迎撃する。

言葉にするのは単純だが、彼らにはひどくアナログな自動書記モードの魔道書図書館を相手取っているようにすら感じられた。

（嫌なこと、思い出させてくれるじゃないっスか……）

苦い記憶に、思わず唇を噛む。

——そして、その瞬間を見逃がす程に獣王の本能は鈍く無かった。
テオレルドの叫びが届くよりも、ランサーが何かの反応を見せるよ

りも早く、

ずぶり。ごぼり、と。黒い球体が泡立つような変化を見せた。

地球上のありとあらゆる生物よりも重く、大きい牙。

何を模したのかを想像することなど、もはや無意味。

噛み潰し、摺り潰し、叩き潰す為の牙は、ランサーの命を刈ろうとその眉間にまで迫って、

バギン、と。

“防がれた”。

彼と牙との間に突如展開された純白の壁によって。

当然、その現状を飲み込めていないランサーによるものではない。

テオレルドには、白い、ましてや防御のための術式など扱えない。

ただ、その原理は彼の良く知るものだった。

「天使テレスマの力による……聖なる飼葉桶の術式だと!？」

思わず言葉が出るのも無理は無い。

ローマ正教式の、良く言えば純粹な。悪く言えば堅い術式。こんなものを即座に展開できる集団などイギリス清教にはいないのだから混乱するテオレルドやランサーだが、それは教会の入り口に現れた人影によって驚きへと収束した。

「結局、負けそうになっちゃってんじゃないですか。敵はたった一人なんでしょう?」

カツ、と。軽快な靴音を響かせて現れた赤毛の修道女。

「で、でも……相手の術式もよく分からないじゃないですか。今の

一撃は何とか防げましたけど……」

その後ろからおどおどした口調で補足する、輪を掛けて小さな少女。

「最初からそんな逃げ腰でどうするのです、シスターⅡアンジェレネ。とにかく、ミスターⅡテオレルド、ランサー。無事ですか？」

少女を戒めながら、車輪を荷いでランサー達に声を掛ける背の高いプラチナブロンド。

——そこに、アニエーゼⅡサルクティス以下、200名に近い修道女達が立ち並んでいた。

ep, 8 結局、負けそうになって（後書き）

アニメーゼ部隊、参戦！！

アニメでは未だ悪役扱いなので、今回の登場を格好よく見せられていたら幸いです。

次回は、獣王との決着からクライマックスへと向かいます！

e p, 9 圧倒させてもらう(前書き)

今回、久しぶりに『アレ』が発動します！

アニエーゼ部隊との共闘も、お楽しみに！

e p, 9 圧倒させてもらう

現れたのは、心強い援軍だった。

炎の灯る武器を構えた修道女達の中を歩いて、その長である赤毛の少女はテオレルドやランサーに並び立つ。

「アニエーゼ達が、何で……？」

来ないと確信していたが故にどこか信じられない表情のランサーの問いに、アニエーゼはしゃんとした、大部隊を率いるだけの声で返した。

「どうして言ってくれなかったんですか。敵は複数存在するって。そうすれば、私達にはこいつと闘う理由しか残らないじゃないですか」

「それは……そうっすけど………」

確かに、今のミストラルⅡサルファーにローマ正教との関係は無い。名乗っているのはどこぞの不良。

術式も『博物誌』という未知の魔道書。

けれど、それだけで彼女達が闘ってくれるとは思えなかったのだ。今の立場も複雑で、ブランカの顔を見たときに恐怖さえ浮かべていた彼女達が。

「闘いますよ」

「！」

何か言いたそうな表情を見越したのか、アニエーゼは頭一つ上のランサーに向かって宣言した。

「私達は、教えられたんです。何が大事で、何を一番に想うべきなのか。……だから、許せねえんですよ。その大事なものを、仲間を傷付けられたことが」

だから、闘います、と。

既に展開を終えた蓮の杖を強く握りしめ、彼女は眼前で不気味な沈黙を続ける黒い球体を見据える。

そこには、ブランカと相対した時に見せた感情の揺らぎは無い。彼女の指示に従う部隊のメンバーがうらやましくなる程の、覚悟だけ。

「やっぱり、アニエーゼはそういう才能を持ってるんスね」

小さなその体躯に収まりそうに無い、自然と人を引きつける振る舞い。

成長した先が怖いっス、と一人ごちて、ランサーの視線は再び獣王へと戻る。

「だったら……こんな奴ブチ壊して、とっととグラウを援護しますか」

「当然だってんです。こんな黒ビー玉、気味が悪いだけですよ」

部下からの信頼を感じている心地良さからか、頬に笑みすら浮かべてアニエーゼは叫ぶ。

「一の陣、掛かれッッ!!」

指示と同時に、魔術攻撃による光の柱がほとばしった。

統制の取れた攻撃を放つのは、中、遠距離からの呪を得意とする修

道女達。

彼女達の扱う霊装は単純だが、呪を組み合わせで属性を重ね合わせ、もはや純粹な攻撃力ならランサーとテオレルドをも上回る威力となっている。

「数は力、さすがにこのレベルだと心強いっすけど……」

——しかし、獣の王は何の反応も見せない。

圧倒の術式から垣間見える表面は相変わらず磨き抜かれたガラスのよう。傷どころかくすみすら見えず、中で渦を巻く何かが確認できるだけだ。

考えてみれば、当然ではある。

ランサーやテオレルドのようないわば“極端”な術式に苦も無く対応したこの獣王が、通常の属性魔術を幾ら重ねたところで何か動揺するとかえる方がおかしいのだ。

「ミスター!!ランサー!あれと戦って得た情報は何か無いのですか!?!」

戦線を指揮するプラチナブロンドのシスター、ルチアが白亜の壁で援護しているランサーに情報を仰ぐが、彼らにも獣王を見たままの——外からの刺激にに応じて、一歩先の反応をして自衛、反撃する——程度しか分かっていない。

しかし、それを伝えられたルチアは若干の俊巡の後にアニエーゼと顔を見合わせると、後方で待機していた接近武器を有する修道女達に言葉を飛ばす。

「二の陣、シスター!!アニエーゼの為の道を!!」

行動は、迅速だった。

絶え間無く襲う獣王からの反撃に対して、彼女達はその役目を変えながら壁となる。

向こうが攻撃を変化させるのならば、こちらの防御も変えれば良いのだ。

範囲攻撃には対衝撃、膨大な圧力には受け流す。毒は中和。炎には対となる水の属性を。

多人数であることを最大限に生かす、動く壁という形で。

その壁が守っているのは、次なる攻撃の手。

「シスター!! アニエーゼ! 今です!」

獣王の攻撃に見えた一条の隙。そこを示す部下の声に応じて、彼女は武器を構える。

外からが駄目ならば、中に直接叩き込む。

そのための『蓮の杖』ロータスワンドだ。

「くたばれ……この化け物おおおお!!」

彼女が石造りの床を砕く程渾身の力で地面へと叩きつけた杖は、座標接続によってその衝撃を黒い球体の中へと伝える。

ましてや、扱いに長けた彼女のことだ。

狙いに狂いは無く、獣王の中心を貫いたはず。

そして、

ゴギンツツ、と。鐘を打つような音を響かせ、獣王の攻撃が止んだ。

「やった………か?」

四方八方に白亜の壁を展開した疲労で今にも倒れそうなランサーの声が、一瞬の静寂に良く通る。

そのまま変化を見せない獣王に、誰かが安堵の息を吐いた——瞬

間。

黒い球体が、爆発した。

否、爆発という表現は正しく無いかもしれない。

しかし、どうしようもなくそれは爆発だった。

全方位に放たれる黒い光。照らされた対象を一瞬で燃やし、溶かし、毒に冒すそれに、アニエーゼ部隊の少女達は吹き飛ばされていく。

それはアニエーゼⅡサンクティスも例外ではなく、攻撃の為の隙を縫って襲ったそれに、武器を弾き飛ばされて転がっていつてしまう。だが、黒い太陽と化した獣王に何とか立ち向かうランサーの表情には笑みすらあった。

「これは、癩癩みたいなもの………」

人間の表情を読めるランサーは、わずかながらではあるが動物の気持ちにも触れられる。もっとも、普通の人間でもこれは察知できたはずだ。

自らの命が危機に陥ったときに、生物ならば当然抵抗を見せるだろう。

これは、獣王の抵抗なのだ。

つまり、

（蓮の杖が効いたことの、証………！）

「先輩………」

「分かっている！」

ランサーが叫ぶのを待ち構えてさえいたかのように、黒い光の走る中に声がする。

テオレルドも、すべきことが何なのかは理解しているようだ。

「アニエーゼ、力借りるっスよ……」

ランサーの眼前には、投げ出されたままの『蓮の杖』。座標の接続はなされたまま。そのうえ、獣王は律義にもその位置を動いていない。

膨大な物理的ダメージで、きつとこいつは倒せる。

——ならば。

『『その左手と右手は白夜の如く（C i n i s 0 0 2）』』

自然と紡がれる、矛盾する力を繋ぐ鍵。

互いの魔力が、相反するはずの天使の力テレスマと悪魔の力グリモアが、灰色の粒子の姿からその形を創っていく。

——今回は、射手ではない。

今だけは聖人である、自分たちの魔力を物理的に叩き込むためのカタチ。

「グレイ・ウォーリア「灰塵の闘士！」」

あえて古代ローマの剣闘士のような人の形を成すのは、イメージの為。

そうでもしないと彼らの魔力はまともな固定化すらできないのだ。しかし、一度形を成したならば。

「圧倒させてもらっスよ、獣王おおお!!」

彼らの抱く“強さ”の顕現は文字通りに全てを圧倒する。術者の、怒りのままに。

ゴギンツツッ！！と。

横たわったままの蓮の杖に向けて、さながら瓦割りのように打ち込まれた灰色の拳は余波だけで石の床を抜き、地面まで潜らせる。そして、その破壊的な衝撃の殆どは、黒い球体の中へと届く。くぐもった轟音を獣王の中に響かせた後、ランサーは聞いた。

ぱき、と。

もはや光も放たない表面に、ヒビが入る音。

それは即座に広がり、網目状に黒い球体を覆った。

「……………」

テオレルドが息を飲む音が離れた箇所にいるランサーにも聞こえる程の、静寂の中。

ヒビの入ったそれは、崩壊していく。崩壊した側から、霧となって天使の力へと還っていく。

それまでの存在意味が、あっけなさすぎる程。

「やった……………のか」

「っはああああー……………」

安堵からか、力が抜ける。

力が抜けて……………立ってられない。

思わずへたりこんだランサーに歩み寄るテオレルドだが、その表情には苦笑があった。

珍しい表情を浮かべて、ランサーへと手を差し出す。

「立てるか、ランサー。まだ大物が残っているんだが？」

「ナメないで……………欲しいっスね」

力強く握り返された手に、テオレルドの苦笑は微笑に変わる。

周囲からは修道女達が意識を取り戻す気配がする。彼らの残す敵は、ミストラルだけだ。

獣王の黒い残滓が降る中、ランサーはテオレルドの手を辿って再び立ちあがる。

バディッツ!!

何かをショートさせる音と、直後に響くがらん、という硬質な音。

「っ!!……かつ……はぁ……!!」

その正体は、グラウIIガーランドの周囲に展開された十字架がその意味を“殺され”、地面へと堕ちていく音だ。

これで、残りは僅か18。

もはや狼の輪郭すら保てない程、その数を減らされてしまっている。

——この十字架は、彼の首と両手にある十字架のアクセサリーの数、『3』と、十字架を構成する『4』という要素から『莫大』という意味を抽出し、『破邪』という意味を増幅させて創り出した、いわば彼の敵を討つための従順な兵隊のようなもの。

天使の力によって構築されたそれらは、幾らでも壊され、再生され、そして牙を剥く。

……はずなのに、グラウは今、全身に重くのしかかるダメージと闘っていた。

「そろそろ壁にするような十字架も打ち止めだな。しかし……よく耐える。君の体は、その十字架の数だけ死んでいるというのに」

傍目には無傷にも関わらず、片膝について蒼白な表情のグラウ。

全身を貫かれ、その失血量は完全に致死量を越えているのに、薄ら笑いすら浮かべるミストラル。

たった一匹の獣によって、形勢は完全に逆転していた。
名を、カトブレパス。

e p, 9 圧倒させてもらう（後書き）

いかがでしたか？

次回、ミストラルとの最終戦です！

感想を貰えると、ありがたいです。

e p, 10 本能が叫んでいる

グラウⅡガーランドの苦悶の理由は、目の前で黒い牛のような獣を手懐けて悠然と語るミストラルにあった。

その獣、カトブレパス。

俯いた顔を上げ続けることは不可能らしく、1分に一度程度しかその視線はグラウを襲わない。

しかし、カトブレパスが一瞥しただけでグラウの盾となった十字架達はその動きを止め、死に絶えて落下していく。

それだけなら、まだ救いはあったのだが。

十字架が地面に落ちるか否かの瞬間に、グラウの内側が抉られるのだ。

「っ、が………ッ!!!」

体内で何かが爆発したような衝撃と、激痛と、意識すら断ち切りそのような高音が脳内に響く。

それが、カトブレパスの一瞥による最も厄介な事象。

人間の生命力から生み出された術式へのダメージが、術者へと逆流することだ。

生命力をそのまま削り取られていくのだから、感覚としては四肢をもがれるそれと近い。

何かを“操作”する術式を扱う魔術師には、最悪の相手と言えよう。本来ならば盾となり、矛となるはずの術式が彼らの命を削ぐための導火線として機能してしまうのだから。

「―――残りは12か。最初は面倒だと思っていたが、君の体を征

服しているという実感を持てる辺りは、悪くは無いのかもな」

その手に剣を構えながら、もはや防御しかできないグラウにミストラルは余裕を見せる。

しかし、グラウにはそんな状況でも、否、こんな状況だからこそ至る考えがあった。

「これが……貴方の生存理由、ですね」

「生存理由？ ああ、トリックという点では、確かにこのカトブレパスで合っているがな」

「カトブレパスの一瞥で他者の肉体を殺し、一般的な肉体操作で記憶を移植する……これなら、貴方の異常な痛覚も、傷を気にしない戦闘法も、納得が行きます」

『博物誌』の謎は残りますが、という部分は飲み込んで、グラウは残りの十字架でできることをあらん限りに思考する。

（今の数ならば、逆転も不可能ではありません。あの、獣さえ殺せれば！）

思考してから、行動に移すまで5秒。

ミストラルの嘲笑が耳に届くが、そんなことに構ってられる余裕は無い。

残りの十字架の内、最低限の防御を行える数を手元に残し、ミストラルを中心に据える正方形の角を取る形で十字架を飛ばす。

4の方角を、十字架という4の数で区切る。

それが意味するところは、

「場の支配、か……」

四方を見渡してそう呟くミストラルに、グラウはそのまま畳掛ける。

「これでッッ!!」

ミストラルを中心とした10メートル程の正方形は、グラウの支配下に置かれた。

それをどう利用するか。

答は一つ。

そのまま簡易な呪を紡ぎ、それを実行しようとして、

バヂィ!! と。

「な……?」

殺されたのは、“支配”。

カトブレパスの一瞥によって、グラウに乱された領域の天使の力が死んだのだ。

考えを見抜かれていたことに、カトブレパスの能力に今度こそ本当に絶句するグラウを前に、ミストラルの言葉は軽い。

「止めてくれないか。大方、この場の地脈を天使の力でかき乱して、私を巻き添えに自爆するつもりだったんだろうが……それでは“その肉体”が消え失せてしまうではないか」

俺の物になるんだから、と。

反論しようとしたグラウだが、しかしそれすら適わない。生命力の、限界だった。

「さあ、抵抗の意思も薄れたところで、止めといこうか」
「っ!!」

ぐらりと揺れる視界に映ったのは、黒い獣が首をあげようとして、

それが、黒い巨人に叩き潰された光景だった。

「「!?!」」

二人分の驚きを受けるその巨人に、グラウは見覚えがあった。
8月の学園都市、あの場所で見た術式だ。

「大丈夫か、と……聞くまでもないっスね」

「遅くなって済まない。援軍に来たぞ、グラウ」

巨人を指揮する黒一色の魔術師と、軽い口調ながらミストラルを睨む白髪の魔術師。

グラウの前に立ち上がったのは、テオレルドⅡミラーとランサーⅡJⅡグレイス。

グラウとミストラルの戦闘に割り込んだランサーは、何よりもまず目を疑った。

その対象は、一瞬見えたミストラルの体躯。

全身に赤が滲んでいる彼の体は、足跡に沿って血をしたたらせる――程度の話では無い。

傷口が開きっぱなしにも関わらず、もう出血していなかったのだ。

「なんつーか、死人みたいだったっすね……」

「いえ、間違っってはいません」

「え？」

「彼は、本当に死人なのです」

グラウが語ったトリックは、確かに理にかなっていることではあった。

しかし、決定的に足りない事がある。

「じゃあ、『獣』達をどうやって――」

しかし、そこから先の言葉は轟音に遮られた。

カトブレパスも、ミストラルをもまとめて叩き潰した夜行の兵装が、何かの力で碎け散った音に。

「ッ！ 初撃が通じたとは言え、そこから先は無理か……」

「ふざけたことを何度も何度も……『器』の分際で、私に手間を掛けさせるんじゃない」

残骸の中から立ちあがるミストラルは、もはや人間と呼べるのかも疑わしい程に傷を負い、血を失い、半ば千切れている左腕を無残にぶらさげながらこちらに迫る。

「死人を愚弄するのも、大概にしろ……」

いきり立つのは、テオレルドだけでは無い。

隣のランサーも、ミストラルに対して感じる悪寒以上に怒りを覚えている。

「カインのことといい、その体といい、よっぽど俺たちの気を逆撫でするのが得意みたいっスね」

対して、ミストラルの肉体は限界に近いのか、少し言葉に詰まりながら言う。

「そもそも、私と対話する時に十字教の考えで相対しようなどというのが間違いなんだ。『博物誌』を扱う資格を持つ私と、君達とは、相応しく無い」

しかし、容れ物としての肉体は限界でも。

彼の術式に“それ”があったことを、この瞬間のランサーは完全に考えの外に置いてしまっていた。

「“殺せ”」

「が……ッ!？」

「先輩!？」

ミストラルの言葉を受け、突如苦しみ出すテオレルド。
その様子をグラウは先刻までの自分と重ね合わせ、即座に答えを出す。

「カトブレパスが、まだ生きて……………」

「違う」

そしてそれを、ミストラルは即座に否定する。

倒れゆくテオレルドを眺めるように、正解までに間を置いて。

そうすることで、よりいたぶるように。

もっとも、ランサーはそんな表情を見せられて黙ってなどいられない。

「先輩に、何をしたああ!!!!」

前方に三角錐状に展開した『白亜の壁』を纏い。

防御の為の手段を、自分の怒りを以て扱う。

——しかし、それを遮るものがあつた。

『蛇』。

先にグラウによって肉塊へと変えられたアンフィスバエナすら凌駕する大きさの、大蛇。

ランサーの身長程もある胴体の太さは、彼の怒りを驚きと恐怖によって静めるのに十分だった。

しかし、この蛇が異常なのはとぐろを巻いて辺りを覆う程の大きさでは無い。

ランサーの疑問も、そんなことには向いていない。

「何で……………こんな……………」

問題は、今の今まで、“ここにすることが認識できなかった”とい

うことだ。

10メートル四方の中庭では隠れることすら難しい、というか不可能なサイズの蛇が、出現した瞬間を、ランサーも、グラウも、全く認識できなかった。

気付いた時には……………そこにいた。

「名を、バジリスク」

言葉と共に、ミストラルの中に余裕が生まれていくのが見て取れる。これは、それほどに圧倒的な獣だと言うのか。

「“視線で殺す”という意味だけを抽出したカトブレパスとは違ってな。こいつは、そのもの蛇なんだよ」

「どういう……………意味だ」

「こんな話を聞いたことは無いか？子供や女性……………つまり生物学上の弱者が、蛇や蜘蛛を無条件に避ける理由は、遺伝子上のものと」

無関係な話でわざわざランサー達に猶予を与え、それを話するのが楽しいとでもいうように。

「つまり、人間は本能の部分で分かっているんだよ。何が、どんな生物が、有毒で、害をなすものなのか。そしてこの『バジリスク』は……………その権化だ。君たちのように理性を持った人間には、普通は認識すらできない。恐れ、忌避し、それゆえに理解の外へと放り出す」

「つまり……………本能が、戦うなって、叫んでるってことっスカ……………」

「その通りだ。そして、視線を代償に強化したこいつの牙は、カトブレパスよりの一瞥よりも強い『毒』を誇る。あの黒の巨人も、そ

の白い壁も、術者もろとも噛み殺せる」

「ッ！！」

「あまり怒るなよ。“殺す”といっても、一時的に生命力を枯渇させるだけ。今は動けなくなっているだけだ」

もつとも、次に目覚めることは無いがな、と付け加えて。

ずるずると這う目の潰れたバジリスクに、全幅の信頼を寄せているかのように命じた。

「喰らえ」

言葉を、即座に移したとしても遅い挙動、しかし。圧倒的なその存在にランサーとグラウの行動の選択肢は次々狭まっていく。

見えない選択肢を発生する前に潰されては、選ぼうも無い。

（左右は完全に囲まれた。上は、鎌首をもたげたアイツに突っ込むようなもの……。下は、駄目だ。逃げられない！？）

理性すら奪っていくバジリスクのうねりに、しかしランサーの頭は一つの可能性を生み出す。

（リエラならあるいは……でも、迷う暇なんか無い！）

「グラウ！！」

「何か……？」

ボロボロで、立っているのもやっとなグラウに、ランサーは一つの問い掛けをする。

「お前、リエラの術式……使えるっスか？」

「それは、……………」

ランサーの問いを、グラウは飲み込めない。

その刹那、存在することが馬鹿馬鹿しくなるほどの巨大さまで変貌した蛇が、バジリスクが、3人のいる場所を大きく噛み千切った。

——後には、何も残らない。

蛇は、獲物を一飲みにするのだから。

e p, 10 本能が叫んでいる（後書き）

次回、ミストラルとのバトルが決着します！

意外なキャラも登場！

感想、批評、幾らでもお待ちします。

e p, 1 1 陳腐な言葉だけど（前書き）

遂に連載1年ですか……………

なんだか感慨深いです。

それでは、第6章もクライマックスです！

e p, 11 陳腐な言葉だけど

アニエーゼⅡサンクティスは正直に言って落胆していた。

折角獣王を仕留める機会を得たと思ったのに、獣王の抵抗にあっけなく吹き飛ばされ、テオレルドとランサーのサポートすらできなかった。

おまけに、意識を取り戻した時には何故か蓮の杖が見事なまでに“く”の字に折れ曲っていて、戦意もそこそこに半減していたのだった。

「しかし……この人数が、この規模の教会を10分探して人間を3人見つけられないって、どういうことなんですか？」

更に、何時の間にかランサーとテオレルドは行方不明。

この教会の周囲に張った結界に反応が無かったことから、教会の中にいることは確定事項なのに、見つからない。

中庭のある、少々歪な口の字をした中規模な教会。しかも向こうは派手な戦闘をしていることが想像できる。――なのにな。

「どこかへ空間移動の術式でも使ったってんですか？しかし、博物誌にそんな獣はいない……ミスターⅡランサーやテオレルドにそれをする必要は無い……ああもう！」

教会の入り口の石段で悶々としていたアニエーゼだったが、ふと前から現れた足音に意識を取られた。

(――、現れた?)

部下である修道女達は、自分の後ろで搜索を続けている。

前方10メートルの所には、聖アエギディウスの加護を用いた結果がある。

周囲からの干渉、内部からの影響を遮断する、本来は高等なものだ。そこを、平然と通って。

（コイツ、一体!?!）

思わず戦闘の構えを取るアニエーゼだったが、現れた人物に息を飲む。

現れるはずの無い、守られるべき『少女』。

「何で――」

その名を口にしようとした瞬間、男の、絶叫と呼ぶにもおぞましい声が響いた。

「!?!」

ここまで獰猛な声は、テオレルドやランサーのものでは無い。

（ならば敵の。しかし、どこから……?!）

考えがまとまらないアニエーゼの横を、“彼女”は一礼して走り抜けていく。

アニエーゼの制止も聞かず、人間――特に女性には絶対に見つけられないはずの中庭へ。

「何だ………何だこれはあああ!!!!」

断末魔の絶叫は、ミストラルのもの。

理由は、ランサーⅡJⅡグレイスとグラウⅡガーランドのみが知る。

「考えてみれば、当たりまえだったんスね」

崩れていくミストラルの肉体と、碎けていくバジリスクを前に、ランサーは不敵に笑う。

まるで、毒が逆流していくかのように。

「これは………何を………」

「『聖ジョージの聖域』。彼の伝承を用いた防御術式にはどんな効果があったか、完璧に把握してる人間は少ないっス」

その名を知らぬ者はいない、一級にして普遍の術式。

しかし、この二人が、ランサーとグラウが発動したそれは、通常とは意味合いが異なる。

防御という術式に特化した魔術師と。

隣でありとあらゆる防御術式を見てきた魔術師の二人が。

――あの瞬間。

バジリスクへの恐怖で理性すら失いそうになる中、ランサーはとある術式を組み上げた。

グリモア
悪魔の力による、聖ジョージの聖域。

そしてそれを、グラウの中にあるリエラの知識で補完したのだ。
対象を、“毒蛇の撃退”に限って。

聖ジョージの伝承の中には、未知の毒蛇への対処法を授けたという
ものがある。

そこから導かれる神話的效果は、“毒の無効化”。

普通の防御術式ならただの付随効果に過ぎないだろう。

現に、禁書目録の『首輪』にもそれは付随していることをランサー
は知っている。それゆえに思いついたような、間に合わせの術式だ。
しかし、それをグラウの知識で鏡面反射のレベルまで押し上げた。
バジリスクの牙からバジリスクの体内へ。

バジリスクから術者へと、逆流するように。

そして、テオレルドのように生命力を枯渇させられた場合、天使の
力で駆動しているミストラルが只の死人になるのは明らかだった。

「陳腐な言葉っすけど……これでお前は終わりだ」

勝利を宣言するランサーだが、これ以上の余裕は無い。ミストラル
にこれ以上の隠し玉があるものなら、気絶したテオレルドとグラ
ウを抱えた状態では勝負にならない。

「ふざけるな……」

ぼろぼろと崩れていく体躯は、自然の腐敗よりも明らかに速い。
おそらく、博物誌を使用するという無茶を通すために、生身の肉体
では耐えられないレベルの天使の力を封入されていたのだろう。

「私は…カインを、手に入れるまでは………！」

コノママデハ、シネナイ。

発声器官にまで影響が出たのか、言葉が歪む。

そして、それは何かの命令文だったのか。

バジリスクが、今にも砕けようとするその残骸が、一つの形を成す。ビデオの逆再生の様にも見えたが、違う。その残骸が形を取ったのは、黒の一色で構成された牢獄の形だ。

「檻なんて創って・・・何するつもりなんスカ」

この瞬間にも塵へと崩れていくミストラルに問いかけるが、その表情に、今になって初めて、ランサーは“色”を見た。

それは、狂気。

死に瀕した男の、血走った目だ。

「一つ、良い事を教えてやろう」

「……………」

「今まで誰一人として扱えなかった『博物誌』を制御する程の天使の力。それを、私は一体どこに蓄えているのか想像しなかったのか？」

「ッ、まさか！！」

ランサーに、理解の一線が走る。

それは最も望むべくもない結末。

「私を殺した罪、その死で釣り合いが取れると思うなよ」

それが、ミストラルの最期の言葉だった。

ばきばきと、内から弾けていく肉体。

ビリビリと、空気の振動だけが檻に反響する。

「天使の力の、暴走……!!」

8月、学園都市で見たロブスIIマーカルの最期も、これと同じ。ただ、あの時と違うのは制御の術を失った天使の力の行き先だ。周囲に破壊を撒き散らして、ランサー達を道連れにするつもりだ。そして、力尽きた今のランサーに、これから逃れる方法はない。戦闘の構えを解き、地面に座り込み、だらりと下げた左手で指を弾こうとも、もはや光の術式は発動しない。

「これで、カインを“守れた”って言うのはおこがましいっすかね………?」

もはや人の形を留めていないミストラルの残骸から、ランサーが見せた諦めに高笑いが聞こえた気がした。

――しかし、舞い降りたのは一つの、最も有り得ないはずの可能性。

「そんなことは無い! 私は、確かにお前に守られた!」

凜とした声で。確かな足取りで。彼女が現れたのだ。

「何で……」

物理的な壁だけでは無い。人間ならば誰しも避けては通れない忌卑という檻の中へ、彼女が。

「何で、カインが……」

カインⅡVⅡスカーレット。

黒い修道服は動きやすさを重視したのかミニスカートになってしまっているが、確かにローマ正教式のそれをまとった彼女が、そこにはいた。

「理由はどうでも良いだろう。私は、ランサーを助けに来たんだ」
「いや、カインは、そもそもどうやって……………」

今度は、カインが救いの手を伸ばす。
伸ばしながら、少し憂いを含んだ顔で言う。

「私は確かに、無力な吸血鬼とのハーフだ。でも、こんな三日月の……月の影響が少ない夜には、本当に少しだけチカラを使えるんだ。……憐れな女吸血鬼、『カーミラの壁抜け』を模した力を」
「そっす、か……」

あの時、最初から言い出せなかったのは、きっと化け物扱いされるのが怖かったからだろう。
現に今も、正体を明かしたことへの恐怖が彼女の顔にはよぎっている。

でも、彼女は助けに来てくれた。
自分がどんな存在なのかを晒すことへの恐怖を、振り切って。

「ありがとう。カイン」

今にも崩れそうなランサーだが、その手を、しっかりと握り締める。
ようやく何かを守ったのだという、確かな感覚をそこに。

e p, 1 1 陳腐な言葉だけど（後書き）

次回、ランサーとカインの後日談です。

今回も感想など、お待ちしております！

e p, 12 間違いありません(前書き)

第6章の後日談です。

とある原作キャラも登場します！

e p, 12 間違いありません

「う……うおおおおお！？」

「ち、ちよつと声のボリュームを……下げて欲しいんすけど……」

ロンドン、ブルックリンの人ごみに少女の絶叫が響き渡る。

少女の名は、カインⅡVⅡスカーレット。

それを人目を気にするように制する少年は、ランサーⅡJⅡグレイス。

そして、ランサーは今さらながら後悔していた。

「そうだ……カインには300年のジェネレーションギャップがあったんすよね」

ランサーの思考は、昨日へ。

「ん、良く来たりけるわね。ランサー」

「どうもっス」

聖ジョージ大聖堂。アーキレシヨップ最大教主の執務室。

先日のミストラルとの戦闘の一件、そしてカインの処遇について、ランサーはローラースチュアート直々の呼び出しを受けていた。

窓から覗く中庭には煉瓦造りの教会とは似合わない日本の庭園が造られていて、時節柄鮮やかな紅葉を見せている。

何でも、少し前にイギリス清教の傘下に加わった天草式十字凄教からの友好の証であるそうだ。

「それにしても、日本の紅葉というのは良きものたりけるのね。たまには、日本茶と和菓子を用意して欲しくもなりたるわ……」

部屋に入って来たランサーを振り返らず、ローラはうつとりと言う。そっすね、と適当に同意して、

「日本語を誰よりも馬鹿にしてるアンタに言われて、あの紅葉達も幸せっすよねー」

がたがたツツ!!とバランスを崩すローラを尻目に、ランサーの言葉は色を変える。

「で？結局俺達への処分はどんなモンなんスカ？」

普段の軽薄な態度とは違って無愛想に本題を切り出すランサーだが、そこには理由がある。

（俺、ローラのコト大嫌いなんスよね……顔を合わせただけで、ブラックホールを覗いた気になるんスもん……）

人の感情を“見る”ことができるランサーには、どうしてもこの種の策略家が好きになれない。

もつとも、並の人間なら底は浅いのだ。

しかし、彼女は桁が違う。

可愛い笑顔も、不気味な笑みも、およそ人間に可能な深みとは思えない。それでいて時おり虹色に輝くのだから、尚の事手に負えない。

だから、なるべく接触は避けているのだが……

「そうね。では、今回の結末を語りてしまいませんか？」

苦笑いを浮かべるローラを見て、ランサーは心の中で溜め息を吐く。

（今度は、善と悪の天秤はどっちに傾くんスカね……）

だが、ローラの言葉一つでそんな余裕は消えた。

「では、カインⅡVⅡスカーレットは必要悪の教会の職員として雇用したるわ。それから、ランサーⅡJⅡグレイスへの処罰は無し。国内の不穏分子を討つという、任務に即した行動だったということ
で決着がつきたりけるのことよ」

「はぁ……っ!？」

今の言葉を理解して、咀嚼して、その意味を図ると……

ランサーは無罪放免、そしてカインは保護してもらえするという、理解に苦しむ程に善良な決断が下されたことになる。

そしてそれは、イギリス清教にとって少しもプラスにならない。

ローマ正教の人間を討ったこと。半吸血鬼を匿っていること。そのどちらも、カンタベリーの老人に進言すれば取り付くしまも無く切り捨てられていただろう。

つまり、それに見合った代価が、あの戦闘で得られたことになる。

「何を驚きているの？ランサー自身からの直訴もありけしことに、何の不満を——」

「何か、良いコトでもあったんスね」

笑顔の言葉を遮られたローラは、一瞬の沈黙を笑みで上書きして続ける。

「そうね。確かに、あの爆発跡からは面白いモノが出たりけるのよ？」

そう言って、何枚かの書類を差し出す。そこには、あのミストラルの自爆によって形骸を留めるのが精々といった教会の画像の中に、何か光るものがあつた。

「これは……指輪？」

「そう。博物誌などという危なき魔道書を、その男がいかように掌握していたのか。その答えが、『指輪』たるのよ」

2枚目の画像は、それを拡大したもの。ごてごてした装飾品からシンプルなものまでその数は10。あの爆発の中でも、焦げによる黒ずみさえ無い。

「ソロモン王の理論を応用した、獣への干渉か。アイツ、とんでもない霊装持ってたんスね」

「問題は、そこでは無きにつきよ」

「……？」

促され、次の書類を見たランサーは、最初は意味を掴みかねた。しかし、実に10分もの時間を要してそれを、僅か1行の文字の羅列を理解した彼の顔には蒼白な汗が浮かんでいた。

否、これで何も感じないのなら、そいつは人間では無いとさえ思う。

「人間の命を……捧げた、霊装……！！！！」

その表現に何の比喻も無い。その指輪達は、文字の通りに、人間の命を使った霊装だった。

首を切る、腹を裂く、心臓を抉る。世界中に残る、『死』という現象の効果を確かめるかのような術式達が、指輪の鑄造方法の中で最も現実的な案としてそこには記されていたのだ。

「正直、怖気が走りたるわ。使用されたであろう命の数は、有に1000以上。されど本当に恐ろしきは、これを作りたるのが、“そのミストラルとやらにあらざることよ”」

「ランサー？」

「え？ ああ、何でも無いっス」

と、そんな訳で正式に必要な悪の教会のメンバーとなったカインに、初めての任務である。

それは、——お遣い。

先の戦闘で無茶な使い方（瓦割りの下敷き）をして使いものにならなくなってしまったアニーゼの『蓮の杖』を、なるべく早急に市内の武器職人の下で調達して欲しい、という内容のものであった。一応、霊装の運搬という分類になるため、ランサーがロンドン市内の案内がてらカインの護衛についている……のだが。

「ランサー！ 何だあの大きな動く箱は！」

「こっちには板に入った薄っぺらな踊り子がいるぞ！」

「な……小箱が礼儀正しい挨拶をしてきたあああ!？」

「まあ、しょうがないと言えましょうがないんすけど……」

文明の利器を全く知らないカインは、細かなことにとかく驚愕するのだ。

これで学園都市なんて行ったら驚きで死にそうっすね、などと思いながらも、それらに丁寧に応じるランサー。

売り子さんを一々はぐらかすのも、周囲の人の視線を集めてしまうのも、——これはこれで、結構楽しいものだ。

そんな二人を、物陰から見つめる幾つかの影があった。

「おお、中々イイ雰囲気じゃないですか？ 8歳くらい歳の差があるはずなのに」

「ミスターIIランサーも見た目少年ですから……」

「むっ!? 二人してベーグルを買いました! このまま“あーん”と行っちゃうんですか？」

「まさか!? 既にそこまでの仲にツツツ!？」

黒い修道服をまとった、数人の少女達。

アニエーゼIIサンクティス以下、アンジェレネ、アガター等、アニエーゼ部隊の戦闘メンバーである。

そもそも、何故こんなことをしているのかと言えば、女子寮（シェリーIIクロムウェルのゴーレム魔術で迅速に修復された）の部屋で、ランサーとのお使いをやたら楽しそうに待っていたカインの姿を見て、耳年増なミスター達の好奇心が膨れ上がったことが原因なのだ

が。

……ちなみに、探索術式を得意とするメンバーが多いのは100% アニエーゼの人選である。

「しかし、こんなこととしてて良いんですか？ 女子寮の部屋の片付けも終わってないのに……」

「シスタールチアがいれば大丈夫ですよ——おおっ！ カインの頬に付いたケチャップをミスターランサーが笑いながら取りました！」

「「「何いっ!？」」」

傍から見ればこれ以上は無い、という位に怪しい彼女達だが、テムズ川沿いを楽しそうに歩く二人に意識を集中している為、そんなことには気付かない。

「カインも、あんな風に笑えるんですね……」

「ただでさえ、命を懸けて守るとか宣言されちゃった男が側にいるんです。仕方ないというか当然というか」

「あれですかね」

「間違いありません。あれです」

「ええ」

「「「恋しちゃってますね……」」」

魔術師と半吸血鬼。

交差する、世界の理から外れた者同士の道。

それが新たな火種を孕んでいることを、彼らはとつくに知っている。それでも、彼らの歩みは止まらない。

e p, 1 2 間違いありません(後書き)

次章、舞台は学園都市へ!!

主人公は夜来綴です。

さらに、暗部のキャラ達もバンバン登場します!

e p, 1 自己紹介の途中だったね（前書き）

新章突入！！

舞台は『0930事件』の後の学園都市、主人公は夜来綴です！

e p, 1 自己紹介の途中だったね

6日前のこと。学園都市に戦慄が走った。

外部から侵入した『魔術』という名の『超能力』を扱う者との戦闘で雨の街は壊れ、光の翼が舞い、目に見えぬ世界の天秤は今にも崩れようとしている。

――しかし。

「では、明後日からの海外研修に備えて明日は早めに休むように」

「「「いよっしゃああああああ！！！！」」」

白いエクステを入れていることを除けばごくごく普通の高校生、雪崎嶺次達きりさねの通う興条学園の1年生達は明後日からのロンドン研修を控え、もはやどこかのネジが外れない方がおかしいのではないかと云わんばかりのテンションに突入していた。

世界を巻き込む戦争への流れなどどこ吹く風。それが初の海外旅行である高校1年生からすれば当然でもあったが。

「ふふふ、研修とは名ばかりのロンドン観光……俺が狙うのは唯一つ！彼女の獲得じゃああ！！」

「いや、解理、こういうイベントでお前の血が盛っているのは分かるが、少しは」

「知るか！ロンドンという見慣れぬ土地で俺の能力を以て頼りになる様を見せればきつと……」

「ここで大々的に宣伝している時点でもう駄目だろ……。イギリスのジェントルマンに勝てる気がしないよ……」

ホームルーム直後。田鞆^{たざやとつり}橙李、翠隻^{すいぜきかいり}解理と共に帰る準備をしていた雪崎嶺次は、浮わついた雰囲気を隠す気も無いクラスメイトとは裏腹に溜め息を吐いていた。

理由は、彼の視線の先。

この2週間よそよそしい関係になったままの幼なじみ、灰笠^{はいがさみつる}未鶴の存在である。

大覇星祭前、赤石風早を助ける為の戦いから帰って来た時。

あそこで未鶴を遠ざけて——悪く言えば頼りにしなかったことは、心身共に屈強な彼女には応えたらしく、あれからまともに口をきいていない。

(それにしても……この距離感は大分応えるな……)

心ここにあらず、といった表情の嶺次に、それとなく騒ぎの輪から抜け出してきた橙李は耳打ちするように言う。

「溜め息吐くなよ嶺次。灰笠だってこのままの関係を望んでいるとは思えないんだし、あっちの空気に乗って告白でもしちゃえばいいじゃん？」

「ぶふおっ!？」

今の関係にその言葉は禁句すぎる。

危く絶叫しそうになるのをこらえ、何とか嶺次の心が戻ってきたのを確認すると、橙李はそのオレンジの髪で隠れがちな表情に笑みを浮かべて、

「解理じゃないけど、未知の環境ってのは人の心を高揚させるものだよ？ 少なくともプラスに作用すると思うけど」

「お前って、ホントに見透したように言うな……」

「俺が知ってることは多くないさ。けど、嶺次が暗く沈んでいるの

を放っておけるほどには馬鹿じゃないつもりだ」

本当にできたクラスメイトである。その才能の10パーセントもあれば、自分も未鶴と喧嘩などしなくて済んだのだろうか。そう思うけれど、これは自分が解決するしか無いことなのだ。

「ま、助言をありがとよ。俺もこのままは嫌だしな」

ようやく、自分に素直になれそうな気がする。

そう言って笑い返した嶺次に、いつ近付いたのか分からぬ解理が組みついた。

「なーんの話をしてるんだい？このリア充どもめ！」

「うはあ……解理、お前……」

一目で、絶句。

血の気が走る目にはもはや獣の領域に突入しかけの“彼女欲しいオーラ”が溢れ、幼なじみを確保しつつある嶺次と恋愛に興味の無い橙李に敵意を剥き出しである。

ここで選択を間違えば、今までの良い話ルートを台無しにされる気がする。

そう直感した嶺次と橙李は会話のベクトルを強制変更。

「い、いや、土産の話だって。ロンドンに行った的なことを表すにはどんなのが良いのかなーって、橙李に相談してたんだよ」

「土産ねえ」

疑問の目が向けられるが、橙李もコクコクとうなずいて必死にごまかす。

（土産……か）

自分で切り出しておいて、嶺次の脳裏には一人の風紀委員の姿がよぎった。

この夏、何度も世話になった相手だ。自身の命も救われたし、未鶴の命も、風早も、彼がいなければ助けられなかった。

あいつ——夜来綴にも、何か贈るべきだろうな、と思う。

……あそこまで完璧なイケメンなのが、少し気に食わないが。

その夜来綴^{やらいつぱり}は今、学園都市の路地裏を必死に逃げ回っていた。

「初春ッ！ 次の指示は！？」

携帯からは年下と思われる少女の慌てた声。

その指示に従って角を折れ、フェンスを越え、ビルからビルへ飛び移る。

「ツイてない……徹底的にツイてない！！」

こうなった原因として自身の行動を反芻するが、全てが悪い方向へ絡まっているようにしか思えない。

ことの始まりは『0930事件』以降強化された警備員との協力体制。その一環でスキルアウト間の武器取引きを押さえようとしたのだが、敵側に何らかのサーチ能力を扱う能力者がいたらしく、完璧に綴の足取りを掴まれてしまっていた。

同僚の空間移動能力者、白井との2人1組を断ったのも自分だし、うっかり“制服”を着てきてしまったのも自分のミスだ。

普段なら気にもならないようなことが積み重なり、こうして自分の首を締めていた。

そして綴は、その理由に心当たりがある。

——もつとも、今それをどうこうできる訳でも無いが。

「俺の能力では一度に一人なら無力化できるけれど……この人数は多勢に無勢過ぎる！」

後ろから迫る、細い路地に入りきらない数のスキルアウトに捨て台詞を残しながら綴は駆ける。

電話の向こうで顔を青くしていることが簡単に想像できるオペレーター、初春飾利からあと少しで警備員との合流地点であることが告げられるが、安心はできない。この辺りの路地は非常に複雑に入り組んでいて、初春の指示無しでは直線距離100メートルを進むのもままならないだろう。

そんなことは任務前に叩き込んでいたはずなのに、綴はまたミスを犯してしまった。

前方200メートルには、明るい表通りが見える。

しかし、綴にはそこに辿り着くことはできそうにない。

彼の目の前から現れた別のスキルアウトが道を塞いでいたのだから。

「手間掛けさせやがって……この辺の路地裏は俺達が一番知ってるんだ。大方、地図上の最短距離を通ったんだろうが、廃ビルや下水を利用したショートカットまでは把握してないよなあ？」

息一つ乱さずにそう言うリーダー格らしき男を含み、前方には10人。

そんな言葉の内に到着した、後方の17人。

格闘の技術でどうこうできる人数ではない。綴の能力——演算代
ラム行では一度に一人しか倒せない。

「これは、無理っぽいなあ……………」

電話の向こうで初春が何かを叫んでいるが、複数の銃口を突きつけられ、両手を上げた状態ではまともに聞き取れない。
最悪の事態すら覚悟した綴だったが、

「やれやれ、穏やかじゃ無いなあ。僕の目が届く範囲でこんなことをしてもらっちゃ困るんだよね」

響いたのは、声。そして、カツツ、と。

革靴の音を狭い路地裏に反響させ、黒地に金で縁取りの刺繍をなされた、スーツにも見えるブレザーを纏い、彼は現れた。

“綴のそれと同じ”制服。そして、左腕には風紀委員の、否、“色が反転した”腕章。

ワックスで尖っている黒の髪にも関わらず、その振る舞いは綴に彼が年上であることを確信させるに十分なものだった。

「誰だ……………」

綴を囲むスキルアウトが一樣に疑問の表情を浮かべるが、それ为先取りする形で彼は名乗りを上げる。

正々堂々。その言葉を体現したかのように。

「羽柴大義^{はしばたいぎ}。君達が知らないなら教えてあげるよ。僕は風紀委員長^{ジャッジメントリーダー}だ。君達を、取り締まりに来た」

「風紀委員の、長……？」

穏やかな雰囲気とは裏腹に、放たれる気配は戦い慣れた男のそれだ。しかし、スキルアウト達も察知したそれに反応を見せる。

路地裏での戦闘の鉄則である、殺られる前に殺る為に。

綴に向いていた銃口が羽柴と名乗った少年を促え、その胸を貫くまで僅か2秒。

「デメエが誰だろうが——」

対して銃口を向けられた少年の動作は、右腕を裏拳気味に振り回しただけ。

当然、届くはずも無い距離での動作だ。

しかし、ゴギンツッ！！と。有利であったはずリーダー格の男は顎を打ち抜かれて意識の糸を切り落とされたように、その場に崩れ落ちた。

「!？」

途端に殺気立つ路地裏。

『一体何をした』。

異能が満ちるこの街でありふれた質問ではあるが、彼等はそうせずにいられなかっただろう。

あまりに不可解。あまりに不気味。綴にとって穏やかである彼の所作の一切がスキルアウトには敵意に、戦意に見える。

それを裏付けるまでもなく、彼は自らの手の内を晒した。

意味するものが、スキルアウト達の絶望とイコールであることをしっかりと把握しているような口調で。

「自己紹介の途中だったね。僕的能力は『録画再生』レコードアンドクリエイト。学園都市第六位の……レベル5だ」

e p, 1 自己紹介の途中だったね（後書き）

いかがでしたか？

ついでに小説情報も更新したので、ご覧ください。

感想、批評などあれば、お待ちしております！

e p, 2 三流の方が良いか（前書き）

今回、物語は『グループ』と接触します！

e p, 2 三流の方が良いか

襲いかかっていくスキルアウト達の脳裏に、その単語はどのように理解されただろうか。

ジャッジメントリーダー
風紀委員長。

レコードアンドクリエイト
録画再生。

そして……レベル5。

いや、最後まで彼等は理解しなかったのかもしれない。

最初の10人は、彼が地面を軽く踵で突いたのと同時に地面にへばりついて動かない。

次の7人は、舞うような回し蹴りと同時に壁に叩き突けられた。

最後の9人は、指のスナップを引き金として崩れ落ちた。

その全てが少年の一人芝居のように展開され、近付くことすらかなわずにスキルアウトは鎮圧されてしまったのだから。

「無事だった………みたいだね。良かった」

「え、ああ、はい」

気を失い、呻くスキルアウトを背に、何事も無かったかの表情で綴に笑いかける。

「えっと………羽柴さん、でしたっけ」

「そ。長点上機^{ウチ}の3年生やってる羽柴大義。君は………夜来綴君だね。長点上機^{ウチ}で風紀委員なんてやってるのは少ないから、僕も覚えてるよ。さあ、彼らを警備員に引き渡して任務を終らせよう」

絵に描いたような、気さくで頼りになる先輩像。
あまりに未知の超能力のことを根掘り葉掘り聞くのがはばかれる
程、彼は『善人』だった。

「風紀委員長……ですか？」
ジャッジメントリーダー

風紀委員、第177支部。

命の危機を数十分前まで迎えていたとは思えないなごやかさで、夜
来綴と初春飾利、白井黒子と固法美偉は休憩の時間を取っている。

当然のように白井になじられたり、心配を掛けた初春に泣かれたり、
固法先輩に（割と本気で）怒られたりして時間はかかったが、綴は
ようやくこの話を切り出すことができた。

未知の能力者にしてレベル5。

彼の中の“記憶”とも一致しない能力に、少なからずシリアスな空
気を持ち出したつもりでいた。

——少なくとも、綴は。

「ぶ………」

「へ？」

「え、夜来君……？」

白井に鼻で笑い返され、固法先輩と初春に疑問と苦笑をされ、綴は
今の質問が意味することを掴めない。

「え………っと」

何だか、自分の無知を披露してしまったような――

「まさか、夜来先輩はご存じありませんの？」

気の毒そうな笑いすら浮かべて、白井は“丁寧にも”説明してくれた。

「『風紀委員長』にしてレベル5の第6位、長点上機学園の羽柴大義先輩。この街の治安維持は、この人の功績によるところが大きいですのに」

超能力という格差の存在する学園都市で、身を粉にして不満の抑止力となっている方ですの。と付け加え、白井の言葉は続く。

「はぁ……………」

「羽柴先輩の理念は、“目には目を、歯には歯を”ですの。それは羽柴先輩の能力、『録画再生』レコードアンドクリエイトにも反映されていて、詳細は不明ですけど、“一度起こった事象の結果のみを抽出、自在に操作する”能力だとか。ですけど、夜来先輩は本当にご存じありませんの？風紀委員の訓練場には大抵いらっしゃる方ですのに――」

その次を言いかけて、白井は理解した。目の前の夜来綴が、風紀委員の訓練参加率ワーストであることに。

結局、一時間以上かけて、綴は風紀委員の訓練教本から風紀委員を

募集する広告に至るまでを読み込まれた。

普段ならば味方をしてくれる初春や固法先輩もそこはかたく冷たく、そこは白井の独壇場。

しかし、おかげで理解したこともある。

それは、羽柴大義という人間の理念。

能力についての詳細はあまり無かったが、彼の能力自体は戦闘向きでは無いらしい。

——この世界に起こる現象を理解して反復する。

確かに、文面からは第3位である御坂美琴のようなあからさまな攻撃性は伺えない。

それでも、彼はそれを風紀委員という場で生かした。

たとえば、レベルを笠に着て弱者を虐げるような能力者に対して。彼らの使う能力を理解して、自分のものとして反復するような方法で。

結果。

その性格と人望、レベル5という地位、果ては『大義』という名前まで手伝って、彼は高校3年生を待たずして風紀委員長の名誉を手にした、とのことだった。

しかし、講義を終えて自慢気な白井を前に、綴の脳裏には2つの疑問が浮かんでいた。

一つめは、何故あんな時間、あんな場所に彼がいたのか。

警備員との協力体制を敷いていることは、彼の任務への参加理由を減らすはずなのに。

そして、二つめ。

スキルアウトを倒す為に羽柴先輩が使ったあの攻撃は、“彼自身の動き”を使ったものではなかったか。

———それこそ、彼が嫌うはずの一方的な暴力として。

同刻。

学園都市の、とある路地裏。

人々の視線を壁に遮られ、日中でも薄く暗い。

そこを、暗部の小組織、『グループ』の一員である結標淡希が歩いていた。

服装はいつものようにサラシを巻いた上半身に紺のブレザーを引っかけ、下は同色のミニスカートのみ。

二房の赤毛が揺れる、傍目には美しい女子高校生だが、その表情は険しい。

「ああもう、何でこんな場所の仕事を私に押しつけたのよ………土御門にでもやらせれば良かったものを！」

アスファルトの舗装もおろそかな路地裏では、片手で引くキャリアケースががたがたと耳障りだ。

しかし結標は、引き受けてしまった以上この仕事を終らせねばならない。

———あの男共に借りを作るのだけは、絶対に御免だ。

もう一方の手に持つ携帯電話で場所を確認し、それを彼女の能力、『ムーブポイント座標移動』で壁の向こうへと飛ばす。

直前に通話状態に置かれたそれは、録音された音声で警備員へ通報していることだろう。

（単純だけど面倒なのよね、コレ）

これが、今回の彼女の仕事。

とある暗部の組織からの応援要請。

名前まで覚える気も無かったが、確か物資運搬の護衛専門の組織だったはず。

そんな小組織の身に余る物資を運ぶので、『グループ』が応援をするように。……そんな感じの内容だった。

その一環が、“死角潰し”。

物資運搬のルート上にある狙撃に適したポイントに警備員を向かわせ、人の目に晒す。

シンプル極まり無いが、これはこれで有効なのだ。

狙撃手のようなデリケートな犯罪者は、周囲に警備員の“匂い”があるだけでためらい、精彩を欠き、あわよくば逃げだすだろう。

「さて、と。この程度かしら………?」

キャリアケースを開き、リストの残りを確認する、結標。もう何キロも歩きっぱなしで、いい加減休みたいところだった。

しかし、人気の無い路地裏で彼女の耳に飛び込んで来たのは予想外の言葉。

「待っていたよ、結標淡希さん。初めまして」

「!?!」

そこには、一人の少年がいた。

彼女よりも背は大きい、顔にあとけなさが残ることから年下であろう少年。しかし、その姿が異様すぎる。

「何よ………その、姿」

「別に。というか、他者を服装で判断するのは三流の証だよ?」

「言ってくれるじゃない………!!」

ピキ、と苛立ちを覚えるが、一方の少年の姿は気にするなという方が無理だろう。

上半身を黒いベルトでミイラのようにがんじ絡めにされ、両足も一定以上の動作ができないように鎖で繋がれているのだ。
何か、凶暴な獣を檻に閉じ込めるように。

「でも良いか。三流の方が、仕事も簡単に済みそうだし」

「仕事、ね。それは私を殺すって内容で良いのかしら？　でも、私の能力を前に——」

ぶちツツと。

不気味な音が彼女の右腕から響いた。

直前まで軍用の懐中電灯を取り出そうとしていた、右腕から。

あまりに突然の事態に、彼女の脳には目の前で笑みを浮かべる少年の言葉が入る余裕すらあった。

「待っていた、って言ったよね？　君の能力を知った上で………否。知っているから、僕がここに居るんだ」

スローモーションにすら感じた少年の言葉の後。激痛が、収束して、炸裂した。

「————ツツあああああああ!?!」

見れば、彼女の右腕はずたずたに切り裂かれていた。
まるで、記憶トラウマの中の足のように。

走る激痛よりも、思い出したくも無い記憶が彼女の中を食い荒らす。
もはやパルス治療器など役に立たない。とつくにそんなレベルを振り切っている。

「ひ……あ………？　　うう………っ！！！」

これが相手の能力なのか。敵の目的は。“待っていた”という言葉。
——そんなことを考える余裕すら、今の彼女には無い。

汚い地面に倒れ伏し、激痛とトラウマに苛まれてがたと震える
結標の前に、少年は縛られたその身をゆるゆると動かして笑みと共に言う。

「良い感じにトラウマを開いてくれたかな。まあ、殺しはしないよ。
壊すだけだ」

「ツツ………あ………ぐ」

「自分達、『パレード』の目的の為にね」

e p, 2 三流の方が良いか（後書き）

いかがでしたか？

次回は、あのレベル5が登場！！

しかし、相手も一筋縄ではいかず……！！？

e p, 3 今回は僕が勝つよ(前書き)

今回、あのレベル5が登場します!!

新キャラも登場!

物語は急展開へ……!

e p, 3 今回は僕が勝つよ

結標淡希が謎の少年から攻撃を受けている頃。

第七学区の通りを走る、後部座席を加工したバンの助手席。

学園都市第一位のレベル5、一方通行は退屈そうに首を鳴らした。
アクセラレータ

「やはり、敵が来ないことが確定している護衛というのは性に合いませんか？」

「そオ言う訳じゃ無エ。ただ、な……………」

隣の運転手に適当に返事をして、その視線は窓の外へ戻る。

しかし、退屈なことは否定しえない。

——彼の今回の任務には、一方通行という名前の価値があれば良いのだから。

今回、わざわざ『グループ』にまで応援を要請するような小組織。

そこを襲撃する程度のクズには、アクセラレータ自分の存在は過ぎた楔だ。

彼の乗ったバンの後部座席。そこを改造した部分に積まれているモノを奪おうとする馬鹿など、いないだろう。

あと15分もすれば安全な保管場所へと到着し、それで仕事は終わりだ。

「自分もこうして一組織の長をやっているんですが、結構面倒な事ばかりで。わざわざ手間を掛けさせて申し訳ありませんね」

一方通行が考え事をしているのを知ってか知らずか、運転手はよく喋る。

自分よりは少し年上に見えるが、敬語を使うその男には注意の配り方や運転といった挙動に隙が無い。

風紀委員の筋の技術だろう、と適当に想像するが、彼の世間話はそ

れをわざとごまかしているのか低レベルなものばかり。

「――そして部下の失敗を押し付けられ、自分もこんな危険物を運ばされているという訳です」

「危険物………ねエ」

「？ 何か？」

視線を戻した一方通行に反応して、真深に被る帽子の下にある人好きのする笑みを運転手は浮かべる。

暗部の人間には少ない、高い対人能力の証を。

しかし、それよりも彼の服装が………厳密に言えばその匂いが一方通行の頭をよぎった。

使い古されたように見えるその作業服から、匂うのだ。

キツイ香水などでは無い。むしろその真逆。

（血と硝煙の匂い。何の思い入れがあって着てンのか知らねエが、この硝煙は………）

彼、一方通行はこの一週間で信じられない量の銃弾を扱っている。それは自分の為の訓練であったり、路地裏に巣食うクズ共のものであったりと様々だが、それは一つの知識となっていた。

（確かにさんざん浴びた硝煙の匂いだが、コイツは違う。簡単に出来る訳が無エ、俺の実験で扱われた“あの銃”専用の火薬の匂いだ）

トイソルジャー
オモチャの兵隊。

小柄なあ『妹達』のために存在するといっても過言ではない、専用の弾と薬莖を用いる、軽量、無反動のマシンガン。

その火薬特有の匂いが、何故こんな小組織の運転手風情から放たれているのか。

「何か、お気に召さないことでも？」

あからさまな嫌疑の表情に対しても、運転手の表情は揺らがない。尋問は仕事を終えた後に“プライベート”で聞くとしよう、と考えをまとめていた一方通行だが、その懷で携帯が鈍い音を立てた。

（土御門だと……………？）

任務中に奴が連絡をよこすとは珍しい、と、メールの画面を開いて、

「――ハッ、笑えねェ」

そんな言葉を、運転手は耳にすることができただろうか。

一方通行の取った行動は至極単純。

メールの文面を読み込むか否かのタイミングで首のチョーカーに手を伸ばし、チカラを取り戻す。

そして、その足でバンのダッシュボードを軽くノックした。

あらゆるベクトルを操作する、凶悪なまでの力で。

瞬間、ガギィ！！と奇妙な音を立て、一瞬前まで彼が座っていた助手席の分のパーツはアスファルトへ突き刺さる。

それはバンの動きを文字通り釘付けにし、運転手を慣性の法則でフロントガラスごと吹き飛ばしたのだ。

「何……を……!!」

器用にも、……あるいは何かの能力を使ったのか、数十メートル先からこちらを睨む運転手は傷を負っているようには見えない。

一方通行がその立場なら問答無用で攻撃していたであろうが、敬語はそのままに運転手は問いかける。

「何故こんなことを！幾らあなたという楔があっても、こんなことをすれば——」

「『パレード』」

「？」

一方通行が口にしたそれは、結標を襲った少年が口に使っていた言葉であり、結標が襲撃された旨を伝える土御門からのメールの文面にあった言葉。

そして……目の前の少年がリーダーを務める裏の組織の名前だった。

「コイツは何の冗談だ？俺のトコの女を襲撃した奴の名乗りと、テムエが率いる組織の名前が同じってのは」

「襲撃された？女？一体何を……」

「あア、質問を変える。お前、“何で積荷の中身知ってんだ”？」
「ッッ!？」

ここへ来て初めて表情を崩す相手を前に、道路を半壊したバンで占領しながら、一方通行の言葉は続く。

「普通、こんな下部組織に中身の話はしねエ。それが核だろオが、有毒のウィルスだろオがお構い無しだ。でも、テムエは言い切ったよなア。“こんな危険物を運ばされている”ってよオ」

「……………」

「他にも理由は有るンだが、まア良い。とりあえずテメエを――」

「あーあ、バレちゃったか……………」

「……？」

運転手だった男の表情が、変わった。
それは諦めとは程遠い、むしろ喜び。

「すくな梳那の奴、喋りやがったな。…………いや、僕も自分の性に合わないことは重々承知してたんだし。この方がかえってやりやすいか」
「あア？オカシくなりやがったかア？」

「心外だなあ。僕はこの為にこんな危険を侵したっていうのに」

帽子を取り払い、その下にあるスポーツ刈りさながらに短い黒髪を
顕わにしながら、宣言した。

目の前に存在する、学園都市第一位の超能力者に向けて。

「『パレード』のリーダー、はしばやまと羽柴大和だ。君を足止めさせてもらう
よ」

その言葉と同時。

彼、羽柴大和はその懷からマグナム程もある大型の白い拳銃を二挺、
引き抜き、そして武道の演舞のように構えた。

傍目には美しい、極めて流麗な所作。しかし、いかに見た目が優れ

ていようと結局は…………

「ハッ、フザけてンのか。二挺拳銃を本気で出すなンぞ、マンガの読み過ぎだろオが」

二挺の拳銃は確かに、見た目には派手だ。

しかし、両の腕を塞がれることを埋め合わせられる程の正確さも、状況に応じる柔軟さも、連射による攻撃力も、有してはいない。

サブマシンガンでも持ち歩いた方が、少しでも建設的だ。

それが、銃機を使うことをこの一週間で覚えた一方通行の結論でもあった。

能力は発動している。このまま烈風を叩きつければ、羽柴大和は成す術無く倒れ伏すだろう。

そして、彼はそれを実行に移した。一切の慈悲も、猶余も与えずに。バオオオ！！と。竜巻きを横薙ぎにした形のそれはアスファルトを難無くはがし、辺りを土煙で覆う。

人が抗うことなど、できるはずもない。

——しかし。風の音とは思えない轟音の中から、声がした。

「“雑”だね。確かに風圧も速度も人をひれ伏させるには充分だけど、穴だらけだ」

「ッ！？」

声だけでは無い。

本職の風力使いには及ばないな、と。

粉塵が立ち込める中から、何事も無かったかのように、彼は、羽柴大和は歩いてくる。

「デメエ……………何を……………」

「最初に言っておくよ。僕の能力はレベル2止まりだ。だけど、そ

れゆえに、君を止められる」

驚愕を隠せない一方通行を前に、大和はその左手にある、白いプラスチックにすら見える二挺拳銃を構える。

それは、こちらを狙い撃つ構えというよりは、

「突っ立ってるなよ、レベル5!!」

そう思考した刹那。爆発する程の踏み込みで、羽柴大和は数十メートルはあった一方通行との距離をゼロにした。

一方通行の銃弾もかわすスピードだが、その程度で一方通行は驚かない。

むしろ、彼の左手の軌道。

目の前にかざされる白い銃身の下部には、鈍い輝きの硬質なものがあった。……打撃用に改造された、ジュラルミンのコーティングだ。

（まさか、本気で——）

バガンッ!! と。

真上から叩き込まれたそれに、彼の脳が衝撃を受けた。

「ツツッ!?!」

華奢な体の脳天を捉えられ、ぐらりと視界が揺れる。反射の膜を、いとも簡単に突き破った一撃によって。

反撃の余裕を羽柴は与えず、今度は右の銃口を使って顎を正確に打ち上げる。

舌を噛まなかったのは幸いだが、銃を放り投げて仰向けに倒れる自分を止めることができない。

しかし、彼は一種の確信をもってこの現象を理解していた。

ベクトルを反射する膜を突き破り、打撃を加えるこの方法。

あの泥水の中で。汚い床で。さんざん浴びたあの痛みを。

（コイツ………木原の野郎と同じ………！）

あの無能力者のような理解不能な力とも違う。チャフやジャミングのような技術とも違う。これは、アナログなテクニクによるものだ。

——ならば、手はある。

右の手に掴まれていたアスファルトにベクトルを集中させ、バキバキとヒビを入れて無数の破片へと形を変えさせる。

それら全てを用いた飛び道具で、圧倒する為に。

彼の周囲の中空に浮く破片達の異様さにも構わず、羽柴大和は突撃して来る。

とりあえず、無防備なその眉間にアスファルトの弾をブチ込んでやろうとして、

ドパンツッ！と。

二挺拳銃の右の銃口から放たれた弾丸で、破片達が撃ち碎かれた。

「ッ!？」

破片といってもほとんど銃弾に近い大きさで、彼のベクトル操作の下で荒れ狂うそれを、普通の、しかも二挺拳銃で。

例えるなら、竜巻に翻弄される木の葉を正確に打ち抜くような大道芸だ。人間の技では無い。それを目の当たりにして、驚きに硬直する一方通行の右のこめかみに正確な打撃を加えて薙ぎ倒し、そこに足で連撃を加えながら、羽柴大和はその口を開いた。

「ハッ。僕もこんな良いモノを唯のトンファー代わりにはしないさ。僕だから最大に扱える武装なんだし」

軽い金属音と共に数個の葉莢が地面にばらまかれる中、一方通行の体の芯は完全に揺らがされ、まともに立ち上がることすらできない。あの無能力者よりも重く、木原数多よりも正確な一撃一撃が、彼の全身に突き刺さっていく。

「ぐ……っ………」

「レベル2にボッコボコにされる気分はどうだい？ 一方通行」

「ナメてんじゃ……無エぞ、クスガァ………」

「ふうん。まだそんなことを言うんだ。………じゃあ、寝てろ」

勝敗を決したのは、鈍い打撃の音一つ。

どさり、と。

糸を失った人形のように、一方通行の四肢はアスファルトに投げ出された。

もはや最低限の反射すらできないレベル5を視界から遠ざけ、羽柴大和はバンへと戻る。

幸いにも、後部座席の荷物に損傷は無いようだ。

「まあ、損傷してたらここらへん全壊してるよね……………」

後ろのハッチを開け、トランクケースの中を確認する。

そこにあるものが、彼ら、『パレード』の目的。

銃弾のサイズに縮小された、中が真空のシリンダー。

その中に、電磁石によって浮くモノ。

——アンチマター反物質。

（兄貴、今回は僕が勝つよ？）

e p, 3 今回は僕が勝つよ（後書き）

いかがでしたか？

今章も本筋に入り、超能力バトル全開でお送りします！！

感想など、お待ちしております。

e p. 4 フザけた真似は（前書き）

お久しぶりです。

諸事情により、2週間も更新が途絶えてしまいました……
ようやく投稿できました！！

今回は、綴も事件へと足を踏み入れています。

e p. 4 フザけた真似は

風紀委員の仕事は、本来は地味なものばかりだ。
ジャッジメント

警備員のようにあからさまな警察行為に出ることは少なく、
アンチスキル
のサポートに徹する。そういう意味では初春飾利が本来の姿で、白井黒子の方は異端中の異端、といったところだろう。

そんな、ありふれた仕事がまた一つ。

「能力の使用が原因と思われる交通事故………ねえ」

「夜来先輩、もうすぐ現場ですわ。警告用テープの用意を」

「あ、ああ、了解」

白井黒子と連れ立って虚空を渡りながら、綴は思う。

(やっぱり、匂うなあ………)

先程、事件を終えた後の休憩中に飛び込んで来た指令。

とある場所で発生した事故の交通整理に当たれ、という内容のものなのだが、綴の思考は別の所に向かっていた。

内容が無駄に硬い文章だったり、どうにも杓子定規だったり。ありきたりに言えば——何かを、隠しているような。

時々、こういうモノが交じることを綴は感じ取っていた。

そしてそれが、彼の求める場所への手掛かりでもあることを。

この街の、闇の片鱗を。

しかし、今は。

「——聞いていらっしやいますの？夜来先輩」

「ん、ああ。この場所で道路封鎖しておけばいいんだろう？」

ではお願いしますの、と言うか否か、白井の姿はかき消える。

この通りを、許可が出るまで封鎖するのが彼の今の仕事だ。

一方の白井は、その能力であちこちを行き来するのが役割といったところだろう。

良く働く奴だなあ、と真面目に感心する一方で、綴の五感は遠くから立ち昇る黒煙に向いていた。

どうにもただの事故に収まらず、能力者による戦闘行為も行われたらしい。

となると、綴は確かめずにはられない。

「あの研究者」が絡んでいる可能性も……ゼロじゃ、無い」

幸いにもこの付近の人間は避難誘導に従って消えている。

白井には済まないが、ここを自分が離れてもそこまでの支障は無いはずだ。

黄色と黒のオーソドックスなテープで道路を封鎖すると、彼は駆け出した。

（事故の正確な現場は分かんないけど、あの煙を追えば……）

そう思い、最短距離を縫って路地裏へと飛び込んでいく綴。

その一瞬には、特別な思考など混ざっていない。

しかし。幸か不幸か、この道は隣の路地を通る一方通行との接触を避けるものだった。

——そして、“もう一方”との接触を避けられない道でもあった。

数十メートルは進んだだろうか。

黒煙の位置をビルに遮られ、ほぼ手探りで路地を進む綴。
その視線の先、灰色の角の向こうから、声がした。

「ああ、目的は無事達成したよ。傷一つなく届けられそうだ」
(この人は……?)

電話を使っているらしいその声は、静寂の路地裏にひどく響く。

そして、反響を差し引いたとしても、綴が先程聞いたもの……羽
柴大義のものと酷く似通っていた。

相手を確かめもせずに姿を現そうとした綴。

しかしその瞬間、耳に飛び込んで来たのは、

「一方通行? ああ、始末しようと思ったなら逃げられた」
「ツツ!」
アクセラレータ

彼が、短時間とはいえ綴が直に顔を見た羽柴大義には、似ても似つかない言葉達。

そして、一方通行という単語。その意味を十分に知っている綴だからこそ、余計なまでの怖気が走る。

(それを……始末する?)

しかし、事情を理解して“しまった”時には、既に遅かった。

彼が、この街の奥の奥、深い闇の住人であることを悟った瞬間には。

「ああ、だからそれは謝るって。それよりもまず……鼠を一匹、

狩らないと」

「!!!!」

言葉が終わり、綴の表情に驚愕が映るか否か、ジャカン、と無機質な音が耳に響く。

(気付かれ——ッッ!!)

綴の脳内でその言葉が完成するよりも早く、それは来た。ゴバツツ!! と。

彼と綴との間には、コンクリート建築の壁。直線的な厚さにして3メートルはあったであろうそれが、見る影も無く砕け散ったのだ。とっさに回避していなければ、綴の体はコンクリート片と共にミキサーに掛けられていただろう。

それほど、威力。

圧倒する、殺意。

「やっべ、ちょっと威力強すぎたか。でも生きてるってことは、ただの風紀委員じゃ無さそうだね。ひょっとして兄貴の差し金?……:んな馬鹿なことする奴じゃ無い、か」

煙たそうに歩く靴音から、じりじりと下がる綴。

本来ならここで無様に逃げ回る選択肢しか彼には無かった筈だが、何故かそうする気にはなれなかった。

聞けば聞く程、あまりに羽柴大義と似ていて、しかし、決定的に中身が違う声に、釘付けにされたかのように。

——その姿を確かめたいという欲求を、綴は抑えられなかった。

「それにしても『H S』の冠は伊達じゃないな。コンクリートがこ
うも簡単に破れるとは」

綴の思いに応じるかのタイミングで粉塵の幕を切って現れた、作業
服の男。

その顔を彼が見せた瞬間、気付けば綴は言葉にしていた。

「羽柴……………先輩？」

あまりに善人だった風紀委員の長と、あまりに真逆。

獣のような敵意をムキ出しにする、“彼と同じ顔”を持つ男を前に。

「はあ、やっぱり兄貴の知り合いか。けど、言っておくよ。僕は――」

――」

“兄貴に間違われるのが、この世で2番目に嫌いなんだ”という言葉
葉を、綴は聞くことができなかった。

「よう、派手にやられたじゃないか」

部屋に入って土御門からいきなり浴びせられた言葉が、それだった。露骨に舌打ちをする一方通行だが、その体は見た目以上にボロボロだ。

残っていた能力使用可能時間を使い果たしそうになりながら、何とかこの空きテナントまで辿り着いた彼は、土御門の言葉を見殺しに空いているソファに腰を降ろした。

結標は襲撃を受けたとのことだったが、グループの行動に支障が出るようなら上から別の人間が回されるだろう。

そして、今最も追うべき事象へ一方的な質問をぶつける。

内容は当然、あの男、そして『パレード』のことだ。

しかし、それを先読みしていたであろう土御門の口から出たのは、

「悪いが、こちらには相手の情報が数える程しか無い。それどころか、お前があんたの車に同乗していたせいで、俺達にまで反逆の容疑が掛けられている始末なんだよ」

「あア!? 何の冗談だア? あんたのクソ共への増援を依頼したのは上なンじゃア無エのかよオ!」

任務を果たしていたはずが、いつの間にか反逆者にさせられそうになっている。ありえないこの状況に苛立ちを隠そうともしない一方通行だが、土御門はサングラスの下、瞳に皮肉な笑みを浮かべて応じた。

自嘲にも似たそれは、続く言葉と相まって不気味さを増す。

「電話の奴いわく、俺達には“そんな仕事は回していない” そうだ。確かに、別の組織をサポートしろという今回の仕事は妙だったが……まさか、ここまで完璧にハマれるとはな」

「抜け抜けと言いやがる。テメエ、今の状況解ってンのかア?」

「ああ。その代わりと言うのも何だが、どうにか引き出せた情報の一部として、敵の名は『パレード』。確かにその名の組織は暗部に

存在するようだが、どうにも“変”なんだよ」

「？」

土御門を以てして“変”と言わしめるとは、その『パレード』とやらの何が、そこまで。

海原は武器であるらしい黒光りするナイフを磨きながら、一方通行は自身の命綱であるチョーカーを充電させながら、その言葉を聞く。

「構成する能力者の名前も、能力も、他の組織のように明らかにできない。こちらの信用が地に堕ちていることを差し引いても、何らかの情報操作が行われているのは確実だな。ただ、リーダーはレベル2である、という情報を……どこか、誇示するように残してあった」

「情報操作、ですか。上をも煙に巻くようなレベルのそれとなると、やはり『パレード』には情報を操作する能力を有する者がいるのでしょうかね」

『パレード』のリーダーで、レベル2。

あのスカしてムカつく作業着の男は、確かにそう言った。

……どうやら、敵の姿は掴みかけている。

（否、掴まされてるって線の方が強エな。上からの情報までを操作できる連中がこちらの有利になるよオな情報を与える訳が無エ。それに……あの戦闘力は一体……）

「で？ まさか情報はそれだけだなんて言う気じゃア無エだろオな？」

「次をそう急かすな。まあ、この情報には一つの補足が必要なんだが……一方通行、お前の護衛の“始点”はどこだ？」

「あア？ 『粒子加速科学研究所』だが………」

一方通行の言葉を受け、俯き加減に返す土御門の口から告げられたのは、科学におけるとある危険物質。

爆発物、と形容することすら危険すぎる、その名は。

「アンチマター
反物質」

「ッッ！」

「知っているだろう？理論上は存在する、この世界に存在する物質と真逆の……いや、対になる物質だ。僅か1グラムの対消滅によって広島核爆弾を超える莫大なエネルギーを生む、特級の危険物だな」

「あア、確か、どっかの粒子加速機で、対消滅のエネルギーを利用して宇宙船の推進力用に開発が進んでたはずじゃ無かったかア？」

「いや、その計画自体は費用対効果がアンバランス過ぎて潰れたよ。製造する為のコストが採算を取れなかったらしい」

問題は、と前置きする土御門の眼が光る。

「9mm弾サイズの反物質保管用ケース、4つ。そして幾つかの先端武装が『粒子加速科学研究所』から消えていることだ」

「……ッッ」

「それ自体を対消滅させるなら、ただの爆発物と性能は変わらない。しかも、スペック通りに内臓された質量の対消滅が発生した場合、学園都市の半分を巻き込む規模の破壊が発生する。……何の着火装置も、時限装置も必要無く」

これまでの情報が何を意味するのか、この街の闇をさんざん見てきた一方通行に解らない訳が無い。

爆破テロだ。しかも、ビルや車といった小規模なそれではない。一歩間違えば学園都市の全てが無に帰す程の。

加えて、今の『グループ』の戦力は半分以上に削ぎ落されている。これまでの任務において、『グループ』の有利を導いて来たのは一方通行（レベル5）や座標移動という物理的な力だけでは無い。ムーヴポイント学園都市という地位も、力も、情報の網も。いずれが欠けても、彼らは護るもののために戦うことすら許されない。無力な権力者にも、力を振りかざす無法者にも、そんなことは許されないのだ。

——だから。

「フザけた真似は、もオ終わらせる」

e p. 4 フザけた真似は（後書き）

いかがでしたか？

一方通行を倒した能力者の正体や、『パレード』の目的も徐々に明らかになっていくので、お楽しみに。

感想、批評など、いつでもお待ちしております！

e p. 5 勘違いをしている(前書き)

ス！ラ！ン！プ！

ここまで何も出てこない日々が続くとは思いませんでした：\nですが、その分推敲を重ねることができました。

苦心の末の1話ですが、どうぞよろしく。
感想や批評などあれば、お待ちしております。

e p. 5 勘違いをしている

夜来綴の背後に、死が迫る。

少しでも追跡者との直線上に体を晒そうものなら、瞬間を置かずにそこは蜂の巣にされる。

ガトリングでも扱っているのかと思うほどの連射で、対暴走能力者の壁をも喰い破る弾丸が放たれるのだから。

相手が二挺拳銃であることを忘れそうになるほど、装填の速度も標準の正確さも常軌を逸している。

(くそッッ！)

みつともない姿でホコリまみれになりながら、路地から路地へ、それでも逃げまわる綴には抗う手段が無い。

彼には能力者に対して圧倒的な優位に立てる超能力——ダイアグラム演算代行があるというのに。

何故なら、

(俺の能力は、使えない……………)

綴の能力は、一対一の状況において使い勝手が悪い。

特に、こちらを殺すことにためらいを見せない飛び道具使いには最悪だ。

“幽体離脱に近い”。以前、嶺次にそう例えた綴の能力は、彼と対象との距離に応じて時間を要してしまう。

コンマ数秒、或いはそれ以下かもしれないが、確かなタイムラグが存在してしまうのだ。

だからこそ、白井の空間移動、固法の透視能力といったサポートがあつてこそ綴の能力は輝く。

そう。何かに依存して、寄生して、そこまでして生を受けているかのように。

こんな状況ですら他力での逃げ道を無意識に用意する自分が、心の底から嫌になる。

それは、背を叩くコンクリートの破片という明確な“死”の予兆よりも恐ろしく感じられた。

そんなものとは違い、どこまで行っても逃げられはしない自分^{パーソナル}だけの現実が囁くのだ。

誰かに助けを求めればいい。こんなことを自分でどうにかできると思っているのか。誰かに押しつけて、自分の命を最優先に考えろ。

（――駄目だ！ そんなことをすれば、無関係な人を巻き込むだけだ！）

自分でも驚く程、自分の打算的思考に嫌悪感を抱く綴。無理も無い。

こんな感覚は、以前は少しも感じなかったのだ。

誰かに依存し、寄生し、責任も苦痛も誰かに全て押しつけて生きてきた彼には。

誰かに必要とされ、頼られ、誰かと責任と苦痛を分かち合ったこの数ヶ月の変化を、冷静に理解することができなかった。

例えば固法美偉のように傍観する立場にあれば話は別だっただろうが。

「くそ……ッ!!」

訳も分からぬ苛立ちを抱え、綴は路地裏を走る。それとは別の領域で、綴はまた思っていた。彼の経験に裏打ちされた、冷静な側面が。

「確かに、このままじゃ逃げ切れない……」

そんな弱い思考をも読み切ったかのように、追跡者は軽い口調で言い放つ。

「もう、追いかけてこは終わりにしようよ。っていうか、これ以上進むと……表に出ちゃうよ?」

「ッ!!」

“これ以上、他の人間は巻き込めない”。

自分の中の誘惑をそうやって断ち切った直後にこの台詞だ。

心の隙を見事に突かれた綴の足は動揺を映して奇妙な態勢で止まり、つんのめったように転んでしまう。

そして生まれた数秒の間隔を逃がすような狙撃の腕を、追跡者はしていない。

ザン!! と。強い強い踏み込みの音と共に、気付けば綴の後頭部に鈍い金属の感覚があった。

常人ではありえないスピードに、追跡者の能力に見当を付ける綴だが、こんな状況で意味を為すとも思えない。

迫るのは、ただ、冷酷な死。

「兄貴の知り合いの風紀委員さんには申し訳無いけど、これ以上手間かけさせないでよ」

がちやり。

どこかSFじみた見た目をしていた二挺拳銃の片方が、無機質な音でその準備を終える。

「ま、頭を初撃で吹き飛ばすから痛みは無いよ。安心して――逝きな」

やるべきことも、なにもかも残したまま、自分の命はこんな理不尽で終わらされるのか。

自分の迂闊さを呪うことすら、この一瞬には許されないだろう。

ただ浮かんだ言葉は、彼にとって大切な……大切“だった”人の名前。

(……………ごめん)

引き金に掛かる軽い音をゼロ距離で聞いて、

夜来綴の意識は、数秒経っても途切れなかった。

理由は、灰色の地面と向き合っている綴には分からない。向こうから歩み寄る何者かの、革靴の足音が聞こえるだけだ。

しかし、銃口を突きつけている追跡者にはそれが見える。

あれほど饒舌だった彼が言葉に詰まるほどの相手が。

「何で……アンタが………」

憎しみに満ちた言葉と共に、動揺を映した銃口が震える。

「兄貴が、何で此処にいるんだ……!!」

思わず足を下げる追跡者に向けて、何者かは呼びかける。
その名を。綴の知る人間と一文字しか違わない名を。

「久しぶりだね。俺の双子の弟……やまと大和」
（双子の……弟？）

「一番言われたくない言葉を……何でこうもあつさり言い放つかな
あ……兄貴!」

銃口の軋から解き放たれ、顔を上げた綴の前にいたのは、

「羽柴、先輩……」

レベル5にして風紀委員長、ジャッジメントリーダー羽柴大義。
はしばたいぎ

しかし、綴にはその様子が奇妙にも見えた。

彼とのやりとりは長い訳では無い。表情から伺える感情の機微など、
解る訳も無い。

もっと見た目で——そう、彼の左腕に、

（風紀委員の腕章が……無い？）

たったそれだけのことが。

目に見える変化としては些細なことだというのに、綴にはそれがど

うしようもない不安の材料にしか思えなかった。

（何か、変だ……）

おびえる追跡者の弟と、それを威圧する風紀委員の兄。
綴には、その威圧がどうしても……

「何をグダグダやってんの、大和」

それを、真上からの黒き何かが遮った。

舞い降りたのは、拘束服に身を包んだ黒髪の男。

凶暴な囚人を戒める為のそれにも似た、黒い革のバンドで全身を包んだ小柄な少年。

異形の存在にしか見えない彼の容姿だが、羽柴大和はどこか安堵の表情で以て迎えた。

「梳那……」
すくな

「お前が兄貴に、羽柴大義に苦手意識を持ってるのは知ってるけどさ、いくらなんでも躊躇いすぎだろ。面倒だから僕が殺る」

「待て！ 兄貴は——」

肩に手を掛け、梳那と呼ばれた男を制する羽柴大和。
しかし、

「いいから退いてろ。僕もいい加減飽きてきた」

ゴバァー！！ という爆音を響かせるか否か、羽柴大和の姿が掻き消える。

その理由は、空間移動等では無い。もっと物理的で原始的な、力。

（何だよ………それ）

羽柴大和の姿を消したのは、梳那の腕力だったのだ。

一見ひ弱な少年だった彼のシルエットが、一瞬で変化した。

彼を戒める為と思われるいた拘束服を、数倍にも膨れ上がった筋肉で、内から引き裂いて。

もはや原型を留めない彼の姿。それを見て怯む綴とは対称的に、羽柴大義は髪を掻き上げて――薄く笑う。

「肉体強化の一種か……そんな剛力で仲間を簡単に吹き飛ばしていいのかい？」

「大丈夫だよ。着地できないほどアイツは運動音痴じゃないし、殺す意志も無いしね。……君たちとは違って」

羽柴大義と梳那の間に走る緊張。

その名を、綴は知っている。

（こんな、寧猛な殺意を……風紀委員の長が……？）

退くこともできず、綴はその対峙を見つめ続けるしかできない。

先に仕掛けたのは、梳那の方。

狭い裏路地を埋め尽くさんとする剛腕がエアコンの室外機や壁の一部をも巻き込んで迫る。

人間の、まして大義の細い体躯など無抵抗に砕く一撃。それを当然のようにバックステップで躲す大義だが、

ぶちい、と。

「!？」

攻撃なら避けた。

異変が起きたのは彼の両足。

無数の小爆発が、彼の血肉を爆風代わりに吹き飛ばして発生したのだ。

着地に失敗して血痕を色濃く残しながら下がる大義だが、激痛に歪むはずのその表情を綴が伺うことはできない。

何故なら、

「隙あり。終わったね、レベル5の第六位」

それを見越して振りかざされた梳那の左腕が、大義の肉体を覆い尽くして叩き潰したからだ。

(ツッ！)

結果を想像した綴が眼を逸らしてしまう程の轟音を前に、大義の採った行動はあまりに弱々しかった。

抵抗にしても無意味な、ドアをノックするように軽い動作で迫る左腕を突く。

しかし、

バガン！！！！！！

大柄な大人の胴体ほどもある梳那の腕が、強い衝撃に弾かれたのだ。内から連鎖して爆発するような衝撃に。

鈍い、おそらく関節が外れた音を響かせて梳那は距離をとる。

当然だろう。あまりに不可解なこの攻撃への怯えは一種の本能とも言える。

しかし綴には、一種の予測が付いた。先ほどのスキルアウト殲滅も、今の一撃も、キーワードは“繰り返し”だと。

「そうか。君の能力は、オーバーロード自他問わない人間の身体機能を向上させるものだ。名づけるなら過剰作動といったところか？自身の強化や他人の自滅も自在……確かに強いけど、僕の前じゃね」

「何だってんだ……その能力……！ 最弱のレベル5のくせに……！！！！」

苦痛と、そして疑問に満ちた梳那の表情に大義は応じた。

「君は一つ勘違いをしている。この世界に生じる事象を理解して反復する……僕の能力を、その“程度”だと。その脅威を、理解できずに」

「まさか……今のは……」

「そう。拳の衝撃を数百回は反復した。さいせいさっきの血管の破裂だって、鎮痛ホルモンの分泌や細胞分裂を無数に反復すれば数秒で治る」

あれだけの傷を負いながら何事も無かったかのように立ち上がる大

義に、綴は安堵とは違う感情、それも真逆の感情を感じていた。

『戦慄』。風紀委員長という立場の彼には無い、圧倒的な力を前に。

「さあ、話してもらおうか。色々と」

e p. 6 今は何も無いけれど(前書き)

いよいよ、事態が急展開します！

四者四様の物語の交差を、お楽しみ下さい！

e p. 6 今は何も無いけれど

「山吹梳那が、やられた」
やまぶきすくな

重苦しく羽柴大和はしばやまとの言葉が響く此処は、暗部の小組織『パレード』のアジトの一つ。

地下鉄の駅にある“通用口”をぐり抜けた先にある、カラオケボックスを少し拡大したようなものだ。

そこには、4つのソファが用意してあった。――『パレード』の人数の分、丁度のソファが。

「……………そうか、羽柴大義に負けたんですね」

丁寧な口調で返すのは、フチの無い眼鏡を掛けた物腰柔らかな茶髪の青年。

それまで無心にキーボードと向き合っていた彼は動作を止め、大和と向き直る。

「未だ死んではないでしょうが……警備員に引き渡されたら最後ですね。私の“手口”も読まれてしまっている以上、もう通じませんし」

「だったら、私が出ればいいのよね。緑りくは“手足”を調達してくれば良いわ。梳那は……アタシが助けるから」

眼鏡の青年を緑りくと呼んだのは、黒地に白のフリルが付いた、ゴスロリ風の傘を室内にも関わらず広げている少女。

名を、紫道遥南しうどうはるな。

どこかの高校の制服にも見えるジャケットとチェックのスカートは、

彼女の広げる傘の雰囲気とはあまりに不釣り合いだ。

しかしその言葉は、軽薄な外見とは裏腹に決意と覚悟に満ちていた。誰かが欠けちゃ、意味ないものね。そう加えた彼女の言葉には。

（『グループ』、『アイテム』、『スクール』、それにアレイスタ
ー。アイツ達には笑われるだろうな。“お友達ごっこ”だと。だが
……俺達はこの方法で闘わなくちゃいけないんだ）

自分のことだけを考えるべき暗部の世界において、本来あるまじき
甘い考え。

しかし、羽柴大和を筆頭とする『パレード』の行動理念は——そ
れを貫き通すことだ。

「仲間を助きたい。友達を失いたくない。家族を護りたい。こんな
当たり前のことが笑われるのは、間違ってる。アレイスターだろう
が、統括理事会が相手だろうが……俺たちは、この街に目を醒まし
て欲しいんだ」

「そうですね。梳那を助けて、この街も助ける。その為に、私達は
こんな手段を取ったのですから」

「大和も縁も、何当たり前のこと言ってるの。痛めつけた結標淡希
とはいえ、残りの男たちは健在だし、『アイテム』も動くかも。…
……まあ、負けないけどね」

そう言う彼女の向かい、本来なら山吹梳那の座るソファには銀色の
アタッシュケースがある。中には、『粒子加速科学研究所』から強
奪した反物質アンチマターの入った9mm弾サイズのケースが四つ。

目的は、当然、無差別の爆破テロなどでは無い。

「行こう。この街を——救いに」

「巻き込んだじゃったか、夜来綴君……君は唯の風紀委員なのに。僕もまだまだだね」

戦闘の終わった路地裏。

そこには、気を失ったと同時に能力を解除され、細身に戻った梳那と呼ばれた少年が横たわっていた。

彼への質問——もとい尋問の様子は綴からは見えなかったが、苦痛の声を一切上げず、淡々と情報だけを告げる梳那の様子は奇妙さよりもおぞましさを彼に与えた。

（これも……何かの“反復”だっていうのか……？）

尋問を終え、こちらに向き直る羽柴大義。

柔和な表情を取り戻した彼の言葉は、今までの敵意をも打ち消して余りある。

「そうだよね、こんなに巻き込んで退いてくれってのも無理だよねえ。君の性格上」

「今のは、一体……」

「僕的能力も、現在の事情も、一気に説明するには時間がかかる。少し昔話を……しうか」

取り出した風紀委員長の腕章——自身の立場を明確にするもの——を身に着け、彼は語りだした。

「時間も猶予も無いけど、最低限の理由くらいは話さないかね」
「理由……」

警備員に梳那を引き渡して人目に付かない場所へ潜りこんだ彼らのやりとりは、重く紡がれる。

あまりに素直な告白に疑いの眼を向ける綴だが、

「僕の言葉が信用できない？ だったら、僕の信念——自分^{パーソナルリア}だけの現実^{リテ}を証拠にしてくれば良いよ。君の苦勞、傷を対価に、僕は君へ相応の情報を与えるつもりだ」

「それも、等価の交換ですか？」

「ああ」

それを皮切りにした彼ら兄弟の生い立ち、この街の黒さを、闇を思い知らされるものだった。

「僕たち兄弟は、双子の置き去りなんだよ。親の記憶なんて、とうに無い。残っているのは、双子の弟……大和との思い出だけだ」

「さっきの、先輩に似た奴が、弟」

「まあ、僕たちのいた施設はそれなりに良い所だったんだけど……やっぱりこの街は、置き去りには優しく無くてね。差し出された条件は、僕たち双子の人体実験だった。同じ条件の人間に同じ能力開発をして、条件を比べたいらなかった」

双子に、同じ条件で能力を開発させる。

確かに、超能力の開発に際する条件も未だ不明確なその理由を求め

るのなら、比較実験は科学者達にとって魅力的だろう。

でも、それが施設での条件となれば話は別だ。

一歩間違えばモルモットとして扱われる中、この人たちに選択肢があったはずがない。

「それでも僕たちは、レベル5への希望を抱いて同じ条件で同じ能力開発を受けた。それで、僕らが二人でレベル5になれば——良かったんだけど」

けど、現実には甘くなかった。

そう告げる羽柴大義の声色が、真逆のものになる。

「同じ条件で、同じ能力開発を受けたはずの僕らは……能力に、ここまでの差を植え付けられてしまった。当然だよ——大和が、僕を恨むのも」

追跡の最中に見せた、双子の兄にして風紀委員長である羽柴大義への恨み。血が繋がっているのに、否、繋がっているからこそ、あそこまでの憎悪が生まれるのだ。

血を分けた双子の兄弟が、同じ能力開発を受けた。

そしてその結果が……レベル5とレベル2という絶対的な壁だというのか。

偶然の結果と呼ぶには、あまりに残酷な事実。

すぐそばにいた兄が、この街での最高の地位を手にしようとしている。

対してレベル2止まりの自分は常に比べられ、貶められ、劣等感に苛まれる。そんな生活を、綴には想像もできない。

「コンプレックスに満ちた大和がその道を踏み外すのを、僕は止められなかった。僕が何を言っても無駄なことも、彼の意思を変えら

れないことも、僕は心のどこかで解っていたんだと思う。――だから、5年前、施設から脱走する大和に掛ける言葉すら、見つけれなかったんだ。それから、彼は行方をくらましたよ。少なくとも、“表”の世界からは」

「じゃあ、あなたが風紀委員長になった理由って……」

「おかしいかい？ たった一人の弟を見つけ出したいがために、こんなところまで上りつめるなんて」

「いえ、そんなことは――」

この人は、俺に似ている。同じようなものを失い、同じような目的のために生き、戦っている。

ただし、それは正反対の力だとも、綴は即座に思った。

さながら、鏡映しの虚像のように。

ジャッジメントリーダー

表の世界の光、それもレベル5と風紀委員長という絶対的なまでの光で、闇に堕ちた弟を照らそうとする羽柴大義。

ダイアグラム

裏の世界の力、それも演算代行という他人への寄生と憑依による力で、闇に巢食う相手をも喰らおうとする夜来綴。

絶対に交わりえないはずの二人だ。

そこに綴の思考が至った瞬間、脳裏に浮かんだのはとあるお人よしの顔。

無条件に人を信じ、一方的に信頼する、純粋な少年。

彼もまた、夜来とは正反対の存在ではないのか？

そして彼の存在が、ひどく自分には不釣り合いに思えた。

おぞましい、しかし絶対に成し遂げねばならない目的のために、自

分は彼を巻き込もうとしていた。

その事実には、寒気が走る。

それを何とも思っていなかった今までの自分自身には、もっと深い嫌悪が。

羽柴大義から表情を伺われるまで、思考の檻に閉じ込められるほど。

「そうだね。君に話せるのは、この程度が限界かな」

「この程度……って」

「そう。君の対価ではこれ以上“潜らせる”訳にはいかなくてね。じゃあ、僕は行くよ。動き出した大和なら、その痕跡を風紀委員の網に必ず残す。僕はそれを最大限扱うために、風紀委員長になったんだ」

「待って下さい！あなたは弟さんに、何て言うつもりなんですか！？せつかく顔を合わせても、今の彼はきつと憎しみに——」

「必要かい？言葉が」

「!？」

この期に及んでも打算的な思考が走り得ることに一種驚愕を覚えながらも放った引きとめの言葉は、大義による感情論に切って捨てられた。

「僕は弟を止めたい。言うべき言葉も、有効な対策も、今は何も無い。けれど——僕たちは、二人で一人だったんだ」

それ以上の理由が必要かい？

そう言って、羽柴大義は地面を軽くノックした。

次の刹那、彼の姿は消えうせる。

おそらく、地面への衝撃を“反復”したのだろう。

見せつけられたレベル5という絶対の壁の前に、綴は立ち尽くすしか無かった。

自分の中に渦を巻く後悔と嫌悪、そして――

e p. 6 今は何も無いけれど（後書き）

いかがでしたか？

次回は、夜来が更なる扉を開きます！

感想、批評などあれば、お待ちしております！

e p. 7 変わらなくちゃならない(前書き)

綴の扉が開きます。

その先に待つのは——！？

e p. 7 変わらなくちゃならない

現在、『グループ』として活動できる三人の男たち——アクセラレータ一方通行、土御門元春、海原光貴は第二十三学区の航空機ハンガーから発せられた警報の詳細を前に、しかめた表情を突き合わせていた。

「で？ 奴らの目的がこんな仲良しごっこだとしても言いたいのかア？」
「上層部からの信用を失墜した今、彼らの情報は“表”の任務の時に収集した情報しか無い。『絶対存在』エグジスタンス、『二進翻訳』トランスバイナリー、『過剰作動』オーバーワークという構成員のうち三名の能力……その程度だ。しかしこれを見れば、一つの違和感があるだろう？」

「二進翻訳」トランスバイナリー、つまり情報操作の能力者を有している『パレード』の連中は情報を自在に操作できるはずなのに、リーダーはレベル2という不利な条件をわざわざ示している……ということですね」

土御門の言葉を引き取って続ける海原には、彼の言いたいことが分かる。

つまり、彼らの仲間意識だ。

彼ら『パレード』が、『グループ』における一方通行、『アイテム』における原子崩し（メルトダウン）のように力量のある者の下に集まった組織ならば、こんなことはあり得ない。

この行為には、相応の理由があるはずだ。

例えば——何らかの個人的関係がそこにあるならば。

絆、友情、仲間。『暗部』に生きる彼らが真っ先に嘲笑いそうな事象が、そこにあるならば。

「コイツの行き先は、一つしか無いな」

彼らが見つめる先には、画面を赤く染める最厳重警戒体制の警報。

理由は――『H S A F H－11』、すなわち最新鋭の無人攻撃ヘリ『六枚羽』の無断出撃。

それも、外部からのクラッキングによるもの。

おそらく、『二進翻訳』^{トランスバイナリー}と呼ばれる能力者の仕業だろう。

人間の言語と、プログラムに用いられる二進法を相互に翻訳……つまり0と1の世界において最強を誇る彼ならば、訓練のためにハンガーのターミナルユニットに接続されていた『六枚羽』をハッキングすることも可能だろう。

「奴ら『パレード』が仲間意識の塊なら、コイツの救出に向かうはずだ。現在第七学区を輸送中の、『パレード』の構成員、^{やまぶきすくな}山吹梳那の元へ」

土御門が述べる結論は、それでも微かな可能性に過ぎない。だからこそ、一方通行は別の道を示した。

「この全員でそこへ向かうのは時間の無駄だ。俺は他を当たる」
「何かアテがあるのか……？」

土御門はそれに怪訝な表情で返すが、一方通行は獣じみた瞳を紅に光らせて応じた。

「あア、あんまり使いたく無エ網がなア」

彼は言葉と同時に、懐にあるPDF端末を確かめる。

そこには、数日前に殺したスキルアウトのリーダーの持つ情報網が全てインプットしてある。

チャチなロケット花火程度で警戒レベルが跳ね上がってしまうような警備網の隙間も、そこには当然記してある。

——ならば、『アンチマター反物質』のような危険物の効果的な配置位置も、読み解けるはずだ。

（さアて、殲滅戦と行きますかア？）

首を軽く捻りながら、一方通行はチョーカーの充電を終えた。蓄えられたバッテリーは、そして狂暴な獣を解き放つ。

知ってしまった、自分の黒さ。

見せつけられた、羽柴大義の光。

混乱の極致にある夜来綴の中には、これまでにない葛藤が渦巻いていた。

それは、自身を危険に晒してまで他人を救うべきなのか、という疑問。

（確かに、羽柴先輩の能力は凄い。俺みたいな薄い闇なんか一撃で打ち払いそうに、眩くて、強い。でも、違うんだ。この街の本当の闇は……あんなものじゃない）

彼は見ている。この街の上層部が望む姿と、それに伴う犠牲の数々を。

彼はその身に宿している。この街を統べるにふさわしい能力と、それを統括する自分だけの現実を。パーソナルリアリティ

——やらいしおり夜来栞。

実の姉というあまりに大きすぎる代償を失って、彼はその地に立っているから。

全てをそこに集約され、彼は生きる目的を持っている。だから、解る。分かってしまう。

（羽柴先輩は……闇に堕ちる）

どこまでも眩しい光も、どれだけ真っ直ぐな思いも、この街の闇の奥底には届かない。

光は闇に喰われ、思いは蜃気楼に歪められる世界。

そしてその住人である夜来綴は、羽柴大義の危うい目的を知ってなお、平然としていられる人間——だった。

そう。この夏、雪崎嶺次と出会うまでは。

あの少年と共に戦い、ぶっきらぼうに信頼され、その思いに応えていくうちに芽生えたのは、罪悪感と劣等感。

彼を最後まで騙し、利用して、自分の目的を達成するのなら。

そうまでして、やっと見つけた“糸”である彼と共にあらうとするのなら。

（俺は、変わらなくちゃならない！！）

否。

「俺は、変わるんだ！！！」

覚悟の咆哮が反響する灰色の路地裏を蹴って、彼は駆ける。

これ以上、自分のような人間を生み出さないために。

兄弟が憎しみあって、犠牲になるなんてことは、もううんざりだ。

（羽柴大和も、羽柴大義も、どちらにも、これ以上の血は流させない！）

目的の場所——羽柴大和の目的地は、彼の風紀委員という情報網では分らない。

ならば、彼の手を使うまで。

『演算代行』^{ダイアグラム}。

そのもう一つの側面を、彼は開放する。

——瞬間、一つのウィンドウが空間に光を穿った。

ともすれば他の事象に紛れてしまいうような、無数のウィンドウの一つに過ぎない小さな事象を報告するものとして。

しかし、それを見つめる“人間”は笑みすら浮かべていた。

（『演算代行』^{チェンジ}、反転が発動^{ウィズダム}。随分長らく発動しないと思えば、『知恵の枝』の一件以来か。待たせてくれた分の活躍は、期待して良いのだろうか）

巨大なビーカーにたゆたう彼の掌で、夜来綴が開いた扉。

その名は、演算代行、反転^{チェンジ}。

コネク
接続を幽体離脱と表現するのなら、この反転チェンジはこの街に漂うA I M
拡散力場“そのもの”へと接続する、いわば“意識の拡散”。

同時に無数の超能力者へと接続することで、彼らの五感をほんの少し拝借して周囲の状況や特定の人物の所在などを、衛星写真のような目線で捉えることができるものだ。もっとも、演算式を送り込んで多人数を同時に昏倒させるものではなく、綴の脳は収束される情報コネクの終点に過ぎない。

8月の終わり、『知恵の枝』ウイズダムの一件でこの街に侵入したロブスⅡマ
ーカーを正確に捕捉できたのは、この能力によるものだったのだ。
疲労と、広域に撒き散らされる意識の喪失への恐怖から綴も並大抵
では使用を避ける能力なのだが、今回は使った。

「予想よりも躊躇いが無かったな。……ふむ。『プラン』の短縮に
は少なからず影響しそうだが……ひとまずはこのショータイムを楽
しむとするか」

その先の“扉”の鍵を掌で転がしながら、この街の闇の体現者は動
じない。
すぐそこに迫る、とある危機を理解していながら。

「『パレード』の諸君には、もう少し頑張ってもらわないとな」

彼の目の前には、どこかの監視カメラの映像。

『パレード』のリーダーである羽柴大和が映っているそこは、この
ビルの真下、地下道のライフライントネルである。

強奪された『反物質』アンチマターの行き先と、彼の所在地。

この二点を結びつければ、嫌がおうにも自分の置かれている状況が
理解できるはずだ。
にも拘らず。

「もうすこし歯ごたえのある“悪役”でなければ、彼の覚醒には相応しく無いのだから」

アレキスター・クロウリーの言葉は、ビーカーに僅かな気泡を創るのみ。

e p. 7 変わらなくちゃならない（後書き）

次回、『グループ』対『パレード』の戦闘が勃発します!!

そこへ乱入する二人の能力者、その行方は？

今回も感想、批評など、受け付けています！

e p, 8 人の話は最後まで

羽柴大和達『パレード』の目的は、一つ。

学園都市統括理事長、アレイスターIIクロウリー。

彼が棲むと言われるこのビルを、『反物質』アンチマターで破壊することだ。

彼の殺害や統括理事会の全滅などは、その後の追加事象で構わない。まずは、このシンボルを破壊することだ。

彼ら自身には何の力も持っていないくせに、この街の上層部は人間を食い荒らしていく。

当然、金で力を買うような輩もいる。しかし、大半の人間の根拠の一つが、この得体の知れないビルだ。

カリキュレイト・フォートレス 衝撃拡散性複合素材との異名を持つ、文字通りの鉄壁。

『0930』事件の際には何らかの——おそらく一方通行によると思われる攻撃を受けたが、傷一つ付かなかった。では、どうすれば良いのか。

（答えは簡単。壁が強固なら、足元を狙えば良い。いかに未知の科学技術による建造物と言えど、この地球上に存在する限り重力の制約は受けているのだから）

彼は今、ビルの最も近くを通るライフラインのトンネル内にいた。

地層ごと変える威力を持った『反物質』を爆破させるには、最も効果のある場所だ。

僅か1グラムの対消滅で広島の核爆弾に相当する、『反物質』アンチマター。それが5グラムも内蔵されたケースが、彼の懐には三つあった。

このケースの仕組みは簡単で、真空となっている中に電磁石によって『反物質』は浮遊しているだけ、という簡素なものだ。

当然、電磁石が効果を失えば、『物質』であるケースの内壁に触れた『反物質』は対消滅を起こす。

彼の見立てによる、この建物の倒壊に最も効果的な場所とタイミングで。

そして、羽柴大和の懐には、電磁石のバッテリーをオフにするリモコンがある。

本来なら外部からの影響を受けない仕組みの筈だが、『パレード』にはそんな不可能を簡単に可能にしてしまう能力者がいるのだ。

（さて……緑^{りく}や遙南^{はるな}、梳那^{すくな}にも感謝しないとな。もうすぐ、計画は結実する）

仲間への感謝を頭の中で唱える内に、設置は完了した。
あとはこの場を離れ、ケースの電磁石をオフにするだけ。

——しかし、そんな彼をこの闇は逃がさない。

「おやア？何だよ一発目でヒットかよ。アイツらとテメエは、どオ
やら同じレベルみたいだぜエ？」

「!？」

薄暗い、最低限の蛍光灯しか無い空間。

幅1メートルの作業用欄干の下にはライフラインのパイプが脈動して
おり、人が忍ぶ空間などありはしない。
にも関わらず、トンネルに響く声。

（この声……まさか!!）

その出所を見極めた大和が上を向いた瞬間、何メートルもあるコンクリートとアスファルトの壁を粘土のように突き破って白い獣が突き刺さってきた。

突然こじ開けられた天井から刺す光と土煙の中、赤に染まった双眸は正確に大和を捉えている。

「何でここにいるかなあ……一方通行!!」

「コイツは笑えねエなア。テメエみてエな能力者の反逆者と、スキルアウトごときが考えることが同じレベルとはよオ」

もはや互いに、会話の意思は無い。

ただ、牙を見せて吼え合う獣のように互いに敵意をぶつけあう。

「せっかく逃がしておいてあげたのに……」

「レベル2のお遊びなンざ、付き合ってる暇は無エンだよオ!!」

「もう一回、痛い目見させてやるか?」

激烈な踏み込みと、球状の衝撃。

目で追えるか否かのそれは、既に瓦礫と化していたライフライン——都市ガスに引火し、紅蓮の火柱を突き上げた。

その光景を遠目に見ながら、『グループ』の別動隊、土御門と海原は『警備員』^{アンチスキル}の車両をタクシーに見せかけた暗部の車両で追跡していた。

地下道と高架橋の入り組むバイパス道は、彼らの尾行に適している。

……当然、“もう一方”にも。
目前の車両では、『ジャッジメントライダー風紀委員長』に拘束されたと伝えられる『パレ
ード』のメンバー、やまぶきすくな山吹梳那が護送されていた。
そして、彼ら警備員は知らない。彼らを追うもう一つの勢力は、と
てもとても暴力的だということを。

「――来るぞ」

「ええ」

ゴバツツッ!!! と。

突如、車両の頭上の高架橋が砕け散った。

コンクリート片や車の残骸が雨のように降り注ぎ、車両の道を封じ
る。

犯罪者の護送用だったのが仇になったか、大型の車両は完全に身動
きできない。

そこに響き渡る、空を切るローターの音。

H S A F H - 1 1。通称、『六枚羽』。『パレード』によってハッ
クされた、最悪の殺戮ヘリのものだ。

「出やがった! 海原!!!」

最新鋭の回避プログラムや防御機構を搭載したあのヘリを物理的に
叩き落とすのは難しい。

ならば、魔術的に壊すまでだ。

いかなる強敵も一撃で仕留める、『トラウイスカルパンテクウトリ
の槍』で。

「分かっています!」

崩落しそうなトンネルをくぐり抜けた海原の体を捉えた『六枚羽』

は、照準の一つを彼に向ける。
しかし、海原の方が早い。

自身の巻き起こす風で粉塵を打ち払ってしまった『六枚羽』は、金星の光を用いる海原の術式の格好の的となる。

垣間見える空と、黒曜石の槍、そして『六枚羽』の位置を確認した海原は呪を紡ぐ。そして、

——対象は、分解されない。

「何……!？」

海原の驚愕が土御門に伝わるより早く、辺りに響いたのは少女の笑い声。

「よかったー。『グループ』のイケメン君は得体の知れない能力を使うって聞いてたから、私の力が効くのか疑問だったんだよね」

「貴女は……『パレード』の構成員!」

土煙の中から現れたのは、この惨状にひどく不釣り合いな装飾の傘を携えた少女。

緊張感の無い、子供に言っただけ聞かせるようなそれは、破壊と炎上の中に何故か通る。

「情報も筒抜け? なあんだ。折角『グループ』の信用を失墜させる策を弄したのに、全部無駄って訳かー。だったら無駄な——」

しかし、彼女の言葉は唐突な銃撃に中断される。

その源は、海原から数瞬遅れて崩落した場所に到達した土御門だった。

海原との会話に気を取られていた少女めがけ、寸分の狂い無く彼の弾丸は突き刺さる。

不意打ちを食らい、仰向けに倒れた少女を見遣りながら海原との距離を縮める土御門。

その目には、既に打ち倒した少女よりも漆黒のへりが映っていた。

「何をしている。下らないやり取りなんか時間を消費する場合か！ さっさと――」

危機感に満ちる彼の言葉が途絶えた理由は簡単。

そんな土御門の意識の端で、銃弾に倒れたはずの少女が立ち上がったからだ。

「ッ!？」

傷一つ無いジャケットを払いながら、“何事も無かったかの”ように。

「人の話は最後まで聞かなきゃ駄目。私の能力、甘くなんか見ないよね」

銃弾を受けたジャケットやチェックのスカートを、焦げ痕一つ無いそれらを見せびらかしながら、少女は名乗る。

とっておきの服を、傘を、能力を、自慢するように。

「私の名前は、紫道遥南^{しどうはるな}。能力名は『絶対存在^{エグゼスタンス}』。これなら、イケメン君みたいな異能も、グラサン君みたいな銃弾も、無効でしょ？」
「絶対存在……！！！」

『グループ』の情報網の中にあつた、その能力名。

それが持つ特性と難度を理解した土御門と海原が歯噛みする中、今度は男の声が響く。

『あまり遊ばないください、お嬢様。時間ありませんし』
「ケチなこと言わないでよ、緑^{りく}。もう展開は済んでるんだし、少しくらい良いじゃない」

『確かに、手際の良さは認めますけど……』

紫道を戒める声の主を探す二人だが、そこに居るのは人ではない。
猛烈な風切り音の中にある、ノイズ混じりだが確かな声。

「そうか……『六枚羽』のスピーカーとカメラを利用して、こちらの状況をも把握しているのか」

「あらあら。緑の能力もご承知の通りみたいだよ？」

『構いません。私の“手足”は既に構築された以上、あとは梳那を引っ張り出すだけですから』

スピーカーから交わされる言葉の行き先は、『グループ』の二人をとうに追い抜いて『警備員』の車両に向かうものだった。

それを、土御門の言葉は引き戻す。

「あまり舐めた真似をしてくれるなよ。こちらとお前達で、立場にどれほどの違いが生じているか理解できないほど愚かではないだろ

う？」

「ふうん。じゃあ、『グループ』のお二人はどんな抵抗を見せてくれるのかな？」

『連中に反撃を期待してどうします。一気に……仕留めますよ』

スピーカーからの声色が変わったことを、土御門と海原は認識できなかった。

それはむしろ、“面”の制圧だったのだから。

大口径のガトリング掃射から、衝撃拡散が目的のミサイル、指向性高周波による電子機器の損壊まで。

フル装備の米軍海兵隊の小隊一つを壊滅させられる攻撃を、『六枚羽』は躊躇無く撃ち放つ。

「――ッ!!??」

土御門と海原の五感を奪う、文字通りの制圧。

圧倒的な過殺を自身の回避と魔術で防ぐ土御門には、もはや猶予がない。

しかし、この状況を冷静に見つめていた闖入者の存在がそこにはあった。

普通の警備員には近寄ることすらできない、非現実的な世界の戦闘でも。

(これは……まさか……)

“ とある人間 ” の存在を感知してしまった、夜来綴。

e p, 8 人の話は最後まで（後書き）

幕を開けてしまった、『グループ』対『パレード』の戦い。

夜来綴と羽柴大義という乱入者により、事態は混迷を極めていきま
す…！

次回は、綴の奮闘にご期待ください！

それでは、感想、批評など、お待ちしております。

e p. 9 生きることだけを（前書き）

綴の参戦は、いかなる影響を及ぼすのか……！？

e p. 9 生きることだけを

『絶対存在』^{エグゼスタンス}。

何があるうと、“物体の存在を維持”する。……つまり、あらゆる物体を絶対の壁に変換する能力である。

ジャンルとしては、ベクトル変換。

能力を付加された物体に伝わるあらゆるベクトルを四散、無効化してしまう能力だ。

いかに巨大な物理的エネルギーにも、熱量にも、揺らがないう壁がそこに構築される。

少女が纏うジャケットやスカート、タイツや傘に留まらず、おそらくは『六枚羽』にも力を付加してあるのだろう。

彼女が金髪男からの銃弾を受けても傷一つ負わなかったのは、その服が、傘が、何者をも寄せ付けぬ絶対の防壁と化していたからだ。

——そんな情報を彼女の演算のパターンから得た綴は、圧倒する一人と一機、それを辛うじて躲し続ける二人、その戦闘を見つめていた。

理由は、彼らの戦闘から僅かに逸れた場所にある警備員の車両だ。綴の目の前に降ってきた、あの『過剰労働』^{オーバーロード}の少年。

彼の存在をそこに感知した綴は、その車両を巡って戦っている彼らの様子を伺うという選択肢を取ってしまった。

（あの少年を狙っての戦いなら、きっと攻撃を仕掛けている少女の方が羽柴大和との関係者……）

相手をしているのが金髪のグラサン男と、茶髪にジャケットの優男では確信に欠けるが、大型車両の脇で打ちのめされている警備員の

男を見た瞬間、彼の行動方針は決まった。

夜来綴の行動は一つ。

これ以上、無駄な血は流させない。

（自分から首を突っ込んだ以上、どうにか収めなきゃ——）

バイパスから距離はある、路地裏の死角。壁にもたれたまま腰を下ろし、夜来はその能力を発現する。

「アイツに会わせる顔がないよなあ……！！！」

苦笑いを浮かべる口の中で唱えるは、この街の能力者に対しての『切り札』。

「——演算代行、接続」

崩れ落ち、意識を空へ飛ばした綴がまず無力化するのは……

黒雨と硝煙に煙る中、今にも消えそうな海原達の命の灯。
そんな状況でも彼らの思考は状況の打開を目指していた。

（紫道遥南。彼女の能力が情報の通りなら、この場に現れる必要はありません。それをあえて現す、理由があるはず……）

彼の眼前、『六枚羽』を従者のように従える彼女の姿。

そこに、一つのヒントを得た。

（まさか、彼女と一定距離内のものでなければ能力の制御下に置けないのでは……？　ならば、危険な戦場に彼女がわざわざやってきた理由も説明が付きます。あとは、土御門さん次第ですが……）

海原が土御門にその旨を伝え、彼女を物理的に引き離そうとした瞬間、異変が起こった。

ごとん、と。

常に笑みを振りまいていた紫道の表情が苦悶に歪む間も、無かった。文字通りに糸の切れた人形の様に、彼女は倒れ伏したのだ。

派手な装飾の傘に隠れて表情は伺えないが、どこから銃撃された様子はない。

何らかの能力者による攻撃か、と思うが否か、次の変化が起きる。

「が……っ!？」

土御門までもが彼女と同じように、全く同じように崩れ落ちた。不自然極まり、完全に正体不明。しかし、圧倒的。

（やはり、こちらの援軍などという甘い考えは通用しませんか）

あちらだけでなく、こちらにも敵意を持っていることが明らかにされてしまった以上、ぐずぐずはしていられない。

（誰の、どんな意志が関わっているかは知りませんが、紫道遥南が無力化されたことは事実。ならば——!?!）

『トラウイスカルパンテクウトリの槍』。

今にも沈まんとしている太陽と、宵の明星とも称される金星の位置

を確認した彼は、今度こそ、呪を紡いだ。

バガン、と。

どこかあっけないような音さえ響かせ、『六枚羽』はローターのウイング一枚一枚からガトリングの砲身に至るまでを粉々に分解されてしまった。

眼前の危機を碎き安堵の息を吐いた海原だったが、彼の耳に、否、脳内に声がした。

『―――ズ、コイツ―――けが、』

(何だ……?)

こめかみに走る、疼き。

頭の中を覗かれているような違和感は怖気になり、海原の行動を著しく支配する。

指向性スピーカーからの音波を脳へ直にぶつけられているような、気持ちの悪い感覚が。

(声の……源は……ッ?)

何時紫道遥南が意識を取り戻すか解らない状況では、動きを躊躇う余裕などない。

しかし、精神攻撃の部類に属する能力者への耐性は無くとも、その“声”は、実際の声と同等の響きを以てっ聞こえた。つまり、その源を探るのも可能なのだ。

「誰だか知りませんが……埋もれていてもらいますよ!!」

直接に狙うことはせずとも、黒曜石のナイフはとある対象を狙った。

意識を失い、地面へくずおれたままの夜来綴。その真上、灰色の鉄骨で構成された巨大な広告の看板を。

海原には夜来の意識が消えていることなど、知る由も無い。

超能力者が魔術を使うと、肉体が破壊されてしまう。

では、その逆は？

魔術師が超能力を使う、というありえない状況。

海原光貴の現状を説明するならば、この言葉が相応しいだろう。

脳の回路を不必要に埋める、夜来の能力による演算。

しかし、無能力者（レベル0）である土御門元春にも存在した超能力者であるための最低限の演算領域は彼に無い。

夜来が感じていたのは、8月の末、あの白と黒の魔術師二人組へ接続を試みた瞬間と同じ違和感だった。

送り込んだはずの演算式が空を切る。

脳がパンクするどころか、有り余る演算の領域から導き出されるのは無防備な夜来への敵意のみ。

（まずい……。何で、こんな組織に魔術師がいるんだ……。ツツ！！）

空に漂う意識を自身の体へ戻した綴は、狭い路地裏に降り注ぐ灰色の凶器に全ての神経を注がされていた。

大きな金属のパイプはもちろん、釘の一本に至るまでが位置エネルギーからの移行を伴って攻撃性を増す、凶器の雨。

自身は非力な綴には、吹き飛ばすにも回避するにも時間が無い。

（それにしても数が多すぎる！！何でパーツの一つ一つまで分解されて――）

何か手は無いのか。それを考える時間も、理性が残る余裕も、今は無い。

しかし。

理性を取り払い、あまりに獰猛に、生きることだけを考えた綴の脳は、彼の本能は、この状況を打ち砕く。

灰色の雨がその距離をゼロにせんと迫った時、それは起きた。
ヂジッツツ、と。

綴の視界、その左半分を、何かが埋めた。

（何……が）

左目を眼帯か何かで覆うのとは全く違う。

そもそも、視界にこんな、白と黒のノイズばかりの光景――俗に言うテレビの“砂嵐”が映り込む訳が無いのだ。

五感の一つである視覚。その片方を無理やり封じられたような違和感、そしてこれまでは桁が違う情報量にスパークする脳裏と、砂嵐の中にちらつく何か。

眼前に命の危機が迫る今の綴にはそのすべてを把握できなかった。
当然、頭上に降り注ぐ鉄からの回避方法も、考える余地は無かった。
ガゴオオオオンン！！！！と。

釣鐘の中で外から衝撃を受けたように反響する大音量、衝撃の嵐。

辛うじて手をかざすことしかできない少年一人の命を奪うに余りある、質量と速度。

しかし、夜来綴の命は消えない。

(何で……俺は、生きてるんだ……?)

致命傷どころか傷一つ無いその体に一番驚いたのは、夜来綴本人だった。

視界の左半分を埋めたままの砂嵐だが、右の視界から伺える周囲の惨状と裏腹なまでに無傷な自分。

震える彼の脳が捉えたのは、砂嵐の中に、モザイクの形を取って浮かぶ文字。

『a b s o r b ; e x i s t e n c e 』。

その意味を理解した瞬間、彼の反撃が始まる。

e p. 9 生きることだけを（後書き）

今回は、綴の能力の詳細が明らかになり、一方通行と羽柴大和のバトルが加速します。

今回も、感想、批評、お待ちしております！

e p, 10 これ以上、戦わせない（前書き）

綴の新たな力、そして一方通行対羽柴大和が決着します！

e p, 10 これ以上、戦わせない

海原光貴の頬に、路地裏からあふれ出た埃まみれの風が当たる。

縦横5メートルはある看板を完全に分解して、数十メートルの高さから叩き落としたのだ。いかに謎の能力者が相手と言えど、これだけの質量をぶつけければ直に殺すか、少なくとも退避はさせられる。そう、海原は思っていた。

——粉塵の中を歩いてくる、一つの影を捉えるまでは。

（馬鹿な……あれだけの攻撃を受けて、立ち向かってきたというのですか！？）

しかし、彼はその驚きが些細なものであったことを知る。

露わになる“敵”の姿。その顔面を見た瞬間に。

少年の整った顔立ち。その左半分を覆うように、ドス黒い何かがまわりついていたのだから。

黒い気体、とても表現すべきなのか。

不定形に蠢きながら仮面の位置取りをしているそれは、主の素顔を隠すためというよりは別の目的をもってそこにいるように見えた。

海原が『0930』事件の際、一方通行の『翼』を目撃していれば、それと似た感覚を覚えたかもしれない。

それを知る由も無い彼が感じたのは、『オペラ座の怪人』のような不気味さ。

その正体や素顔を理解していても拭い去れない、本能からくる怯えだった。

「貴方は……何者ですか」

普通の海原ならばすることも無い、銃を構えたままでの問いかけ。

「土御門さんを昏倒させたのは、貴方の仕業ですか」

対して、無言の敵は行動で返す。

右の眼でこちらをしっかりと捉えたまま、ブレザーの右ポケットから何かを取り出したのだ。何らかの奇襲を警戒していた海原だったが、予想は大きく裏切られる。

それは、ビニールテープ。

風紀委員が事件現場の封鎖に用いる、黄色地に黒で“KEEP OUT”と印刷されたビニールテープだったのだから。

（しかし、拍子抜けですね。哀れな風紀委員がこちらに介入しただけの話でしたか）

安堵の息を吐く海原。

それでも、彼から不気味な直感が消えきっていなかったことは幸運としか言いようがないだろう。

何故なら。

一瞬前まで海原がいた場所を、少年の手から伸びた“何か”が断ち切ったからだ。

(ッッ!?)

黄と黒の混濁が一瞬海原の視界によぎったが、警戒を僅かとはいえ解いていた海原には反応が遅れた。

構えたままの銃身が目の前で金属片へと分解されていく様がスローモーションにも見えた海原だったが、攻撃はそこに留まらない。

シパン！　　ザグン！　　ヒイン！！　と。

変幻自在にうねる“何か”は、続けざまに空間を、地面を、音をも裂いて蹂躪を続ける。

徐々に回避の範囲を狭められながら、海原はその正体に気付いた。

「まさか……さっきの、ビニールテープが……？」

無論、ただのビニールテープにそこまでの威力は無い。ある訳が無い。

しかし海原は、この攻撃を可能にする能力を知っている。

しなったままでテープを固定し、直線状のテープが斬撃を生み、乱れ舞う余波は“固体の”鎌鼬を放つ。

そんな能力の持ち主と、彼は今まで対峙していたはずだ。

『エグゼスタンス絶対存在』。

長いビニールテープを様々なタイミングで、一定の部位を、続けざまに能力で固定することができれば。

——可能性の話でしか、無いが。

(紫道遙南と同種、同レベルの能力者……？襲撃は二人一組だった、ということですか……？)

しかしながら、敵は海原の理解を待ってはくれない。

乱舞する斬撃にわざと隙を作って、その罠へ飛び込む海原を待ち構えながら、襲撃者は口を開いた。
その言葉が、それを裏付ける。

「アンタをこれ以上、戦わせない。紫道遥南も、アンタの仲間も……羽柴先輩も」

意識の端で、海原達『暗部』の意思を全て無視するような言葉が、彼の耳には届いた。
一方的で、ぶっきらぼうな、おせっかいが。

（今の、力は――）

力を、得た。

戦場を制圧した夜来の脳裏を埋め尽くしていたのは、未知の感覚への怯えでも、強大な力への恐れでもない。

『喜び』。それだけだった。

今までは誰かに頼り切って、卑怯にも物陰に隠れ、一方的に戦ってきた。

しかし、a b s o r b……アブソーブ吸収という名のこの力なら。

誰かの力を借りて、自在に能力を発揮できる。

自分が、自身の力量で、誰かを生贄にすることもなく、戦える。

晴れた左の視界で、もう一方の戦いへと向かう夜来綴は、そう思っていた。

――この力が、『自分だけの現実』パーソナルリアリティという超能力者の法則をどれ

ほどねじ曲げ、無視しているかに、この時は気付くことも無く。

アクセラレータ

一方通行の攻撃が、羽柴大和を捉えられない。

いかに烈風を巻き起こしても、一方通行自身にも観測できない“隙間”を縫って攻撃を躲す。

いかに銃弾や瓦礫をベクトル操作で縦横無尽に走らせても、紙一重で攻撃の雨を弄ぶ。

大和からはふざけた表情や言葉は出てこないが、かえってそれが一方通行の気に障る。

「どうしたんだい？ 学園都市第一位サマにこれだけの手数をあげたっていうのに、全部空振り？」

「――、」

ベクトル変換だろうが、発火能力者の炎だろうが、きっと大和は躲す。あるいは、精神的なそれまでも。

しかも、上書きするように仕掛けられるのは、特殊な二挺拳銃による非常識なまでに精密な射撃だ。

牽制に向けた銃口は、大和に向けられるか否か刈り取られる。

不安定な足場に着地しようものなら、バランスを崩す為に最も効果的な場所を大和は射抜く。

無駄にチャージャーの電力を消費させられている感覚は否めず、そして決定打は見つからない。

（あのレベル0や俺のように、力で押さない攻防一体の挙動……）

しかし、決定打は見つからずとも、一方通行は羽柴大和の能力について見当を付けていた。

打ち消さず、歯向わず、最低限の動作で、受け流し、狙い撃つ。

それを可能にする彼の能力は、ベクトルの“観測”。

低レベルとはいえど、能力者次第では得意な分野を伸長することができる。

そして、一方通行と言えど人間だ。

攻撃の際には対象を視線、顔の向きで狙わなければならないし、狙いを定める動きもそこまで常人離れしている訳でも無い。

（例えるなら、意識のベクトル。俺ですら集中しなければ見えねえそれを、ヤツが観測しているなら……）

銃口の標準ターゲットサイトが見えているならば、いかに荒れ狂う攻撃と言えど躲すことができるし、低レベルとはいえベクトル操作の能力者ならば自身の運動機能を強化することも可能だ。

しかし、それだけではないはずだ。

「ベクトルの観測——だけじゃ足りねえよなア。その白い二挺拳銃……『H S—M T O 8』だろオ？」

距離こそあるが、対峙する羽柴大和の顔を捉えて一方通行は言う。

「やっと理解したか。『H S—M T O 8』。通称“オルトロス”。炸薬と銃弾を組み合わせ、正確無比に、自在の威力を行使できる最新トイソルジャーの武装だよ。君はこれの劣化品……オモチャスマートウェポンの兵隊や演算銃器とも戦ったことがあるらしいじゃないか」

大和が不敵な笑みを崩さないのは、自信の表れか。

「でも、僕的能力と武器とを突き止めたところで僕の勝ちが変わらない。バッテリー残量もあまり無いんだろう？さっきから意識のベクトルがバッテリーに集中している……よッ！」

「チ……ッ!!」

短く息を吐いて迫り、銃身で打撃を仕掛ける大和から距離を取りつつ、一方通行は考える。

（こちらの狙いは読まれる。不意打ちなンざ不可能だ。）

対峙する大和には全てが見えている。

レベル5に相当する“ベクトルの観測”を潜り抜けるのは不可能に近い。

（いや。潜り抜けるンじゃ意味がねエ。ヤツの狙いを——見極めろ!!）

一方通行には慣れない使い道だが、レベル2にできてレベル5にできないことなど無い。

“反射”の膜を弱めることになっても、彼はそれを実行した。

目線の先、呼吸の強弱、挙動の一切が彼の視界でベクトル化されていく。

その行先は——

（……ハッ。解りやすすぎンだろ）

考えてみれば、最初からそうだったのだ。

彼ら『パレード』にとって最も重要な物質。

仕掛けを終えるか否かのタイミングで襲撃をしかけた以上、それが

羽柴大和の懐にあっても何ら不思議では無い。
つまり。

（羽柴大和の“意識のベクトル”は、作業服の右の胸ポケットに向
かってやがる。皮肉なモンだが……俺より割合は多いンじゃねエか
？）

彼の右の胸ポケットに、『反物質』^{アンチマター}がある。

そして、それを理解した一方通行は何もしなくて良い。

何故なら、羽柴大和が先に気付くからだ。

こちらの意識が、羽柴大和の弱点とも言うべき場所を見つけたこと
を。

（ほオラ、反応しやがった）

——それは、勝手に隙を作り出してくれる。

綱渡りで推移していた戦況をひっくり返すに十分な、隙を。

「“ビンカン”すぎンのも考えモンだなア、えエ？」

「！！！！」

凶暴なまでの笑顔を浮かべ、一方通行は左の掌底を羽柴大和へと叩
き込んだ。

通常なら躲される軌道。

しかし、一歩間違えば『反物質』へと影響するコースでもある。

反撃か、回避か、それが大和の判断を鈍らせる。

刹那。

ズウン！！！！と。

地面さえ震わせて、一方通行の一撃が羽柴大和を捉えた。

「か……っ、は……」

（随分とあっけねエ幕引きだなア。『パレード』さんよオ）

崩れ落ちる羽柴大和を街頭に預け、その懐を探ろうとしていた一方通行。

これで終わりだ、と彼自身も思った。

『反物質』を奪われた他の構成員では何もできない。

彼らの負けが、確定する。

しかし、

一方通行に、一人の男が唸った。

「お前は……何をしているんだ」

「あア？」

怪訝な目で睨み返した先にいたのは、羽柴大和と“全く同じ顔”の少年。

長点上機学園のブレザーに風紀委員の腕章を纏い、彼は逆立った髪のまま怒気を強めて言い放った。

「お前は……俺の弟に……何をしてるんだ!!!!!!」

e p, 10 これ以上、戦わせない（後書き）

次回、羽柴大和の取った行動が、大きな乱戦へと口火を切ります！！

今回も感想、批評など、お待ちしております。

e p. 11 なら、次には（前書き）

随分と間隔を開けてしまいました。

最近はネットを使えない環境にいるので……

その分一気に更新しちやいたいと思うので、お付き合いいただける
と幸いです。

e p. 11 なら、次にすることは

レベル5、第六位、はしばたいぎ羽柴大義。

レベル5、第一位、アクセラレータ一方通行。

張り巡らされた緊迫の糸を、一方通行は無表情に、銃口を向けるという行為で弾く。

「一方通行……君が来たってことは、この街の『闇』に大和は捕捉されてしまったのか」

しかし、羽柴大義は銃口など意に介さない。

彼の“意識のベクトル”は、全てが羽柴大和に向かっていた。

「でも、間に合ったんだね。僕が来たからには、もう、殺させない」
「あア？」

しかし、一方通行が何らかの敵対的行動を示す前に、予想外の方角からそれは来た。

「何だよ……僕……負けかよ」
「!？」

意識を刈り取ったはずの羽柴大和が、血を吐きながらも確かに笑っていたのだ。

「君……一方通行は、この街の『闇』にとって大事な存在なんだよな」

その笑みと、続く唐突な叫びに注意を奪われた一方通行は気付けずにいた。

「兄貴ィ！」

「大和……？」

彼の左手に、“起動装置”が握られていることに。

「僕はさあ、兄貴が憎くて大っ嫌いで、でも、」
「何してる、大和！止めろ！」

刹那、一方通行と羽柴大和は光に包まれる。

反物質、計15グラムの対消滅。それにより発生する超高エネルギー。

原子爆弾の何倍もの光と、音と、熱量が支配する空間の中で、羽柴大義は、一方通行は、確かに聞いた。

羽柴大和の、最期の言葉を。

『羨ましかったんだ』、と。

光の中に消えた人間の言葉が妙に耳に残るが、至近距離でその残滓を受ける一方通行には猶予が無い。

（自爆……しやがった！）

こんな街中で。

下手をすれば学園都市全域を廃墟にしかねないこのエネルギーは、自分が抑え込むしか無い。

自暴自棄になっていた羽柴大和に気付けなかったのだから、当然だ。

（熱量も、風圧も、これ以上の範囲には……）

球形に拡散する破壊と死は、一方通行が立ちはだかるように広げた両手を境に歪み、それ以上先には届かない。

しかし、そんな彼の視界に入ってきたものがあった。

羽柴大義。

今、目の前で何が起こっているのかを理解しようともせず、ただひたすらに、己の感情のままに行動していた。

「大和！！大和！！答えろよ！！！！」

「この馬鹿がッ！　今は――」

一方通行の能力によって辛うじて維持されているエネルギーの塊に突入すれば、何を引き起こすのかなど火を見るよりも明らかだというのに。

直後、二人の視界が光に染まった。

光の中、羽柴大義は思う。

自分は、兄としても、『風紀委員長』としても、何も守れなかった。しかしこんな状況下でも、自らに宿す『録画再生』レコードアンドクリエイトは無意識に体を守る。

断熱効果や空気抵抗、光の拡散は無数に“反復”さいせいされ、死ぬことはおろか火傷一つ付かない。

皮肉にも、弟と共に死ぬことすら許されないのだ。

周囲がどれほど壊滅していかうとも、彼は思考する。

（大和が、僕のことを……）

羨ましい、と言ってくれた。

敵愾心も何も無い、無垢な言葉で。

でも、それだけで良かった、などと自分には言えない。

生きる全てだった大和は、光の中へ消えた。

それは、死だ。

これまでの罪を償わせることも、遺体を前に悔むことも、残された思いを汲み取ることも、もう、できはしない。

（なら、次にすることは何だ？）

自問自答するまでもない。

目的はそこにある。

弟を死に追いやった張本人。

「そうだよなあ……テメエが生きてちゃ、示しつかねえよなあ……」

これまでの彼とは比べ物にならない、粗暴な口ぶり。
今までにも醜い行いを見てきたはずの『風紀委員長』が、その感情に身を委ねた。

「貴様を、殺す！！！」

ドツツ！！と。

彼の周囲に広がっていくのは、文字通りの“叫び”。

声の波動を何万回と反復することで、目障りな対消滅のエネルギーを相殺していく。

彼の視界が晴れた先に残っていたのは、本来ならオフィス街として賑わう街並みが爆風で揺らぎ、お椀型にぽっかりと消失した空間。コロシウムには相応しい、その中央に。

「一方通行ああああ！！！！！」

いかに壊しても、埃一つ、傷一つ付かない白色。

いかに殺しても、返り血一つ浴びない白色。

その後ろ姿目がけて放ったのは、“たった今^{ろくが}理解”した現象。膨大な破壊力を持つ、反物質の、対消滅だ。

空間が軋む音、とても形容するべきなのか。

何も残さず消えた羽柴大和の居たはずの場所に佇む一方通行は、背後に異様な音を聞いた。

弾かれたように振り返った先にいたのは、血走った目をした羽柴大義だった。

あらん限りに足の踏み込みを反復して迫る彼の掌。そこから放たれる、球状の光。

（今度は——コイツかッッ!!）

わざわざ解析するまでもない。

たった今抑え込んだはずの、対消滅のエネルギーがそこには再現されていたのだから。

その“タネ”については、『暗部』の情報網を使うまでもない。

この街で最も有名な能力者、といっても過言ではない存在——風紀委員長の能力名は、『録画再生』だ。

つまり、今の対消滅が彼によって無制限に反復されてしまう。

（厄介な能力を——）

しかし彼には、思考する間すら与えられない。

ゴバッッッ!!!! と。

掌底の形を取って叩きつけられ、拡大する莫大な衝撃波自体は彼にとって問題では無い。

問題は、羽柴大義が周囲のことを何も考えていないことだ。

柄にも無い“守る”という行為をベクトル変換で重ねながら、一方通行は叫ぶ。

「この……馬鹿がッッ!!!! 弟の生きた残滓まで掻き消すつもりか!」

一撃でも喰らえば体が消し飛ぶ戦闘の中でそんな口上を言えたのは、能力を発動中の一方通行に、傷を負うはずがない、という慢心がどこかにあったからだろう。

だが。

感情の獣と化していた羽柴大義は、そんな慢心を一瞬で奪った。

ぐん……っ、と。

ほんの一瞬、羽柴大義に対して重力を感じた一方通行の下腹部に、彼の拳が叩き込まれたのだ。

風紀委員の訓練で培われたであろう、正拳突き。

型からは想像もできない重い一撃に、猛烈な吐き気が沸き起こる。

「こっちもさあ、超能力者（レベル5）なんだぜ。そっちだけ無傷で済まそうなんぞ、虫が良すぎるよなあ！」

「今のは……重力の“反復”か……」

“重力”。

一方通行は、自身に影響する全てのベクトルを反射している訳では無い。

地球上で生活するために最低限必要な重力や酸素は、受け入れざるを得ない。

そしてそれを利用した羽柴大義は、重力を己の拳に向けて何百何千と反復すれば、高所から叩き落とされたのと同様のダメージを、与えることができる！

しかし、一方通行の状況への理解が早いのか、羽柴大義は次を放つために迫る。

（何度も、同じ手を――）

慣れない所作で飛び退き、軸線をずらし、拳のリーチから逃れたと思った瞬間、重力は否応なしに彼を引き寄せた。

ただの重力操作ではなく、“反復”であることに厄介な理由はある。異常な値は“反射”で無意味にできても、羽柴大義が無数に“反復”しているのは、通常の数値。

つまり、一方通行は地球上にいる限りこの攻撃から逃げられないことになる。

「避けるな！ 逃げるな！ アンタは大和を……殺したんだろうが！！！」
「！！！」

回避の意味すら失われ、感情のままに叩き込まれる拳。更に、拳だけではない。

球状の光として現出した対消滅は、周囲を高熱と爆風で食い荒らしながら一方通行のバッテリー残量を奪っていく。

それを自覚した一方通行が反撃に出ようとした瞬間。
舞台は——突然の終焉を迎えた。

牙を剥き合う二人のレベル5。
その能力が、何者かによって強制的に“無効化”されたのだ。
一方通行のベクトル変換が。
羽柴大義の反復した対消滅が。

クリアーで上書きしたように、何らかの力で。

（何だ？俺の力だけでなく、コイツの力まで無効にされている……？）

一方通行の思考が混乱しかけたが、その答えはすぐに提示される。

「もう、止めましょう！！ 羽柴先輩！！ こんな、戦いは……！！」

抉られた地面の淵から、こちらを覗き込む一人の少年。

黒い、翼にも似た仮面を纏った、夜来綴がそこにはいたからだ。

e p. 11 なら、次には（後書き）

次回、物語が急転直下！？

e p, 12 僕が殺そうとした男が（前書き）

第7章、ついに完結します！

夜来を取る道とは……？

e p, 12 僕が殺そうとした男が

夜来綴が見たのは、想像を裏切る光景だった。感情の獣と化した羽柴大義が放つ、球状の光。その能力を以てすれば攻撃に専念することもできるだろうに、禍々しいそれを打ち消しているのは一方通行の方。

(何、で……?)

彼らの肩書きは今や完全に逆転し、この街を守る白髪の化け物と、この街を壊す『風紀委員長』という、ありえない構図が目の前に展開されていた。

構図だけではない。羽柴大義の眼に映る感情は、醜く歪んだその感情の正体は——復讐だ。

ほんの少し前の、鏡映しの自分を見ているような。

「先……輩……」

復讐の源など、往々にして決まっている。

自分がそうであったように、きっと羽柴大義は大切なものを失った。それは、羽柴大和だ。

無造作に投げ出されていた白い金属の残骸を目にしたとき、夜来綴は理解した。

羽柴大和が持っていたはずの、特殊な拳銃。

それが、その銃身を“熱で溶かされたように”して、残骸だけが転がっていたのだ。

(じゃあ、羽柴大和が……)

死んだのか。
死体すら、残すことも叶わずに。

なら、俺には——何ができる？

「そんなの、決まってるじゃねえか!!」

思うままに、咆哮のままに、夜来は能力を顕現した。

一方的で構わない。

俺を憎む分には構わない。

けど、夜来には成し遂げねばならない目的がある。

（そのために、俺はもっと、アイツに相応しくなければならぬ!!）

気付かぬ内に、自分と対象化、否、ある意味神格化さえしていたとある少年と共にあるために。

『ダイアグラム演算代行』・アフゾープ接収。

あるまじき、“レベル5二人への接収”。

血の涙を吹きそうになりながらも、夜来綴は超能力者二人分の演算領域を受け止める。

その先にあるのは——

戦闘は、強引な終結を迎えた。

能力を奪われた羽柴大義は、溢れるはずの憎しみを、殴るという行為に実体化できない。

自分を幾度も殺されかけた一方通行も、懐の拳銃で羽柴大義に止めを刺すことすら忘れていた。

その理由は。

倒れ伏す、血塗れの風紀委員だった。

「何でだよ、夜来君……」

「ちよっと……無茶だった、か……」

超能力者（レベル5）、二人分の演算。

人間に収まるはずのない力は、夜来綴の肉体をズタズタに引き裂いた。

超能力者が魔術を使用した時のように、一人の肉体に二人の『バーソナルリアリティ自分だけの現実』を無理に宿した結果が、この惨状。

「あなたが戦っているのが、とても悲しく思えて……。でも、俺には余る力だった、ってことですかね……」

「そんなこと、言うなよ……こんなの見せつけられたら……僕は、どうすればいいんだよ……」

普段の羽柴大義なら、こんな彼を放ってはおかない。

肉体の治癒効果を最大に“反復”して、この少年を助けようとするはずだ。

しかし、夜来綴は違う。

この少年は、自分の復讐を止めた。

言葉でも、力でも無く、あろうことか、自己犠牲という方法を取って。

『人々を守る』、という意味が込められた『風紀委員』の“盾の腕章”が血に染まる中、羽柴大義は行動できない。

「……チツ」

行動できない羽柴大義に代わってこの少年を助けようと試みたのは、そして、一方通行だった。

ベクトル変換を奪われながらも、応急処置を施して当然のように人を救うその姿に、羽柴大義は憎しみの行き場をなくしていく。

（僕が殺そうとした男が、僕の復讐を奪った男を助ける……か）

ここまでこんがらがった糸を解くのは、きっと自分の行動ひとつ。

羽柴大和を許し。

一方通行を許し。

夜来綴を許せ、と。

沸き起こる思いのまま、羽柴大義はその手を伸ばす。

視線の先の一方通行は今も、血で汚れることも躊躇せずに、応急処置を続けている。

そうした、正の感情の連鎖に身を委ねても良いかな、と、羽柴大義は手を伸ばす。

夜来綴は驚きの混じった笑みを浮かべているが、このまま死なれる

訳にもいかない。

そんな思いで、彼の傷に触れようとして

羽柴大義の胸を、銃弾が貫いた。

ぱぁん、と。

現実離れた軽い射撃音が、瞬間の遅れを伴って夜来の耳に飛び込む。

「え……？」

茫然の声を上げる夜来綴も、夜来に手を添えたままの一方通行すら、驚愕の表情を隠せない。

しかし、自分が撃たれたという現実を受け入れるまでもなく、羽柴大義は、地に伏したのだ。

驚異的な速さで地面へと染み入っていく黒々とした血溜りを前にした二人が見たのは、細身の、喪服かと思うほど黒いスーツに身を包んだ男だった。

髪は黒。顔立ちにはこれといった特徴も無く、風景にすぐに溶け込めそうな雰囲気をもっている。

「誰だ。この局面で出てくるってことは、相当深い闇の人間かア？」
「……………」

無言のまま一方通行へ牽制の銃口に向けた男は、よく見ると腕や足に不自然な、人間的でないシルエットがある。

おそらく、精密射撃や高速移動のため、駆動鎧とサイボーグの中間のような技術を使っているのだろう。

服の下に仕込めるサイズとなると、一方通行も聞いたことのない最新型、ということになるが……

「羽柴大義。キミがもたらした損害について、お話があります」

「……！！ ツッ！！」

あからさまに闇へと誘う言葉に、誰よりも反応したのは、すでに重傷を負っている夜来綴だった。

ボロボロの身をよじるように抵抗を示すが、言葉はもはや出てこない。

思いに、口の方がついてこないのだ。

必死に抗おうとする夜来を制したのは、撃たれた羽柴大義だった。

「止めてくれ、夜来君。君まで巻き込む訳には……いけないんだ」

凄絶なまでの、血みどろの笑み。

この街の闇に飲まれていくという自分の運命を悟った彼には、もはや抵抗すら示せないのか。

「待ってください……！じゃあ、俺は……何のために……！！！！」

しかしそれでは、夜来の闘いの意味が無為になってしまう。

交渉の材料も、抵抗の手段も無いこの場で、彼に一体何ができようか。

そして、葛藤を砕くのは男の無慈悲な言葉。

「感傷の別れは、もう良いですか？ 時間です」

「アンタは……！」

「夜来綴。怒らないでください。キミには、とある方からの“誕生日プレゼント”があります」

そう言って、透明なケースに入ったメモリーカードを放り投げる男。それに夜来が気を取られそうになって目を逸らした瞬間、夜来の意識は奪われた。

アンバランスに膨らんだ、男の腕力によって。

（何も、できなかったのかよ……）

全身の裂傷、失血、そして打撲。

全治2週間と診断された夜来の傷は、救急車で運ばれてからの処置が夜来にとってめまぐるしい早回しに見える程の傷だった。

彼を取り巻く白衣の人々の影がようやく消えたと思う頃には、カーテンの向こうから薄い朝日が差し込んでさえた。

（羽柴先輩が堕ちる、なんてことは……最初からわかってたのに……！！）

自身の安易な行動と、無策の行為。
でも。

それを抱えて悩める程、夜来は鈍重では無かった。
彼は行動するしかない。

提示された餌に喰いつき、釣り上げようとする相手すら喰らわんとするために。

その程度ができないようでは、目的を果たすことはできない。
羽柴先輩を救い出すことが、できないようでは。

「誕生日プレゼント、か……」

謎の男から渡されたメモリーカードを、病院に備え付けの共用パソコンでファイル展開する。

中には、テキストファイルが一つだけ。

そのタイトルを見た瞬間、彼の眼は大きく見開かれた。

彼の中で最も忌まわしき、記憶の残滓。

彼の姉を奪い、生きる目的を悉く変えた“とある計画”。

震える手で開く、そのファイルの名は、

『Equipment』。

その翌日、彼は病室から姿を消した。

入院の知らせを聞いた177支部の同僚が見舞いに訪れた時には、すでに彼の姿は無かった。

しかし、彼からのメッセージがそこにはあった。

空のベッドに残された、血に染まった風紀委員の腕章。

それが、マークを真っ二つに引き裂いて残されていたのだ。

不気味な、しかし確固たる意志の表れとして。

——もう、風紀委員には戻らない、と。

e p, 1 2 僕が殺そうとした男が（後書き）

次回からは、嶺次を主人公に戻し、ロンドンでの物語をお送りします！

原作からも、とあるキャラが登場します。
お楽しみに！

e p. 1 無意識の怒りにも気付かず（前書き）

今回から新章に突入です！！

舞台はロンドン、小説情報も編集しました！

新たな出会いが産む物語を、お楽しみください！

e p. 1 無意識の怒りにも気付かず

夜明け前。暗闇の中に、人影が動く。

周囲は光源も何もない草原だが、彼らは太陽の下にいるかのように流流と作業を続けている。

地面を掘り返し、丁寧に地中を探る。

土木工事とも呼べるその作業を、彼らは、否、彼女たちはたった四人で行っていた。

「いい加減にしませんかー？ もう夜が明けちゃいますよー！！」

「もう少し頑張りなさい。せつかくの灯台術式の効果時間は、まだ残ってるんだから」

暗闇の中に響くのは、少女の疲れ切った声と、それを制するそれよりも大人びた女の声。

「信仰ある者にのみ見える灯り、か。確かにレアな術式だし、使い切っちゃいたいのはわかりますけど……」

「手を休めない！ 砦跡のここがハズレだったら、どうなることやら」

「へ、ベイロープ……ふひゃ、不安がるのもわかるけど……ひう」

横合いの提案を切って捨て、ベイロープと呼ばれた少女は手を休めない。

「ランシスはくすぐったいのにな茶しない。ていうか、いつからだったかしら、この症状……？」

曙の中に浮かび上がる彼女たちの姿は、予想外に若い。

せいぜい、10代半ばから後半といったくらいだろう。

纏っているのは、ラクロスのユニフォームを改造したようなミニスカートの衣装。

ミニスカートの下にレギンスを穿いたり、ジャケットを羽織っていたりと個人の差異はあるが、色彩はイギリス国旗のような赤、青、白の三色で統一されている。

そんな、年相応の衣装とは余計に似合わぬ作業を続けていた彼女たちの中に、突然の叫び声が上がった。

「あ、あああ、ああああ、あったああアアア!!!」

少し離れた場所で作業していた、肩ほどまで伸びた金髪の少女。

彼女が震える手で示した先には、石の棺のようなものが土中から顔を出していた。

そこに刻まれた紋章を、彼女たちが見紛うはずもない。

この国を総べる、イギリス王室の紋章を。

「よくやったフロリス。これで、計画も軌道に乗るわね」

「フロリスがお手柄とは珍しいですね。ここ最近の運、使い切っちゃったんじゃないですか？」

「で、でも、これが……」

全員が覗き込むその棺に納められた品物こそ、この国、イギリスの歴史を変えるにふさわしい一品。

ようやく見つけた、『カーテナ・オリジナル』。

彼女たちの名は——『新たなる光』。

一方、裏でいかなる陰謀が渦巻いていようとも、知らぬ者は知らぬのだ。

当然、ロンドン、ヒースロー空港を目指すこの飛行機に乗っている雪崎嶺次達、興条学園一年生ご一行、も。

英国研修、とは名ばかりのお遊び旅行に向かう彼らのテンションは高い。

長時間のフライトに疲れて眠る者もいれば、ゲームや雑談に花が咲いている一団もある。

そんな学生たちの中に、深刻な表情で向きあう、嶺次とその友、翠すいぜきがいり
隻解理がいた。

「なあ、解理。お前は俺の友達なんだよな？」

「ああ。何があってもな」

白のメッシュが入り、ワックスでいじってある髪の嶺次と、オールバックの解理の組み合わせは、傍目には近寄りがたい不良の二人組に見えなくもない。

もつとも、このクラスでは見慣れた二人組でもある。

そんな彼らは、飛行機の座席を組み替えて対面に座り、半ば睨み合っていた。

「だったら――」

「駄目だ」

「良いじゃねえか！」

「駄目だ。絶えええっ対に駄目だ！」

徹底的な拒否を喰らい、俯いた嶺次。

彼はたっぷり一分はタメると、腹の底から叫んだ。

「この……ポーカーでロイヤルストレートフラッシュとか出るわけねえだろ！！ 能力使ってイカサマしやがって！！！」

「ふふん。金属しか扱えない『自分パーソナルリアリティだけの現実』を恨むんだな」

「あ、能力使ったこと認めやがったな！？」

「さて？ 証拠はあるのかい？」

「このヤロオ……！！！」

ほとんど口喧嘩へ突入した二人の間にある、窓際の小さな台。

そこにはランプが積んであり、お互いの手札は、

解理、スペードのロイヤルストレートフラッシュ。

嶺次、2ペア。

実に65万分の一と言われるその役を誇らしげに突き出す解理と、
今にも食ってかかりそうな嶺次。

下手をすれば能力者同士の喧嘩になりかねない状況を治めたのは、
隣で眠そうにしていたオレンジ髪の優等生、田鞆たぎやとうり橙李だった。

「はい、そこまで。委員長を任された俺の前で、問題起こさない」

「ぐう……」

ほら見る怒られた、と言わんばかりの表情をする解理も、橙李はたしなめる。

「解理も。能力使つてのギャブルとか止めなよ……」

「あ、バレてた？」

「心音の変動でバレバレ。いい加減にしないと、高周波食らわすよ？」

「「スイマセンでした……」」

二人のトラブルを予測して配置されたかのような、座席の位置である。

このクラスの担任、青館菖蒲あおだてあやめが決めた絶妙な座席位置に、周囲のクラスメイトは胸を撫で下ろすのだった。

それを、複雑な心境で見つめる一人——灰笠未鶴はいがさみつるを除いて。

「ほお……つっても、絵とか彫刻は、イマイチ良さが理解できないな」

そんなやりとりから数時間後。
イギリスに到着した興条学園一行は、大英博物館を見学していた。
大英帝国の統一の歴史、その中で生まれた文化を網羅するどころか、海外の諸文明の品々まで所蔵しているこの場所は、学識を深めるにはうってつけの場所と言えた。

「俺も。英国王室秘蔵、とか言われても……ただのガラクタだよなあ……」

しかし、荘厳な雰囲気醸し出す歴史的建築物のレプリカを前にしても、嶺次と解理は大した感動も抱かずにいた。

もともと、最先端科学そのものと言える彼らが、宗教や歴史に感動すること自体稀でもあるが。

（とはいえ……相手が解理じゃなあ……）

それに、嶺次が想像していた相手とも違う。

大覇星祭前には、彼の幼馴染であるクラスメイト——灰笠未鶴と一緒に誘いをしよう……と思っていたのだが。

とある一件の後にこじれた彼女との関係は、いまだ修復されていない。

（信頼、というか、嘘のせい、というか……何でこんなメンドくさい関係にならなきゃイカンのだ……）

幼い時から、気遣い無用の関係を築いてきた嶺次と未鶴にとって、互いに意識しているようなやり取りはかえって経験が無く、非常に疲れるのだ。

そんなことを考えていると、無意識に未鶴の姿を探してしまう。

どこかの女子グループと共に行動しているはずなのだが……

「あれー？ 嶺次、その顔はどっかの誰かさんを気にしてる顔だねえー？」

「う、うるさい！ー！」

「声がデケェよ！ ほら、警備員がこっち睨んでるし！」

顔を赤くした嶺次のツツコミのせいで、何故かやたら数の多い警備員に睨みを効かされてしまった。

どうにも、普段より数が多いように見受けられるが……

と、嶺次の疑問を察知した解理が（珍しく、本当に珍しく）嶺次に説明した。

「ほら、最近イギリス国内で美術品強盗が多発してるだろ？その対策なんじゃないの？」

ああ、とうなずく嶺次。

確かに、事前ガイダンスでもその旨の注意を受けていた……ような気がする。

数を雇っているのは事実なのだろうが、どうにも質が悪いように見受けられる。

似合わぬ制服に身を包んだチンピラと筋肉系アスリートの間のようなムキムキ黒人がいては、落ち着いた雰囲気も台無し、といったところだろう。

そして、嶺次の不安は的中した。

「やめ……つての！ ……なんかに構ってるほど……じゃな……」

メインの周回ルートから少し外れた場所。

めぼしい展示品も無く、あるのはイギリス清教の歴史の品、という“科学的には”何の価値もない品々が並ぶ場所で、嶺次は少女の抵抗するような声を聴いた。

トイレに行っていた解理を放置し、角をいくつか曲がる。

するとそこには、

髭モジャで筋骨隆々の警備員もどきが、14、5歳と思われる金髪少女の腕を？み、“STAFF ONLY”と書かれたドアへ連れて行こうとしていたのだ。

やりとりは英語のため解らないが、少女が嫌がっていて、警備員もどきがニヤついていることがわかれば話は早い。

「あんの野郎……！！」

嶺次が瞬時に沸騰した理由は、純粋な正義感だけではない。

彼女の雰囲気、似ていたのだ。

彼の幼馴染、灰笠未鶴に。

スポーツ用のシャツの上からジャケットを羽織り、ミニスカートの下にはスパッツ。肩に掛けられたケースには、ラクロスのラケットのようなものが入っているのだろう。

肩ほどまで伸びた金髪といい、未鶴が着てもきつと似合う組み合わせのスポーツティーないでたち。

そんな無意識の怒りにも気付かず、彼は博物館のポールを掴むと、その能力——ヒートプレス圧力成型で6尺棒の形へ変化させた。

しかし嶺次は、この時走りこんだことを真剣に後悔することになる。

e p. 1 無意識の怒りにも気付かず（後書き）

いかがでしたか？

次回はラブコメ成分多めでお送りする予定です。

それでは、感想や批評も、お待ちしております！

e p. 2 私の知らない世界を（前書き）

予告通り、今回はラブコメ成分多めです！

e p. 2 私の知らない世界を

相手が筋肉を売りにするような大男であろうと、手段は簡単だ。こちらを振り向く前に、リーチの長い鉄の棒で仕留めるのみ。

（くっだらねえ変態野郎には、この一撃で十分だっっ！！）

ごとん、と。

絵に描いたような鈍い殴打の音が、静寂の回廊に響き渡る。

「「！！！？？」」

何があつたかを理解せずに倒れた男。

人の壁が消え失せ、連れ去られようとしていた少女の姿が明らかになる。

そこには、金髪に碧眼の姿をした少女が、いた。

「ちよ、アンタ何してんの！？ ここの警備員をぶん殴るなんて……！！！」

彼女が口にしたのは、感謝よりもまず、怒りだった。

痙攣している警備員を踏み越え、頭一つ身長が高い嶺次に詰め寄る少女。

その顔には、すでに嫌な汗をかいている。

「あー、日本語話せたんだな。ていうか、大丈夫だったか？」

「呑気な思考が余計気に喰わない……！ アンタは何をしたか解ってるの！？」

「え？」

ほとんど叫びながら、彼女が指をさした先。
そこでは、監視カメラがこちらをしっかりと捉えていた。
つまり、今の嶺次の暴行も……記録されていたことになる。

（これ、マズいんじゃないか？）

嶺次の頭が、漠然とした危機感を覚えた瞬間。

びーー！！！と。

博物館の警報装置が、けたたましいベルを鳴らした。

「俺、もしかして強盗か何かと勘違いされてる……？」

「馬鹿かアンタは！！ この街が世界一の防犯カメラの街だって知らなかったの！？」

苦笑いと共に自分を指さす嶺次だが、遠くから聞こえる余りある数の足音は着実に近づいている。

やたら数を増やした警備員が裏目に出たか、もはや足音は軍隊の行進のように聞こえる。

そして、嶺次と少女は顔を見合わせるしかない。

「と、とりあえず……？」

「逃げるわよ！……ったく、本当なら『鋼の手袋』の実験台にしたところだけど……」

「なにボヤついてんだ！！ これ、本当にマズいぞ！？」

後半、何かを英語で話した少女の手を取り、反対の手で金属の壁を崩し、嶺次は走る。

あからさまに巻き添えを喰らった雰囲気のある少女の、こんな呟きには気付かず。

（学園都市の能力者かあ……偶然とはいえ、これはアンラッキーだよねー）

あのぶっきらぼう少女は、フロリスという名前らしかった。

大英博物館から辛うじて逃げ出し、ロンドンの裏路地で別れるとき、さんざんの憎まれ口と共に、名前を捨て台詞のように言い残して去って行った。

（しかし、二度とワタシに会わないことね、ってのは……）

まるで、自分が不吉を呼ぶ存在のように、彼女は言い捨てて。

フロリスと別れた後も、嶺次の不幸は続いた。

監視カメラの映像から嶺次が何をしでかしたのかをあっさり突き止められて担任の青館菖蒲あおだてあやめからこっそりと絞られたり。

英国の美少女と手を取って博物館からの逃避行をしたことを学年中

に宣伝され、解理や、電撃使いであるクラスメイト、浅葱御堂あさぎみどうから電気ショックによる拷問を受けたり。

あげくの果てに——いや、最後の項目を不幸と呼ぶのは失礼だろう。

彼は今、幼馴染の灰笠未鶴はいがさみつるからの呼び出しを受け、ロンドンの公園に立ち尽くしていたのだから。

霧の都、というだけあって、夜景が霧の中におぼろげに浮かぶ光景はとてもロマンチックで、未鶴が呼び出したとは思えない程、そこは“霧囲気”のある公園だった。

（いや、確かに嬉しいよ。未鶴からメールが届くのなんて一ヶ月振りだし、二人で会うのも一ヶ月振りだし、二人でロンドンの夜景をバックに……デ、いやいや、待ち合わせとか……）

待ち時間にも所在無くエクステをいじりたおす嶺次だが、いかにせん今日はタイミングが悪い。

ロンドンへ来て早々に女の子と手を取って逃げ出した、という悪い名声はすでに行き渡っている訳だし、メールの文面も心無しか冷たかったように思う。

（はぁ……俺ってつくづく、運の無い男だよなぁ……）

所在無い彼の脳裏には何故ロンドンに来てまで呼び出すのか、という疑問が持ち上がったが、それと同時に、以前橙李からささやかれた言葉が思いだされた。

思い出して、しまった。

『ロンドン、もとより修学旅行っていう開放的な霧囲気の下で、告白されちゃうかもよ？』

とか何とか。

(……っておい、これは、まさか…!?)

橙李がニヤついていた理由や、この空気が“それ”にピッタリであることを理解した彼の頭の中で、化学反応が起こった。

“混ぜるな危険”を、混ぜてしまった。

ぼんっ!! と。

(わ! わー!ー!! うわあ!ー!ー!ー!!!?!?!?)

沸騰しそうな顔でもだえる嶺次の叫びは、声にならない。

しかし、そんな彼を背後から呼ぶ声があった。

さんざん聞き慣れたはずの、それでも聞きたかった、幼馴染の声。

「お待ちせ、嶺次」

「おおう!?’」

弾かれたように振りかえる。

未鶴の声を聞き違うはずがない、と。

しかし、その視線の先にいたのは、彼女であって、彼女では無かった。

「久し振り……だね」

そう笑って、細められる彼女の目もとも。

手を後ろに回すことで強調された胸とは反対に、スラリとした身体も。

夜霧で少し湿って、輝くようなグレーのボブカットも。

（綺麗だ……）

本当に素直に、そう思った。

無頓着ではあったがスポーツ少女らしかった肌は、彼女の髪に良く似合う薄めの化粧を施され、淡い色のグロスが印象を大きく変えている。

白のチュニックにハイウエストのベルト、そして黒のミニスカート。全体をモノトーンで統一された彼女のコーディネートも、トレーニングで程良く引き締まった身体のラインをしっかりとアピールするもので、視線を引きつけられてしまう。

（…俺は……こんな可愛いおさななじみの側に居たくせに、放置していたのか……）

と、10年分の自己嫌悪で黙りこくってしまった嶺次に、未鶴は伏し目がちに言った。

「あの、さ。そんなにジロジロ見られると、こっちも恥ずかしいんだけど……」

「あ、ああ、ゴメン」

装いだけでなく、振る舞いまで女らしくなっている未鶴に、顔を赤くして目を逸らす嶺次。

どうにも、彼女は相当の勇気を出してここへ来たらしい。

彼女の荷物がやたら多かった理由が、なんとなく分かった。

「少し、歩こうよ」

そう言って先を行く未鶴と、嶺次は街へ歩き出す。

たいした準備もせずに制服姿でここへ来た、自分への恥ずかしさも覚えながら。

「そういえば、嶺次とこんな風に歩くのって初めてだね」

「ああ、お互い下らない趣味持ってたから、な…」

普段なら憎まれ口の一つも出てくるが、状況が状況だけに嶺次の思考はもはやフリーズ状態。

小さな通りを抜けようと試みたが、接着剤でも使っているのかと思う程絡みあうカップルを前に赤面のあまり断念し、彼らは今、昼間は露天商で賑わう石畳の通りを歩いていた。

両サイドに並ぶ小規模な店舗はすっかり閉店しており、街灯だけが行き交う数少ない人々を照らしていた。

「それでさ、話したいことっていうのは…」

「おう、何でも来い！」

「私、読んじやったんだ。この手紙」

心の震動は抑えられそうに無く、そして本題の正体に嶺次は言葉を無くしてしまった。

彼女がポーチから取り出したのは、一枚の手紙だった。

文面は見えないが、右下の差し出し人には覚えがある。
かんざきかおり
神裂火織。

一月程前、世話になった『魔術師』だ。

そして嶺次と未鶴の仲がこじれた遠因でもある。

当然、嶺次の説明不足が理由だし、彼女には何の責任も無い。

それでも、あの時医者から聞かされた“手紙”の存在意義がここで示されるとは、嶺次も予想だにしていなかった。

「あの時……嶺次が傷を負って帰って来た時、私は最初に思ったんだ。この人が、嶺次の怪我の原因なんじゃないか……って」

それは……、と言い返そうとする嶺次を目線で制して、懇願すらするように未鶴は続ける。

「分かってる。これは私のイジワルな気持ち。だけど、この手紙にある住所に行こうと思ってる」

差し出された手紙には、“そういうこと”で問題が起きたら頼ってください、との旨の文章に添えて、ロンドン市内のとある住所が記してあった。

ここに行けば神裂に会えるとは限らないが、彼女の残した唯一の糸であることに変わりはない。

「そして聞くの。嶺次が言えなかった、本当の理由を」

「それは……」

嶺次は反論を叫べない。

能力、すなわち『自分だけの現実』に証明されているように気の強い彼女を守りたいがためにつけてきた嘘が、すべて空回りしている現実を前に。

そもそも、彼女がこんなことに首を突っ込んでしまった理由が、嶺次が彼女にかけた心配が原因なのだから、嶺次が今さら何を言おうともそれは言い訳にしかないのだ。

でもね、と。

未鶴は前置きをして話を止め、口調を変えて言った。

自嘲さえ感じられる言葉を、あくまで明るく言い放とうと。

「私……本当は、嫉妬してたんだよね」

「嫉妬……って、アイツにか？」

「そう。私の知らない世界を、嶺次と一緒に見ているあの女の人に」

おまけに、む、胸も……と、口ごもってしまう未鶴だが、嶺次には予想だにしない単語だった。

でも同時に、彼女らしいとも思っていた。

普通、自分が他の人間に嫉妬していることなんて、吐き出せる訳が無い。

自覚して、嫌悪しても、溜め込んだそれは何かを生み出すことは無い、行き止まりの感情。

それを彼女は、きちんと受け止めたのだ。

とても俺にはできないな、と嶺次は思う。

「私のこと……嫌いになった、よね」

こちらを見ぬまま、夜の空を見て未鶴は言う。

それはきつと、溢れる何かを止めるため。

「だって私、ズルくて嫌な女じゃん。そのくせ、気が小さい。素直に嶺次に聞けば良かったのに、怖くて出来なかった。その理由を知

った私が、どういう行動を取るのか分からなかったから……もしかしたら、誰かの側で傷付いていく嶺次を見捨てるんじゃないか、っと思うと、怖くてたまらなかった。私にとっての嶺次と、嶺次にとつての私が、違うんじゃないかって――」

もう、充分だ。

そこから先は、言わせない。

一步分の距離をゼロにして、嶺次は未鶴の肩を掴んだ。

両手で、両肩をしっかりと。

振りかえらせた未鶴は、目じりを赤く染めていた。

それが、かえって愛おしくて。

「ごめん。俺が間違ってた」

「え……？」

嶺次は、小さな疑問の声を上塗りするように、ミツルを抱き締めた。

「……っ！」

互いに伝わりあう心音と体温が、累乗されていくような感覚。

自分から抱き締めたはずの嶺次ですら、自分の鼓動が耳から聞こえる程だ。

そして、抱き締めて初めて分かる、彼女の震え。

五感の全てで未鶴を感じながら、嶺次は言う。

「俺も、怖かったんだ。深い沼に足を突っこんでいる俺から、未鶴が離れていくんじゃないかって、あの時は思ってた。でも、言い訳にしかないけど、これだけは言わせてくれ」

間を置き、ほとんどキスできそうな距離にある未鶴の顔を見据えて、

ようやく、言う。

「未鶴は、俺にとっての、たった一人だ」

言いたくて、言えなかった、告白。

姉弟みたいな関係。おさなじみとしての関係。一方的に思いやる関係。そんなものはいらない、という嶺次の決意の現れ。

だから、と一呼吸添えて、爆発さえしてしまいそうな鼓動をどうにか制御する。

「俺は、未鶴を守る。何があっても、必ずだ」

今まで口にすることは無かった。

未鶴を守るのは、嶺次が勝手にしてきたこと。

無用な心配を掛けたくない、という嶺次の想いも、そこにはある。

しかし、彼女は本来“守る”側の存在なのだ。

『肉体強化』という能力が無かろうと、彼女は——強い。

その強い芯を認めた上で、改めて嶺次は誓った。

「お前に怪我をして欲しくない。危ない目にあって欲しくない。いつも笑っていて欲しい。いなくなっただけで欲しくない。ずっと、側で見えてきたから……お前を、一人占めしたいんだ」

真っ赤に染まった顔で、目を逸らすこともできないで、未鶴は嶺次を見つめかえす。

柔らかな空気を挟んで、互いの目にはたった一人しか映っていない。

「これが、俺の素直な気持ちだ。未鶴は、どうなんだ……？」

急に話を振られた未鶴は、嶺次の腕の中で震えた。

それが、これまでの恐怖による震えとは全く違うものであることが
嶺次にはなんとなく解った。

「私、私は……」

そしてその答えを、未鶴は行動で示した。

目を閉じ、もともとゼロに等しい距離をさらに縮め、淡いグロスを
塗られた唇でキスをし

瞬間。

ドオン！！　という轟音と共に、彼等の数メートル先にあった商
店のシャッターが内から碎け散った。

「「……………」」

彼らの周囲にあったはずの柔らかな空気は跡形も無く吹き飛び、粉
塵まみれの爆風にそれは取って替わられてしまった。

驚きや身構えといった反応をとることすら忘れ果てていた二人の感
情がようやく怒りや疑問へ変わったのは、土煙の向こうから男達の
荒々しい声が聞こえた時になってだった。

（なんだ？　強盗……？）

（そういえば、ガイダンスでもそんなこと言われてたね……）

（よりによってこんな……ッ！？）

小さな音で嶺次が溜め息を吐こうとした瞬間、隣の未鶴を見た彼の体が硬直した。

無理も無い。

表情こそ見えないが、俯いた彼女の口からはブツブツと、平淡な口調の言葉が漏れ出ていたのだから。

「何でこの瞬間に来るかなあ、来る必要なんて無いよね、ていうか生きてる必要なんて無いよね……」

これはマズい、と嶺次の背筋が寒くなる。

ありえない三段論法を掲げる程混乱した彼女がキレるということは、人間離れした速度の彼女が暴れ回るといふことなのだから。

……それは、かなりマズい。

「ちょ、ちょっと待て、未鶴！」

「何……？」

目の居わった彼女をどうにか呼び留め、説得を試みる。

早くしなければ、煙の向こうから強盗団が姿を現してしまう。

「今言っただけじゃねえか。俺はお前に、怪我して欲しくないんだ。それに……そんな格好で暴れ回るつもりか？」

苦笑いで彼女の足下、少しヒールの高めのサンダルを指して言う。さすがの彼女でも、それは無理だろう。

「……っは！？」

それで我に帰ったのか、顔を急に赤くして未鶴があとずさりした。

普段なら殴りかえされてしまってもおかしくない状況だったが、これはこれでやりずらい点も……ある。

「まあその……なんだ。俺がアイツらブチのめしてくるから、終わったら、答え、聞かせてくれないか？」

頬をかきながら言う嶺次に、最初は驚いたような反応を見せた未鶴。それでも徐々に口元を緩め、こみあげるおかしさを笑みに変えて、応えた。

「なーんか、私らしく無いことしちゃったね……うん、良いよ。こは嶺次に任せる。だから……待ってる」

どこか吹っ切れた表情で、しかし最後の一言だけは、真剣な眼差しで。

「ああ、約束だ！」

彼女の言葉が、表情が、息遣いが、自分の力になることを自覚して、嶺次は振り返える。

その先にいるのは、おそらく最近イギリス国内を荒し回っている美術品強盗団。

雰囲気을ブチ壊された恨みとか、“あと少し”だったのに、とか言いたいことは沢山あるが、一言だけを叫んで、彼は己の手に黒金の棒を携えた。

「運が悪かったな、悪人共！！！」

一斉にこちらを凝視する、合計6人のヘルメット男達。

その手には銃器までもが握られていたが、今の雪崎嶺次に、『敗北』

の二文字はあり得なかった。

e p. 2 私の知らない世界を（後書き）

いかがでしたか？

慣れない心情描写でしたが、楽しんでいただければ幸いです。

次回は、物語が加速していきます！

今回も、感想、批評などあれば、お待ちしております。

e p. 3 この国にいる超能力者を（前書き）

嶺次が挑むは、急転直下の強盗団！
しかし、それだけで済むはずが……！！？

e p. 3 この国にいる超能力者を

嶺次と相対する強盗達。

数は、6対1と嶺次が圧倒的に不利。

しかも、6人のうち3人は、拳銃やナイフを見せびらかすように所持している。

もつとも、先の爆発を引き起こすような爆弾をまだ隠し持っている可能性も否定できないため、注意を怠っていない相手は一人もいない。しかし、早くも嶺次の怒りは冷めかけていた。

（うーん、でも……さっき未鶴に言った気合いが無駄になるみたい
にダメな連中だな……）

構えは危なげで、ナイフもまともに持てていない。

拳銃も、大口径のマグナムを片手で軽々とこちらに向けている。それでは、反動で当たりません、と宣言しているようなものだ。

これでは、あのレベル5、みさかみこと第三位の方が危険度は高いかもしれない。

『何ボサつとしてやがる！ 俺達を見たからには……！』

みたいな挑発が聞こえるが、嶺次が取った行動は単純だった。

ずぶり、と。

手にしていた黒金の棒。

元は街灯だったそれを、石畳の地面へ突き刺したのだ。

いや、突き刺したように見えるだけで、先端は薄い薄い膜となって石畳の隙間を走っていく。

放射状に猛烈な速度で広がる銀色の蜘蛛の巣の上で、戸惑う強盗たち。

「調子に乗ってるトコ悪いんだけど、このまま大人しくしててくれよ」

笑いながら、そう言い捨てた瞬間。

地面を這っていた金属が、強盗たちの体へと飛びかかった。

「「!?!?」」

液体だったはずのそれは、即座にワイヤーへと形を変え、六人の強盗を一斉に締め上げる。

細さからは想像もつかない強靱なワイヤーに手も、足も、武器さえも雁字搦めにされた強盗たちは、なす術無く倒れ伏した。

「日本語通じないかもしれないけど、ま、“毛細管現象”ってヤツだ。地の利、生かさせてもらったぜ」

嶺次のレベル4という力でも、半径10メートルの空間全ての金属を、微細なコントロールで完璧に操作することは叶わない。空間認識能力が追い付かないのだ。

しかし今回嶺次がしたことといえば、石畳の溝へ流し込まれやすいように金属の軟性を調整したことで、地面から跳ね上がる金属を強盗たちの体に巻きついた状態で固定したことだけ。

（大立ち回り、には程遠いけど……終わりか）

少しバツの悪い顔をして、未鶴の居る方向を振り返る。
邪魔が入りはしたけれど、これで、“答え”を聞ける。

しかし。
そう思って顔の向きを変えた嶺次の耳に、予想外の方角から声が届いた。

「ようやく見つけましたよ。強盗団なんて狡いマネしてくれましたね。おかげで先回りするこちらの身にもなってくださいって話です」

声が聞こえたのは、いまだ崩落の跡を残す商店の中から。

少女らしきその声の主は、姿よりも先に、とある物騒なものを先に嶺次の視界に入れた。

——鈍色の、槍だ。

先端がフォークのように分かれている謎の形状だが、温和な雰囲気を見せつけるものでは断じて無いようだ。

続いて見せた少女の姿に、嶺次は酷く既視感を覚えた。

「お前……一体……？」

フロリスと名乗ったあの少女と色彩や組み合わせが似た、ラクロスのユニフォームのような服装。

しかし、こめかみの一房を金に染め抜いた長い黒髪に伴って印象を180度変えているのは、スカートの下から伸びて、重力に逆らうように先っぽを天に向けた、悪魔のような尻尾だった。

「私たちのことは、言わなくても分かりますよ……ねッッ！！！」

それに意識を取られたのは、不覚だった。

言い終える、最後の一息と同じタイミングで彼女はその槍を振りかぶり、距離を縮め、嶺次へ向けて叩きつけたのだ。

ゴバツツ!! と。

見えない、巨大なハンマーでも振り下ろしたかのように、武器の大きさを少女の細腕とは似合わない破壊が巻き起こされる。

それを、嶺次は躲さない。

右手で逆さに構えたままの金属の棒を半球状の壁へ造り直し、強烈な一撃を防ぐ。

強盗が大した抵抗もされずにやられてくれたことに、初めて嶺次は感謝を示した。

それでも、目の前の少女は鋭い視線をこちらに向けたまま。

「な、何なんだいきなり!!」

「こうされる理由なんて、貴方の方がよく解ってるんじゃないですか？」

ぶつきらぼうにそう応える少女は、振り下ろした槍を横一線に薙ぐ。そこで嶺次は、ありえない現象を見た。

(何だ……? 土煙が……!?)

彼女の槍が、実体の無いはずの“土煙を”捉えたのだ。

それは、できそこないの綿あめのような形状となって嶺次の造った防壁へと襲い掛かった。

そして生まれる、想像以上の破壊力。

一度攻撃を防いだ瞬間に、地面から吸い上げた金属をも混合して硬度を上げていたはずの鉄の壁が、一撃で砕け散ったのだから。

「ツツ、ツ！」

思わず、両腕をクロスして防御の姿勢を取る。

それと同時に、少女の持つ破壊的な攻撃力が、すぐそばで見ているはずの未鶴へと及ばないだろうか、という心配事が彼の脳裏によぎる。

未鶴のいる方向へと、飛びのきながら首を捻る嶺次。

（こんなんじゃ、未鶴は……？）

——それが、嶺次に決定的な隙を作り出してしまった。

「よそ見してるなんて余裕ですね。それとも、諦めましたか？」

「！！」

横に難いはずの槍を、彼女はいつの間にか嶺次の正中線へ向けて構えていたのだ。取り回しが容易な大きさのそれとはいえ、ありえない速度で。

しかもその先端には、あの破壊力を起こした“土煙”を伴って。

（ま、ず————ッッ！！！！）

嶺次が意識を断ち切られる前に見たのは、尖った犬歯を剥いて笑う、少女の笑顔だった。

最後に、腹部から響く異様に重い音と共に。

急襲した少女に、嶺次は負けた。

そして今、連れ去られようとしている。

それを傍から見ていて、灰笠未鶴が冷静でいられる訳がない。

否、冷静でなんていたら、それは自分の想いと、それに応えてくれた嶺次への裏切りだ。

「待って！！ 嶺次を連れて行くなぁ！！」

走りにくい服装であることも忘れ果てて、未鶴は軽々と気絶した嶺次を抱えて背を向ける少女へ迫る。

しかし、少女はこちらを一瞥もしない。

ただ、跳んだ。

超能力者から見ても、異質な跳び方だ。

自身の身体能力を強化する能力を有する未鶴には、それが余計に分かった。

謎の少女が、何かの“道具”に依存してこれだけの破壊と圧倒を引き起こしていることに。

次の瞬間には、既に少女の姿は無かった。

狭い通りで、どちらの屋上へ飛び上がったのかも解らない。

「待ってよ！ 待ってって、言ってるのに…」

言いたかった“答え”も告げられないまま、二人の距離は離れていってしまった。

残ったのは、立ち尽くす未鶴一人のみ。

——その手には、ここから1キロと離れていないとある住所が印してある手紙が、強く強く握り締められていた。

朦朧とする、雪崎嶺次の意識。

何かに抱えられているような振動はずいぶん前に止み、椅子に針金か何かで縛りつけられている感覚がキリキリとした痛みを伝えてきて、徐々に彼の意識を覚醒させていく。

まず復活したのは、聴覚。

彼の、おそらくは目の前で怒鳴り声で交わされている会話は何故か日本語で、英語の成績が芳しくない嶺次にも理解できた。

「レッサー、アンタねえ……こんな厄介な奴連れて来てどうするつもりなんだよ！」

嶺次を連れ去った少女とはまた違う声は、誰か……レッサーと呼ばれた相手を、殆ど叫びながら叱り付けている。

「ホント。フラヴスとはなあんの関係も無い、ただの少年だよ。しかも超能力者と来た。このまま置いとくの、マズいんじゃないの？」

また、新しい声。

どこかで聞いたことのある声が、先ほどの怒鳴り声と同じイントネーションで相手を詰る。

「私、学園都市の能力者には発信機が埋め込まれてるって、聞いたことあるよ。開放した方が良いんじゃない？」

「バカ。ここまでの相手を解放なんてしたら、『必要悪の教会』ネセサリウスに補足されるのが関の山でしょう。『封の足枷』ドローミの痕跡もバツチリ

残ってるんだから」

声は、計4人分。

そして、先程から苦勞の絶えない言葉を吐きまくっているのがこの組織のリーダーらしい。

ぼんやりとした意識の中で、現状への危機感を掴みきれずにいた嶺次だったが、次の一言が彼の覚醒を急速に促すことになった。

「全く……フラヴスの計画を潰さないと、厄介なことになるんだって。今この国に来ている超能力者たち、皆殺しにする訳にもいかないだろう？」

唐突に告げられた、皆殺しという危険な言葉によって。

「それ……どういう意味、だよ……」

何故だか無性に動かしづらい口を無理に動かして、嶺次はその言葉を、目の前で喧嘩しそうになっている少女たちに向けて放った。

言って、そして――

ザン！！！！と。

気付けば、彼は喉元に4つの刃を突き付けられていた。

いつそれを手に取り、構え、突き出したのかもわからないほどに俊敏な動きで。

「アンタ、いつから話、聞いてた？」

「いやいや、捕まえた能力者の前で普通に喧嘩腰になってたワタシたちも悪いと思うけどね」

あまりに突然の展開に、嶺次は完全に開いた視界の向こう、こちらに敵意を剥きだしにする4人の少女の姿が刻印されるほどだった。後に知ることとなる、『新たなる光』という彼女たちの名と共に、それは記憶に刻まれることになる。

e p. 3 この国にいる超能力者を（後書き）

次回、『新たなる光』が物語の核へ介入します！

今回も、感想など、お待ちしております。

e p. 4 全ての信仰を無為にして（前書き）

今回、敵の輪郭が明らかになっていきます！

魔術サイドと交差する嶺次の運命やいかに！？

e p. 4 全ての信仰を無為にして

「……で、結局。アンタの金属を操る超能力のせいで、『封の足枷』ドローミの効果も弱まって、拘束が解けてしまった、と」

「アンタじゃない。雪崎嶺次だ。えっと……ベイロープだっけ。そろそろ、さっきの言葉の意味を教えてくださいませんか」

喉に刃を突き付けられた状態で新たに物理的な拘束を加えられ、椅子に縛り付けなおされた嶺次は、キャンピングカーの中と思われる空間で四人の少女から尋問を受けていた。

銀髪の、嶺次よりは年上の女はベイロープと名乗り、四人の中でも先頭に立ってこちらに質問を投げ掛けていた。

「それは後で話すわ。とにかく、アンタの危険性が少ないことを承知しないことには、互いに情報を交換する気にはならないでしょう？」

むう、と唸る嶺次の視界では、ベイロープの後ろでフロリス、そしてもう二人——嶺次を急襲した黒髪の少女、レッサーと、鈍色の槍をふるふると頼りなさげに抱えている、ランシスと呼ばれた少女が門番のように構えていた。

凶器を持った四人に囲まれる、という、普段なら命の危険を感じるような環境でも、不思議と嶺次にはそんな危機感は沸き上がらない。

（俺を殺すつもりなら、とつくに殺ってる。さっきの言葉の真偽は分からないけど、俺のような超能力者と——いや、学園都市とトラブルになるのを恐れているんだ。だったら……交渉の可能性はある）

そんな打算的な思考の下で、嶺次はつらつらと言葉を続けた。自分の目的は、もしかしたら巻き添えを食うかもしれないクラスメイトを、幼なじみを護ることだということ。

大英博物館でのフロリスとの遭遇は完全に偶然だったこと。

レッサーの襲撃を受けた理由となった強盗には偶然に出くわし、“正義感”の点からブチのめしたこと。

それには、フロリスも隣で呆れ返ったように頷いた。嶺次が“ああいう性格”であることを、博物館での遭遇で把握したのだろう。

「ああ、どおりで嶺次が強盗団のボスに見えた訳ですか」

と、楽天的な納得の言葉を吐くレッサーだったが、厄介事に巻き込んだ本人である彼女に、他の3人の視線は冷たかった。

「まあ良いわ。最後の質問。アンタがレッサーやワタシ達の魔術を目にしても動揺が少なかったのは、どうして？」

ベイロープですら緊張の糸が緩みかけていた、その問い掛け。

「ああ、それは……」

しかし、続く嶺次の回答によって場の空気は凍り付いた。

彼らがこれまでに遭遇した魔術師達……テオレルドやランサー、神裂火織を思い浮かべながら、『イギリス清教』という単語を口にした瞬間に。

ベイロープはおろか、後方で気だるそうにしていたレッサーやフロリスまでもが目を見開き、驚愕の色をあらわにしている。

それも、その眼が敵意に変わりそうなほどの驚愕を。

（これ……何かマズいこと言ったか？）

冷や汗を垂らす嶺次の向かいで、ベイロープの脳裏にはこの偶然を味方に付けるための策が巡っていた。

（学園都市の人間、しかも高レベルの能力者が、イギリス清教と繋がりが……？ そんなのは反則でしょう！！）

このまま雪崎嶺次を解放すれば、居場所を即座に突き止めた学園都市からイギリス清教へ連絡が行き、最悪自分達の『計画』が露見する恐れがある。それだけは避けなければならない。

かといってこのまま拘束を続ければ、このキャンピングカーに施した偽装術式が解け、学園都市の制圧部隊がここを急襲するだろう。いずれにしても最悪のケース。八方塞がりだ。

——しかし、こんな瞬間だからこそ、彼女は閃いた。

（でも……“こっちの方”を片付けるためになら……）

彼女達だけが掴んでいて、そして追っているもう一つの事件。とある魔術師の計画。

イギリス清教にこれを告げ口する訳にもいかず、かといって放置すれば彼女たちの計画までも水泡に帰す、とても面倒な問題を抱えていたのだ。

これを、目の前の超能力者に解決させれば良い。

（責任だとか功劳だとか厄介なことだけを引き受けてもらって、こいつを学園都市に送り返せば良い…）

そんな、打算的な思考に至ったのは4人同時らしい。

彼女達は意味ありげな目配せを交わすと、

「良いわ。教えてあげる。さっきの言葉の意味……フラヴスⅡハートラインの計画について」

いきなり色を変えたベイロープの言葉に、目の前の嶺次は息を飲んだ。

「フラヴスⅡハートライン、か」

誰に宛てることも無くその名を呟き、深夜の聖ジョージ大聖堂地下の書庫に佇むのは、黒で統一されたコートに黒髪、眼鏡を掛けた魔術師、テオレルドⅡミラー。

蠟燭の光源に揺れる彼の瞳は、黙々と書類に目を通していく。

何故、彼が相棒であるランサーⅡJⅡグレイスすら連れずに行動を起こしているかという、それは彼がこの魔術師の情報を得た源にあった。

必要悪の教会とは全く逆のベクトルを持つ、“とある情報源”。

故に、彼はこの行動を『エグゼキューター執行人』という組織としてで無く、個人の判断で行っていた。

（確かに『必要悪の教会』の要監視者リストには入っていたが、何故…）

情報を集めるに従って、テオレルドにはフラヴスという男の像が見えなくなっていた。

表の顔は、ロンドンのはずれで古美術商を営む青年。

しかし彼には、大英博物館に侵入し、魔術的価値のある品物を盗み出した前科があった。――それも、厳重な保管庫の奥の“本物”を。

（その時に盗んだのは、『ロゼッタストーン』と共に発掘された、工具の一部と思われる金属片、か……ますます解らない。『ロゼッタストーン』本体ならともかく、周辺の工具だけだ？）

この情報源でもあるあの女には、こんな男に構っている暇は無いはずだ。

――第二王女、キャーリサには。

どこで何と繋がるのかも解らずに彼女からの情報に踊らされている自分に嫌気がさしつつも、テオレルドは埃を被った書庫で夜を明かす覚悟を決めていた。

（本当に馬鹿だな、俺は。呪縛から解き放たれたはずなのに、俺の生きる理由はミッドフォードの家に束縛されたままか……）

「超能力者が魔術を使うと肉体が破壊される。それが、この男……フラヴスの計画によって起こる、超能力者が皆殺しにされるという結果の理由よ」

気まずい沈黙の後に思わせぶりな目配せをしたベイロープたちは、嶺次へ現状の説明を始めてくれた。
最も望むべくもない、未来への予想と共に。

「どういう、ことだよ……この国にいる人間を全員魔術師にするっていう風に聞こえるんだけど……」

「それは少し違うわね。正確に言うと、“この国の人間を全員、新たな宗教の教祖にする”ということになるわ」
「……？」

余計に分からなくなった嶺次に、奥のソファで尻尾をこちらに向けてゆらゆらと揺らしていたレッサーが補足をした。

「要するに、今この国をある意味で纏めている『イギリス清教』というシステムを、完全に破壊するんです。とある方法で」

「はあ……」

わかっていないのもそうなのだが、ミニスカートでこちらに尻を向けていて、おまけに尻尾が飛び出ているレッサーのフトモモが嶺次の方向からは危険なことになっていて、むしろ嶺次は目を逸らさずにいられなかったのだ。

さっきから感じていたことではあったが、俗に言う女子校のノリ、というモノに嶺次は押され気味だった。

「わかってないって表情をして目を逸らさない。つまり――」

「方法は単純。教義の矛盾点を、圧倒的なまでに突けば良い。ワタシが日中に下見した大英博物館にある、『ロゼッタストーン』みたいなモノを使ってさ」

「『ロゼッタストーン』…?」

補足の意味があまり無かったレッサーの言葉を遮って、フロリスが日中に大英博物館にいた理由を告げた。

嶺次にすら聞いたことのあるキーワードも、共に。

『ロゼッタストーン』。

それをさらに引き継いだのは、ベイロープだった。

「1799年、ナポレオンの軍勢によって発見された、謎のヒエログリフが刻まれた石版。何を記してあるのかは未だ不明……ということに、“表では”なっているわ」

「何だよその言い方。まるで本当の価値を隠しているみたいな……」
「その通り。全ての信仰を無為にして、宗教の骨組みを全てバラす、なんて凶悪な力を持つてるんじゃないわよね」

宗教の骨組みをバラす。

嶺次にはその実感が沸かないが、それが意味するものをベイロープはかみ砕いて説明した。

ローマ正教、イギリス清教、スペイン星教派といった宗教は、“信仰無くして成り立たない”。

しかしこの『ロゼッタストーン』は、全ての信仰を無効にする。

信仰の無い時代を再現して、全ての魔術師が依り処にするはずの宗教を無力にする。

そして、行き場を無くした『天使の力』^{テレスマ}は…全ての住人にフィードバックするのだ。

一人一人が信仰を放つに十分な、『天使の力』が。

「つまり、その土地に暮らす人間が全て、個人個人の宗教を形作ることが可能になる……。それはモラルの崩壊だよ。日本みたいに宗教色の薄い国とも違う。日本ですら下敷きには仏教、陰陽道があるというのに、それすら消えるのだから」

ベイロップの言葉は、いつの間にかただの少女のものではなくなっていた。

どこかで聞いた……。そう、あの白髪 of 魔術師と似た雰囲気 of、重い言葉に。

「でも……。そんな『天使の力』に、学園都市の超能力者は耐えられない……。そういうことか」

ここへ来てようやく、嶺次の頭の中で糸が繋がった。

この国にいる人間を容赦なく巻き込む、万人の神格化。超能力者とは最も相容れない存在。

「言霊を生み出しただけ、手を掲げただけで内部爆発を起こす、異質で莫大な『天使の力』。とても超能力者には耐えられないだろうね」

フロリスが肩をすくめて言うまでも無く、その瞬間には嶺次の覚悟は決まっていた。

目の前で、宣言したのだ。

彼女を、護るために戦うと。

「俺に、ベイロップ達を手伝わせてくれ！」

「何を今更。そのためにアンタに……。嶺次にわざわざ説明したんじ

やないか」

「ベイロープ……」

年相応の少女らしく歯を見せて笑うベイロープは、拘束されたままの嶺次へ近付くと、膝の辺りで屈み、足首に施された木の足枷のようなものを解いてくれた。
しかし。

（……っておい！ この体勢はマズい！ ベイロープ、シャツのボタンを開けすぎだろ！！ 予想を裏切らないサイズの胸と黒の下着だなあとか……いやいやそうじゃなくて！！！！）

あれだけ格好付けた台詞のやりとりの後でひどく言いづらいことであるのは承知した上で、あえて、嶺次は目を逸らしてベイロープに言った。

「あのー、見えてるんだけど……」

「？」

彼女が不思議そうな目を嶺次に向け、顎で示す先を目線で追い、その意味に気付き、顔を真っ赤にするまで、僅か0.5秒。

「ツッ！！??？」

声にならない叫びとともに後ずさるベイロープは、今までのリーダーシップも何処へやらといった表情をしており、涙目になりながら両手で胸を抱く彼女を、嶺次は不覚にも可愛いと思ってしまった。
——当然、数秒後には我に返った彼女の制裁を喰らうことになるのだが、このことが後日まで彼女がレッサーに絡み付かれる原因になるとは、ベイロープは予想だになかった。

e p. 4 全ての信仰を無為にして（後書き）

いかがでしたか？

次回は、行間をお送りします！

行間 第六感でも使わない限り（前書き）

今回は行間です。

未鶴視点のサイドストーリーをお送りします！

行間 第六感でも使わない限り

目の前には、明かりが灯るレンガ造りの建物。

表札には、『イギリス清教・女子職員寮』と英語で記してある。

とても裏の世界との接点には見えない、穏やかな外観。

しかし、手紙に記された住所が示すのは、この場所だった。

「……………よし」

ここまで走ってきたことで荒れた息を整えると、彼女――はいがさみ灰笠未鶴は、そのドアをノックした。

こんなことをする理由は、簡単なもの。

おそらくは超能力とは“違う力”を使う少女によって連れ去られた嶺次の手掛かりを、求めているだけだ。

どうすれば良いのか、という疑問に対して、未鶴が興条学園の教師たちに連絡する、という手段もあっただろう。しかし彼女の頭の中には、頼る先、いや、問い詰める先などここしか思い浮かばなかった。

この時点で、彼女の思考は混乱していたのだろう。

嶺次を連れ去った少女と本当に関係しているならば、不用意にこんな場所へ来るべきでは無いし、これがどれだけ無謀なことなのか、普段の彼女なら分かりそうなものだった。

しかし彼女は、この場所を一つの象徴のようにすら考えていた。

ここの人間を問い質すなりすれば、嶺次の危険は去るのではないか。ここの人間の行動を止めさせれば、嶺次はもう戦わなくて済むのではないか。

そうした、物理的な力を有するが故の固定的な敵を、彼女は勝手に創造していたのだ。

そして、応対した一人の女性を見て、未鶴は我を忘れそうになった。

「どうか……したのですか？」

キョトンとした表情でドアの向こうに黙り込んだままの未鶴を見つめ返す、ポニーテールの日本人女性。

肩口で大きくカットされたデニム地のジャケットと、片方の太股だけを大きく露出させたジーンズ。

あの時と違うのは、身の丈ほどもある鞆を携えていないことぐらいか。

「あ、あの……これを、アイツから預かってきて……」

彼女を直に見ただけで心に渦を巻く何かに、未鶴は上手く話せない。それを自覚することに恐怖するほどす黒い何かに、彼女の胸は押し潰されそうになっていた。

「これは……ああ、雪崎嶺次に渡したものですか。——まさか、彼に何か？」

その言葉を未鶴が聞いた瞬間。
彼女の中で、何かが弾けた。

（どうして……？）

どうして、白々しいまでの嘘をつけるのか。
どうして、そんな風に自然に驚けるのか。

どうして、嶺次が巻き込まれている危険を知らないのか。
どうして、どうして、どうしてどうしてどうして。

「う………ううううあああああああ！！」

“激情”としか表現できない中身を抱えて、頼りにしていたはずの手紙もかなぐり捨て、未鶴は彼女へ突っ込んだ。

激烈な踏み込みを乗せて、相手のことも考えずに放たれた拳は、無防備だった彼女へ向かう。

しかし、次に彼女の記憶にあったのは、目の前の女性——神裂火織に組み敷かれ、手足を封じられた状態だった。

何がどうなって、この状態に追い込まれたのか分からない。

レベル4の『フィジカルアップ肉体強化』に相応しいだけの動体視力を有しているはずの未鶴にすら、相手の拳動が見えなかった。

嶺次を巻き込んだはずの彼女にも、拳が届かない。

（やっぱり……届かないの？）

思い知る、嶺次がいる世界と自分のいる世界との差異。

ずっと、知らず知らず嶺次に護られてきた自分には、きっと追いつくことすら許されない。

「これほどの超能力——、貴女は一体……何者ですか」

声色を急激に変え、背後で神裂は尋問の体勢に入る。

こうなれば、もはや、超能力者としての灰笠未鶴に残された手段は何も無いではないか。

否、あるとすれば。それは、一人の人間としてだ。

好きな人の事を想う人間としての行動しか、できない。

「お願い……します」

「？」

質問に答える気配を見せず、未鶴はただ言った。

「もう、アイツを……嶺次を、こんなことに巻き込まないでください……」

「……？」

「この前のことだって、きっと凄く危険なことだったんでしょ？
嶺次が命を危険に曝すのを、私はもう、見たくないんです……
今度だって、いきなり攻撃されて、連れ去られて、私、何が何だか……」

混乱しながらもなんとか言葉を紡ぐ未鶴に、神裂は息を吐いた。

「それが、理由でしたか」

緊張の糸が切れたように未鶴の拘束を緩め、その手を取って立ち上がらせる神裂。

彼女の目には、自分への罪の意識が映し出されているようにも見えた。

どこまでも不条理な今の一撃に対しても、自分が曝されることは当然だとも考えているかのように。

続く未鶴の説明を促し、一通りの事情を聞いた後で、神裂は喋り始

めた。

「最初に、あの時彼らを巻き込んでしまったことをお詫びします。そのことで言い訳をするつもりはありません」

「あの、どうして拘束を……」

「最初から、貴女には殺意を感じませんでした。よほどのことが無い限り、そもそも反撃の意志はありません。無論、雪崎嶺次に危害を加えるつもりはありません」

「じゃあ……」

ですが、と、期待の色を見せた未鶴を制するように神裂は言った。

「今回の一件に、私たちとの繋がりはありません。信じてもらえないかもしれませんが、私たちにも捕捉できない魔術結社が活動しているとした……」

「そんな、な………!？」

冷たく、彼女は言った。
これ以上関わるな、と。

「雪崎嶺次は、必ず私たちが助け出します。ですから貴女は、これ以上踏み込まないでください」

それを告げることが、彼女にとっても苦しいことであるのが未鶴にも分かっていた。

だが、未鶴もこの場で退くことはできない。

「じゃあ……手伝えることは無いんですか？ 私だって……」

「ですから、貴女のような超能力者には余計に無理だと言っているのです。———それこそ、第六感でも使わない限り」

「――!!」

そうですか、と俯き加減に答える未鶴。

それで、問答は終わり。

神裂は未鶴を女子寮の外まで連れ出すと、申し訳無さそうに頭を下げた。

手掛かりを失ったのだ。

力ずくで聞き出すことは出来そうにない上、彼女が今まで見ていた『闇』がほんの片鱗であることを思い知らされ、未鶴はふらつく足取りで寮を後にしようとしていた。

しかし。

『第六感』。

その言葉が、彼女に閃きをもたらした。

(そうだ………)

誰かを捜す、という目的で使われることなど滅多に無いが、彼女の、いや、嶺次の仲間には“そういった”能力を持つ人がいたのだ。

閃きは確信に変わり、それは彼女が歩み出す力となる。

(やっぱり……私はじつとしてなんかいられない!)

なりふりかまわぬ彼女の想いが、どのような結末を産むのか。それはまだ、誰も知らない。

——それを女子寮の窓から一人眺める、神裂火織がいた。

（人の想い……ですか）

彼女にも、護りたい仲間がいて、恩を返すべき相手がいて、背中を預けられる戦友がいる。

だからこそわかる。

彼女は、危険だ。

御しきれずに暴走する想いが何を生み出すのか、それを神裂は知っているから。

（私も、行かなければなりませんね）

夜の街へ、七天七刀を携えた神裂は飛び込んだ。

10月の半ばとはいえ、換気も不十分で閉じ切ったままの部屋は息苦しい。

そう思って、窓を開け放ったのは翠隻解理。

ひんやりとした空気に、隣で文庫本を読んでいた田鞘橙李は顔をしかめるが、その意図を理解しているのか、制止まではしない。

「帰って来ないなあ……………」
「ああ」

その理由は、3人部屋だというのに一つが空っぽのままのベッド。自由時間を終えても、雪崎嶺次は帰って来ない。

修学旅行の自由時間を振り切る、というのは高校生なら普通にしていそうな行為でもあるが、彼らは学園都市の能力者なのだ。それも、高レベルの。

彼らは自分の体がどれほど危険で、高価なものかを知っているから、よほどのことが無い限り学校側の指示に従う。

しかし、そんな高レベル能力者である雪崎嶺次が、戻らない。

誰かに呼び出されていた、という噂も聞いたが、どうにも要領を得ないまま。

そんな二人のほんの少しの心配が、この行動には現れていた。

3階の窓程度なら、嶺次の超能力でワイヤーを造り、よじ登れるだろう、という二人の予想。

そしてそれを、最も予想外のカタチで裏切ったのは、灰笠未鶴だった。

ドツツ！！！！と。

3階のはずのこの部屋に、彼女は突っ込んできたのだ。

前触れも無く、しかも真横から。

余波の風で大きく、千切れそうに揺れるカーテンの下で、未鶴は二人を見つめる。

「お、おま、お前は……」

「何を……してるんだい？」

口をぱくぱくとさせ、上手く喋れない解理。普段は冷静な橙李までも、言葉をなくしている。

しかし未鶴は、そんな彼らに詰め寄った。
とある目的のために。

「お願い！ 解理と橙李の力を貸して！」

彼女が頼りにしたのは、解理の能力。そして、更なる強化を行うための、橙李の能力。

『第六走査』^{シックスセンス}と、『音声操作』^{マニュアルスピーカー}。

顔を見合わせる彼らの能力は、灰笠未鶴という媒体を介して科学反応を起こす。

行間 第六感でも使わない限り（後書き）

いかがでしたか？

次回、敵と直接対決します！

e p. 5 幾千年も時を経れば（前書き）

今回は、フラヴスとの直接対決です！

新たなる光のメンバーも、コメディを抜けてシリアスモードに入ります！

e p. 5 幾千年も時を経れば

大英博物館から少し離れた、美術商の集まる通り。

深夜には人通りも無くなるこの場所に、不自然に停められたファミリーカー。

その中に、茶髪でカチューシャの少女、ランススを除く『新たなる光』と雪崎嶺次の4人は身を潜めていた。

日本の刑事ドラマにありがちな張り込みのような緊張感を、本来なら与える雰囲気。

しかし、嶺次はひきつった笑みを浮かべつつ、車内の様子に苦言を呈していた。

「あのさあ……明らかに俺より年下のフロリスが車を運転してたとか、何でフラヴスがこの場所を狙っているのかとか、聞きたいことはある。だがな……一つ言わせろ。このザマは何だ！！？」

「「「ふえ……？」」」

嶺次が肩身を狭くして座っているのは、後部座席の右4分の1。

夜食で買ってきたハンバーガーの争奪戦に端を発した女子同士の取っ組み合いは、もはや嶺次の手に負える程ではなくなっていた。

ミニスカートの奥、面積のやたら小さいパンツを隠そうともせずベイロープの胸を揉もうとするレッサーと、両手で上げたままのハンバーガーセットの袋を死守しようとするベイロープ。それを呆れ顔で見ながらちゃっかりポテトを頬張るフロリス、といった半ば地獄絵図のような光景に、嶺次は頭を抱えていた。

「何なんだよお前ら！ フラヴスを張り込んでいるんじゃないのか！？」 緊張感の欠片も無いじゃないか！ 魔術組織ってこんなのか！？」

「そう思ってたんなら元凶のコイツを止めろ嶺次！！ ひゃっ、止め……っ」

「良いからそのゴージャスセットを寄越すんですベイロップ！ でないと……」

わきやわきやと指を蠢かせ、レッサーは笑う。

しかし、フロリスは後ろ二人の女子をスルーして、嶺次の質問に答えた。

「この先にある店には、『ロゼッタストーン』と同世代の出土品が展示されてるのさ。ああいう特殊な魔術品を扱うには、幾つもの法則を読み取らなければならない。そしてフラヴスの足跡は、まだこの店には無いってワケ」

左サイドから聞こえる二人の声（ほとんどは喘ぎ声）のせいで嶺次の頭には入ったり入らなかったりだが、なんとなく趣旨は理解した。

「さっき下っ端の強盗たちは俺がのしちやった訳だし、この場所にフラヴスは必ず現れる、ってことか」

「そういうこと。まあ、フラヴス本人も一応は魔術師だから、油断はしちやいけないんだけど――」

そう言いながら視線をバックミラーへとやった先にはベイロップとレッサーが絡み合うさまが映っていて、フロリスは面倒そうに肩をすくめるのみ。

普通の少女らしい、かどろかは知らないが、子供のような彼女達の様子に溜め息を吐く嶺次。

突如、そんな光景を打ち破る爆音と振動が嶺次たちを襲った。

10メートルほど先の角の、直接は見えない位置にある目的の古美術商。

その辺りからと思われる空気の圧が、路地を伝って車を揺らす。爆発音を伴うそれに顔色を変えたのは、『新たなる光』の3人が先だった。

「――！！」

「いきなりハデにかましますね……」

「いいから行くわよ！」

などと言いながら、無駄の無い動作で『鋼の手袋』と言っていた武器を構えると、彼女達は車の外へ飛び出す。

訓練された軍隊のように、ほとんど反射神経の領域で動いていたようにすら感じる。

それにワンテンポ遅れて、普通の大能力者（レベル4）である嶺次は何とか追い縋る。

（やっぱり魔術師、だな。さすがに早い……！）

走りがけに掴んだ街灯を取り回しの効く大きさに成型しなおすと、嶺次も角を曲がる。

しかし、その先に広がる光景に彼は絶句した。

「ハッ。 僕を先に捉えたのが『必要悪の教会』の連中じゃないこ

とは、喜ぶべきことなんだろうね」

笑む、褐色の肌の男。

すでに3人の魔術師に包囲されているにも関わらず、狂気とも自暴自棄とも違う笑みを、彼は浮かべ続けている。

その姿は、まるで行商人のようだった。

ゆったりとした外套に、白いターバン。

背負う荷物にも敵意は見えず、攻撃的な印象は全く受けない。

しかし、全てを上書きしてしまうほどの敵意の象徴が、彼の後ろ、古美術商の店内に聳えていた。

“杭”だ。

幅も丈も、男のシルエットを易々と越えるほどに巨大で鋭利な木の杭が、彼が背を向ける古美術商の店内へ突き刺さっていたのだ。

しかも、ひとつやふたつでは無い。

築かれた杭の山を背にして、男は——フラヴスは言った。

「君達は、どこぞの魔術結社かな？……フハッ、想像以上に小規模だなあ」

「少数精鋭なんです。黄金系のバカみたいな規模の連中と一緒にしないください」

話を振ったにも関わらず、ふうん、と興味無さそうに応じるフラヴスだったが、彼の視線は次の瞬間には固定された。

「余裕こいてんじゃ……無いですよ？」

問答のうちに何時の間にかにじり寄っていたレッサーが、『鋼の手袋』を振りかぶって突っ込んだからだ。

先端には大きく膨らんだシルエットの爆炎と粉塵を捉え、先ほど嶺次が嫌というほど味わった破壊力を伴って、それはフラヴスへ迫る。

しかし、状況から一步退いてその様子を見ていた嶺次には、あまりに不吉なものが視界に入ってしまった。

急襲を受けたはずのフラヴスが、顔を伏せ、吐き捨てるように嗤ったのだ。

ぞくり、と、背筋を舐める悪寒。

あかしがぜはや赤石風早と初めて戦った時や、このえりきゅう近衛利休の内面を知った時のような、抑えられない感情。

「気を付けろレッサー！！ そいつは何か――」

さっき自分を痛めつけた少女の身を案じる、という矛盾した行為であるにも関わらず、嶺次はいつの間にか叫んでいた。

その懸念は現実のものとなる。

最初はフラヴスの眉間の辺りに生まれた小さな光だった。

しかし、一瞬の後に空中で広がったそれは、正体を現した。

魔法陣。

空中に見たことも無い文字を刻み、フラヴスの体を守るかのように描かれた魔法陣。

直径2メートルはあるそれ自体が禍々しく発光し、レッサーの攻撃を受けるためにジャストのタイミングで展開を終えた。

そして、

魔法陣ごとフラヴスを貫いたはずのレッサーの攻撃は、塵と消えた。

槍の先端に捉えた炎と煙の交じるそれが、文字通り消滅したのだ。逸らされたのでも、受け止められたのでも無く、“消えた”。

魔法陣というフィルターを通した瞬間に、全てを奪い去られたかのように。

あまりに異質な状況に、レッサーは踏み込みを止め、跳び下がる。そして気付いた。

「『鋼の手袋』が……削られている……？」

鋭利なフォークにも似た形状をしていたはずの『鋼の手袋』の先端が、刃の中間で消失していたのだ。

——ちょうど、魔法陣の向こうへ透過した分だけ。

それに気づいたレッサーが、驚きと共に口を開いた瞬間、フラヴスもまた、行動を起こしていた。

「まさか、アンタのそれは……」

「ヒントは、ここまでだよ」

歪めた口元のままに、フラヴスは布の集合体にしか見えない服の内側から何かを取り出した。

嶺次の位置からでは詳細な形状は見えないほど、小さなモノ。

それをフラヴスは、魔法陣へ——その向こうのレッサーへと放り投げた。

刹那。

魔法陣を境に、巨大な木の杭が出現した。

否。

バヂィ!! と、ショートにも似た音を響かせ、放り投げた木片が巨大化したのだ。

「――ッ!!」

続く言葉を許さず、巨大な杭は小柄なレッサーの体を軽々と吹き飛ばした。

「レッサー!!」

思わず駆け寄った嶺次だが、彼女は『鋼の手袋』の柄の部分で辛うじて杭の威力を受け流し、何事も無かったかのように立ち上がる。しかし、嶺次が安堵するよりも先に口を開いたレッサーは、呆れるように口を尖らせて言い放った。

「さっきからバカみたいに叫ばないでもらえますか。みつともないです」

「な……、何だよその言い草は」

「小さなことは放置です。それより、フラヴスは情報以上に厄介な魔術を行使するみたいですよ……?」

そこへきて、レッサーの表情は真剣なモノになった。

——確かにそうだ。こちらからの攻撃を完全に打ち消し、向こうから放り投げられた杭を巨大化させるという魔法陣。

そんな理不尽な一方通行を見せ付けられては、迂闊に攻撃も拘束もできない。

嶺次には見当も付かなかったが、レッサーと、後ろから言葉を続けたベイロップにはそのトリックが解っていたようだった。

「つまり、“時間の操作”……………」

「え？」

「ああもう、要領が悪いわね。良い？ こちらの魔術は、幾千年も時を経れば朽ち果てて消えるけど、フラヴスの放った杭は——何らかの加工をしてあるのでしよう、経過した年月の分だけ成長する。そんなエピソード、聞いたことも無いけど、目の前で術式のレベルに精練されていたら、信じるしかないわ」

ベイロップが苛立ちまぎれに言ったそのの意味を、嶺次は先ほどの現象と照らし合わせて理解する。

レッサーが叩きつけた爆炎は、急激な時間の経過で消失した。

フラヴスが放った杭は、その成長を促進され、巨大な凶器と化した。

——つまり。

（おい…………俺の能力は、ちつとも役に立ちそうにないじゃないか？）

物理的な干渉を、一切無に帰す壁。

金属を操作する、というレベル4の能力が頼りなく思えた嶺次に、
フラヴスは笑む。
チカラ

「ハッ。遊んでないでさあ、かかってきなよ。……………それとも、戦意喪失したかい？」

本物の魔術師である『新たな光』のメンバーさえも怯ませて、時間の概念が通用しない敵は、懷に手を伸ばした。時

e p. 6 我を忘れて勝てるわけが（前書き）

フラヴスとのバトルに、予想外の事態が発生！
嶺次に、未知の事態が起こります。

e p. 6 我を忘れて勝てるわけが

「ハッ。反撃は来ないのかい？」

穏やかな笑みを絶やさないフラヴスの攻撃は、一方的だった。

魔法陣の壁に全幅の信頼を寄せているのか、立ち回りは極端に少なく、遭遇した時の位置から足を動かしていない。

それでいて、魔法陣を経由した巨大な杭の雨は、それ自体が『新たな光』や嶺次の攻撃を掻き消して余りあるものだというのに、フラヴスの前には絶対の壁が立ちはだかっているのだ。

「くそ……余裕の表情してやがる……！」

アスファルトに深々と突き刺さった杭の一つに背を預け、フラヴスの様子を伺う嶺次。

腹部を押さえながらのその表情は苦々しく、目線を交わすベイロープやフロリスもどこかに傷を負っている。

何しろ、直接それを受ければ人間の体など真っ二つにちぎられるであろう巨大な杭だ。衝撃の余波でさえ、嶺次たちの体力を奪っているのは簡単だった。

「フラヴスは、ただの骨董品オタクじゃなかったのか？」

「そうね……確かに、彼の経歴と術式は合致しない。扱いも自己陶醉的で、魔術師と呼ぶには稚拙だけど―――」

そこから先を、ベイロープは言えない。

何故なら、空中に放り投げられた木片が、これまでにないカタチに巨大化したからだ。

元は、立方体だったのか。

巨大化に伴って分解されていくそれは、複雑に組み合わされたまきびしのように彼らの頭上に降り注ぐ。

彼らを押し潰さんと、テトラポッドほどもある大きさで。

「こんな、数を………!!」

これまでとは違う攻撃に直面したベイロープは、『鋼の手袋』ではなく、耳の後ろに装備されていた真空管のような機具に左手を当てた。

そして、嶺次に呼び掛ける。

「下がって!」
『ギャツラルホルン 知の角杯』に巻き込まれるわよ!」
「?」

訳も分からず数歩後退したところで、機具の周囲から青白い火花が散った。

高圧電流のようなそれが、瞬く間に彼女の構える『鋼の手袋』へと伝播し、物理的な法則を無視して刃の部分へ、そして全体へと蓄えられていく。

円錐の突撃槍にも似たシルエットとなり、端的に威力を証明するそれは、ベイロープが右手で捌め手に構え、天に掲げたと同時に、炸裂する。

「ミヨルニルの特性を完全に生かすには少し物足りないけど……喰らえ!!」

カツッ!! と、セルリアン・ブルーの閃光を放って無数に枝分かれます雷撃が、降り注ぐ杭を迎え撃った。

思わず目を覆う嶺次の耳には、無数の爆発音が連続して聞こえる。

視界を取り戻すと、後には焼け焦げた木片がぱらぱらと落ちてくるだけだった。

雷、いや、発電所級の高压電流で、焼き碎いたのだ。

嶺次の中にある電気工学系の知識も、その異質さを思い知らせる。

「スゲェ……完全でない、って言ってたのにこの威力……」

『鋼の手袋』を振って残るスパークを払い、ベイロープは再びフラヴスを睨んだ。

「随分、その術式を信頼しているのね。さっきからそれに頼りつきりじゃない。二番手、三番手の術式は無いのかしら？」

挑発の色を含むその問いかけにも、フラヴスは穏やかに応じる。

それは同時に、嶺次に不審を与えるものだった。

「新たな時代を創るこの僕が、既存の術式なんかを使うわけにはいかないだろう？　僕はようやく手に入れたんだよ。新たな法則を。これは、運命すら僕の味方をしてくれることの証明だと思わないか？」

運命に味方されて、この術式を得た。

フラヴスが言ったことが比喻でない——彼の力量でなく、他者の介入や何らかの偶然で彼がこの術式を手に入れ、こんな行動に及んでいる——なら、十全に扱いきれない可能性もある。

（……一つ、試してみるか）

考えた策をベイロープに耳打ちすると、彼女もそれに賛同してくれた。

彼女達の力量は底が知れないが、必要な条件をクリアできるのかを確かめておく必要があるだろう。

「でも、そのためにはかなり高熱の炎が必要で……」

「それなら、即席で用意できるわ。レッサーと嶺次は陽動を、ワタシとフロリスが後方で備えるから、嶺次は準備しておきなさい」

「――解った」

心強い返事を返された嶺次は、目線を周囲に走らせて確信を得た。もはや原型を留めないほどに破壊されたこの通りには、彼の策を叶えるための“素材”が数多く眠っていることに。

「そんじゃ……未熟な魔術師サマには眠ってもらうか！」

もはや杭の森と化した道を駆け、嶺次とレッサーはフラヴスの注意をこちらへ向ける。

攻撃を回避しながら街灯に触れ、時間差でフラヴスへと倒れて行くように加工する嶺次と、正面から異様な怪力で杭を放り投げ続けるレッサー。

それら全てを、フラヴスの展開した魔法陣は微動だにせず消滅させていく。

「あのー、こんなんじゃ目くらましにもなってないですよ？」

ゴルフボールを打つように気軽に地面をえぐりながら、レッサーは嶺次に呼び掛ける。

確かに、幾ら巨大な杭や街灯を叩きつけても眼前で消滅してしまうのでは、目くらましの意味が無い。

だが、走り回っては何かを掌に収束させている嶺次は不敵に笑った。

「これで良いんだよ。とりあえずは」

そう呟いた嶺次に応じたのは、レッサーでもベイロープでも、フロリスでも無かった。

「ちつとも……良くなああい!!!!」

響く少女の声。

だが、そちらへ振り返るまでも無い。

軽いドップラー効果さえ伴って聞こえるこの声の主は――

灰笠、未鶴だ。

肩で息をしている彼女が、わざわざ危険から遠ざけたはずの彼女が、最もこの場にはいけない彼女が、どうしてここにいるのか。そんな疑問を整理する間もなく動いたのは、フラヴスが先だった。

「ハハッ。――邪魔だね」

嶺次の動揺も疑問も無視して、フラヴスは懷から木片を放る。しかも、速い。

これまでのように嶺次でも躲せる速度とは桁が違う。速度までも、何倍にもされていくかのように。

そして、杭というよりは針の形に巨大化していく木片たち。

その標的は、嶺次。

「ツッ!?!」

鋭利な切っ先がこちらを指して巨大化する瞬間に、フラヴスは笑って言う。

「別に彼女が誰でも良いけど、都合良く動揺してくれたからね。――今、何を企んでいるのかな？」

「この……!!」

見抜かれていた。

嶺次には、反論も、抵抗もする間もない。

ただ、迫る針を視覚で追うことだけ。

しかし、その聴覚が捉えたのは叫びだった。

自分の名を呼ぶ、命懸けの声。

理解のための瞬間を置かず、嶺次の前に一つの影が立ちはだかる。

「未、鶴………?」

その華奢な身体を、庇う間も無かった。

雪崎嶺次の目の前で。

巨大で鋭利な針は、灰笠未鶴の左肩と右脇腹を、あって無いように刺し貫いた。

本来なら、彼女の身体程度で止められる速度でも、質量でもない。しかし、横合いから滑り込んだ彼女の身体は、嶺次の急所を狙って放たれた針の向きを変えたのだ。

向きを変え、すぐ後ろで呆然と立つ嶺次の腕を掠める針。

そして、後方で響いた爆発音と共に、未鶴は崩れ落ちた。
——その身体から、信じられない量の血液を流して。

「え……………」

あまりに唐突に訪れた絶望に、嶺次には数瞬が必要だった。

「何で……」

彼女の身体を抱き留め、その名を呼び掛けるまでには。

「何だよ！ 未鶴うううう！！！」

「あはは……、失敗、しちゃったな……」

嶺次が必死に彼女の傷口を押さえ、鉄分などを操作して傷口を塞ぎながらも、未鶴は苦笑いを浮かべていた。

苦痛に顔を歪めることもせず、純粋に自分の無力さを恥じるように。

「どうして、こんな、何で、血が……………！！！」

「解理くん、橙李くん、お願い……したんだ。力を…………貸してほしいって。嶺次を探す、耳をください……って」

彼女が此処へ来た方法。

その答えが、翠隻解理の有する能力にあったのだ。

『シックスセンス
第六走査』。

この能力は、勘や気配といった意味の第六感としてでなく、六つめの感覚として、“他者の五感の一部を借りる”。

使い道は限られるが、対面している相手の視覚を借りてカードゲームでイカサマをしたり、——レベル4の『音声操作』マニピュアルスピーカーの聴覚を、第三者に付与することも、できる。

例えば、ロンドン市内に響く無数の音から嶺次の声の波長を増幅して抽出すれば、その居場所を探ることも、可能だ。

「でも……あんまり、役に立たなかったなあ………」

頑張ったんだけどね、と力無く続ける彼女の身体が今にも消えてしまいそうで、嶺次はひたすらに呼びつづける。

「駄目だ未鶴！ そんなことない、俺はお前に助けられた！」

この一言を聞いた未鶴は、表情を一瞬止めると、苦笑いでなく、本当に微笑んだ。

それが、待ち侘びた言葉であるかのように。

「少しは……、嶺次を、助けられたんだね………」

よかった、と。

そう言った未鶴は、意識を失った。

それだけなのに、彼女の身体が急に重くなった。

さっきまでの不気味な軽さとはまた別の、冷たい重みが嶺次の腕の中に響く。

「————ツッ！！！」

未鶴は、生きられるのか。

この華奢な身体は、これだけの血液を失って耐えられるのか。

そういった当然の心情が頭の中に、理性的に駆け巡る一方で、嶺次の本能は、激情は、一つの標的を設定していた。

目線の先で笑んでいるであろう、一人の魔術師。

「う、ううううう……あああああああ！！！！」

己がヒトであることさえ忘れ果て、彼は行動する。

自らの能力を発動するための条件である、手で触れているという解
釈を拡大。足元に広がる血溜まりを媒体として、嶺次は周囲の無機
物を捕えていく。

その様子は、石畳が鈍色の湖に沈んでいくかのよう。

「バカ！ 我を忘れて勝てる相手じゃ無い！」

ベイロープが叫ぼうとも、彼は意に介さない。

“雪崎嶺次が扱える質量を越えている”というのに、その無機物た
ちは繊細に成型され、攻撃の為のカタチを成した。

未鶴を抱きしめたままの嶺次の背から、無数の銃口が固体化したの
だ。

「へえ……………」

フラヴスですら感嘆の息を吐く、その光景。

嶺次の背から、まるで翼のように発生している砲身は、複雑な金管
楽器のように絡み合いながらも、その全てがフラヴスを捉えている。
戦車、いや、戦艦級の存在感に圧倒される『新たなる光』のメンバ
ーは、その射線上から逃れることしかできない。

嶺次が、涙の伝う頬を上げた瞬間——それは炸裂した。
銃撃、というよりは黒い土砂降りにしか見えない、爆撃として。
喉を裂くほどの絶叫に、初めて、『新たなる光』の少女たちは嶺次
に恐怖というものを覚えた。

「俺が……お前を殺してやる!!!!」

e p. 6 我を忘れて勝てるわけが（後書き）

いかがでしたか？

今回も、感想、批評などあればお待ちしております。

e p. 7 先に謝っておく(前書き)

嶺次の暴走が招くのは、一体……？

e p. 7 先に謝っておく

『新たなる光』のメンバーたちの耳をつんざくのは、銃撃の音では無い。雪崎嶺次の絶叫だった。

彼の激情をそのまま弾丸へと変換しているかのように、無尽蔵に、断続的に、黒や銀の入り混じる弾雨がフラヴスへと横殴りに襲い掛かる。

しかしその全ては、魔法陣に阻まれて届くことは無い。

「がああああああううううあああああああ！！！！！！！！」

そのことが、嶺次をまた逆上させる。

獲物の前に立ちはだかるガラスの存在を認識できない獣のように、咆哮し、銃撃を繰り返すだけだ。

そこに、もはや理性は感じられない。

(嶺……次……)

この一部始終を見ているベイロープは、戦慄を覚えずにはいられない。

嶺次の前に立ちはだかつて攻撃を受け、重傷を負った女子高生。

それを引き金として、嶺次は暴走したのだ。

おそらくは彼女が、嶺次が最初に語っていた“護りたい人”なのだろう。それを目の前で血まみれにされれば、ああなるのも理解できる。

(炸薬の音もしなければ、薬莢も排出されない……どういうシステムで銃弾を撃っているのかも分からない。……ホントに恐ろしいわね、暴走する能力者っていうものは)

論理と学術に基づいて魔術を行使する、彼女たち魔術師には有り得ない現象。

その攻撃力には目を見張るばかりだが、理性を喪失しかけている嶺次の様子は、非常に危うい。

寄らば撃つ、と言わんばかりの殺気を放出している彼を邪魔しようものなら、きっとベイロープ達も攻撃の対象になるだろう。

そうなった場合、厄介な武器庫と冷酷な杭の嵐をかくぐらなければならぬ。

（ああもう……さっきまでのアイディア、コイツの暴走止めるために使うことになるなんて……！）

ここでフラヴスを逃がすことと、目的自体を遂行できなくなることとを天秤にかけたベイロープが取った策は、撤退だった。

フラヴスに隙を生み出すために考えていた策を、嶺次に使うことで。

「レッサー！！ その出来損ないの槍、よこして！！」

「？ わかりましたけど……」

ベイロープが示したのは、嶺次が先ほどまで掻き集めていた鈍く光る槍……のような金属片。

少女の下へ駆け寄った時に放り投げたものだが、形状は遠目には『鋼の手袋』に似ている。

きっと、自分たちが扱いやすい形状に嶺次が成型したのだろう。

「これ、何に使うんです……かっ！！」

槍投げの要領で放られたそれを受け取ったベイロープは、未だに咆哮と銃撃を続ける嶺次の近くへ移動していたフロリスへ向け、目線

で合図する。

（フロリスの準備も整った。視界を奪うってことがどれほど有効か分からないけど、使えるモノは使う………！）

合図を受けたフロリスは、懐から片眼鏡モノクルのようなレンズを取り出し、空中に放る。

そこへ、嶺次の集めた金属片を撃ち込むのは、ベイロープの役目だ。

「目を醒ませとは言わない！ 頭を冷やせ、バカ嶺次！！」

熱を集める、という効果を極限に増大されたレンズを突き破る形で、鈍色の金属片は嶺次の眼前へ突き刺さる。

嶺次の意識がそこへ向かう前に——それは起爆した。

「ツッ！！！」

爆発、というよりは燃焼なのだが、花火のようにまばゆい白色の光は、簡易式のスタングレネードと称するに相応しい光量をほとばしらせていた。

（想像以上………これは効いたみたいね）

本来ならフラヴスの視覚を奪い、隙を作るための、マグネシウムの槍だ。

ほとんど爆発に近いが、正確には表面を一瞬で炎が覆うように調節されたそれは、白色の燃焼反応、つまり閃光を放って視界を削ぐ。まして、フラヴスを睨みつけている嶺次の眼前で発火したのだ。そこには、否応なしに隙が生じる。

「全く……こういうことするんなら、先に言っといってくださいよ！」

後方から視界を狭められたレッサーの文句が聞こえるが、ベイロープはそれを見殺して耳の後ろ、ヘッドホンのように装備されていた『知の角杯』に手を伸ばす。

嶺次を無力化するための最後の手段が、彼女が装備しているこれだ。

（至近距離からでなくても、金属の電導率は高いはず——）

高まる放電の音と共に、ベイロープは『鋼の手袋』を嶺次の背後に聳える無数の砲身へ向ける。

一瞬、彼を傷つけることへの躊躇いが横切った自分への戸惑いも覚えつつ、それでもベイロープは雷撃を放った。

「先に謝っておくんだから、恨まないでほしいわね！」

自身の頬に伝う冷や汗を血と勘違いしながら、青白い雷球は嶺次が構築した感情の牙城へと突き刺さった。

「ハッ、無様に撤退とは。拙い以上にあっけない」

不意打ちの閃光をも最小限の動作で防ぎ、視界を取り戻したフラヴスの前には、魔術結社を自称する少女たちが撤退した痕跡のみが残

されていた。

あれだけの弾雨を受けたフラヴスの背景は、蜂の巣、といった状態を越え、削り取られてもはや跡形も無い。
ただし、彼を中心とする円形の空間を除いて。

（それにしても……あの少年……）

魔術結社の中でも異質な存在だった、白い筋が髪に入った少年。
新手の少女を攻撃しただけで、あの少年は怒り狂った。
あれは、とても裏の世界を知る人間の行動とは思えない。

（そして、金属を操作する能力――）

触れねば操作できないということは、あの男の出来損ない、とも呼べる力だ。

しかし、最後に見せた怒りは。

（まあ、勘繰っても仕方のないことか）

目的のモノは手に入った。

後は、“本体”へ向かうだけ。

悠然と立ち去る彼の後ろで役目を終えて朽ちていく杭の様子は、不気味な未来を暗示しているようでもあった。

「遅かったか」

フラヴスが立ち去ってから、実に数分後。

ボロボロと朽ち果てていく杭の森の中を、全身が黒の一色で統一された魔術師が歩いていった。

テオレルドⅡミラー。

独自にフラヴスを調べていた彼もまた、フラヴスと『ロゼッタストーン』の関わりを見抜き、関係する魔術的品々の位置を辿り、ここへ駆け付けていた。

そして見つけたのは、無残に破壊され尽くした路地。

『必要悪の教会』の探查網にも引っ掛からずに、これだけの破壊をもたらしたことに、テオレルドは純粹に驚愕していた。

それはつまり、ここまで激しい戦闘の痕跡をごまかすだけの力量を持つ者同士の戦闘であったことを暗示していたからだ。

大胆にも、聖ジョージ大聖堂から1キロも離れていない地区で。

「襲撃を受けた古美術商の方には、魔術的な痕跡は無い。つまり、第三勢力が存在するということ………」

その第三勢力がフラヴスを撤退させたのか、それともフラヴスがそれを迎撃したのか。

明らかに魔術的な“杭”と、明らかに物理的な“弾痕”は拮抗しているように見え、テオレルドはそれを確かめる術を持たない。

しかし、顎に手を当て、思考へ陥ろうとしていたテオレルドを引き戻したのは、凜とした女性の声だった。

「あなたは、『エグゼキューター執行人』の………」

一体、いつこの場に現れたのか分からない気配と声が、背後から届いたのだ。

殺気さえ放って振り返った彼の前に立っていたのは、

「何故、お前までもが……」

同じ勢力に属する者として、戦場で同士討ちを避けるために、顔く
らいは覚えている。

いや、ロンドンの魔術師の間で彼女を知らない人間など、いるのだ
ろうか。

聖人にして、現、天草式十字凄教、女教皇。

「神裂………火織」

彼らが、互いに持つ情報を交換し、一方は更なる謎を、そして一方
は一つの確信を得るに至るまで、時間はそうかからない。

e p. 7 先に謝っておく（後書き）

いかがでしたか？

今回と前回の内面描写はなかなか苦勞したので、楽しんでいただけ
ると幸いです。

次回は、ズバリ『反撃の時間』です！

e p. 8 反撃の時間だ

『新たなる光』が、アジトとして保有している貨物列車の中。

武骨な壁と屋根の中に、簡易式ベッドと、人数分のソファが用意されている。

簡易式のベッドには、先の戦闘で重傷を負った少女が寝かされている。

魔術的な治療を施されて命の危機を脱しても、彼女の意識は戻らない。

そんな彼女たちの空間に、雪崎嶺次はいた。

ただし、ベイロープの胸元を掴み、壁に叩きつけて。

「何でだ……!!」

ダン!! と、車内に響く音に、フラヴスとの戦闘の様子を直接知らないランシスが怯えを見せる。

それほどに、嶺次の表情は怒りに満ちていた。

「何で、アイツの前から俺を連れ戻したんだ!!」

無理もないな、と、胸元を掴まれたままベイロープは思う。

戦闘のあった場所で、突然乱入してきた少女。

あの少女を傷つけられた瞬間、嶺次の感情が文字通りに爆発した。

その様子を見れば誰だって、彼女が嶺次の言う“護りたい人”だということくらい、分かる。

その上、彼女は嶺次を庇って傷を負ったのだ。

自分が護りたかった人が、自分の為に傷つく。このことが、どれほど彼の内面を傷付け、ぐちゃぐちゃにしたのか。

そのことは、彼が発現したあの銃口たちが証明してくれた。

「俺がアイツを…殺さなきゃ…!!」

しかし、嶺次が見せる感情は最初に訴えていた激情から変化していた。

声も、徐々に小さくなっていく。

ベイロープの胸元を掴む力も弱くなり、遂には手を下してしまうほど。

（嶺次…）

その理由が、ベイロープには分かった。

あの“暴走”が証明したのは一つだけではないのだ。

彼の、圧倒的な無力感。

暴走した瞬間に、攻撃の手段としてフラヴスへ直接殴りかかっていたことを選択しなかった時点で、彼は自分の限界に気付いていたのだろう。

確かに、フラヴスとの戦闘中には見せなかったことはある。

それでも、今の彼の中には明らかに、フラヴスへの怯えが見えた。

幾ら攻撃しても、何の影響もない壁。無数に反撃される、巨大な杭。否、それだけではない。

自分の大切な人を貫いたあの槍も、彼の脳裏には焼き付いているはずだ。

「未鶴に合わせる顔が…無いだろうがよ…っっ」

自分を奮い立たせようとする言葉とは裏腹に、彼の力は抜けていく。ここが限界か、とベイロープは口の中で呟いた。

超能力者といえど、自分たち魔術師のように戦闘の訓練を受けた訳でもなければ、戦場の空気に染まった訳でもない。

ここで彼を突き放さなければ、今度こそ危険に曝されるのは自分たちであることくらい、彼女には簡単に予想できた。

「――アンタは、」

ベイロープが、続く言葉で彼を本当に突き放そうとした瞬間。

「れい、じ……」

彼女が、口を開いた。

雪崎嶺次が“未鶴”と呼んだ、グレーのボブカットの少女が。

嶺次が真っ先に驚いて振り返るが、彼女の意識は戻っていない。

うわ言のように、そばへ駆け寄る嶺次の名を呼ぶだけだ。

数少ない、メッセージと共に。

「嶺次…、怪我しちゃ……いやだよ？」

「……!!」

驚きを隠せないのは、ベイロープたちよりも嶺次の方がそうだろう。彼女が口を開いたこともそうだが、その内容だ。

自分の方が重い傷を負っているというのに、嶺次を案じる“未鶴”。臃で拙い言葉が、かえって彼女の想いをストレートに伝える結果になっている。

それを受け取った嶺次は、最初は茫然とするしかなかった。

しかし次の瞬間に、ベイロープは見た。

彼の口元に、力強い笑みが浮かんでいるのを。

「……ハッ」

ベイロープたちのことなど眼中に無く、嶺次は独白する。

「こんなになってまで、俺の心配して……」

立ち上がる彼の表情は、ほんの数十秒で真逆のものに変貌していた。心を折られた敗者の雰囲気は、すでにそこには無い。

何度叩き折られようと立ち上がる、挑戦者の心。

「自分のことなんかで折れそうになってる俺が——馬鹿みたいじゃねえか!!」

大きくため息を吐きながら、こめかみの辺りを指で突くベイロープが抱いた感想は、

（単純なヤツめ。——でも、少し羨ましいかな）

彼女を護る、という決意を胸に、もう一度立ち上がる雪崎嶺次なら、自分たちと肩を並べて戦える。

今の嶺次なら、フラヴスが次に現れると予測される場所……『大英^{アー}セナル

博物館』へと同行させても、問題ないだろう。
そしてベイロープは、この時点で確信していた。
彼の能力こそが、フラヴスを突破するカギになることを。

『アーセナル大英博物館』。

世界中から集められた学術的に貴重な品々を保管、研究しているこの施設は、時期を問わず観光客で溢れている。

しかし今、深夜2時という時間帯はさすがに静まり返っていて、入り口のエントランスも人氣が無い。

ギリシャの神殿建築を再現したこのエントランスには白い柱が規則的に連なっていて、最低限の警備用照明に照らされている光景は一種幻想的にも見える。

そんな空間を、規則的な靴音を響かせて歩く人影があった。

白いターバンを緩く纏い、警備員を気にするそぶりも見せずに歩く男の名は、フラヴスⅡハートライン。

褐色の肌を殆どさらすことの無い、平和的な行商人のような装束の下には、巨大な凶器の源である無数の木片が忍ばせてある。

彼の性格や術式の二面性を、そのまま象徴するように。

先ほど、強硬な古美術商から奪った特殊な“釘”や“金鎚”を携えたフラヴスが向かう先は当然、『ロゼッタストーン』本体の保管場所。

悠然と、とある目的のためにこの場所へ来た彼は――歩みを止めた。

そして、薄く蛍光灯が照らす空間に反響するように、笑う。

「フハッ。あれだけ痛め付けておいて、まだ僕の前に立つのかい？」

挑発に応じる言葉はない。

ただ、一人の少年と三人の少女が静かに現れた。

ラクロスのユニフォームのような服装で統一された、しかし魔術師として洗練された実力を持つ、『新たな光』。

そして、その中で一人異彩を放つ、日本人の少年——雪崎嶺次。彼女たちの手には『鋼の手袋』が握られているが、少年は似たような作りの鎚を手に入っていた。

長さは『鋼の手袋』程だが、先端は六角柱を横に倒した形状の金属塊へと入れ代わっており、斬撃よりも打撃のための武器と伺える。先ほどの戦闘では無かった、明らかに魔術的な武装だ。

（北欧神話、トールの扱うミョルニルにも似ているが……彼は魔術師だったのか？）

魔術師のように戦闘訓練を受けていないにも関わらず異能を使う、という観点からフラヴスが想像していた、彼が超能力者である可能性と符合しない現実。

それを面倒だと考えたフラヴスは、魔法陣の展開と共に懐の木片を放り投げた。

理解する必要は無い。先制の攻撃で少年を仕留めることができれば良いのだから。

バヂッ！ という放電のような音からほんの少し遅れて、巨大な杭は彼の体躯を貫く——はずだった。

ゴガァァン!!! と。

響いたのは、少年の肉体が擦り潰される音では無かった。

少年が操る鎚が、眼前に迫る杭を叩き落とした音だったのだ。

それも、一瞬でフラヴスの放った杭以上に巨大化した鎚を、人ならざる剛力で振り下ろして。

「バカな……!」

回避することはできない、とフラヴスは踏んでいた。

彼の前で乱入した少女を傷付けた時に、少年の顔に激怒と共に浮かんだ恐怖を理解していたから。

実際に対面した瞬間にも震えていた足が、彼の恐怖を象徴している。防御することはできない、とフラヴスは確信していた。

この魔法陣は、単純に杭の質量を増大させるものではなく、魔術的な影響への耐性をも強化するものだから。

実際、最初に杭を受けた少女が見せた見事な回避が、フラヴスの脳裏には残っていた程だ。

しかし目の前の少年は、そんな“些細な事情”など無視して、杭を叩き落とした。

「何だ……君は」

気付けば、フラヴスはおののきながらも叫んでいた。

怯えなど一切見せない、刺すような視線を放つ少年を前に。

「何なんだお前は!」

対する少年は、フラヴスの疑問に応じることなく口を開いた。
戦うために。宣戦布告のために。

「ここからは……………反撃の時間だ!!」

e p. 8 反撃の時間だ（後書き）

嶺次の内面から、反撃に転じるポイントでした。

いかがでしたか？

今回も、批評や感想など、受け付けています。

e p. 9 どこまでも素人だな（前書き）

フラヴスとの戦闘は続きます。

圧倒的な魔法陣への対処法はいかに…！？

e p. 9 どこまでも素人だな

「覚悟しろよ、フラヴス。俺は……お前を許せそうにない」

巨大に変貌した鎚を軽々と振り回し、隣のベイロップとフロリスを横目で見た雪崎嶺次はフラヴスへと向かって歩を進める。

軽々と押し戻されないように。フラヴスの攻撃ごときで揺らがないように。

「へえ…随分と態度が大きくなったものだね……っ！」

最初の一撃で多少取り乱したように見えたフラヴスだったが、苦笑いを浮かべながらも攻撃を止めない。

———もともと、嶺次が最初に叩き落とした杭を踏み越えるまでに受けた数十の杭の全てを、嶺次は迎撃していたのだが。

（ハッ。最初からこんなことができれば、未鶴も傷付かずに済んだのにな……）

当然、超能力を除けば一般の男子高校生である嶺次“一人”にそんな超人的なことができる訳もない。

西洋の甲冑の如き鈍色の籠手と、肘の先までが覆われた武骨な雰囲気放つ白い帯。

科学的に見れば、防御用の籠手、そして肉体を保護するためのテーピングのように見えるだろう。

だがその正体は、嶺次へ強大な力を付加する『メギンギョルズ籠手』と『ヤールングレイブル力帯』である。

と、嶺次はベイロップたちから説明を受けていた。

（――まあ、俺も詳しいタネは知らないんだよな。ぶつつけ本番にしては、上手くいったけど）

「……………これが、俺の力になるのか？」

『大英博物館』にフラヴスが現れるのはもはや確定事項であるらしい。

そこへ向かう車中で、フロリスは古めかしい装備を取り出していた。

「北欧神話でトールが女性の神様から借りて、ミョルニルを扱ったとされる、『メギンギョルズ籠手』と『ヤールングレイプル力帯』。レベルは弱いけど、嶺次の力を強化できる霊装だよ」

助手席に座る嶺次へ向けてぞんざいに放るそれを受け取るが、どうにも頼もしい雰囲気はしない。

所々に錆びが見える籠手と、二回目を使うテーピングのような布では、もっと別のものに頼りたくもなるものだ。

それよりもまず、嶺次は当然の疑問を返した。

「おい、俺みたいな超能力者が魔術の品を使えるわけないだろう？」

一瞬、自分に血みどろの特攻を言い渡したのかと勘繰って身を竦める嶺次だったが、フロリスはどこか自慢げに、

「さっき言ったじゃん。その霊装は、“借り物”なんだって。さっきの神話から特に“借りた”という意味合いを抽出することで、超能力者である嶺次は魔力を操作することなく、剛力を扱えるように調整されてるの。ただし、私たちの側にいるときだけね」

「へえ……凄いな」

「この程度、私たちの手にかかれば一発よ」

科学と魔術の垣根をこうも容易に突破できる彼女たちに、素直に感嘆の息を吐く嶺次。

だが、後部座席で『鋼の手袋』を調整していたはずのレッサーが顔をひよこつと出すと、ニヤリと笑みを浮かべて言った。

「おや？ フロリスが自分で必死に開発した特製品を褒められて赤くなってますよ？」

「う、うっさいぞレッサー！」

「フロリス！ 前！ 前！」

無理に後ろを振り返ろうとしたせいで蛇行した運転に冷や汗を流しつつ、嶺次はもう一つ質問する。

「俺がパワーアップできるのは解ったけど、このハンマーも必要なのか？」

レッサーを後ろ手で払いのけたフロリスはテーピングの中に紛れていた金鎚ほどのハンマーに視線をやると、含み笑いと共に、

「そこで、嶺次の能力の出番ってわけ」

「行くぜ……」

静かにフラヴスに告げるだけでなく、力を貸してくれたフロリス、ベイロープ、レッサーにも聞こえるように言い放つと、嶺次は瞬時に鎚を巨大化させる。

「――、来なよ」

緊張の糸を張り巡らせるフラヴスの目からすれば、視界を急激にズームしたように見えるだろう。

しかしその実態は、小さな『ミョルニル』を核として構成された鎚を、六角の空洞を空けたハリボテのように膨らませただけなのだ。最初は術式の効果を疑問に思っていた嶺次も、今では防御だけでなく、攻撃にも転じるだけの威圧感を放っていた。

『嶺次の能力で金属を操作できれば、勝手に『天使の力^{テレズマ}』が空洞の分の重量を補ってくれるよ。ミョルニルには、大きさも自在に変化したというエピソードがあるから、それを利用したの。でも、金属の操作ばかりは使用者に頼るしか無かったからね。助かったよ』

と、フロリスがどこか嬉しそうに言った言葉を反芻しながら、嶺次はその『ミョルニル』を構えた。

そして同時に、踏み込みのために重心を後ろに下げる。

――その一瞬を、フラヴスは狙った。

「やっぱり、戦闘は素人なんだね」

言い終わるか否か、フラヴスが繰り出したのは、未鶴を貫いたあの針。

それも、数本では無い。

嶺次の位置からでも“種子”が見えるほど大量に。

「……ッ」

魔法陣を通過する際の放電音さえも莫大なものにして、針は巨大化し、高速化した。

一瞬ですべてが巨大化する様子は、巨大なハリネズミが背を向けているようにも見える。

嶺次がいる範囲はおろか、ベイロープやフロリス、レッサーの位置までも一掃しかねない針の嵐。

勝利を確信したフラヴスの笑みも、無理からぬことだろう。

しかし、彼の表情は一瞬で凍りついた。

何故なら、迫り来る針を、後方の仲間たちに及ぶ範囲の針までも全て、嶺次は撃墜せしめたからだ。

「!?!?」

理解したくない現実を前に、今度こそフラヴスは驚愕を隠せない。
ほんの一瞬、不気味なまでに巨大化したミヨルニルは、叩き折り、
打ち払い、針の嵐を掻き消したのだ。

その光景は、空間を削り取っているかのようにも見えただろう。

「何を驚いているんだよ。俺の術式を見越しての攻撃は、こんなものか？」

「この……っっ！」

「安心しろよ。お前に止めを刺すのは、俺一人だからな」
「調子に乗るな……不完全な能力者!!」

いつのまにか縮小されていたミヨルニルを手に、嶺次は歩む。
どれだけの攻撃を受けても、その歩みは止まらなかった。

おののくフラヴスをミヨルニルの射程に捉え、今度は雷神としての
トールのエピソードを間接的に用い、常人の速度を遥かに越えた領
域で、嶺次はミヨルニルを身体の後ろに構える。

フラヴスの前に絶対の壁が立ちはだかつていようと関係ない。回り
込むような軌道で、圧倒的な質量をたたき付けてやればいい。

死神の鎌のように、灰色の残像さえ尾を引く一撃がフラヴスを背後
から砕こうとして、

「ハハハッ。どこまでも素人だねえ、君は」

フラヴスの、狼狽していた表情が消えた。

それどころか、待ちかねた、と言わんばかりの笑みさえも彼は浮かべていた。

「!？」

背筋に走る悪寒を押さえ込もうとして、嶺次の動作が一瞬滞る。その一瞬で、形勢が逆転するには十分だった。

「君が強いことは理解した。彼女達から君の鎧への魔力の流入も理解した。――ならば次にすることは、君という攻撃手段を封じるほかに無いだろうか？」

口角を裂いて笑んだフラヴスと嶺次の間に立ちはだかったのは、一つの魔法陣では無かった。

「フハハッ。こんな簡単に押さえ込まれるとは、僕も驚かされたよ」「こんな……ことも、できるのか」

一つ一つの面積はコースター程に小さくとも、相当な数に分裂した魔法陣。

通過したものの一切を無に帰す壁が、嶺次の腕を、胴を、足を、ゼロ距離で取り囲んでいたのだ。

おそらく、展開された面積はそう変わっていない。

それでも、対象を微動だにできない状況に追い込む檻としては充分な拘束力を持っている。

デッ……と。

羽虫が蛍光灯に飛び込んだような、嫌な音が嶺次のすぐ側で響いた。それは、嶺次の髪の毛の先端が魔法陣に“飲み込まれた”音。

（人間として不可避の震えでも届く位置への展開かよ……。俺の直

接攻撃を読んで、至近距離でなけりや展開できないわけだ……)

自らの危機さえも演出して己の有利に変換するフラヴスの戦術は、素人と呼ぶには巧妙すぎて、彼が先ほどは全力ですらなかったことを裏付けていた。

「ああ、彼女たちも動かないですよ？ 妙な——たとえば、魔力を送るみたいな素振りをみせたら、彼を真っ赤なハリネズミにしてしまいかもしれないからね」

何らかの対処をベイロープたちが見せる前に、フラヴスは杭の種を見せ、言葉でそれを封じる。

しかし、続く言葉が何を招くのか、フラヴスは予想していなかった。

「でないと、この少年がさっきの女の子みたいに血みどろになるよ？……もつとも、君たちが先にそうなるんだけど」

その言葉が、嶺次の中の忌まわしい記憶を鮮明に呼び覚ました。

嶺次を人質にベイロープ達を傷付ける。

こんな不条理を、雪崎嶺次は許すのか？

(こんな………)

さっきのように、嶺次は誰かが傷つくのを黙って見ているしかない？ 未鶴の仇を討つと決めた自分が、信賴してくれたベイロープたちの

枷になる？

(こんなことを……！)

無理な態勢で固まったままの嶺次の手が、震える。

それだけで、ミヨルニルに施された装飾は削られ、嶺次のブレザーの袖さえも不吉な音と共に塵に帰していく。

嶺次の肉体が触れても、何の抵抗も無く削り取るはずだ。だが。

「それが、どうしたんだ!!!!!!」

至近距離での絶叫に、フラヴスがおののく。

声を出した反動でさえ、彼の体を削って、蝕んでいく。

痛い。

身体を服の上から鑢で削られているような鈍い痛みが嶺次の脳裏を

占領する。

しかし、それがどうした。

こんな程度じゃ済まない傷を、痛みを、未鶴は受けた。

未鶴を護ると決めた自分が、この程度で怯んでいられるか。

「おおおおおおお!!!!!!」

痛みを掻き消すほどの絶叫と共に、嶺次は跳躍した。

最も魔法陣の面積が少ない空間——“上”へ。

どういった理屈かは知らないが、フラヴスの展開する壁は全て、地面と垂直だった。

ならば、寸分の狂いなく上方へ飛び上れば、いくばくかの肉体を犠牲に、この檻から脱することも可能。

垂直に身体を切り裂かれながら、嶺次はフラヴスへ『ミヨルニル』を構える。

この行為が——超能力者が魔術を使うということが、どれほど異質なのか。

そんなことに、気付くこともなく。

e p. 10 ありがとう (前書き)

ついにフラヴス戦が決着します！

e p. 10 ありがとう

嶺次が雄叫びと共に跳躍する様に、ベイロープたちは驚きを隠せない。

「嶺次が…超能力者が…魔術を使っている…？」

それもそのはず。ベイロープたちは今、魔力を送信すらしていない。普通の身体能力に戻った嶺次に見た目通りの質量を有する『ミヨルニル』を扱うことなどできるわけもなく、目の前の現象を説明できるのは、“超能力者が魔術を使っている”という、常識を無視した唯一の可能性のみ。

（そんなわけ…でも…！！）

確かに、嶺次に貸し与えた霊装は複雑な操作を必要とするものではなく、魔力が送信されずとも一定の“代償”を払えば、術者の魔力を剛力に変換してくれるように設定してある。そこへ思い至った彼女の目に飛び込んできたのは——嶺次の傷から溢れ出る血に染まった、『籠手』と『力帯』。

（最も原始的で、最も効果的な“代償”か…偶然、なのかしら）

本来絶望的な状況を、己の傷で逆転するこの幸運に背筋を寒くしながらも、ベイロープは、レッサーは、フロリスは、己の魔力を精製し、嶺次へ叫んだ。

些細な事情などものはやどうでもいい。

今、大事なのは、嶺次の攻撃が届こうとしていることだけなのだか

「か……………ッッ」

ようやく通ったとはいえ、狙いを定めることもままならなかった攻撃だ。

正確にフラヴスの脳を揺さぶっていれば、この一撃で決められたかもしれない。

しかし、足がふらつくフラヴスはよろめきながらも——立っている。

「甘かったか……………」

ギリリ、と嶺次が奥歯を噛む音が聞こえてきそうだった。

ターバンを出血で赤く染め、今にも倒れそうなフラヴスだが、嶺次との間にはあの魔法陣を再び集結させている。

命を危機に曝されたからこそその抵抗とも言えるが、状況は芳しくないだろう。

何故なら。

フラヴスの怒りは、狂気でも逆上でもなく、静かな獣のようなそれだったからだ。

「この、僕を……………傷付けるなんて」

ぞくり、と。

嶺次の背筋に走る悪寒は、これまでとは全く質の違うものだった。
その源は、“経験”。

この数ヶ月、路地裏の喧嘩とはくらべものにならない殺意や傷を目の当たりにしてきた嶺次の中には、そういった人間に対する察知のための基準が構築されていたのだ。

その“経験”が、喉を枯らして叫ぶ。

退け、と。

その瞬間にも、フラヴスは震える両手に小柄なナイフを備えていた。これが巨大化すれば、どれほどの質量、攻撃範囲を招くのかなど、想像したくもない。

(どうする…)

スローモーションにすら見えるフラヴスの反撃に対抗する術は、殆どを削り取られて柄のみに成り果てた『ミヨルニル』しかない。
あの魔法陣を越えて届かせる攻撃手段など、手元にあるわけもない。

(どうする……!?)

頼れるものは、何もない。

『籠手』と『力帯』は、術式の発動に必要な部分までも削り取られ
たらしく、文字通りの飾りとなってしまった。

ましてや、夜来の協力によるレベル5など――

(違う！ ここにいないアイツに頼ってどうするんだ！ 俺は……
…)

加速する思考の中で、滲み出る弱さを切り捨てる。

その根拠は、とくに解っていたはずだった。

ずっと共存してきた、己に宿る力――ヒートプレス圧力成形。

（俺は、俺自身が、未鶴を守るために、強くなる！！）

すでに、魔法陣の向こうからはナイフが迫っている。

そこへ突っ込むことへの恐怖を押し殺し、嶺次は『ミヨルニル』の柄を右手で突き出した。

「!？」

当然、魔法陣に吞まれ、削られ、1メートル弱の鋼の棒は塵と化していく。

残された武器をわざわざ捨てるような行動に、嶺次は何の躊躇いも見せない。

困惑を見せるのはベイロープたちだけだった。

しかし、その表情は驚愕に変わる。

魔法陣の向こうで再構築されていく『鋼の手袋』によって。

「な……っ!？」

当然、最も驚いているのはそれを見せ付けられているフラヴスだろう。

それでも、魔法陣の効果を一番理解している彼だからこそ、その理屈を掴んだようだ。

「やってくれるね……こんな、懷に飛び込んで…」

しかし、ゼロ距離で打ち込まれる槍への対抗策など打てるはずがない。

ズッドォ！！！！と。

先端を『鋼の手袋』のままに構築された槍は、フラヴスの腹部へ突き刺さる。

壮絶な衝撃を放った一撃によりフラヴスがくずおれると同時に、禍々しい光を放っていた魔法陣が消滅した。戦闘の終結を、そのまま意味するように。

「俺の能力を最大限生かすこと…それが、この壁を貫くことこの条件だったのか……」

崩壊と再構築を幾度も繰り返し、歪な模様を描く槍を手に、嶺次は一人ごちる。

この魔法陣は、“物質を消滅させる”ものではない。

一瞬のうちに莫大な時間を経過させ、劣化させ、霧消させる壁だ。つまり、質量保存の法則も、超能力の影響も活きている。

魔法陣の向こうで霧散する、極小の粒子状の“金属”を操作できるなら、時を巻き戻すように、崩壊させられた武器を再構築することも、可能。

ただし、相当のリスクを伴う行為でもある。

自分の能力を信じて、躊躇うことなく近接戦闘を仕掛ける———今まで、さまざまなモノを頼ってきた嶺次が見せることの無かった戦法だ。

だからこそ、不意を突き、この壁を打ち破れた。

（俺も少しは……強くなれたのかな………）

駆け寄るベイロープたちに笑いかけ、嶺次はその手に勝利を掴んだことを実感していた。

気体となった金属さえも操作できるという、新たな領域の力と共に。

灰笠末鶴が感じたのは、緩やかな振動。

誰かの歩幅に沿って揺らされているような、穏やかで、優しい感覚だ。

（私は……）

朦朧とする記憶と感覚の中に、数時間前の出来事がよみがえる。また戦おうとしている嶺次を探すため、友達の力を借りた。

躊躇うことなく、戦いの場へ飛び込んだ。

そして、傷付こうとしていた嶺次を救うため、大けがを負った。

（——あれ？）

でも、その傷は殆ど癒えている。痛みも無ければ、体がそこまで動かないということもない。

感じるのは、体が底まで沈んでいきそうな、深い深い疲労感だけ。

そこがかえって奇妙に感じられ、これまでの血みどろのできごとが、悪い夢だったかのような。

確かに感じるのは、緩やかな振動だけ。

（これって、やっぱり…）

それがようやく、誰かに抱えられているからだと感じると同時に、彼女の視界が開けた。

そこにあっただのは、幼いころから一緒に過ごしてきた、とある少年の顔。

ずっと守ってきたと思っていたのに、本当はずっと守られてきて、やっぱり、ずっと好きで。

ついさっき、その想いを告白した少年……雪崎嶺次だった。

「……な!？」

彼の顔がとても近いその状態が、“お姫様抱っこ”と言われる状態だということに気付いた瞬間、彼女の顔が真っ赤に染まった。

肝心の嶺次はと言えば、未鶴が意識を取り戻したことに気付いていない。

それでも、その顔には新しい傷跡があった。すぐ隣の肩には、血が滲んだ跡があった。

（また、戦ったんだね……）

でも、未鶴は嶺次を責める気にはなれなかった。

彼の顔が、とても晴れやかだったから。

私の傷のせいで落ち込む嶺次なんて見たくない。嶺次にはいつも、笑っていてほしい。

だから。

「…嶺次。ありがとう」

ほんの少し顔を動かして、頬にキスをした。
これは、感謝でも、恩義でもなく、本当の想いだから。

「……………え？」

ようやく、抱えていた未鶴が意識を取り戻したことに気付いた嶺次
が見せた表情は、安堵というよりは驚きと焦りだった。

状況を何とか飲み込み、顔を赤くする嶺次に向けて悪戯っぽく笑っ
てみせる。

いっぱい、話してもらわないといけないことがあるんだから、と一
人ごちて。

ロンドンの霧を貫く朝日の中、二人で帰ってきた嶺次と未鶴がクラ
スメイト、および先生からトラウマレベルの恐怖を植えつけられる
のは、まだ、先の話。

e p. 10 ありがとう（後書き）

嶺次たちはハッピーエンド。

しかし日付は、この時点で10月17日。
そう。あの出来事の前日なのです。

次回は、次章へ続く挿話です。

e p. 11 それを聞いてどうする（前書き）

今章のエピローグであると同時に、次章のプロローグとなる1話です！

e p. 11 それを聞いてどうする

雪崎嶺次、そして灰笠未鶴が去った、貨物列車のカモフラージュを施された『新たな光』のアジト。

その中には、先ほどまで嶺次と共同戦線を張っていたとは思えないほど、冷徹な言葉のやり取りが重ねられていた。

「……そんな簡単に吐いていいの？ 仮にも、私たちの知識に無い、レアリティの高い術式の理論を」

「言っただろう？ 僕は負けたんだ。願いを叶えることも、役目を果たすこともできずにね」

片方は、『新たな光』を代表する形で質問しているベイロップ。もう一方は、拘束を施され、口だけを動かして反応しているフラヴスⅡハートライン。

両者の間で交わされている質問はといえば、フラヴスが使用していた術式のこと。

北欧系が中心とはいえ、世界中の術式やエピソードをある程度網羅している彼女たちの知識から完全に漏れている彼の魔術を、ベイロップたちは問い質していた。

——もつとも、彼女たちの本当の狙いはほかにあるのだが。

「『カルナマゴスの誓約』……近代魔術としてもマイナーなジャンルの中から、さらに亜流を確立したのね……」

しかし、一種拍子抜けするほど簡単に、フラヴスは術式について口を割っていた。

彼が語ったのは、既存の宗教とは確かに隔絶した術式の理論。

だが、そこには一つの穴がある。

彼の経歴と、現状との不一致だ。足がかりも無しに高みへ昇ってしまふかのような不自然さを、魔術をかじる者なら誰でも感じるだろう。

「でも、こんな複雑で不確定な理論を、『必要悪の教会』の監視下にあったアンタが、開発できる訳が無い」

「………」

問答は、核心へ突入した。

フラヴスの表情が硬化したことで語気を強め、ベイロープは言う。

「言いなさい。誰が背後にいるの？」

「それを聞いてどうするんだい？ “あの人” までも、イギリスの為に捕縛するのか？」

高望みはしないほうが良い。とでも言わんばかりのフラヴスを制して、ベイロープはその先を口にさせる。

既存の宗教を崩壊させる、などと大それたことを最初に仕掛けたのがこのイギリスだった、というのは、彼女たちが最初から気になっていたことだ。

十字教、あるいは宗教そのものを嫌うなら、信者の多いローマ正教を最初に潰せば良い。

何故、このイギリスだったのか。

そこには、何らかの意思があるのではないか。

そう考えていたベイロープ達に告げられた名前は。

「あの人の名前は―――」

「――え？」

聞き違いかと思った。

間違いだと、思いたかった。

しかし、フラヴスはその動揺に味をしめたかのように、最後の抵抗としてその名を繰り返す。

「何度でも言うさ。僕に力を与えてくれたのは――」

それは、絶望に等しい。

あの組織の中で最強、故に唯一人残るあの男が、この国を狙っていることは。

「……もういい」

脇でフラヴスの拘束術式をコントロールしていたフロリスに言って、フラヴスの意識を落とす。

バチン、というスタンガンじみた音と共に訪れたのは、沈黙。

それなりの修羅場を経験していると自負する彼女たちにすら、告げられた男の名は重すぎた。

口を最初に開いたのはベイロープ。

「このまま悩んでいても、仕方ないわね」

無理に自分を奮い立たせてみるが、言葉の端々が震えているのが自分でも分かる。

それでも、彼女たちにはすべきことがあった。

「レッサー。『カーテナ・オリジナル』の保管場所までの足を調達してくれる？」

唐突な指示にどこか面食らった様子ではあったが、レッサーはうなずくと踵をかえして外へ出ていく。

こんなに早急に必要になるとは思わなかった、あの霊装のある場所へ。

それから、と前置きして、フロリスにも指示を出す。

「フロリスは……キャーリサ様への回線を、開いてちょうだい」

本来、英国第二王女、キャーリサへの直接の通信など、できるはずもない地位の彼女たち。

迂闊に連絡を取ることは、キャーリサへのあらぬ疑いをかけることにもなりかねない。それほどにデリケートな立ち位置に、『新たな光』は居るのだ。

そうせざるを得ないほどの重みが、彼の言葉にはあった。

彼女へ伝えられたその情報が、あの出来事の火蓋を切ることになるとしても。

（キャーリサと繋がる魔術結社が動いた。それも、イギリス清教を守るために）

夜明け前、最も暗い時間帯の裏路地で一人思考するのは、テオレルドミラー。

彼が一晩ロンドンを走り回って、神裂火織などと遭遇して得た情報は、キャーリサが指示する組織が、この国にとって危険な芽を早々に摘み取ったという結論に至った。

それだけなら、彼女もこの国を守ろうとしている、という良い意味に取れるだろう。

事実、大英博物館のエントランスでの惨状、そして『新たな光』の残したフラヴスⅡハートラインを引き渡すという趣旨の予告文を見た神裂は、魔術結社がイギリスのために動いたと思っている。しかし、テオレルドの手元にある情報は、別の結論を導いた。

（キャーリサは、イギリス清教を壊されると“都合が悪かった”……）

彼女が手に入れようとしている『カーテナ・オリジナル』は、大英帝国の力を一つに集結することで莫大な力を生む霊装だ。

イギリスという国を構成するイングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドという四つの領土、王室派、清教派、騎士派という三つの勢力。そのいずれが欠けても、『カーテナ・オリジナル』は本来の力を発揮しない。

それは、これから彼女が成し遂げようとすることには都合が悪い。超能力者が大量に死ぬことなど、おそらく彼女の眼中には無かったはずだ。

この事態は、あくまで副産物でしかない。

（俺は——どうすれば良い）

これからキャーリサが成し遂げようとすることには、少なくとも犠牲が伴う。

その根拠だけで、感情論で彼女を責めることはできる。
しかし彼には分かるのだ。

キャーリサもまた、この国を愛していることに。

この国の民を、風景を、歴史を、未来を、きっと誰よりも愛している。

だから彼には、どうすれば良いのかがわからない。

しかし、状況はそんな猶予を与えてはくれなかった。

突如、テオレルドのローブの内側が光りはじめたのだ。

厚手のローブなど無視して裏路地を照らすそれに、テオレルドは絶句する。

これまで、幾度か見てきた光だ。

5年前も、そしてこの前、香港国際空港の屋上でも。

それが意味するのは、英国王室最深部との直接回線。

国家機密級のホットラインが、今、呼び出しを受けている。相手を想像するまでもない。

英国の第二王女、キャーリサからだ。

懷から光る針を取り出すと、テオレルドはわずかに逡巡する。

このまま下手な感情など抱かずに、『必要悪の教会』所属魔術師として、この国と関わるのか。

それとも——断絶した王家の末裔として、この国と関わるのか。
その選択を、テオレルドは迫られていた。

e p. 11 それを聞いてどうする（後書き）

いかがでしたか？

次回からは、テオレルドを主人公に据えて、英国クレーダー編をお送りします！

e p. 1 お前と決別するために（前書き）

新章突入！！

主人公はテオレルド、舞台はイギリス、クーデター編です！

※今章では、いままで避けてきた原作への介入を行おうと思っています。
ます。

そういった類のSSがお嫌いな方は、ご注意ください。

e p. 1 お前と決別するために

10月17日、午前4時。

張り詰めた空気の執務室とはまた違う趣向の装飾を施された私室で、英国第二王女、キャーリサは光の中にいた。

（さて……私はこんなことをして良いのだろうか？）

何事も即時即決する彼女には珍しい、逡巡の瞬間。

そこには、相応の理由がある。

これから言葉を交わそうとする男は、彼女が自覚する数少ない“弱点”なのだから。

自らの過去と深く関わる危険な踏み切り台の上に、彼女は立っている。一歩間違えば過去に囚われたまま戻れなくなる、危険な立ち位置だ。

それでも、彼女は通信を止める気にはなれなかった。

（ここで後戻りすることが、敗北でなくて何だと言うの。――私は、そんな風に弱くは無いつもりだ）

銀色の針を中心とした魔法陣の中、一方的に呼び続けるキャーリサ。その声に、応える感覚があった。

最初は、ノイズと間違うような振動でしかなかった。

次の瞬間にはそれが声であることを確信できるほど、明確な答えとなって彼女を呼ぶ。

「……………そうか。もう、決断してしまったんだな」

これまでより間隔が短い、それでも懐かしい声。

かつて、最も長い時間を共に過ごして、最も気を許した男。
この声の主。その名前は。

「随分と沈んだ声じゃないか？ テオ」

「そういうお前の声は……悲しい声をしている」

テオレルドⅡミラー。

今はそう呼ばれている、黒色の男だ。

髪から服装、扱う術式に至るまでが全て黒で統一された眼鏡の男。
この5年、姿を見てなどいないのに、彼の容姿は簡単に想像できる。

（元、許嫁か。言葉にするとひどく間抜けだし）

言葉にするのは簡単だが、そんな単純には語り尽くせない関係に、
キャーリサとテオレルドはあった。

「テオに心配されるとは、私も弱くなったな」

「——そうだな。今のお前は、弱くなった」

「おいおい、冗談に本気で返すバカがあるか」

「本気さ。お前がこの通信を使うときは、何かを決断してしまった
後ばかりなんだからな。父上が亡くなられる前も、お前に政略結婚
の話が持ち上がったときも——」

10年前、突如訪れた別れ。それからキャーリサとテオレルドが言
葉を交わした、数少ない機会。

それを引き合いに出す彼の記憶にも、確かにキャーリサは息づいて
いた。

そのことをどこかうれしく思う自分がいる。そのことを自覚した上
で、打ち消して、彼女は言葉を紡ぐ。

「ハハッ、あれは傑作だったな。私に結婚を申し込んだ男が、ポロであつけなく負けて帰っていく様子は、笑いをこらえるのに必死だったぞ?」

「冗談でごまかすな。今度ばかりは……笑って済まされないんだろう?」

皮肉を言い合う関係だったはずの二人は、今や敵同士。

テオレルドの突き放すような一言を皮切りに、沈黙と絶句のやり取りが続く。

しかし、キヤーリサは思う。

(テオには隠せない……か。お前の思い描く未来に、私がいないことは)

ならば、わざわざこの通信を求めた理由は何だ?

自問する彼女の脳裏には、弱さ、という言葉がちらつく。

(違う。私は、ここでお前と決別するために……)

キヤーリサには、成し遂げなければならぬ目的がある。

この国の未来のため。たとえ、己の人生を犠牲にしても。だから。

「そーだな……。私はテオみたいに優柔不断じゃないから、あえて言おう。私の目的のためには、お前が邪魔。だから、——さようなら」

今度は、繋がりを断つ。完膚無きまでに。

それだけを伝えに、彼女はこの通信回線を開いたのだ。

英国、軍事の第二王女。この国の強さは、自らの双肩にかかっているのだから。

言い切った彼女は、通信を終わらせようとして、

「キャーリサ」

術式の接続も、もはや曖昧。

ノイズが大きくさえぎる光の中で、テオレルドの声が聞こえた。

繋がりを断とうとするキャーリサとは真逆の意志を、伝える声が。

「俺は、お前をあきらめない」

「――――」

それにキャーリサが応じることなく、通信の術式は役目を終えた。

（全く…最悪のタイミングで言葉を残してくれたの）

光を失った針はとても脆い。

“今は”ただの女性でしかないキャーリサにも、易々と握り潰せるほど。

ぱきりと、拍子抜けする音さえ出して、テオレルドと言葉を交わす術は失われた。

表面を失ったそれは、割れたシャボン玉のように中身を失い、壊れていく。

崩れゆくそれを手にキャーリサが思うことは。

（そーかもな。私は……お前に、背中を押して欲しかっただけなの

かもな)

しかしそれを、彼女が表に出すことはもう、許されない。

一人の女としての事情を全て捨て、軍事の第二王女として歩み始めた彼女の“変革”は、すでに始まっているのだから。

崩れゆく針を手に思うのは、キヤーリサだけではない。

二つで一つとなっているこの通信用霊装は、片方が崩壊した時点でその意味を無くし、機密保持のために自壊するよう設計されていたのだ。

断たれた繋がりを象徴するかのように、崩れゆく手がかりは脆く、儂い。

——それでも譲れないことは、この男、テオレルドⅡミラーにもある。

「あんな声で……」

昔、キヤーリサと交わした他愛ない冗談の数々。

何事も勝手に自分で決断するくせに、誰かに背中を押して欲しがるキヤーリサ。

幾度も聞いた彼女の声は、ひどく揺らいでいた：ように感じる。

例えるなら、爆発しそうな内側を無理に抑え込んで、外の殻を繕っているような。

きつと、一朝一夕の付き合いでは感じ取れない。

でも、確かにテオレルドは思う。
彼女の言葉は、揺らいでいた。

「あんな声のキャーリサを……放っておけるか……」

テオレルドは、自分の心を封じて生きてきた。

自分の激情がどれだけの傷を、血を、殺戮を生んだのかを、彼はよく知っている。

でも、もう抑えきれない。

溢れるだけの想いを自覚して、テオレルドは手を握り締める。

瞬間、彼の想いを感じ取ったかのように、右手からこぼれ落ちる残滓に黒いスパークが混じる。

彼の家系だけに許された、特殊な魔術の欠片だ。

——そう。テオレルドⅡミラーの魔術に用いる『天使の力』^{テレズマ}の源は、彼の生命力を変換したものなどではなく、彼の“感情”だったのだ。

感情を喰って、魔力に変換する。しかも、術者の意図とは無関係に。それゆえにテオレルドが封じた感情は数えきれない。

自由に怒ることも、笑うことも、誰かを愛することもできなかった。そうやって自らに課してきた枷を、今度は自らの意志で破る。

キャーリサを、救うために。

「アイツに何と言われようと構わない。俺はもう…」

確かな覚悟を手に進む彼の足跡に、後ろ髪に、ローブに、黒い魔力の残滓が散る。

それは彼の中にある激情が、行動の一切を魔力の放出手段とせざるを得ないほどに高まっている証拠でもあった。

膨大すぎるその魔力に、テオレルドの肉体が耐えられる確証もない。しかし、英国でこれから巻き起こる変革に、魔術を起動するための機械などではなく、人間として飛び込んでいくのだ。

この程度のリスクは、あって当然だ。

「俺はもう、自分を偽らない」

ロンドンでは、朝を迎える。

この国の歴史に刻まれる一日の夜明けが、静かに彼を追い越していった。

e p. 1 お前と決別するために（後書き）

いかがでしたか？

次回はハイゼ以下執行人のメンバーも登場します。

今回も、感想や批評など、いただけると嬉しいです。

e p. 2 部下たちの信念くらい

決意の朝から半日が経ち、夜に包まれたロンドン郊外、とある教会の地下。

入り口の狭さからは想像もつかない広大なこの空間が、『必要悪の教会』の一部署、『エグゼキューター執行人』の本拠地である。

体育館二つはあろうかという広さの中にゴシック建築を模した柱が立ち並ぶその光景は、初めて見る人間を圧倒する。

そしてその奥、『実務管理官室』とプレートが貼られた先の室内には、重苦しい空気に包まれた中に、テオレルドⅡミラー、その相棒たる白髪の魔術師、ランサーⅡJⅡグレイス、そして彼らの直属の上司である『執行人』実務部隊管理官、ハイゼⅡヴィレクティム以下、『執行人』の魔術師の全員が居た。

深緑の髪やくたびれたスーツは普段のまま無関心でボサボサだが、彼本来の口調や表情も、緊迫した雰囲気放っている。

ここまで重い空気理由は、テオレルドがもたらした『変革』の情報。

「第二王女キャーリサを筆頭とする、王室派と騎士派。……なるほど。敵に回すには大きすぎるな」

自分たちがどれほど異端で、異質な存在なのか。

訳ありの魔術師を部下に抱えるハイゼには、そのことが良く解っている。

キャーリサが王女としての権力を発揮すれば、対外的な弱点になりうる自分達は、真っ先に“処分”されるだろう。

ハイゼは、そんなことを望んでいない。

「すいません……自分の事情に、管理官たちを巻き込んでしまって

……」

テオレルドが謝罪するのは、自分が執行人の“弱点”の最たるものだと解っているからだ。

キヤーリサはおそらく、この場に膨大な数の騎士を派遣してくるだろう。テオレルドを今度こそ殺し、キヤーリサの目的を達成するため。

更に、テオレルドの相棒であるランサーも無関係ではいられない。共通の魔法名を持つという希少価値を上回っているのが、彼が護ると誓った少女――カインⅡⅤⅡスカーレットの存在だ。

彼女は、半吸血鬼。

実態は未だに掴めないが、その力を巡って戦ったテオレルドには、キヤーリサがああいった種類の存在を嫌うことも分かる。

本人がいかに無力でも、彼女もまた、狙われる一人なのだ。

ここまでの条件がそろってしまえば、ここが戦場になることは避けられない。しかし、退くこともできないテオレルドは――

「まあ、売っちゃったもんはしょうがない。ケンカするか。騎士派と」

「え………?」

逡巡するテオレルドとは対照的に、明朗な声でハイゼは言い切った。その口元には笑みさえあるように見える。

「テオ。お前は俺の部下だ。“普通”からあぶれた魔術師でしかなかった俺は、この場所で、初めて護るものを得た」

だから、と今度こそ本当に笑みを浮かべ、ハイゼは言う。

「護らせてくれよ。俺の部下たちの信念くらい」

その一言が、この国を統べようとしている王女への反逆であることなど百も承知。

だが、ハイゼにも譲れないものがあるのだ。

テオレルドにとってのキャーリサのように。

ランサーにとってのカインのように。

そして、そんな想いを抱いていたのはハイゼだけではなかった。

「全く……」

言葉を発したのは、執行人の魔術師実務部隊、副管理官のポジションにある20代半ばの女性、ロザリィマリノ。

束ねられた長めの髪と同じ色をした濃紺のパンツスーツが良く似合うキャリアウーマンといった風貌の彼女だが、魔術、それも氷を扱う種類の攻撃術式の腕も一級品なのだ。

時には容赦ない側面を見せる彼女は、それまでやり取りを見ているだけだったが、テオレルドとランサーの前に歩んでくると、彼らの胸に指を突き付けて言った。

どうしようもないですね、といった溜め息を吐きながら。

「この国を敵に回すことがどれほど無謀なのか、分かっていますね？」

ハイゼという感情的な上司の下で働く彼女は、常に状況を理性的に見ている。

だが、テオレルドは下がれない。

自らの問いに静かに頷き、反論しようとするテオレルドを制して、ロザリィは、

「でしたら、私たちの心配などせずに、護りたい人の下へ向かった

らどうですか？」

「！」

「格好をつけている場合では無いでしょう？——大丈夫です。この場所は、私たちにとっても護りたい場所なのですから」

そう言ったロザリィは、普段は氷のごとくに冷淡な彼女は、微かに笑っているように見えた。

あまりに彼女らしからぬ言葉に呆然としているテオレルドとランサーを急かしたのは、ハイゼたちの言葉でも、彼の中の覚悟でも無かった。

ドゥン……！！と。

何かを叩く音と、地下の構造物そのものを揺らすような振動だった。それが敵の来襲であることを場の全員が察知できるほど、明らかな敵意を伴って。

「さて……騎士サマのおでした……」

静かに呟くハイゼは、振り返り、テオレルドとランサーに約束させた。

「行けよ。テオ、ラン。お前らの護りたいものを護りきって見せろ！」

「「はい！！」」

テオレルドとランサーは、実務管理官室にあった隠し通路から抜け出した。

教会の隣、住人のいないアパートに繋がる道なら、騎士に補足されることもないだろう。

そんなことを考えていたハイゼに話し掛けたのは、中世ドレスローブのような服装をした魔術師、ミレイナIIアマリー。

プラチナブロンドのセミロングの髪と相まって、佇んでいるだけの彼女は本当に人形のように見える。

「偵察の結果、ここを攻略するために派遣された騎士は、外部への影響を抑える役割の者も含めて138人でした」

「ありがとう、ミレイナ。しかしそれだけの人数ってことは――キヤーリサ様も結構本気、ってことか」

彼女の周囲には、15センチメートルほどの西洋人形が12体、浮遊している。

この術式は応用性が高く、感覚の共有による偵察や諜報はもちろん、一団体の戦闘能力もかなりのレベルでまとまっていた。

しかし本来なら、この術式もローマ正教を冒瀆するような術式として絶滅させられてもおかしくないものだった。

そう。

彼女にとっても、ここは唯一の居場所なのだ。

そして、同じような境遇の仲間を護りたいと願う気持ちも、ハイゼに負けていない。

「……扉の破壊は、時間の問題ですね」

戦闘要員だけを配置したエントランスはがらんとしているが、そこ

へ繋がる唯一の道である巨大な木の扉が不気味に振動を続けている。おそらく、扉の向こうでは騎士たちが扉を破ろうと攻撃を加えているのだろう。

「破城槌を使えないことも大きいな。入り口がああも狭いんじゃない、大きな破城槌なんて使えない」

「でも、今の騎士の能力はそれを補って余りある……」

「そうだな。『カーテナ・オリジナル』の力を直に分配されているんだ。10人も集まれば聖人に匹敵するんじゃないか？」

「——想像以上ですね。カーテナの力は」

怖じけづく、とまではいかないが、流石にたじろぐミレイナ。ハイゼはそのことを咎める気は全くない。

しかし同時に、テオレルドのことを懸念せずにはいられない。

彼が立ち向かう相手は、『カーテナ・オリジナル』を持つ第二王女、その人なのだから。

そして、遂に扉は突破された。

無惨に砕け散った木片を踏み越え、エントランスへ侵入してくる膨大な数の騎士たち。しかし彼らとて、不必要な殺戮を求めているわけではないだろう。

「『執行人』の魔術師よ、無駄な抵抗は止めて欲しい。我等は、テオレルドミラーの引き渡しだけを要求しているのだ」

ごく単純な要求を突き付ける騎士の言葉は、魔術師の拠点に踏み込んだというのにとっても落ち着いている。

それを裏付けるだけの力量があるからこそその振る舞いとも言える。
しかし。だからこそ。

ハイゼⅡヴィレクティムは、先制の攻撃を仕掛けた。

『執行人』への要求を告げた騎士の懷に飛び込み、拳を叩き込む。
それだけの行為が生んだ破壊は、吹き飛ばされた騎士が、残っていた扉を完全に砕き、その奥の石段さえも粉碎する余波と共に、膨大な粉塵を巻き起こした。

「な………」

騎士たちの間に広がるのは、絶句。

唐突な攻撃もそうだが、それが一人の仲間を沈黙せしめたことが理解できないのだ。

相手は魔術師の左遷先に等しい部署の人間で、テオレルドⅡミラーを捕縛するための障害とは見做していなかっただろう。

だが、この男は――

「来いよ、騎士ども。はぐれ者の意地って奴を見せてやる」

挑発された騎士たちが執るべき行動はもはやただひとつ。

この男を、完全に粉碎するだけだ。

e p. 2 部下たちの信念くらい（後書き）

次回、ハイゼたちの魔術が明らかになります。
騎手たちに立ち向かう彼らは…？

e p. 3 百腕の巨人（前書き）

ついにハイゼたち、執行人が本当の力を発揮します！
騎士VS魔術師の戦いをお楽しみください！

e p. 3 百腕の巨人

『執行人』の拠点に派遣された騎士たちの誰もが、この規模は大きすぎると考えていた。

現在、大英帝国の力を『カーテナ・オリジナル』を介して直に得ている彼らは、イギリス清教のエージェントごとき、三対一の不利な状況で戦ったとしても負ける訳が無いと考えていた。

その上、『執行人』という組織の中でまともな戦闘を行える魔術師は数人、多くても10人に届かないというではないか。

事実、派遣された騎士の一人、ブレダ―ディスマルドもまた、そんな考えの持ち主だった。

一応ロンドン市内ではあるが、ほとんど左遷に近い部署の一構成員を拉致し、しかるべき方法で殺害すること。その“程度”の任務だった。そう思っていた。

――ハイゼ―ヴィレクティム。この男の力を、目にするまでは。

ドツツッ！！！！

吹き飛ばされたのは、彼の隣で剣を構え、今にも斬りかかろうとしていた仲間の一人。

（何だこの速度は！異常過ぎる！しかも、速度だけじゃない、剛力も……！！）

返す刀でブレダにも手刀での攻撃を加えようとするハイゼだが、攻撃を受けた仲間が吹き飛ばされながらも放った光の槍がハイゼのバランスを崩した。

胴体に刺さろうとする光の束を即座に打ち払うハイゼだが、それだけの猶予があれば十分だった。

（お前の意志は、無駄にはしない！）

並の人間では視認することすらできない速度で剣を振るい、ハイゼを肩口から袈裟に切り裂く。

その攻撃を確実なものとするために、ブレダの周囲で備える騎士たちも、斬撃や拘束の術式のために行動しようとする。

しかし、息を吸い、構えた僅かな間に、ハイゼは呟いた。

「――、ヘカトンケイル百腕の巨人」

そして。

彼を含む数十の騎士が、宙に舞った。

何かが彼らを打ち上げたことが理解できた時に、ようやく、一瞬の遅れさえ伴って激痛が走る。

これは、膨大な数の拳による攻撃だったのだ、と。

身体能力を強化すればどうにかなる次元ではない。腕そのものが無

数に増殖したかのような錯覚、いや、本当に増殖しているとは思えない。

しかし、見せ付けられた能力とその発動呪文に、彼は心当たりがあった。

（おかしい……俺はこの術式を知っている。しかし、そんな、まさか……）

空間を突っ切って柱に激突し、身体感覚が激痛に塗り潰されている中で、ブレダは思わず口にしていた。

学術書で知識だけは得ていた、“十字教以前”の術式。

名前を呼ぶことで己に力を付加し、万能の攻撃手段とする、圧倒的な術式。

その正体は、

「自らをガイア神と置くことで……その息子である巨人達的能力を引き出している……？」

十字教以前、ギリシャ神話での話だ。ガイアという女神は、多くの息子を産んだ。

剛力の巨人、ギガス。暴風の神、テューポーン。百の腕を持つ巨人、ヘカトンケイルなど。

エピソードと比べて劣化したものとはいえ、そんな巨人たちの力を、あの魔術師は自在に操っている。

当然、血を引いているということは、母の能力の中にその片鱗があることなのだから、血の繋がりが最も濃い関係である親子なら、息子の力を逆流させることも可能かもしれない。

実際には、天使の力に変換して性差を排除したり、人間が使用できる領域に落とし込むことも必要だろう。

そうして、仮説を立てることは簡単だ。

だが、これはありえない。

この国は、十字教の一派である『イギリス清教』の国なのだ。その最深部である組織に、他の宗教の魔術を使う魔術師が居てなるものか。

しかし、目の前の光景に目を凝らした瞬間、彼の仮説は裏付けられてしまった。

「ティタン大地の神！」

言って。

彼が床へ右の拳を叩き込んだ瞬間、ブレダの視界が揺れた。純粹に衝撃を与えたのではない。明らかに天使の力を流し込み、敵性勢力が存在する場所だけをピンポイントで暴力的なまでの激震で襲っている。

局所的な地雷のようなその攻撃は、的確に騎士たちの意識を沈めていく。

その方向に思考が走っていた彼の脳裏を、検索するまでもない。最も有名な神話の中の存在、その一つ。

大地を司る巨神、ティタンのエピソードだった。

(……こんな、ことが)

今の一撃で、証明されてしまった。

ここがどれほど異端な組織で、圧倒的で、故に秘匿されていたことを。

しかし、知らなかったでは済まされない。

もはやブレダの体に、抗うだけの意志は残っていなかった。

『執行人』として騎士と戦っているのは、ハイゼだけではない。

戦場には似つかわしくないパンツスーツの女性、ロザリィ・マリノもまた、その一人だった。

彼女が猛烈な速度で空を切って振るう鞭は、衝撃を与えて騎士を退かせると同時に、直撃した箇所の装甲を白く変色させていく。

その正体は、生身で喰らえば心臓麻痺さえ起こしかねないほどの低温。

ハイゼやテオレルドほど圧倒的でなくとも、その腕は確かなものだった。

（久々に使う攻撃特化の術式……。通用して良かった、とは思いますが……）

彼女が扱うのは、北欧神話における巨大な蛇、ニーズヘッグを模した鞭の術式。

意匠が施された黒い鞭をニーズヘッグと置き換え、そのニーズヘッグが棲まうと伝わる『氷の国』^{ニルヘイム}を局所的に再現することで、いかなるものをも凍らせて砕く、特殊な鞭だ。

だが、その均衡もいつまでも続かない。

攻撃の種を見抜いた騎士たちは早くも耐寒仕様の術式を鎧に追加し、今にも刃が届きそうな位置まで迫っていた。

（私の術式だけでは騎士に力負けするのも事実。——しかし!!）

息を整え、ロザリィは告げた。

危機にあるはずの彼女が、確かな勝利への確信を持って。

「ミレイナ！今です！！」

その声に反応して四方に目を走らせるような真似を、騎士たちはしない。

不意の一撃を受けようとも、それに反応するのは、目の前の女魔術師を斬り殺してからで間に合うからだ。

そう思っていただろう。

躊躇わずに彼女を狙う数十の刃。

しかし、全ての攻撃は届かなかった。

ロザリイが防御用の術式を発動した訳ではない。

騎士たちの動きが止まったのだ。

ロザリイの鞭によって凍らされ、脆くなった鎧を突き抜けて騎士たちの肉体に届いた、小さな刃によって。

それは、騎士たちの背後に浮かぶ15センチメートルほどの西洋人形たちが持つ、本当に玩具のような武器だった。

しかし、彼らはその刃がどんなものを理解したことだろう。

噴き出る脂汗、動かない体躯、痺れていく声帯。

——強力な麻痺性の毒物が、人形の刃に塗られていたことに。

「……この速度で………」

ミレイナⅡアマリーが扱う、人形の操作術式。

偵察や諜報、高速戦闘をこなすそれ自身に足りないのは、強固な防御術式を突破する攻撃力だったのだ。

逆に、莫大な天使の力を供給された騎士の鎧を貫通することはできても、止めを刺すことが難しかったのはロザリィの術式。

互いの欠点を補い合い、彼女たちは数十もの騎士を退けることができた。

がくがくと膝を震わせ、辛うじてミレイナの存在を視界に入れる騎士たちにはもはや、抵抗力は残っていないだろう。

倒れ伏す騎士を尻目に視線を交わし、微笑むミレイナ。

彼女が使った術式もまた、この国にとっては都合が悪い術式だった。

（術者を神の子と置き、12人の使徒を模した『聖人人形』を操る……ローマ正教に露見すれば、即座に処刑部隊を差し向けられそうな術式ですよね）

端から見ても心配になるほど“危険”な術式を使うミレイナだが、そのことをロザリィは追及しない。

彼女自身の術式も触れられたくない過去に基づいて成り立っている上、彼女たちの戦闘がおままごとに見えるほど派手な戦闘を繰り広げているハイゼのこともある。

（あの人がいるから、私たちの術式は印象が薄くなってしまっている……。逆に、管理官への注目は増加するばかりだというのに）

わざと派手な戦闘を繰り広げることで、自身に敵の視線を引き付ける。

それが、自らを盾にしてまで部下の信念を護ると誓った、彼の覚悟なのだろう。

（これだけのことをさせておいて——何も護れませんでしたでは、
済まされませんよ？）

自らも更に戦闘を派手に加速させながら、ロザリイは想う。
大切な人のために戦う、二人の仲間のことを。

e p. 3 百腕の巨人（後書き）

いかがでしたか？

次回は、テオの過去編への導入です。

e p. 4 本当の名前を（前書き）

今回から、テオの過去編に突入します。
謎多き男、テオの過去とは……？

e p. 4 本当の名前を

ロンドン郊外、執行人の本拠地とは真逆の方角。

通常なら昼夜問わずトラックで溢れる幹線道路を照らしていたのは、オレンジの街灯ではなかった。

不健康なほどに純白の光を放つ、巨大な中世の城壁。

宙空に浮かぶその術式の名は、『光翼の城壁』^{サンクチュアリ}。

その下で赤く輝く髪の少女を抱き寄せ、周囲で倒れ伏す騎士に注意を配る白髪の魔術師——ランサーⅡJⅡグレイスが発動した、“護るための術式”だ。

「はっ…は………っ、流石に、この数を一気に片付けようってのは、無理があつたかも、しれないっスね………」

息を荒げながらもランサーが打ち鳴らした左手の指の音に呼応して、『光翼の城壁』は消滅する。

と同時に、緊張の糸が切れたように彼は片膝をついてくずおれた。そんな彼の肩を支え、いたわりながら、深紅の髪の少女が傍らで心配そうに言う。

「無茶をしないでくれ、ランサー。さっきから戦い通しで、ろくに休憩もとってないだろう？私を護るために戦ってくれるのは嬉しいが、そのせいでお前が傷つくのは見たくない……」

彼が騎士たちに反旗を翻し、ここまで無茶な戦闘を繰り広げた理由。それがこの少女。カインⅡVⅡスカーレット。

半吸血鬼という特異な存在である彼女は、どの時代、どの宗教においても存在する居場所のない、“追われる存在”だった。しかし、今は。

騎士として彼女を護るといふ誓いをたてたランサーが、彼女のために戦ってくれている。

確かに、ロンドン中心地にある女子寮からカインを連れ出し、追っ手の騎士、およそ数十人を一人で撃退せしめたランサーの力量は驚くべきだが、彼の疲労がカインには手に取るようにわかる。

それを心配して言葉をかけたのに、ランサーはどこかおどけた様子で、笑ってこたえてみせた。

「大丈夫っスよ。もう追っ手も察知できないし、この調子なら、カインも俺も、生き残れる」

そういつて自分の頭を優しく撫でるランサーに、カインは顔を赤く染めて黙りこくってしまう。

20代半ばであるはずの彼の容姿は病弱な少年のように儂く、こちらが年上である錯覚さえ覚える。

(……っ！今までなんのアプローチも無かったのに、不意打ちは卑怯すぎる！)

突然言葉を失った彼女を不思議に思ったのか、至近距離で顔を覗き込むランサーに、視線をそむけたカインの顔は赤みを増すばかり。彼自身に悪気は無くても、罪作りなものである。

——と、沈黙に耐えられなくなったカインが切り出したのは、いつも一緒に行動していた相棒のことだった。

「そういえば……いつも一緒にテオレルドはどうしたんだ？こんな状況下こそ、彼と一緒にいるべきなんじゃ……」

彼と共にあれば、カインが見たことも無い強大な術式を彼らは使える。

あの術式があれば、騎士たちに苦戦することも無く包囲網を突破できたことだろう。

それは純粹にランサーを心配して口にした言葉だったが、テオレルドのことを耳にしたランサーの顔が曇った。

「――っ、先輩は……」

しかしそれは一瞬だった。続く言葉を、どこか吹っ切れた表情でランサーは言う。

「先輩は、この国にケンカを売りにいったっス。この国の第二王女、キャーリサ様との因縁を、断ち切りに」

「……!?!」

予想だにしない言葉。

カインは、その意味を直ちに理解できなかった。

今、この国で何が起きているのかを、彼女は曲がりなりにも理解している。

だからこそ。

現、国家元首と言っても過言ではない存在に―――独りで戦いを挑みにいった?

「そ、そんなことが…あつてたまるか!」

「カインは、先輩を心配してくれるんスか?…優しいっスね」

「あたりまえだろう……!」

ほとんど拒絶反応に近い絶叫で、カインはテオレルドの行動を否定しようとする。

無理もない。

テオレルドもまた、グラウIIガーランドやオルソラIIアクィナスの

ように、カインの命の恩人なのだ。

現代の人間とのかかわりが極端に偏っている彼女にとって、一人でも友人を失うことは耐え難い苦痛となる。
だからこそ、聞かずにはいられなかった。

「テオレルド一人で向かわせたことに、言及はしない。でも、どうして……」

「あの人には……戦う理由がある。10年前の、因縁が……」

「10年前の因縁……?」

魔術師は皆、どこか子供じみた、それでいて切ない“願い”のために戦っていることをカインは学んでいた。

その願いを込めた最たるものが、近代の魔術師の“願い”の結晶である魔法名なのだと。

テオレルドⅡミラーという魔術師が願う理由が10年前にあるのなら……

そのことを、自分なんか詮索して良いのだろうか?

「先輩の過去——カインにも、話していいかもしれないっスね」

踏み込んではいけないことを訊いているかのように、逡巡していたカイン。

その表情を読み切って、ランサーは言った。

「だったらまずは、先輩の本当の名前を……言わなくちゃいけないっスかね」

「本当の名前……?」

思いがけず告げられた、テオレルドという魔術師の素顔。
彼女が困惑する暇さえ与えず、ランサーが口にするのは、とある男

の真実。

10年間、この国の汚点とさえされてきた、とある公爵家の物語。

「気付いてたっすか？先輩の本名を知っている人は、みんなテオレルド、って呼ばないんす。管理官はテオ。俺は先輩。『テオレルドⅡミラー』はあの人の、偽名。鏡に映る虚像のように、あの人の血筋を隠す為の名前。あの人の本当の名前は――」

ランサーは一たびの決意が揺らぐことを恐れるように、物語を紡いだ。

一気呵成に。一拍の間も置かず。

テオ。

テオフラストウスⅡミッドフォード。

黒い髪に、眼鏡を掛けた少年。

広大にして整備されたとある邸宅の庭先の馬術場で、流麗な黒毛の馬を乗りこなす少年の名前は、そう言った。

今は衣装こそ白色だが、衣装まで黒で統一されれば、そのまま夜に溶けてしまいそうな少年。

笑顔の振り撒き方がもう少し上手であったなら、女性の一人や二人

は簡単にオトせそうな容姿。

そういった些事を無視して、ベランダから彼を呼ぶ声が響き渡った。

「テオーー！いー加減に機嫌を直せー！私が悪かったのは認めてやるのー！ー！！」

とても“お姫様”の言葉遣いとは思えないその絶叫に、植木の手入れをしていた庭師から窓拭きをしていた使用人までもが視線を奪われる。

そして、肝心の呼ばれた本人はといえば、むすり、とした表情でそちらを睨むのみだった。

この叫びの主、キヤーリサを。

「キヤーリサ……お前って奴は……」

彼女の装いは、腰まで伸びた金の髪をポニーテールに結い上げ、薄い緑色のポロシャツとチェックのスカート。18歳にしては大きい彼女の胸を強調したその姿は、一応、彼女の私服である。

「いーから戻ってこーい！マフィンが無くなるぞー？」

呑気に午後のティータイムを心配する余裕のある彼女とは裏腹に、テオの表情は曇ったまま。

そもそもこんなことになったのは、キヤーリサが原因なのだ。

（あいつが…俺を馬術クラブなんかに入れるから……）

競技用の馬術になどほとんどなじみの無い彼を、キヤーリサは無理やり馬術のクラブに入れてしまったのだ。

王族権限だとかなんとか言って。

だからこうして、休日の午後まで練習しているというのに、肝心の
キャーリサはあの調子だ。

テオが練習する理由は、キャーリサのためだというのに。

（まったく…好きな女に頼られて、頑張れない男がいるかよ……！）

テオフラストウスⅡミッドフォード、18歳。

キャーリサ、18歳。

イギリスのクーデターから10年前、互いの未来も知らない彼らは、
幼馴染で、許嫁のままだった。

e p. 5 お前は王様失格だ（前書き）

テオの過去編です！

今回は日常風味多めでお送りします！

e p. 5 お前は王様失格だ

ミッドフォード家は、英国王室に寄り添うかたちで存在し続けた、名家といえる家柄の一つだった。

ある時は病弱な王族を護る騎士として、ある時は女子しか継承者が産まれなかった場合の婿の相手として。

しかし、主従関係である騎士の契約と、対等な関係である婚約を同じ家系の人間が結ぶことが、血筋としてどれほど特異なのか。

それを、弱冠16歳のテオフラストウスⅡミッドフォードでさえ理解していた。

ならば当然、彼の父親であるウィルヘルムⅡミッドフォードはそれ以上に。

白髪が所々に混じる、50代にギリギリ到達するかどうかといった年齢の彼は今、ロンドン市街のはずれを走るリムジンの中でとある人物と会話していた。

王族が公務などで使うものとはまた別の、地味なリムジンだ。車中もそこまで広くは無く、対角線上に座る彼らの膝はそう離れていない。

「ふうん…テオとキャーリサが同じクラブにねえ……」

「大したもんだろう？ウチの次女、キャーリサの猛アピールは」

言葉を交わすもう一方、10年後の女王、エリザードにはこの時夫…つまり国王が存命だった。

彼が公務のほとんどをこなしている傍らで、エリザードはこうした人脈の構築に尽力していたのだ。

国内外に留まらないその人脈が、いずれこの国を支える力になると信じて。

某国の密使との会談も、今、こうして軽い口調で話し合っているこ

とも。

「いやいやあ、キャーリサちゃんが積極的なのは2歳の時からわかってたし、いまさらテオも動揺とかしないでしょお。なんかお互い、好きすぎてイロイロ通り越してる感じあるし」

「……確かに。まあこれは私の教育の賜物だな。女が男を落とすのに必要なのは、勢いとノリだって」

「アンタは年頃の娘に何教えてんだ。ともかく。……そろそろ、まづいんだよなあ」

「わかつている。予想より早いとはいえ、おたくのテオ……アレの発現が近いんだろう？」

エリザードの口調が、突然に変わる。

変化した口調と鋭利さを増した瞳のエリザードがウィルヘルムから受け取ったのは、一束の資料。

随分劣化が進み、文字も所々剥けている羊皮紙だが、そこに記されているのは“とある魔術”の記録だった。

「ミッドフォード家に一定期間を経て覚醒する、黒い災厄……」

「本当に迷惑な話だ。何の因果か知らないが、このままではテオは………ただの機械になってしまう」

「ああ、それを回避するために、アイツらを許婚にしたんだからな」
整備された庭園に目だけを遣りながら、エリザードは答えた。

これまで王室のために尽くしてきたミッドフォード家を、今度は王室が守ること。それが今回の許婚の本当の理由だったのだ。

（お互いが好き合っているから良いようなものの……こんな時代遅れの儀式、本当はさせたくないのだが……）

既に彼らの乗る車は、ミッドフォード家の敷地に入っている。

ロンドンの喧噪から離れ、自然に囲まれたこの地に、キャーリサたち三姉妹は幼い頃から入り浸ってきた。

それこそ家族のように、テオとの関係を築いてきたのだ。

成人したリエメアは訪れる回数こそ減ったものの、未だ学生のキャーリサとヴィリアンはかなりの頻度で訪れており、今の時間帯なら、ヴィリアンがキャーリサとテオのためにいれた紅茶の仄かな香りが、エントランスにまで漂っていることだろう。

「重苦しい話はこのくらいにしよう。今日は、テオの誕生日の打ち合わせのために来たんだからな」

「王妃様も本当に、面白いことが好きだよなあ……」

軽口を叩きながらもエリザードの手を恭しく取るウィルヘルムへ豪快に笑いかけながら、

「気取られるなよ、ウィル。あいつは今、とてもデリケートなんだろう？」

「――、了解」

彼の感情を不用意に、不可解な魔術という形で爆発させれば、テオはその危険性を理由にイギリス清教へ吸収されてしまうだろう。事実、彼らはすでにテオへの監視を強めているとの情報もある。

まだ大規模な暴走は無いが、その危険性をほのめかすウィルヘルムの言葉に、エリザードはテオへの配慮を心掛けていた。

人の感情ほど不条理で、理不尽なものはない。何が引き金で、いつ暴発するかわからない、危険な爆弾のようなものなのだから。

その些細な可能性のために、いついかなる時も他者への気配りと慈しみを忘れない彼女に、敵わないな、と呟くウィルヘルム。

苦笑いとともに、二人の親はミッドフォード邸へと踏み入っていく。

カレッジ最後の学年、9月の新学期が始まってからすでに一か月。人数が足りないからと、王族権限でキャーリサに強制加入させられた馬術部は、想像以上に練習が厳しかった。

馬の体調管理から、コートの整備、実際の練習。そこから始まるのが容赦ない魔術の理論教育。

この国の根幹をなす魔術に関することとはいえ、とても一般の大学への受験を控えた18歳の少年がこなせるようなスケジュールではない。“とある理由”から体を鍛えていたテオでさえ、わずか一週間で音を上げそうになっていた。

「ああ……ヴィリアンの淹れた紅茶が身に染みる……」

ミッドフォード家のテラスでキャーリサ、ヴィリアンと小さなテーブルを囲みながら、テオは呻く。

そんな様子に不満を漏らすのは、キャーリサの方。

「全く……ジジイみたいな物言いは止めてほしいの。将来の王様のくせに、若くして中身が老いるとは、この国の未来は危ういか？」

「黙れ。カレッジにも推薦同然で入り、奨学金をもらって、何もしなくても大学からも引く手数多の優等生様に俺の気持ちなんて分かるかよ……」

反抗の言葉に不満げな様子でテオを睨むキャーリサだったが、その様子を笑ってみていたヴィリアンが、どこか悪戯っぽい表情とともに口を開いた。

「テオ、姉君はあなたのお疲れの様子にお怒りなのではなく、姉君があなたのためにせっかく紅茶を淹れた、という事実にはテオが気付いていないことにお怒りなのですよ？」

「!？」

「馬鹿、余計なことを言わないの!!」

思いがけない一言を暴露され、ヴィリアンへ噛みつくキャーリサ。その一方でテオはと言えば、改めて紅茶を口に含み、驚きの表情を浮かべていた。

「これを……キャーリサが？」

お世辞にも彼女の家事スキルは高いとはいえない。

彼女の作った料理を口にしたことこそあったが、それは料理の不味い国というレッテルのままの腕前だった。

だからこそ、

「やればできるんだな、キャーリサ。正直言って…見直した」

「まあ、お前のために淹れてやったのは事実だ。ありがたく思えよ？」

子どもの頃からの付き合いだ。正直に褒めると、調子に乗ることは分かっていたのだが……

褒めずには、いられなかった。

「あらまあ、褒められ慣れている割には嬉しそうな表情ですね、姉君」

「お前：子供の頃からの悪いクセだな。普段は引っ込み思案なくせに、人の色恋沙汰には勝手な興味を示すのは」

キャーリサの指摘にもヴィリアンは、口を手を当てて上品に、それでいて子供っぽい笑みをこぼした。

どこまでも規格外の“お姫様”であるキャーリサとは対照的に、ヴィリアンはその趣味や装いまで絵本に出てくるような“お姫様”だった。

彼女が特に興味を示すのは、成人し、宮殿をしばしば抜け出すリメエア、あるいは結婚を定められたテオとキャーリサの恋愛事情。当然その裏には、まともな恋愛を自分ではできない、という諦観がどこかにあるのだろうが。

「ヴィリアンも相手を見つければ良いのに。女子校なのが悔やまれるけど、それこそ騎士たちとか――」

「っ、私は大丈夫、です！」

「？」

テオが告げた『騎士』という単語に過敏な反応を示したヴィリアンに疑問の表情を向けるが、キャーリサがその理由を補足する。

手をあわあわと振り乱すヴィリアンを気にも留めず、キャーリサはその理由を告げてしまった。

「こいつも所詮は女ってことだ、テオ。姉君の成人パーティーの場で騎士団長と話していた傭兵：ウィリアム・オルウェルと言ったか？ そいつが気になって気になってしょうがないんだと」

「もう……姉君……」

顔を真っ赤にして、伏し目がちになるヴィリアン。それは、キャーリサの言葉が事実で、ヴィリアンはそれを否定するつもりもないことをあからさまに示していた。

しかし、ヴィリアンのこの表情は反則だろう、とテオはいつも思う。どこか嗜虐心をつつかれるような、保護欲に駆られるような。

もともと可愛い装いの彼女が、人前でこの表情を安易に見せるべきでは無いな、と改めて感じていた。

何故なら、彼を睨む恐ろしく鋭い目線がヴィリアンの対極から差し込んでいたからだ。

「テーーーーー。何ヴィリアンに蕩けてるの？」

「いや、これは…」

「婚約者が目の前にいて、あろうことかその妹に目線を奪われるとか、お前は王様失格だぞ？」

「いや、キャーリサ、胸が見えてるから……」

「そんなものを今さら気にはしないし。さあて……」

胸の谷間を大胆に見せつけながらテーブルに身を乗り出し、にじりよるキャーリサの表情はどこか据わってしまっている。

この時点で、テオは二つの恐怖を理解していた。

一つは、キャーリサに嫌われること。

もう一つは、今や騎士派での知名度はかなりのものになっているキャーリサの才能によって、魔術的にボッコボコにされること。

確か、カーテナ・セカンドに供給される天使の力を、王族の血という権限で拝借し、形状の似た武器に込める……だっただろうか。

「さあ、覚悟しろ」

どこからか取り出した、博物館に収蔵されていそうなレイピアを持ったキャーリサを前に、テオの思考は停止状態。

ズバァ！！と、一閃が走り、回避行動を取れなかったテオの意識は脆くも刈り取られる。

その目線が最後に捉えたのは、テラスへと入ってくる父と、エリザード王妃。

二人の表情が満面の笑みであることに、テオは一言だけ告げるのが精いっぱいだった。

「理不尽だ……」

エリザード達が乗っていたリムジンと同じ道路を走る、一つのトラックがあった。

表にはイギリスでも活動している、日本系の運送会社のロゴ。しかしその中では、およそ10人の男が様々に活動していた。荷物の整備、といえば聞こえはいいが、その荷物とは、

「学園都市の技術供与、か……。本当にあてになるのか？」

「開発されているレベルからすれば相当に落ちるが、現状のそれと比べたら魔法にも感じるだろうよ」

望遠鏡のレンズほどに巨大なスコープを備えた、黒塗りの狙撃銃。計4丁のスナイパーライフル『マーキュリー』を手にした彼らが狙うのは――英国王室。

「狙うは……エリザードの娘だ。脅迫の材料とするには、都合が良
いからな」

彼らの目的は、彼らの雇い主へ不利な政策を実行しようとしている
国王を牽制するための誘拐。そして脅迫。

あまりに単純で短絡的なその行動が、どれほどの惨劇を呼ぶのか。
街のゴロツキに毛が生えたような彼らには、想像もできなかった。

e p. 5 お前は王様失格だ（後書き）

いかがでしたか？

次回からは、テオの人生を大きく捻じ曲げた事件へと繋がります。

e p. 6 彼より劣ったままで（前書き）

引き続き、テオの過去編です！

e p. 6 彼より劣ったままで

その日。

テオフラストウスⅡミッドフォードの誕生日を前にしたある一日。キャーリサやヴィリアンは、とある世界規模の大会で優勝した英国サッカーチームのパレードに来賓として招かれていた。

極東の某国では国の代表にやたらと愛称を付けたがるようだが、この国の代表であることのロイヤリティは、彼らの胸に輝くエンブレム一つで賄える。それほどに重みのある紋章を胸に戦った戦士を、王室が放っておくわけも無い。

ロンドンの街に舞う、季節外れの吹雪。

歓喜の証であるそれに酔いしれるチームのメンバーが先頭となるパレードの半ば。

魔術的に最高級の防壁を施されている馬車の中に、二人はいた。

「ヴィリアン、健気に手を振るのもそのくらいにしておいたら？どーせ窓ガラス越しにほとんど見えてないんだし」

「姉君：そんな身もふたもないことをおっしゃらないでください：」

苦笑いをこぼすヴィリアンだが、そんなことを言うキャーリサがこういったパレードに参列すること自体稀で、彼女が来ると聞かされた時の驚きは相当なものがあつた。

「それにしても、意外でした。姉君がナショナルチームの優勝パレードに参列するなんて」

「先入観で人を判断しないの。私もサッカーは好きだぞ？ここまでの戦略性に富んでいながらも、個人の力量も大きく反映されるスポーツは珍しい。戦術を学ぶ上でも参考にしたことがあるくらいだ」

「結局は…そこに行き着くのですね…」

「伊達にヤンチャ扱いされてはいないの。将来的には、王室派の中でも『軍事』の称号は欲しーままにさせてもらおうと思っているところだったし」

「そうですか…それを、テオは…?」

「テオにわざわざそれを言う必要はないの。どーせこのパレードが終われば、カレッジのクラブ活動で一緒なんだし」

「てっきり今日は、カレッジをお休みするものだと思っていました
が…」

『軍事』の称号。それは18歳の少女が目指す夢としては武骨すぎないだろうか、とヴィリアンは思う。

もともと彼女が気の強い性格であったことは知っていたが、それに拍車を掛けたのがテオという許嫁だった。

キャーリサと同等、分野によってはそれ以上の才能を発揮するテオは、間違いなく英国の王に相応しい実力の持ち主だった。

それが、彼女には気に喰わなかったのだ。

自分が将来有能な王妃としてこの国を支えるには、王を優に超える実力が無ければならない。

本気でそう考えていた彼女は、やたらとテオに喰ってかかった。

テオが数学の幾何を13歳でマスターすれば、キャーリサはチェスの世界大会決勝でテオを負かし、カレッジでも成績上位1パーセントにしか与えられない奨学金の枠を、エリザード王妃が悪戯で王族の中から一人、と制限した際には、僅差でキャーリサが勝利した（といっても、双方の実力は折り紙つきであり、テオですらカリキュラムを終えずともカレッジを卒業できる学力を備えていた）。

とかく、互いの長所と短所を知り尽くしている二人が結ばれるのは、至極当然のことと思えた。

少なくともこの『許嫁』は、ありがちな少女漫画の中の敵役ではない、と。

ヴィリアンだけではない。キャーリサとテオの関係を知るすべての人が、二人の結婚に賛成していた。

——この日、までは。

その日、午後7時。

ミッドフォード家の邸宅には、キャーリサが未だ滞在していた。

ミッドフォード邸の中でもキャーリサが特に気に入っている場所、深い森を望む出窓の傍に。

ヴィリアンを乗せた送迎の車を先に帰してしまったため、帰れるまであと30分は掛かるだろう。中途半端なその時間は、キャーリサには珍しく考え事に宛がわれていた。

（『軍事』の第二王女、か……）

昼間ヴィリアンに宣言したことは嘘ではない。

現状、国王の政治が欠点だらけとは言わないが、英国は今以上に強くなれる。そう信じていたからだ。

ならば。

その夢を叶えるために、自分の一生を差し出すことにためらいは無いのか？

（———そう言い切れるわけが、無いだろう……！）

18歳の少女が目指すには、あまりに夢の無い話だ。

キャーリサはこういう時だけ、自分が女であることが恨めしく思える。
やりたいこと、王族である限り叶わない夢が幾つも浮かんでは消える。

恵まれた才能と共に生まれ、この国を背負うにふさわしいカリスマ性を持つテオが、羨ましく思える。

自分には叶えられなくて、テオには容易に届く夢が、幾つも思い浮かぶ。

絶えること。

それは弱さだと分かっているのに。

「いけないな。もうすぐテオの19歳の誕生日……婚姻の儀だというのに」

キャーリサが今日、宮殿への帰りを遅くした理由も、そこにある。

英国の成人制度とも違う、19歳での婚礼。

そこには、王族特有の“呪い”ともいえる環境が関わっていた。

19歳になるまでは、一定以上の魔術を行使できない、という法則の呪いが。

以前キャーリサがレイピアの術式を繰り出したことはあったが、それもスポーツの延長線のようなものだ。

3日後、19歳の誕生日には、テオは本当の意味で王の資格を得る。そのための、解呪にも似た儀式。

今更学ぶまでも無い儀礼だったが、いざテオと並んできると、どこか気恥ずかしい。

考え事に没頭していたキャーリサは、忘れてしまっていた。

こういうタイミングに限って、テオは気配を読むのが上手いのだ、と。

「どうか……したのか？キャーリサ」

(！)

窓際のソファークロセットに腰をおろしていたキャーリサの前に、テオは現れた。これ以上ない、というタイミングで。
差し出されたコーヒーを受け取りながら、思わず溜息をこぼしそうになる。

(全く…こういうタイミングだけは、どうして完璧なんだろうな…
…)

自分の許嫁でなければ、何人かの女性が“被害”にあっていたのではないか、と思える程に『完璧』。

「今更のマリッジブルーか？お前らしくないな」

「はっ。まさかお前に言われるとは。というか、私の心労をそんな陳腐な言葉で片づけないで欲しいの」

「なっ…心配してやったのに…」

キャーリサが悪戯っぽく笑うだけで不機嫌になるテオだが、それを見てキャーリサは安堵の表情を浮かべた。

テオなら、きっと大丈夫だ。

そう確信させるだけの信頼を、テオとキャーリサは培ってきたのだ、と思えたから。

「心配するのは余計だが、」

ありがとう。

その一言を、キャーリサは告げることができなかった。

代わりにもたらされたのは、割れる窓ガラスと砕け散る花瓶。
そして一瞬の間を置いて耳に届く――銃声。

「「！！！」」

聴覚でそれを捉えてからのテオの行動は、英国王室専属の騎士でさえ舌を巻くほどに迅速だった。

窓の射線上から退き、キヤーリサを庇い、手元の携帯で非常事態のコールを鳴らす。

本当にわずかな、一瞬で。

「テオ、お前……」

キヤーリサはその間、怯むことしかできなかった。

割れたのは自分の顔から数十センチの距離にあった花瓶であったことなど、何の言い訳にもならない。

キヤーリサが漠然と『軍事』の言葉に頼っているだけの時期に、テオは確固たる力をつけていた。

テオが、英国王室へと婿入りするために警護の術を学んでいたことは知っていた。市街地での銃撃戦から、あらゆる格闘術まで。

だが、それをここまで実用的な能力として身に着けていたとは思わなかった。自分の、玩具にしか見えないレイピア魔術との能力差にキヤーリサは唇を噛む。

（何が…何が軍事の第二王女だ……！！！！）

キヤーリサの悔恨を知るよしもなく、テオは窓の向こうに気配を配

り続けている。

銃撃こそ小規模で、マシンガンのような兵装は用いられていないようだが、窓枠や向かいの柱に散る火花に間隔は無い。つまりこれは、この場に二人を釘付けにするための策。

それがわかっていても、テオとキャーリサは動けない。

窓の外を伺うキャーリサの眼に映ったのは、ミッドフォード邸の敷地を駆けまわるいくつかの人影。

魔術的な防御策を施しているはずのミッドフォード邸に銃器を持った侵入者がいる、という事態の異常性に二人が気を配る余裕など無い。

彼らの敵は、すぐそこまで迫っているのだ。テオからの警報を察知した警備隊と敵、どちらが早いかさえわからない。そして、一早く覚悟を決めたのはテオだった。

「キャーリサはここにいろ。俺がコイツらを叩きのめして、お前を守ってやる」

「テオ……」

「そんな心配そうな目で返すな。本当にお前らしくないぞ？」

「違う、私は……！」

違う。私は、テオに心配されるような立派な女じゃない、と。

キャーリサの脳裏には、次に続けるべき言葉がとくに出来上がっていた。

だがその一切を、テオは封じ込める。

「大丈夫だ」

ぽん、と。

優しくそう言って、テオが頭を撫でる。

どこか取り乱してさえいる様子で言葉を急ぐキャーリサは、たった

一つ、その挙動で停止した。

それは、テオの覚悟に信頼を覚えたからではない。

手を頭に当てた瞬間、すぐそばで見えた表情。それが、酷く怯えていたからだ。

テオはその表情を意識して隠そうとしていたこともあり、キャーリサでも最初は確信を持てなかった。

——それを裏付けたのは、彼の右手から伝わる震え。

武者震いなんて高尚なものじゃない。ただ純粹に、テオも“怖い”のだ。窓の向こうから迫りくる存在が。

恐怖の理由なんて、いくらでもある。

銃撃戦になるかもしれない状況下で、婚約者を護れるのかわからない。

あるいはもつと単純に、自分の命が惜しいのかもしれない。

なのに、テオは立ち向かう覚悟を決めた。

そんな覚悟、自分には全く無かった。

幼少期から幾度か訪れたこの事態をどこか達観して見ている自分もいたし、だからこそ初動が遅れた自分への憤りも感じる余裕があった。

しかしテオは違う。ミッドフォード家自体、あるいはテオがテロの標的とされたことは、キャーリサが物心ついてからは初めてのことだ。

つまり彼には、実戦の経験が圧倒的に少ない。無に等しい。にも拘らず、テオは戦うと言った。

キャーリサを守るために。

「あの…大馬鹿が」

自分も怖いのに、本当は退きたいのに、誰かのために戦う。

それこそがこの国を総べる『王』に相応しい資質ではないのか？

テオを認め、惚れ直すほど、キャーリサの脳裏でテオが恨めしい存

在へとなっていく。

自分以上に王に相応しい男。その男と、これからの生涯を歩むのか。その事実が、テオと共に帝王学を学んできたキャーリサに突き刺さる。

（私は、彼より劣ったままで良いのか？）

テオが嫌いなわけではない。テオの能力を、覚悟を、素直に受け止められない自分が却ってきらいになっていく。

テオと並び立つために。テオを支えるために。テオを——好きでいるために。

「私も、戦う…！」

窓の外を伺い今にも戦場へ駆けていきそうなテオと向き合い、一言だけ。

彼女の覚悟。

それを言葉にして告げた瞬間、テオの表情が変わった。

彼女の言葉に動揺して、といった雰囲気ではない。キャーリサの背後の『敵』に向けた視線が、一瞬で凍りついたのだ。

「キャーリサを…やらせるかよ…！！」

その眼に宿っていたのは、先ほどのまでの恐慌ではなかった。

直接向けられていないキャーリサでさえたじろがせるほどの、『怒り』。

事実、気圧される形でキャーリサは窓の縁から距離を取る。

その瞬間、彼女が一瞬前までいた場所を鉛玉が通過した。

「!!!!」

驚愕する彼女の前に立ちはだかるのは、テオ。

そして。唸るように構える彼の背後に、キヤーリサは見た。静電気
の光量よりもわずかな、“黒い魔力”を。

それを目にした瞬間、術式への疑問よりも優先して、キヤーリサは
心のどこかで後悔していた。

テオの放つ怒気。護る者よりは壊す者に相応しい力で周囲を圧す、
黒い魔力。

自分を守ってくれたはずのテオが破壊者となる様を、キヤーリサは
見ていることしかできなかった。

e p. 7 死ぬのは嫌だ

テオフラストウスⅡミッドフォードは、現状に目を疑った。

記憶しているのは、ミッドフォード邸に侵入したテロリストがキャーリサに銃口を向けたことに激昂した瞬間まで。

それからの記憶は、彼に無い。

「俺は、何をしたんだ……」

途切れ途切れの言葉と共に吐き出されるのは、敵を排除したという達成感ではなかった。

ただただ、戸惑い。

本来なら目の前に広がるのは、ミッドフォード邸の廊下の窓の向こう、庭師が丁寧に整備した植え込みであるはず。そこから先の森にしても、間伐や雑草刈りをすることで健全なものに保ち、絵画のように完成された風景として維持されていたはずだ。

なのに、目の前に広がるのは、壁を失い、ひびが入り、瓦礫と化したミッドフォード邸の廊下。さらにその先、一直線に決り取られた森。

左右50メートルに及ぶ巨大な重機が不作法に土地を均したかのように、そこには何もない。わずかばかりの木の根が、泥まみれになって生えているだけだ。それが、闇に覆われて届かない遙か前方まで続いている。

そして、眼前のものに狼狽するばかりだった彼の耳に届いたのは、誰かがくずおれる音。

テロリストの残党かと身構え、振り返るテオの先にいたのはキャーリサだった。

ぺたんと床に座り、こちらをどこか茫然とした表情で見ている彼女は、テオを見ていない。

「キヤーリサ……無事だったのか……」

それでも、キヤーリサを護る、という彼の目的は達成されたのだ。テオはそう思った。“思っていた”。

しかし。安堵と共にテオが一步を踏みだすと、彼女は怯えたように体を震わせた。

「キヤーリサ……？」

常に気高くあった彼女が、震えている。

その理由を、彼はキヤーリサの左腕に見つけた。

身体を抱くようにして抱えている左腕から、少くない量の血が流れ出ているのだ。

それを心配して、もう一步踏み出す。

しかし、彼女の震えは強まるばかり。

「その傷、誰に……やられたんだ……？」

ここまで異常なキヤーリサの態度を見れば、テオにも大概の状況は理解できていた。

背後には、下手な戦術兵器よりも凄まじい破壊が爪痕を残している。そしてその破壊は、自分の位置から前方に向けて繰り出されているのだ。

この破壊を行ったのは、おそらく自分だ。

その余波が“守るべき誰か”を傷付けていたことも、容易に想像できるほどの圧倒的な破壊を。

だが、テオは認めたくなかった。

自分が壊したものを。

他者から責め立てられるまでは、現実から逃避していたかった。

だが、キヤーリサはテオを責めることさえしない。あるいは、それすら不可能だともいうのか。

「俺が……お前を……？」

キヤーリサは、目を合わせようとはしてくれない。

それだけのことが、残酷な事実を明白に示していた。

テオの父、ウィルヘルムⅡミッドフォードが現場を見、事実を悟るのに数分もかからなかっただろう。

キヤーリサが目を見張ったのは、そこから先。瓦礫の中に茫然自失といった雰囲気で佇むテオを前にしてウィルヘルムがとった行動だった。

あれだけの破壊をもたらしたテオに臆することも無く、肩を抱いて何かを語ると、ミッドフォード家の護衛騎士にテオを任せた。

「さて…まずは、お詫びをしなければなりませんね」

ウィルヘルムはキャーリサに向き直り、深々と頭を垂れる。

そこには、キャーリサが知る由の無かった覚悟が滲んでいた。

覚醒してしまった息子を前に、父親が取るべき行動としての覚悟が。

「英国第二王女、キャーリサ様。今回の顛末に携わる事実を黙っていたことをお許しください」

謝罪を皮切りに、ウィルヘルムは語りだした。

ミッドフォードの血筋に、間隔を空けて発生する異質な魔術が存在すること。

“感情”を源に起動する漆黒のその術式は、19歳前後で発動すること。

通常時展開しているミッドフォード邸の守護術式も、テオの魔術の発動を恐れて解除していたこと。

そして、感情という起爆剤を得たその術式を制御することは、事実上不可能であること。

ただし、唯一存在する制御法は、英国王室の血族の庇護を受けること。

どれもこれも、目の前でテオの一撃を目にしていなければ信じることのできない内容だった。

だが、キャーリサはそれを信じざるをえない。

あれだけの破壊と、余波でさえ人を傷つけることのできる術式を前に。

「だったら…その事実を、まずテオに…」

これだけの能力を自らの与り知らぬ領域で発動したのだ。

テオ自身にあふれる後悔と絶望は、計り知れないだろう。

だがそのことに対しても、ウィルヘルムの返事は冷静沈着だった。

「キヤーリサ様、今申し上げた通り、テオの魔術は感情を源にしております。今の彼に不用意に事実を与えることは、余計な暴走を招きかねません。ですから、最小限の事実の留め、彼を術式を封じる部屋へ送り届けました」

どこか冷淡にも感じるこの反応が、正しいのだろうか。

だがキヤーリサにも、テオの元へ駆けつけることはできそうにない。圧倒的な一撃を放った彼を気にかけた瞬間、静電気のような魔力のせいで、キヤーリサは傷を負った。

キヤーリサが受けた傷の源は、テロリストへ向けたあの怒りの、おそらくは1パーセントにも満たないだろう。だが、それでも十分に思ってしまった。

敵を睨み、唸り、構える彼の姿を――怖い、と。

そして、正気を取り戻したであろう彼の問いかけにも、身を竦ませることしかできなかった。

（何てことだ…私はアイツを……怖がってしまった…!!）

キヤーリサには理解できた。

その行為が、テオをどれだけ傷つけてしまったのかを。

日頃、関わりの薄いカレッジの生徒には畏怖と尊敬の入り混じった眼で見られることに慣れている彼女だったが、そのバランスが畏怖の一面に傾いた時の恐怖を彼女は知っている。だから、今のテオがどれほど“怖い”のかも。

しかし。

その感情を行動に移すだけの決心がつかないうちに、再度の暴走が訪れる。

「オオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！」

邸内から響く、絶叫。

例えるなら、狼人間がその力を制御できないかのように、絶望的なまでの苦悶に満ち、身を裂くような叫び。

感情をそのまま吐き出している彼の叫びに、キヤーリサはおろか、ウィルヘルムまでもが身を竦ませる。

彼の魔術はそれほどに、人間の感情に訴える力を持っていた。

「ウィルヘルム、これは……！！！」

唇を噛むウィルヘルムを問いたのですが、彼でもどうしようもないことくらい、キヤーリサにはわかっていた。

「ええ。……テオの暴走が、再度発生したのですね……」

絶叫に乗せられるように、邸内を黒い魔力の残滓が舞う。

野焼きの灰にも似たそれは、テオの人間らしい感情が今にも燃え尽きようとしていることの暗示に思えて、キヤーリサの背筋が凍る。それでも。

彼女は、テオのための一步を踏み出せなかった。

続けざまに入る、テオの暴走という連絡、そしてテオがミッドフォード邸の周囲に広がる森へ逃走したという報告。

ウィルヘルムの隣でそれらをすべて聞いていた彼女には、テオがまるで危険な猛獣のように扱われていると感じざるをえなかった。

しかし、同時にこうも思ったのだ。

(私も…同罪だ…!)

あの時、テオは助けを求めているのに。

縋るような彼の眼に、キャーリサは手を差し伸べることができなかった。

だが、今そのことを後悔しても、すでに手遅れ。

もはや後悔の声すら、彼には届かないのだから。

深い深い森の中で、一人考えるしかない。

どうしてこうなった？

けれど、いくら考えても、答えなんて出るわけが無い。

頭を掻き毟り、18歳の頭で幾ら現状を弄繰り回しても、明確な回答なんて出るわけがないのだ。

当然、これからどうすればいいのかも。

もう2日、こうしている。

2日前の夜。ミッドフォード邸にテロリストが押し入ったその日。テオフラストウスⅡミッドフォードは、得体の知れない黒い術式を発動した。そして、敵を排除するだけでなく、キャーリサまでも傷つけてしまった。

自分で制御できなかったことなんて、何の言い訳にもならない。生涯を掛けて守る、と誓うはずだった少女の姿は、遥か遠くだ。

否、物理的な距離としてはせいぜい10キロも無いだろう。だが、心の隔絶をテオは覚えずにいられない。

「俺は…どうすればいいんだよ…っ!」

自身の中に眠る力。向けられた畏怖の目線。父親から告げられた真実。

その全てが、テオを絶望の淵へと叩き込む。

こうして絶望している間にも、テオの行動の全てが魔力を生みだすエンジンとなり、ブースターとなり、幾倍にもその威力を増幅させていく。

感情の源さえ掴めない今の彼には、触れる全てを壊すしかできない魔力が。

「どうするんだよコレ…死ぬしかないじゃないか…」

ハリネズミのジレンマではないが、今のテオには、人はおろか生ある者と関わることさえ許されない。

ならばせめて、傷付ける者が少ないうちに。

目についた鋭利な木の枝を手に、喉元へ向けて突き立てる。

そんな、僅か数十秒で済んでしまうような絶命の瞬間を、この二日で幾度想像したことだろう。

だが、

できない。

護りたかった彼女の姿が、何度でも彼の脳裏によぎる。

何でもできて、羨ましいくらいに才能とカリスマ性に満ちていて、それでいて目を奪われるくらいに美しい。

事実、テオの魂は彼女に奪われてしまったのだろう。

女吸血鬼に魅了され、下僕となった男のように、自ら命を絶つことさえできない。

「死ぬのは…嫌だなあ」

彼の口からこぼれ落ちるのは、溢れゆく想い。
もう伝えることも叶わない、儚い願い。

「キヤーリサ……お前が……」

と。

倒木に身を預け、虚ろに言葉を放つテオを、赤く照らす光があった。
地平の向こうから、間接照明のように森全体を照らす真紅の光源を、
テオは一瞬で理解した。

揺らめき、色合い、方向、それらによって導き出された答えは、

「屋敷のある方向……それにこれは……炎……!？」

ミッドフォード邸が、炎上している――

e p. 7 死ぬのは嫌だ（後書き）

次回、テオの過去編が完結すると同時に、クーデター編へ戻ります！

e p. 8 たとえ、悪役でも（前書き）

テオレルドの過去編、終了します。

ついに時間軸は現代、クーデター編へ！！

e p. 8 たとえ、悪役でも

ウィルヘルムⅡミッドフォードが見たのは、深い森を踏み越えて迫る数十の人影だった。

先日、テオフラストウスⅡミッドフォードが発動させた魔術のことで、イギリス清教から呼び出しを受けてもいた彼には、その正体について予想が出来た。

だが、王室と密接なつながりを持ち、相互扶助の関係にある彼らの責任を追及する者は少なく、被害を受けたのがミッドフォード邸の敷地内に限定されていたことから、ミッドフォード家への処罰は無いに等しかった。

だが、その程度で済まされないことも、彼は分かっていた。

（英国を愛するが故の、歪んだ正義感か…敵に回すのは残念だ…）

しかしどう考えても、テオの発動した魔術は『異端』だ。

イギリス清教の一部のものが主張する“魔女狩り”の言いがかりとするには十分すぎる理由を得て、彼らは――数十に及ぶ魔術師たちは活動を開始した。

その中には、純粋に王室の汚点を嫌う者、ミッドフォードの家が気に喰わない者、あるいはテオの術式を恐れている者も含まれているだろう。

いずれにせよ、目的は一つだ。

「テオの殺害。いや、あわよくばミッドフォード家を没落させて、その座に就こうとする、くらいは狙っているかも知ない」

つい言葉に出ていた軽口を留め、口の中で呪を紡ぐ。

すると、絵画のように完璧に管理されていた庭園の一切が、まるで

生き物のように姿形を変えていく。
歩き出す彫刻や、巨大化していく垣根。

これらの術式もまた、ミッドフォードの家に伝わる術式だ。
英国の王室に携わる者として、その身が危険に曝されることはいく
らでもあった。それ故に、この邸宅は文字通り、“生きた要塞”と
しての機能を以て、侵入者を排除するよう作動することができる。
テオの暴走を恐れ、昨日までは解除していた機能だ。

それ故にテロリストの侵入を感知できなかったのだから、間抜けな
話だ、ともウィルヘルムは思う。

そして同時に、この家を護ることが、自分にできることだとも思う。
今は無理かもしれないが、テオが帰ってくる場所として、ここは死
守しなければならないのだから。

だが、敷地の境界線ギリギリ。

あと一步踏み出せば猛攻撃を受ける、といった距離で踏みとどまっ
た魔術師の一人が掲げた物を、いや、“彼女”を見て、ウィルヘル
ムミッドフォードの背筋が凍った。

「貴様ら：何をしているのか、わかっているのか……！」

続いて発したのは、普段の彼を知る者なら想像もできない低い唸り
声。

自分でも驚くほどに激情に任せた言葉を発している彼の耳には、魔
術師からの言葉が、脳内を経由したテレパシーのように届く。

「何って？ 答えは単純さ。異教と交わろうとする女狐を、この手で

裁くんだよ」

「貴様らあああああ！！！！！！！！！！」

激昂するウィルヘルムの叫びは、魔術師たちの嘲笑を増すばかり。そして、決して勝てる可能性の低くなかった防衛戦は、たった一人の存在で、決死の奪還戦へと様相を変えてしまった。

深い森を照らす、血のように赤い炎。

その源を、テオフラストウスⅡミッドフォードが考えるまでもない。彼の前方に存在する建造物と言え、ミッドフォード邸のみだからだ。

ならば何故。

それを思考する彼の背後から、足音がした。

「!？」

森の中。今でこそ赤い光源を有しているが、さっきまでは漆黒の空間だったはず。

そこに、これ以上不釣り合いな存在は無い、とでも言わんばかりに、一人の女性が佇んでいた。

いや、少女ともいえる。下手をすれば自分よりも年下に見える彼女には、一つの特徴があった。

――長すぎる、髪だ。

赤い揺らめきを受けて光る金色のそれは、下手な貴金属よりも美し

いと彼の目には映った。

しかし切り出すのは、彼の、黒い部分にまつわる話。

「ようやく見つけたわ、テオフラストウスⅡミッドフォード。いえ、愛称は“テオ”だったわね。黒い魔力の調子はどうかしら？」

自分を探していた、という趣旨に驚きはしない。

あれだけのことをして、むしろ追手がいないことに驚いていたのだ。意表を突かれたのは、そのフランクな語り口。

「お前は…何で俺を恐れない」

「何で、ね。いたく過小評価されているようだけど、貴方程度に怯えるようでは、イギリス清教の『最大主教』アーケビショップは務まらないわ」

「!!」

目の前の少女の言葉が、一瞬信じられない。

イギリス清教と言えば、王室派とも仲が悪く、エリザード王妃や父上は意図して自分とのかかわりを避けている節さえあったというのに、よもやその主が、直接現れようとは。

「で？俺に何の用だ。殺害するだけなら、もっと実力のある部下を差し向ければいい話なものな」

「そうね…強いて目的を設定するなら、それは謝罪かしら？」

「謝罪？」

怪訝な表情で返すテオに、『最大主教』と名乗る女は事実のみを告げる。

淡々と、微笑みを崩さないままで。

だがその微笑は、テオに最悪の未来を描かせた。

「ええ。たった今、ミッドフォード邸に向けて数十の魔術師が進攻中よ。その中には、我がイギリス清教に所属する魔術師も含まれている……狙いは、わかるわね？」

「何だよ……それ……!!」

彼女の言う“狙い”など、テオには一つしか心当たりが無い。自分の存在だ。

抹消か、強奪か。いずれにせよ、テオが発動したあの術式を狙って魔術師が進行しているのであれば、それは自分のせいだということになる。

彼女が言う謝罪とは、自分が長として君臨する組織を管轄できず、あまつさえ王室派との衝突原因さえ作り出してしまったことなのだろう。

だがそんなことは、今のテオにはどうでもよかった。

「父上……!!」

気付けば、その足は動き出していた。赤く燃えるミッドフォード邸へ向けて。

その行為を、『最大主教』は止めようとしないう。そもその目的が、テオを死地に向かわせでもすることだったのだろう。そして、彼の耳に、最悪の言葉が届いた。

『あー、聞こえているかな？ テオフラストウスⅡミッドフォード』

森全体に響くような、それでいてスピーカーのようでもない声。すぐさま魔術によるそれだと理解できたテオに、声の主は続ける。

『全く……面倒な現実逃避なんて止めて、とっとと出てきてくれないかなあ。幾ら俺でも、これだけの面積の森を探索するのは骨が折れ

るんだよ』

(そうか…すでに屋敷は……)

面倒そうな言葉の裏には、ミッドフォード邸を占拠し、テオの搜索を一通り終えたという意味合いが含まれていた。

それはつまり、ウィルヘルムⅡミッドフォードが敗北したということ。

彼の命さえ、おそらくは無い。

(ならばせめて、父上の仇だけは……!!)

気付けば、激情に満ちるテオの足は加速していた。それは純粋な彼の脚力によるものではない。

踏み出し、踏み抜き、手を振りかざす。

その一連の動作が膨大な魔力を生みだし、黒い残像として付きまとはってテオの速度を上昇させていた。

下手をすれば聖人に匹敵するほどの速力は、己が名声、地位を求める魔術師程度、蹴散らすに十分であった程だ。

テオの想像以上に、“敵”は惨い存在だった。

『あー。お前の魔力と生存、こちらで感知した。その場で止まってる。でないと——お前の大事な大事なオヒメサマが、死ぬぞ?』

思考が、止まった。

足元が狂い、転び、傷だらけになりながらも、テオの脳裏には一人

の少女の姿しか浮かばない。
何故、どうして、彼女が。

（嘘だろ…そんなわけ…）

ハツタリであることを祈ることさえ許さず、敵はテオの氣勢を殺いだ。

最も単純で効果的な方法で。

『人質の証拠なら、今からこの姫様に喋らせよう。護衛もつけずにここへ向かってきた、馬鹿なオヒメサマにな』

ぐい、と人を引き寄せる気配と共に、声色が切り替わる。

それは、何年も聞きなれた声。ずつと聞きたかった声。だが、この場では本当に聞きたくなかった声だった。

『ごめん。テオ。私は…』

間違えるはずもない。キャーリサの声。

彼女らしくない謝罪に始まるその言葉が、テオをひどく絶望させる。

（そんな………！！！！）

敵の下に、キャーリサがいる。おそらくは自分への人質として。

だが、続く彼女の言葉は、テオの予想を大きく裏切った。

『おまえが生きていてくれて、良かった』

テオは最初、単語の意味を掴み損ねていた。

あの時。初めて黒い魔力を行使した時、怯えを含む目線で自分のこ

とを見ていたキャーリサが、今の自分を好いているような発言をするわけがないではないか、と。

だが、通信の向こうで響いたのは、今まで喋っていた粗暴な口ぶりの男が苦悶する声と、周囲をなぎ払うような風切り音。

それが意味するものは――

キャーリサが、屋敷を襲った魔術師たちに反抗の意思を見せていることだった。

『屋敷から逃げ出したお前が生きているかどーか確かめるには、この方法が手っ取り早かったの。……そして、目的は達せられた』

「何を、言ってるんだ……」

テオの脳裏によぎる、最悪の未来。

この時点で、テオはキャーリサの行動を予測していた。できてしまった。

『今までありがとう。テオ』

「――止めるよ」

『こんな私を好きでいてくれて。私のために戦ってくれて。だけど私は、最後にお前を裏切った』

彼女らしくない独白の向こうでは、戦闘時特有の斬撃、砲撃音が絶え間無く響く。その中心にありながら、キャーリサの言葉は続いた。そしてテオは、彼女に想いを届ける術を持たない。

『こんな私を、お前は笑うだろう。好きな人を裏切った自責の念に耐えられず、こんな選択をした私を』

「やめろ……………」

『王室のことなんて忘れて好きに生きろ。私が死ねば、イギリス清教の方でこの事件そのものをタブー化するだろうからな。お前にそこまでの影響は無いはずだ』

「やめてくれ……………」

『テオ……。さよならだ』

「止めろおおおおおおおおおおおお！！！！！！」

テオの絶叫が虚空に消えるなか、通信は終わる。

だが、テオは最後に聞いた。彼女の周囲、全方向から襲い掛かるであろう魔術師たちの怒声を。

彼らは、英国王室の血を最も濃く受け継いでいるキャーリサに対しても容赦しないだろう。そして彼らの実力は、ウィルヘルム率いるミッドフォード邸を操作する術式を打ち破る程。

そこから導き出される結論は、あっけないほどに残酷だ。

（キャーリサが、死ぬ）

何故、こうなってしまうのだ。

キャーリサを守りたいから力をつけた。

キャーリサを護るために狂気に堕ちた。

テオの行動原理の全ては、たった一人の少女のためにあったというのに。

彼女の最期が、テオを後悔の戒めから解き放つための行動であるなど、受け入れられる訳がない。

理不尽な現実への怒りは、彼の中で『魔力』へと変換されていく。

自分は誰に守られてきたのか。

自分は誰を救いたいのか。

自分は誰の傍にいたいのか。

全ての自問自答の答えは、一人の少女へ向かう。

（そうさ：俺はアイツを守りたい。たとえ悪役でも、格好悪くても構わない）

ずっと憧れた、絵本の中の王子様のようにはいかないかもしれない。それでも、彼女を救えるのなら。

「この魔力^{チカラ}…使わせてもらう！」

覚悟。

今まで逃げてきたそれを言葉にした瞬間、テオの周囲の空中に黒い魔法陣が走る。

最初の一輪は、半径1メートルもない小さなものだ。

だが、それは数を増す。

膨大な月日を経た大木の年輪のごとく描かれるそれは重なり、連なり、空間を震わせる。

——そして、収束した。

テオの心臓へ、数百にも重なる魔法陣の魔力が殺到する。

聖人さえ凌駕し、カーテナ・オリジナルの主さえ圧倒する暴力の源として。

「があああああああああああああああああ……！！！！！！！！！！」

しかし、烈破の気合いが証明する。
今度は暴走ではない。自らの意思で、覚醒したのだ。

「……………今行くぞ、キャーリサ」

目指すは、キャーリサの救出。

それに伴う被害など、知ったことではない。

たった一つの目的。

そのためならば、テオフラストウスⅡミッドフォード自身の肉体さえ、犠牲にできた。

この光景を、キャーリサはどこか懐かしむような目で見ていた。

あの時。10年前のミッドフォード邸で、自分に向けられた悪意の全てを切り刻み、襲う刃を叩き潰し、キャーリサを助けてくれた悪魔の翼。

直に見るのは10年振りだが、あのときと違うことが一つある。

それは、敵意を向けられているのが、キャーリサ本人であるということ。

「その顔……かつての婚約者に向ける表情では無いの。随分不躰に育ったよーだし」

「あの時と同じだよ。俺は——お前を守りにきた」

ロンドンからドーヴァー海峡へ続く道。

その途中で、テオレルドと名を変えていたテオフラストウスⅡミッドフォードと、キャーリサは対峙していた。
互いに、譲れないもののために。

e p. 9 資格は無かった（前書き）

ついにテオVSキャーリサ！

哀しい勝負の行方は……！？

e p. 9 資格は無かった

ロンドン南部、ユーロスターの線路から数キロ離れた草原。そこで何があったのかを、現代の科学で説明することはできない。

ただ言葉にするならば、爆発。

科学的な爆薬など必要ない。ただ“彼女”は、注がれた力を放出しただけなのだから。

『カーテナ・オリジナル』。

英国国内に限り、王の証たるだけの力と畏怖を与える、強大な霊装。文字通りに一つの国を背負い、彼女は立っていた。

英国第二王女、キャーリサ。

差し向けたはずの『騎士団長』^{ナイトリーダー}がウィリアムⅡオルウェルに敗北し、煩わしい『幻想殺し（イマジンブレイカー）』までもが登場したこの戦場を、たった一撃で塗り替えた彼女は、とある男と対峙していた。

「最大の懸案事項が向こうからやってきてくれたことは：喜ぶべきなのだろうな」

「最大の懸案事項、か。俺をそう認識しているなら、おまえ自身が来るべきだったんだ。キャーリサ」

王族である彼女とも、敬意を一切払うことなく会話する男。

テオフラストウスⅡミッドフォード。

10年前までの許嫁にして、この変革における最大級の障害の一つ。過去に王族と交わったミッドフォードの家の人間は、カーテナを扱えるのだ。ゆえに彼女の『目的』のためには、絶対に排除しなければならぬ一族だった。

そのミッドフォード家の唯一の生き残り、テオフラストウス。

今はテオレルドⅡミラーと名を変えているようだが、その容姿は彼

女の記憶の中の存在と変わりない。

漆黒の髪、深い瞳、黒のローブ。――そして彼の背後に聳える、
“巨大な翼”。

彼の感情のままに敵を排除する、ミッドフォード家の災厄ともいえる術式。

この10年でそれを制御する方法を得た彼は、あろうことかキャリアサの前に立ちはだかった。

彼女が望む変革を、止めさせるために。

ならば彼は、テオフラストウスⅡミッドフォードは、敵だ。

過去に捨て去った感情などに構わず、その刃の餌食とするのみ。

「一つ、テオは勘違いをしてるの。お前を殺すために騎士たちを差し向けたわけじゃないし。お前を孤立させるために、あれだけの騎士を用意したの。お前がいつもつるんでる、あのランサーとかいう奴と一緒に居られると面倒だからだし」

余裕を含んで言うキャリアリサの言葉は、嘘ではない。

テオともう一人。ランサーⅡJⅡグレイスの二人で発動する灰色の術式は、カーテナと渡り合うだけの可能性を秘めているのだ。

だが、今のテオにそれだけの危険性は無い。

感情を魔力に変換し、術式として使役する。一見無尽蔵にも見えるその術式には、大きな穴がある。

それは、テオの感情に起因する、ということだ。

護りたい誰かを傷つける。理不尽な暴虐を行使する。

これまで、テオレルドとしてこなしてきた任務における敵は、いずれもがこうした行為を平気で行う、外道と呼ぶに相応しい連中だった。

だが、キャリアリサの選定で任務にあたらせた、香港での一件。

ヴィリアンの命を狙う、という、本来ならばテオの魔術の餌食となるだけの行為をした魔術師は今、ロンドン塔に幽閉されている。

そして、テオが彼を殺せなかった理由を、キヤリーサは理解している。

とても陳腐な言葉だが、それは“同情”だ。

敵の根源を知ったテオは、決意を揺らがされた。本当に簡単に。戦闘中の言葉のやり取りで揺らぐような術式を前に、キヤリーサはどこか自虐の感情に駆られつつも思う。

（我ながら打算的だし。あのテオが、私を相手に本気で殺意を向けられないことをわかった上で、カーテナを振るうなんてな）

許嫁としての18年間の想いが、互いにある。

だが、キヤリーサはそれを糧とすることができ、テオにとってそれは枷でしかない。

「理由は承知だろう。私の前に現れたからには——ここがお前の墓場だ」

言葉と共にキヤリーサが取った行動は単純なものだ。

その手にあるカーテナを軽く薙ぐだけ。たったそれだけで、空間は裂かれ、次元の狭間が実体を持って牙を剥く。

『全次元切断術式』。

彼女の前に立ちはだかるものはすべて、次元ごと切り裂かれる。

その副産物として生まれる『残骸物質』でさえ、テオを仕留めるには十分すぎた。

扇状に生まれる、真っ白なプラスチックにも似た質感のそれは、今は一介の魔術師でしかないテオには弾くことも難しい攻撃だった。

（これで終わりだ。私たちの因縁も、残心も、たった一撃で…終わり）

それでも、キャーリサはテオの絶命の瞬間を見たくはなかった。
好きだった男を、自分の手で屠るという現実を、どこか信じたくは
なかった。

だからこそ、直接の斬撃でテオの首を掻き切るということをしな
かったし、予想される直撃の瞬間には視線を逸らしてしまっていた。
だが。

バギン！！と。

彼女の耳に届いたのは、何かが破壊された音。

可能性は一つだけ。

術式の解除によってのみ消滅するはずの『残骸物質』が、テオによ
って破壊されたのだ。

それも、今のテオには不可能なはずの術式で。

(…馬鹿な。テオの中の感情の高ぶりも、翼の規模を見る限り想定
内だったし。報告を受ける限り、テオの術式では『残骸物質』の雨
さえ防げないはず……なのに！)

これもまた、感情という得体の知れないものを原料とするテオの術
式の派生形だというのか。

予想外と驚愕が重なり、混乱するキャーリサに、テオの声が届いた。

「お前からの宣戦布告を受けてからほぼ一日…奇襲をかけるでもな
く、ヴィリアンのもとへ向かうのでもなく、俺が本当に何もしてい
なかったと思うのか……？」

『残骸物質』のなれの果て。白い欠片が降り注ぐ中へ歩みを進める
テオの手には、一つの武器が握られていた。

近代兵装ではない。かといって、一見しただけではそれが持つ性質、
術式を判別できない。

当然だろう。

テオが告げたその名前を、キャーリサでさえ最初は飲み込めなかつ
た。

十字教ならば誰もが知っている、しかし誰もその存在を知らない。
矛盾しているその霊装の名は――

「『ロンギヌスの槍』。『最大主教』が隠し持っていた、イギリス
清教最大にして最高の機密品だ」

一振り。

たったそれだけで巨大な残骸物質を塵に帰し、テオフラストウスⅡ
ミッドフォードは迫る。

「この槍で、終わりにする」

誰もがその霊装の名を知っているのに、誰も目にしたことはない。

『神の子』を刺殺したとも、その術式を行使した術者の名前とも、
あるいは血液という形で大量の『天使の力』を浴びて膨大な力を得

た槍の形の武器とも伝わる、とある霊装。

それが、『ロンギヌスの槍』だ。

当然、テオレルドもそれ自身を使っている訳ではない。

仮に本物の『ロンギヌスの槍』を使おうものなら、彼の身体は人間に収まるわけの無い『天使の力』の暴風雨に苛まれ、全身の血管を断裂させて死んでいただろう。

だが、今のテオレルドには必要なものだ。

（要するに、この霊装は有名になりすぎた、ということだな）

『大英博物館』の最深部から拝借してきたこの霊装は、確かに『アーセナルロンギヌスの槍』ではない。

製造する方法も、騎士団が重要な任務の時に用いる『量産聖槍（ロンギヌスⅡレプリカ）』と大差ない。

ただ、真逆。

そこが決定的にこの槍を特別製にしていた。

「そんなに驚くなよ、キャーリサ。この槍はただ、魔力のベクトルが違うだけなんだから」

「……？」

普通の霊装は、神話のエピソードを具現化するために用いられる。神の御業を、グレードを下げ、解釈の仕方を変更し、魔術師の目的のために応用するための品々が“霊装”だ。

だが、この『ロンギヌスの槍』は少し気色が違った。

それは、この槍“そのものが神話になろうとしている”ということだ。

（通常、エピソードの形でイメージする『天使の力』の応用法を、この槍はゼロから創造した。一部技術はローマ正教の暗部から借用

したというのだから、表立って使うことができないのもわかるがな……)

莫大な『天使の力』を封入され、加工され、存在するのなら『神の子』さえ殺せるレベルに達した一本の槍。

それ自身を真似ることでも『量産聖槍』のような量産武器の製造さえ可能にしたこの霊装を、テオレルドは扱っている。

それでも、一歩間違えば魔力は暴走し、テオの命を奪うであろうほどの『天使の力』を宿して。

これが示す意味を、キヤーリサは理解しただろうか。

「つまり、それは――」

「わかるか、キヤーリサ。お前の『カーテナ・オリジナル』が一つの国を背負うためにあるのなら、この槍は、一つの宗教そのものを背負っているんだ」

一方は、イギリスの力。

4つの国と3つの機構から成る魔術的な力を織り上げ、一人の人間に注ぐ。

つまり、『カーテナ・オリジナル』でさえ神話に基づいた霊装でしかないのだ。

対するは十字教の力。

理屈では不可能なことを可能にする神話を宿し、分配さえ可能にする。

一方のこちらは、十字教の奇跡そのものを再現できる。

互いの力は、逆転したも同然。

「……っ」

キヤーリサの足が、攻撃のための踏み込みから防御、回避のための

予備動作へと移っていく。

表立ってはほんの僅かだが、彼女の内面では相当の葛藤が生じていることが手に取るようにわかる。

そのことでテオは思い知る。結局、お互い様なのだと。

テオフラストウスⅡミッドフォードのままでは、キヤーリサに本気でぶつかっていけなかった。

彼の感情の揺らぎは、それこそ術式の展開に差し支えるほどだった。だからこそ、『ロンギヌスの槍』になど頼った。

騎士を大量に差し向け、直接対決した時でさえ飛び道具に頼ったキヤーリサと、何ら変わりはないのだ。

——だが、キヤーリサと違えることが一つ。

「勝つのは、俺だ」

今度こそ、キヤーリサと直接向き合うために。

歩を進めるテオレルドへ、キヤーリサは直接切りかかっていくことをしない。

否、できないのだ。

その瞬間に迎撃され、カーテナさえ無に帰される可能性を考慮してしまうがゆえに。

「この程度で…！」

キヤーリサの抵抗として降り注ぐ残骸物質の弾丸。

それを、テオレルドは躲そうともしない。

ただ見えない何かに阻まれ、碎かれ、次元の残滓は意味をなくしていく。

余波すら届かない攻撃では、距離を縮め、その刃の届くところへ歩むテオレルドを止められはしない。

[illegible]

如何に王としての地位を踏み固めようと、この一撃を受ける瞬間
テオレルドⅡミラーに肉薄された彼女は、王どころか第二王女でさ
えいられなかった。

キャーリサという女性。

「終わりにしよう。キャーリサ」

それだけでキャリサの身体は硬直し、子供のような抵抗さえ止んでしまう。

あとはそれを振り下ろし、彼女を苦しめていた剣を破壊してしまえば終わり“だった”。

代償として発生したのは、肩口から噴出する、致死量に近い血。

には、諦めにも似た感情が渦を巻いていた。

（結局：俺にキャーリサを止める資格は…、無かったのか……）

テオレルドは、『ロンギヌスの槍』を手にした時点で気づいていた。これから行うことが、キャーリサと同じレベルであることを。

自分の身に迫った重大な事態を、仲間と共有することもなく、誰かを利用して、何かに頼り、たった一人で解決しようとしている、と。その決意をした時点で、この結末を予想していなかったわけではない。

扱う膨大な『天使の力』に体を蝕まれ、死を迎えるという結末を。

（けれど…このタイミングとはな…）

あと5秒。

『ロンギヌスの槍』を制御するために用いていた黒の術式をあと5秒維持できれば、カーテナを破壊し、このクーデターは失敗に終わっていた。

キャーリサの本当の目的を達成する前に、彼女を救えたはずだ。だが、それはもう叶わない。

（なんて目で……俺を見てんだ…）

すぐそこにある彼女の瞳には、目の前でテオが断裂していくさまが映っているだろう。

現実を飲み込めずに、立ち尽くしてしまうのも仕方ないかもしれない。

薄れゆく意識の中で、テオは最後に想っていた。

それを言葉にして伝えることは、今の彼にはひどく難しい。

身体がバラバラになってしまいそうな激痛の中、血を吐きながらも

彼は告げようとする。

「…キヤーリサ……」

足元さえ覚束なくなり、彼女にもたれる。

それを、直前まで敵意に満ちた目で見ていたキヤーリサも止めない。彼の身体から溢れる血が彼女の真っ赤なドレスに染み込んでいく。

テオフラストウスⅡミッドフォードの力が、彼女に移されていくかのように。

身体を預け、一思いにそれを告げる。

10年間、言えなかった。

最初から。

カレッジで苛められていたときも、

10年前の襲撃も、

ローマ正教の力を前に一人悩んでいたときも、
結局。

「護れなくて……御免……な」

e p. 10 ひねくれ者の王子様

戦う理由は、最初から簡単だった。

自分が望む未来を、彼は望んでいない。

単純な理由だ。

それが、一国の民、その全ての未来に関わっているのだから譲れない。

それだけだった。

なのに。

どうして。

「何で……」

どうして、こんな結末を迎えてしまうのか。

どこかで、何かが掛け違ったのか。

何か一つの事象を変えれば、目の前の現実を変えられたのだろうか。そんな思考さえ及ばないほど、目の前の現実是非情で、冷血だった。

「何で、おまえが…」

膝をついた英国第二王女、キャーリサの身体に寄り添うように、一人の男が血まみれになっていた。

テオフラストウスⅡミッドフォード。

10年前までの許嫁で、それから、ずっと好きだった男。

言いたいことはたくさんあった。

でも、結局言えなかった。

互いを護るために意地を張って、つまらない戦いばかり繰り返して。その結末が、テオの死だというのか。

認めたくない。

でも、体に伝う赤黒く冷たい液体の感覚は、どうしようもなく、ごまかせない。

（そうか…私は…私たちは、こんなつまらない結論を迎えることしかできなかったのか）

感じられない。

身体を寄せ合っているのに、相手の鼓動も、体温も、何も。

あれだけ愛おしかった男の亡骸を前に、途方にくれることしかできない。

「私は…それでも…」

だが、彼女はそれを振り切ろうとあがく。

過去の感情も、今の葛藤も、切り捨てて。

すでに始まった変革を完遂するためには必要なことなのだから。

震える足に力を込め、一步を踏み出す。

テオを見下ろすが、それ以上に彼の近くにいることが耐えられそうになくて、目を背けた。

これ以上彼のそばにいれば、その亡骸に縋りついて、泣き叫んでしまいそうだったから。

だから、届くあての無い独り言で、この悲劇を終わりにする。

「さようなら、テオ。それでも私は…お前を、愛していたぞ」

間もなく、迎えのヘリが到着する。

それまでにこの場を離れなければ、敵と認識されるテオの肉体は消し炭にされるだろう。

そんなことをした騎士たちを、キャーリサは生かしておく自信がなかった。

だから跳躍する。
テオの身体が見えなくなるまで。
一思いに。

同じ瞬間。

ロンドン郊外で騎士派との戦闘を回避しつつ、清教派の一団を尾行していたランサーⅡJⅡグレイスは、とある違和感に気付いた。

共有している領域の魔力が、急速に力を失っていく。

それは、自分の中にある天秤が片方に揺らぐような違和感となって彼の内面に生まれる。

(……、先輩)

原因には、心当たりがある。

単身、キャーリサへ挑んだテオレルドⅡミラーが、敗北し、命を落としたのだ、と。

そうでなければ、『デュアルスベル二重魔術』としての魔力が揺らぐことなどありえない。

一つの魔法名を共有し、それゆえに特殊な魔術を発動しうる彼らは、文字通り一心同体だった。

魔法名という鍵を使わずとも、互いの命の危機を察知できるほどには。

「ランサー？　どうかしたのか…？」

共に騎士派の追手から逃げている、半吸血鬼の少女、カインⅡVⅡ
スカーレットがランサーの顔を不安げな表情で覗き込むが、ランサ
ーは一瞬見せた不安を、簡単に覆ってみせる。

「大丈夫っすよ。なんでも無いっすから」

不用意に彼女に心配を掛けるよりは、この不安を押し殺した方がい
い。

そう考えるランサーだが、先ほどカインにはテオレルドの過去をす
べて話してしまっている。

下手に隠すことも都合が悪いか、と逡巡する彼は――知覚した。

（！！　先輩の魔力が…復活していく…！！？）

何者かの治癒魔術を受けている、としか思えない速度で。

命を絶たれたとさえ思っていたテオレルドの魔力が、急激に。

天秤を元に戻されたことで彼の中の違和感は消滅したが、その最後。
テオレルドの傷を癒している魔術の行使者に、ランサーは予想がで
きた。

（清教派の魔術師じゃない。主力をこっちに集中している以上、治
癒術式を持った部隊をあんな危険な地域に派遣するわけがない。ほ
とんど消去法だけど、この感覚は…）

違和感を消し去っていく、治癒の術式。

それは、王室派に伝わる術式だった。カーテナを制御するだけでは
ない、王室派に伝わる秘術の領域。

現在、テオレルドのいる場所に向かえる王族など、一人しかいない。
女王エリザードは、騎士派によって拘束中。キヤーリサにはそんな
ことをする動機がない。ヴィリアンにはこんな魔術を使えるわけが
ない。

つまり。

あの三姉妹の長女だ。

（リメエア様…いいタイミングっス！）

ランサーの不安の表情は掻き消えた。

仮面で覆うまでもなく、本当に。

ならば、行き先を変更しなければならぬだろう。

「カイン、少し行くところが出来たっス。先輩のところへ」

「え…？」

「あの人に、少し力を貸しに行くんスよ」

そういつて、ランサーは笑んだ。

先にあったのは、柔らかい感触。

傷だらけの身体を預けているのは荒れた地面だったはずなのに、今は柔らかい何かに頭を支えられている。

（俺は…キャーリサを…）

止められなかった。

その言葉と後悔がよぎるより早く、耳に入る声があった。

「どうやら一命は取り留めたみたいね。良かったわ、間に合って」

優しい声だ。

凜としていて、だけど芯があって、どこか近寄りがたい。
この声の主は。

「……リメエ…ア…？」

「そうよ。10年かしら。久しぶりの再会だっていうのに、貴方はいつもボロボロね。まあ、そこは嫌いじゃないのだけれど」

「どうして…お前が…それより、どうして俺は……」

テオには、現状が飲み込めない。

『ロンギヌスの槍』を制御できず、『天使の力』を暴走させた自分に待っていたのは、惨めな死だったはずだ。

事実、彼はその感覚を味わった。

身体の手が抜け落ち、空っぽになっていく感覚。

それを補ってくれたのが、自分に膝枕をして、顔を覗き込んでいるリメエアだというのか。

姿勢を立て直そうとするが、うまく立ち上がることも難しい。

だが――

「自分が生きていることが、そんなに信じられないの？　まあ、仕

方ないかしら。キャーリサがあそこまで動揺していなければ、貴方の生存を見過ごすはずは無かったし、彼女がこれほど派手に『残骸物質』を生み出さなければ、ここを特定することは不可能だったのだし。本当、奇跡といっていいくらいの確率で貴方は生き残ったのよ？」

「っ、相変わらず人の聞きたいことを先読みしすぎるな、お前は……」

「そうね、そこは私の悪い癖かもしれない」

苦笑するリメエア。

でも、と前置きして。

彼女は、危険を冒してまでこの場所へ来た理由、その核心を告げた。

「私がここへ来たのは、一つだけ、貴方に確かめたいことがあったから」

「？」

片眼鏡モノクルの奥、漆黒の瞳がテオを見据え、その心さえ見透かすように、問うた。

彼女の言葉を、テオは直接の心で受け止めることしかできない。

「テオフラストゥスⅡミッドフォード。貴方は、キャーリサⅡウィンザーのことを愛しているの？」

「……！」

「動揺なんてしないで、英国紳士らしく答えなさい？」

「俺は……」

予想外ではあった。

だが、テオの人生のほとんどは彼女のためにあったのだ。今更その事実を否定することなんてできはしない。

彼女への感情を否定することは、テオの人生を否定することになる。感情をぶつけるがままに生きてきた、一人の哀れな魔術師の人生を。だから答える。簡単なことだ。

「俺は、キャーリサを愛している」

その、単純で絶対の単語を言葉にするのは、初めてだった。

護りたい、とか、死んでほしくない、とか、『騎士』^{ナイト}のように気取った台詞はさんざん吐いてきた。

それで、彼女のために立ち上がることはできた。だが、今度は桁が違う。

ゴバツッ!!!! と。

さながら、星が誕生する瞬間のように。

空間を圧し、渦を巻き、爆音と共に君臨する。

『ロングヌスの槍』の暴発と共に失われたはずのテオフラストウス
|| ミッドフォードの魔力が、際限無く溢れてきていた。

全身を駆け巡る黒い魔力は、それ自体が彼の服であるかのように纏われ、威圧感であるかのように昇華され、それでいて決して彼の肉体を破壊することはない。

どこまでも我儘な王様でいられる、彼の魔術。その本当の力の顕現を見て、リメエアは言う。

「それが、貴方の偽らざる感情。——ようやく素直になれたのね。ひねくれ者の王子様？」

「俺は、ここまでの力を扱ったことなんて無いぞ……」

「そうね。確かに、貴方には余る力かもしれない。でも……もう『ロンギヌスの槍』なんて、必要ないでしょう？」

「!!」

「結局、何かに頼り、一人で抱え込む。本当に貴方とキャーリサは似た者同士なのね。だからこそ通じ合う部分も、反発する部分もあるのだろうか」

そこまで言ったりリメエアは、姿勢を正し、王族としての雰囲気醸し出すような言葉づかいでテオへ語りかけた。

「助けてあげてくださいな。何もかも一人で背負いこんだ、可哀そうな妹を」

「お前も、アイツの本当の目的を……」

「そうね。知っているわ。でも、彼女の支えになんてなれなかった。私では力不足だったみたいね」

どこか哀しそうに言うリメエアは、だが確かに、『頭脳の第一王女』としての役割と存在感を果たしていた。

それはつまり、自分が彼女の策略に見事に嵌っていることを意味していたのだが、それで良かった。

「ありがとう、リメエア。ようやくアイツと、向き合えそうだ」

「そうね。お礼はいらないわ。ついでにキャーリサをもらっていつてくれると、英国王室も安泰なのだけど……」

「なっ、リメエア!!」

悪戯っぽく笑う彼女の瞳の奥は、本当に計り知れない。そう思うテオの魔力が、“大きく揺らいだ”。

「「!」」

人間の五感では直接感知できない、低周波のような振動が一瞬遅れて到来する。

それが意味するところは――

「清教派の連中、カーテナの制御システムに食い込んだな…」

「リークした情報通りに、うまくやってくれたみたいね」

おそらく、戦力と体力の補充を行った後で、清教派の魔術師たちはバッキンガム宮殿へと総攻撃をかけるだろう。

そこへ加勢することが、少なくとも今のテオにとっての目的地。誰かとともに戦ってこそ、この『変革』を止められるのだから。

e p. 10 ひねくれ者の王子様（後書き）

次回、クーデター編もクライマックスへ突入！
バッキンガム宮殿での決戦へ続きます！

e p. 11 私の命を懸けて

バッキンガム宮殿は戦場と化した。

数多の魔術師から攻勢を強められても、それを気にもせず、暴君としての存在を遺憾なく発揮する、カーテナ・オリジナル。

それを操るキャーリサにも、一切の隙はない。

「ここまで単調な攻撃しかできないの？　だったら、興ざめだし」
「…っ！」

目の前で唇を噛む、学生服にツンツン頭の少年。その右腕には、この場におけるイレギュラーの最たるものでもある『幻想殺し』が宿っている。

喰らえば一撃で勝敗は決するその右腕に、否がおうにも意識を集中させられる。

それでも、問題はなかった。

（聖人と天草式：専用の術式を持っているこの勢力は少し面倒だし。だが：それ以外は）

元々、魔術師同士の集団戦というのはローマ正教の専売特許だ。

アニエーゼ部隊の存在を差し引いても、対魔術結社の個人戦のために腕を磨いてきた彼らが、チームワークや連携といったことを無理に行えば、そこには隙が生じる。

それだけで、1対数百の戦闘さえ蹂躪が可能なほどだった。

（どうせ聖人の剣術：唯閃でしか私にはダメージは通らない。幻想殺しの存在はあるが、所詮は高校生だし）

少年の手前の地面を抉り、吹き飛ばそうとも、キャーリサは手を抜かない。

ここで反抗の芽を摘むことが、変革を成し遂げる最も手っ取り早い手段なのだから。

「ほら、後衛だろうが関係無いし。呆けていると死ぬぞ!」

ゴバツ!! と。

轟音と共に生み出された巨大な残骸物質が、神裂の後方に構えていた天草式の魔術師たちを吹き飛ばす。

死者は出なかったようだが、幾人かが戦闘不能に陥ったようだ。

これが、英国の主。

聖人、神烈火織との鏖競り合いを演じながらそんなことをする余裕さえ、彼女にはあった。

「さて：それでは、こちらも“数の力”とやらの頼とするし」
「っ!?!」

眼前の聖人が動揺するのも無理はないだろう。

今、彼女は十数機にも及ぶ城塞攻略型霊装、『グリフォンIIスカイ』を従えているのだ。

80メートル級の大きさに赤い色彩、形は最新型のステルス機にも似た構造の飛行物体は、馬上槍として物理的な攻撃性能をもつ地上の“影”を引き連れて動く。

それ単体でウィンザー城の城壁を破壊するに相応しい、強大な霊装。一機でも切り札としての価値があるそのカードを、キャーリサはためらうことなく、同時に切った。

「――我が忠実な僕たちに、ツギハギの魔術師どもはどこまで耐えられるかな?」

余興は終わり。

ここから先は、『グリフォンIIスカイ』とカーテナ・オリジナルを用いた本当の暴虐が始まるだけだ。

そう、キヤーリサは確信していた。

だが、彼女の確信はあっけなく裏切られる。
天より降り注いだ、漆黒の拳によって。

“一瞬”を超える、速度だった。

通常の人間をはるかに超える身体能力を持つ、神裂火織。そしてそれを凌駕するほどに五感を強化されているキヤーリサでさえ、『グリフォンIIスカイ』の一つを地面へと沈めたその一撃を視認できなかった。

さながら、黒い稲妻が舞い降りたかのよう。

だがキヤーリサは、音さえ遅らせるその攻撃の主を次の瞬間には見定めていた。

「そう……生きていたの」

間接的とはいえ、自分が殺したようなものだった。
目の前で命が消えようとする感覚を、確かに味わった。
だが。

「ああ。お人よしな第一王女様のお蔭でな」

見紛うはずがない。

立ち上がる土煙の中から響く、この声の主を。

「そうか…命拾いたうえでも、お前の覚悟は揺るがないのだな」

彼が命を拾った理由など、今はどうでもいい。

ただ、現実として彼は、テオフラストウスⅡミッドフォードは目の前にいる。

以前の術式とは比べ物にならない、それどころか『ロンギヌスの槍』にさえ匹敵しかねない黒の魔力を、完全に制御して。

「この私に、何度も何度も立ち向かうとは…よほど命がいらないと見えるし」

「もう揺るがない。そしてあきらめない。そう決めたんだ。キャーリサ」

「っ！！」

彼の言葉に、キャーリサは直感した。

今度のテオは、何かが違うと。

グリフォンⅡスカイを容易に撃墜したことからも、その術式が異様に強化されていることはわかったが、その矛先が自分に向けられても、彼の魔力は衰えを見せない。

動揺していない。

（テオの中で何らかの心境の変化があった、ということなの…？だとすれば——厄介以外の何者でもないし）

キャーリサの中には、相反する感情が渦を巻く。

テオの生存に安堵する心と、彼を殺さなければならぬという使命とが。

だから、それを打ち消すためにも。

「――消えろ」

余計な感情はいらない。

非情な言葉を一つだけ並べ立て、彼女はテオの首を切り落とすために肉薄する。

それだけの動作が、聖人でさえ追いつくのがやっと、といった超音速で繰り広げられればどうなるか。

ドッ！！！！と。

激突の瞬間、彼らの周囲に球状に拡散する衝撃波は、それだけで一介の魔術師を沈めるのに十分だった。

その中心点にいたテオが、五体満足でいられるわけではない。

だが、彼は動じない。

彼自身は武器を持っていない。その“右腕を覆う魔力”が武器を形づくり、あるうことか『カーテナ・オリジナル』と打ち合うことさえ可能にしていた。

そして、その形状と存在位置は、彼の術式そのものだ。

「『ノワール・バルディッシュ黒衣の槍』：お前の、最下級の術式だろう、それは：！」

魔力の消費が最も少ない、つまり威力も最も低い術式だった。

この程度の術式と拮抗しているという事実が、彼女のプライドをひどく傷つける。

彼女の過去を、決る。

「どこまで：どこまで私を貶めれば気が済むの！」

もう、抑えが利かなかった。

そうしなければ、彼女の中にあった“テオには勝てない”という諦

めの感情が、一歩間違えば完成してしまいそうだったから。

「俺は…っ!!」

「喋らなくていいし。このまま、お前を斬るだけだ」

テオの口を封じて、ギリギリと圧力を強める。

それでも押し切れない、という現実が、さらに彼女の内面を苛む。

(私は…!!)

あの時。

10年前の夜。

テオに護られていることしかできなかった自分が許せなかった。

だから強くなった。

テオフラストウスⅡミッドフォードがいなくても、王女としての威厳を保ってきた。

この国を強くするために、自分を犠牲にする覚悟を決めた。

なのに、そこには常に彼の姿がちらついた。

テオならどうしたか。

もっと良い方法をもっているのではないか。

もっと強く、この国を導いていけるのではないか。

そして、気づいた。

気づいてしまった。

(とっくに解っていたことだ…。私は、テオに認めてもらいたくて戦ってきた…)

自分が嫌い続けてきた継るという行為が、彼女の行動の根底にあったのだ、と。

そんなみつともない未練を断ち切るためには、自分をカーテナごと

葬るという結末を迎えるこの変革は必要だった。
ローマ正教とも、学園都市とも違う勢力として、イギリスが存在し続けるためには。
なのに。

「どうしてだ…」

音速を超える剣戟のやり取り。

常人では知覚さえできず、聖人でもついていくのが精々、といった状況で、彼女の思考は溢れていく。

「どうして、私の前に立ちはだかるんだ……」

ギアン!!

互いの剣を振り払い、わずかの距離を置いた。

それでも、息遣いさえ届きそうな距離。

その刹那に、彼女の感情は溢れだしてしまう。

一度言葉にすると、それを止める術を彼女は持っていなかった。

「どうして、私の邪魔をするんだ!! 私が強くなった! お前に守ってもらわなくても、この国を率いるくらいには強くなったんだ!」

「キヤーリサ…」

堰を切ったような彼女の独白を聞く者は、この戦場で彼のみ。

一瞬でも気を抜けば命を落とす戦場で、一人の女の10年分の想いを受け止めてくれる酔狂な者など、ほかにいるはずもなかった。

「この国を救う方法は、これしかない! 私という災厄を抱えて、これから先この国にどんな未来がある!? 私の命を懸けて、それで

済むのなら、それは素晴らしいことだろう!？」

あらん限りに絶叫する。

その裏に隠された想いも、全てを悟られることを覚悟したうえで、それでも守りたいものが、彼女にもあるのだから。

だが、それを解ったうえで。

否、解っているからこそ。

テオフラストウスⅡミッドフォードは、それを否定した。

「そんな訳が…無いだろうが!!!!」

「ツツ……!」

認めて欲しかった男に否定され、それでも。

彼女は、止まるわけにはいかないのだ。

「だったら、この程度の災厄を止めきれずにどうするの？」

「…?」

キャーリサは、全てを否定された王女は、それでも不敵に嗤う。

懐から取り出した無線機へ幾つかの言葉を呟いて、彼女は言った。

「さあ…いまから2分と17秒後、この場所に撃てるだけの種類と数のバンカークラスターの豪雨が降り注ぐし。この国を私に代わって救えるのなら、防いでみるといい。『天使の力』で強化された私とお前は死なないだろうが——さて、他の魔術師は何人耐えられるかな?」

「キャーリサ……!!」

『グリフォンⅡスカイ』だけでも厄介だというのに、英国海軍まで完全に掌握している。

その戦術の鮮やかさにテオが息を呑む間も無く、最大の危機は到来する。

テオ自身が迎撃することは出来ない。

キヤーリサとの剣戟の最中にそんな余裕は創り出させない。

彼が抱く、甘い幻想なら、こんどこそ打ち碎けると。

——本当に、そう思っていた。

「『サンクチュアリ光翼の城壁』！！」

「『攻撃範囲』！！！！」

数分の、意味のない猶豫を持って降り注いだ、灰色の雨。
それに向かって放たれた、二つの強大な魔術によって。

「なーに絶望してんスカ？先輩」

「お久しぶりです。テオフラストウスⅡミッドフォード様」

二つの声は、戦場を塗り替えるために。

数多の魔術師を掻き消してきた壁と、この国を護り続けてきた剣が、
参戦する。

e p. 11 私の命を懸けて（後書き）

次回、オールスターが集結してのクライマックス突入です！

お楽しみに！

e p. 12 俺だけの力なんかじゃ

夜空に瞬く、無数の光源。

ロンドンの夜景にも劣らないそれは、禍々しい滅びを運ぶ光だった。バンカークラスター。

地下数十メートルの核シェルターさえ決り、粉々にするその弾頭は、キャーリサの周囲にまわりつく魔術師を排除するには十分すぎる威力と数を備えていた。

だが、それらは届かない。一つたりとも。

「何で……お前が、ランサーがここに……。しかも、『騎士団長』ナイトリーダーまで……」

半数は、『騎士派』の長、騎士団長の誇るパターン魔術で迎撃された。

残る半数は、テオレルドⅡミラーとしての相棒、ランサーⅡJⅡグレイスの放つ白い魔術によって、掻き消された。

この共闘は、テオフラストウスⅡミッドフォードにとって予想外だった。

10年前、ドーヴァーの戦いで姿を消し、騎士としての存在を絶ったはずのランサーが、騎士の長と共闘しているのだ。

だが、そんな“些細”なことに気を払わずに、彼らはテオのすぐそばへ降り立った。

「テオフラストウス様、私がありながらキャーリサ様をお守りできず、申し訳ありませんでした」

開口一番、謝罪から入る騎士団長。

フォーマルなそのスーツには血が滲み、所々に傷も見られる。だが、彼は揺るがない。揺るがない目線のままに、彼は続ける。私情を封じてきた彼の感情を、表に出す。

「ですが私は、今一度願おうと思います。この国に存在する三つの勢力が、互いに手を取る時を。――たとえば、みつともない願いだとしても」

「騎士団長は堅いっスね。もっと簡単でいいんスよ。“キヤーリサ様を救いたい”とかね」

「ランサー…」

騎士団長の反対、テオの右側には彼の相棒が敢然と立つ。哀しい暴君へ、立ち向かう。

「俺も、先輩の力になりたいんスよ。それに、キヤーリサ様の目的を知った今じゃ退く気も起きないっスね」

本来、王室を護るための騎士だった魔術師、ランサーⅡJⅡグレイス。

果たせなかったその思いは、たった今、『カーテナ・オリジナル』の主への反逆というかたちで姿を見せる。

だがそれは、第二王女を護るための決意。

ならば、テオが茫然としているままでは失礼にあたるだろう。新たに背負う、二人分の決意を胸に。

「――ありがとう」

言って、テオとランサーは互いの右手と左手を前へとかざす。

テオは右手を。ランサーは左手を。

それが、キヤーリサさえ恐れる術式を起動する鍵なのだから。

「……そこまで隙だらけの術式を、私が起動させるはずがないし」

起動までの一瞬。キャーリサは、その間隙を縫って攻撃を加えようとする。

ただ、キャーリサは見誤っていた。

パターン魔術を打ち切られた『騎士団長』だけでは止められない斬撃を受けきるに相応しい魔術師が、この場にいることを。

徐々に数を減らされていた『グリフォンⅡスカイ』に対応していた、とある聖人が戦列に復帰したことを。

「私を…忘れてもらっては困ります!!!!」

ガッギイイイイイイ!!!!

剣撃の音とは思えない、爆発音。

神裂火織の操る『唯閃』。そして、騎士団長が携えるロングソード。この二振りがもたらした一瞬が、灰色の術式を起動する。

「『Ciniso02（その左手と右手は白夜の如く）!!!!」

二人で一つの魔法名を有する魔術師。彼らの声は、完璧に同調していた。

そして、それは現れる。

灰色の魔力がカタチを成す。

誰かに任せるのではない。今度は、テオフラストウスⅡミッドフォード自身が振るう“強大な剣”の形に。

グレイ・ブレイド
「『灰燼の御剣』！！」

一つの形を成した魔力の塊を、テオの右手は確かに掴む。

姿かたち、大きさまでもがカーテナと似通った灰色の剣を手に、眼前の王女を見据える。

神裂と騎士団長と打ち合い、距離を置き、それでも無傷で君臨する、キヤーリサを。

「その形状：私と対等に渡り合おうとでもいいたいの？お前が、私より優れていることを見せつけるために…」

「違う。これは俺だけの力なんかじゃない」

鈍色の輝きを放つ剣を手に、テオは確信と共に言った。

その瞬間、キヤーリサは気付く。

バッキンガム宮殿を覆っていた『グリフォンⅡスカイ』の群れが、一機残らず撃墜されていたことに。

テオフラストウスⅡミッドフォードの後方。

そこにいるのはランサーⅡJⅡグレイスや神裂火織、騎士団長だけではない。

第三王女、ヴィリアン。清教派の魔術師たち。禁書目録。そして、幻想殺し。

そのすべてが、彼女の暴虐を目にして尚、立ち上がったことに。

「……………くくっ、くはははは…」

これだけの数と力があれば、如何にキヤーリサであろうとたじろぐ、と。

テオはそう思っていた。

だが違う。

彼女は未だ、一人で戦うつもりでいた。

「だったら、雑魚の始末にバンカークラスターの雨をもう一度降らせるだけだし……!!」

「!」

彼女の手には、いつの間にか無線機が握られていた。

テオたちが一斉に斬りかかっても、彼女が無線を使う時間まで削げるとは思えない。

そして今度こそ、キャーリサはバンカークラスターの着弾を成功させるだろう。

最悪のビジョンが、テオの脳裏によぎる。

だが、彼の耳に届いた爆発音が、その悪夢を払った。

バッキンガム宮殿の隅に立つ、軍用の通信塔。

それが、根元からへし折られた音が。

「最新の科学には疎いのでな…手っ取り早い方法を取らせてもらったのである」

暴風にさらされたかのように曲げられた鉄塔へ集中される視線。原型を留めないその上には、とある傭兵が立っていた。

『騎士団長』との一騎打ちを果たし、『幻想殺し』を救い、このク

ーデターを止めんと願うもう一人の男。

「相変わらず、憎たらしいほどのタイミングで参戦するな……」
「全くっス。俺たちが引き立て役になっちまうじゃないっスか」

彼の名は、ウィリアムⅡオルウェル。

またの名を、後方のアックア。

第三王女を救うただけではない。この国の結束を願う“傭兵”までもが、この場に集う。

戦闘は、一気にその速度を増した。

神裂火織が『唯閃』を躊躇なく放つが、それをキャーリサは難なく受け止める。

「結局は押しの一手法。ならば勝敗は見えているし！」

しかし、キャーリサと打ち合うことを実質神裂一人に任せていた状態とは、訳が違うのだ。

彼女の後方。

先ほどまで数百メートルの距離があつたはずのアックアが、そこには大剣を振りかぶっていた。

剣の銘はアスカロン。龍を斬る、という酔狂な目的のために調整された剣は、いかにキャーリサといえど生身で受けきれるほど軟な霊

装ではない。

「チ……ッ!!」

短く舌打ちをすると、彼女は自らの周囲を囲む形で『残骸物質』を生み出す。

歪な巻き貝にも似たそれは、後方に迫る大剣、前方にある太刀をもろとも弾き飛ばした。

だが、彼女が前後の敵に対応するため空白となった空間がある。上方だ。

そこには、騎士団長が跳躍していた。

80センチほどの眩い剣を構え、鋭い突きを繰り出す騎士団長にほんの一瞬、対処が遅れるキヤーリサ。

だが、それだけではキヤーリサには届かないことは自明の理。

それすら、フェイク。

ガゴン!! と。

膨大な力を無理に抑え込んでいるかのような不吉な轟音。

キヤーリサの前方から響くその正体は、単純だった。

テオフラストウスとランサーが発動した『二重魔術』の本質は、願いを叶えることにあった。

つまり、標的に対して最適に調整される、彼らの武器。

「キヤーリサあああああ!!」

眼前、白い『残骸物質』を易々と引き裂いて迫るテオに、キヤーリサは驚愕し、そして理解するしかない。

灰色の魔力は『残骸物質』を砕くことさえ可能にしていたのだと。

騎士団長やアックアでさえ受けきることが精々で、ましてや破壊することなど不可能だと、術者であるキヤーリサは考えていたそれを、簡単に。

「テオ……!!!!!!」

新たに残骸物質を創造し、迫る騎士団長の刃を逸らしながら、キャーリサはテオの刃を受ける。

互いに刃の大きさは変わらない。

込められた思いも、有する歴史も、互いに打ち合うに相応しい威力。ただ、一方が山ひとつ掻き消せるレベルの斬撃を放てるのであれば、どうなるか。

ゴッツッ!!!!!!

それだけの動作が、途方もない衝撃を生み出し、周囲に展開していた魔術師を数人、戦意喪失させてしまう程の余波をも生む。

「……ハッ。結局、選ばれた魔術師4人しか私には掛かってこれられないの?」

物理法則を超越し、不可思議な火花を散らしながら鏖戦を演じるキャーリサは言うが、テオは意に介さない。

それどころか、不敵に笑って一言だけ、彼女に告げる。

「違うさ」

その言葉と同時。

完璧、と言っているほどのタイミングで、テオの影から一人の少年が飛び出した。

『二重魔術』を発動してなお、彼の身体を覆っていた黒い魔力。

破けたローブのように変化していたそれを、テオはとある最終兵器を“隠す”ために使用したのだ。

本来ならそれ単体で彼女と渡り合えるであろうそれを持ってなお、誰かに託す。

自分とは違う戦い方を象徴するかのような存在が、そこにはあった。
黒髪でツンツン頭の、日本人の少年。
その右腕。

「『幻想殺し（イマジンブレイカー）』……!!」

テオを飛び越して迫る、力強い光が宿るその眼。

キャーリサに迫る彼の拳が響かせたのは、とても常人一人の力とは思えない、轟音だった。

e p. 12 俺だけの力なんかじゃ（後書き）

次回、ついに英国編の最終話です！

e p. 13 言い切ってみせる（前書き）

ついに英国騒乱編もクライマックス！

キヤーリサVS魔術師のバトルを、お楽しみください！

e p. 13 言い切ってみせる

響く衝撃の音は、それだけで勝敗を宣言しているようなものだった。キヤーリサへ向けて右の拳を打ち込んだ、『幻想殺し』の少年。それを見ていた第三王女、ヴィリアンにも、確かに手ごたえはあったのだろうと思わせるほどの完璧さ。

（これで…終わり…）

キヤーリサを苦しめていたカーテナはもうない。

これで終わりなのだ。

一部の戦闘のプロ——清教派の魔術師でさえ、そう思っていた。

だが。

彼女が次に目にしたのは、テオフラストウスⅡミッドフォードと『幻想殺し』の少年を吹き飛ばし、膨大な大きさとなって現出した『残骸物質』だった。

白い閃光かと思まがうほどの速度と大きさ。

広大なはずのバッキンガム宮殿を覆い、ロンドンの街並みにさえ届きそうな白亜の城塞に、彼女は息を飲む。

空間を軋ませ、次元を切り刻み、キヤーリサは未だ君臨していた。口元から、赤黒い筋を流して。

一方のカーテナは無傷で、全次元切断術式も問題なく動作している。そこから導き出される結論は、簡単なものだ。

「カーテナを庇うために……少年の拳を受けたというのですか……？」
如何に防護術式を張り巡らせていようと、少年の拳はそれを砕く。キャーリサが負傷したのは、物理的なダメージというよりは『天使の力』の抑制のためだろう。

一瞬とはいえ、彼女は無防備な肉体で膨大な『天使の力』を受けとめた。外見は無傷でも、おそらく内臓や精神面で大きく負傷しているはずだ。

なのに、彼女は不敵に笑っている。

その気迫に、幻想殺しの少年さえも、信じられないといった表情で彼女を見つめることしかできないでいる。

（やはり姉君を打ち倒すことなど……不可能なのですか……？）

リメエアから、彼女が戦う理由を聞かされた。

彼女がこの国のためにどれほど苦しんだかも、痛いほど伝わった。だからこそ、ヴィリアンは怖気づいてしまう。

一人の人間の底知れない決意。

聖人さえ凌駕し、異質な黒い魔術師を圧倒するほどの決意を前に、ヴィリアンは押し負けそうになる。

それを繋いだのは、彼女に語りかける一人の少女の声だった。

「だめなんだよ」

彼女自身が強いわけではない。

しかしその身にはこの場で一、二を争う“不幸”を詰め込まれている少女。

彼女は、讃美歌でも歌うかのように流麗な声で、ヴィリアンへ告げる。

「正面からぶつかっても、勝てないかもしれない。貴女は、キャーリサ様じゃないんだから」

「……」

でも、と置いて彼女は――銀色の髪に白い修道服の少女は、ヴィリアンに道を示した。

「だからこそ、示さなきゃならないんだよ。キャーリサ様とは違う道を。貴女は…英国の第三王女なんだから」

「…!!」

人徳の第三王女。

ともすれば“他力本願”と揶揄されるその肩書を、彼女はあまり好きではなかった。

だが、この『変革』を止めるために、多くの人が力を貸してくれた。無力なはずの使用人。

主に反逆した騎士の長。

命を危険にさらした傭兵。

何の関係もない少年。

そして、10年間の失踪を経て現れた、ひとりの魔術師。

これだけの“他力”を前に、ヴィリアンは――

戦況は、危うい均衡の上にあった。

勝利をほんの一瞬でも確信した清教派の隙を突き、キヤーリサは態勢を立て直す。

膨大な『残骸物質』に対応できるのは、それを破壊できるテオフラストゥスのみ。

ほかの魔術師でも受け止め、威力を削ぐことはできるが、数が多すぎる。

無理に処理しようとすれば、そこには隙が生じるであろう。

そして、キヤーリサはそれを見逃すような真似はしない。

かといって無様に硬直していれば、彼女の放つ鋭利な『残骸物質』の餌食となるだろう。

「ここまでやって、これだけの人数差で、押し切れないのか……」

魔術師や騎士の間に広がる、絶望にも似たさざなみ。

幾ら斬り込んでも、幾ら砲撃を撃ちこもうとも、彼女は揺らがない。誰か一人。

聖人や騎士団長、あるいはテオフラストゥス。この誰かが一人でも倒れれば、瓦解する。

そう思わされていた。

それを打ち碎いたのは、キヤーリサに向かって敢然と立つヴィリア

ンの姿だった。

「他人に頼ることしかできないお前が：どうしてそこにいるの」

何のためらいもなく首を刎ねることが可能な間合い。

そこへ無防備に踏み出した彼女に、キャーリサでさえ疑いの目線と剣を振るうことへの逡巡を禁じ得ない。

だが彼女は言う。

「ええ。確かに私の力なんて微々たるものです：『人徳』なんて着飾っていますが、本質は他力本願でしかないこともわかっています」

不思議な光景だった。

戦闘力も、知略も、この戦場で役立つものを何一つ持っていないヴイリアンと、それらを全て兼ね備えたキャーリサ。

敵対という言葉さえおこがましいはずの二人は、まるで互いが同じ力量を持っているかのように“対峙”していたのだから。

「ですが、それは驕りだと気付いたんです。誰かに頼ることは、弱いことじゃない。誰かに縋ることは、みつともないことじゃない。だから私は頼ります。この力を、皆に託します。――他力本願の、頂点として！！！」

彼女が振り上げた腕。そこから放たれたボウガンの矢。

余裕をもって一連の動作を見ていたキャーリサには予想外だったかもしれない。

空中、10メートルほどの位置に達したそれに、地平線の向こうか

ら閃光が直撃したことに。

カッッ！！！！と。

目も眩む白色のそれは、プリズムを通したような光となって分岐し、戦場へ降り注ぐ。

一瞬でその閃光が『セルキー・アクアリウム』からの援護射撃であることを見抜いたキャーリサはそれを攻撃用の術式と想定し、身構えた。

だが、次の刹那には理解する。

この光の雨が、傷を癒し、身体能力を上昇させるためのものであったと。

大仰に振舞っていたヴィリアンの言葉通り、彼女の想いと、『変革』への決着を、皆に託すものだったのだと。

「忌々しい術式を：最悪のタイミングで発動してくれたものだし：
」

だから彼女は、この隙を突いた。

かつてない大規模な治癒と強化の術式を授かり、魔術師といえど余裕が生まれているこの瞬間を。

踏み込み、カーテナを振るい、ヴィリアンの首を刎ねる。

全ての動作を終え、息をついたところで1秒も経過しないだろう。

（どれほどの術式をお前が使おうと：私がそれを認めないという事実は揺らがないの。残念な妹よ）

ザン！！　という音よりも早く振り下ろされるカーテナは、聖人たちの防護さえ無意味にし、抵抗の氣勢を削ぐに十分なはず、だった。

しかし、キャーリサの刃は届かない。

次元ごと全てを断ち切るはずの刃は、とある刃に阻まれたのだ。

“理論上は同じ力”を持つ、英国の主の証明。

女王エリザードが操る、『カーテナ・セカンド』によって。

確かに打ち合いはしたが、その力量の差は明らか。

至近距離で鏖競り合いを演じるだけで『カーテナ・セカンド』の方は削られ、残骸をこぼしていく。

その様子に勝利の確信を得たキャーリサは笑みと共に、エリザードに告げる。

「勝てないと知って、それでもあがくとは。よほど王座が惜しいと見えるし……！」

「王座を明け渡すことに躊躇はないのだが……。お前の施策では、民は満足しないだろうと思ってな」

「明け渡さなくて良いし。力づくで奪うの……！」

どうしてそこに、女王陛下がいるのか。

そんな疑問を差し挟む余地など与えず、キャーリサと女王の剣戟は繰り広げられる。

一種、壁のようなものを感じる魔術師への道を開いたのは、女王エリザード本人だった。

「テオ！力を貸せ！」

「……！」

唐突に、少年だったころのように、エリザードはテオフラストウスを呼んだ。

それに何のためらいもなく応じることができたのは、彼の中に、この戦いに参戦することへの決意があったからなのか。

「…はっ!!」

手には『灰燼の御剣』。

『カーテナ・オリジナル』と斬り合い、『残骸物質』を切り裂き、キャーリサへ想いを届けるために形を成した、魔力の結晶。

爆発としか思えない斬撃のインパクトは、キャーリサを飛び退かせ、“猶予”を作るのに十分だった。

——『ユニオンジャック連合の意義』を発動させるために。

「…それは……!!」

エリザードの手に、いつの間にか存在していた英国の国旗。

それが持つ意味を理解したキャーリサは『残骸物質』による攻撃を放つが、それをテオは粉碎する。

女王の元へは、何のダメージも通らない。

その数秒で、彼女は“発動”した。

英国に伝わる最終奥義を。

「今から…王族が占有していた英国の力のすべてを、民の皆に返す!! この力をどう使おうと自由だ! この変革を止めるために使おうとも、キャーリサに加勢しようとも、誰かに譲渡してくれても、第三の道を示してくれても構わない!!」

『天使の力』の再分配。

たったそれだけの術式を、英国全土に広げればどうなるのか。明らかに魔術的な常識を踏み外したその術式を、英国の主は押し通す。ヴィリアンの術式によって傷が癒えた魔術師にも、銃口に怯える少年にも、囚われた結社予備軍の少女にも、その力は等しく分配される。

群雄割拠たる国民総選挙の始まりだ、と語るエリザードの言葉に違いはなく、文字通り、国民の意志がこの国の未来を決するためこの状況はあるように思えた。

禁書目録の少女を絶句させ、キャーリサを驚愕させるその術式を前に、テオフラストウスは笑む。

「そうか…それが、皆の答えなんですね……」

『連合の意義』によって再分配された『天使の力』は、加工と譲渡を自在に行える状態となっていた。

ならば、その力を誰かに託すことも、可能。

テオフラストウスに託された力は十数人分。

そこには、カーテナだけの力ではない、様々な宗教の系統の魔力が匂わされていた。

これだけ多彩で異質な術式を一括して扱える魔術師の集団など、テオには一つしか心当たりがない。

「皆…ありがとう」

言葉は通じずとも、魔力に込められた想いが、託した者の心を伝える。

これだけの後押しを受けて、もはやテオフラストウスに敵はいない。

「弱者同士が馴れ合って、何が救えると言うの。そんなものに頼るくらいなら――」

「救えるさ」

『グレイ・ブレイド灰燼の御剣』と『カーテナ・オリジナル』。

鏡写しのような二つの武装は、決着の時を待ちきれないかのように、軋みをあげる。

自らの術式から後押しされているかのような錯覚さえ覚えて、テオはキャーリサの言葉を遮って言う。

言い切って、みせる。

「少なくとも、目の前で苦しんでいる、好きな女一人は救える」

「ほざけ……!!」

唇を噛むキャーリサには無い力。

『仲間』を背に、テオフラストウスは全力で踏み込み、その剣を振るった。

「終わらせる……!!」

ガッツギイイイイイ!!……!!

衝撃と轟音。

地形を変えかねない二つの斬撃は、行き場を失い、その力を暴発させた。

ただし、テオフラストウスの望む——カーテナを弾き上げる、という形で。

「ツッ……!!」

一瞬の、しかし絶望的な隙。

それを見逃すほどに彼らが弱くないことを、テオは知っているから。だから、彼は一步下がった。

“ 後方から迫る、『一幻想殺し（イマジンブレイカー）』の少年”
の拳のために。

アックアによって吹き飛ばされたそれが、砲弾かと思紛うほどの速度でキャーリサに叩き込まれる。

カーテナを思わずかざすほどの気迫を放って。

そして、『幻想殺し』が発動した音が、声高に勝利を告げた。

跡に残るのは、塵と化したカーテナ、そして肩を歪な方向に曲げつつも笑う、一人の少年だった。

e p. 13 言い切ってみせる（後書き）

いかがでしたか？

止め以外、本編に大幅に介入してしまいましたからね…

矛盾があるかと思いますが、目を瞑ってもらえるとありがたいです

（汗）

次回は、エピローグです。

e p. 14 ずっと、私の隣で（前書き）

英国騒乱編のエピローグです。

キヤーリサとテオ、二人は…？

e p. 14 ずっと、私の隣で

戦いは終わった。

『変革』のために苦しみ、願ったキャーリサは倒され、彼女の苦しみの種であった『カーテナ』はもうない。

塵に帰ったカーテナの柄だけを残し、キャーリサは数キロ先まで吹き飛ばされてしまっている。

戒厳令下、ロンドンの路地裏でキャーリサは一人ごちる。

「結局：あの力に一番怯えていたのは……私だったということなのだろうな」

怯えていたものを失って初めて、自分の国の民の強さに気付かされた。

キャーリサは結局“国民の弱さ”という、存在しないものに怯えていたのか。

その事実気付けたのは、きっとテオフラストゥスのおかげだ。

相棒との信頼と、上司の助力。仲間の力があってこそ、彼は自分と対等、それ以上に渡りあうことを可能にできた。

「カーテナなど無くとも……この国は強い」

言葉に出すと、そんな簡単なことを信じられなかった自分がみっともなく思えてくる。

もう一度、この国と向き合いたい。

信頼できる仲間と共に。

そう、考えたとき。

「ハッ。これは珍しいものを見た。英国第二王女……さっきまでの幼

稚な君臨とは真逆の、惨めな姿だな。こうして現実に見ると、思いのほか愉快なものだ」

聞きなれない、男の声だった。

全身を赤で統一した、華奢な体格の男。

その体格とは裏腹に、信じられないほどの重圧が彼からは放たれている。

「お前は…誰だ…」

ボロボロの体を引きずり、柄のみになったカーテナを放り投げ、キヤーリサは男と対峙する。

そして、男は名乗ることに躊躇しなかった。

「右方のフィアンマ。と言って伝わるかな？まあ、仮にも一国の軍事を牛耳っていた王女様だ。わからないことは無いだろう？」

「……っ」

キヤーリサはその名を知っている。

だが、それ故に理解できない。

『神の右席』の最後の一人にして、バチカンの聖ピエトロ大聖堂を、刃向ったローマ教皇もろとも崩壊せしめるほどの実力者が、何故こんな場所に現れたのか。

「お前の狙いは…カーテナか？」

思い当たる可能性の一つとして、同質の『神の如き者^{ミカエル}』を操る『カーテナ・オリジナル』の奪取に來た、という可能性もあった。

「だが、残念なことに、もうこいつは使い物にならないし」

路上に投げ捨てたカーテナの柄に目をやり、キャーリサは苦笑いと共に言う。

「ふうん？ 確かに、そいつは惜しかったな」

だが、フィアンマはそんなことを思いつきもしなかった、という表情をする。

思考の程度が低すぎて思いつかない、とでも言いかねないその表情には、カーテナへの興味は全く以て窺えない。

無意識にこの国を愚弄するような目の前の男に、キャーリサは頭に血がのぼっていくことを自覚する。

「だが、俺様の狙いはそんなチャチなものじゃあない。わざわざフランスをお前らにけしかけるなんて面倒な真似をしなければ奪取できないほど、『これ』には価値があるんだからな」

「何……！？」

フィアンマの言葉の後半は、彼女の耳に入っていない。

「フランスを……けしかけた……だと……？」

「そうだよ。この数百年均衡を保っていた英仏の関係が、何の前触れも無く崩壊するとも思っていたのか？ もっとも、俺様程度の圧力がなければ不可能だったかもしれないがな」

感謝しろ、とさえフィアンマは言う。

「俺様が不用意な虐殺と蹂躪を面倒がったおかげで、この街はこれだけの街並みを保っていられるのだからな」

「……………！！」

立ち向かうのに、躊躇はいらなかった。

もはや彼女には普通の魔術師程度の力しかない。

その力量が、フィアンマに届かないことなど理解している。

そして、キャーリサの体はいとも簡単に吹き飛ばされた。

フィアンマは指一本動かさずに、だ。

「おいおい、俺様はお前程度の雑魚にかまっていられないんだ。見逃してやってもいいというのに」

100メートル以上の距離を、わざとらしく靴音を響かせて歩むフィアンマ。

その右肩からは、得体の知れない何かが現出していた。

三本の指をもつ、それは腕だ。

人のようで、鳥のようで、しかし生物とは思えない異能。

「で、どうする？このまま無様に逃げ帰れば、見逃してやっても構わないのだぞ？」

それを、キャーリサが受け入れられるわけがない。

この男を見逃せば、いずれこの国に危機をもたらす。そうしなくとも、ここまで敗北の色が濃いからといって、逃げられるような性格は、もとより持ち合わせていない。

「下らないことを…」

本当に、彼女には何も無い。

カーテナは無く、発動した普通の術式も紙より脆く砕かれた。だが、退くわけにはいかない。

「お前に刃向かうのは…まともな神経の人間なら当然のことだろうな…」

「そうか、ならば無様に這いつくばって死ね」

今も危篤にあるというローマ教皇の感情を少しだけ理解したような、そんな気がした。

軋みをあげ、“腕”が振り下ろされる。

だが、彼女の体は碎け散りはしない。

暴虐の塊を遮ったのは、“灰色の剣”。

彼女を救ったその色彩が誰のものなのか。

キヤーリサの脳裏にその名前が浮かんだと同時に、限界に達していた彼女の意識は深く沈んでいった。

それが、誰かに護られたことへの安堵であることに気付くより、早く。

キャーリサが気付くと、そこは白い天井だった。

窓のある、清潔感のある病室。普段の王族ご用達の病院とは違うのは、彼女の傷のせいかな、それとも政治的理由か。

ともあれ、クーデターの首謀者として牢獄にでも叩き込まれているのかと思った彼女は意外に思ったが、随所に見られる監視用術式の痕跡に納得する。

（これでしばらくは…あの母上の飼い犬か）

反逆罪と不敬罪、そして武力の私的利用。

目立つものだけで死罪は免れないような重罪人を生かすのだ。代償について考えるな、という方が無理だろう。

しかし彼女はまた、不吉な存在を目にしまった。

右方のフィアンマ。

彼は今度こそ、暗躍から舞台を変える。

世界を巻き込みかねないその危険性を牢獄で見過ごすことなど、彼女には耐えられそうになかった。

と、彼女の思考を中断する音があった。

「入ってもいいか。キャーリサ」

控えめのノックと、感情の薄い声。

誰か、と問うまでも無い。

申し訳程度に髪を整え、その声に応える。

「構わないし。テオ」

テオフラストウスⅡミッドフォード。

キャーリサを打ち倒すために、最も貢献した魔術師といっていい。体中に伺える包帯も、名誉の負傷、ということだろう。

彼女の前に、仲間と共に立ちだかったあの姿は、自分にはない才能を彼がまた持っていることの象徴に思えて、少し、妬ましい。しかし、彼女の内面は、彼に対して妬ましい以上の感情に支配されていた。

「騒乱を治めた英雄様が、犯罪人の病室に何の用なの？」

そんなことを言いたいのではないのに、キャーリサは素直になれない。

戦闘中、暴言の応酬の中で言われた。告げられてしまった。

あの言葉を、静かな病室で考えれば考える程、彼女の思考は恥ずかしさで爆発しそうになってしまう。

（とゆーか、あんなことを言った女の前に平然と姿を見せるとは…）

数多の権力者から言い寄られるのはヴィリアンの役目だったし、キャーリサに求婚した物好きとは一回しか対面したことは無い。だから、彼女にはこういった事態への耐性が……無かった。

「――、俺は」

（どーすればいいの！？ えと、言うなら私は無血開城しようとしていて……って何を言ってるの！）

覚悟を決めたテオの言葉を前に、頭を抱えそうになる。

というか、すでに彼女にまともな思考など、できていない。

（なんだかおかしい！ 私のが、アイツのことで、埋まって……）

顔が赤くなるのがわかる。

ドアの前から動こうとしないテオの表情を見ることに耐えられず、顔を伏せたのも失敗だった。

痛々しいほどの沈黙が、彼らの間に広がってしまう。

だがそれを、心地よいとさえキャーリサは感じていた。

根拠など無い。利害など無い。純粹に、テオの側に居たい。

偽ることはもう、できそうにない。

（テオも、同じ気持ちでいてくれるなら…）

思いを自覚したうえで、テオフラストウスの言葉を受け止める勇気をようやく持てたキャーリサは、顔を上げ、彼と向き合う。

しかし告げられた言葉は、キャーリサが望んでいたものとは違った。

「俺を、お前の騎士にしてくれ。俺はもう、キャーリサが苦しむのを見るのも、傷付けられるのも、見たくないんだ」

テオが望んだのは、対等な関係では無く、従属する“騎士”。

愛する男は、自分の隣には居てくれないのか。

言葉の意味を理解した瞬間、キャーリサの中にあつた何かが引き裂かれた。

理性の制御を離れたそれは、感情のままに言葉となって、彼女の喉元からほとばしった。

「ふざけるな！お前は私の側で、ずっと燻っているつもりなの！？」

「いや、俺はお前を…」

「護りたい、だろう？そんな言葉は聞き飽きたし！私は護られるほど弱くは無いし、お前は誰かを護るためだけに存在しなければならぬほど、小さな存在ではないの！」

テオフラストウスに抱いていた羨望や嫉妬の全てが、彼を認めてい

たことの裏返しであることなど、とうにわかっている。

だからこそキャーリサは許せなかった。

自分という拙い第二王女の陰となって、テオの一生を使い切ることが。

「私は許さないぞ、お前を騎士として雇い入れることなど！」

「ずっと私のために戦ってきたお前がそんな仕打ちを受けるなんて、受け入れられる訳が無いの！」

一方的に叫ぶキャーリサの声は、いつのまにか涙声になっていた。潤む視界の向こうでテオがどんな表情をしているかさえ、今のキャーリサには見えない。

「お前は私の隣に居なければいけないの！後ろでも、裏方でもない、隣だ！！」

「テオと一緒に居たい。テオの側に居たい。ずっと…私の隣で……」

そこまで言い切つてようやく、キャーリサは自分が何を言ったのか理解した。

顔を上げた先のテオフラストウスも、目を丸くしてこちらを見ている。

（え…？今、私は何を言ったの？）

理解はできても、納得できない。

テオの告白どころの騒ぎではない。これではまるで――

（プロポーズ…と、似たようなものだし……）

いくらその事実に悶えようとも、言ってしまったことは取り消せな

い。

顔を背けることもできず、二人の視線は固定されたまま。わずかな沈黙に先だったのは、テオの笑みだった。

「そうか、キャーリサは、そういう奴だったよな」

「な、何がおかしーの」

「俺はキャーリサのことを何でも知っていたと思っていた。その言葉遣いも、男勝りな性格も、趣味も、髪を下ろしたときの横顔が、一番きれいなこともな」

だが、違うんだな。とテオは続ける。

きれいだ、と率直に言われたキャーリサは頬を赤く染め、黙って聞き入ることしかできない。

「キャーリサのことを、俺は全然知らないんだな。……だから、側に居たい。血筋も、政略も関係ない。一人の男として」

「テオ……」

互いに告白しあう想い。テオはそれを受け止めてくれた。

二人の行く先に立ちをはだかる壁は、きつと多い。だけどそれを、二人なら乗り越えていけると思えるから。

とつくにわかつていたはずの確信を言葉にして確かめ合うだけなのに、10年もかかってしまった。

その事実がどこか可笑しくて、自然と笑みがこぼれる。

「ふふ……こんな私を、ずっと好きでいてくれたんだな。軍事の……なんて、戦好きな女のことを」

「お互い様だろ。俺みたいな男のために、青春とか恋愛とか全部犠牲にしてさ……」

「くく……」

「あはは…」

二人の結末は、こんなに単純だったのだ。
穏やかに朝日が照らす病室に、二人の笑い声が響く。

その瞬間、病室の引き戸が豪快に蹴破られた。
ドッバアアアアアアアアアア！！！！という轟音が、朝方の病院を無神経に揺らす。

「いやはや、めでたいな！！！！晴れてウチのバカ娘にも、嫁の貰い手ができたのか！！！！」

ドアの向こうに並んでいたのは、主犯と思われるエリザード。
紅白の幕にブーケ、ウェディングドレスのベールに白無垢と、これでもかといわんばかりのお祝いグッズを背負うジャージ姿の王女は、満面の笑みを浮かべている。

「あらあら、先を越されてしまったわね」

それを一歩退いて見ているのは、キャーリサの姉、リメエア。
彼女にも恋人の一人や二人いるであろうに、この事態を他人事のように面白がっている。

ただし、足元に包帯まみれの『騎士団長』を踏みつけながら。

「ええい、どいてくださいリメエアさま…あのバカ王女を止めねば、次はマスコミにキャーリサ様とテオフラストウス様の婚約宣言をリークしかねないいいいい！！！！」

「無茶はだめよ、騎士団長。病人は安静にしてくれなきゃ」

「リメエア様アアアアアアアア！！！！」

といった廊下の喧騒に、二人は絶句。

テオでさえ顔を真っ赤にして硬直している二人の病室に、エリザードは最大の爆弾を放り込んだ。

「――で、孫はいつ見られるんだ？」

「『そんな予定は無い！！！！』」

こんな騒がしい未来が待っていることを心で願いながら、二人は盛大に叫んだ。

e p. 14 ずっと、私の隣で（後書き）

次回、新章突入！！

主人公を夜来綴に据えて送る、科学サイドのストーリーです！

タイトルは『極彩色の仮面』。

お楽しみに！

e p. 1 ありふれた科学者（前書き）

今回から、新章突入です！
科学サイド、綴を主人公に送ります！

e p. 1 ありふれた科学者

とある場所に、一人の少年は立つ。

少年の名は夜来綴^{やらいづり}。

整った顔立ちにクセの無い黒髪と、年齢と外見は高校のクラスで友人と語らい、恋愛にも興味のある少年にも見えなくはない。

夏のはじまりから幾らか伸びた墨のような髪は、彼の表情を覆うわけでもなく、顔立ちと相まってひとつの造型を完成させていた。

ただ、彼の足もとに転がる重武装の男たちがその雰囲気逆転させている。

一見してはわからないその凶暴性。

鞘に隠された鋭利なナイフのごとく、存在するだけで周囲を威圧する異質な存在。

なまじ外見が優しいからこそ、その二面性は際立っていた。

そして、彼の足元に転がる男たちは『警備員^{アンチスキル}』ではない。

外部から招かれた研究者などが、『警備員』では信頼が置けない、という“口実”で雇い入れる傭兵の一種だった。

学園都市の技術を用いた武装を携行することを許された彼らをわざわざ雇う研究所といえば、余程機密性の高い研究を行っているか、後ろ暗い研究に手を染めているかのどちらかであり、この研究所は

——後者だった。

だが、夜来は言う。

「この程度じゃ、無駄足だったかな」

すでに彼は『闇』の中にいる。

知れば戻れず、逃れようとあがけば更に引きずり込まれる。

そんな底無しの沼のようなこの街の闇へ、この少年は躊躇無く踏み込んでいった。

だからこそ夜来は言い放った。

幾人の命と人生を喰い潰す連中を前にして、“この程度”と。

「貴様は：何をしているのか、分かっているのか：」

警備の兵にも、ある程度のプライドはあるのか。

夜来が新たに得た能力である『ダイアグラム演算代行…アフゾーフ接收』を用いて蹂躪を繰り広げた夜来に向かって、口を開く。

「この場所を襲った能力者が誰かなど、簡単に探し当てて：」

「関係ないね。俺はこれ以上、我慢出来ないんだ。あの人が、こんな場所で鎖に繋がれているなんて」

そもそも、彼の能力の本質をこの男は理解していない。

周囲に広がる、“赤く融解した”室内。

この能力は彼が『接收』した能力でしかなく、超能力者の脳に直接アクセスし、その力を一時的に奪い取る彼の本質——『ダイアグラム演算代行』とは何の関わりも無い。

能力の種類と戦闘の質を種に犯人を捜したところで、病院で深い眠りにについている少年に行き着く程度だろう。

他人の能力を奪い取る。

『自分だけの現実』を拡張した結果として得たこの力は、未だ能力検査には反映されていない。

つまり、夜来綴という少年に辿り着くことなど不可能なのだ。

「この…っ…」

「終わりか。まあ、殺しはしないけど」

あまりに動じない夜来に実力の壁を理解したのか、そこで男の意識は途切れた。

戦闘で無残に崩壊した研究室を眺め回し、まだ動くパソコンに手を延ばす。

この研究所自体は無価値でも、ここからアクセスできるレベルの機密情報ならば有用性があるかもしれない。

彼の目的のために。

（機密レベルはAが精々。やっぱりハズレか…？）

そう思って危険を冒してまで情報を漁る綴だったが、一つの業務報告の形式で届いていたファイルが彼の目に留まった。

ファイルのタイトルは、

『プロジェクトequipment、試験運用に関して』

そこで、綴の目の色が変わる。

これこそが、探していたものだ。

彼の人生を捻じ曲げ、彼の唯一の家族を奪った、とある実験への手がかり。

先日、『プレゼント』と言って彼に与えられたデータから行き着いた、一つの軍事機密。

そのファイルには、プロジェクトの概要、そして責任者の名義が記されていた。

憎むべき男の名が。

「技術顧問、朽葉…灯籠…!!」

翌日。

夜来綴の現状を知る由のない少年、雪崎嶺次はひとり、風紀委員第177支部へと向かっていた。

先ごろロンドンから帰ってきたばかりの彼は、向こうで繰り広げた一大ハードボイルドアクションよりは、恋愛関係の方で晴れやかな心持ちを迎えていて、ロンドンのお土産を片手に夜来綴のもとを訪れ、彼をからかってやろう、とでも軽く考えていた。

（アイツの方も、少しは進展したのか…？）

何の因果か知らないが、あの支部は可愛い女子が多い。少しツンツンしている、ツインテールのテレポーター。黒髪で眼鏡の、ナイスバディな先輩。

何だか裏がありそうな、パソコンに詳しい花飾りの少女。同僚や訪問者も美少女ばかりで、少し羨まし：

「つて、俺はアホか！」

思わず声に出してしまった。

今の嶺次は、ずっと側にいてくれたとある少女と恋人同士の関係になることに成功したのだ。

いくら綴が美少女に囲まれて仕事をしていようが、関係は無いのだ。こんなことを考えていたら、恋人に文字通りボコボコにされてしまう。そうなれば、自分の命を保障できない。

（――それは、嫌だな）

良い意味で背筋が寒くなる感覚を覚えながらも、嶺次はとある雑居ビルの一室をノックした。

部外者の立入を禁じてはいるが、綴の後輩の友人であろう黒髪ロングの中学生（彼女も可愛い）も出入りしているようなので、問題はないだろう。

だが、そんな思考でドアをノックした嶺次を迎えたのは、夜来綴ではなかった。

「雪崎、君………?」

嶺次の訪問が全く予想外だったとでも言うように、不自然な動作で迎えた彼女の名は、固法美偉。

「敵、動作限界を確認」

全く同じ時刻。

夜来綴が関わっていることを突き止めた、一つのプロジェクトのメインにあたる研究所。

奥まった実験室で一人の研究者が“何か”を弄繰り回していた。

「まだ実戦に投入するには、耐久性、足りない…」

茶髪をさらに髪焼けさせたようなボサボサの髪は、一見すると好青年の風貌にも見える。

普段は研究室に籠るが、趣味としてスポーツを楽しむような。

ただ、それを塗り潰して余りある光景が彼の前には広がっていた。

破壊と蹂躪に埋め尽くされた実験場が。

縦横100メートル程だろうか。

駆動鎧のテストに用いられるための空間には、機械の残骸の他に明らかに“人”のそれとわかる赤と肌色の色彩があった。

「人型駆動鎧との性能実験、圧勝」

ぼそぼそと呟きながら、それなりの広さがある空間を歩き回り、残骸を一つ一つ見てはPDF端末に情報を記入していく男。

彼の言葉を正確に捉えるならば、この残骸たちは『パワードスーツ駆動鎧』のなれの果てということになる。

——つまり、中には人間が入っていた。

「まあ、亜音速の駆動力、張り合えば上等」

本来実験段階でしかないはずの駆動鎧に人間を乗せ、何かと戦わせる。

言うならば“模擬戦”を、この男は本気の殺し合いにしていた。

コンピュータの代理演算で済まされるようなことを、わざわざ実際に
行う狂気。

だがそれは、科学の街でそれだけの無理を押し通すだけの地位と財
力をこの男が持ち合わせていることの証明でもあった。
と、そこで何かに気付く。

「…う……………」

「、」

半身のほとんどを失い、血と肉片に姿を変えても、生きている者が
あったのだ。

奇跡的に原型を留めていた喉と肺が、言葉を絞り出す。

「俺達を…解放するんじゃない…無かったのか………」

もはや痛覚も残ってはいない。

無念と怨念が、彼に言葉を紡がせていた。

それを黙って聞く男は、少し動揺を受けているようにも見える。

「デメェみたいな屑に…俺は」

刹那、血と肉の碎ける音がした。

その根源は、彼の後方から伸びる“白い翼”だった。

「音声認識と攻撃速度、問題、なし」

彼の顔には、何の感慨も無い。

ただ、彼は試したのだ。

男を、上司を罵る言葉に反応して彼らが反応するかどうかを、試してみたかっただけ。

「うん、短期間の制圧戦、投入可能」

ぐじゅぐじゅと蠢く翼は、白く無機質な質感でありながら有機的な形状をもっていて、この世の物質では無いような錯覚さえ与える。

何より、翼が生えているのは『仮面』だった。

金と白ののっぺりとした、縦に顔の二倍ほどもある仮面にはLEDのような光が文字を形作っている。

目や口のための穴も存在しないその仮面と、それを有する黒の専用スーツは、とある超能力者“二人”を犠牲にして確立した技術だった。

『Equ. Dark Matter』。

このプロジェクトを統括する男の名は朽葉灯籠^{くちはとうろう}。

とある少年とその姉の人生を食い潰した、一人の、ありふれた科学者だった。

e p. 1 ありふれた科学者（後書き）

次回、綴の謎が明らかになっていきます！

闇に堕ちていく綴の運命やいかに…！？

e p, 2 過去という鎖（前書き）

科学サイドのストーリーはさらに深部へ。
物語は進行していきます！

e p, 2 過去という鎖

嶺次に告げられたのは、不穏な失踪。

それが幾度も戦場を共に走り抜けた夜来綴のことともなれば、嶺次も動揺を禁じ得ない。

「綴が…行方不明…?」

固法美偉、初春飾利をはじめとした177支部のメンバーは、明るい調子でドアをノックした嶺次をどこかぎこちない表情で迎えている。

最初から雰囲気がおかしいとは思ってはいたが、夜来の話題を切り出したときの彼女達の動揺が決め手となった。

「夜来君は、2週間前、とある事故に巻き込まれて大きな怪我を負ったの。そのことを聞いた私たちが彼の病室に向かったときには…もう……」

そこから話してくれた事實は、嶺次の予想を遥かに越えていた。

彼が通う高校が『長点上機学園』であったことも驚きだったが、それほどのエリート高に通うはずの彼がこの2週間、全く音沙汰もないこと。

学校だけでなく、普段は入り浸っている『風紀委員』の詰所にも一切姿を見せていないこと。

彼の、知らなかった事実が次々明らかにされていくが、それでも、いつでも隣にいた仲間が行方でも知らせず唐突に消えうせて、動揺しない方がおかしいと嶺次は思う。

(……………)

ただ、気丈に振る舞う彼女たちの様子に、嶺次はただならぬ何かを感じ取った。

学校にも風紀委員にも姿を見せない、というだけではないのだろう。彼が何らかのトラブルに巻き込まれた“かもしれない”という感覚では、これほどの陰鬱とした雰囲気まで至るわけがない。

何か物理的な証拠が、必要だ。

風紀委員を勤めるほどの実力と精神力を持つ彼女たちを気圧すほどの、何かが。

「何かが……あつたんですね」

見ていられない、と素直に思った。

あんなに誰かの力になれるはずの男が、こんなに想ってくれる人達に心配をかけて良いはずがない。

ぶっきらぼうで、一方的でも構わない。

こんなことをしているから、未鶴に余計な心配をかけることになるのだ。

そう、心のどこかで解っていながら、嶺次は足を踏み込むのを止められない。

心の底から沸き上がる、義務にも似た感覚を抱きながら。

「俺にも手伝わせてください。あのバカを捜すのを」

「――！」

風紀委員でもない嶺次に、風紀委員の尻拭いをさせるようなことは気が引けるのかもしれない。

けれど、嶺次は綴の助けになりたいのだ。

誰のためでもない。ただの自己満足だけだ。

（確かに俺は、アイツのことを何も知らなかった。けれどそれは：ここで黙っている理由にはならない！）

確固たる、嶺次の視線。

無言のやり取りに負けた固法が取り出す血塗れの風紀委員腕章は、嶺次と綴を巻き込むとある戦いの始まりだった。

先ほどまで朽葉が没頭していた、とある研究所。

残されていた研究者を制圧した夜来綴は、ひたすらに嫌悪していた。朽葉の存在地を未だ掴めない苛立ちよりも、目の前で繰り広げられたであろう惨劇よりも、朽葉灯籠の残虐な計らいよりも、何よりも自分の行動に。

「くそ……っ」

振り払えない癖のようなものだった。

戦闘力は皆無とは言え、学園都市の研究者たちはそんな簡単に口を割るような連中ばかりではない。

うっかり漏らした一言でプロジェクトが消滅するだけならまだしも、自らの生命にさえ危険を及ぼしかねないのだから無理もない。ならば、どうして夜来はここがハズレだと断じるに至ったのか。

答えは簡単。彼らを“尋問”したのだ。

「『風紀委員』の拘束術を延長した、人間の痛覚に直接訴える関節技か…」

通常なら拘束で終わるその先を教わったのは、とある少女からだっ
た。

上手に骨折するよりも痛みを伴うその尋問に、研究者の殆どが耐え
られなかった。

ここまで効果を発揮するとは思わなかった夜来だが、やはり後ろめ
たい。

（わかってる。この感情は嫌悪だ）

先ほどのデータ探索でもそうだった。

通常は見つけられないフォルダを発見出来たのは、とある花飾りの
少女のおかげだ。

物理的な戦闘も、電子的な探索も、対人的な会話も、その全ての術
を彼はあの場所でもらったのだ。

彼女たちの善意と、好意によって。

（けれど俺は……それを踏みにじっている）

この力は誰かを守るためのものだ。そんなことは解っている。けれ
ど2週間前、羽柴兄弟の悲劇を見届けた時に覚悟を決めた。

そのことで後悔はしない、と。

力を貸していたのか、借りていたのかさえわからないあの“友人”
でさえ、彼にとっては足掛かりでしかなかったのだ。

だったはず———なのに。

（どうしてだ……俺は、あの暖かい場所には、あの強い男の隣には、もういられないのに……）

決して戻れないそれらを、どうしてこんなにも、狂おしいほどに求めるのか。

それを綴は知らない。否、理解していても、解ろうとしなかった。彼の思考は狭窄していたのだから。

どうしようもない敵を前に。

朽葉には、そんな感情は通じない。

———なんの躊躇いどころか罪悪感すら覚えず、姉に弟を殺させるような、あの男には。

過去を自らえぐり出し、それで自らを着飾らなければ、あの男に弱みを見せることになる。

だからこそ、綴は進むしかない。過去という鎖にがんじがらめにされたまま、それが自らの首を締めようとも。

「ここが、綴の家か」

立派なマンションだった。

固法美偉に協力を懇願した雪崎嶺次が『風紀委員』から結局お願いされたのは、夜来綴を捜すことではなかった。

どうしても彼女達の心が許さないのだろう。彼女たちが得た情報をこちらにも知らせる、程度のことしかできなかった。けれど、それでいいとも考えていた。

（風紀委員の情報網で掴めないような行動をしているなら、正直いってお手上げだ。けど、それならそれで探り様もある。……しかし、立派……）

第八学区の一等地。

無闇に高層化することもない10階建てのマンション。

高校生が一人で暮らすには高級過ぎる外観に戸惑いながら、嶺次は綴の部屋の前まで侵入していた。

（正面突破も苦勞しないけど、『警備員』とか呼ばれても面倒だし）

侵入方法は至って簡単。

金属を操作する、という嶺次の力で外壁の排水管を変化させ、嶺次を運ぶように動かしたただけだ。

先のロンドンでの一件で気体状の金属さえ操作できるほどに『自分だけの現実』を拡張させた今の嶺次ならば、造作も無いこと。

同様に、鍵穴を一瞬で精査して合鍵を作ること、造作もなかった。

かくして部屋に踏みいった嶺次が見たのは、

「想像以上に、小綺麗な部屋だな」

大きな鏡のある玄関を抜けた先にあるのは、モデルルームにも劣らない、掃除の行き届いた部屋。
磨き上げられたフローリング。ダイニングには無意味なインテリアが置かれ、住人の居ない部屋ならではの空間を調和させていた。

（――、おかしい）

そこまで至った嶺次は、違和感を覚えた。

夜来綴という少年がこの家で生活していたという痕跡が、全く無いのだ。

風紀委員の住所登録には間違いなくこの場所を残し、幾度かマンシヨン前まで固法や初春と連れ立って歩いたことから、間違いなく彼はこの場所で暮らしていたはずなのに。

冷蔵庫の中には、あろうことかプラスチックの果物。

観葉植物は無く、幾つかのドライフラワーが緑の色彩を与えているのみ。

そう。この家にあったのは、全て“劣化しない”ものだった。

（考えてみれば、妙だったんだ。『風紀委員』や『警備員』の捜査には、超能力者が使われることもある。読心系の能力者にこの部屋の持ち物を調べられれば居場所が解るような簡単な逃避行を、綴がするわけがない）

常に使っていたパソコンのマウスや、スケジュールを書き込んだメモ帳の切れ端。

そんな物からでも思念を追える能力者は確かにいる。

その程度で追われるような不完全な失踪では、無かったのだ。

ならば余計に、綴を追う手段は断たれてしまったのではないのか。

通常ならば袋小路に嵌まるはずの状況。だがすでに、嶺次は綴を捜すための算段を付けていた。

（金属、いや、無機物を操作するのが俺の力。誰かの心までは読めるわけがない。だったら――）

彼は、金属を探查する。

目につく無機物に興味は無い。玄関のすり減り具合から、この部屋の空気中やフローリングの上に残るはずの、彼の汗が蒸発した後の残滓に至るまで。全てを。

傍目には両手を広げ、祈りをささげる聖人にも見えたかもしれない。表情は硬く、目を閉じていることがそれに拍車をかける。

だが嶺次は気付かない。

ミクロの世界にまで分散、劣化した無機物を捉えることが、何を意味しているのか。

（空气中に、妙な反応があるな。有機物が混じる…回路みたいなものか？）

それは禁忌の扉だった。

一般の人間が知ることなどできず、レベル5同士の争いの種にさえなりうる、危険な物質。

嶺次が知る由も無いその名は、『アンダーライン滞空回線』。

しかし一つ、幸いと言わなければならない。

この部屋がおよそ2週間、閉鎖されていたことに。

（確かに妙だけど……数が少なすぎて解析できない…）

嶺次の能力を――方向性によってはレベル5相当の力を発揮する力を以てしても、数が少ないそれを明確に捉えなおすことなど不可能だった。

何より彼には目的があった。綴の痕跡を探す、という目的が。

「気を取られてる場合じゃない、か」

言葉に出して気を引き締め、探査に本腰を入れた嶺次は、見つけた。結論から言って、部屋の中には何の痕跡も無かった。

本当に、何もだ。

だからこそ嶺次は、躊躇うことなく手を触れた。

玄関に設置してあった巨大な鏡へ。

その奥に、幾つもの精密機械の存在を感知したから。

鏡に偽装されていた静脈認証を強制突破して切り開いた先。

僅かなスペースだったが、確かにそれは部屋だった。

夜来綴がこの場所で生活していたのだと確信するに足るほどの残滓を残した、猫の額ほどの空間。

「これは……っ」

息を呑んだのは、空間の異様さにはではない。

部屋の壁に余すところなく貼り付けられた、書類状のファイル。

圧倒されながらもそれに目を通す嶺次は、それらはすべて、一つの事件を発端にしていたことに気付く。

“一人の女性が、その弟を殺そうとした”事件に。

e p, 2 過去という鎖（後書き）

次回、綴の過去編です！

行間 異質極まる超能力（前書き）

今回、謎に包まれていた綴の過去、そして彼の姉との一件が明らかになります！

行間 異質極まる超能力

まどろみの中で、声がする。

「綴ー、いい加減に起きなさい」

聞き慣れた声と、鼻をくすぐる匂い。

いくらでも味わえて、これからも味わえたはずのそれは、もう無い。
やらしいおり
夜来栞。

快活な性格に、肩まで伸びた美しい黒髪。左右非対称の髪留めを施した彼女は、人を引き付けるその容姿と相まって、綴の誇りだった。
夜来綴、13歳。
夜来栞、20歳。

3年前、彼らは、どこにでもいた姉弟の一つだった。

「姉さんも厳しいな。今日はそんなに早起きする必要無いのに」
「だめよ。日曜だからって生活リズムを崩したりしたら」

綴にとって7歳も歳の離れた姉は、姉弟というよりは母親のような存在だった。

両親を失い、祖父母の家で幼少期を過ごした夜来綴は、物心がつく頃には当然のように『学園都市』への入学を心に決めていた。

そこには、姉が居たから。

祖父母が嫌いというわけではない。ただ、彼らよりも姉の方が好きだっただけだ。

彼女の作る朝食を食べ、彼女にできない家事を綴が担う。

二人分の奨学金を貰っていれば、何の不自由もない生活だった。

「能力検査で良い感じの成績も出たんでしょ？ だったら余計に、自分の管理には気をつけなきゃ」

「念話能力レベル2の僕に何を期待してるのさ。……奨学金を貰える額が増えるのは嬉しいけど」

素直に褒められたことを嬉しがれず、皮肉混じりに目を逸らす綴。姉である栞と同系統の能力を開花させた彼は、早くも研究者の注目の的だった。

血縁による能力の伝承。

この時期には未だ製造法が不透明だったクローン技術者も彼を狙っていたのだろうが、彼はそれを知る由も無かった。

「それじゃ、私は行くわね」

「あれ？ 随分気合いの入った服だね」

「ふふっ。分かる？」

学園都市内の大学で優等生としての生活を送る彼女には、当然のように恋愛にも縁があった。

彼女の恋愛を否定するつもりも無かったし、綴はそこまでのシスコンではないと自負していた。

けれど、それを差し引いても、彼は姉の恋人が嫌いだった。

「まあ、楽しんできなよ。久しぶりなんですよ？ 朽葉さんとのデート」

このときは忌むこともなく口にできた名前。朽葉灯籠。くちはとうろう

大学の研究施設で出会った彼らは、かれこれ2年ほどの交際を続けていた。

幾度も顔を合わせたこともあるし、家に招いて食事を共にしたこともある。とても人当たりの良い好青年、という印象を振り撒く、髪焼けたような茶髪の彼と栞は、傍から見分にはとても良いカップルに思えた。

ただ、綴だけが。

得体の知れない――直感にも似た部分で、彼は朽葉を嫌っていた。

（まただ。朽葉さんの話をする、どうにも気分が悪いなあ）

この時大学院生だった朽葉を嫌う感情を、彼は姉を取られたことへの嫉妬だと思い込んでいた。そして、それを封じようともしていた。

だが、夜来綴はその直感を信じなかったことを、ずっと後悔することになる。

結婚。

大学生と大学院生、交際しているどちらもが金銭的に余裕があれば、その単語が出てくるのは自然なことと思えた。

「だからね、朽葉さんの新しい研究が認められて、今よりずっと豪華なマンションに住めることになったの」

そう嬉しそうに語る姉の姿に、綴は祝福の気持ちと否定の気持ちの二律背反を感じずには居られなかった。

朽葉の研究成績は中学生でも理解できるような、途方もないものだ

った。

超能力を利用した新素材、及び専用の開発手段についての論文。特許を応用すれば幾らでも収入を得ることが可能であろうそれは、確かに技術の革命とも言える進歩だった。

（そうさ。朽葉さんはとても良い人だ。未来ある研究者で、人格者で、顔も悪くない。なのはどうしてだ。僕は……あの人を好きになれない）

この日、朽葉から結婚を申し込まれたと嬉しそうに語る栞の姿を、綴は心の中で苦々しく思っていた。

止めた方が良い。

あの人は何か不気味だ。

これ以上あの人に近づいちゃいけない。

根拠の無い不安。

けれど綴は、それを打ち消すための努力を重ねた。

（きっとそうだ。朽葉さんを信じられないのは、僕が悪いんだ。僕が姉さんに依存しているから……）

夜来栞と朽葉灯籠の結婚は、とんとん拍子に進んでいった。

新しい住居の下見に、式場の予約。学校では栞の容姿を知るクラスメイトから朽葉を恨む声も聞かされたが、彼らの結婚に反対する者など殆どいなかった。

そんな中、自分の中の疑問を打ち消すように能力の研鑽に意識を集中していった綴は一つの境界を越えた。

奨学金の額も、周囲の待遇も、全てが変わる。その境界の名は……レベル3。

能力の強大化、細分化に伴って、綴の能力は名を変えた。

『心理代行（サイコリーディング）』と名付けられたそれを初めて用いた瞬間、綴はただ一人に向けてこの力を行使したいという欲求に駆られた。

改めて定義された綴の異能は、人の感情を知ることができるもの。これを用いれば、朽葉灯籠が夜来葉をどう思っているのかを綴の感情として捉えることが出来る。

（姉の婚約者を疑うようで気が引けるけど……）

けれど、彼は沸き上がる疑念を打ち消すための手段を他に知らなかった。

朽葉一人を呼び出して、直接目を見て能力を発動する。

それだけのことなのだと、その時の綴は思い込んでしまっていた。

「やあ、僕だけに用事、珍しいね」

待ち合わせの場所に、朽葉は時間通りに現れた。

接続の言葉をよくわからない法則で抜いて喋るこの男は、本当に、外見も仕種も完璧に見える。

「葉を介さないで僕と会話する、実はこれが初めてだったりしないかい？」

「そうかも……しれませんか。義兄さん^{おにいさん}」

「ははっ、そんな言い方、無いだろう？ 僕のこと、灯籠って呼びなよ。君にとっては少なからず憎い相手なんだろうからね」

よそよそしい綴を笑ってたしなめ、自分を下の名前で呼ぶように求める朽葉。

本当に彼は出来た人間だ。

それを嫌というほど思い知らされる。

自分みたいな子供に付き合ってくれて、あまつさえ自分はそこに付け込もうとしているなんて。

（そうだ。僕の手を使うまでもなく分かっていたじゃないか）

綴は、朽葉の存在を認めなくなっただけなのだと。

姉を取られるのが嫌だと、駄々をこねていただけだったのだ、と。

（あの人を家族として迎え入れることには確かに抵抗がある。けれどそれは、受け入れて行けることなんだ）

しかし何故、綴はここまで懐疑的な思考を朽葉に向けるに至ったのか。

何年も抱いてきた感情でも、実際に会えばこんなに簡単に消えるものなのか。

自問自答しかけて――気づいた。

（もしかして僕は……無意識に能力の影響を受けていたんじゃないのか……？）

当時中学生の綴でも聞いたことくらいはあった。

AIM拡散力場という名の、超能力者が無意識に発している何らか

の力。発電能力者なら微弱な電磁波、念動力者なら物理的エネルギー
1。

心理能力者なら——他者の深層意識を勝手に読み込む力場を。

「……………ッッ！！！」

綴の背筋を襲う戦慄。

朽葉の内面は、本当は恐ろしいものなのではないのかという疑念が
沸き上がる。

なまじ消えかけていたからこそ、それはほんの少し膨れ上がるだけ
で綴の中で破裂しそうになる。

「?…どうしたんだい？」

その事実気づき、硬直してしまう綴の顔を覗き込もうとする朽葉
の視線を、綴は正面から捉えられない。

彼の動作自体が既に——綴には、悪魔の笑みにしか思えなかった。
だからこそ、朽葉の次なる言葉に対しての反応が遅れたのか。

“もしかして、キミの力が開花したのかな……?”

それは良かった、と微笑む彼の言葉が届くより早く、綴の意識は刈
り取られた。

背筋から全身へ迸る激痛によって。当然のようにそれが、朽葉が突
き出したスタンガンだと認識することもできずに。

「『心理代行』か：栞の超能力から予想はしていた、実に都合のいい異能に目覚めてくれたものだ」

覚醒も完全ではなく曖昧なままの綴の意識は、その言葉を途切れながらも捉えた。

同時に感じる、四肢の自由が効かないという違和感。

（そうだ、僕は…）

「……気が付いたか。栞の前で意識を取り戻さない、幸せだったろうに」

朽葉灯籠の声が、圧倒的な危機感となって綴の全身を走る。

あの瞬間。顔を覗かれた一瞬で、綴は朽葉の本性を垣間見た。

そこには悍ましいほどの虚無があった。

朽葉は己の婚約者に、何の感情も持つてはいなかったのだ。綴にも、栞にも、等しい感情を向けていた。

コレクターが蒐集物に向ける物にも似たそれは、“実験の材料”としての感情。

（——！！！！）

意識が完全に覚醒すると同時に、綴の本能が危険を叫ぶ。

しかし気付く。動けないのは四肢だけではない。言葉を発することさえ、今の彼にはできないでいた。

何らかの薬物か、あるいは電撃の後遺症か。

そんな綴の前に、本性を現した朽葉は言う。否、彼は本性を隠してなどいなかった。

彼は最初から、夜来栞という人間でなく、その中身に興味と趣向を

注いでいたのだ。

「『演算剥奪』^{カリキュレイトレイダー}。君の姉、夜来栞は僕に、本当に魅力的だった」
「ツツ！！」

その言葉遣いに、綴はそれまでの戦慄が甘かったことを思い知らされる。

朽葉は“彼女の中身”とさえ言わないのだ。夜来栞と、彼女が内包する異能が彼にとってイコールであることの何よりの証明となってしまうその台詞を、何の躊躇いも無く。

そして続ける。

夜来綴の恐慌を増す、更なる狂気の証明を。

「でも、栞の超能力、ダメなんだ。僕の研究の核心に至るため、キミの力が欲しいんだよ」

「彼女の異能、人の演算を剥奪するものだ。しかしそれだけ。そこから先、奪った異能を自らのものとする事、彼女にはできない。だから君の『心理代行』を貰う。君という『自分だけの現実』ごと、演算領域の全てを」

栞の異能を狙う理由と、朽葉の研究内容が、綴の中で符合した。

朽葉の研究は、いわば能力という火：原始的な力で鉄を打つようなものだ。超能力を火とするならば、それを安定して使いこなす必要があるのだ。

（姉さんの能力を……最初から狙って……！！）

そして朽葉は、夜来姉弟の能力にその使い道を見出だした。

二つの力があれば——綴が見たあの論文は完成するのだから。

だが、綴の危機感はまだ漠然としたものでしかなかった。
何故なら、夜来栞へ綴の異能を移植する、という方法が現実離れしすぎていて、具体的な命の危機として捉えることができずにいたのだ。

「さて、栞」

果たして、綴の漠然とした感覚は打ち碎かれる。
実験室の全貌を明らかにされると同時に。

解剖に使うような台に拘束された自分自身と、虚な目をした姉の姿を見たときに、綴は全てを悟った。

悟ったからこそ———今の夜来綴の異能はある。

それこそが、『演算代行』^{ダイアグラム}という異質極まる超能力が誕生した瞬間だった。

行間 異質極まる超能力（後書き）

いかがでしたか？

謎の少年の過去回でしたが、実は一番謎なのは主人公、嶺次の過去だったりするんですよ：

いずれ明らかにするつもりなので、お楽しみに！

e p. 3 一人で戦っていたのに（前書き）

今回から本編に戻ります！

綴に隠された“謎”とは…？

e p. 3 一人で戦っていたのに

夜来姉弟の結末と、朽葉灯籠の渴望。

それら全ての顛末を知った雪崎嶺次が納得できるはずがなかった。公式の新聞記事には、夜来某という女性が弟と無理心中を計り、失敗した挙句、彼女と婚約関係にあった研究者が弟を保護し、扶養しているという結末しか記されていない。

そこにあつたはずの朽葉灯籠の意思など、微塵も感じ取れる余地は残っていない。ただの美談として処理され、記憶されているだけだ。

「何だよ……何なんだよ……これはっっ!!」

夜来綴が有する異能の正体を、嶺次は知った。

確かにそれは悍ましいと感じるに事欠かない材料から成り立っていたし、実際にそれを幾度も経験した嶺次からすれば、あの力の正体が“あんなもの”であつたことに落胆と寒気を感じなかったわけではない。

けれどそれは、今の嶺次にとって本当に、些細なことだった。

綴から力を貰っていた分際で、アイツの真実をどうこう言えはしない、という理性的な部分もある。

だがそれ以上に、嶺次は感情的な部分で思う。

（綴は一人で戦っていたのに……どうして俺に打ち明けてくれなかったんだ……!）

姉の仇を討つという目的のために、今の彼は嶺次には想像もつかない深みまで堕ちていつている。

そして綴には、返しても返しきれない恩がある。

そんな状態の綴を放置して安穩と暮らしていけるほど、雪崎嶺次はクズではないつもりだ。

だからこそ、何の信頼もされなかったことが悔しかった。

（けれど綴…お前に、勝算はあるのか………？）

確かに壁は、絶望的なまでに厚く、高い。

明らかにこの研究者は学園都市をも味方につけている。

幾らでも数を重ねた“公平な”記事と、綴がその手で掴んだ“感情的な”証拠とでは、一般の視点から見ればどちらが真実なのかを疑うまでもない。

その現実が、綴にどれほどの絶望となって襲い掛かったのか。

壁を埋め尽くす手掛かりを集めるために、どれほどの苦闘があっただろうか。

「いや、そんなことを考えている場合じゃないな」

そう。そのような些事に拘泥する段階は過ぎている。

夜来綴は動き出した。

ならば雪崎嶺次は、彼のために戦ってもいいだろう。少しは、恩を返しても。

たとえこれまでの戦いで、夜来綴が自分のことを操り人形の延長線としてしか考えていなかったとしても。

幸いなことに、手がかりと兆候ならいくらかでもこの部屋にある。

綴の居場所を突き止めるための手段も、幾らでも。

金属製の階段を下る靴音だけが、狭い非常階段に反響する。

一切の光源が無い、深夜の工業研究所の屋内に侵入した夜来綴は、赤外線を捉える超能力を『接收』していることで苦もなく歩を進めていた。

そして今の綴には、朽葉を逃がしたりはしない、という強い覚悟が満ちていた。

（今度こそ…この場所で……！）

『^{パワードスーツ}駆動鎧』生産の下請け企業、と表には印してあったが、綴はこの場所に確信を持って侵入していた。

確かにこの工場が仕入れているものは『駆動鎧』の生産にも使われるものだが、用途が特殊過ぎるのだ。

特殊な薬品を使った伸縮性スプリング、とも取られる素材の中には、明らかに『未元物質』を用いた武装のために用いられるものもあったのだから。

（ようやく掴んだんだ……アイツを）

疑念を確証に変えるには十分な条件のもと、綴は歩む。

そして綴が『接收』した異能は、直接の戦闘力をも兼ね備えていた。光を収束させ、熱エネルギーとしてぶつける。紫外線を放つブラックライト一つで人の目を焼ける程度だったが、目を眩ませ、銃弾を撃ち込む——朽葉と相打つには上等な力だった。

しかし、だからこそ、綴は失念していた。
敵がこれまで見せなかった片鱗こそが、どうしようもなく疑似餌であつたことを。

非常階段から扉を開け、幾分か広い空間に出た瞬間、ガカツ！という閃光と共に、綴の周囲が白く照らされる。

それは敵の照準が完璧であることと、綴がこれまでにないほど迂闊だつたことを如実に示していた。

朽葉の存在を間近に感じたからか、理由は解らない。それでも確かにそこには、焦りがあつた。

「ありがとう。ここまで簡単、引っかけてくれるとは思わなかった」

思わず顔を覆う綴に向けて放たれる、平淡な声。

それを聞いただけで、必死に保ってきた綴の外側の殻が爆発しそうになる。

この男に向けるのは憎悪という感情では足りない。言葉でさえ足りない。
ない。

忘れられるわけがない、憎むべき仇敵の声だ。

「随分…久しぶりじゃないか」

「そういうな。僕がしていた、かなり機密性の濃い研究だつたんだから」

飄々とも、傲慢とも違う、無感情な言葉の数々。

確かに、良心的に理解すれば“冷静沈着”という評価だつた。だが

それは間違っていたことを、思い知らされた。

「ようやく掴んだんだぞ…朽葉……灯笼…!!」

「そうか。じゃあ言おう。ご苦労様、と」

綴が放つ怨念の籠った言葉を、何の重みも無いかのように払い退け、現れたのは朽葉ではない。

「君たちに任せる。彼を生け捕りにする、…一人くらいは自由、保障してもいいかも」

それだけを言い残し、朽葉のものと思われる足音が遠ざかる。追おうとたたらを踏む綴だが、彼だけに向けられていた光が空間全てを照らしなおす。

——そこには、『駆動鎧』の群れが構えていた。

形式も、使用目的も、型番さえ不統一なそれらは、綴が知る由もないが、『未元物質』部隊の開発によって居場所を喪失した駆動鎧だった。

先の実験で殺戮の的となってもおかしくなかった彼らは、それゆえに、血眼で綴を狙う。

目の前に“自由”という甘美な餌をぶらさげられても、それが偽りであることを考慮にいれられない。それほどに彼らの思考と理性は、朽葉によって削り取られていた。

自身が、獣の檻に放られた非力な餌であることを理解しても尚、朽葉が目の前にいることが綴を感情的にさせる。

まともな逃避や抵抗の手段よりもまず、朽葉を追おうと駆り立てる。

「待て…待てよ朽葉ア!!」

どこまでも感情的な声に応えるのは、朽葉では無い。

別装備の配備によって用無しと成り果てた彼の、無言で、しかし確実な手刀が彼の首を刎ねようと唸る。

たとえそれを躲したとしても、攻撃に間断は無い。

亜音速の次は濃硫酸が。その次は拡散式の弾頭が、無計画ゆえの圧倒で超能力に依存する一人の少年を殺し尽くすのだと。

攻撃する側に慢心の余地は無い。もとより、慢心するだけの心のゆとりなど残されていない。

防御する側に危機感はない。その視野狭窄は、綴が敵を脅威として認識しているかさえ疑問の域だった。

だから。

次の刹那、コンクリートの壁を裂いて爆発と共に現れた少年の“余波”に群れの過半を蹂躪されたとしても、それは仕方のないことだった。

「おおおおおおおおおおお！！！！！！！」

何か、不可視の力、としか形容の方法は無かった。それでも理解しようとするのなら、全てを押し流す透明な津波。

上位念動力者が放つ波動のように、それは壁を砕き、単機で暴虐を可能にするはずの『駆動鎧』を吹き飛ばし、骨を砕き、内部の操縦者の意識までも刈り取っていく。

唐突な展開に絶句し、直前まで朽葉へ向けていた憎悪さえ驚愕に塗り潰される綴だが、真に驚くべきはこれが“攻撃”ですらないことだった。

何故、それを断じるに至ったのか。

ここまで圧倒的な破壊をもたらしたのが、夜来綴も知る、一人の少年だったからだ。

誰かを護るためならいざしらず、その状況も知れない状況で“彼”が殺意に満ちた攻撃を繰り返すとは思えない。

「：いや、そんなことはどうでもいい：！」

呆氣にとられていた綴の中に、ようやく疑問を投げかけるだけの余地が生まれる。

見事に塵となって『駆動鎧』もろとも押しやられた外壁の向こう。ライトの余光に照らされたその場所に、一人の少年は呆然を隠せない表情で佇んでいる。

彼の名を、夜来綴はよく知っている。

「何でお前がここにいるんだ……！？」

幾度の戦いで力を貸し借りし、現実には打ちのめされ、拳句の果てに彼の力を利用しようとすることを断念した、お人よしの名は。

「雪崎……嶺次……っ！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4097j/>

科学と魔術の白黒交差（モノトーンズ）

2011年10月20日01時09分発行